



北神宮寺遺跡

—井伊谷土地区画整理事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書—

2009年3月

(財) 浜松市文化振興財団

北神宮寺遺跡

井伊谷土地区画整理事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

2009年3月

(財) 浜松市文化振興財団



主要出土遺物



調査地区遠景（南西から）



1 2005年調査地区遠景（北西から）



2 2005年調査地区遠景（南西から）



2007年調査地区全景（南東から）

例 言





- 1 本書は浜松市北区引佐町に所在する井伊谷土地区画整理事業地内において実施した北神宮寺遺跡の発掘調査にかかわる報告である。当発掘調査は土地区画整理事業に先立つ事前調査として実施した。
- 2 北神宮寺遺跡の現地発掘調査は、平成15年度から平成19年度にかけて実施した。当発掘調査は、引佐町井伊谷土地区画整理組合（平成17年、浜松市井伊谷土地区画整理組合に名称変更）の委託により、平成15年度・平成16年度は引佐町教育委員会（当時）が、平成17年度以降は、浜松市教育委員会の指導（平成19年度以降は浜松市生活文化部生涯学習課文化財担当が補助執行）のもと、財団法人浜松市文化振興財団が行った。本書では、平成15年度以降のすべての調査内容を扱っている。
- 3 当発掘調査を担当した職員は以下の通りである。
 - 平成15（2003）年度
工藤基志、戸田 剛（引佐町教育委員会）
 - 平成16（2004）年度
工藤基志、戸田 剛（引佐町教育委員会）
 - 平成17（2005）年度
鈴木一有（浜松市教育委員会）、戸塚洋輔、富永里奈（浜松市教育委員会非常勤職員）
 - 平成18（2006）年度
村松聡一郎、鈴木一有（浜松市教育委員会）、富永里奈、野末 亮、原田和子（浜松市教育委員会非常勤職員）
 - 平成19（2007）年度
安藤 憲、鈴木一有（浜松市生活文化部生涯学習課文化財担当）、鈴木けい子、原田和子（浜松市生活文化部生涯学習課文化財担当非常勤職員）
 - 平成20（2008）年度
鈴木一有（浜松市生活文化部生涯学習課文化財担当）、鈴木けい子、原田和子、藤森紀子（浜松市生活文化部生涯学習課文化財担当非常勤職員）
- 4 本書の執筆、編集は、鈴木一有が行った。
- 5 調査の記録、出土遺物は浜松市生活文化部生涯学習課文化財担当が保管している。

凡 例

- 1 本書で用いる座標値は日本測地系に基づくが、適宜、世界側地系の座標値を併記した。方位(北)は座標北、標高は海拔高である。
- 2 遺構の略記号は以下の通りである。

SB：竪穴建物 SH：掘立柱建物 SK：土坑 SX：大型土坑、不明遺構
SD：溝 SP：小穴 SZ：方形周溝墓 SA：柵列

- 3 遺物番号は種別にかかわらず、時代ごとに連番を付した。ただし、古墳時代の土器廃土坑SX01にかんしては、遺物出土量が膨大であるため、この遺構のみで連番とした。
- 4 遺構図中のアミは、焼土の広がり(炉跡)を示す。
- 5 本書で報告する土器の断面と種別の関係は以下の通りとする。

 縄文土器・弥生土器・土師器・土師質土器
 須恵器
 灰釉陶器・山茶碗・陶磁器
 中国産青磁

- 6 本文中の引用文献等の表記については、以下のように略す。

浜松市博物館→浜市博
(財)浜松市文化協会→浜文協
(財)浜松市文化振興財団→浜文振
(財)静岡県埋蔵文化財調査研究所→静文研
教育委員会→教委

北神宮寺遺跡

目次

巻頭図版

例言・凡例

第1章 序論 1

- 1 調査にいたる経緯 1
- 2 調査の方法と経過 3
- 3 遺跡をめぐる環境 5

第2章 調査成果 15

- 1 旧石器・縄文時代 15
- 2 弥生時代 25
- 3 古墳時代 45
- 4 平安時代 136
- 5 鎌倉時代 139
- 6 戦国時代 144
- 7 江戸時代 160

第3章 考察 173

- 1 北神宮寺遺跡における古墳時代前期の集落構造 173
- 2 北神宮寺遺跡における中近世の遺構について 191

第4章 総括 197

- 1 発掘調査の成果 197
- 2 特筆すべきことがら 200
- 3 今後の展望 201

付 図

図 版

図 版 目 次

巻頭図版

- 1 主要出土遺物
- 2 調査地区遠景（南西から）
- 3 1 2005年調査地区遠景（北西から）
2 2005年調査地区遠景（南西から）
- 4 2007年調査地区全景（南東から）

図 版

- 1 調査地区遠景（南西から）
- 2 1 2005年調査地区遠景（南西から）
2 2005年調査地区遠景（北東から）
- 3 2005年調査地区全景（北西から）
- 4 2006年調査地区全景（北から）
- 5 弥生時代遺構群 2005年調査地区（北東から）
- 6 1 弥生時代 竪穴建物 SB42（西から）
2 弥生時代 竪穴建物 SB45（北西から）
- 7 1 弥生時代 方形周溝墓 A群 SZ01（南東から）
2 弥生時代 方形周溝墓 A群 SZ04（北東から）
- 8 1 弥生時代 方形周溝墓 B群 SZ06（西から）
2 弥生時代 方形周溝墓 B群 SZ08（北西から）
- 9 1 SZ01 遺物出土状況（SD02、南から）
2 SZ02 遺物出土状況（SK31、南から）
3 SZ04 遺物出土状況（SD20、東から）
4 SZ12 遺物出土状況（SD75、南東から）
- 10 1 SZ07 遺物出土状況（SD40、南東から）
2 SZ07 遺物出土状況（SD41、南東から）
3 SZ08 遺物出土状況（SK57、南西から）
4 SZ09 遺物出土状況（SD47、西から）
- 11 1 SZ10 遺物出土状況（SK60、北西から）
2 SP258 遺物出土状況（北西から）
3 SZ14 遺物出土状況（SD67、南西から）

- 4 SZ14 遺物出土状況 (SD70、北東から)
- 12 古墳時代遺構群 2005 年調査地区 (北東から)
- 13 古墳時代 土器廃棄土坑 SX01 (南東から)
- 14 1 SX01 土層断面 (南東から)
2 SX01 完掘状況 (南東から)
- 15 1 SX01 遺物出土状況 (北西から)
2 SX01 遺物出土状況 (北西から)
3 SX01 遺物出土状況 (東から)
- 16 古墳時代 竪穴建物群 2007 年調査地区 (北東から)
- 17 1 古墳時代 竪穴建物 A 群 SB12 (西から)
2 古墳時代 竪穴建物 A 群 SB25 (北西から)
- 18 1 古墳時代 竪穴建物 A 群 SB28・29 (北西から)
2 古墳時代 竪穴建物 B 群 SB17 (北から)
- 19 1 古墳時代 竪穴建物 B 群 SB20 (北から)
2 古墳時代 竪穴建物 B 群 SB22 (南西から)
- 20 1 古墳時代 竪穴建物 B 群 SB23 (北から)
2 古墳時代 竪穴建物 B 群 SB24 (西から)
- 21 1 古墳時代 竪穴建物 B 群 SB30・31 (南東から)
2 古墳時代 竪穴建物 B 群 SB32 (西から)
- 22 1 古墳時代 竪穴建物 C 群 SB27 (南から)
2 古墳時代 竪穴建物 C 群 SB33 (南東から)
- 23 1 古墳時代 竪穴建物 C 群 SB38 (西から)
2 古墳時代 竪穴建物 D 群 SB51 (北から)
- 24 1 古墳時代 竪穴建物 D 群 SB49 (北西から)
2 古墳時代 竪穴建物 D 群 SB54 (北西から)
- 25 1 古墳時代 竪穴建物 D 群 SB57 (北東から)
2 古墳時代 竪穴建物 F 群 SB37 (北から)
- 26 古墳時代 竪穴建物内遺物出土状況 (1)
- 27 古墳時代 竪穴建物内遺物出土状況 (2)
- 28 古墳時代 竪穴建物内遺物出土状況 (3)
- 29 古墳時代 方形周溝墓群 2007 年調査地区 (北西から)
- 30 1 古墳時代 方形周溝墓 A 群 SZ16 (南西から)
2 SZ16 遺物出土状況 (SD147、北から)
3 SZ16 遺物出土状況 (SD147、西から)
- 31 1 古墳時代 方形周溝墓 B 群 SZ21 (南西から)
2 古墳時代 方形周溝墓 B 群 SZ23 (北西から)

- 32 1 古墳時代 方形周溝墓 B群 SZ20 (南西から)
 - 2 SZ20 遺物出土状況 (SD155、東から)
 - 3 SZ20 遺物出土状況 (SD156、西から)
- 33 1 古墳時代 方形周溝墓 C群 SZ27 (南西から)
 - 2 SZ27 遺物出土状況 (SD132、南東から)
 - 3 C群 SZ25 遺物出土状況 (SD137、南東から)
- 34 1 古墳時代 方形周溝墓 C群 SZ29 (北から)
 - 2 B群 SZ19 遺物出土状況 (SD122、北から)
 - 3 C群 SZ28 遺物出土状況 (SD131、東から)
- 35 古墳時代 遺物出土状況 (1)
- 36 古墳時代 遺物出土状況 (2)
- 37 鎌倉時代 土坑墓 SK160 (南から)
- 38 1 平安時代 祭祀遺構
 - 2 鎌倉・室町時代 土坑
 - 3 鎌倉時代 竪穴遺構 SK75 (北西から)
- 39 1 戦国時代 区画溝 SD141 (北から)
 - 2 SD141 遺物出土状況 (北から)
 - 3 SD141 遺物出土状況 (南東から)
- 40 1 戦国時代 掘立柱建物 SH09 (南西から)
 - 2 戦国時代 掘立柱建物 SH07・08 (北西から)
- 41 戦国時代 遺物出土状況
- 42 江戸時代 土坑墓群 (北西から)
- 43 江戸時代 土坑墓遺物出土状況 (1)
- 44 江戸時代 土坑墓遺物出土状況 (2)
- 45 縄文時代 主要出土遺物
- 46 1 縄文時代 土器 (1)
 - 2 縄文時代 土器 (2)
- 47 1 縄文時代 石剣
 - 2 縄文時代 石棒
 - 3 縄文時代 石錘
- 48 1 旧石器
 - 2 縄文時代 石鏃
 - 3 縄文時代 打製石斧
- 49 弥生時代 主要出土遺物
- 50 弥生時代 土器 (1)
- 51 1 弥生時代 土器 (2)

- 2 弥生時代 石器
- 52 古墳時代 主要出土遺物
- 53 古墳時代 土器廢棄土坑 SX01 出土遺物
- 54 古墳時代 豎穴建物 A 群 出土遺物
- 55 古墳時代 豎穴建物 B 群 出土遺物
- 56 古墳時代 豎穴建物 B・C 群 出土遺物
- 57 古墳時代 豎穴建物 D・E 群 出土遺物
- 58 1 古墳時代 方形周溝墓 出土遺物
- 2 古墳時代 土坑 出土遺物
- 59 古墳時代 小穴等 出土遺物
- 60 1 古墳時代 包含層 出土遺物
- 2 古墳時代中・後期 包含層 出土遺物
- 61 1 平安時代 祭祀遺構 SX07 主要出土遺物
- 2 平安時代 祭祀遺構 SX07 出土遺物
- 62 鎌倉時代 主要出土遺物
- 63 1 鎌倉時代 土坑墓 SK160 出土遺物
- 2 鎌倉時代 土坑等 出土遺物
- 64 戦国時代 主要出土遺物
- 65 戦国時代 区画溝 SD141 出土遺物 (1)
- 66 戦国時代 区画溝 SD141 出土遺物 (2)
- 67 戦国時代 土坑等 出土遺物
- 68 1 戦国時代 小穴 出土遺物
- 2 戦国時代 小穴 SP539 出土遺物
- 69 江戸時代 主要出土遺物
- 70 江戸時代 土坑墓 出土遺物

挿 図 目 次

Fig.1 北神宮寺遺跡の位置 …………… 1	Fig.35 SZ14・15 実測図 …………… 41
Fig.2 発掘調査事業区分 …………… 2	Fig.36 SP258 実測図 …………… 42
Fig.3 グリッド配置図 …………… 3	Fig.37 弥生時代 出土遺物 …………… 43
Fig.4 体験発掘 …………… 4	Fig.38 弥生時代 石器 …………… 44
Fig.5 発掘調査の見学 …………… 4	Fig.39 古墳時代 遺構分布図 …………… 45
Fig.6 北神宮寺遺跡の立地環境 …………… 5	Fig.40 SX01 実測図 …………… 46
Fig.7 北神宮寺遺跡とその周辺の発掘調査地 …… 6	Fig.41 SX01 遺物出土状態 …………… 48
Fig.8 井伊谷盆地西部の地形 …………… 7	Fig.42 SX01 遺物詳細出土状態 (1) …………… 49
Fig.9 伝北神宮寺遺跡出土石棒 …………… 8	Fig.43 SX01 遺物詳細出土状態 (2) …………… 50
Fig.10 浜名湖北岸地域から出土した銅鐸 …………… 9	Fig.44 SX01 出土遺物 (1) …………… 51
Fig.11 都田川下流域における遺跡の分布 …… 10	Fig.45 SX01 出土遺物 (2) …………… 52
Fig.12 天白磐座遺跡 …………… 11	Fig.46 SX01 出土遺物 (3) …………… 53
Fig.13 旧石器・縄文時代 遺構等分布図 …… 15	Fig.47 SX01 出土遺物 (4) …………… 54
Fig.14 旧石器時代 出土遺物 …………… 16	Fig.48 SX01 出土遺物 (5) …………… 55
Fig.15 縄文土器 (1) …………… 18	Fig.49 SX01 出土遺物 (6) …………… 56
Fig.16 縄文土器 (2) …………… 19	Fig.50 SX01 出土遺物 (7) …………… 57
Fig.17 縄文時代 石棒・石錘・叩石 …… 20	Fig.51 SX01 出土遺物 (8) …………… 58
Fig.18 縄文時代 石鏃・石核 …………… 21	Fig.52 SX01 出土遺物 (9) …………… 59
Fig.19 縄文時代 打製石斧 (1) …………… 22	Fig.53 SX01 出土遺物 (10) …………… 60
Fig.20 縄文時代 打製石斧 (2) …………… 23	Fig.54 SX01 出土遺物 (11) …………… 61
Fig.21 弥生時代 遺構分布図 …………… 25	Fig.55 SX01 出土遺物 (12) …………… 62
Fig.22 SB42・45 実測図 …………… 26	Fig.56 SX01 出土遺物 (13) …………… 63
Fig.23 SB42 出土遺物 …………… 27	Fig.57 SX01 出土遺物 (14) …………… 64
Fig.24 弥生時代 方形周溝墓分布図 …… 27	Fig.58 SX01 出土遺物 (15) …………… 65
Fig.25 SZ01 実測図 …………… 29	Fig.59 SX01 出土遺物 (16) …………… 66
Fig.26 SZ02・04 実測図 …………… 30	Fig.60 SX01 出土遺物 (17) …………… 67
Fig.27 SZ12 実測図 …………… 31	Fig.61 SX01 出土遺物 (18) …………… 68
Fig.28 弥生時代 方形周溝墓A群 出土遺物 …… 32	Fig.62 SX01 出土遺物 (19) …………… 69
Fig.29 SZ05・06・07 実測図 …………… 35	Fig.63 SX01 出土遺物 (20) …………… 70
Fig.30 SZ08・09 実測図 …………… 36	Fig.64 古墳時代 竪穴建物分布図 …… 71
Fig.31 SZ10・11 実測図 …………… 37	Fig.65 SB09・22 実測図 …………… 74
Fig.32 弥生時代 方形周溝墓B群 出土遺物 …… 38	Fig.66 SB12・13・14 実測図 …… 75
Fig.33 SK57 出土遺物 …………… 39	Fig.67 SB25・28・29 実測図 …… 76
Fig.34 弥生時代 方形周溝墓C群 出土遺物 …… 40	Fig.68 古墳時代 竪穴建物A群 出土遺物 (1) … 77

Fig.69	古墳時代 竪穴建物A群 出土遺物 (2) …	78	Fig.105	SZ27・28 実測図 ……………	120
Fig.70	SB20 出土 籠目土器 ……………	80	Fig.106	古墳時代 方形周溝墓C群 出土遺物 (1)	121
Fig.71	SB17・19・20 実測図 ……………	81	Fig.107	古墳時代 方形周溝墓C群 出土遺物 (2)	122
Fig.72	SB21・23・24 実測図 ……………	82	Fig.108	古墳時代 土坑 実測図 ……………	124
Fig.73	SB18・32 実測図 ……………	83	Fig.109	古墳時代 小穴等 実測図 ……………	125
Fig.74	SB30・31 実測図 ……………	84	Fig.110	古墳時代 土坑・小穴 出土遺物 (1) ……	126
Fig.75	古墳時代 竪穴建物B群 出土遺物 (1) …	85	Fig.111	古墳時代 土坑・小穴 出土遺物 (2) ……	127
Fig.76	古墳時代 竪穴建物B群 出土遺物 (2) …	86	Fig.112	古墳時代 小穴等 出土遺物 (1) ……………	128
Fig.77	古墳時代 竪穴建物B群 出土遺物 (3) …	87	Fig.113	古墳時代 小穴等 出土遺物 (2) ……………	129
Fig.78	古墳時代 竪穴建物B群 出土遺物 (4) …	88	Fig.114	古墳時代 包含層 出土遺物 (1) ……………	131
Fig.79	古墳時代 竪穴建物C群 出土遺物 ……	89	Fig.115	古墳時代 包含層 出土遺物 (2) ……………	132
Fig.80	SB27・33 実測図 ……………	90	Fig.116	古墳時代 包含層 出土遺物 (3) ……………	133
Fig.81	SB38・39・40 実測図 ……………	91	Fig.117	古墳時代 包含層 出土遺物 (4) ……………	134
Fig.82	SB41・50・51 実測図 ……………	94	Fig.118	古墳時代中・後期 包含層 出土遺物 ……	135
Fig.83	SB43・44 実測図 ……………	95	Fig.119	平安時代 遺構分布図 ……………	136
Fig.84	SB46・47・48 実測図 ……………	96	Fig.120	SX07 実測図 ……………	137
Fig.85	SB49・54 実測図 ……………	97	Fig.121	平安時代 出土遺物 ……………	138
Fig.86	SB52・56・62 実測図 ……………	98	Fig.122	鎌倉時代 遺構分布図 ……………	139
Fig.87	SB57・58 実測図 ……………	99	Fig.123	鎌倉時代 遺構 実測図 ……………	140
Fig.88	古墳時代 竪穴建物D群 出土遺物 ……	100	Fig.124	SK160 出土遺物 ……………	141
Fig.89	古墳時代 竪穴建物E・F群 出土遺物 …	102	Fig.125	鎌倉時代 遺構 出土遺物 ……………	141
Fig.90	SB36・63・64 実測図 ……………	103	Fig.126	鎌倉時代 包含層 出土遺物 ……………	142
Fig.91	SB37・60・61 実測図 ……………	104	Fig.127	戦国時代 遺構分布図 ……………	144
Fig.92	古墳時代 方形周溝墓分布図 ……………	105	Fig.128	SD141 実測図 ……………	145
Fig.93	SZ13 実測図 ……………	106	Fig.129	SD141 出土遺物 (1) ……………	146
Fig.94	SZ16・17 実測図 ……………	107	Fig.130	SD141 出土遺物 (2) ……………	147
Fig.95	古墳時代 方形周溝墓A群 出土遺物 (1)	108	Fig.131	SH01、SA01・02 実測図 ……………	150
Fig.96	古墳時代 方形周溝墓A群 出土遺物 (2)	109	Fig.132	SH02・03 実測図 ……………	151
Fig.97	古墳時代 方形周溝墓A群 出土遺物 (3)	110	Fig.133	SH04・07・08 実測図 ……………	152
Fig.98	SZ19 実測図 ……………	112	Fig.134	SH09 実測図 ……………	153
Fig.99	SZ20 実測図 ……………	113	Fig.135	戦国時代 土坑・小穴 実測図 ……………	155
Fig.100	SZ21・23 実測図 ……………	114	Fig.136	戦国時代 土坑・掘立柱建物等 出土遺物	156
Fig.101	SZ22 実測図 ……………	115	Fig.137	戦国時代 埋納遺構等 出土遺物 ……	157
Fig.102	古墳時代 方形周溝墓B群 出土遺物 ……	116	Fig.138	戦国時代 小穴 出土遺物 ……………	158
Fig.103	SZ24・26・29 実測図 ……………	118	Fig.139	江戸時代 遺構分布図 ……………	160
Fig.104	SZ25 実測図 ……………	119	Fig.140	区画溝 出土遺物 (1) ……………	162

Fig.141 区画溝 出土遺物 (2) ……………	163	Fig.161 西遠江における前・中期古墳と 主要集落の変遷 ……………	189
Fig.142 SE02 出土遺物 (1) ……………	164	Fig.162 北神宮寺遺跡における かわらけの変遷 ……………	191
Fig.143 SE02 出土遺物 (2) ……………	165	Fig.163 浜松市内におけるかわらけの分布 ……………	192
Fig.144 江戸時代 土坑墓分布図 ……………	166	Fig.164 江戸時代土坑墓の副葬品 ……………	194
Fig.145 江戸時代 土坑墓 実測図 ……………	168	Fig.165 集落景観の復元 ……………	195
Fig.146 江戸時代 土坑墓 出土遺物 ……………	169	Fig.166 北神宮寺遺跡の変遷 ……………	199
Fig.147 江戸時代 溝構 出土遺物 ……………	170	Fig.167 北神宮寺遺跡 検出遺構全体図 ……………	205
Fig.148 戦国・江戸時代 包含層 出土遺物 (1) ……	171	Fig.168 縄文時代 検出遺構 ……………	206
Fig.149 戦国・江戸時代 包含層 出土遺物 (2) ……	172	Fig.169 弥生時代 検出遺構 ……………	207
Fig.150 北神宮寺遺跡における元屋敷式土器 の器種構成 ……………	174	Fig.170 古墳時代 検出遺構 ……………	208
Fig.151 有稜高坏の分類 ……………	175	Fig.171 平安・鎌倉時代 検出遺構 ……………	209
Fig.152 北神宮寺遺跡における元屋敷式土器 の変遷 (1) ……………	178	Fig.172 戦国時代 検出遺構 ……………	210
Fig.153 北神宮寺遺跡における元屋敷式土器 の変遷 (2) ……………	179	Fig.173 江戸時代 検出遺構 ……………	211
Fig.154 北神宮寺遺跡における元屋敷式土器 の変遷 (3) ……………	180	Fig.174 北神宮寺遺跡 検出遺構図① ……………	212
Fig.155 北神宮寺遺跡における古墳時代 集落の変遷 ……………	182	Fig.175 北神宮寺遺跡 検出遺構図② ……………	213
Fig.156 元屋敷式期における竪穴建物の規模 ……	184	Fig.176 北神宮寺遺跡 検出遺構図③ ……………	214
Fig.157 置石炉をもつ竪穴建物 ……………	185	Fig.177 北神宮寺遺跡 検出遺構図④ ……………	215
Fig.158 籠目土器の分布 ……………	187	Fig.178 北神宮寺遺跡 検出遺構図⑤ ……………	216
Fig.159 畿内系土器 ……………	187	Fig.179 北神宮寺遺跡 検出遺構図⑥ ……………	217
Fig.160 西遠江における前・中期古墳と 主要集落の位置 ……………	188	Fig.180 北神宮寺遺跡 検出遺構図⑦ ……………	218
		Fig.181 北神宮寺遺跡 検出遺構図⑧ ……………	219
		Fig.182 北神宮寺遺跡 検出遺構図⑨ ……………	220
		Fig.183 北神宮寺遺跡 検出遺構図⑩ ……………	221

表 目 次

Tab.1 発掘調査工程表 ……………	2	Tab.8 古墳時代 方形周溝墓 ……………	105
Tab.2 引佐町における発掘調査一覧 ……………	14	Tab.9 江戸時代 土坑墓 ……………	167
Tab.3 縄文土器 ……………	17	Tab.10 西遠江における元屋敷式基準資料 ……	173
Tab.4 縄文時代 石器 ……………	24	Tab.11 元屋敷式の基準資料組成比較 (1) ……	176
Tab.5 弥生時代 方形周溝墓 ……………	28	Tab.12 元屋敷式の基準資料組成比較 (2) ……	177
Tab.6 弥生時代 石器 ……………	44	Tab.13 他地域との併行関係 ……………	181
Tab.7 古墳時代 竪穴建物 ……………	72	Tab.14 元屋敷式期の方形周溝墓 ……………	186

第1章 序 論

1 調査にいたる経緯

引佐町の位置 北神宮寺遺跡は、静岡県浜松市北区引佐町の井伊谷盆地にある。浜名湖に注ぐ小河川によって開かれた当地は、2005年の広域合併以前には引佐郡引佐町に属し、町内の中心地として町役場が置かれていた。井伊谷は江戸時代の譜代大名、井伊氏の本貫地であり、町内には井伊氏ゆかりの史跡が点在する。井伊谷は古代遺跡の宝庫でもあり、古墳時代の磐座祭祀遺跡である天白磐座遺跡（涓伊神社境内遺跡）をはじめ、北岡大塚古墳、馬場平古墳などの前方後円（方）墳など著名な遺跡・古墳も密集している。

本発掘調査の実施 井伊谷は水田や蜜柑畑が広がる田園地帯であったが、近年、宅地供給の必要性が高まっている。1999年には引佐町井伊谷土地区画整理組合（当時）が設立され、井伊谷盆地における大規模な土地造成が計画された。開発予定地には、周知の埋蔵文化財包蔵地である北神宮寺遺跡が含まれていたことから、引佐町井伊谷土地区画整理組合と引佐町教育委員会（当時、以下「当時」は省略）によって、遺跡の取り扱いについて協議された。2000年から2001年にかけては引佐町教育委員会により開発予定地における分布調査や試掘調査が行われ、土地区画整理事業に伴い遺跡が消滅する部分については、記録保存のための事前調査を実施することが取り決められた。

この前提のもと、2003年7月には北神宮寺遺跡の本発掘調査が引佐町教育委員会によって開始された。さらに、発掘調査期間中の2005年7月には引佐町と浜松市が合併し、引佐町教育委員会の発掘調査事業を浜松市が受けつぐことになった。2005年の合併後の調査は、浜松市教育委員会（2007年度からは浜松市生涯学習課文化財担当が補助執行）の指導のもと、(財)浜松市文化振興財団が実施した。

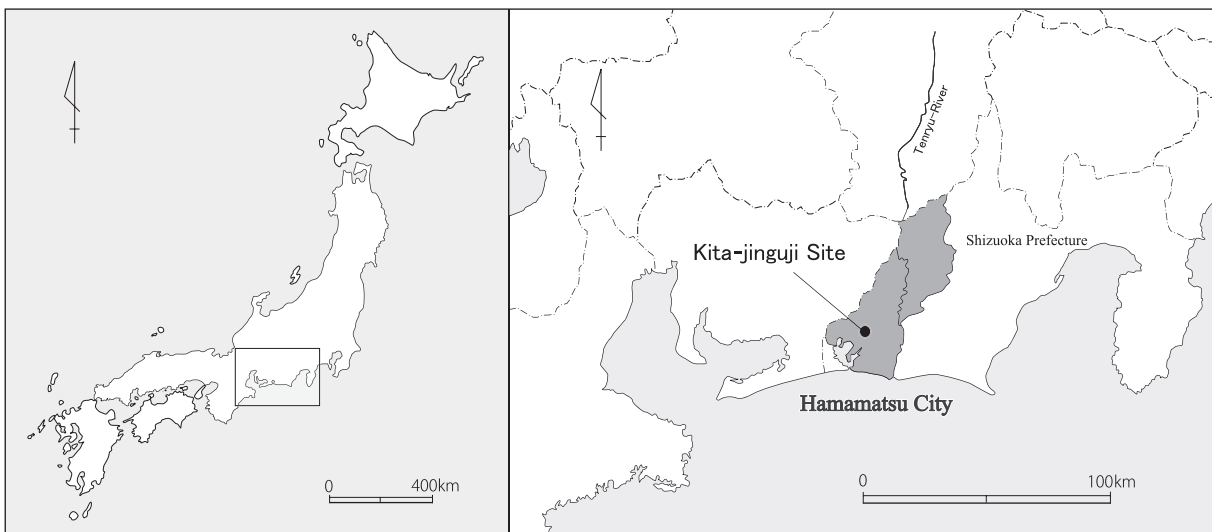


Fig.1 北神宮寺遺跡の位置

1 調査にいたる経緯

事業区分 北神宮寺遺跡の本発掘調査は、5か年度にわたって実施した。2003・2004年度は引佐町教育委員会が、2005～2007年度は（財）浜松市文化振興財団が発掘調査を実施した。発掘調査は、遺跡の範囲内に敷設される都市計画道路や区画道路予定地を中心に、盛土工法などによって遺跡の保護がはかれない宅地造成地においても行った。

現地調査は2003年7月から2007年12月にかけて、事業年度ごとに断続的に実施した（Tab.1、Fig.2）。旧引佐町教育委員会の調査は2003年7月から2005年3月まで、（財）浜松市文化振興財団の調査は2005年9月から2007年12月まで実施した。5か年度にわたり発掘調査した延べ面積は、9720m²である。

出土品や図面などを整理する基礎的な作業は現地作業と並行して行ったが、本格的な整理作業は、現地作業を終了後の2008年に西区神原町にある浜松市埋蔵文化財調査事務所で行った。2009年3月には、すべての作業を完了し、報告書（本書）を刊行した。

Tab.1 発掘調査工程表

調査主体	2003 平成15年度			2004 平成16年度			2005 平成17年度			2006 平成18年度			2007 平成19年度			2008 平成20年度																															
	2003年			2004年			2005年			2006年			2007年			2008年																															
	4	5	6	7	8	9	10	11	12	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	1	2
引佐町教育委員会	■			■																																											
(財)浜松市文化振興財団							■			■			■																					■													

■ 現地作業
■ 整理作業

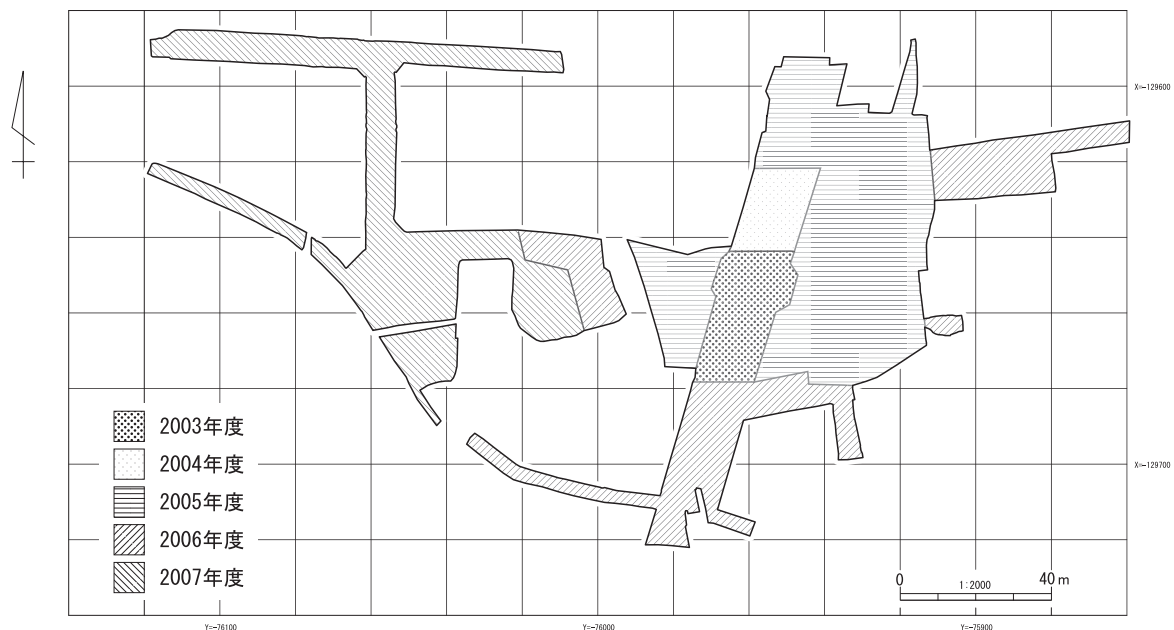


Fig.2 発掘調査事業区分

2 調査の方法と経過

グリッドの設定 発掘調査を開始するにあたり、調査対象地に国家座標軸（日本測地系）に合わせた20m間隔のグリッドを設定した。原点は、調査地区の北西隅（ $X=-129,580$ 、 $Y=76,140$ ）に定め、東西方向にアルファベットを、南北方向に数字を組み合わせた（Fig.3）。

表土掘削 調査対象地の表土および流土は重機（バックホー）を用いて除去した。北神宮寺遺跡の地形は、西側が高く東側が低い。西側の高位面と東側の低位面との段差は顕著であり、両者は地形的に明瞭に分離できる。高位面の表土は20～30cm程度であるが、低位面の表土・包含層は厚く、遺構検出面まで1m以上掘削した部分がある。低位面の包含層は黒色砂質土であり、遺構検出が困難であることに加え、表土・包含層に含まれる遺物量が多く、表土掘削作業が困難であった。

遺構検出 遺構の検出にあたっては、鋤簾を使用し、人力で行った。高位面は遺構上面が削平されている部分が多く、遺構検出は地山直上で行った。高位面における遺構の識別は容易であった。いっぽう、低位面の一部は、表土層との識別が困難な黒色砂質土中から遺構が掘り込まれており、遺構掘り込み面の認識には困難を極めた。黒色砂質土が厚く堆積している部分においては、遺構検出作業を繰り返し、遺構の把握に努めた。低位面においても、多くの遺構は地山直上で確認したが、竪穴建物を中心に、黒色砂質土中において確認できた遺構もある。

低位面は、遺構の密度が高く、弥生時代や古墳時代の遺構は中近世の遺構によって破壊されていた部分が多い。とくに近世の区画溝SD14・15は規模が大きく、方形周溝墓や竪穴建物が大きく削り取られていた。

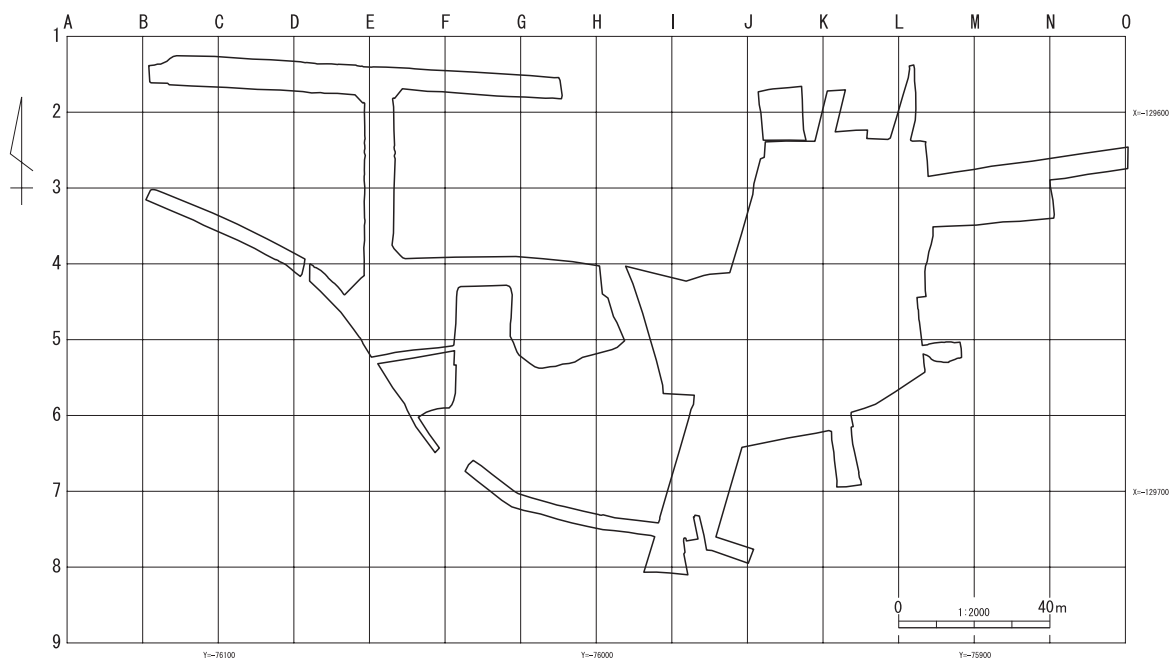


Fig.3 グリッド配置図

2 調査の方法と経過

遺構精査 検出した遺構は、移植ごて、竹べらなどを用いて埋土を除去し、精査した。方形周溝墓や竪穴建物などの大規模な遺構は、土層観察用のアゼを設定して遺構埋没状況の把握に努め、埋土が特徴的な遺構については土層断面図を作成した。また、遺構内の主要な出土遺物は出土状態図を作成し、個別番号を付した取り上げを行った。

図面作成 遺構平面図の作成は、グリッドを基準に1m方眼に水糸を張り、縮尺20分の1で人力によって行った。土層断面図も同様に縮尺20分の1で記録した。遺物の出土状態図は縮尺10分の1で平面と立面を図化した。なお、遺構平面図の一部は、作業工程上の都合で、空中写真測量により作成した部分がある。

写真撮影 写真撮影は6×7判を主体に、補助的に35mm判を用い、重要遺構や全体写真に4×5判を採用した。フィルムはモノクロ（フジ・ネオパン）とカラーリバーサル（フジ・RDPⅢ）を使用した。高所からの撮影には、ローリングタワーを使用した。2005年の調査時には高所作業車を導入した。また、2005年の調査時には、ラジコンヘリコプターによる遠景写真撮影を実施した。

現地公開 発掘調査地は随時、市民に公開し、調査成果の速報伝達に努めた。現地説明会は、事業年度ごとに実施した。とくに2007年10月13日・14日の両日は「いなさ文化財まつり」と銘打って、体験発掘や勾玉づくり体験などのイベントを併せて行い、両日で679名にのぼる市民の参加を得た。また、引佐町内を中心に市内の小学校の見学も多かった。

調査参加者

現地調査 赤松美智代、足立よしゑ、安間ひさゑ、岩田濱子、内山ケイ子、大石くにゑ、納本淳子、金子喜久子、鈴木愛子、鈴木操、竹内すゞ子、中山絹代、湊保代、宮本礼子、池谷茂樹、市川泰通、伊藤清、尾上圭一、片桐孝直、加藤清一、澤田由一、澤輝美、鈴木武彦、鈴木雄一、世田三男、高林直政、名倉益雄、西尾守義、松本兼生、山村卓二、柳田宏

整理作業 伊熊むつ子、内山絵美、内山敦世、長田文子、加藤由美子、北野恵子、斉藤晶子、鈴木恵利子、中村玲子、長谷川房枝、林至美、原田和子、前嶋実乃利、峯野洋子、森下朋子、横原礼香、菅原雄一



Fig.4 体験発掘



Fig.5 発掘調査の見学

3 遺跡をめぐる環境

(1) 立地環境

北神宮寺遺跡は、浜松市北区引佐町に広がる井伊谷盆地に位置する。井伊谷盆地は四方を山に囲まれ、神宮寺川、井伊谷川の二つの河川が盆地のほぼ中央で合流している。河川が形成した沖積地の広さは、東西1.5km、南北2.0kmほどであり、平野部は南にむかって緩やかに傾斜している。

井伊谷盆地を囲む山地の中でも、最も目を引くのが、盆地の北東部にそびえる三岳山（標高466m）である。三岳山の山頂からは井伊谷盆地が一望できるだけでなく、浜名湖の湖面も遠方に望むことができる。

井伊谷盆地の北西側は南北から岩帯が迫り、盆地を塞ぐような地形をなしている。神宮寺川の流路もこの岩帯の付近で大きく蛇行し、深い溪谷を形成している。最も岩帯がせり出た丘陵には、薬師山と呼ばれる独立した岩山があり、その山頂には、古墳時代の磐座遺跡である天白磐座遺跡が立地している。北神宮寺遺跡は、この薬師山の南東部に位置し天白磐座遺跡に隣接する。

北神宮寺遺跡が立地する盆地北西部では神宮寺川が形成した河岸段丘が発達している。現在、北神宮寺遺跡が広がる生活面と神宮寺川の水面までには、10mほどの落差があり、遺構が展開する区域も高位面と低位面の二つの段丘面に分けられる。高位面と低位面の境界部分は、およそ標高19mから20m付近であり、段丘の境界付近には、北側の山塊から供給される伏流水が湧出する部分が随所に見られる。



Fig.6 北神宮寺遺跡の立地環境



Fig.7 北神宮寺遺跡とその周辺の発掘調査地



Fig.8 井伊谷盆地西部の地形

(2) 歴史的環境

旧石器時代 引佐町における旧石器時代の痕跡は、浜松市博物館所蔵の月岡コレクション中に花平出土のナイフ形石器（引佐町1991 p178）が知られる程度であった。今回の発掘調査において、後期旧石器時代の彫器（Fig.14-1）が出土したことは特筆に値しよう。また、石材や風化具合からみて、旧石器時代のものの可能性が高い剥片石器（Fig.14-2）も出土している。いずれも遺構には伴わないが、今後の調査の積み重ねによって、引佐町域の旧石器時代の様相が次第に明らかになるものと期待できよう。

縄文時代 都田川下流域の細江町内の縄文時代遺跡としては、岡の平遺跡、石岡遺跡が代表的存在である。岡の平遺跡では、縄文時代晩期後半の土器がまとまって出土しているだけでなく、縄文時代後期と推定される石棒祭祀遺構も検出されている。大型の石棒の周囲には小型の石棒や石剣が伴う。この祭祀遺構の中心となる石棒は、古墳時代中期においても手づくね土器を伴う祭祀の中心として再利用されている。

引佐町内における縄文時代の主要な遺跡としては、井伊谷遺跡、枳窪南遺跡、正楽寺遺跡、北神

宮寺遺跡などが知られる。これらの遺跡は石鏃や打製石斧などを中心に遺物が採集されており、縄文時代中期から晩期に中心があるとみられる。井伊谷遺跡は、北神宮寺遺跡の東に隣接して広がる遺跡で、北神宮寺遺跡とともに井伊谷盆地の拠点的な縄文集落であったとみられる。井伊谷遺跡は市街地化が早い段階で進んだことから、その詳細は不明瞭であるが縄文時代晩期の土器が採集されている。

縄文時代の石器としては、北神宮寺遺跡から採集されたと伝わる石棒（Fig.9）が注目できる。全長49.5cmほどの大型の石棒で、一部に近年の傷がみられるが遺存状態は良好である。所有者である山下謙一氏の住宅は今回の調査区域の範囲内に含まれ、今回の調査で出土した遺物群との関連を検討すべきものといえよう。なお、今回、北神宮寺遺跡の調査で確認できた縄文土器の時期幅は、おおよそ中期初頭から後期初頭の間である。

弥生時代 都田川下流域における弥生時代の遺跡は、比較的豊富である。井通遺跡、川久保舟渡遺跡、岡の平遺跡、祝田遺跡などが代表的

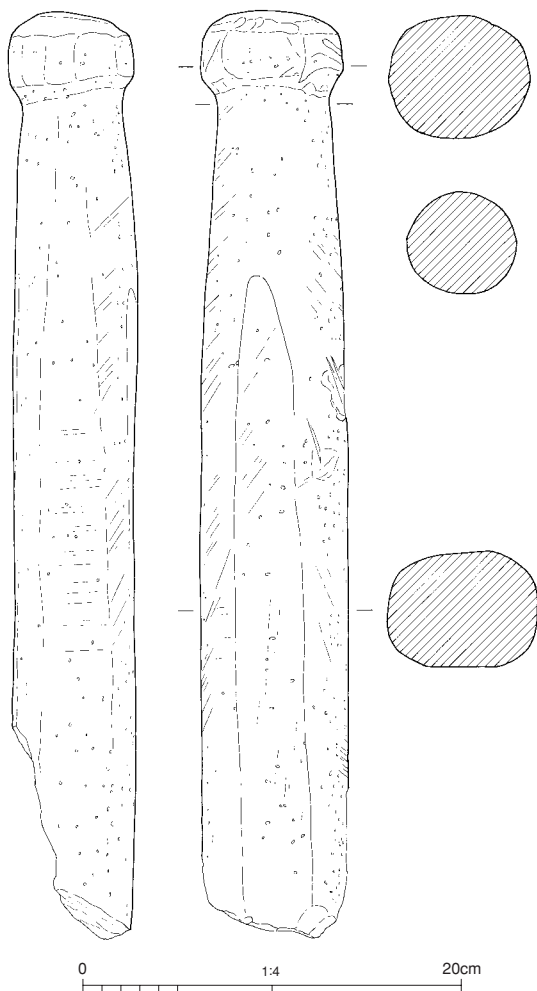


Fig.9 伝北神宮寺遺跡出土石棒

集落にあげられる。岡の平遺跡は、弥生時代前期および中期後葉から後期に至る拠点集落で、6点にのぼる銅鐸が集中して出土した通称「滝峯の谷」の入り口部分に位置する。当地にもたらされた銅鐸は、弥生時代後期前半代の突線鈕2式から3式に集中する。同時期に栄えた岡の平遺跡は、銅鐸の埋納と関連がある集落とみてよいだろう。この他、都田川下流域の拠点集落は造営時期に違いがある。井通遺跡は中期後葉、祝田遺跡は後期前半、川久保舟渡遺跡は後期末葉から古墳時代前期に中心がみられる。

都田川下流域は、銅鐸が数多く出土する地域として全国的にも著名である。細江町内には9点の銅鐸が知られ、都田町前原銅鐸を含めると総数10点の銅鐸が都田川流域で出土している。これらの銅鐸は、埋納状況が確認できる資料も多い点でも注目できる。

いっぽう、引佐町域では、確実な銅鐸の出土が知られていない。辰馬考古資料館が所蔵する「伝井伊谷出土」銅鐸は、外縁付鈕式に位置づけられ、遠江における他の出土例と時期が大きく異なる。正確な出土地については不明確といえよう。引佐町では弥生時代の様相も不明瞭で、今までは僅かな遺物が採集されているにすぎなかった。今回の北神宮寺遺跡の調査によって、弥生時代中期末葉の竪穴建物や方形周溝墓が検出できた意義は大きいといえよう。ただし、北神宮寺遺跡における弥生時代中期の集落は、細江町域における同時代の集落と比べると、規模が小さく、出土遺物量も僅かである。また、北神宮寺遺跡の弥生時代集落は、銅鐸が集中的にもたらされた弥生時代後期前半代には衰退しており、引佐町域と細江町域における差異は歴然としている。弥生時代後期の井伊谷は、細江町内の拠点的な集落と比べて人口の集中度は低いとみてよいだろう。

古墳時代 弥生時代後期に細江町内にあった都田川流域の拠点は、古墳時代前期には井伊谷に移った可能性が古墳の動向から指摘されている。都田川流域には全長50m級の前方後円(方)墳の首長墓系譜がみられるが、古墳時代前期における首長墓は、井伊谷において造営されている。

都田川流域における最古の古墳は、井伊谷にある北岡大塚古墳である。北岡大塚古墳は全長49.5mの前方後方墳で、井伊谷盆地の北東部の丘陵上に築かれる。古墳の築造時期は前期前半(4世紀前葉)にさかのぼり、浜松市内では最古の首長墓とみられる。

北岡大塚古墳の後継者が築いたとみられる馬場平古墳も、井伊谷盆地東部



Fig.10 浜名湖北岸地域から出土した銅鐸

3 遺跡をめぐる環境



Fig.11 都田川下流域における遺跡の分布

の丘陵上に構築されている。馬場平古墳は、全長47.5mの前方後円墳で、後円部の中央には粘土槨が遺存している。1934年の乱掘によって画文帯神獸鏡や銅鏃などの副葬品が出土した。副葬品の様相から前期末葉の築造とみられ、北岡大塚古墳、馬場平古墳と古墳時代前期における2世代の首長が、井伊谷盆地を拠点に活動していたことがうかがえる。また、馬場平古墳の南方には、馬場平古墳と同時期に築造されたとみられる馬場平3号墳が築かれている。馬場平3号墳は前方後円墳の可能性も指摘されているが、その詳細は明らかでない。いずれにせよ、井伊谷における前期古墳の隆盛は明らかといえよう。

古墳時代前期の集落として、細江町域では、川久保船渡遺跡が知られていた。引佐町域では、近年、矢畑遺跡が調査され、弥生時代終末期から古墳時代前期初頭の竪穴建物や方形周溝墓が確認された。同様の遺構群は北神宮寺遺跡でも広域かつ高密度で検出されており、井伊谷盆地における政治拠点の出現を象徴するものと評価できよう。

古墳時代中期には、引佐町域における首長墓の規模が縮小し、谷津古墳（円墳・直径36m）を最後に、大型古墳は築造されなくなる。引佐町域での首長墓系譜が終焉するのと入れ替えに、細江町域には陣座ヶ谷古墳（前方後円墳・全長55m）が中期後葉に築造される。この段階には、都田川流域の政治構造の変革があったことを示している。

古墳時代中期の遺跡としては、井伊谷にある涓伊神社境内遺跡（天白磐座遺跡 以下、後者の名称を用いる）が注目できる。薬師山の山頂にある巨岩を磐座にして執り行われた祭祀遺跡である。祭祀遺物には、手づくね土器や滑石製玉類、鉄製武器、農具などが用いられている。祭祀を執行了した主体は、井伊谷を拠点にした古墳時代中期の首長層と考えられ、同時期に築造された古墳としては先述の谷津古墳があげられる。北神宮寺遺跡は天白磐座遺跡に隣接するが、古墳時代中期の遺構は殆ど見つかっておらず、わずかに数点の須恵器や土師器が出土しているのみである。天白磐座遺跡で神マツリが行われている頃は、北神宮寺遺跡はすでに衰退している頃とみてよいだろう。

古墳時代後期や終末期には、都田川下流域にも多くの横穴式石室墳が築かれ、群集墳を形成している。井伊谷盆地にも四方を取り囲む山麓に多くの古墳がみられる。城山の南麓には城山古墳群が、盆地北東には、北岡古墳群や一ノ沢古墳群が、神宮寺川の南西側には白山古墳群や高辺古墳群などが知られている。

奈良時代 律令体制下では、引佐町域は遠江国引佐郡に含まれていた。『和名類聚抄』によると、引佐郡には「京田（美夜古太）」「刑部」「涓伊（為以）」「伊福（以布久）」という四郷があったことが知られる（パーレン内は『高山寺本』における訓）。井伊谷盆地は涓伊郷の中心地とみてよいだろう。都田川の最下流域にある井通遺跡では、計画的に配置された掘立柱建物群に伴い、「引佐」などと記載された数多くの墨書土器が



Fig.12 天白磐座遺跡

出土した。古代引佐郡家の一部（群津）と推定でき、引佐郡の中心地とみられる。井伊谷盆地では、矢畑遺跡において、若干ながら墨書土器や陶硯、陶馬などが出土しており、盆地内における拠点の一つであったと推定できる。

平安・鎌倉時代 平安時代になると井伊氏が井伊谷を拠点に勃興する。井伊氏の家譜によれば、藤原冬嗣系譜の子孫が10世紀後半、遠江守に任ぜられ当地に往来し、その子である共保が長和年間（1012～1017年）に井伊谷に居住し、井伊氏を称したという。井伊氏の始祖共保には、井中から誕生したという出生奇瑞譚があり、その伝承をもつ井戸が伝えられている。現在、井伊氏の菩提寺である龍潭寺が管理するこの井戸は、井伊谷盆地の中央に位置し、中世の井伊氏居館も近接地にあったと推定されている。その後、井伊氏は井伊谷を拠点とする土豪として井伊介を称し、戦国時代末期に徳川家康に仕えるまで、当地において強い影響力を発揮している。

井伊谷における平安・鎌倉時代の遺跡の様相は、調査地が少ないこともあり、不明瞭である。天白磐座遺跡では、渥美産の外容器をもちいた経塚が営まれた。外容器の時期は12世紀後葉と推定できる。北神宮寺遺跡では、10世紀前半の祭祀遺構や、13世紀後半の短刀を伴う土坑墓などが確認できている。

室町時代（南北朝時代） 南北朝の動乱期、井伊氏は南朝方に与し、井伊谷は遠江における南朝方の拠点となった。井伊氏は井伊谷城を拠点に三岳城などの軍事施設を構築し、後醍醐天皇の皇子、宗良親王を奉じて北朝方と対峙した。井伊氏が進めた南朝方の攻防は興国元年（1340）の三岳城の陥落を機に衰退する。南北朝の争乱後、井伊氏は今川氏の配下となり戦国時代に至る。

井伊谷における室町時代の前半期、南北朝時代に並行する時期の遺構、遺物は極めて少ない。わずかに、常滑焼の蔵骨器を用いた北岡古墓が15世紀前半の築造と捉えられる程度である。南北朝争乱の舞台となった井伊谷城、三岳城はともに本格的な調査がなされておらず、どの程度、この時期の様相がうかがうことができるか不明な点が多い。

戦国時代 応仁の乱（1467年）の後、井伊氏は管領斯波氏に与し、三岳城を拠点に今川氏と対立した。永正10年（1513）頃、三岳城は陥落し、井伊氏は再び今川氏の配下となる。その後、井伊氏と今川氏の関係は、永禄3年（1560）の桶狭間の合戦まで続いた。桶狭間の合戦後、遠江に侵攻した徳川家康は在地の土豪の掌握に努め、井伊氏の当主、井伊直政もその配下に従えた。

井伊谷における戦国時代の遺構は、矢畑遺跡において15世紀後葉から16世紀前葉の屋敷地が確認されている。区画溝からは鉄滓、鞆羽口といった鍛冶関連の遺物もみられる。同時期の遺構は、北神宮寺遺跡にもみられ、戦国時代以降、井伊谷の開発が本格化することがうかがえる。

江戸時代 井伊氏が彦根藩主として近江国に移った後、元和5年（1619）、近藤秀用が井伊谷に入部し、当地における旗本近藤家の統治が始まった。井伊谷における開発もさらに活発になり、現在まで続く井伊谷の市街地が形成されていく。遺跡が立地する北神宮寺の集落は、井伊谷中心地の背後に位置する農村の典型例として、近年に至るまで良好な景観を維持してきた。今回の遺跡調査によって、近世の宅地、農地開発は、戦国時代の開発を基礎に連綿と維持されていたことがうかがえた。また、神宮寺川北側の川辺の地は、盂蘭盆会や施餓鬼行事が執り行われ、江戸時代には埋葬空間としても利用されていたことが判明した。

(3) 北神宮寺遺跡をめぐる考古学調査

黎明期の記録 引佐町内における考古学的な記録は、明治時代以後、連綿と引き継がれている。明治時代には、土屋彦六による遺物の出土報告（土屋1895）があり、北神宮寺遺跡も石斧（打製石斧か）が採集できる遺跡として紹介された。

昭和初期の『静岡県史』第1巻（静岡県1930）や、『静岡県史跡名勝天然物調査報告』第8集（鷲山1933）においても、土屋報告が引用され、北神宮寺遺跡は縄文時代の遺跡として認識されていく。昭和初期には、郷土史への興味が強まり、引佐町においても地元の有志を中心に引佐郡郷土研究会が結成された。研究会の事務局は静岡県立引佐農学校（当時）内におかれ、1933年には郷土誌『引佐郡郷土調査誌』が刊行されている。次に紹介する月岡準三による遺跡踏査もこの冊子を多く参照していた。

月岡準三の踏査 1941年頃から月岡準三による引佐町内の遺跡散布遺物の採集が始まった。月岡が採集した考古資料は現在、「月岡コレクション」として浜松市博物館の所蔵となり、その内容を知ることができる。また、月岡は遺物採集に伴い、詳細な踏査記録を作成している。この中には北神宮寺遺跡にかかわる記述も伺える。『引佐町史 上巻』に掲載されている内容を転載しておく。

本遺蹟ハ引農郷土誌ニヨリ調査 遺物トシテ打製石斧 磨製石斧 石環 石錘等 表面採集
本遺蹟ハ気賀町ヨリ奥山ニ通ズル県道井伊谷宮前ヲT字路ヨリ西ニ分レタル附近ヨリ西ハ八幡神社迄ノ間主トシテ八幡神社ニ向フ道路ノ南方ナリ 南ハ奥山ヨリ流ル奥山川迄 東ハ井伊谷遺蹟ニ続キ 北ハ井伊谷城山ノ西方ニ向イ 西ハ八幡神社西ニ奥山川ノ流レヲ見ル 南方奥山川ノ南ハ南神宮寺遺蹟有リ 尚当遺蹟ニテ特筆スベキハ 他ノ遺蹟地ニト異イ有穴石器ノ出土デア
ル又今日迄ニ石鏃ハ一ケモ採集スルコトハ出来ナイケレ共石鏃原石(黒曜石)ハ散布シテ居ル
此ノ附近ノ地名ニ矢田、矢畑、矢塚、金鑄場等ノ字名有リ 昭和十六年十月廿日記

月岡は北神宮寺遺跡の範囲を正確に捉えていた。月岡が示す遺跡の範囲は、今回の調査によってほぼ妥当であることが裏付けられている。

月岡による踏査以後、北神宮寺遺跡は縄文時代の遺物散布地として広く認知されていった。1989年には、北神宮寺遺跡のほぼ中央部に住む山下謙一氏宅にあった全長50cmほどの大型の石棒（Fig.9）が、引佐町史編さん室に持ち込まれた。石棒の採集地は明確ではないが、所有者の居住地と周囲の立地環境から、北神宮寺遺跡から出土したとみてよい。この石棒は1991年に刊行された『引佐町史 上巻』（引佐町1991）に写真と図を交えて紹介され、北神宮寺遺跡は引佐町の縄文時代を代表する遺跡であることを強く印象付けた。

古墳の調査 1979年の北岡大塚古墳の発見を端緒に、辰巳和弘による精力的な指導のもと、引佐町内における本格的な考古学調査が開始された。その成果は、7冊にわたる報告書（引佐町教委1980・81・83・88・99・94・96）と『引佐町史 上巻』によって公表されている。辰巳が主導した調査は、古墳や古墳時代の遺跡が中心であった。北岡大塚古墳や馬場平古墳といった前方後円（方）墳の発

掘調査に加え、北岡2号墳、白山1号墳、城山2号墳といった横穴式石室を内包する後期古墳が相次いで調査され、1989年には古墳時代の祭祀遺跡である天白磐座遺跡が発掘調査された。

天白磐座遺跡との関連 天白磐座遺跡は、北神宮寺遺跡に隣接していることから、今回の発掘調査で、両者の関係が見い出せるか、大きな問題意識に上った(辰巳2006)。調査の結果、北神宮寺遺跡の集落は古墳時代前期のうちに終焉していることが判明し、古墳時代中期に始まる天白磐座遺跡とは時期が異なることが明らかになった。北神宮寺遺跡の集落は、天白磐座遺跡と積極的に関連づけることが難しいが、代わりに同時代の首長墓である北岡大塚古墳との関係が留意されることになった。

辰巳による引佐町内の遺跡調査は、1979～1994年の15年にわたり、注目できる数々の成果があげられた。その経過は、辰巳の著作(辰巳2006)に詳しい。辰巳の調査によって、古墳時代の支配者層の墳墓や祭祀遺跡の内容が明らかにされ、今回の北神宮寺遺跡の発掘調査によって、地域勢力を支えた一般集落の内容が具体的になった。辰巳による学術調査の成果と、行政発掘の成果をいかに総合化させていくかが、今後の課題といえよう。

開発に伴う発掘調査 2001年以降、引佐町内においても開発に伴う発掘調査が本格化するようになった。とくに、神宮寺川の河川改修に伴う矢畑遺跡の発掘調査は、引佐町における大規模調査の嚆矢として位置づけられよう。従来、採集資料に頼っていた平野部の遺跡についても、本格的な発掘調査によって、具体的な様相が明確にされつつある。

なお、引佐町内における発掘調査を以下に列記しておく。

Tab.2 引佐町における発掘調査一覧

遺跡・古墳名	地区	調査年	調査主体	主な時代	文献
北岡2号墳	井伊谷	1979	引佐町教委	古墳	引佐町教委 1980
馬場平古墳	井伊谷	1982	引佐町教委	古墳	引佐町教委 1983
白山1・2号墳	井伊谷	1987	引佐町教委	古墳	引佐町教委 1988
天白磐座遺跡	井伊谷	1989	引佐町教委	古墳	引佐町教委 1992
北岡古墓	井伊谷	1991	引佐町教委	室町	引佐町教委 1994
城山2号墳	井伊谷	1992	引佐町教委	古墳	引佐町教委 1994
北岡大塚古墳	井伊谷	1994	引佐町教委	古墳	引佐町教委 1981・96
矢畑遺跡	井伊谷	2001～03	静文研	古墳・奈良・戦国	静文研 2008
北神宮寺遺跡	井伊谷	2003～07	浜文振	縄文・弥生・古墳・戦国・江戸	浜文振 2009a
本屋敷遺跡	金指	2004	引佐町教委	江戸	引佐町教委 2005
前岡遺跡	井伊谷	2004	静文研	縄文・弥生・古墳・奈良・戦国	静文研 2005
金指陣屋跡(試掘)	金指	2005	浜松市教委	江戸・明治	浜松市教委 2009
正楽寺遺跡	井伊谷	2008	浜文振	縄文	浜文振 2009b
天白遺跡(試掘)	井伊谷	2008	浜松市教委	縄文・古墳	

[文献]

- 土屋彦六 1895 「遠江ニ於ケル石器時代ノ遺物」『東京人類学会雑誌』第8巻 第80号
 静岡県 1930 『静岡県史』第1巻
 鷺山恭平 1933 「石器時代及古墳の調査」『静岡県史蹟名勝天然記念物調査報告』第8集 静岡県
 引佐町教育委員会 1980 『引佐町の古墳文化Ⅰ』
 引佐町教育委員会 1981 『引佐町の古墳文化Ⅱ』
 引佐町教育委員会 1983 『引佐町の古墳文化Ⅲ』
 引佐町教育委員会 1988 『引佐町の古墳文化Ⅳ』
 引佐町教育委員会 1999 『天白磐座遺跡 引佐町の古墳文化Ⅴ』
 引佐町教育委員会 1994 『引佐町の遺跡Ⅵ』
 引佐町教育委員会 1996 『北岡大塚古墳 引佐町の遺跡Ⅶ』
 引佐町教育委員会 2004 『本屋敷遺跡確認調査報告書』
 浜松市教育委員会 2009 『浜松市試掘調査概要』
 (財)静岡県埋蔵文化財調査研究所 2005 『前岡遺跡・今城』
 (財)静岡県埋蔵文化財調査研究所 2008 『矢畑遺跡』
 (財)浜松市文化振興財団 2009a 『正楽寺遺跡』
 (財)浜松市文化振興財団 2009b 『北神宮寺遺跡』

第2章 調査成果

1 旧石器・縄文時代

(1) 概要

旧石器時代の彫器が包含層である黒色砂質土中から出土した。また、同じく旧石器時代の可能性がある剥片石器も出土している。旧石器時代の遺構は未検出である。

縄文時代については、遺物は比較的豊富に出土しているが、明確な遺構は確認できなかった。遺物の出土位置は、表土もしくは包含層である黒色砂質土であり、比較的浅い。後世における土地利用が活発で縄文時代の遺構が破壊されてしまったとみられよう。縄文土器の帰属時期は、中期初頭から後期初頭であり、遺跡の存続時期を示している。出土遺物は縄文土器、石鏃、石錘、打製石斧のほか、石棒が2点含まれる。表採された大型の石棒 (Fig.9) の存在とあわせ、祭祀系遺物が比較的豊富にみられるといえよう。

(2) 検出遺構

小穴・土坑 縄文時代の遺構として、数基の小穴・土坑を確認した。いずれも小規模な遺構で、用途は不明である。

SP268は、I-4区の段丘斜面で確認した小穴である。長径40cm程度で検出面からの深さは20cmほど

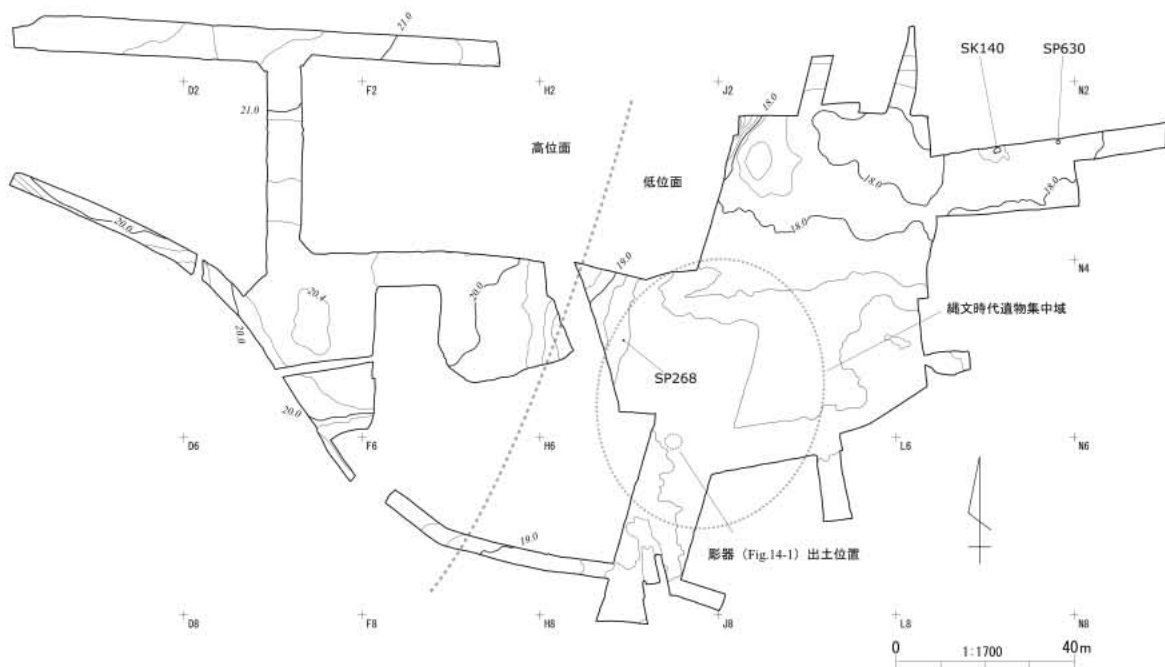


Fig.13 旧石器・縄文時代 遺構等分布図

1 旧石器・縄文時代

である。縄文土器の深鉢（16）が出土した。16は遺存部分が決して多くはないが、口縁部から底部まで残存しており、SP268中に埋納されていたものと捉えられる。

このほか、SK140、SP630は、縄文土器のみが出土した遺構であるが、確実に同時代の遺構と認定できる保障はない。

遺物分布の傾向 縄文土器の多くは後の時代の遺構からの混入品であり、石器のほとんどは表面採集、もしくは包含層である黒色砂質土から出土したものである。縄文時代の遺物は比較的広域に分布している。検出遺構は限られるが、発掘調査を行った全域が縄文時代の遺跡の範囲と捉えられる。発掘調査時においても、調査対象地のほぼ全域から、黒耀石の剥片や打製石斧の破片とみられる緑色片岩が採集できた。

縄文時代の遺物が集中するのは、I-4区、I-5区、I-6区、J-4区、J-5区といった区域である。この区域は低位面の最も奥に位置し、包含層である黒色砂質土が厚く堆積している。出土量の傾向を重視すれば、遺物が集中する区域が居住域の中心であるとみてよいだろう。Fig.9に示した石棒を所有する山下氏の住まいも調査グリッドではG-3区に相当し、縄文時代の遺物が集中する区域に隣接している。厳密な出土位置は不明であるが、石棒もこの近辺で採集された可能性が高いだろう。

（3）旧石器時代の出土遺物

石器（Fig.14） 包含層から出土した石器の中に旧石器時代の資料（1）が含まれる。また剥片石器（2）も旧石器時代の遺物の可能性がある。

1はチャート製の彫器で、完形である。I-6区の黒色砂質土中から出土した。長さ5.9cm、幅1.7cm、厚さ1.0cm、重量11.3gである。新しい時期の剥離がみられるが、転用による使用痕かもしくは発掘調査時に事故的に剥離した可能性がある。

2は頁岩製の使用痕のある剥片（剥片石器）である。I-6区もしくはJ-5区の黒色砂質土中から出土した。長さ4.1cm、幅3.5cm、厚さ1.3cm、重量15.6gである。この個体は、表面の風化が顕著で、古い時代の石器であることをうかがわせている。また、石材も他の縄文時代の石器と異なる点も留意したい。縄文時代の石器である可能性は否定できないが、旧石器時代の遺物の可能性がある資料として示しておきたい。

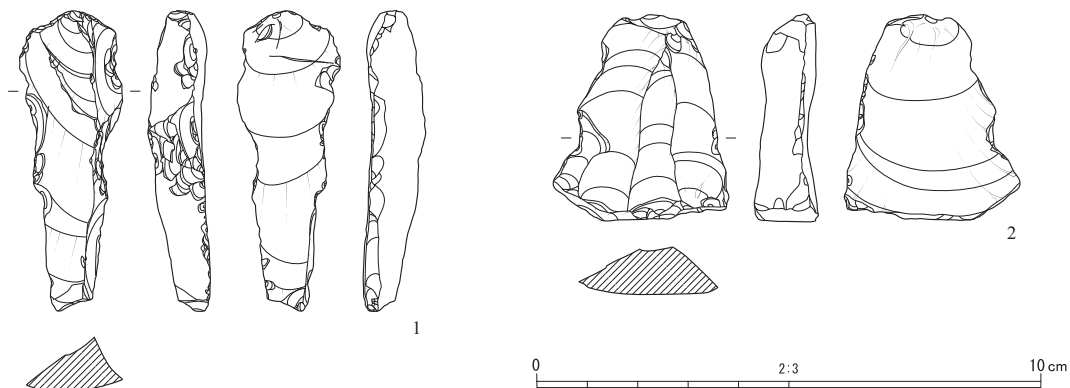


Fig.14 旧石器時代 出土遺物

(4) 縄文時代の出土遺物

土器 (Fig.15・16) 縄文土器は破片の状態であるが、40点図化できた。いずれも小破片であるが、SP268から出土した16は全体形がうかがえる。

縄文土器の型式は、中期初頭の北浦C式に始まり、中期前半の新道式(勝坂式)、井戸尻式、山田平式、を経て、中期後半の加曾利EⅡ・EⅢ式、曾利Ⅲ・Ⅳ式、後期初頭の称名寺式、中津式までみられる。それぞれの時期の土器は少量であるが、特定の型式に偏ることがなく、中期初頭から後期初頭まで、平均的な量が出土している。

石棒 (Fig.17) 石棒が2点出土した。41は緑色片岩を用いた小型品で、下端と縦断の半分が欠損している。42は輝緑岩を用いた大型の石棒で、直径6cm程度である。

石錘 (Fig.17) 石錘は、11点を図化した。川原石の長軸に溝を巡らしたもの(有溝石錘、43)が認められるほか、両端に僅かな切り込みを入れたもの(44~47)、川原石の両端を打ち欠いただけのもの(礫石錘、48~53)がみられる。

叩石 (Fig.17) 出土遺構や出土層位が明確でないことから、縄文時代の遺物である確証がな

Tab.3 縄文土器

Fig.	番号	グリッド	出土位置	型式	時期	特徴
15	1	I-7	SK100 (混入)	大歳山式	前期末	RL縄文、波状口縁、押引爪形文
15	2	I-5	SX04 (混入)	北裏C式	中期初頭	刺突文
15	3	I-4	SD16 (混入)	北裏C式	中期初頭	刺突文
15	4	J-5	包含層	北裏C式	包含層	爪形文、突帯
15	5	I-1	SZ27 SD134 (混入)	北裏C式	中期初頭	半截竹管文
15	6	I-5	包含層	北裏C式(柏窪式)	中期初頭	緩い波状口縁、連続爪形文、押引爪形沈線文
15	7	I-4	包含層	北裏C式	中期初頭	爪形文、突帯
15	8	F-1	SZ29 SD130 (混入)	五領ヶ台式	中期初頭	半截竹管文
15	9	E-3	SB56 SX27 (混入)	新道式(勝坂式)の古相	中期前半	押引爪形沈線文
15	10	E-4	SZ22 SD160 (混入)	新道式(勝坂式)の古相	中期前半	緩い波状口縁、連続爪形文
15	11	J-5	包含層	井戸尻式	中期前半	突帯
15	12	J-5	包含層	山田平式	中期前半	半截竹管文
15	13	I-6	SZ12 SD88 (混入)	山田平式(系統)	中期前半	LR縄文、水平口縁
15	14	M-2	SK140	山田平式(系統)	中期前半	垂線とS字の半截竹管文
15	15	E-1	SZ27 SD134 (混入)	山田平式(系統)	中期前半	突帯
15	16	H-4	SP268	加曾利EⅡ式	中期後半	2本単位の沈線、RL縄文、口縁に縦方向の隆帯
15	17	I-6	SK125 SK126 (混入)	加曾利EⅡ式	中期後半	隆帯2本単位×4方向、刻みあり、LR縄文
15	18	I-5	SD04上層 (混入)	加曾利EⅡ~Ⅲ式	中期後半	RL縄文
15	19	M-2	SP630	加曾利EⅢ式併行、東海系	中期後半	隆帯
15	20	J-5	包含層	加曾利EⅢ式併行、東海系	中期後半	隆帯
15	21	J-4	SZ04 SD12 (混入)	加曾利EⅢ式併行、関東系	中期後半	波状文、波状口縁
15	22	I-5	包含層	加曾利E式系統	中期	RL縄文
16	23	I-5	SD05 (混入)	曾利Ⅰ~Ⅱ式併行、東海系	中期前半~後半	波状口縁、隆帯に刻み
16	24	J-4	包含層	曾利Ⅲ式	中期後半	水平口縁
16	25	I-5	包含層	曾利Ⅲ式	中期後半	波状口縁
16	26	I-5	包含層	曾利Ⅲ式	中期後半	隆帯
16	27	J-4	包含層	曾利Ⅲ式	中期後半	隆帯
16	28	H-5	SD36 (混入)	曾利Ⅲ式	中期後半	隆帯
16	29	I-6	包含層	曾利Ⅲ式	中期後半	垂下する沈線と斜方向の沈線
16	30	I-4	SD11 (混入)	曾利Ⅲ式併行、東海系	中期後半	波状口縁、円形文
16	31	I-6	包含層	曾利Ⅳ式併行、東海系	中期後半	垂線と連続S字文
16	32	I-6	包含層	曾利Ⅳ式併行、東海系	中期後半	垂線
16	33	J-5	包含層	称名寺式	後期初頭	波状口縁、刺突
16	34	J-6	SB25 SK89 (混入)	称名寺式	後期初頭	RL縄文か
16	35	I-4	包含層	称名寺式併行、東海系	後期初頭	条痕文、沈線
16	36	I-5	SK07 (混入)	称名寺式~堀之内Ⅰ式	後期初頭~前半	内彎口縁
16	37	I-4	SB05 (混入)	中津式	後期初頭	水平口縁、沈線
16	38	I-5	SP65 (混入)	中津式	後期初頭	太い沈線
16	39	I-5	SD06 (混入)	中津式	後期初頭	水平口縁
16	40	I-4	包含層	中津式	後期初頭	太い沈線

1 旧石器・縄文時代

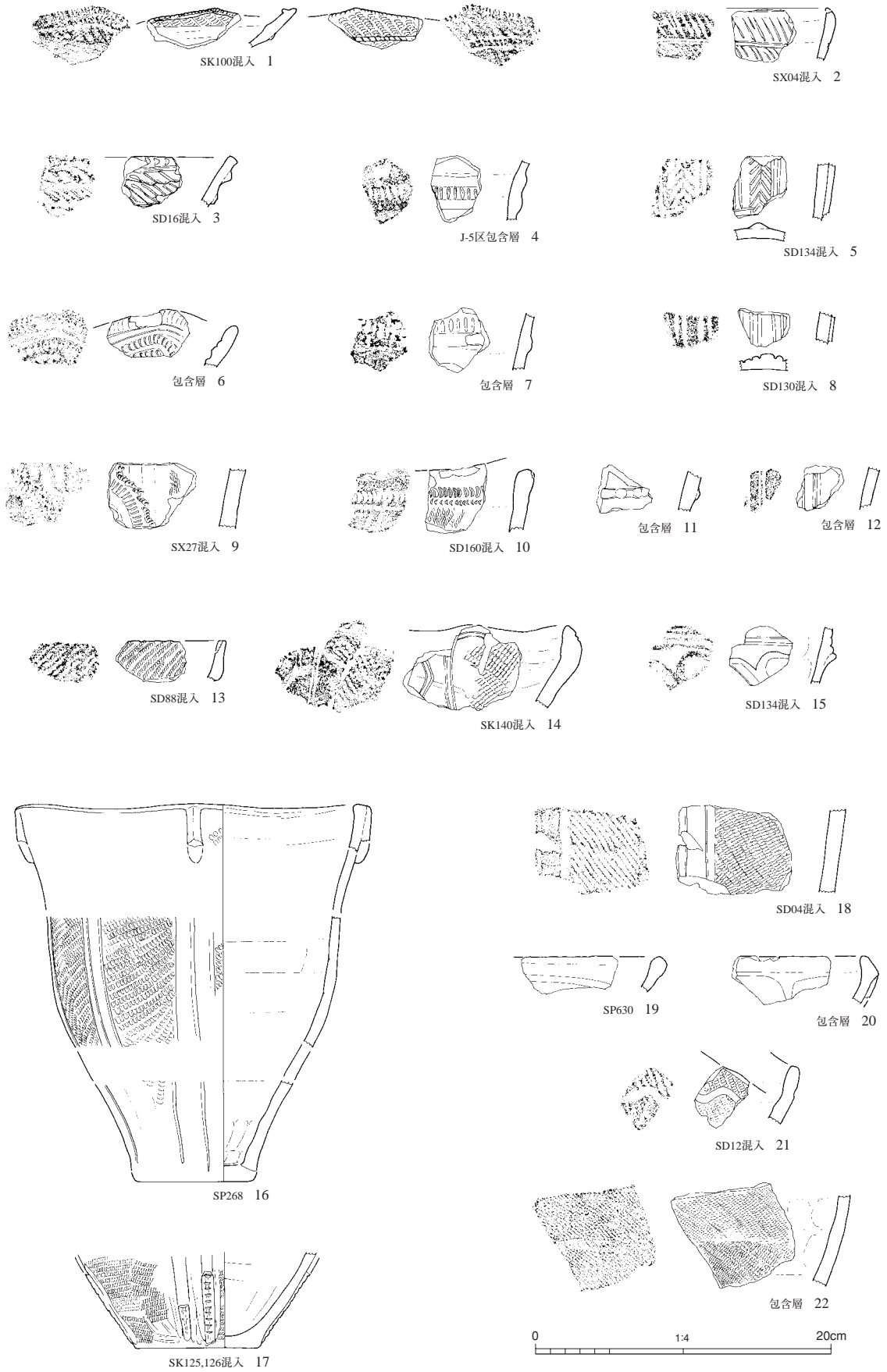


Fig.15 縄文土器 (1)

いが、2点の叩石（54・55）を示す。いずれも自然礫を用いたもので両端に使用痕がみられる。

石 鏃（Fig.18） 石鏃は、形態がうかがえるもの15点（56～70）を図示する。石鏃の形態は、すべて凹基無頸式に属する。いずれも黒耀石を用いたもので、他の石材の石鏃はまったく見られない。こうした使用石材の傾向は、中期を中心とする当遺跡の特徴を示しているといえるだろう。

石器未成品・石核（Fig.18） 石器未成品もしくは石核を8点分図示する（71～78）。71～73は石鏃の未成品とみられる。74～78は石核である。77は石器として用いられていた可能性があり、仮に「両極石器」とした。石材は78が玉髓であるほかは、すべて黒耀石である。

打製石斧（Fig.19・20） 遺存状態がよい打製石斧を25点図示する（79～103）。打製石斧は、長さ10cm前後、幅4～5cm程度の通有の大きさである。石材は緑色片岩が主体であるが、一部、凝灰岩を用いたものが認められる。緑色片岩の破片は調査対象地の全域に分布しており、相当数の打製石斧が消費されたとみられる。



Fig.16 縄文土器（2）

1 旧石器・縄文時代

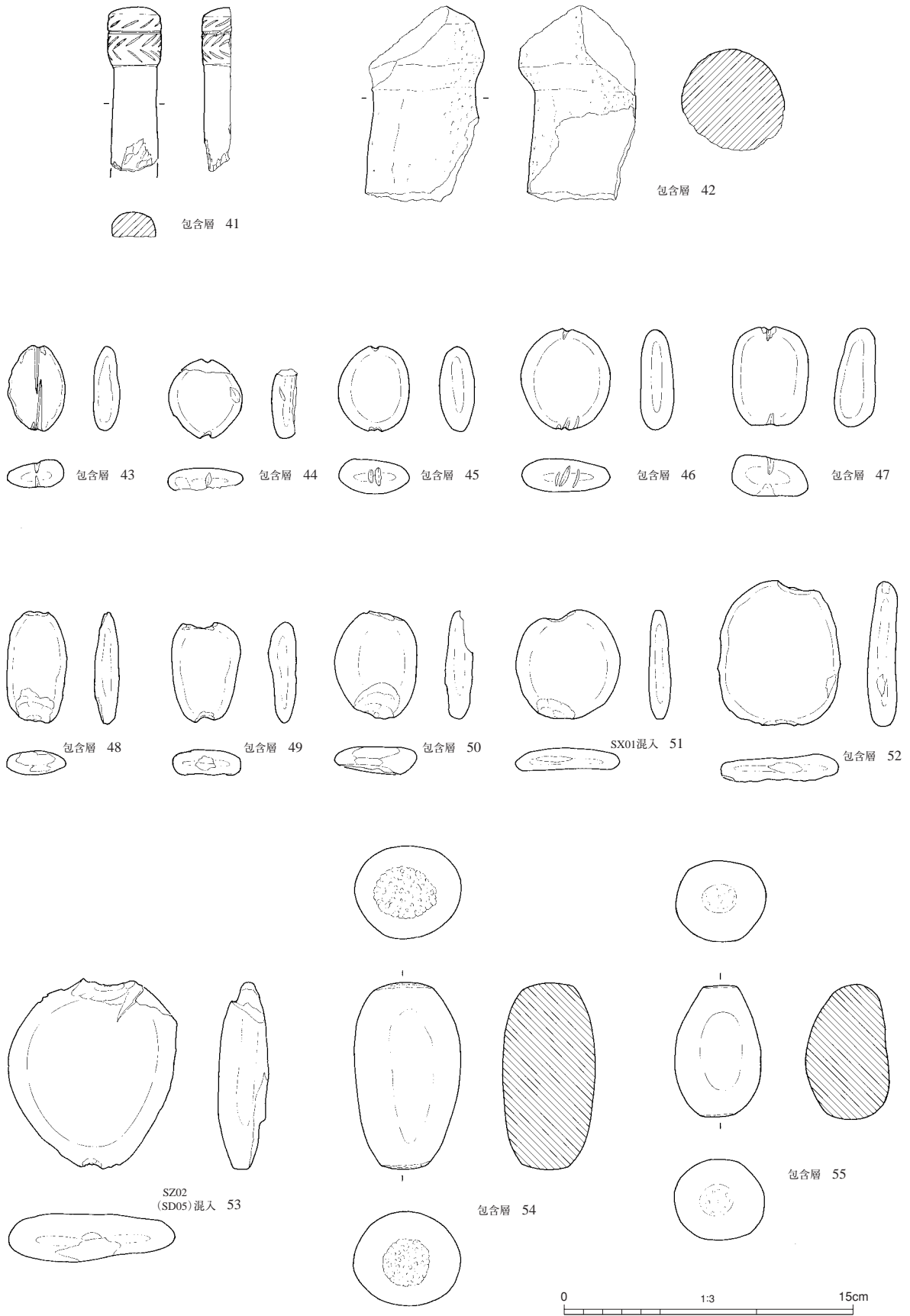
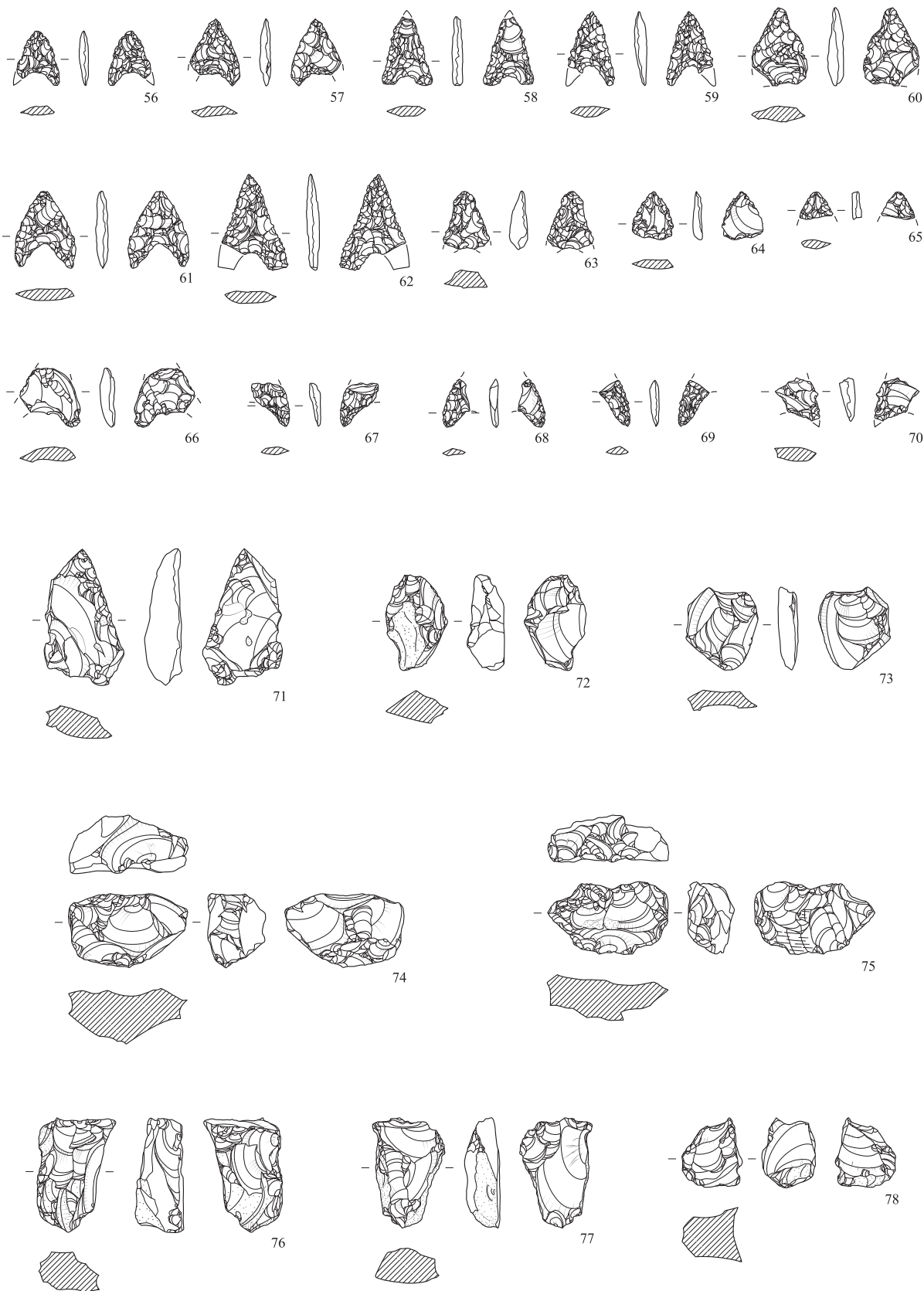


Fig.17 縄文時代 石棒・石錘・叩石



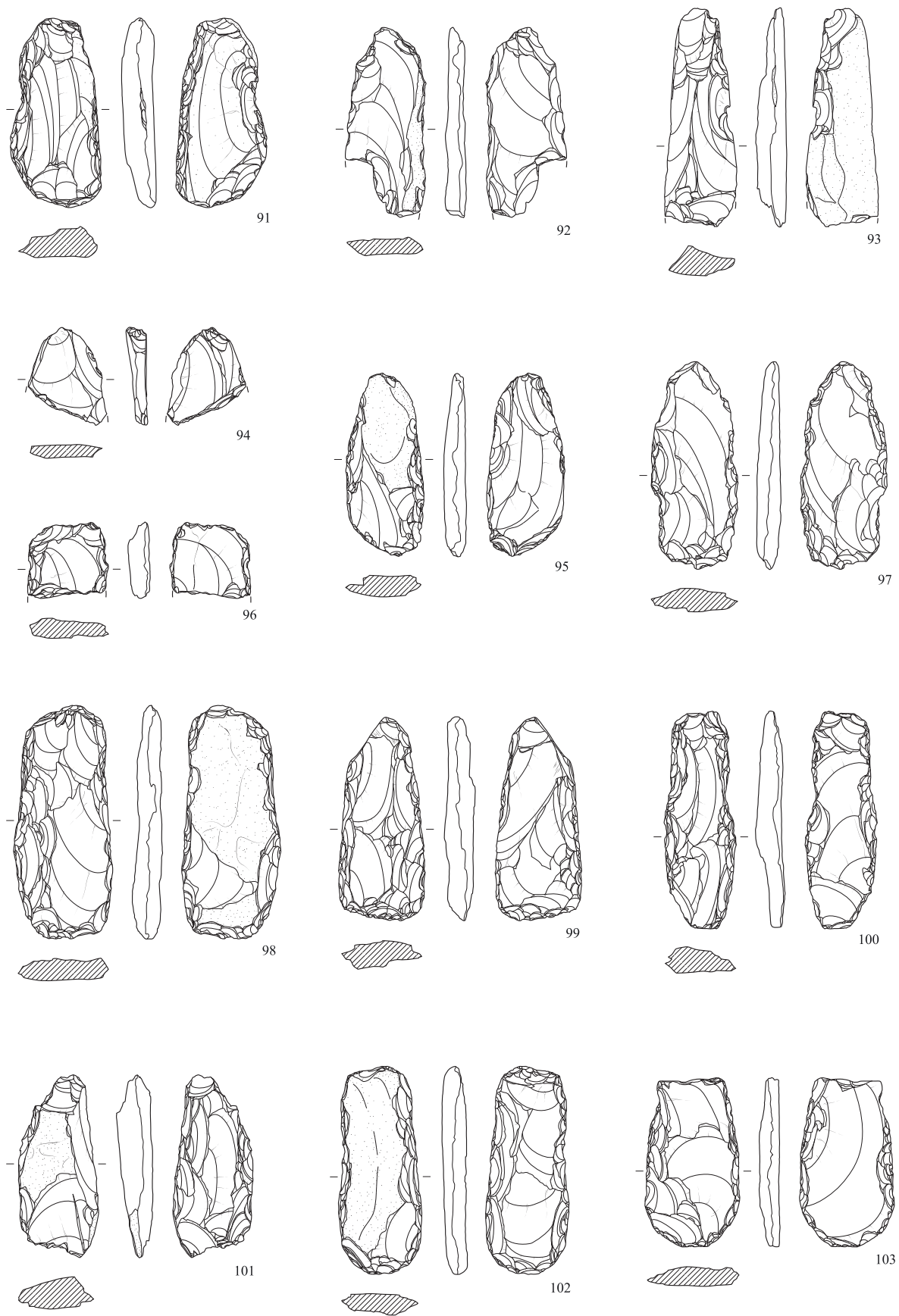
0 2:3 10 cm

Fig.18 縄文時代石鏃・石核

1 旧石器・縄文時代



Fig.19 縄文時代 打製石斧 (1)



0 1:3 20 cm

Fig.20 縄文時代 打製石斧 (2)

Tab.4 縄文時代石器

Fig.	図版No.	グリッド	出土位置	器種	長さ(cm)	幅(cm)	厚み(cm)	重さ(g)	石材	備考
18	56	I-5	包含層	石鏃	1.5	1.1	0.3	0.3	黒耀石	左脚部欠
18	57	J-4	包含層	石鏃	1.7	1.3	0.3	0.5	黒耀石	
18	58	J-5	包含層	石鏃	1.8	1.3	0.3	0.5	黒耀石	先端欠
18	59	I-5	包含層	石鏃	2.0	1.0	0.2	0.4	黒耀石	左脚部欠
18	60	I-5	包含層	石鏃	2.0	1.4	0.4	0.9	黒耀石	左脚部欠
18	61	J-3	包含層	石鏃	2.0	1.6	0.3	0.7	黒耀石	完形
18	62	—	表採	石鏃	2.5	1.7	0.4	0.8	黒耀石	左脚部欠
18	63	J-4	包含層	石鏃	1.5	1.2	0.5	0.6	黒耀石	
18	64	I-5	SD02 (混入)	石鏃	1.3	1.1	0.5	0.3	黒耀石	完形
18	65	—	表採	石鏃	0.7	0.9	0.3	0.1	黒耀石	基部欠
18	66	—	表採	石鏃	1.6	1.6	0.4	0.7	黒耀石	左脚部・先端欠
18	67	—	表採	石鏃	1.1	1.0	0.3	0.3	黒耀石	
18	68	I-5	包含層	石鏃	1.3	0.7	0.2	0.1	黒耀石	
18	69	—	表採	石鏃	1.2	0.8	0.3	0.1	黒耀石	
18	70	—	表採	石鏃	1.1	1.2	0.3	0.4	黒耀石	先端から左脚部欠
18	71	I-5	包含層	石鏃未製品	3.5	2.1	1.0	5.1	黒耀石	完形
18	72	—	表採	石鏃未製品	2.5	1.6	1.0	3.0	黒耀石	完形
18	73	—	表採	石鏃未製品	2.2	1.9	0.5	1.9	黒耀石	完形
18	74	I-5	SX04	石核	1.9	3.1	1.5	8.5	黒耀石	完形
18	75	I-6	包含層	石核	1.9	3.1	1.2	6.0	黒耀石	完形
18	76	I-6	包含層	石核	3.0	2.0	1.3	6.6	黒耀石	完形
18	77	—	表採	両極石器	2.9	1.9	0.9	4.6	黒耀石	完形
18	78	I-5	包含層	石核	1.8	1.6	1.4	4.1	玉髓	完形
19	79	I-5	包含層	打製石斧	7.8	3.8	1.0	37.8	緑色片岩	完形
19	80	J-5	包含層	打製石斧	8.8	4.3	1.2	71.2	緑色片岩	基部欠
19	81	J-4	包含層	打製石斧	10.5	3.9	1.2	64.9	緑色片岩	完形
19	82	I-4	包含層	打製石斧	12.5	4.4	1.5	130.8	緑色片岩	完形
19	83	—	表採	打製石斧	9.4	4.0	1.3	63.7	緑色片岩	刃先欠
19	84	J-4	包含層	打製石斧	12.2	5.5	1.0	91.0	緑色片岩	刃先欠
19	85	I-5	包含層	打製石斧	9.0	4.4	0.7	44.4	緑色片岩	完形
19	86	—	表採	打製石斧	9.2	4.2	1.5	84.7	緑色片岩	刃先欠
19	87	I-4	SD11 (混入)	打製石斧	10.1	5.0	0.9	106.7	緑色片岩	完形
19	88	I-4	SD11 (混入)	打製石斧	8.5	3.4	0.7	33.9	緑色片岩	左側縁から刃先欠
19	89	—	表採	打製石斧	9.7	4.4	1.1	62.3	緑色片岩	完形
19	90	—	表採	打製石斧	10.0	6.0	1.5	128.7	緑色片岩	刃先欠
20	91	—	表採	打製石斧	10.0	4.6	1.6	102.0	凝灰岩	完形
20	92	I-5	包含層	打製石斧	9.9	4.1	1.0	44.8	凝灰岩	刃先欠
20	93	—	表採	打製石斧	11.4	3.7	1.5	67.0	緑色片岩	刃先欠
20	94	J-5	包含層	打製石斧	5.5	3.9	1.0	21.1	緑色片岩	刃先欠
20	95	J-5	包含層	打製石斧	9.5	4.0	1.1	60.9	緑色片岩	完形
20	96	—	表採	打製石斧	4.0	4.1	0.9	19.4	片岩	刃先欠
20	97	J-4	包含層	打製石斧	10.9	4.5	1.2	80.2	緑色片岩	完形
20	98	I-5	SD02 (混入)	打製石斧	12.2	5.2	1.6	118.4	凝灰岩	完形
20	99	J-4	包含層	打製石斧	10.7	4.5	1.7	100.5	緑色片岩	完形
20	100	J-3	包含層	打製石斧	11.3	3.8	1.3	72.0	緑色片岩	完形
20	101	J-3	包含層	打製石斧	9.6	4.0	1.3	82.3	凝灰岩	完形
20	102	J-4	包含層	打製石斧	10.7	4.4	1.2	91.1	緑色片岩	完形
20	103	K-5	SX01 (混入)	打製石斧	8.9	5.0	1.0	70.6	緑色片岩	完形

(4) 小 結

旧石器が発掘調査で確認できたことは意義深い。確実な旧石器は1点の彫器であるが、後期旧石器時代(約2万5千年前から1万5千年前)に井伊谷盆地で生活した人びとの存在を物語る。

縄文時代にかんしては、遺物が比較的豊富に認められた。縄文時代の遺跡の存続時期は中期初頭から後期初頭(約5千年前から4千年前)である。各時期の型式の土器が平均的にみられることから、北神宮寺における縄文時代の集落は、比較的安定的に推移していたとみられよう。出土する石器の傾向も縄文時代中期に特徴的なもので、石棒などの祭祀系遺物が含まれる点が注目できる。北神宮寺遺跡は、井伊谷盆地における拠点的な縄文集落とみてよいだろう。

北神宮寺遺跡は従来、縄文時代の遺跡として広く知られていたが、発掘調査では、明確な遺構は検出できなかった。縄文時代の遺構は比較的浅いことに加え、後の時代における土地利用が活発で縄文時代の遺構が破壊されてしまった可能性がその原因として考えられる。

2 弥生時代

(1) 検出遺構の概観

調査地区の全域で弥生時代中期末葉の集落を確認した。検出した主な遺構は、竪穴建物2棟、方形周溝墓15基である。集落は低位面と高位面にまたがっている。低位面では方形周溝墓のみが、高位面では竪穴建物と方形周溝墓が確認できた。竪穴建物は隅丸長方形を呈する。低位面の方形周溝墓の周溝からは、数点の供献用土器が転落した状態で出土した。また、墳丘の裾において土器棺を伴うものがみられる。

なお、弥生時代中期前葉の土器が僅かであるが出土している。

(2) 竪穴建物

分布 (Fig.21) 弥生時代の竪穴建物は、高位面において2棟検出できた。平面形が隅丸長方形を呈するもので、隅丸正方形を呈する古墳時代の竪穴建物とは明瞭に区別できる。

SB42 (Fig.22) SB42はF-4区において確認できた比較的大型の竪穴建物である。長軸8.4m、短軸5.6mであり、周囲には壁溝が巡り、柱穴は4箇所みられる。炉跡は床面に数箇所分かれて確認できる。柱穴とみられるSP783からは、白色粘土に混じって弥生土器(1~5)が出土した。出土遺物から、SB42は中期末葉の遺構と捉えられる。

SB45 (Fig.22) SB45はSB42と同じF-4区で検出した隅丸長方形の竪穴建物である。規模はやや小型で、長軸5.3m、短軸3.5m程度である。柱穴は明瞭で、床面中央に炉跡がみられる。出土遺物

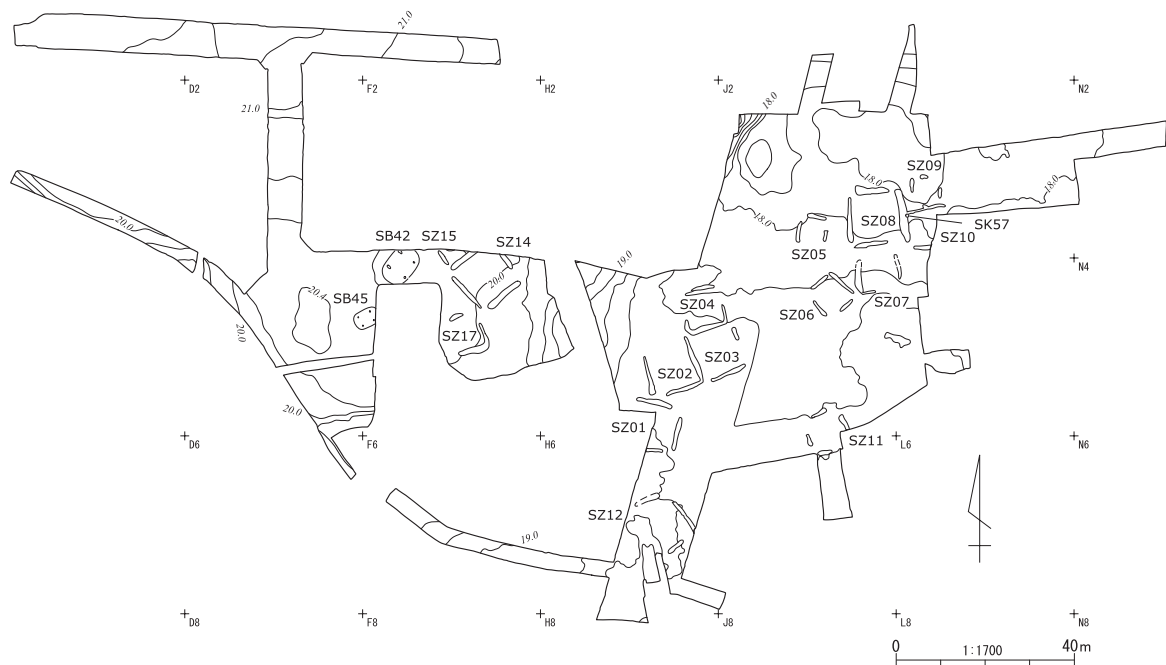


Fig.21 弥生時代 遺構分布図

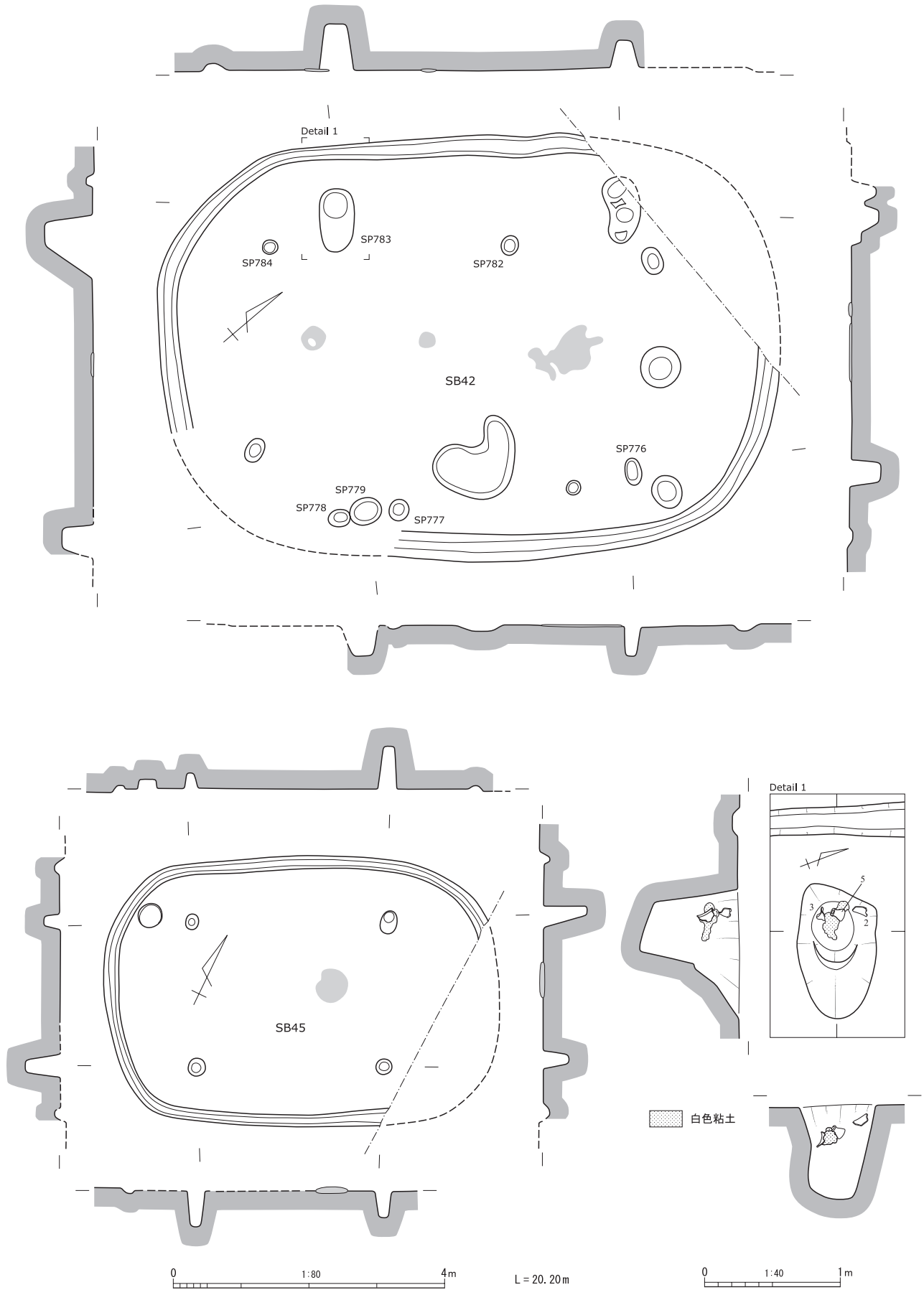


Fig.22 SB42・45 実測図

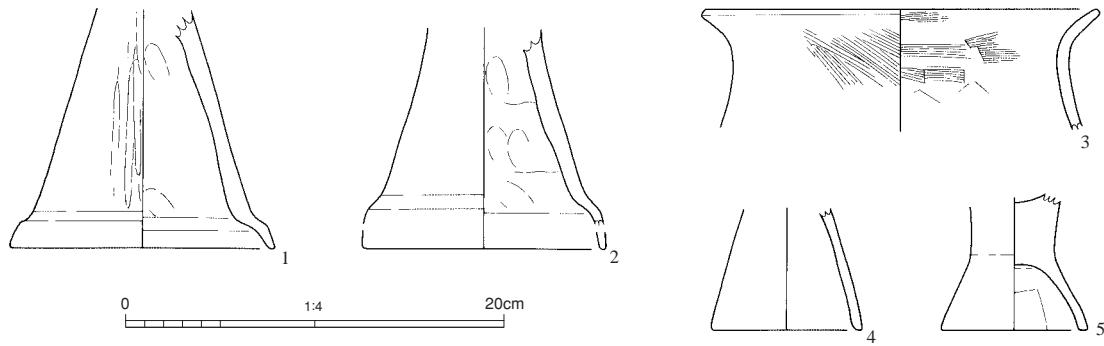


Fig.23 SB42出土遺物

が無い、厳密な時期は決められないが、平面形態がSB42と類似すること、構築された位置もSB42と近接することから、中期末葉の遺構と推定できる。

SB42出土遺物 (Fig.23) 1～5はSB42から出土した遺物である。1・2は東遠江系の高坏の脚部とみられる。直線的に開く比較的長い脚部で、端部を屈曲させている。3は口縁端部に刺突がみられず、鉢である可能性がある。4・5は甕の脚台部である。これらの遺物は、中期末葉頃に相当するとみられる。

(3) 方形周溝墓

分布 (Fig.24) 弥生時代の方形周溝墓は、低位面と高位面の双方において総数15基分が確認できた。これらの中には周溝を共有するものがあり、互いに関連性が高いものが含まれる。おおよその分布状況から、方形周溝墓群をA～Cの3群に分け、その詳細を示したい。

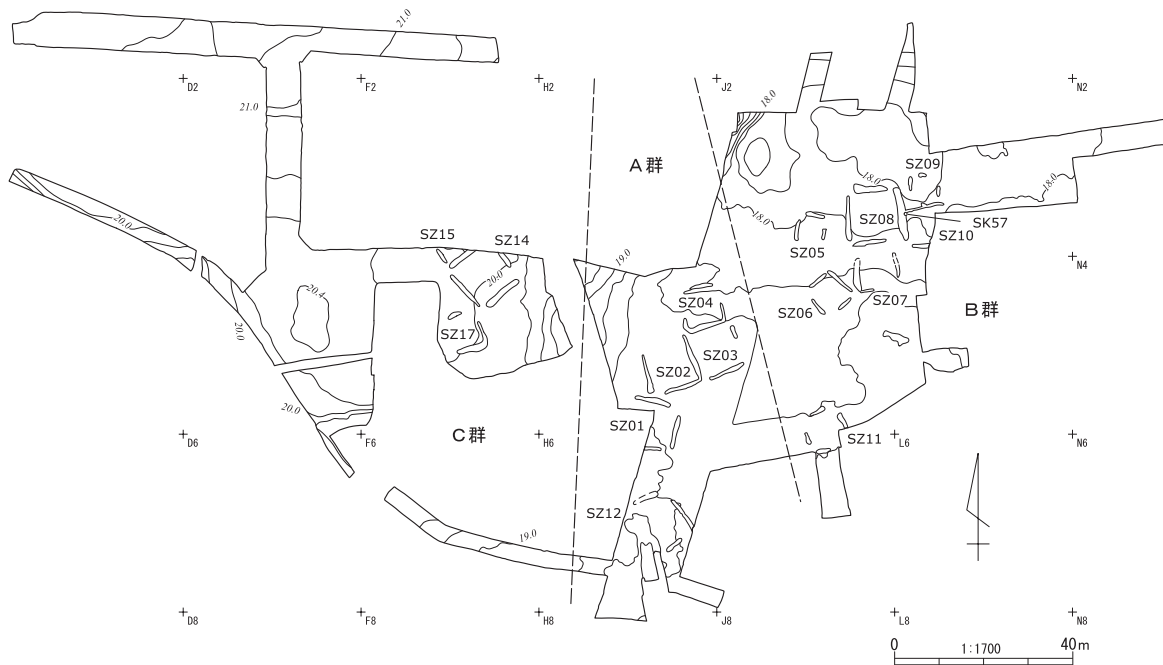


Fig.24 弥生時代 方形周溝墓分布図

Tab.5 弥生時代 方形周溝墓

遺構	グリット	群	東西 (m)	南北 (m)	面積 (m ²)
SZ01	J-5	A群		10.9	
SZ02	J-5	A群	10.8		
SZ03	J-5	A群	10.0	10.2	102.0
SZ04	J-4	A群	8.9	8.9	79.2
SZ12	J-6	A群			
SZ05	L-3	B群	6.3		
SZ06	L-4	B群	7.5	7.8	58.5
SZ07	L-4	B群	9.0		
SZ08	L-3	B群	12.2	11.8	144.0
SZ09	M-3	B群	6.3	6.6	41.6
SZ10	M-3	B群		8.7	
SZ11	L-5	B群	9.0	8.7	78.3
SZ14	H-4	C群	11.7	12.4	145.1
SZ15	G-4	C群			
SZ17	G-4	C群		7.5	

① 方形周溝墓A群

群構成 方形周溝墓A群は低位面のほぼ中央に分布する。SZ01・02・03・04・12の5基が該当する。このうち、SZ01とSZ12は方位が異なり、独立性が高い。いずれも弥生時代中期末葉の遺構と捉えられる。

SZ01 (Fig.25) SZ01はJ-5区で検出した方形周溝墓である。四隅が途切れる形態であり、北側、東側の周溝と南側の周溝の一部を確認した。周溝内側の屈曲点を結んだ長さは南北10.9mである。周溝の幅は深さと比べて比較的狭い。周溝は中央が深く、端部にいくに従い浅くなる。最も深く掘削されている北側の周溝(SD01)では、検出面

の幅1.2m、深さ0.7mほどである。北側の周溝(SD01)から甕の小型品(9)が、東側の周溝(SD02)から壺・甕(6~8)が出土している。

SZ02 (Fig.26) SZ02は、J-5区で検出した方形周溝墓である。南西の隅が途切れるが、南側と東側の周溝は途切れず連続している。北側の周溝は確認できなかった。北側の周溝は浅く、遺構検出面よりも底面が高かったものと考えられるだろう。周溝内側の屈曲点を結んだ長さは東西10.8mである。周溝は狭く浅いが、西側の周溝(SD33)の南端部において一段深く土坑状に深く掘削されていた部分(SK31)が認められた。この部分の底面から口縁部を打ち欠いた壺(10)が出土している。SK31は、周溝内埋葬の可能性がある。このほかSZ02からは、11~15の遺物が出土した。

SZ03 (Fig.182) SZ03は、J-5区で検出した方形周溝墓である。西側はSZ02と周溝(SD06)を共有し、北側はSZ04と周溝(SD11)を共有する。周溝内側の屈曲点を結んだ長さは東西10.0m、南北10.2mである。東側の周溝と南側の周溝は単独で設定されている。周溝の共有関係から、SZ02・04→SZ03の前後関係が認められる。SZ03からは、16・17の遺物が出土した。

SZ04 (Fig.26) SZ04は、J-4区で検出した方形周溝墓である。北西と北東の隅が途切れるが、南西と南東の隅は途切れず連続している。周溝内側の屈曲点を結んだ長さは東西8.9m、南北8.9mである。北側の周溝は浅く、わずかな底面が確認できたのみである。

北側の周溝(SD20)において、口縁部の一部を打ち欠いた小型壺(20)が出土した。この個体を含め、SZ04からは18~25の遺物が出土している。

SZ12 (Fig.27) SZ12は、J-6区で検出した方形周溝墓である。SZ01~04からは若干の空隙地があること、方形周溝墓の主軸方位も異なることから、独立性の高い方形周溝墓といえる。東側の周溝(SD75・78)は、ほぼ全体がうかがえるが、北側の周溝(SD88)や南側の周溝(SD110)は、ごく僅かに確認できたのみである。西側の周溝は後世の攪乱のため完全に消滅しているが、四隅が途切れる形態であったとみられる。周溝内側の屈曲点を結んだ長さは南北10.8mである。

東側の周溝(SD75・78)は中央部分が浅く掘削されている。中央の浅い部分から南側にかけて壺(26)が破片の状態出土した。

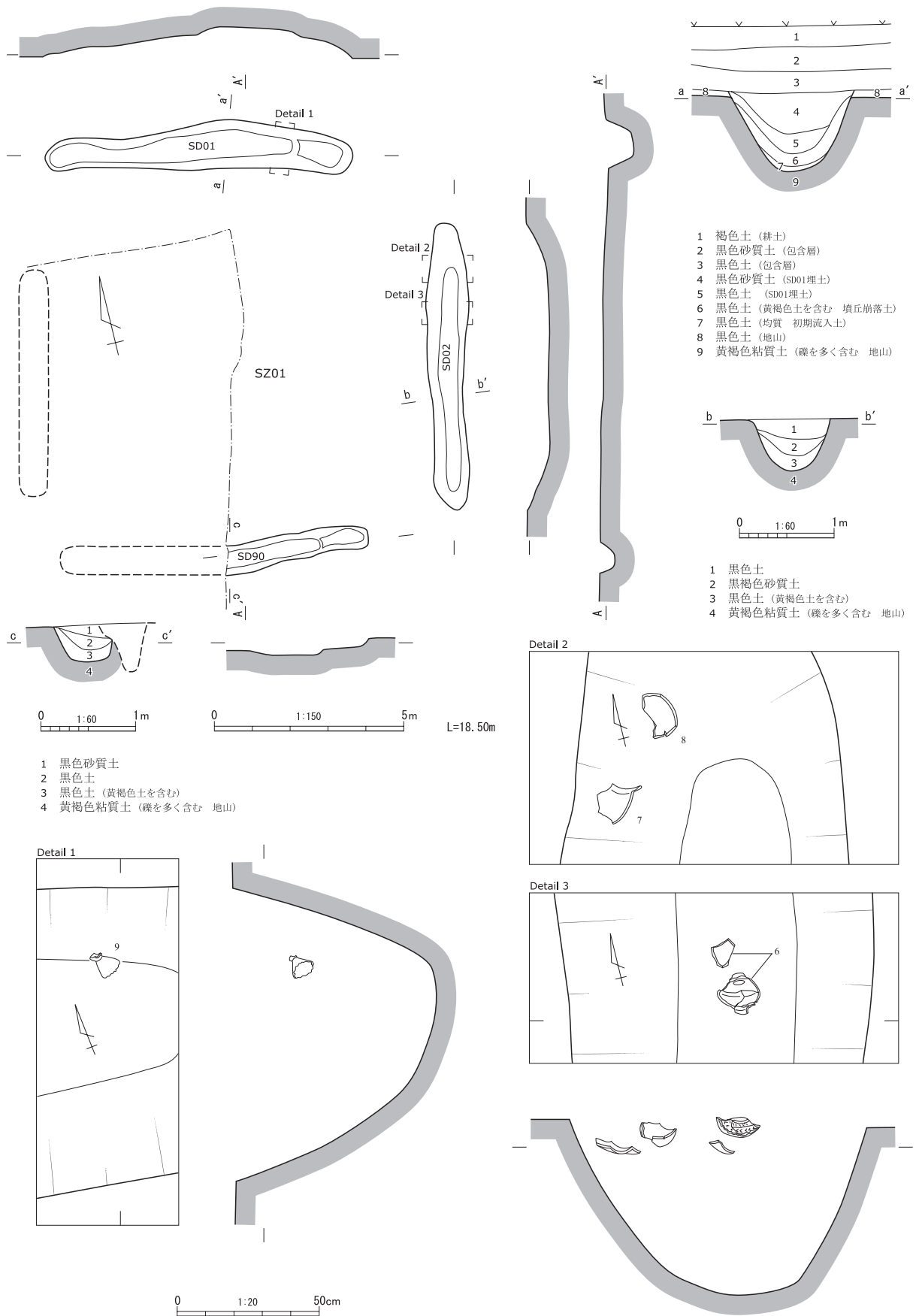


Fig.25 SZ01実測図

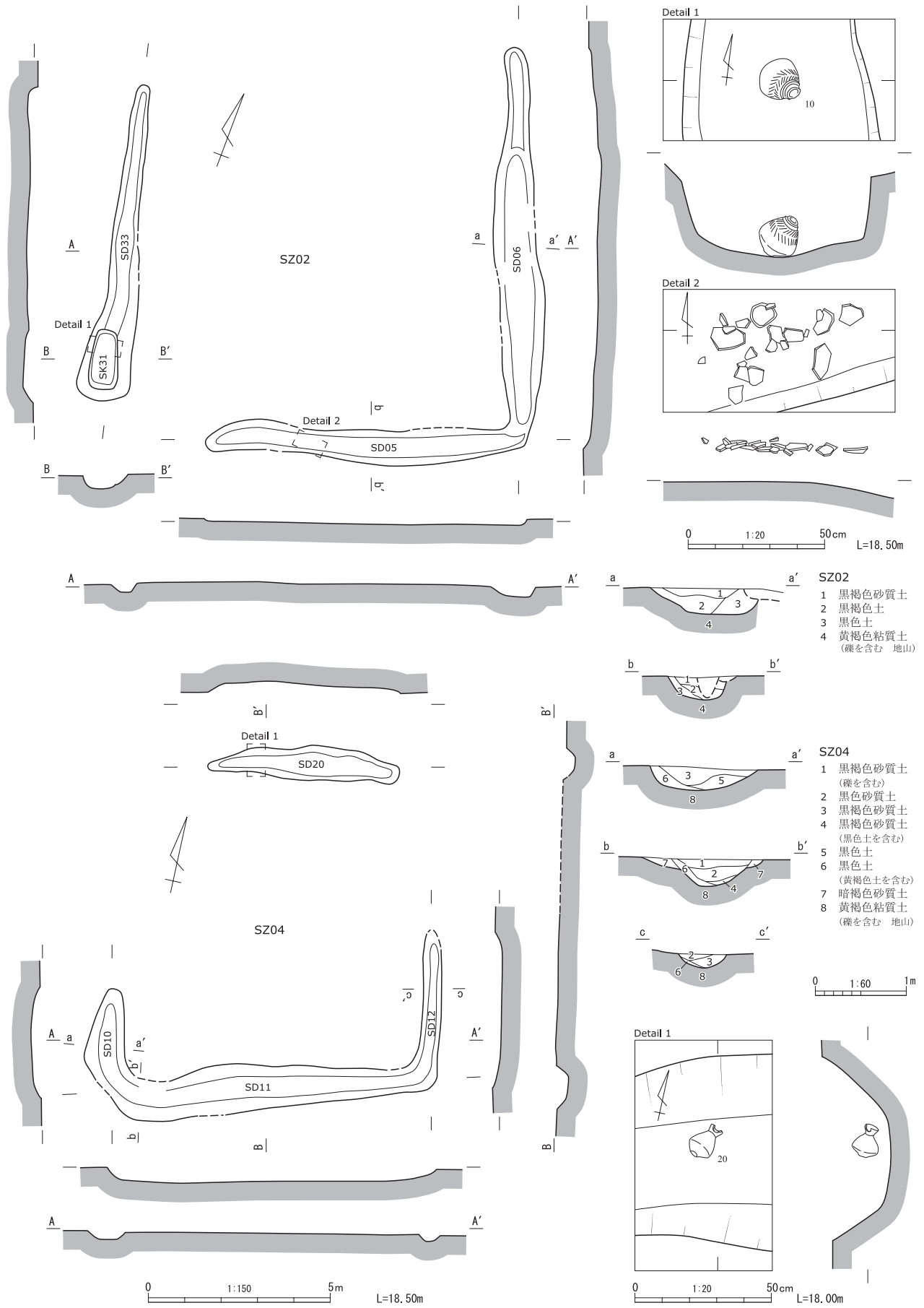


Fig.26 SZ02・04 実測図

方形周溝墓A群出土遺物 (Fig.28) 6～26は方形周溝墓A群から出土した遺物である。6～9はSZ01から出土した遺物である。6は胴部下端の屈曲部が明瞭な壺であり、肩部に櫛描の斜線文、波状文、直線文が入られる。7は台付甕の口縁部、8は台付甕の体部下半である。9は台付甕の小型品である。体部は漏斗状に開き口縁端部に刺突が入られている。体部内面には粘土紐の継ぎ目が明瞭に残る。脚台部は小さく不安定な形状である。

10～15はSZ02から出土した遺物である。10は口縁部を欠失する壺で、頸部に櫛状工具による刺突文がみられる。13は鐙状口縁をもつ高坏、14・15は比較的長脚の甕の脚台部である。

16・17はSZ03から出土した遺物である。16は壺、17は甕の口縁部である。

18～25はSZ04から出土した遺物である。18・19は壺の口縁部である。20は口縁端部の一部を打ち欠いた小型壺である。21は鉢、22は高坏、23～25は甕の破片である。

26はSZ12から出土した壺である。肩部には櫛描による斜格子文と縦方向の波状文（6方向）がみられる。

以上の遺物群には、弥生時代後期様式への萌芽がみられるが、なお、弥生時代中期的な様相が強く認められる。総体的には、弥生時代中期末葉に位置づけてよいだろう。

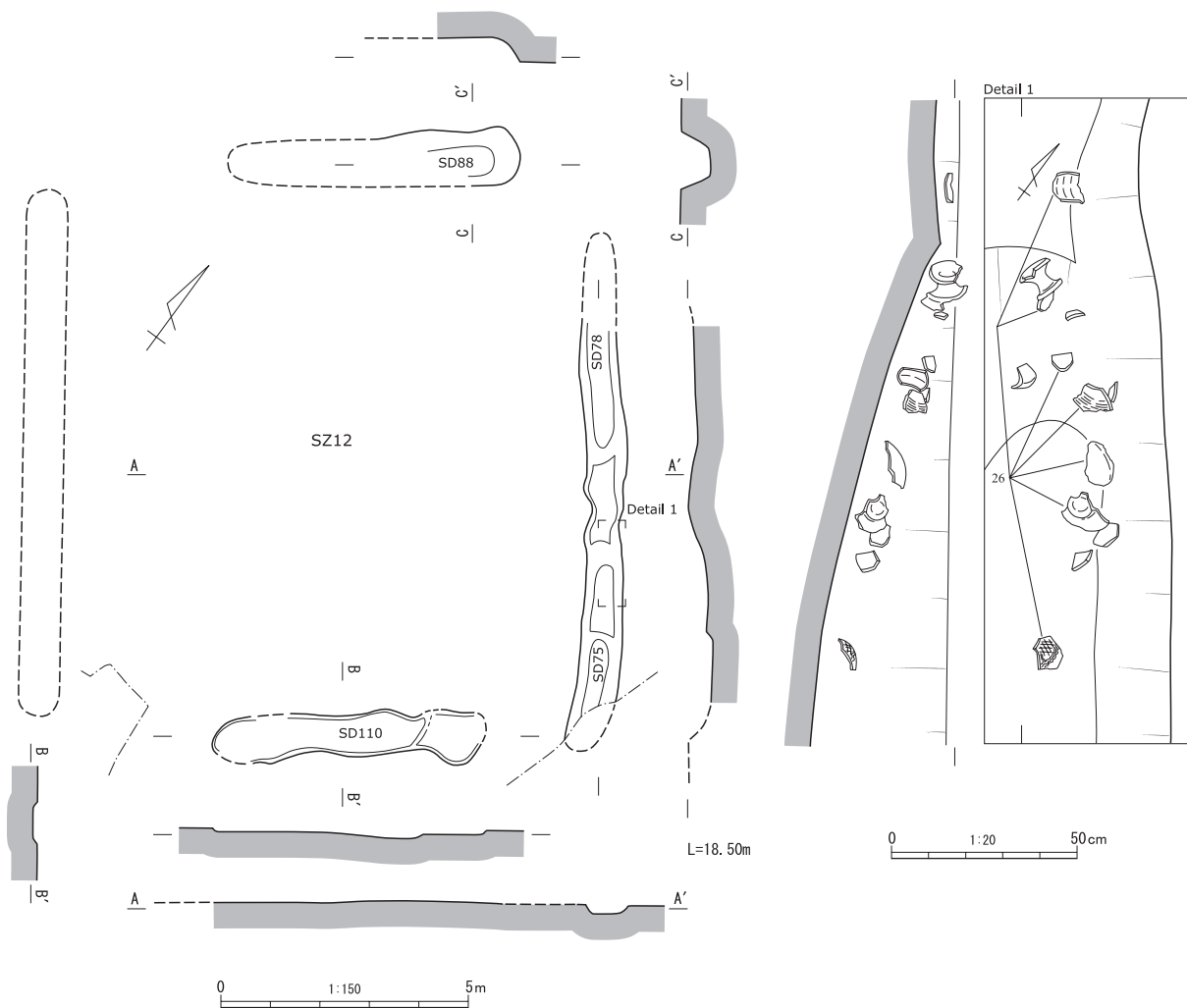


Fig.27 SZ12 実測図

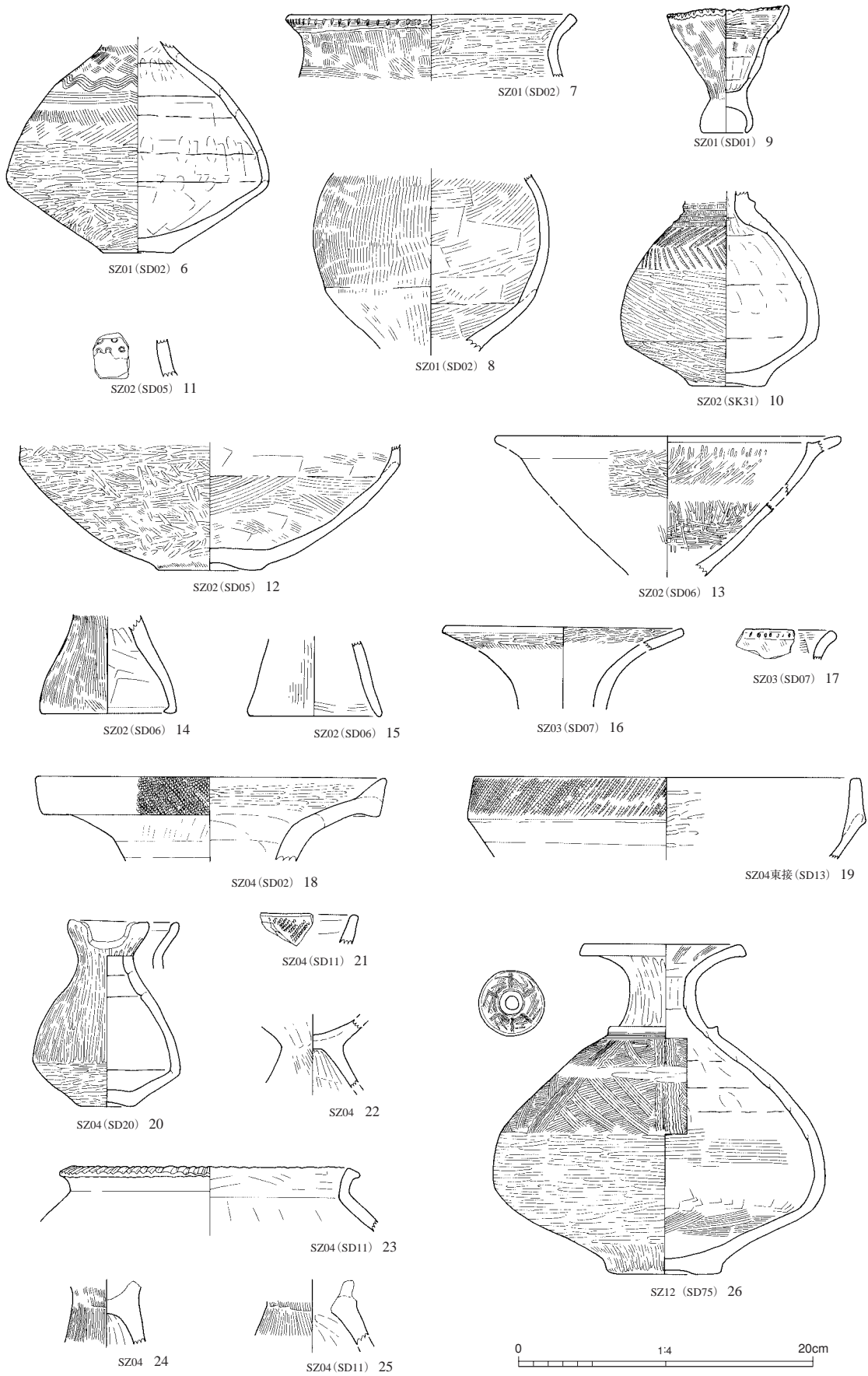


Fig.28 弥生時代 方形周溝墓A群 出土遺物

② 方形周溝墓B群

群構成 方形周溝墓B群は低位面の東側に分布する。SZ05～11の7基が該当する。このうち、SZ06とSZ11は方位が異なり、独立性が高い。方形周溝墓B群も、出土遺物から、いずれも弥生時代中期末葉の遺構と捉えられる。

SZ05 (Fig.29) SZ05はL-3区で検出した方形周溝墓である。四隅が途切れる形態とみられるが、南側の周溝は検出できなかった。周溝内側の屈曲点を結んだ長さは東西6.3mである。周溝は比較的浅く、幅も狭い。

SZ05に直接的に伴う遺物は確認できなかったが、周溝形態や築造位置から弥生時代中期末葉の遺構と捉えられる。

SZ06 (Fig.29) SZ06はL-4区で検出した方形周溝墓である。四隅が途切れる形態であり、四方向の周溝すべてが確認できた。周溝内側の屈曲点を結んだ長さは南北7.8m、東西7.5mである。周溝は比較的浅いが、北側および東側の周溝が比較的深く掘削されている。

SZ06に直接的に伴う遺物は確認できなかったが、周溝形態や築造位置から弥生時代中期末葉の遺構と捉えられる。

SZ07 (Fig.29) SZ07はL-4区で検出した方形周溝墓である。四隅が途切れる形態と捉えられるが、南側の周溝は痕跡程度で全体形は明確でない。北側の周溝(SD42)は隣接するSZ08と共有しており、SZ08→SZ07の築造順序が推定できる。周溝内側の屈曲点を結んだ長さは南北10.2m、東西9.0mである。周溝は比較的浅いが、西側の周溝(SD41)は若干規模が大きい。

東側の周溝(SD40)から壺(27)が、西側の周溝(SD41)からも壺(29)が出土した。これらの個体を含め、SZ07からは27～31の遺物が出土している。

SZ08 (Fig.30) SZ08はL-3区で検出した方形周溝墓である。四隅が途切れる形態であり、四方向すべての周溝が検出できた。南側の周溝(SD42)はSZ07と、東側の周溝(SD45)はSZ10と共有している。周溝内側の屈曲点を結んだ長さは南北11.8m、東西12.2mであり、今回検出した弥生時代の方形周溝墓の中で最大規模である。周溝はいずれも幅が広く、明確に掘削されている。

西側の周溝(SD57)から口縁部の一部を打ち欠いた小型壺(34)が出土している。また、東側の周溝(SD45)の外側中ほどにおいて、土器棺墓(SK57)を確認した。検出位置は東側に接する方形周溝墓SZ10の北西隅にあたり、SZ10に伴う可能性が高い。

上述の個体を含め、SZ08からは32～39の遺物が出土している。

SZ09 (Fig.30) SZ09はM-3区で検出した方形周溝墓である。四隅が途切れる形態と捉えられるが、各辺の周溝の底部しか検出できず、全体形は不明瞭である。周溝内側の屈曲点を結んだ長さは南北6.6m、東西6.3mである。周溝は、中央部が深く掘削されている。

北側の周溝(SD47)から小型壺(40)が出土した。

SZ10 (Fig.31) SZ10はM-3区で検出した方形周溝墓である。四隅が途切れる形態と捉えられるが、北西隅の周溝は連続している。東側の周溝は発掘区外にある。西側の周溝(SD45)は隣接するSZ08と共有しており、SZ08→SZ10の築造順序が推定できる。周溝内側の屈曲点を結んだ長さは南

北8.7mである。周溝の幅は狭いが、北側の周溝（SD46）は断面が箱形に掘削されている。また、墳丘の北東側において土器棺墓を2基（SK57・60）確認した。

土器棺墓（SK57・60）からは、41～43の遺物が出土した。これらの個体以外に、SZ10にかかわる遺物は図示できなかった。

SK57（Fig.30） SZ10の墳丘北西隅で検出した土器棺墓である。土坑は直径70cmほどの円形を呈しているが、古墳時代の竪穴建物SB17が重なり、上面は既に失われていた。土器棺は大型の壺（43）を斜めに据え、上半部を大型の甕（42）が塞いでいたとみられる。蓋として用いた甕は破片になって、壺の内面に落ち込んでいた。

SK60（Fig.31） SZ10の北側周溝（SD46）中から検出した土器棺墓である。大型の壺（41）を斜めに据えていたことが分かる。上半部は、古墳時代の竪穴建物SB17が重なり、既に失われていた。おそらく、SK57と同様の構造をもっていたとみられる。

SZ11（Fig.31） SZ11はL-5区で検出した方形周溝墓である。方形周溝墓B群の中ではやや離れた位置に立地することから、別の群を構成するものとみることも可能である。周溝は四隅が途切れる形態であり、四方向すべての周溝が検出できた。ただし、後世の遺構形成が顕著で、遺存状態は悪い。周溝内側の屈曲点を結んだ長さは東西9.0m、南北8.7mである。SZ11に直接的に伴う遺物は確認できなかったが、周溝形態から弥生時代中期末葉の遺構と捉えられる。

方形周溝墓B群出土遺物（Fig.32・33） 27～43は方形周溝墓B群から出土した遺物である。27～31はSZ07から出土した遺物である。27は受口状口縁の壺である。口縁外面は刺突文、頸部の屈曲には櫛描刺突による直線文が入れている。28も受口状口縁の壺である。口縁外面には斜格子文がみられる。29は口縁を欠損する壺である。肩部には横方向の直線文の下に、斜格子文と縦方向の波状文がみられる。30は壺底部、31は甕の脚台部である。

32～39はSZ08から出土した遺物である。32は口縁端部に刺突をもつ壺の口縁部、33は先述の29と同じ模様構成をもつ壺である。34は、口縁端部を打ち欠いた小型壺である。35は甕の口縁、38・39は甕の脚台部である。

40はSZ09から出土した小型の壺である。口縁端部を僅かに打ち欠いているようにも見えるが、後世の破損の可能性もある。

41はSZ10に伴う土器棺墓SK60から出土した遺物である。土器棺として使用されたものとみられ、胴部最大径37cmの大型の壺である。

42・43はSZ10に伴う土器棺墓SK57から出土した遺物である。42は土器棺の蓋、43は土器棺の身として使用されたものである。42は最大径35cmの大型の台付甕であり、脚台部を欠損する。土器棺として転用する時には既に脚台部は欠損していたものとみられる。43は壺である。最大径59cm、遺存高54cmの大型品である。肩部には直線文と波状文が交互に入れられている。

以上の遺物群は、弥生時代中期末葉に位置づけてよい。A群出土遺物の26に加え、29・33など壺の肩部に類似した模様構成が認められ、地域的特性として捉えられる可能性がある。また、口縁を打ち欠いた小型壺は、可能性のある個体を含めると、A群出土の20に加え、34・40がある。方形周溝墓A・B群には共通する墳墓祭祀が行われていたとみてよいだろう。

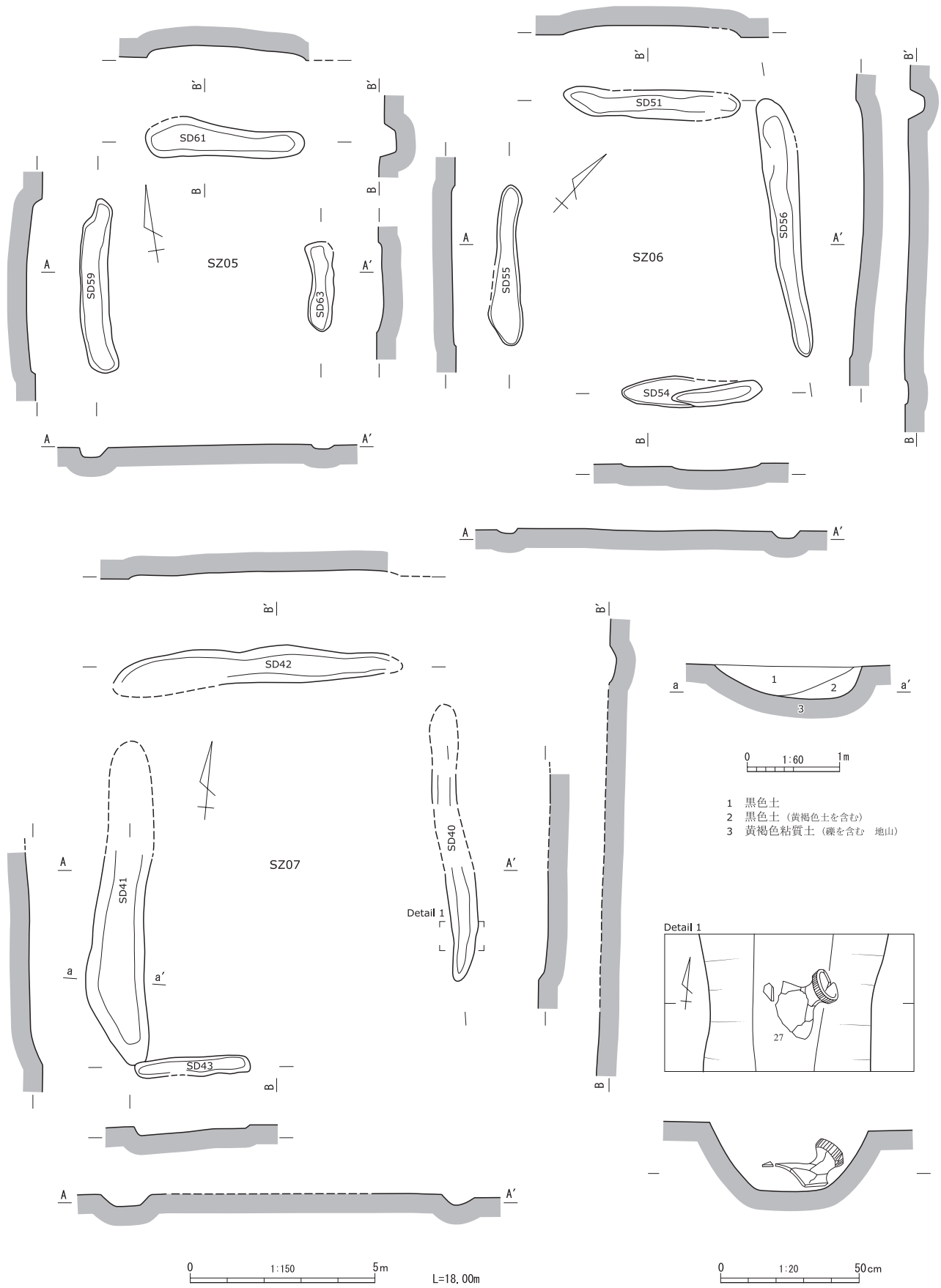


Fig.29 SZ05・06・07実測図

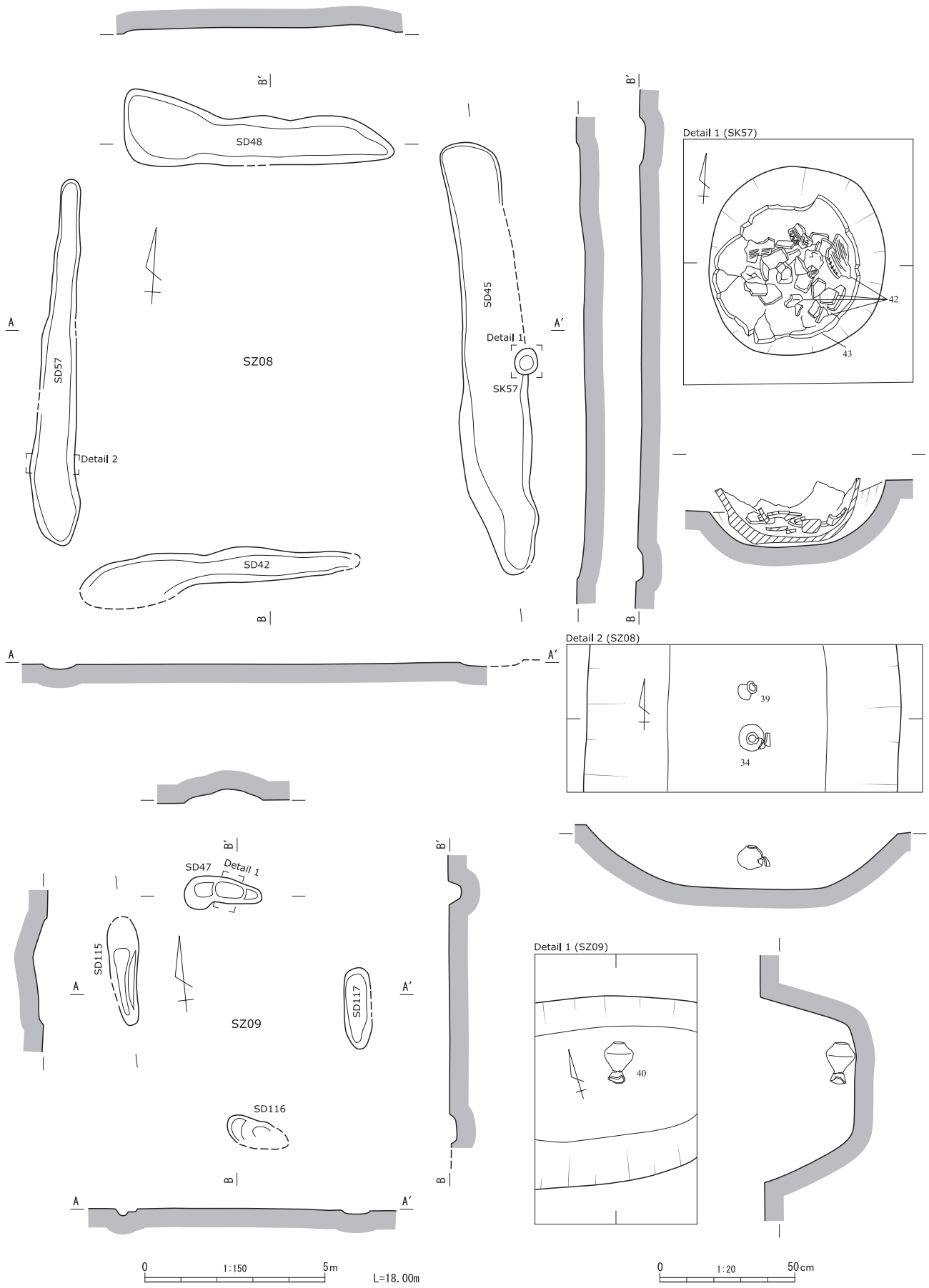


Fig.30 SZ08・09 実測図

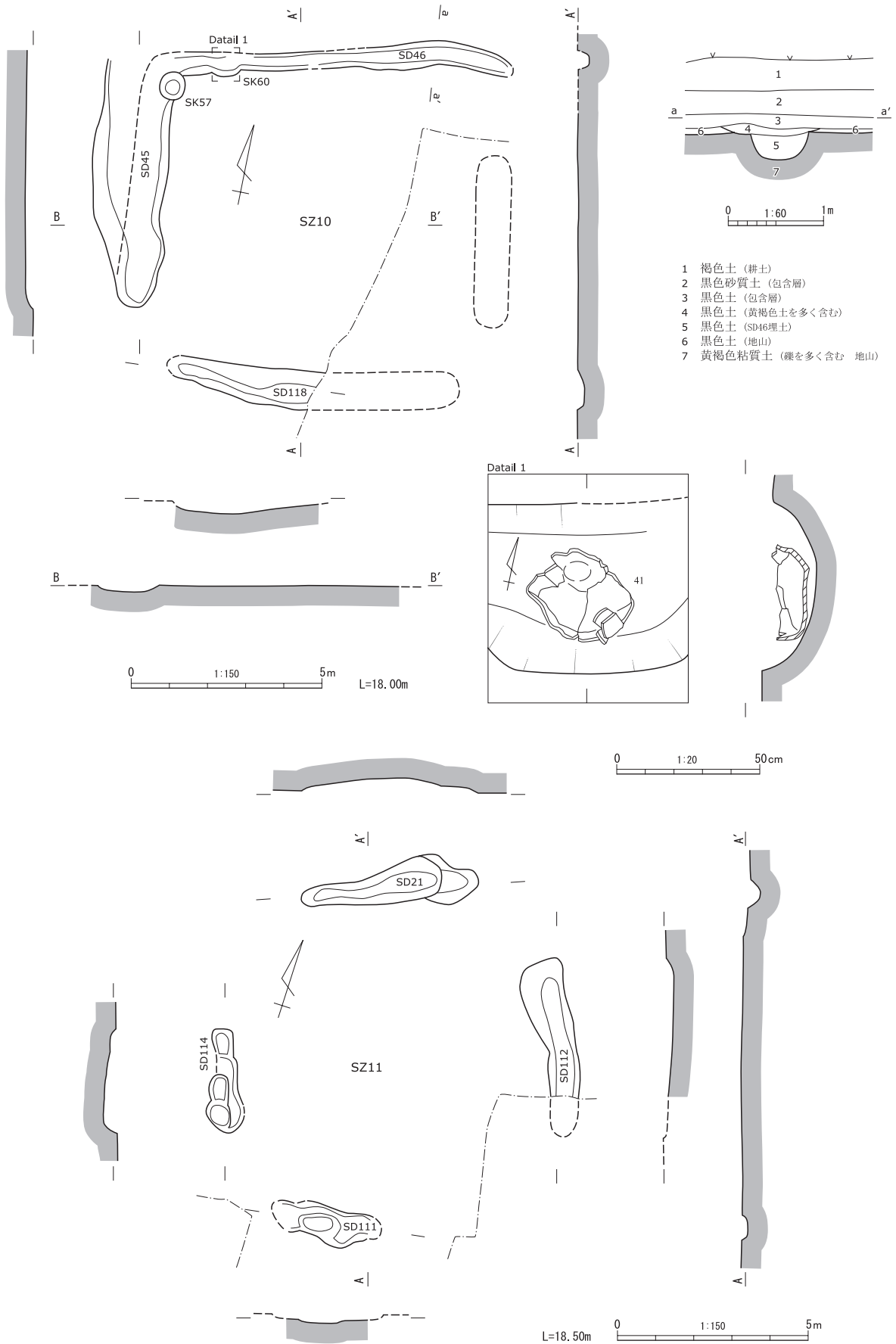


Fig.31 SZ10・11 実測図

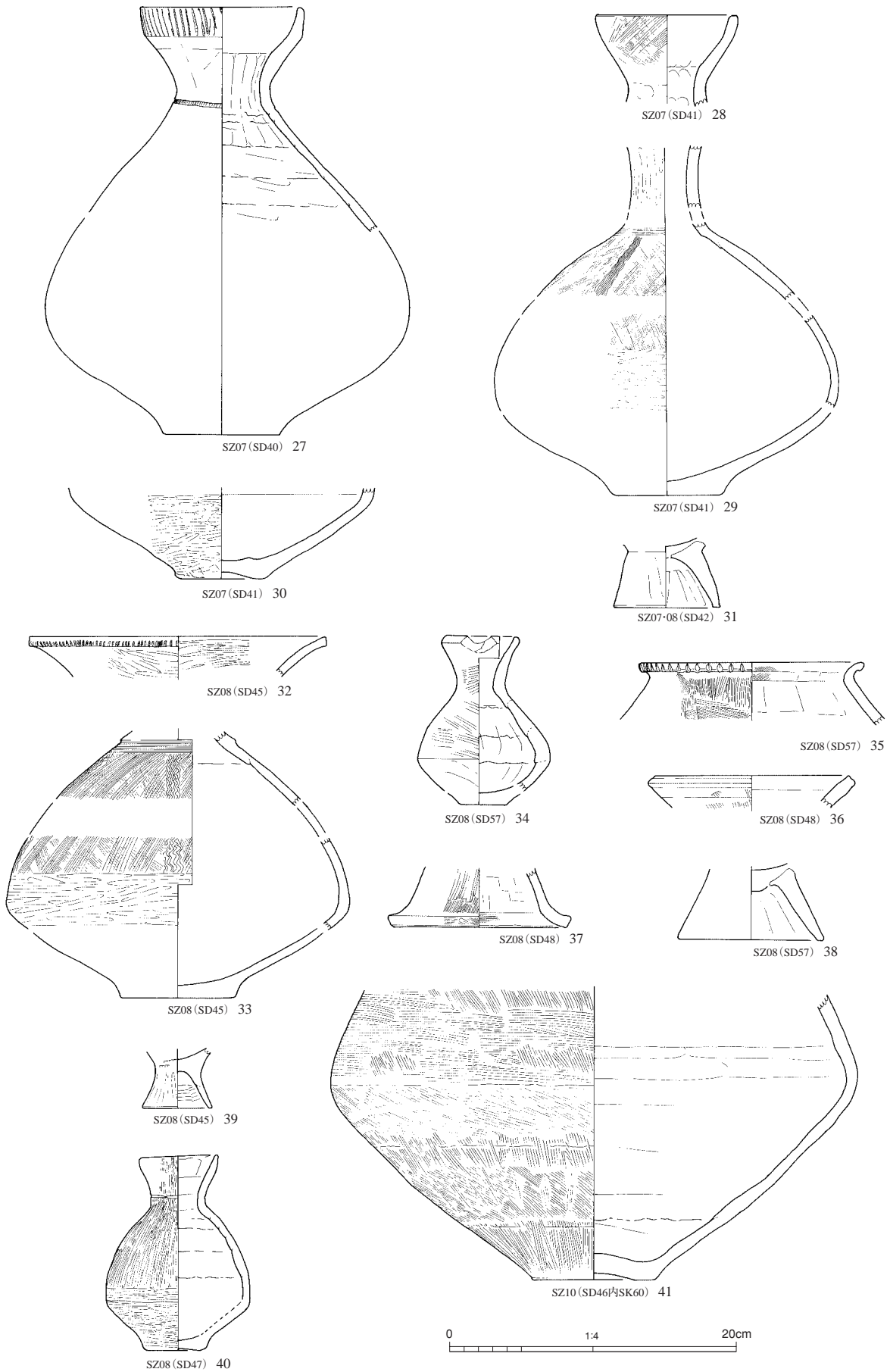


Fig.32 弥生時代 方形周溝墓B群 出土遺物

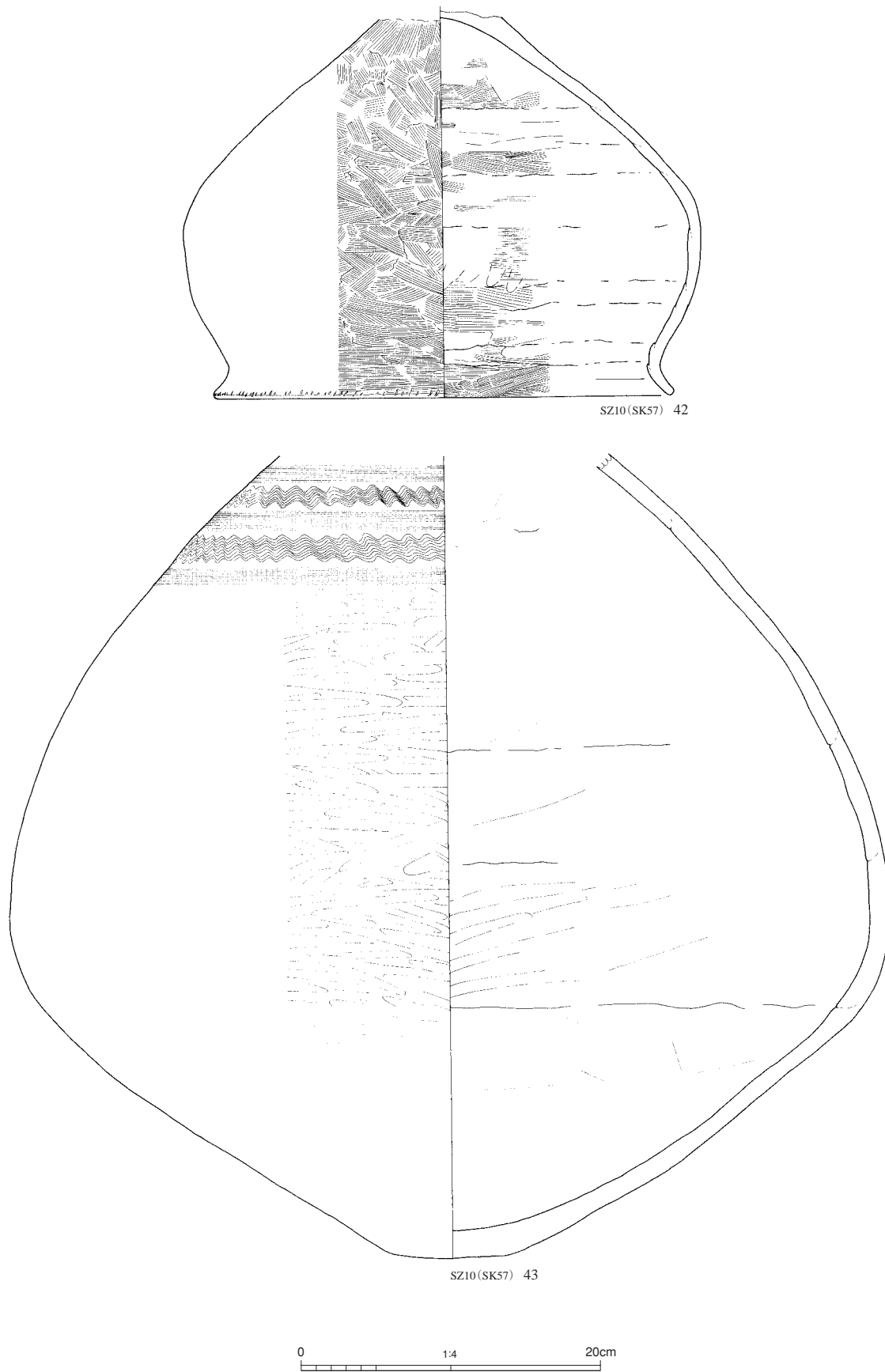


Fig.33 SK57 出土遺物

③ 方形周溝墓C群

群構成 方形周溝墓C群は高位面の東側に分布する。SZ14・15・17の3基が該当する。これら3基の方形周溝墓は、出土遺物は僅かであるため、明確な築造時期を示すことが難しい。ただし、四隅が途切れる周溝形態（SZ14・15）や古墳時代前期の方形周溝墓によって破壊されていること（SZ17）から、弥生時代の周溝墓とみられる。

SZ14 (Fig.35) SZ14はH-4区で検出した方形周溝墓である。四隅が途切れる形態であり、四方向すべての周溝が検出できた。北側の周溝（SD67）はSZ15と共有している。周溝内側の屈曲点を結んだ長さは東西11.7m、南北12.4mである。周溝はいずれも深く、明確に掘削されている。

北側の周溝（SD67）から甕（48）が出土している。この個体を含め、SZ14からは44・45、47・48の遺物が出土している（なお、47・48は北接するSZ15に伴う遺物と解釈することもできる）。出土遺物から時期を明確にすることが難しいが、SZ14は、弥生時代中期末葉から後期前半頃の築造と考えられる。

SZ15 (Fig.35) SZ15はG-4区で検出した方形周溝墓である。四隅が途切れる形態とみられ、南側の周溝（SD67）と西側の周溝（SD66）の一部が検出できた。南側の周溝（SD67）はSZ14と共有している。全体形が不明確なため、前後関係は不明である。

南側の周溝（SD67）から甕（48）が出土している。この個体を含め、SZ15からは、46～48の遺物が出土している。築造時期は、SZ14と同様に弥生時代中期末葉から後期前半頃の築造とみられる。周溝の形態は不明瞭であり、四隅が途切れる形態であった可能性がある。

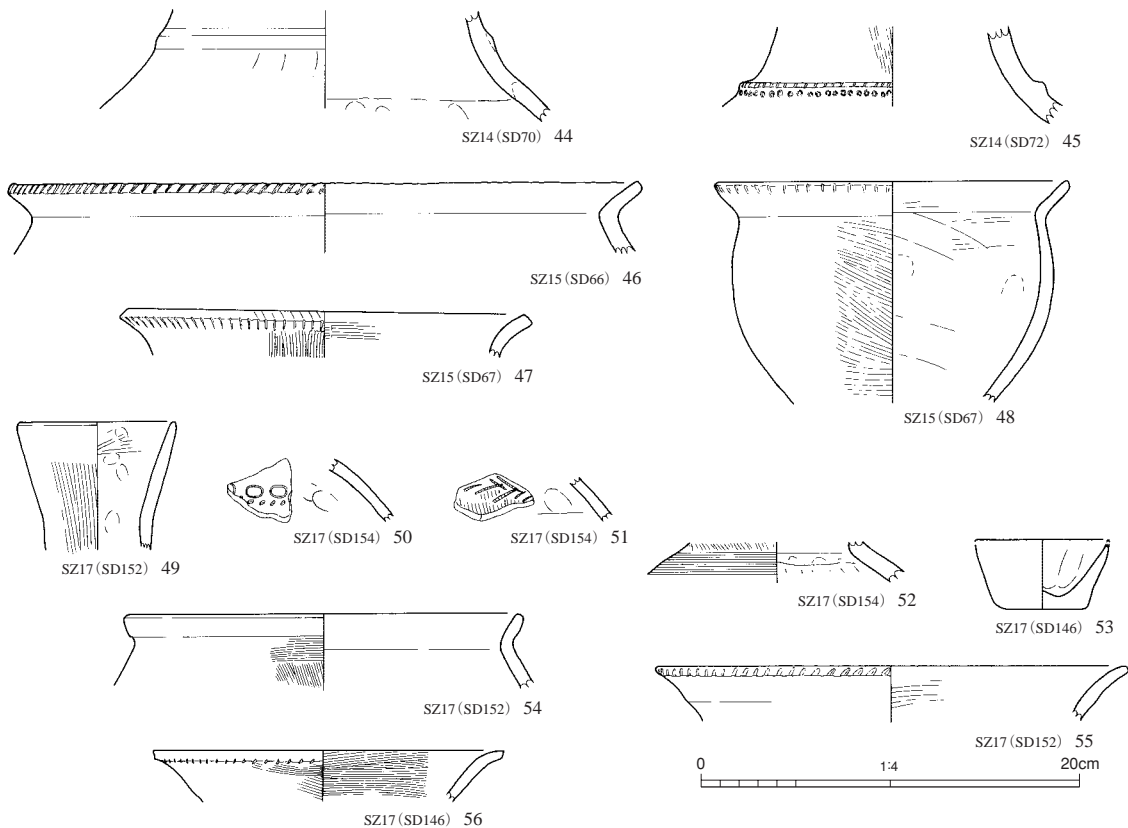


Fig.34 弥生時代 方形周溝墓C群 出土遺物

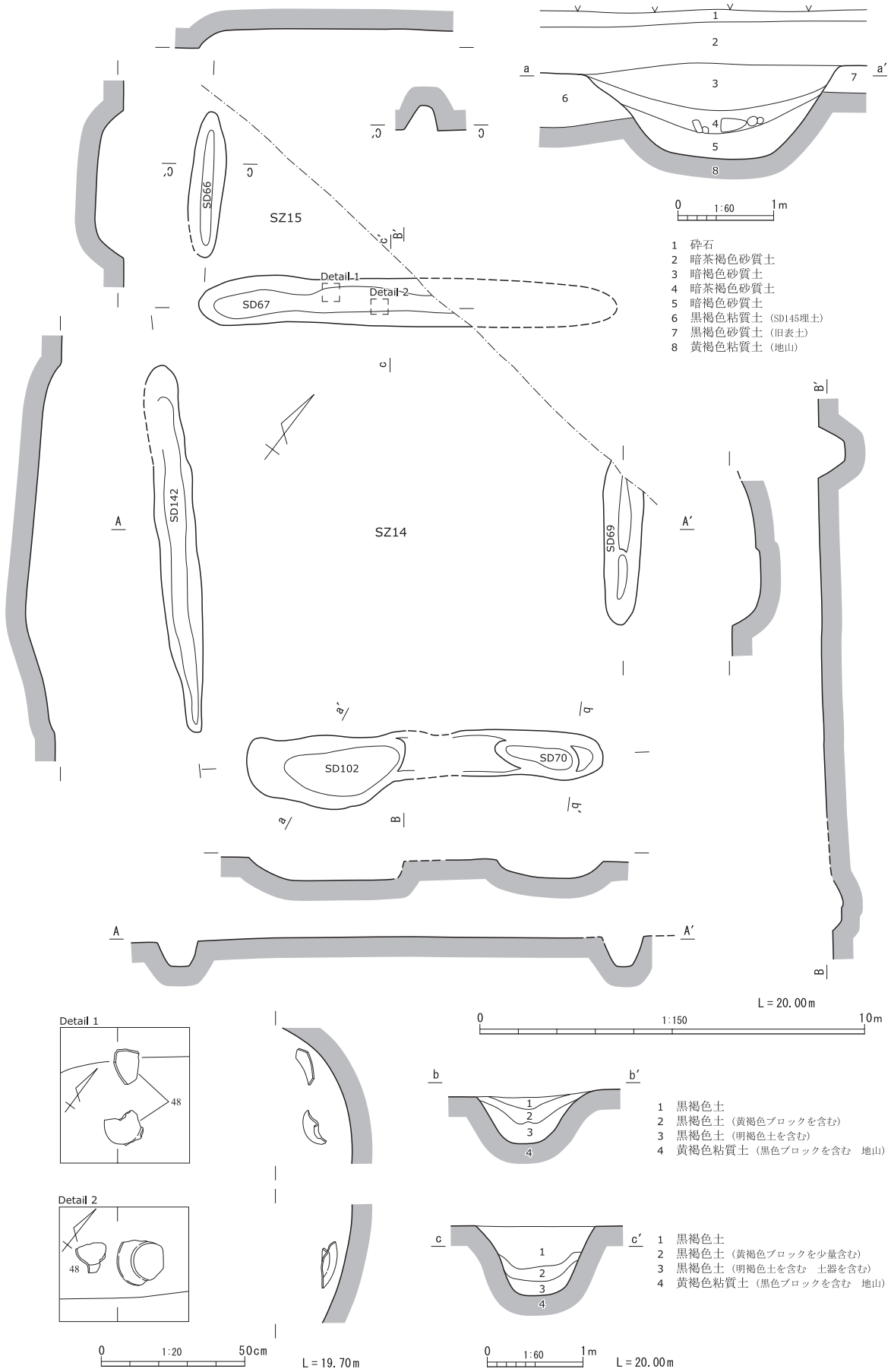


Fig.35 SZ14・15実測図

SZ17 (Fig.94) SZ17はG-4区で検出した方形周溝墓である。東側、南側、北側の周溝が検出できた。西側の周溝は確認できなかったが、当初より浅かった可能性がある。周溝内側の屈曲点を結んだ長さは南北7.5mである。

SZ17からは49～56の遺物が出土している。49が遺構に伴う遺物とみられる。50～56にかんしては、いずれも小破片であること、古墳時代前期の竪穴建物や方形周溝墓が濃密に分布していることから、混入品とみられる。出土遺物から弥生時代中期末葉の遺構と捉えられる。なお、古墳時代前期の方形周溝墓SZ16が重なっており、方形周溝墓どうしの切り合いがみられる。

方形周溝墓C群出土遺物 (Fig.34) 44～56は方形周溝墓C群から出土した遺物である。44～48はSZ14・15から出土した。44・45は肩部の屈曲が緩やかな壺である。46～48は甕である。口縁には刺突文がみられる。中期末葉から後期初頭頃の遺物とみられる。

49～56はSZ17から出土した遺物である。49は弥生時代中期末葉に、50～56は古墳時代前期に位置づけられる。

(4) その他の遺構・遺物

分布 弥生時代の小穴や土坑は少ない。唯一、弥生中期末葉の壺がまとまって出土したSP258が目撃できる程度である。また、古墳時代前期の土器廃棄土坑SX01から、弥生中期前葉の土器が数点出土している。この時期の土器はこの場所以外から出土せず、同時期の遺構も不明確である。

SP258 (Fig.36) SP258はK-5区において検出した遺構である。直径70cm程度のほぼ円形を呈し、2点以上の壺(62～64)が横に倒れた状態で出土した。SP258は方形周溝墓の空隙地にあり、墓域と関連する遺構である可能性がある。出土遺物から、中期末葉の遺構と捉えられる。

遺構・包含層出土土器 (Fig.37) 57～77は遺構や包含層などから出土した弥生土器である。弥生時代中期の遺物のみを出土する小穴・土坑には、上述のSP258のほか、SP63・99・358・758が抽出できる程度である。このほかの弥生時代の遺物は後世の遺構から混入した状態で出土した。

57～59はSX01から出土したもので、混入品と捉えられる。いずれも壺の口縁で、体部には条痕文がみられる。中期前葉の丸子式に属するものであるが、この3個体以外にこの時代の遺物は認められない。

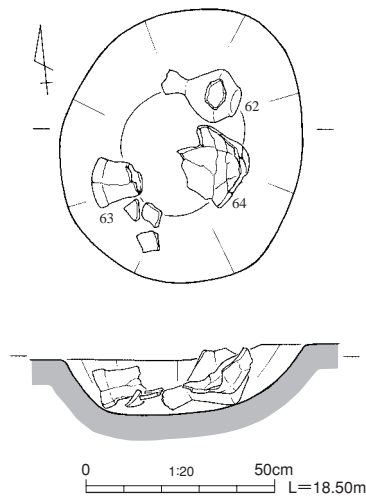


Fig.36 SP258 実測図

60～66は弥生時代の小穴・土坑から出土したもの、67～77は後世の遺構もしくは包含層から出土したものである。いずれも弥生時代中期末葉の土器である。

弥生時代の石器 (Fig.38) 弥生時代の石器は同時代の遺構から出土したものがない。

78～82は磨製石鏃である。緑色片岩や粘板岩を用いており、すべて基部をもたない。78や81は、未成品と考えられる。79はほぼ完形で表面には丁寧な研磨がみられる。両側の刃部側面が欠けているが、矢柄装着のための細工である可能性がある。83・84は磨製石斧で、83は未成品とみられる。

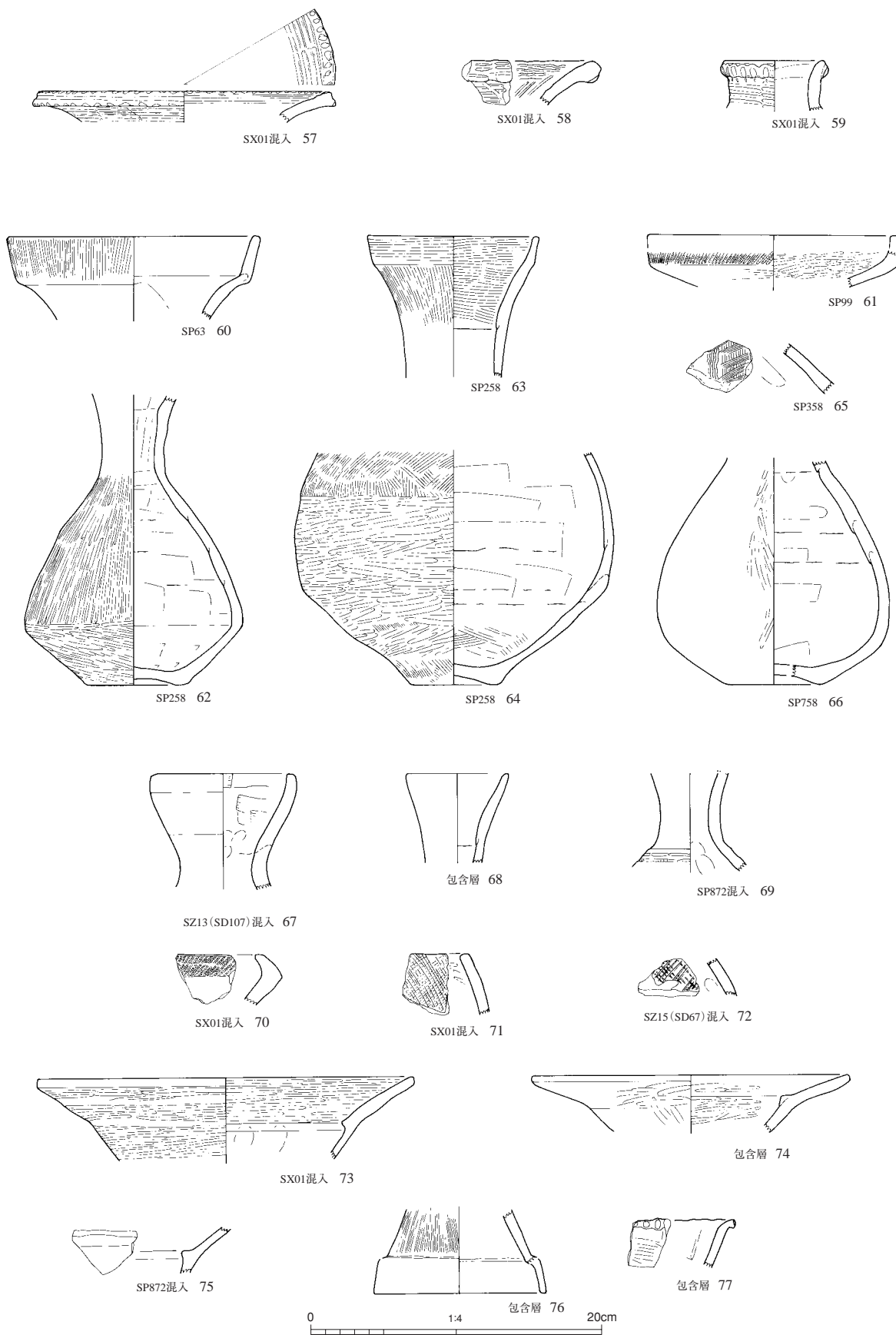


Fig.37 弥生時代 出土遺物

Tab.6 弥生時代 石器

Fig. 番号	グリッド	出土位置	種 別	長さ(cm)	幅(cm)	厚み(cm)	重さ(g)	石材	備考
38	78	J-4 包含層	磨製石鏃 未製品	5.8	2.7	0.4	8.1	緑色片岩	完形
38	79	G-5 SD148(混入)	磨製石鏃	4.7	2.4	0.4	5.4	粘板岩	左逆刺欠
38	80	J-5 包含層	磨製石鏃	3.8	2.4	0.3	3.6	粘板岩	刃先・両逆刺欠
38	81	E-1 SD134(混入)	磨製石鏃 未成品	3.5	2.2	0.4	4.0	蛇文岩	完形
38	82	J-6 包含層	磨製石鏃	3.5	1.6	0.2	1.6	緑色片岩	両脚部欠
38	83	E-3 SD155(混入)	打製石斧 未製品	8.5	6.6	3.7	332.0	輝緑岩	基部欠
38	84	K-5 SX01(混入)	打製石斧	8.1	4.6	3.2	237.1	輝緑岩	基部欠

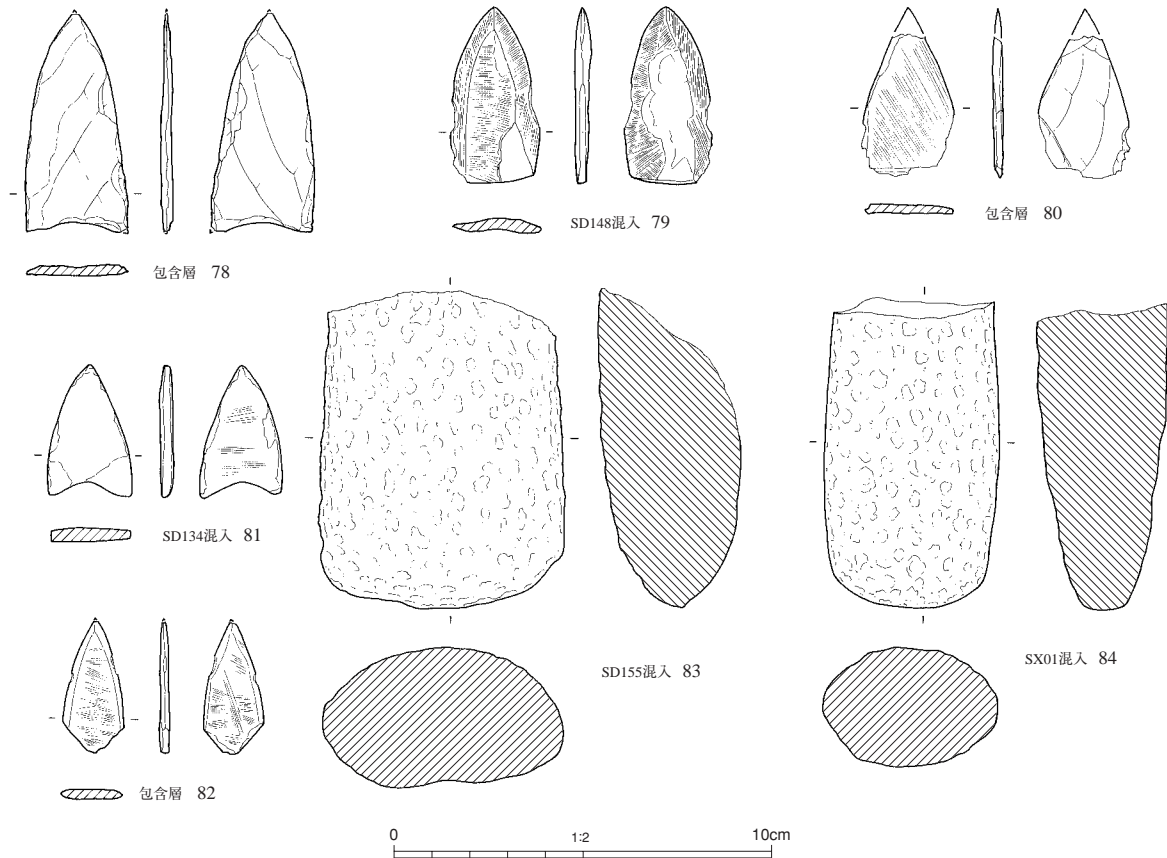


Fig.38 弥生時代 石器

(5) 小 結

弥生時代の検出遺構は、竪穴建物と方形周溝墓である。これらの遺構は、いずれも中期末葉（紀元前後頃）に中心がある。竪穴建物は高位面に数棟分確認できたのみで、低位面では検出できなかった。低位面では方形周溝墓が高密度で分布するので、近隣に居住域があるとみてよいだろう。

竪穴建物は隅丸長方形を呈するもので、同時代の住居として一般的な形態といえる。方形周溝墓は四隅が途切れる形態が基本とみられるが、変異形態も多い。周溝を共有するものや、周溝の一辺を浅く掘削したものなどがあり、築造順序がうかがえるものがある。やや大型の方形周溝墓を中心に、規模を小型化させながら数基の周溝墓が隣接して構築されるとみられよう。方形周溝墓の裾には、土器棺墓が営まれる事例も認められた。

なお、弥生時代中期前葉の土器の破片が数片みられるが、同時期の遺構は未検出である。

3 古墳時代

(1) 検出遺構の概観

遺構分布 弥生時代終末期から古墳時代前期の元屋敷式期（庄内式期、布留式古相期並行）の集落が、調査対象地の全域で確認できた。この時期の集落は、連続性が高く、弥生時代と古墳時代を鮮明に分けることが難しい。本書では、元屋敷式の初頭（元屋敷Ⅰ式期）以降から便宜的に古墳時代として記述を進める。

古墳時代の集落で確認した主な遺構は、大型の土器廃棄土坑（SX01）1基、竪穴建物61棟、方形周溝墓14基である。また、同時期の土坑や小穴も多数にのぼり北神宮寺遺跡の主体的な遺構群を構成している。古墳時代の集落は低位面、高位面の全域にわたり、調査対象地の外側にも展開していることが明瞭である。遺構の存続時期は、元屋敷Ⅰ式期から、元屋敷Ⅱ式期にわたる。古墳時代の集落は元屋敷Ⅲ式期に至ると急速に縮小し、古墳時代中期には完全に廃絶している。

時期区分 古墳時代の集落の内容を記述するにあたり、浜松市南部地域における土器編年を機軸に記述を進める。当地域の弥生時代終末期から古墳時代前期の土器様式は、元屋敷式に属し、組成の変化から元屋敷Ⅰ～Ⅲ式の三段階に分離できる（鈴木2002・2004）。さらに、元屋敷Ⅰ・Ⅱ式は数段階に細分できるが、北神宮寺遺跡の出土品では分析資料に限界があり、細分案に即した記述が困難である。そこで、以下の記述では、元屋敷Ⅰ式古段階（元屋敷Ⅰ式1・2段階）、元屋敷Ⅰ式新段階（元屋敷Ⅰ式3・4段階）、元屋敷Ⅱ式古段階（元屋敷Ⅱ式1段階）、元屋敷Ⅱ式新段階（元屋敷Ⅱ式2段階）、元屋敷Ⅲ式といった区分名称を用いたい。

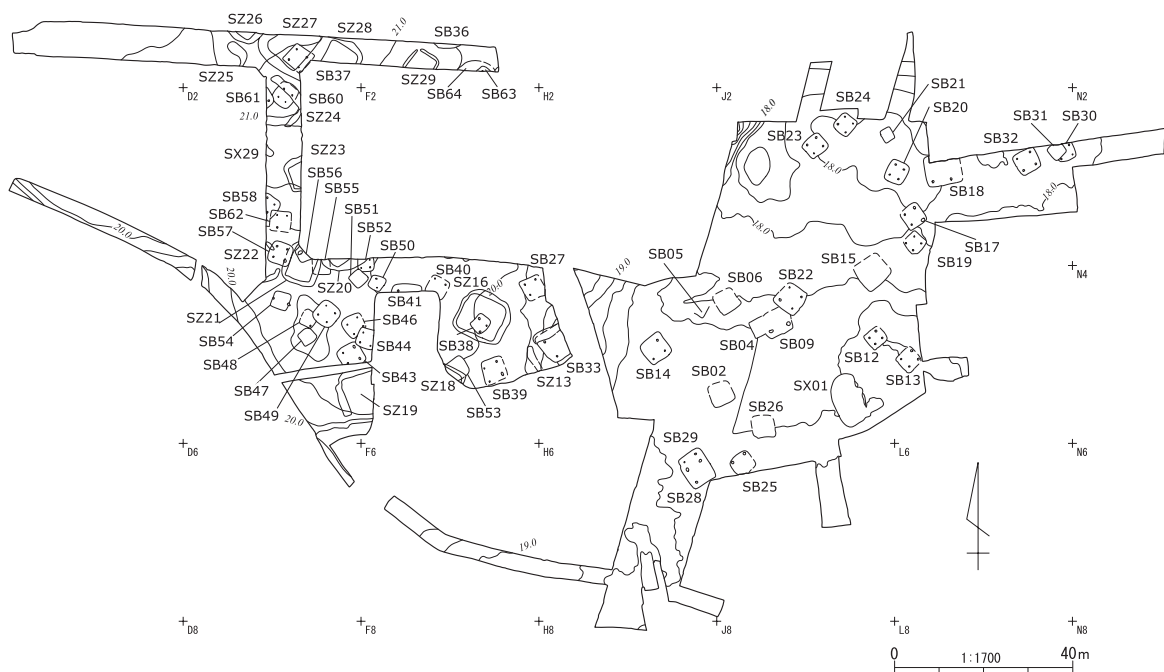


Fig.39 古墳時代 遺構分布図

(2) 土器廃棄土坑 SX01

概要 土器廃棄土坑SX01はK-5区で検出した大型の土坑である。土坑中から大量の土器が出土した。破損した土器や生活残滓などを廃棄するために掘削された遺構と捉えられる。出土した土器の時代幅は、元屋敷Ⅰ式古段階から元屋敷Ⅱ式新段階に至り、北神宮寺遺跡における古墳時代集落の存続期間とおおむね一致する。集落の造営初期に土坑が掘削され、一定期間、廃棄土坑として機能していたことが分かる。

遺構の規模が大きいこともあり、出土した遺物の量は多い。出土遺物の大半は土器で、総数517点を図示する。なお、土坑中からは、石器や鉄器などは出土しなかった。

土坑の形態 (Fig.40) SX01は、長軸11.5m、短軸6.5m、検出面からの深さ0.7mであり、平面形は不定形ながら、楕円形を呈する。中心的な深い掘り込みが北側にあり、その規模は長軸9.0mほどである。南側は底面が浅く、緩斜面が続く。中心部分の端部は比較的深く、断面形は箱形を呈している。また、土坑の北側を中心に、底面よりも深く土坑状に掘削されている部分が3箇所ほどみられる。主体的な居住域は廃棄土坑の北側にあることから、主に使用される側を丁寧に、深く掘削していることが分かる。



Fig.40 SX01 実測図

埋土堆積状況 (Fig.41) SX01の埋土は上下2層に分離できる。上層の埋土は包含層との識別が困難な暗黒褐色土で、下層の埋土は暗黒褐色土を主体に黄褐色土がブロック状に混入している。上下層ともに炭化物が多く含まれていることから、土坑中には土器のほかに有機物も多く投棄されていたものとみられる。

遺物出土状況 (Fig.41~43) 土坑内からは土器、炭化物、礫が多く出土した。礫は地山中に含まれているもので、特別な加工がみられるものはない。土坑の西側は土器が若干少ない傾向があるが、土坑内のほぼ全域で土器が出土している。土器は小型品を除いて碎片化が著しく、完形に近い個体を廃棄したものではない。また、埋土は上下2層に分離できるが、土器の新古は上下の各層に直截的に対応しない。

出土遺物 (Fig.44~63) SX01から出土した遺物をFig.44~63に示す。出土遺物には総体として時期幅があるが、量は膨大で、器種も豊富である。

1~145は壺である。口縁形態から、外反口縁(1~23)、直立口縁(24~53)、内彎口縁(54~68)、折返口縁(73~101)、内彎複合口縁(102~113)、二重口縁(114~122)の各形態に分離できる。直立口縁の壺のうち、45~48、51~53は中・小型の直口壺として独立した器種とみることもできる。また、口縁部の形状が明らかでないが、肩部に模様帯をもつ個体を123~145に示す。模様帯が確認できるものは、直線文と波状文、刺突文が主体である。

146~160は小型壺である。口縁形態は外反口縁(146)、直立口縁(147~149)、内彎口縁(150・151)などの多様性がある。152・153は瓢壺である。

161~175は鉢もしくは、その類型品である。165は口縁の四方向に穿孔をもつ鉢である。北神宮寺遺跡では同様の形態としてSB32から出土したFig.78-168がある。168・170は精緻なヨコミガキが施された小型丸底土器、167はその類似品とみられる。また、171はタタキをもつ小型鉢である。

176~249は高坏である。有稜高坏(176~198)、有稜高坏等の脚部(201~226)、開脚高坏(227~233)、椀形小型高坏(234~237)、有段高坏(238)、開脚高坏の脚部(242~245)、椀形小型高坏の脚部(246~249)が認められる。

250~258は器台である。盃形器台(250・251)、屈曲外反器台(252・253)、椀形器台(254・255)が認められる。256~258は器台の脚部である。

259~517は甕である。く字状口縁台付甕(以下、く字甕と略す)が主体で、口縁端部に刺突文をもつもの(259~325)と刺突文をもたないもの(326~470)がある。図示した個体における両者の比率は67:145であるが、実際は刺突文をもたないものの比率がさらに高いとみられる。口縁部に刺突文をもつ甕には、内彎口縁のもの(269・279・291・316)が含まれる。また、口縁端部に刺突文をもたない335~337は大型の鉢状を呈する甕とみられる。471は台付甕の小型品である。472は平底の甕で表面がイタナデによって調整されている。473~477はS字状口縁台付甕(以下、S字甕と略す)である。473はS字甕C類、474はS字甕B類に分類できる。478~517は台付甕の脚台部である。478のみ体部との接合部に粘土帯を巡らす痕跡を残す。

以上の遺物群は、元屋敷Ⅰ式古段階から元屋敷Ⅱ式新段階までの時期幅がある。出土量は多く、元屋敷式の代表的な器種がほぼ揃っている。

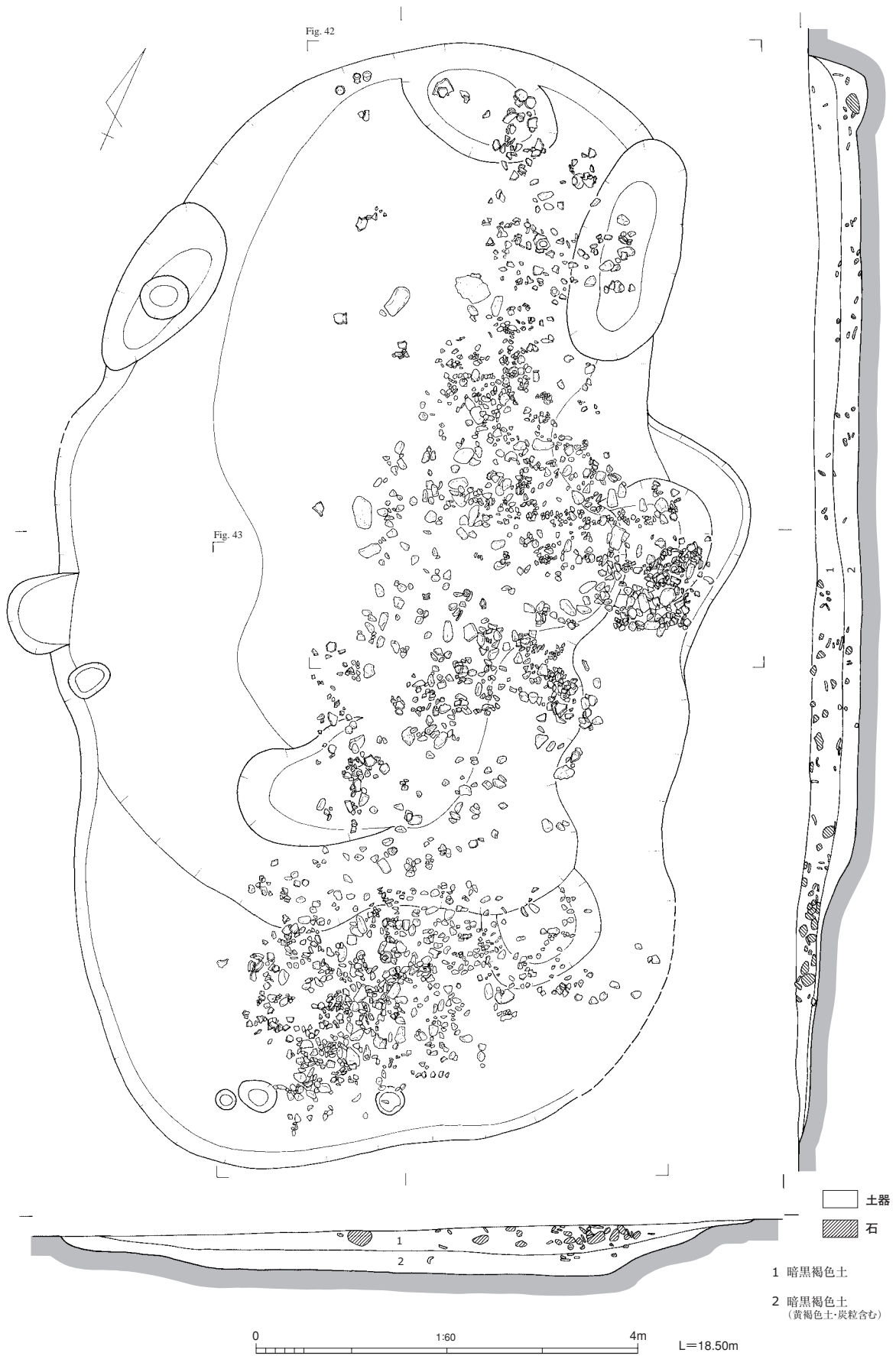


Fig.41 SX01 遺物出土状態



Fig.42 SX01 遺物詳細出土状態 (1)



Fig.43 SX01 遺物詳細出土状態 (2)

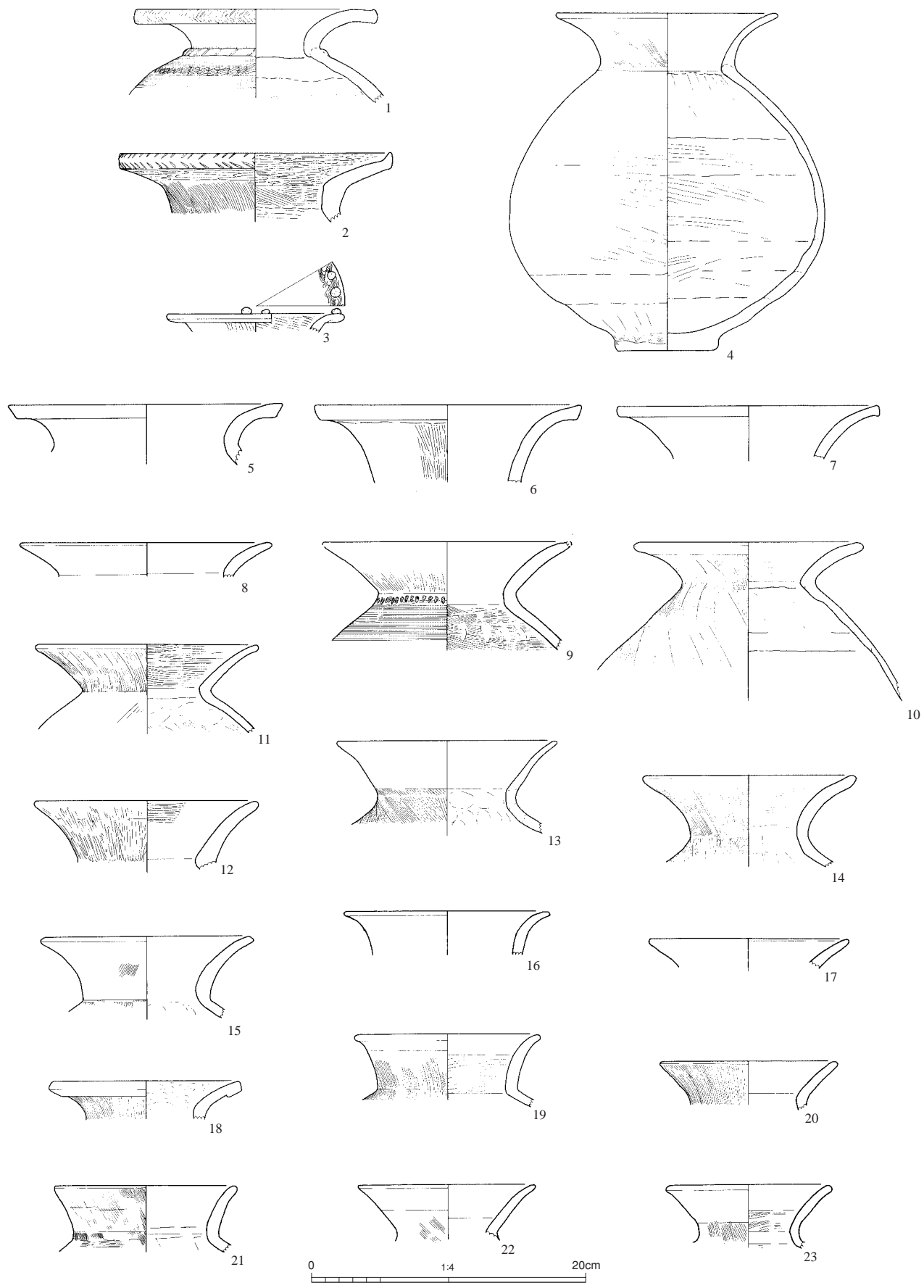


Fig.44 SX01 出土遺物 (1)

3 古墳時代

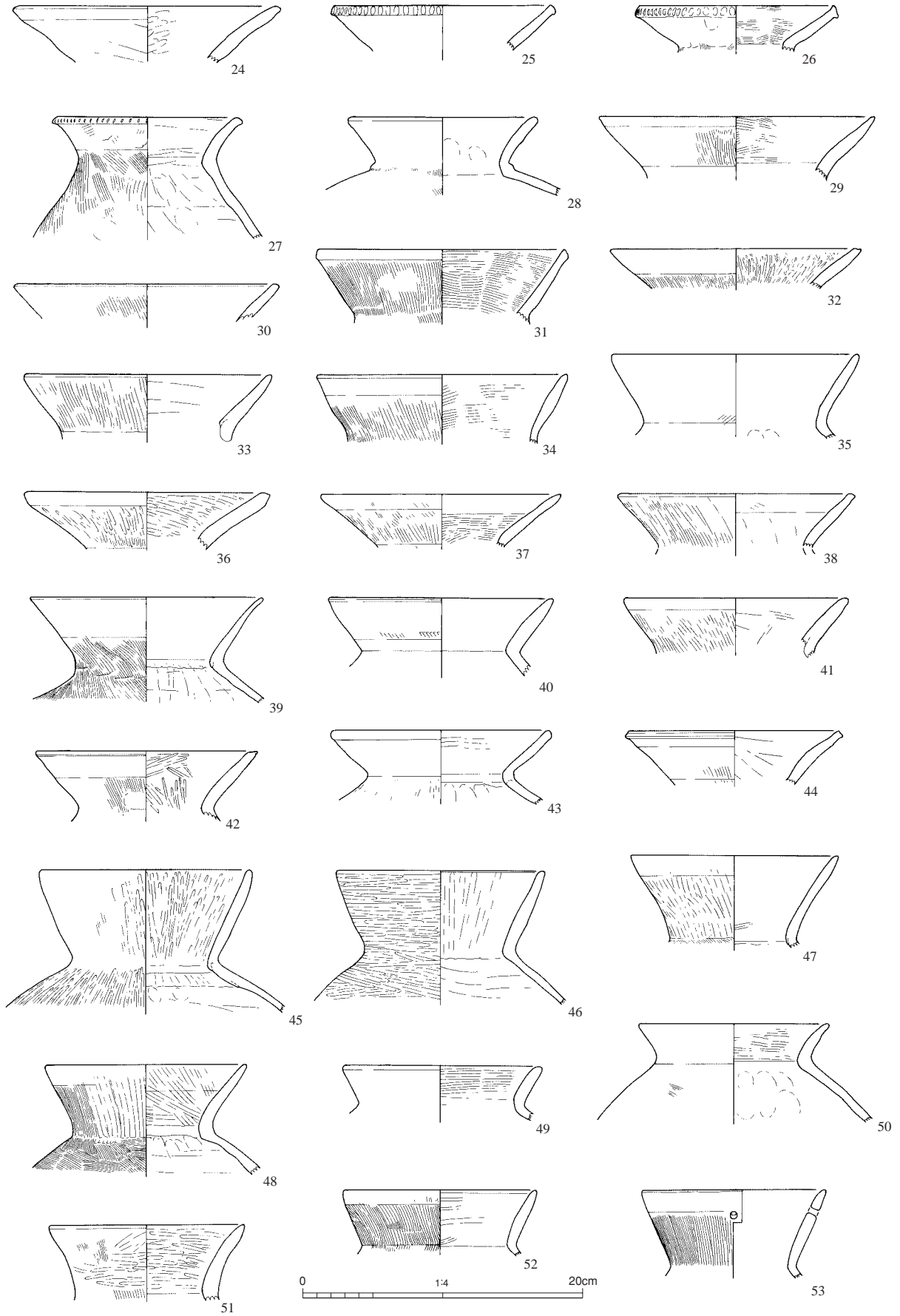


Fig.45 SX01 出土遺物 (2)

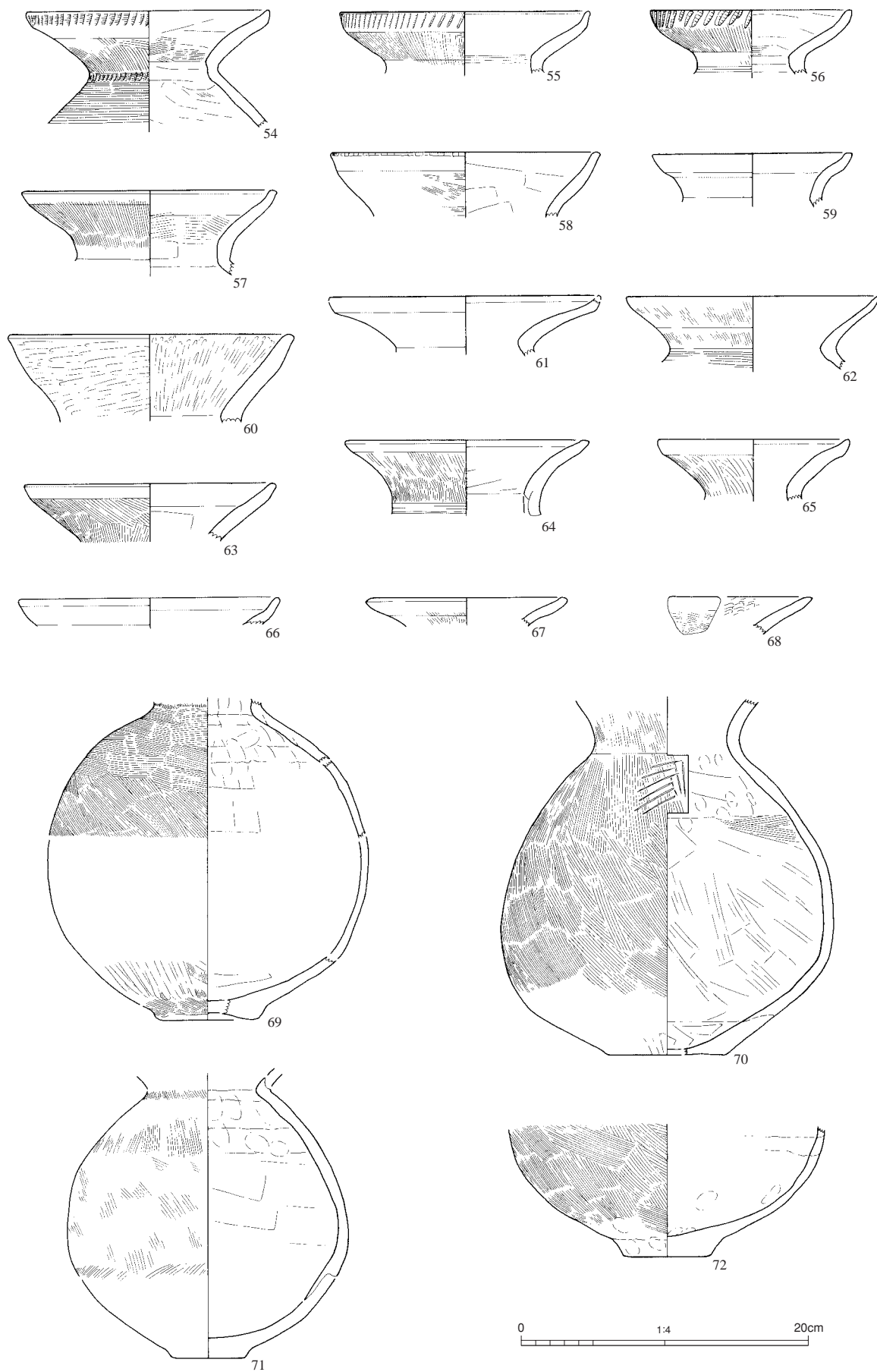


Fig.46 SX01 出土遺物 (3)

3 古墳時代

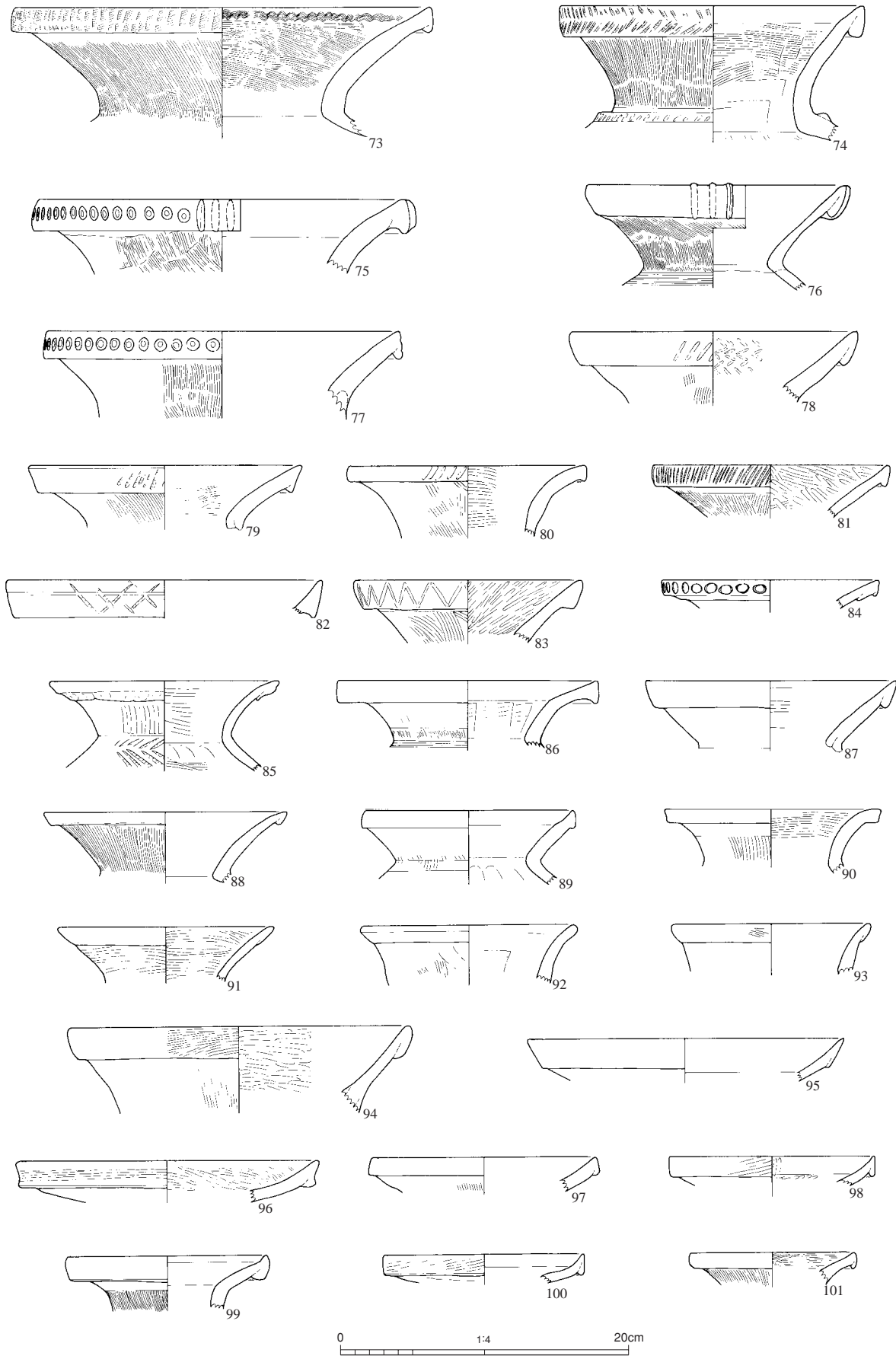


Fig.47 SX01 出土遺物 (4)

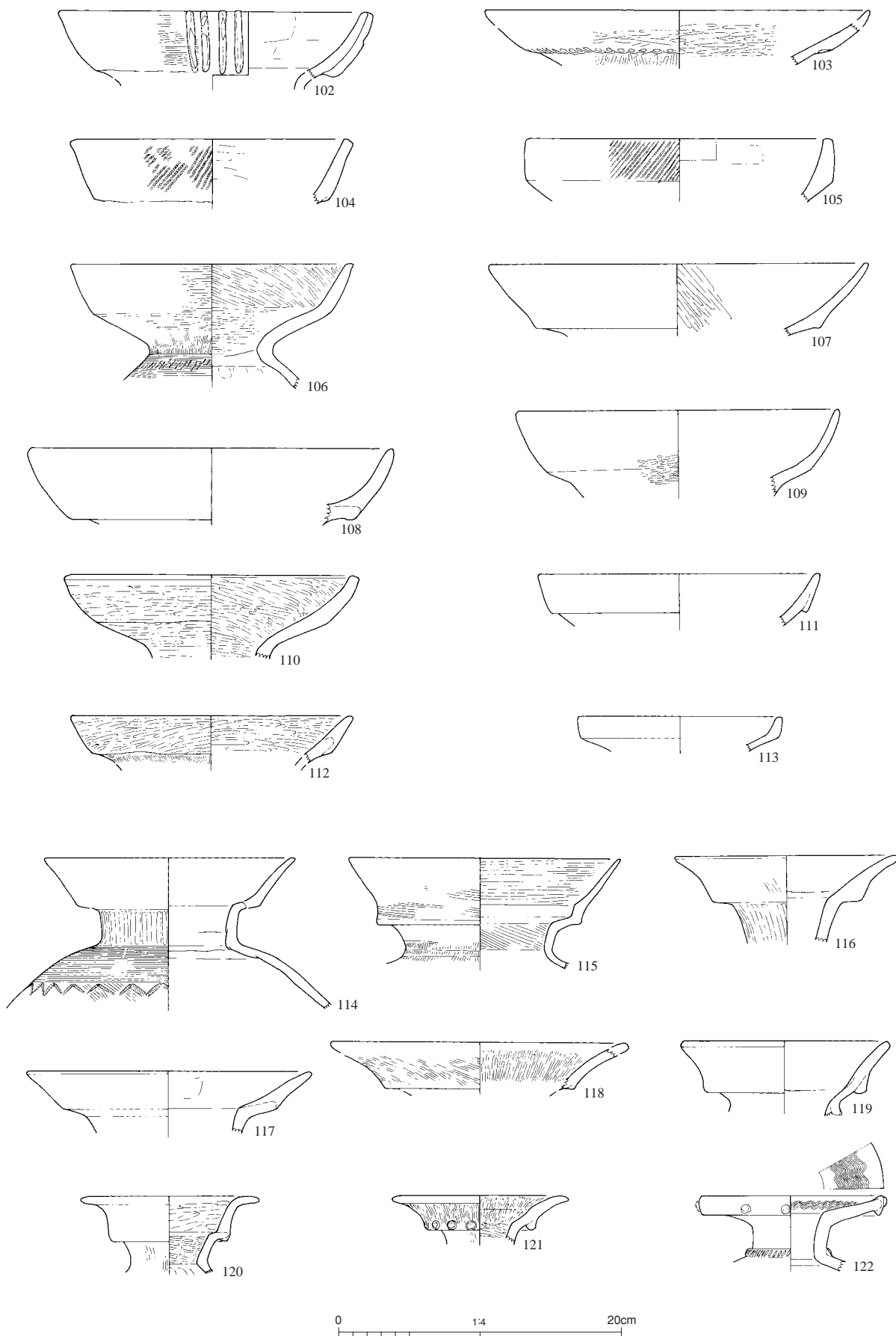


Fig.48 SX01 出土遺物 (5)

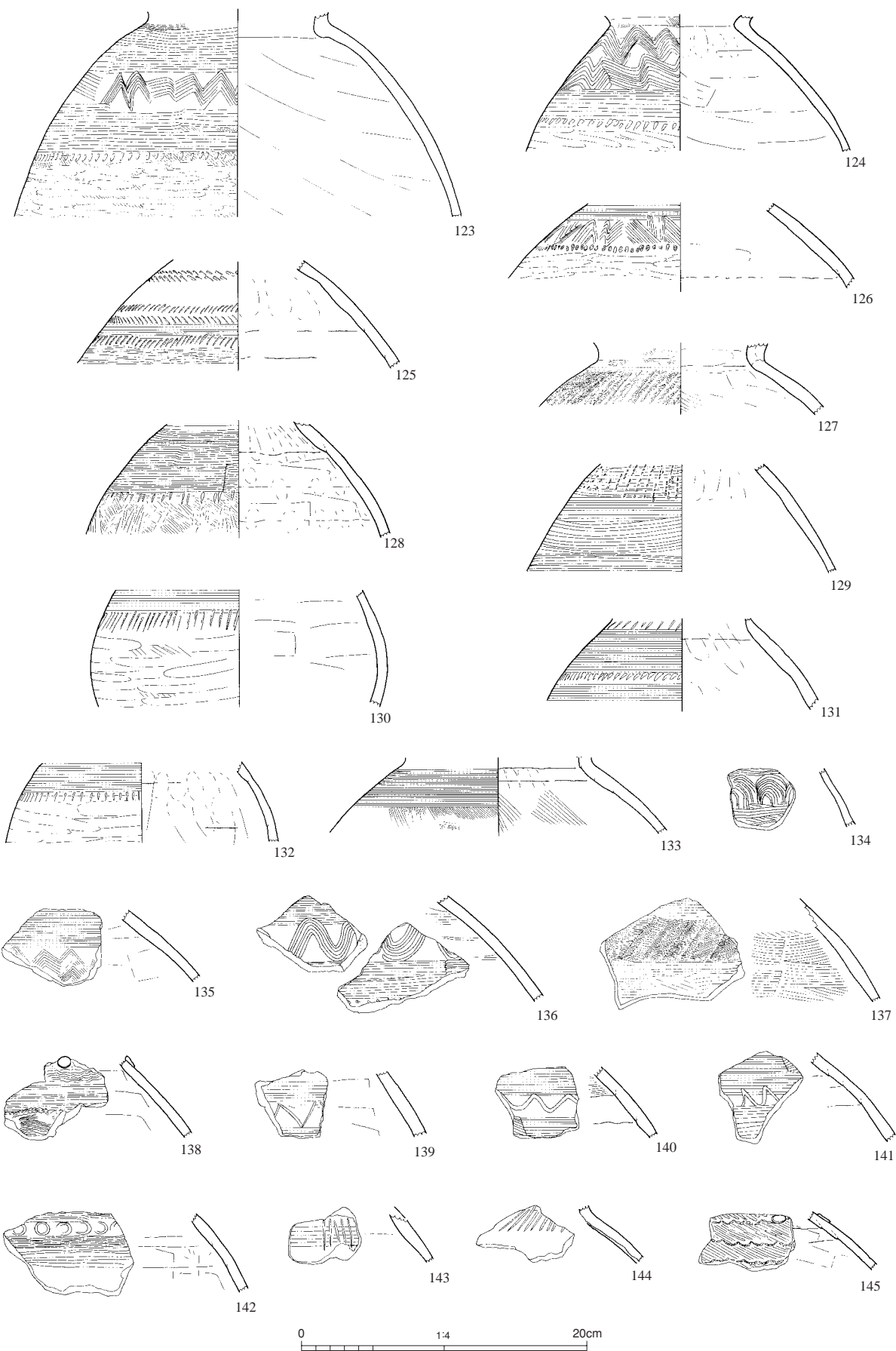


Fig.49 SX01 出土遺物 (6)

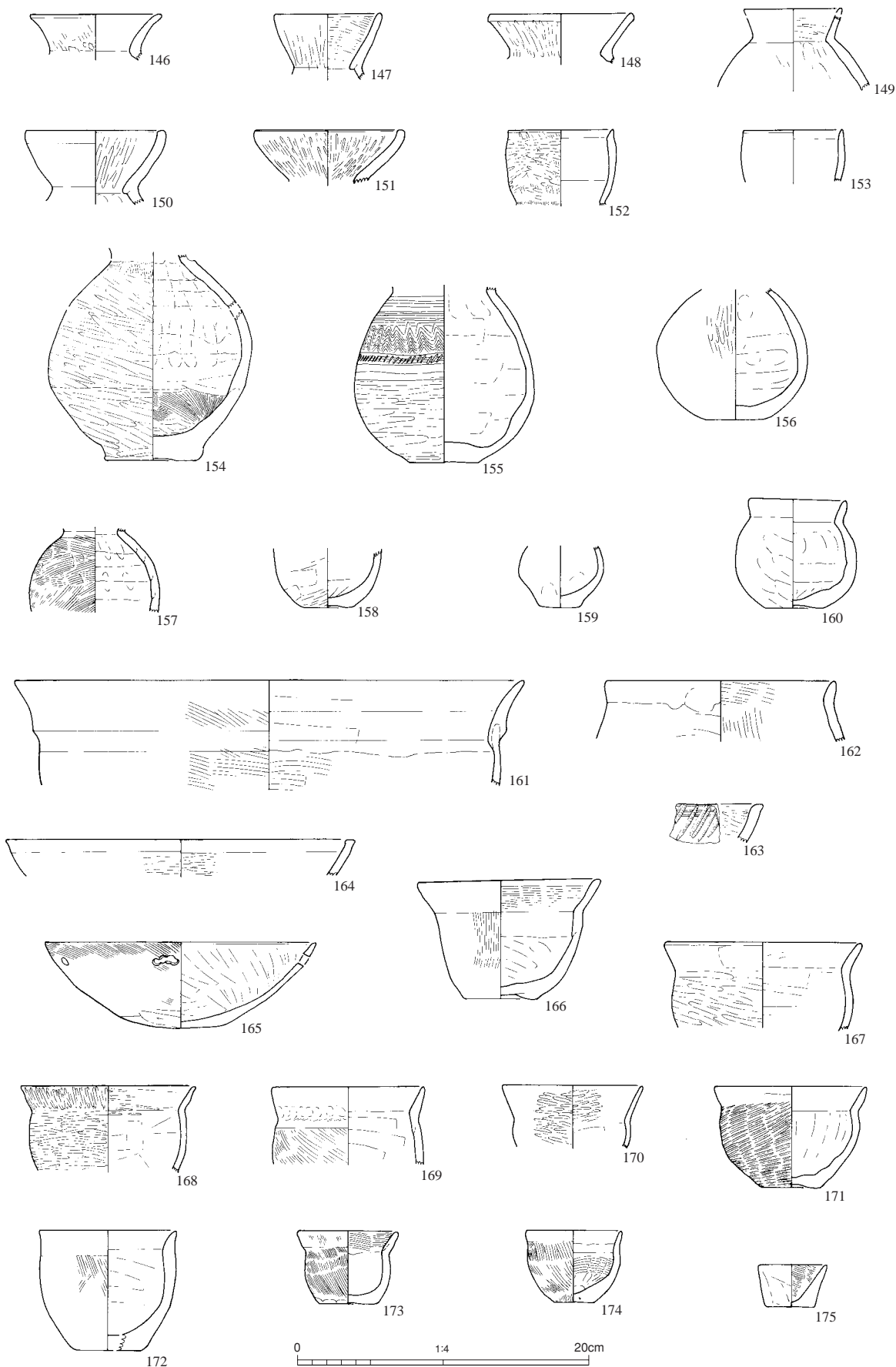


Fig.50 SX01 出土遺物 (7)

3 古墳時代

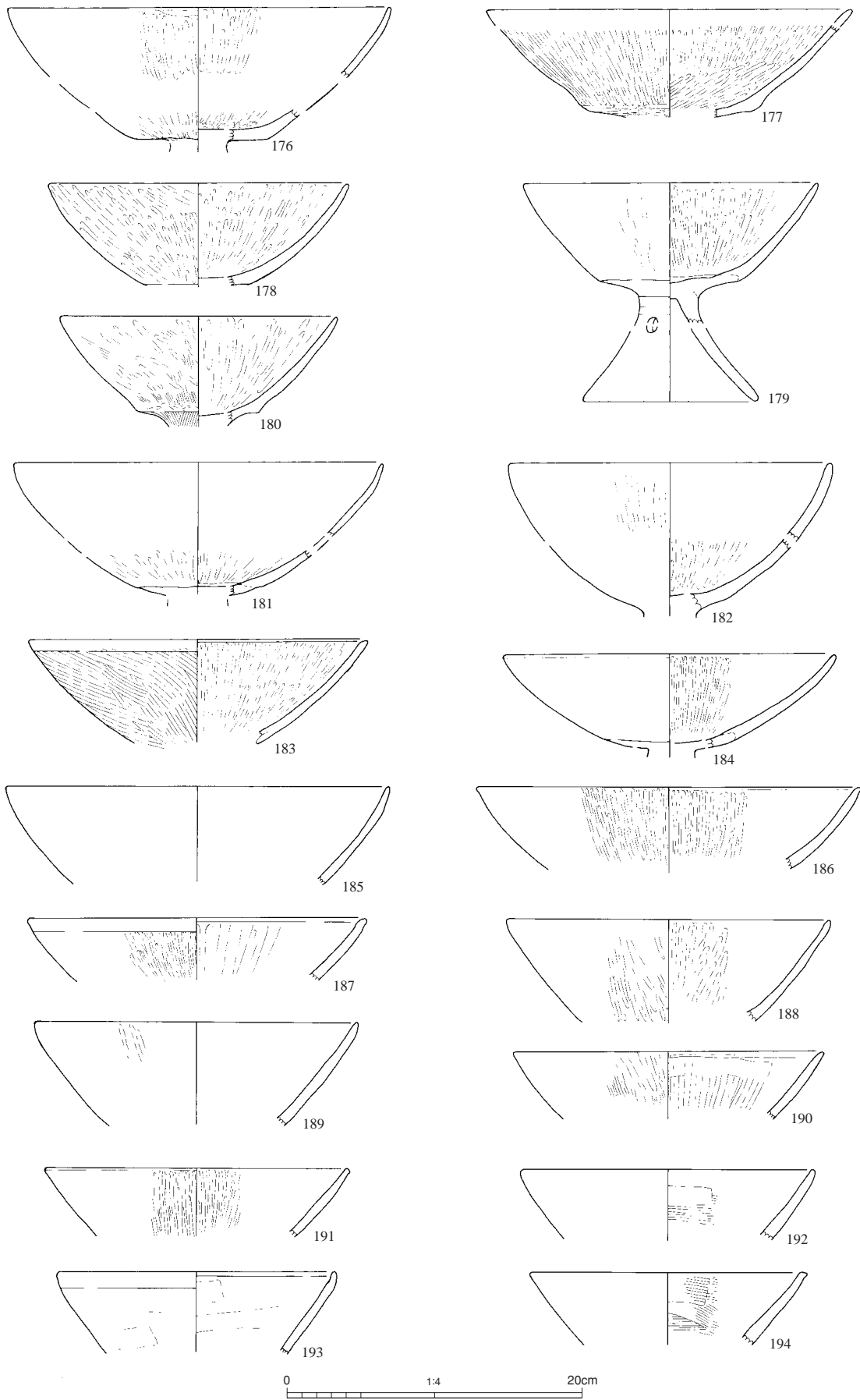


Fig.51 SX01 出土遺物 (8)

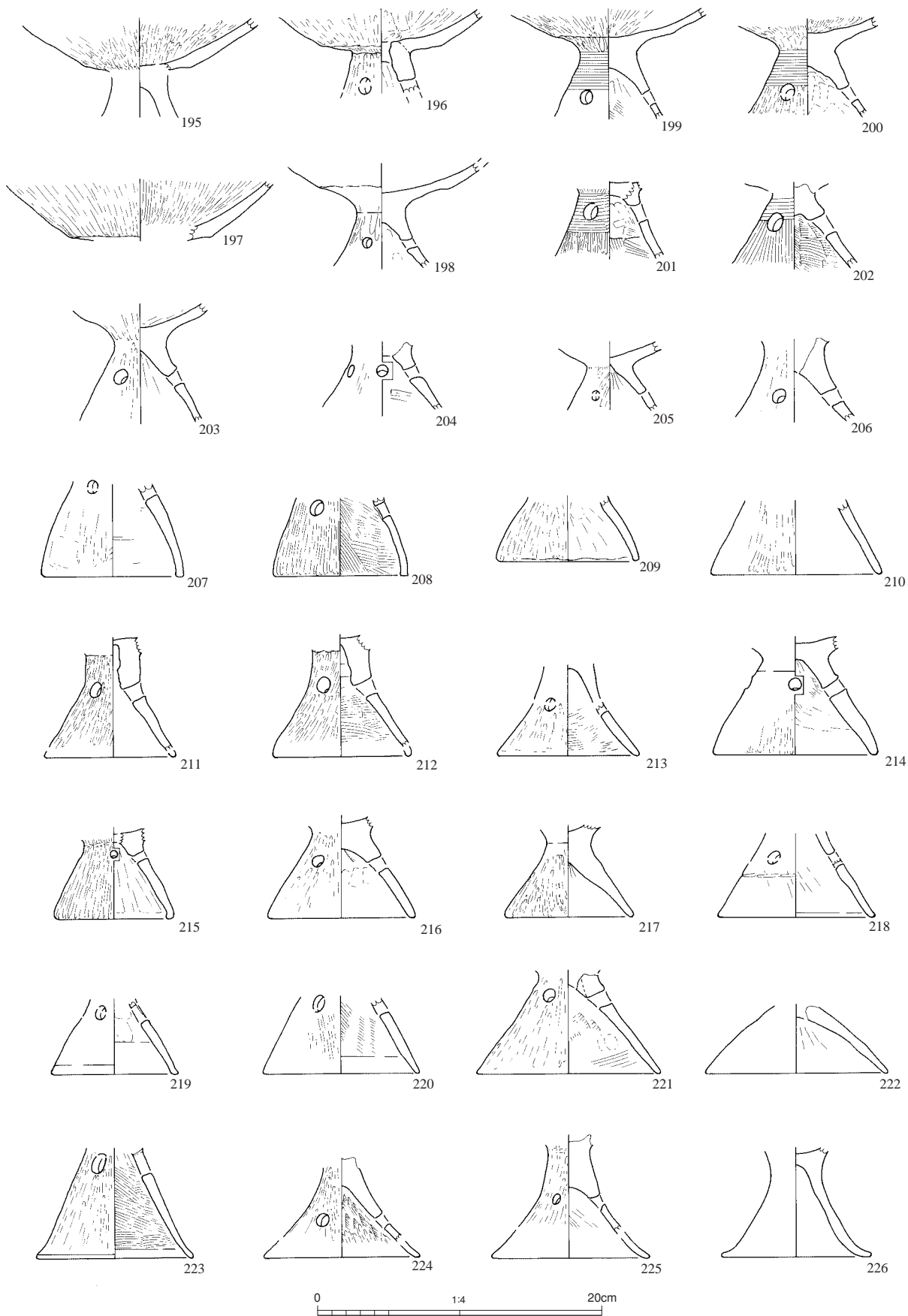


Fig.52 SX01 出土遺物 (9)

3 古墳時代

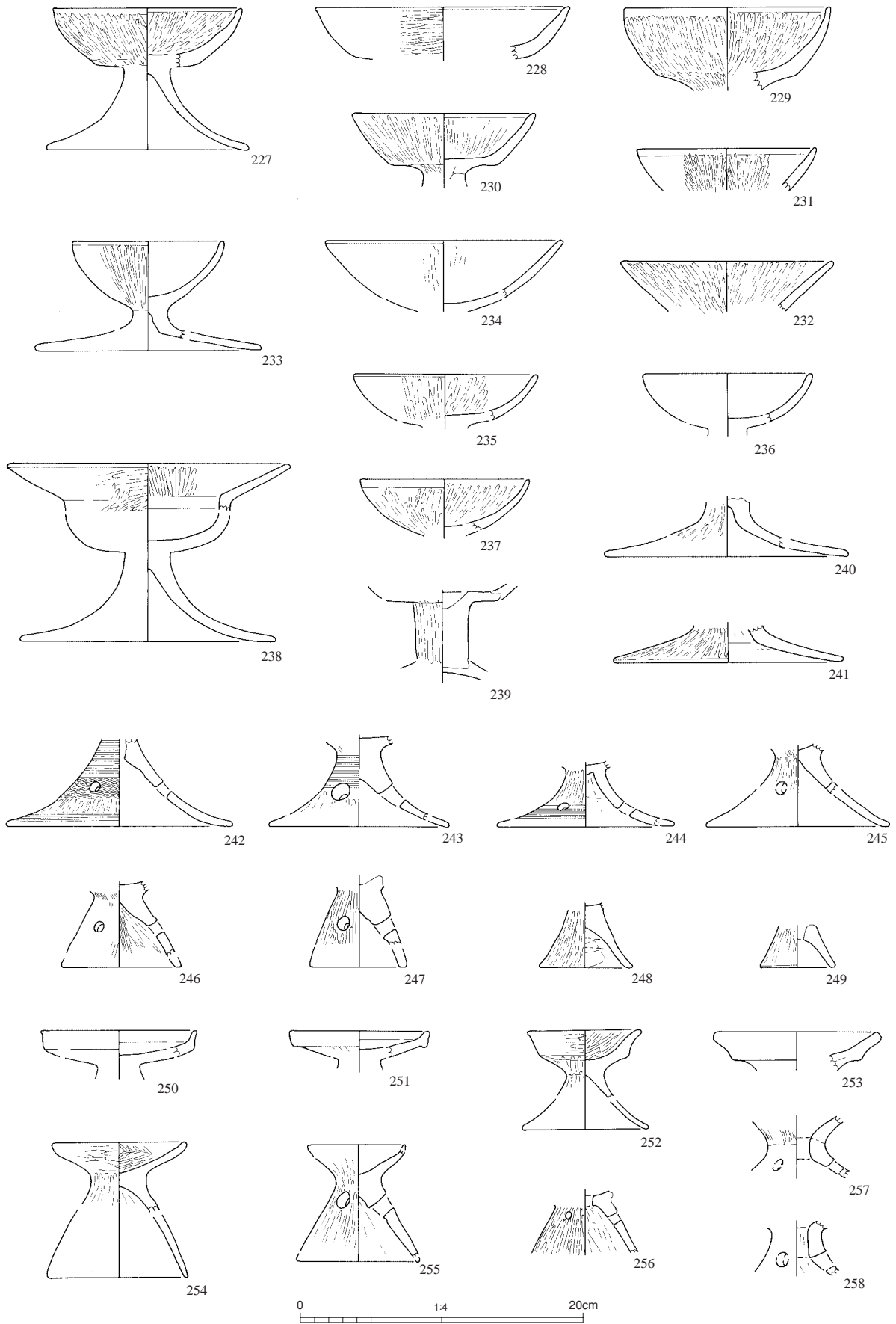


Fig.53 SX01 出土遺物 (10)

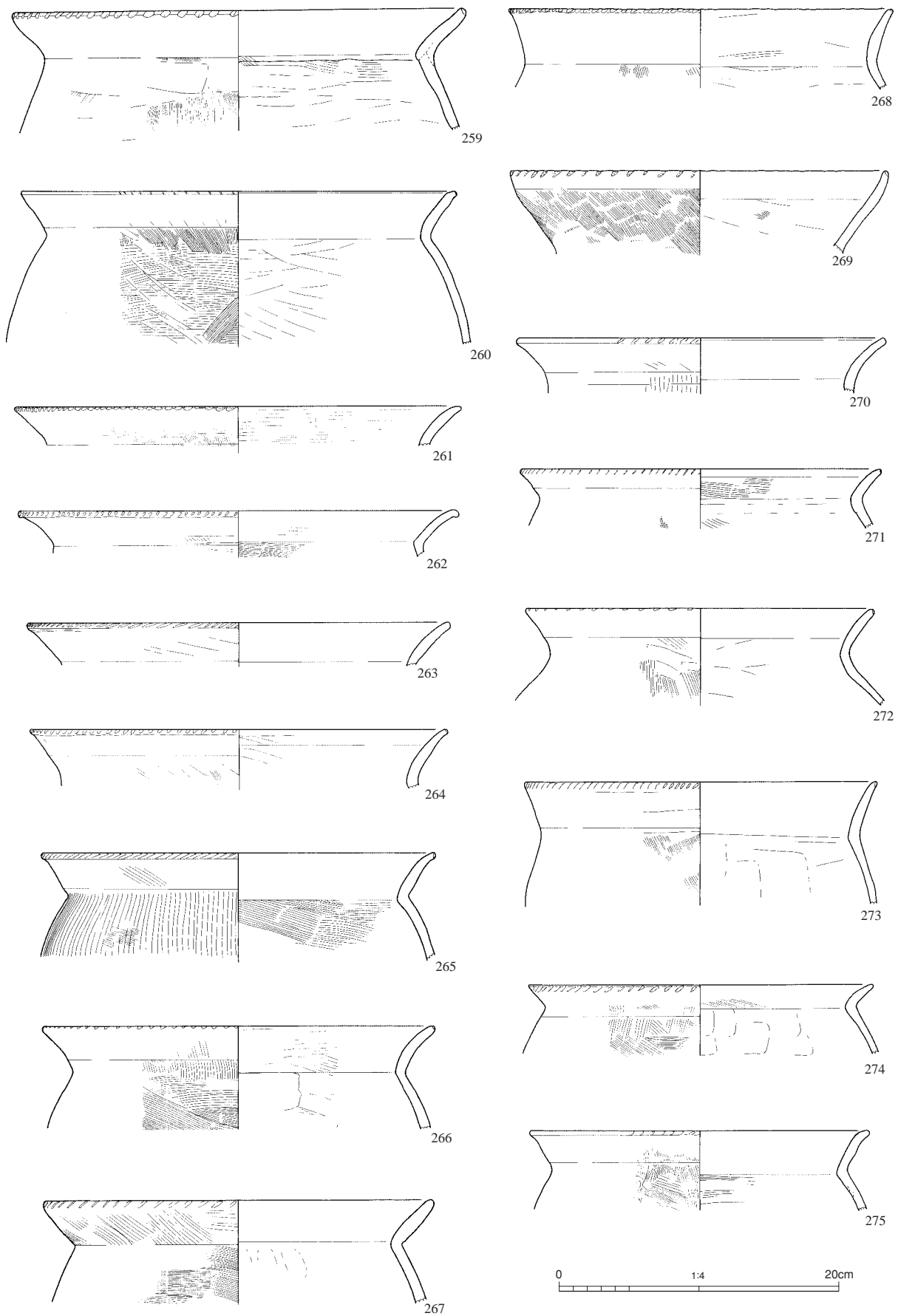


Fig.54 SX01 出土遺物 (11)

3 古墳時代

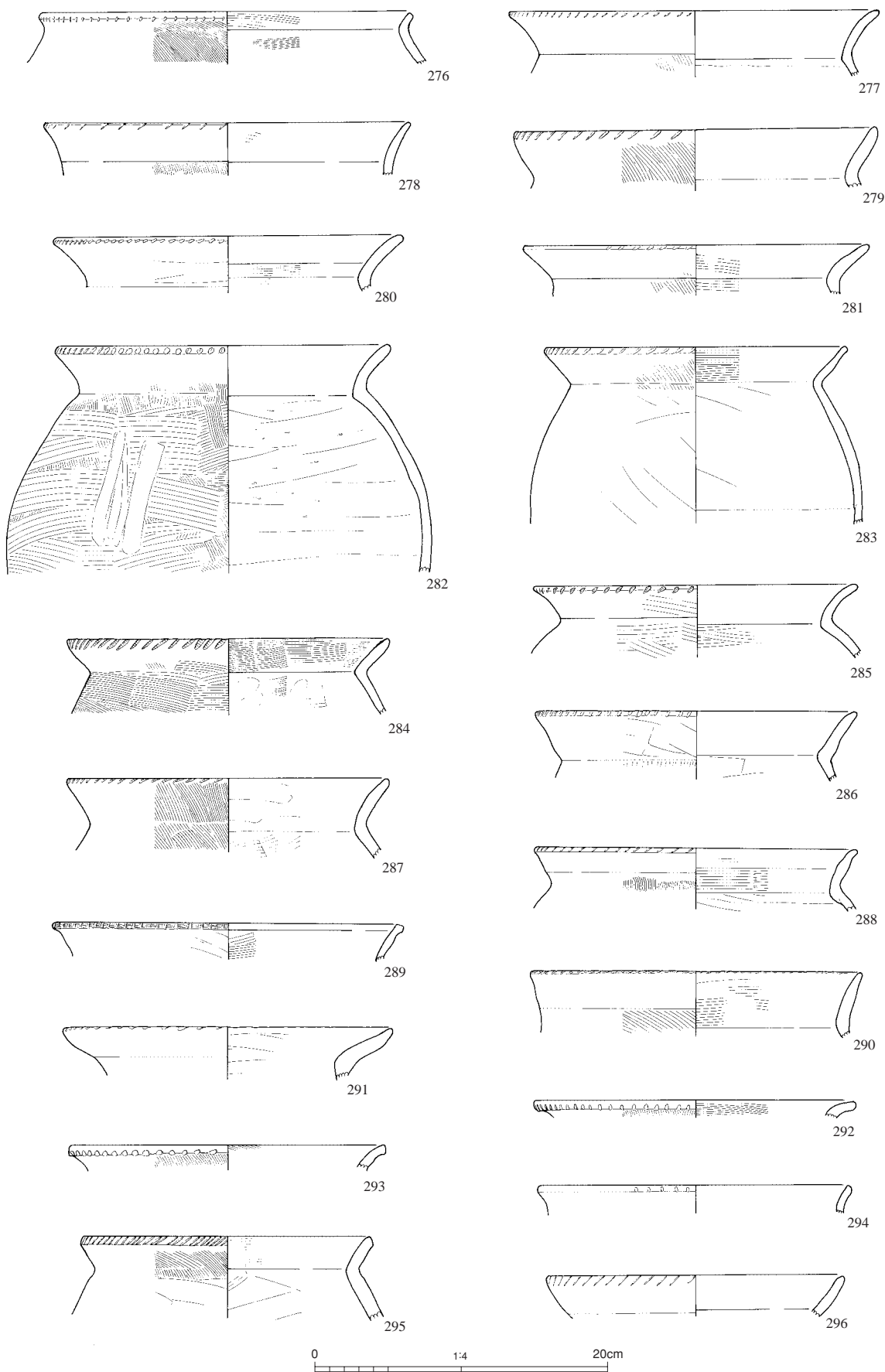


Fig.55 SX01 出土遺物 (12)

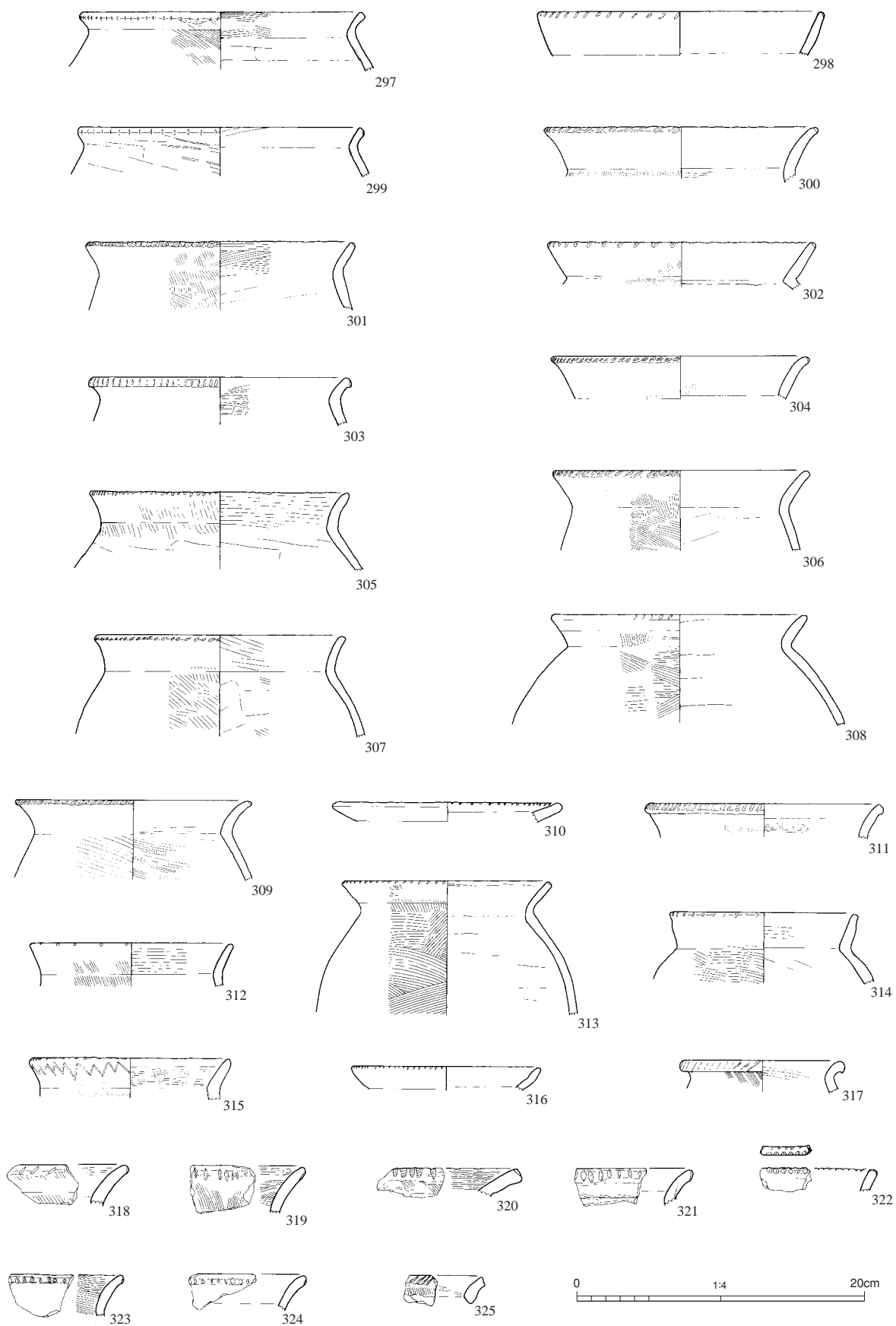


Fig.56 SX01 出土遺物 (13)

3 古墳時代

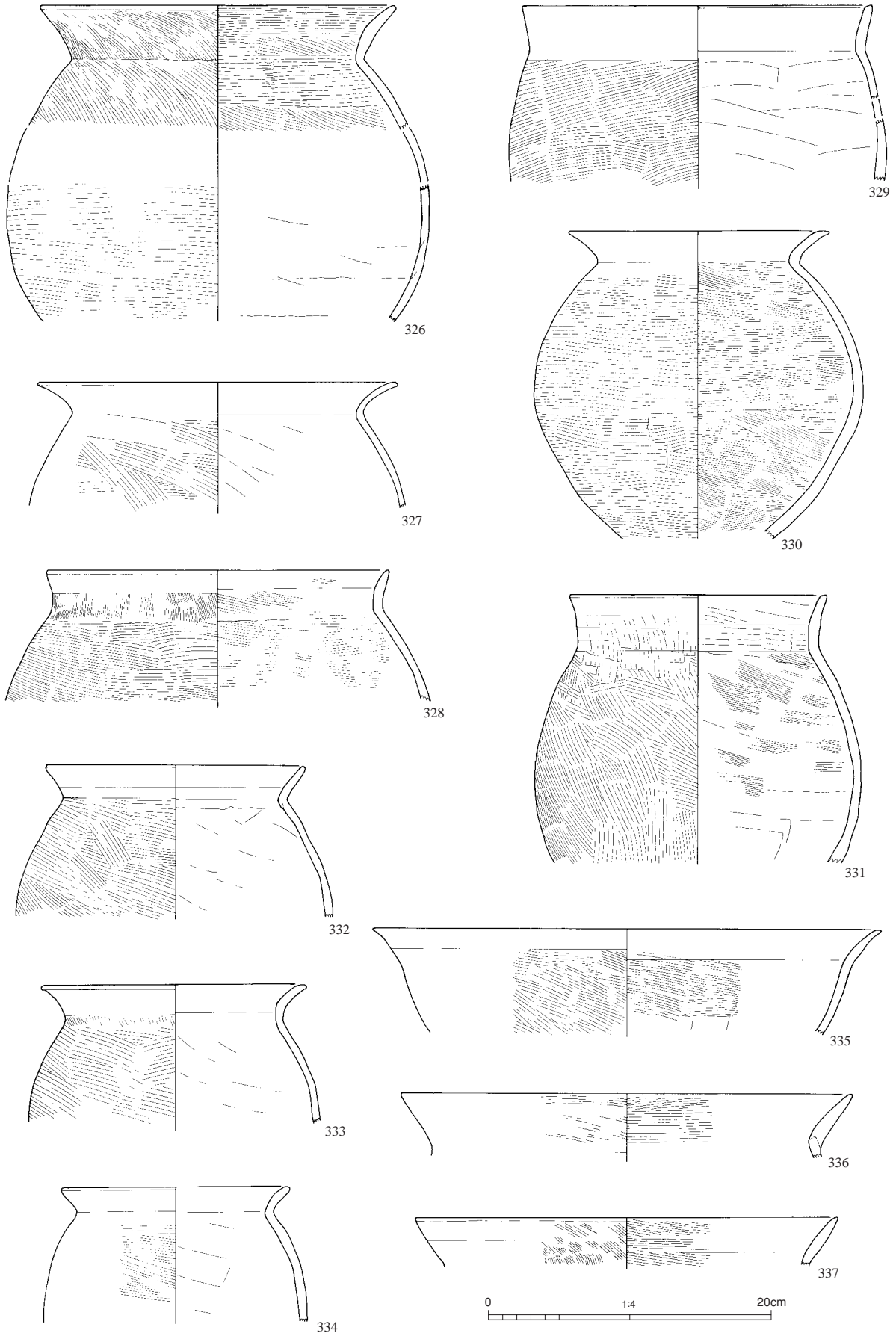


Fig.57 SX01 出土遺物 (14)

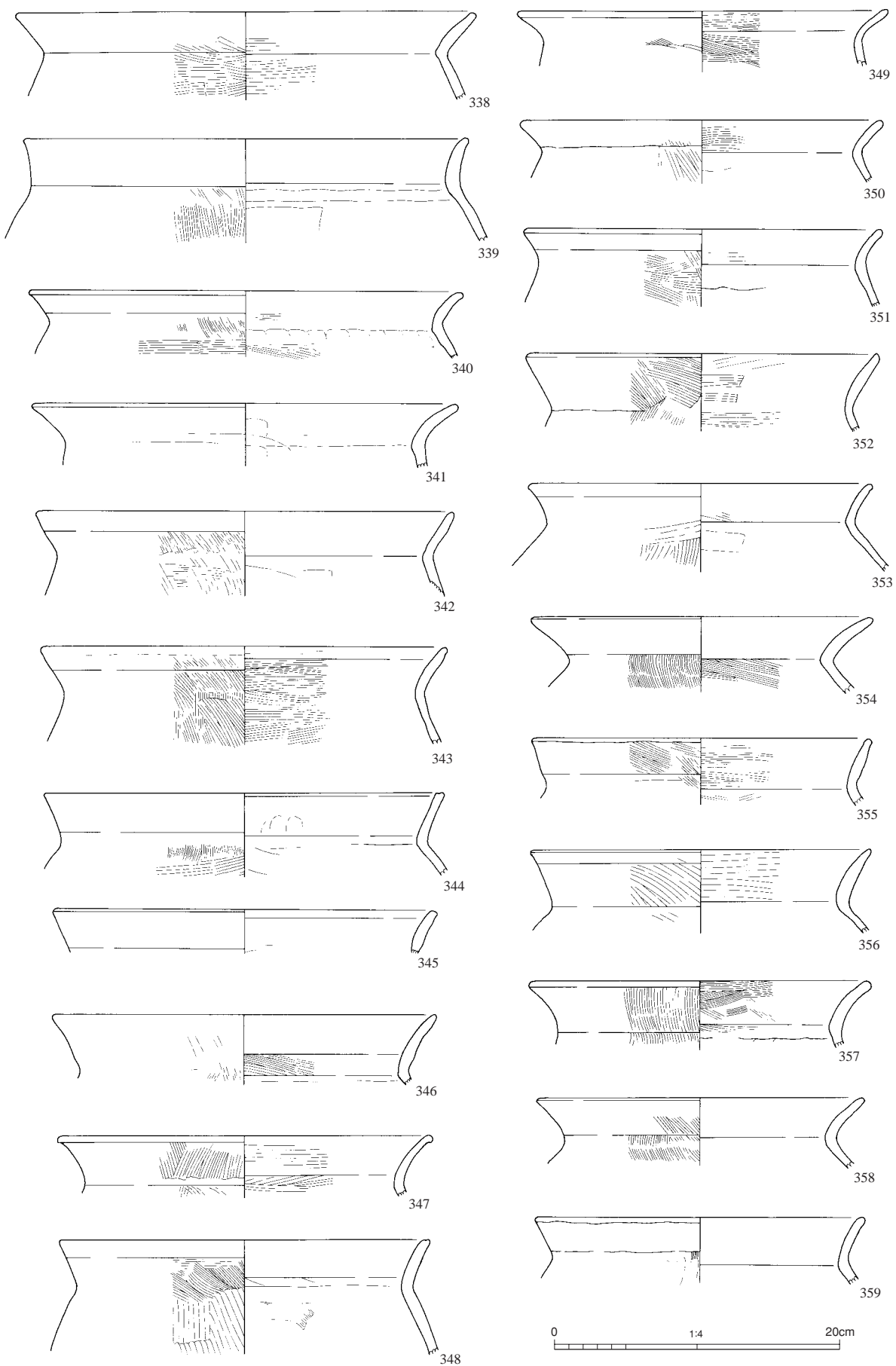


Fig.58 SX01 出土遺物 (15)

3 古墳時代

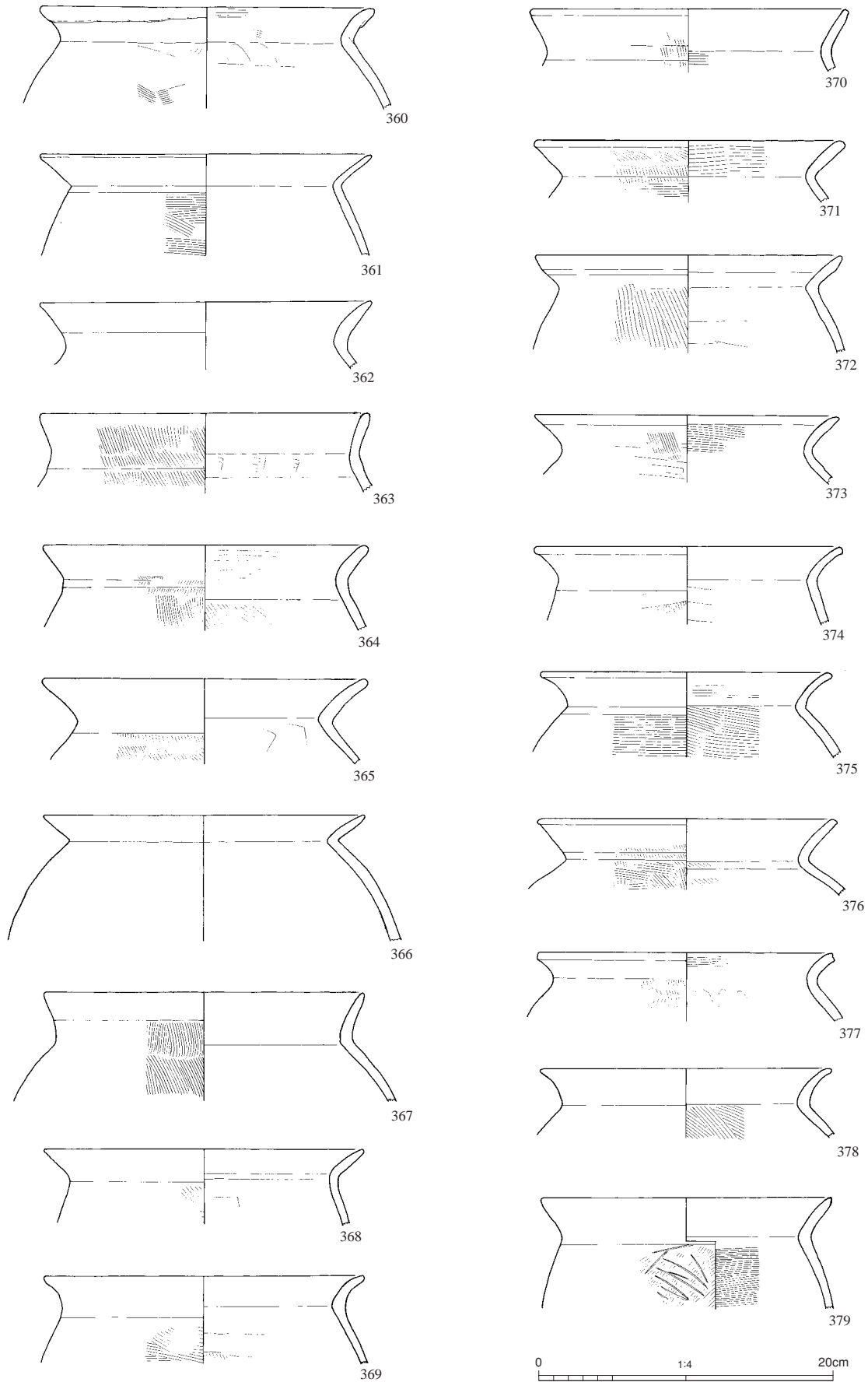


Fig.59 SX01 出土遺物 (16)

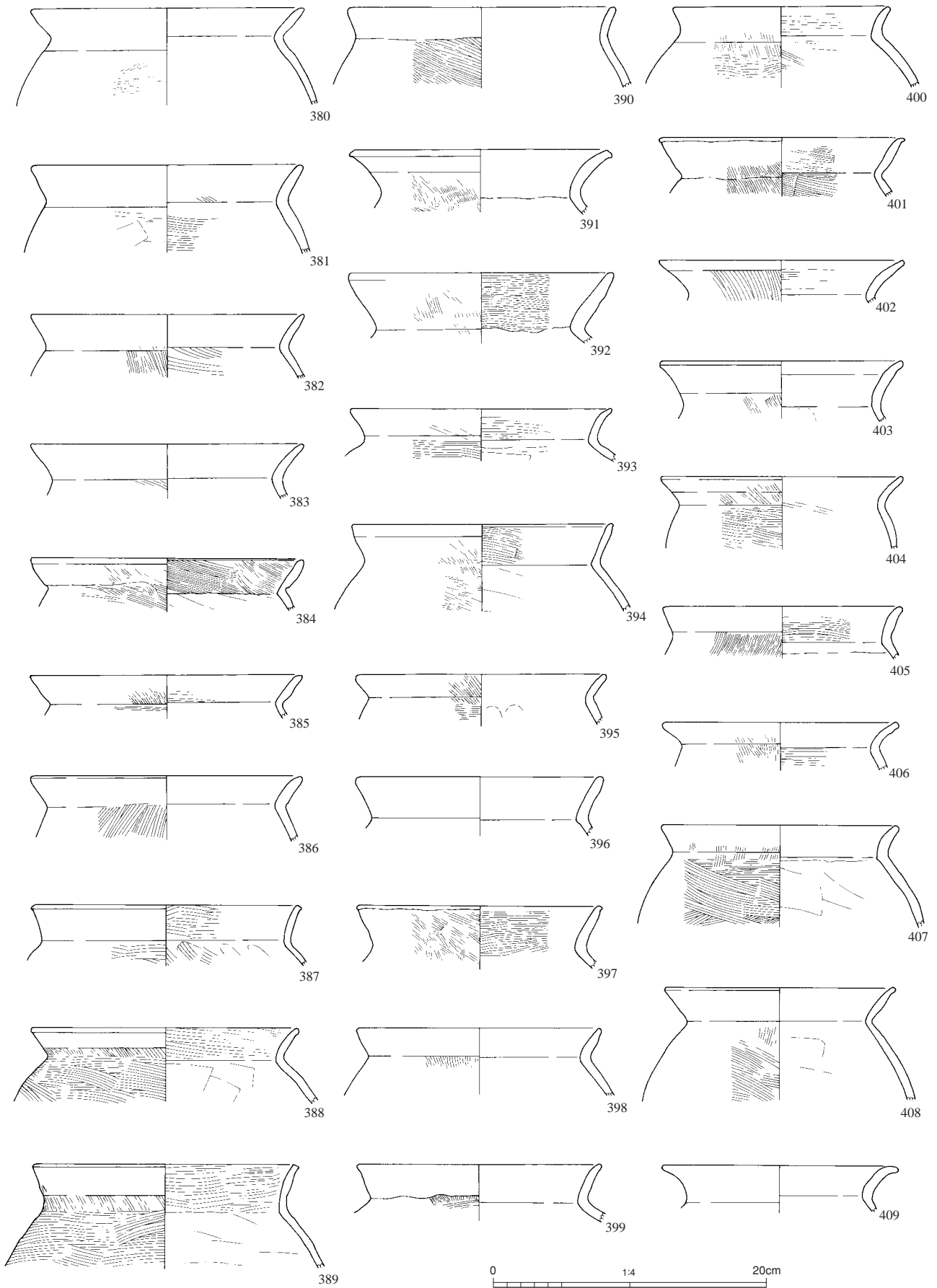


Fig.60 SX01 出土遺物 (17)

3 古墳時代

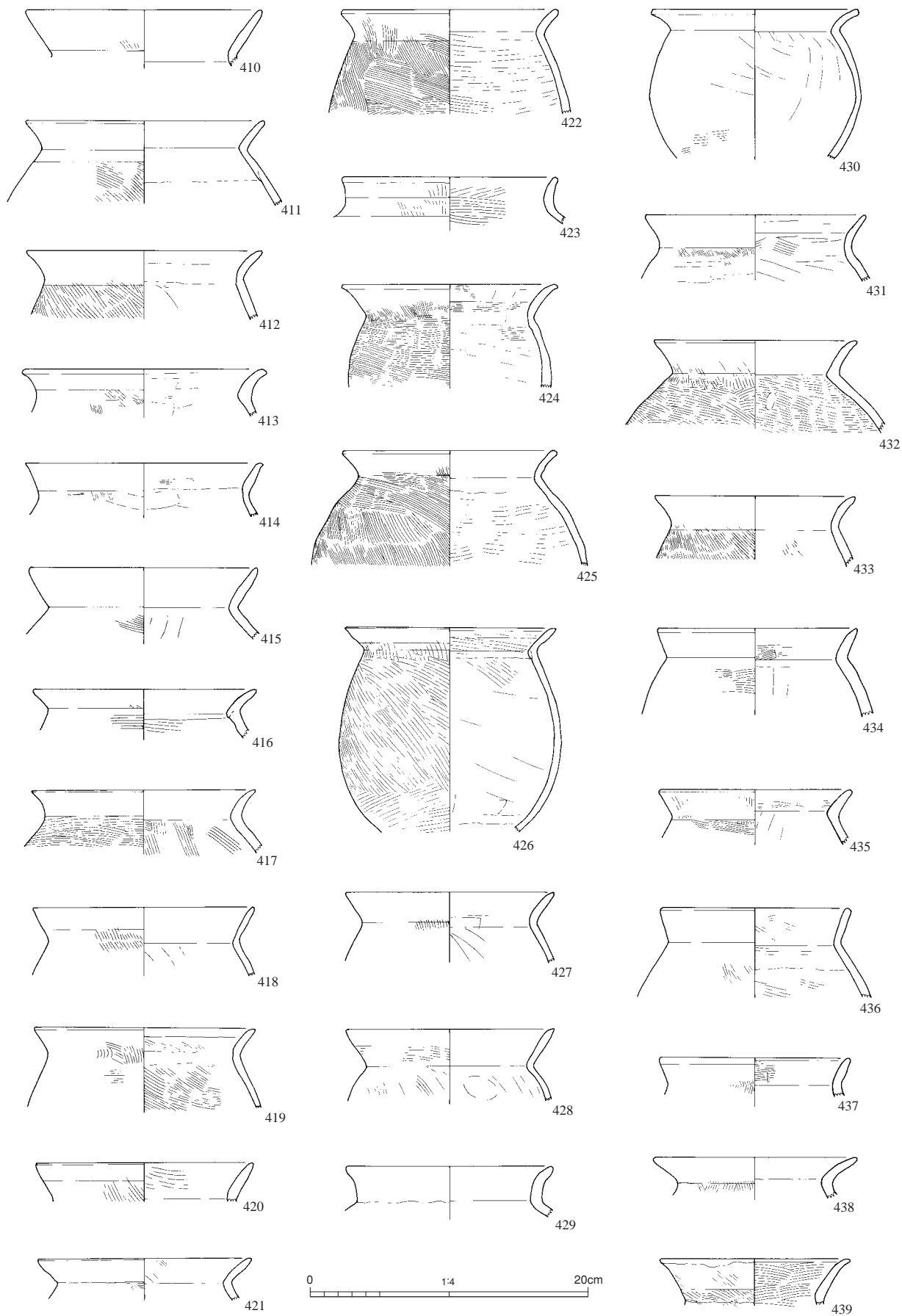


Fig.61 SX01 出土遺物 (18)

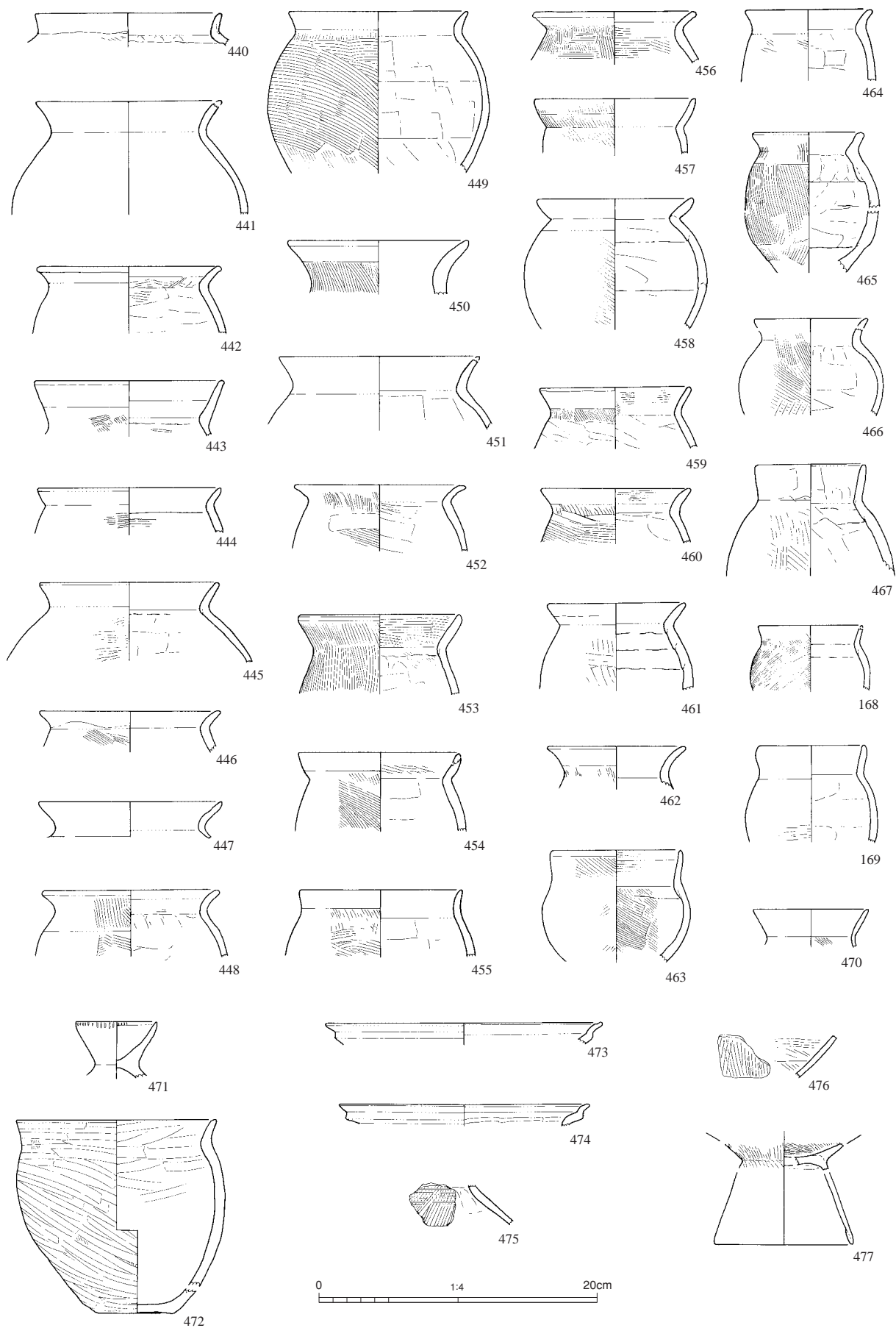


Fig.62 SX01 出土遺物 (19)

3 古墳時代

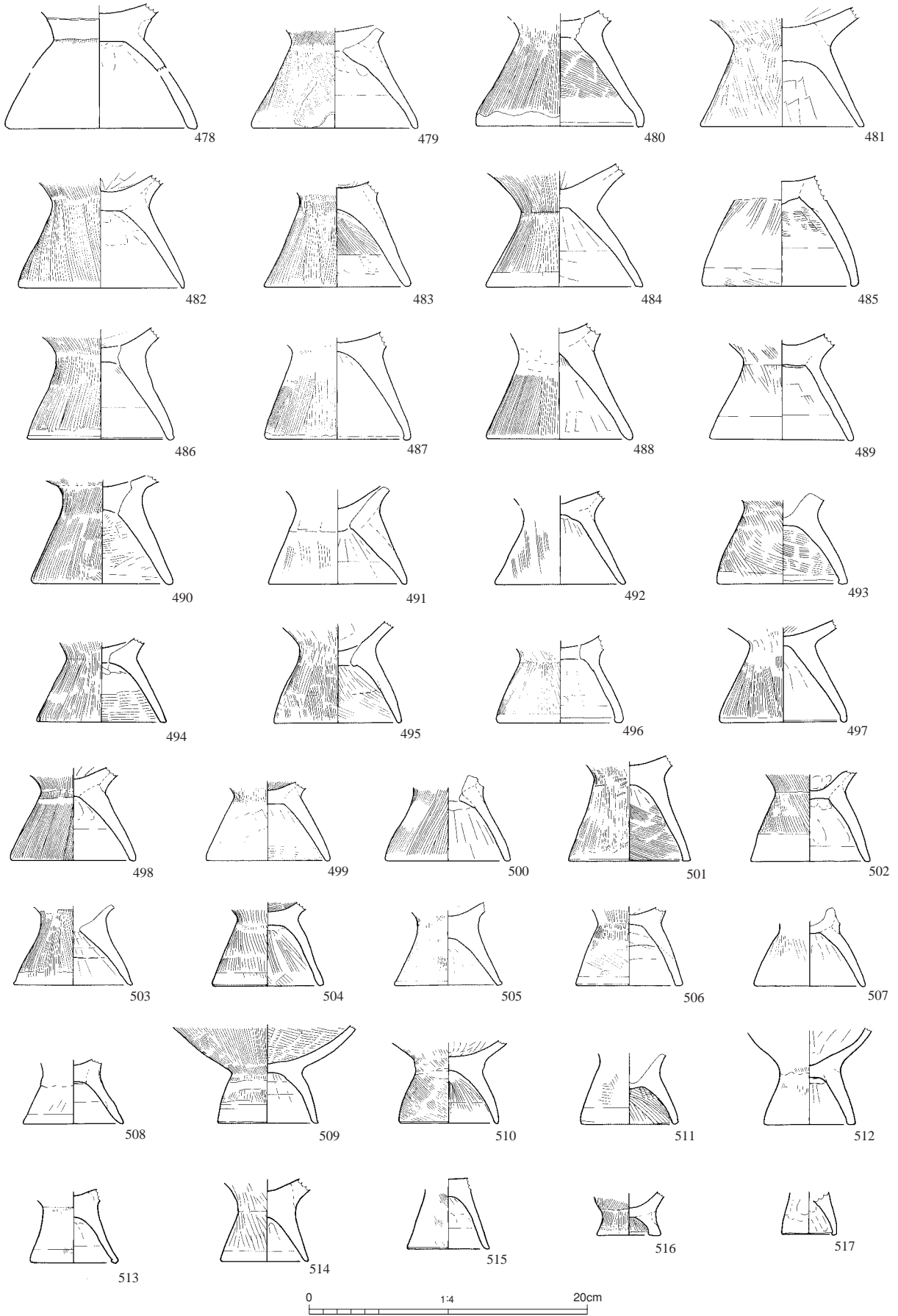


Fig.63 SX01 出土遺物 (20)

(3) 竪穴建物

群別 古墳時代前期の竪穴建物は、総数61棟を確認した。遺構の遺存状態が悪く、平面形が認識できない竪穴建物も一定量あり、古墳時代に構築された建物の数はさらに多いと捉えられる。

竪穴建物は調査対象地のほぼ全域に展開している。調査状況から明らかなように、竪穴建物は対象地の北側および西側にも数多く築かれたとみてよい。

調査によって確認した竪穴建物群を自然地形や空地によって、AからFの6群に分離する(Fig.64)。低位面にあるA・B群と、高位面にあるC～F群は明確に分かれるが、その中の細分については、調査区の制約によって直截的に捉えられない側面がある。

帰属時期 遺構の帰属時期は元屋敷Ⅰ式古段階から元屋敷Ⅱ式期が中心である。ごく僅かに、元屋敷Ⅲ式期に降る建物があり、集落の廃絶期を示していると捉えられよう。

① 竪穴建物A群

群構成 竪穴建物A群は低位面の西端に位置する。SB01～15、SB22・25・26・28・29が該当する。A群の範囲には、土器廃棄土坑SX01を含み、集落の中心のひとつであったとみられる。竪穴建物A群が展開する区域は、遺構の重なりが顕著で、建物の平面形が明確に把握できなかったものも多い。とくに、SB01・03・07・08・10・11にかんしては、平面形態がほとんど把握できず、かすかに認められた壁溝や柱穴、炉跡から竪穴建物と認定したものである。明確な平面形態が認められない上記の遺構については、以下の報告では割愛し、ある程度特徴が明らかにできた竪穴建物について詳細を紹介する。

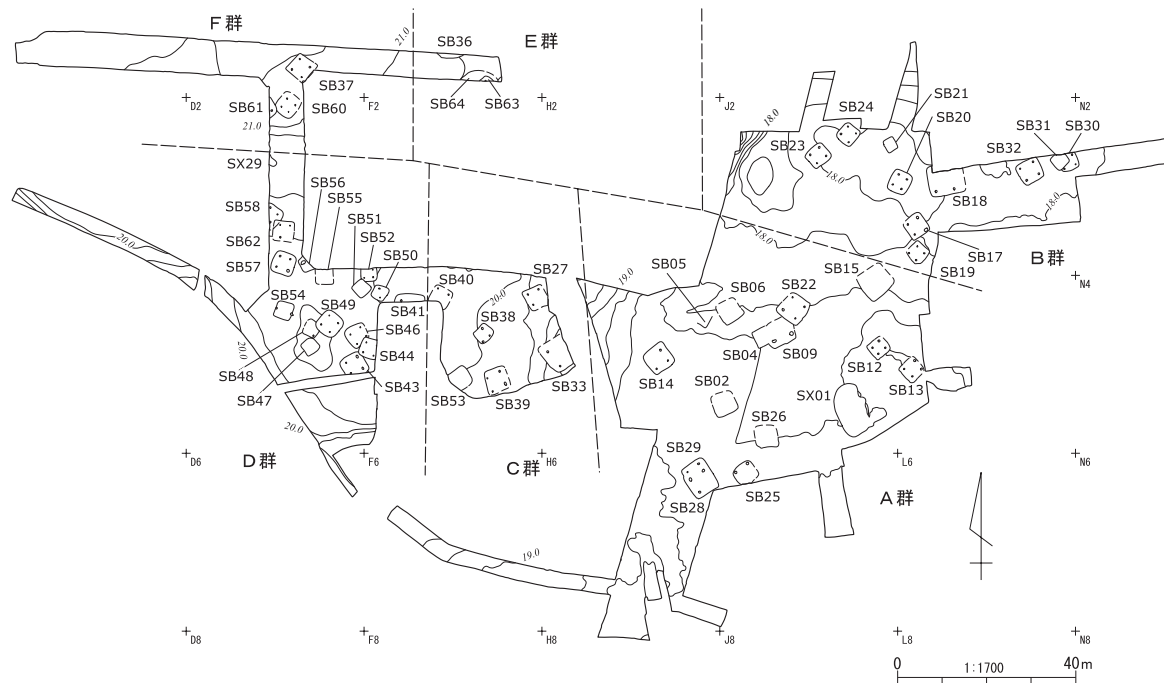


Fig.64 古墳時代 竪穴建物分布図

Tab.7 古墳時代 竪穴建物

遺構	グリット	群	東西 (m)	南北 (m)	面積 (m ²)	備考	遺構	グリット	群	東西 (m)	南北 (m)	面積 (m ²)	備考
SB01	I-6	(A群)				不明瞭	SB32	M-2	B群	5.2	4.9	25.5	
SB02	J-5	A群					SB33	H-4	C群				
SB03	I-5	(A群)				不明瞭	SB35	H-4	(C群)				不明瞭
SB04	J-4	A群		3.7			SB36	F-1	E群				
SB05	I-4	A群					SB37	E-1	F群		4.8		
SB06	J-4	A群	4.9				SB38	G-4	C群	3.3			柱穴なし・置石炉
SB07	J-4	(A群)					SB39	G-5	C群		5.2		
SB08	J-4	(A群)					SB40	F-4	C群				不明瞭
SB09	J-4	A群	(6.0)				SB41	F-4	D群				
SB10	J-5	(A群)				不明瞭	SB43	E-4	D群	5.2			
SB11	J-5	(A群)				不明瞭	SB44	F-4	D群		5.3		
SB12	K-4	A群	3.9	3.8	14.8		SB46	E-4	D群	4.7			
SB13	L-5	A群		4.2			SB47	E-4	D群	3.2	3.2	10.2	柱穴なし
SB14	I-4	A群	5.4				SB48	E-4	D群	3.1	3.4	10.5	柱穴なし
SB15	K-4	A群					SB49	E-4	D群	4.8	5	24.0	
SB17	L-3	B群	4.5	4.5	20.3		SB50	F-4	D群	3.0	3	9.0	柱穴なし
SB18	L-2	B群		6.6			SB51	E-4	D群	3.0	3.2	9.6	柱穴なし・置石炉
SB19	L-3	B群	3.9	4.1	16.0		SB52	F-4	D群	3.5			
SB20	L-2	B群	4.3	4.7	20.2	置石炉	SB53	G-5	C群		4.6		
SB21	K-2	B群	2.5	2.7	6.8	柱穴なし	SB54	E-4	D群	3.6	3.7	13.3	柱穴なし
SB22	J-4	A群	5.7	5.6	31.9	置石炉	SB55	E-4	D群				
SB23	K-2	B群	4.6	4.2	19.3		SB56	E-3	D群	3.4			柱穴不明
SB24	K-2	B群	4.2	3.9	16.4		SB57	E-3	D群	4.8	4.8	23.0	
SB25	J-6	A群	4.6	4.5	20.7		SB58	E-3	D群				
SB26	J-5	A群	4.6				SB59	E-2	D群				不定形
SB27	G-4	C群		4.6			SB60	E-2	F群	4.4			
SB28	I-6	A群	6.0	5.8	34.8		SB61	D-2	F群				
SB29	I-6	A群	5.6				SB62	E-3	D群				不明瞭
SB30	M-2	B群	3.9			置石炉	SB63	G-1	E群				
SB31	M-2	B群	3.4	3.3	11.2	柱穴なし	SB64	G-1	E群				

SB02 (Fig.182) SB02はJ-5区で検出した竪穴建物で、南側および西側の壁面だけがかろうじて認識できた。また、南東隅では貯蔵穴の可能性のある土坑を確認している。SB02は図示できる遺物に恵まれず、正確な帰属時期は不明である。

SB04 (Fig.177) SB04はJ-4区で検出した竪穴建物で、南北3.7mの規模をもつ。比較的小型の建物で、柱穴、炉跡などは確認できない。SB04からは1・2の遺物が出土した。SB04は時期を明確にできる遺物に恵まれず、正確な帰属時期は不明である。

SB05 (Fig.177) SB05はI-4区で検出した竪穴建物で、南側の壁面だけがかろうじて認識できた。柱穴や壁溝、炉跡などは確認できない。SB05からは3～5が出土した。内彎脚高坏(5)を含むことから、元屋敷I式古段階の遺構と捉えられる。

SB06 (Fig.177) SB06はJ-4区で検出した竪穴建物で、東西4.9mの規模をもつ。南側の壁面だけがかろうじて認識できた。柱穴、炉跡などは明確でないが、壁溝は南側から西側において確認できた。また、南東隅には貯蔵穴の可能性のある土坑(SK06)が認められる。SB06からは6～12が出土したが、時期を明確にできる遺物に恵まれず、正確な帰属時期は不明である。

SB09 (Fig.65) SB09はJ-4区で検出した竪穴建物で、南側の壁面だけがかろうじて認識できた。東西の推定規模は6.0mである。中央部に炉跡がみられ、南側の柱穴は明確に認識できる。炉跡の被熱は顕著で、焼土面は硬化していた。SB09からは、13～27の遺物が出土した。甕の口縁には刺突文がみられることから、SB09は元屋敷I式古段階の遺構と推定できる。

SB12 (Fig.66) SB12はSX01の北東側、K-4区で検出した竪穴建物で、東西3.9m、南北3.8mの

規模をもつ。柱穴、炉跡、壁溝、貯蔵穴が確認できる。貯蔵穴は南側の隅に壁溝を拡張して設定されている。SB12からは、30～44の遺物が出土した。比較的良好な資料であり、元屋敷Ⅰ式古段階の中でも古い様相がみられる。SB12は古墳時代集落形成初期の建物といえるだろう。

SB13 (Fig.66) SB13はL-5区で検出した竪穴建物で、南北4.2mの規模をもつ。柱穴、炉跡、壁溝、貯蔵穴が確認できる。貯蔵穴(SP256)は長軸80cmほどで、建物の北東側にある。この貯蔵穴から45が出土した。SB13は時期を明確にできる遺物に恵まれず、正確な帰属時期は不明である。

SB14 (Fig.66) SB14はI-4区で検出した竪穴建物で、東西5.4mの規模をもつ。柱穴、炉跡、壁溝、貯蔵穴が確認できる。貯蔵穴(SK33)は長軸60cmほどで、建物の南側に設定されている。SB14は図示できる遺物に恵まれず、正確な帰属時期は不明である。

SB22 (Fig.65) SB22はSB09の北東部分に重なって検出した竪穴建物で、東西5.7m、南北5.6mの規模をもつ。柱穴、炉跡、壁溝、貯蔵穴が確認できる。炉跡の焼土は顕著でないが、長軸30cmほどの自然礫が床面に置かれていた。置石炉と認定できる。南西隅には長軸1mほどの貯蔵穴(SP355)がみられる。貯蔵穴中からは29が出土した。SB22は時期を明確にできる遺物に恵まれず、正確な帰属時期は不明である。

SB25 (Fig.67) SB25はJ-6区で検出した竪穴建物で、東西4.6m、南北4.5mの規模をもつ。柱穴と壁溝が確認できる。中央部分で検出した土坑SK89の上面に焼土が形成されているため、この部分を炉跡とみることも可能である。この場合、SK89は炉の除湿施設とみられる。SB25は図示できる遺物に恵まれず、正確な帰属時期は不明である。

SB28・29 (Fig.67) SB28はI-6区で検出した、東西6.0m、南北5.8mの規模をもつ竪穴建物である。北側に建て替えとみられる竪穴建物SB29が重なっている。柱穴、炉跡、壁溝、貯蔵穴が確認できる。貯蔵穴(SK127)は長軸1.0mほどで、建物の南西側に設定されている。この貯蔵穴から49が出土した。出土遺物から、SB28は元屋敷Ⅱ式新段階から元屋敷Ⅲ式期の遺構とみられる。

竪穴建物A群出土遺物 (Fig.68・69) 1～49は、竪穴建物A群から出土した遺物である。良好な資料としては、SB06、SB09、SB12からの出土遺物があげられる。

SB06出土遺物 6～12はSB06から出土した遺物である。10は椀形器台である。椀形器台の上部が深くなる段階のものと考えれば、元屋敷Ⅱ式に位置づけられるが、明確でない。

SB09出土遺物 13～27はSB09から出土した遺物である。甕の口縁部には刺突文がみられる資料(26)が含まれ、新相の遺物がみられないことから、元屋敷Ⅰ式古段階に位置づけられる。

SB12出土遺物 30～44はSB12から出土した遺物である。壺は肩部に装飾帯をもつ内彎複合口縁壺(30)があり、甕の口縁も刺突文をもつ個体が3点(37～39)と比較的多く認められる。甕には内彎口縁(42)が認められる。平底のタタキ甕(44)がみられる点も留意できよう。これらの資料は、欠山式の様相が濃厚で、元屋敷Ⅰ式古段階でも比較的古い段階に位置づけられる。

その他竪穴建物A群出土遺物 上述の資料以外では、SB05から出土した有稜高坏の脚部(5)が内彎傾向をもち高脚の部類に入ることから、元屋敷Ⅰ式古段階に位置づけられる。また、SB28から出土した小型丸底土器(49)は、口縁部が肥大化しており、元屋敷Ⅱ式新段階から元屋敷Ⅲ式期のものと捉えられる。

3 古墳時代

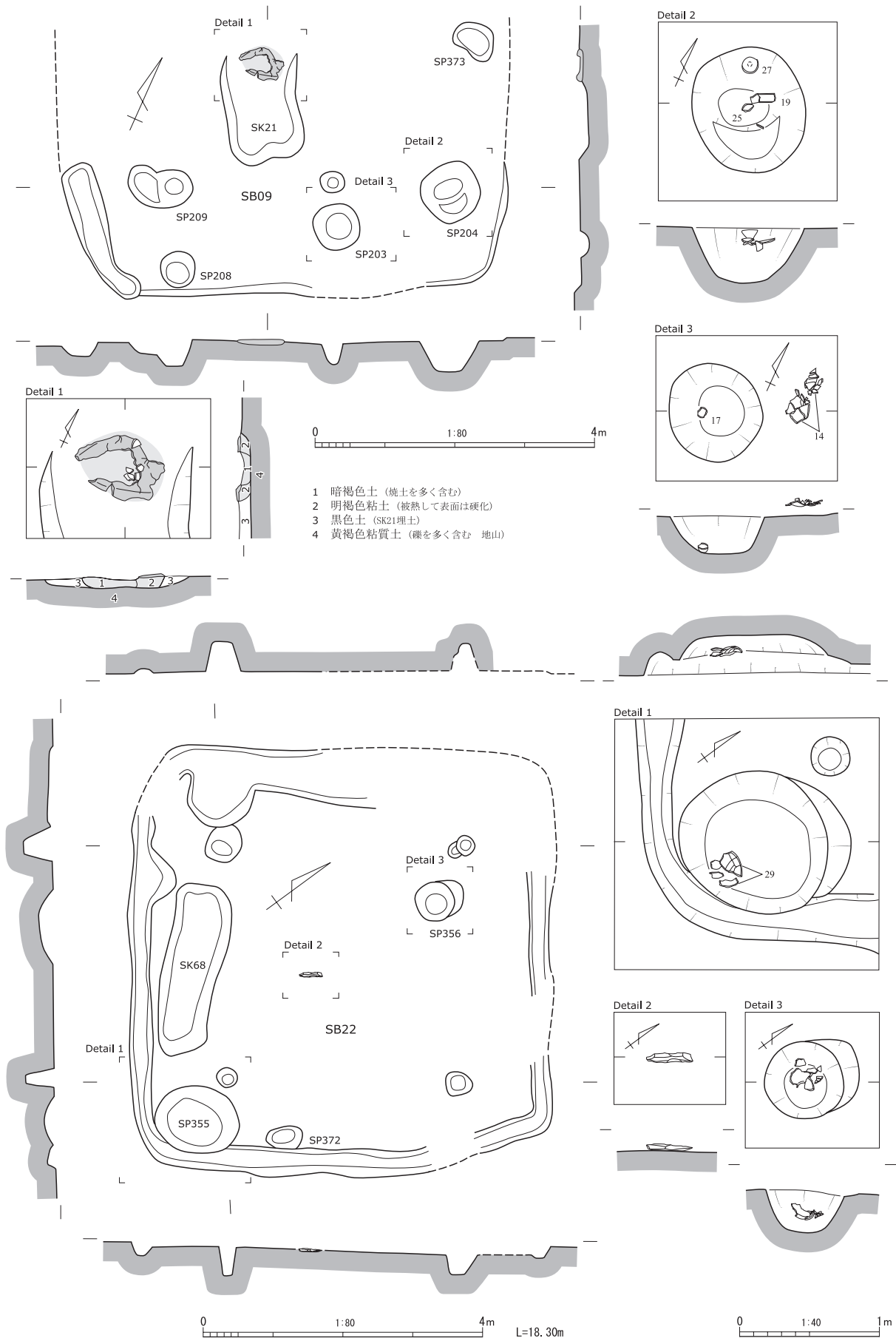


Fig.65 SB09・22実測図

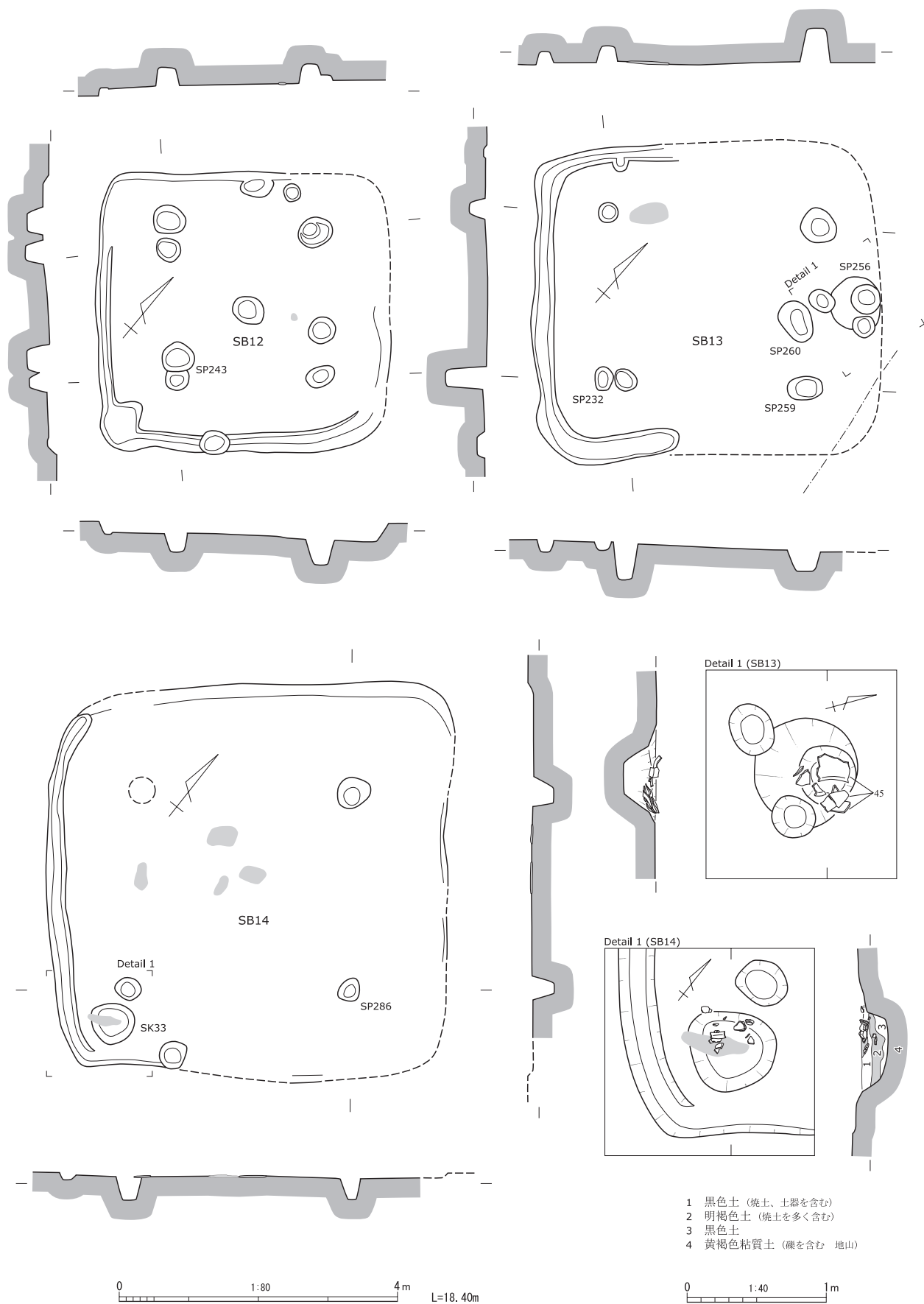


Fig.66 SB12・13・14 実測図

3 古墳時代

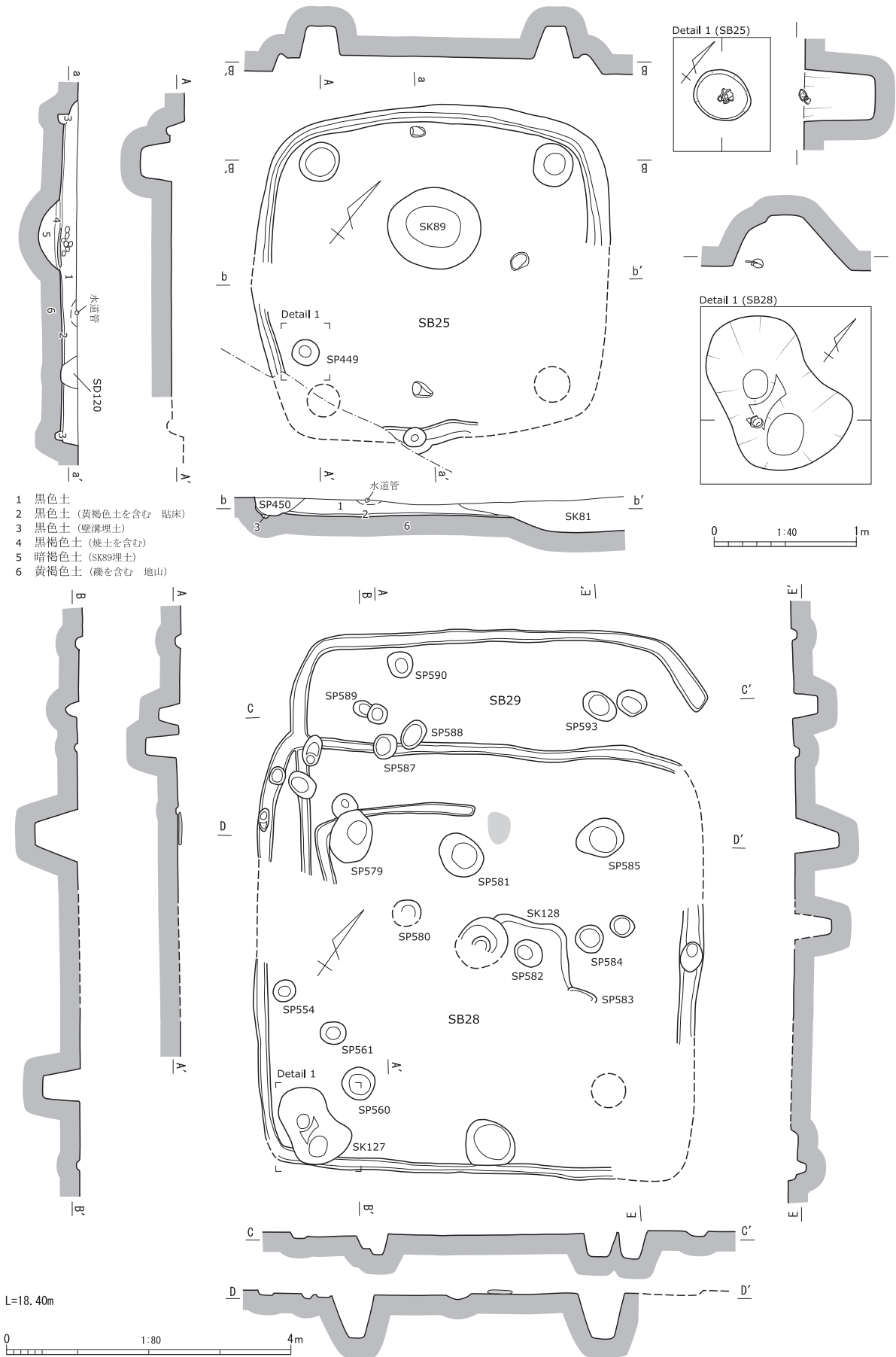


Fig.67 SB25・28・29実測図

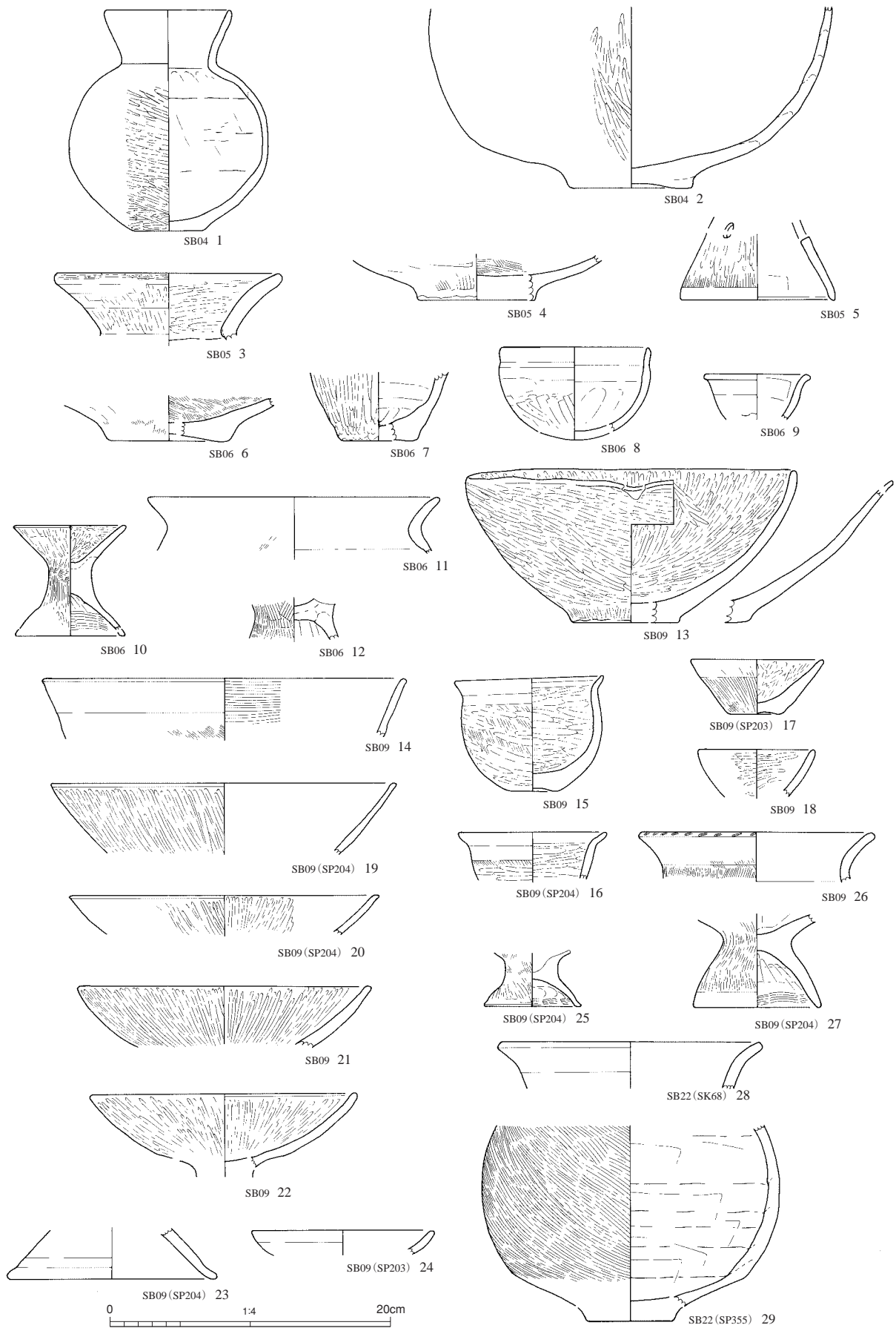


Fig.68 古墳時代 竪穴建物A群 出土遺物 (1)

3 古墳時代

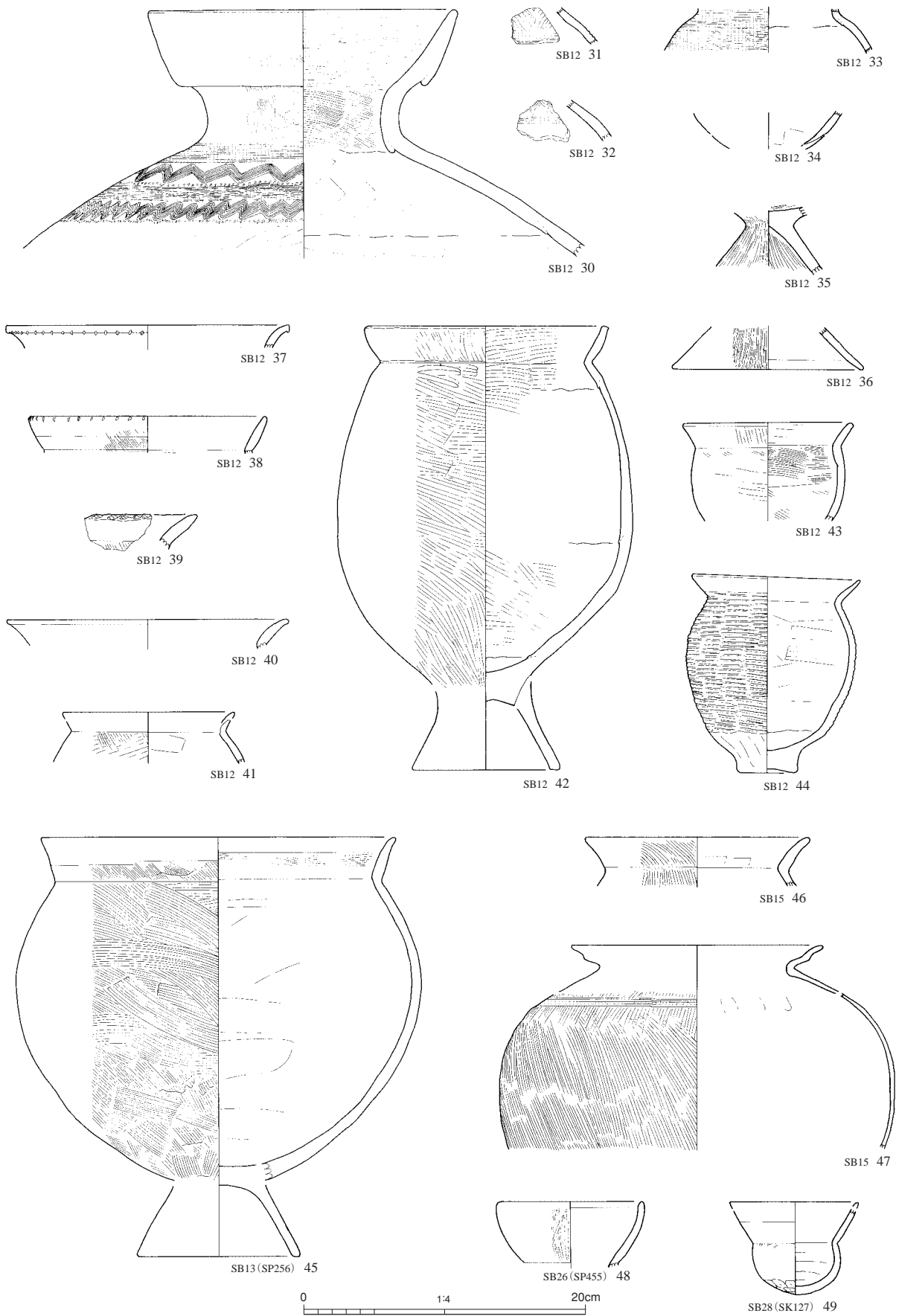


Fig.69 古墳時代 竪穴建物A群 出土遺物 (2)

② 竪穴建物B群

群構成 竪穴建物B群は低位面の東側に位置し、SB17～21、SB23・24、SB30～32が該当する。地形の傾向から、周囲にはさらに多くの建物群が展開するとみられる。竪穴建物A群と比べると遺構検出が比較的容易で、平面形態が把握できたものが多い。

SB17 (Fig.71) SB17はL-3区で検出した竪穴建物で、東西4.5m、南北4.5mの規模をもつ。柱穴、炉跡、壁溝、貯蔵穴が確認できる。貯蔵穴(SP318)は南東の隅に設定されている。SB17からは、50～65の遺物が出土した。元屋敷Ⅰ式からⅡ式にまたがる資料がみられるが、古い段階の資料を混入とみれば、SB17は元屋敷Ⅱ式期の遺構とみてよいだろう。

SB18 (Fig.73) SB18はL-2区で検出した竪穴建物で、南北6.6mの規模をもつ。柱穴、炉跡、壁溝が確認できる。SB18は図示できる遺物に恵まれず、正確な帰属時期は不明である。

SB19 (Fig.71) SB19はL-3区で検出した竪穴建物で、東西3.9m、南北4.1mの規模をもつ。柱穴、炉跡、壁溝が確認できる。SB19からは、66の遺物が出土した。弥生時代後期後半に特有の椀形高坏で、元屋敷Ⅰ式古段階まで残存する形態とみられる。遺構の時期も同時期と捉えられよう。

SB20 (Fig.71) SB20はL-2区で検出した竪穴建物で、東西4.3m、南北4.7mの規模をもつ。柱穴、炉跡、壁溝、貯蔵穴が確認できる。炉跡の焼土は顕著でないが、長軸30cmほどの自然礫が床面に置かれていた。置石炉と認定できる。置石炉の下面には長軸70cmほどの土坑が掘削されている。炉の除湿施設とみてよいだろう。貯蔵穴(SP347)は長軸1mほどの規模で、南の隅に設定されている。SB20からは、67～84の遺物が出土した。出土遺物から、SB20は元屋敷Ⅰ式新段階の遺構と捉えられる。

SB21 (Fig.72) SB21はK-2区で検出した小規模な竪穴建物で、東西2.5m、南北2.7mの規模をもつ。柱穴、炉跡、壁溝、貯蔵穴などがみられず、恒常的な住居として使われていたか疑わしい。SB21は図示できる遺物に恵まれず、正確な帰属時期は不明である。

SB23 (Fig.72) SB23はK-2区で検出した竪穴建物で、東西4.6m、南北4.2mの規模をもつ。柱穴、壁溝、貯蔵穴が確認できる。炉跡は痕跡程度しか認められないが、床面中央部に掘削されている遺構(SP406)を炉の基礎構造とみることも可能である。貯蔵穴(SK74)は長軸1mほどの規模で、南の隅に設定されている。この貯蔵穴からは、87～90の遺物が出土した。出土遺物から、SB23は元屋敷Ⅰ式新段階の遺構と捉えられる。

SB24 (Fig.72) SB24はK-2区で検出した竪穴建物で、東西4.2m、南北3.9mの規模をもつ。柱穴、炉跡、壁溝が確認できる。明確な貯蔵穴はみられないが、南側の隅の壁溝の幅が広く、かつ深く掘削されており、この部分に貯蔵穴があった可能性がある。SB24からは、85・86・91・92の遺物が出土した。出土遺物から、SB24は元屋敷Ⅰ式古段階の遺構と捉えられる。

SB30 (Fig.74) SB30はM-2区で検出した竪穴建物で、東西3.9mの規模をもつ。SB31と重なっており、SB30→SB31の築造順序がうかがえる。柱穴、炉跡、壁溝、貯蔵穴が確認できる。炉には全長30cmほどの礫がみられ、置石炉とみられる。貯蔵穴(SK146)は長軸70cmほどの規模で、南東の隅に設定されている。SB30からは、93～120の遺物が出土した。出土遺物から、SB30は元屋敷Ⅱ式

新段階の遺構とみられる。

SB31 (Fig.74) SB31はM-2区で検出したやや小型の竪穴建物で、東西3.4m、南北3.3mの規模をもつ。SB30と重なっているが、この建物の方が新しい。壁溝はみられるが、明確な柱穴、炉跡、貯蔵穴は確認できなかった。SB31からは、121～163の遺物が出土した。出土遺物に屈折脚高坏を含むことから、元屋敷Ⅲ式期の遺構とみられる。古墳時代集落の中で、元屋敷Ⅲ式期に位置づけられる遺構は極めて少なく、集落の終焉期にあたる頃に構築されたものと考えられる。

SB32 (Fig.73) SB32はM-2区で検出した竪穴建物で、東西5.2m、南北4.9mの規模をもつ。柱穴、炉跡、壁溝、貯蔵穴が確認できる。貯蔵穴(SK139)は長軸1.2mほどの規模で、南西の隅に設定されている。SB32からは、164～168の遺物が出土した。SB32は時期を明確にできる遺物に恵まれず、正確な帰属時期は不明である。

竪穴建物B群出土遺物 (Fig.75～78) 50～168は、竪穴建物B群から出土した遺物である。良好な資料としては、SB17・20・23・30・31からの出土遺物があげられる。

SB17出土遺物 50～65はSB17から出土した遺物である。54や55など小型丸底鉢を含み元屋敷Ⅱ式期に位置づけられる。口縁外面に装飾をもつ壺(51・52)をはじめ、口縁に刺突文をもつ甕(58)や、タタキを施した平底甕(65)など元屋敷Ⅰ式古段階の破片が含まれる。これら古相の遺物は混入品の可能性がある。

SB20出土遺物 67～84はSB20から出土した遺物である。壺には、棒状浮文をもつ二重口縁壺(68)や加飾しない二重口縁壺(69・70)が含まれ、肩部に櫛描模様をもつ個体(71)もみられる。甕の口縁には刺突文をもつものがみられず、S字甕(84)はB類である。以上の特徴から、SB20出土遺物は、元屋敷Ⅰ式新段階のものともみてよいだろう。

SB20出土遺物は、籠目土器(Fig.70、Fig.75-73)が含まれる点でも注目できる。73の籠目土器は、直径17.2cm、高さ7.2cmほどで、鉢形を呈する。外面全体に外型となる籠を押しつけた圧痕があり、内面は丁寧なナデ調整が施される。底部は籠の形態を反映して方形を呈している。籠目の単位は、

下部5分の4ほどは比較的粗く、口縁に近い上部5分の1ほどは非常に細かい。上部に細かな目をもった籠が用いられたとみられる。

籠目土器は庄内式期から布留式期の前半にかけて、近畿地方を中心に分布している(鐘方・角南1998、角南1999)。籠目土器は、祭祀系遺物として位置づけられるが、SB20から出土したその他の遺物や、籠目土器の出土状態などには特殊な状況を読み取りにくい。祭祀用具として使用された後、投棄されたものともみてよいだろう。

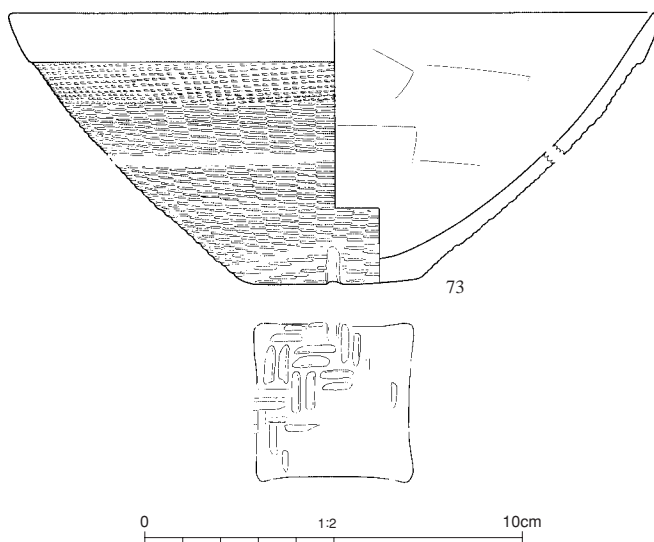


Fig.70 SB20出土 籠目土器

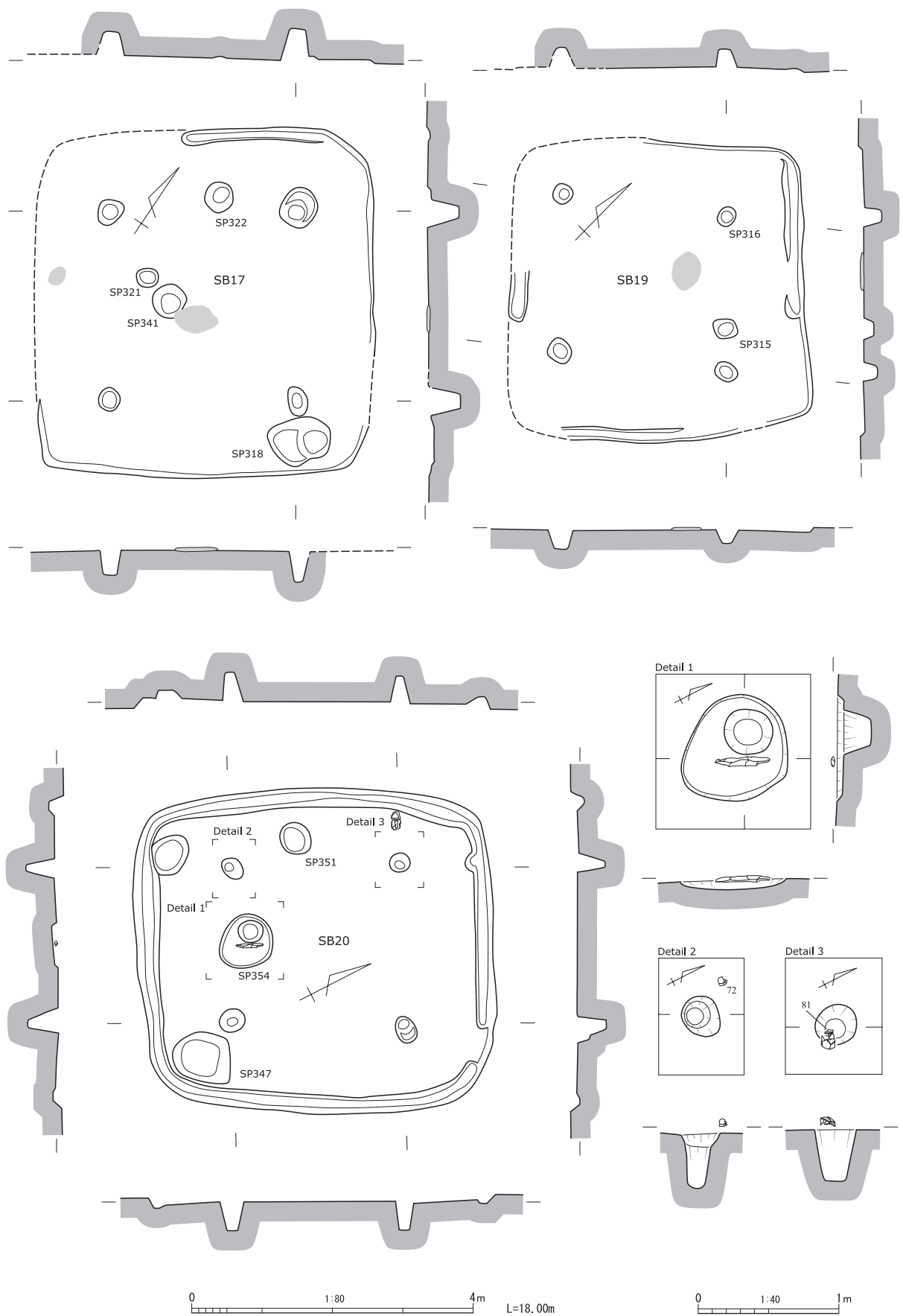


Fig.71 SB17・19・20実測図

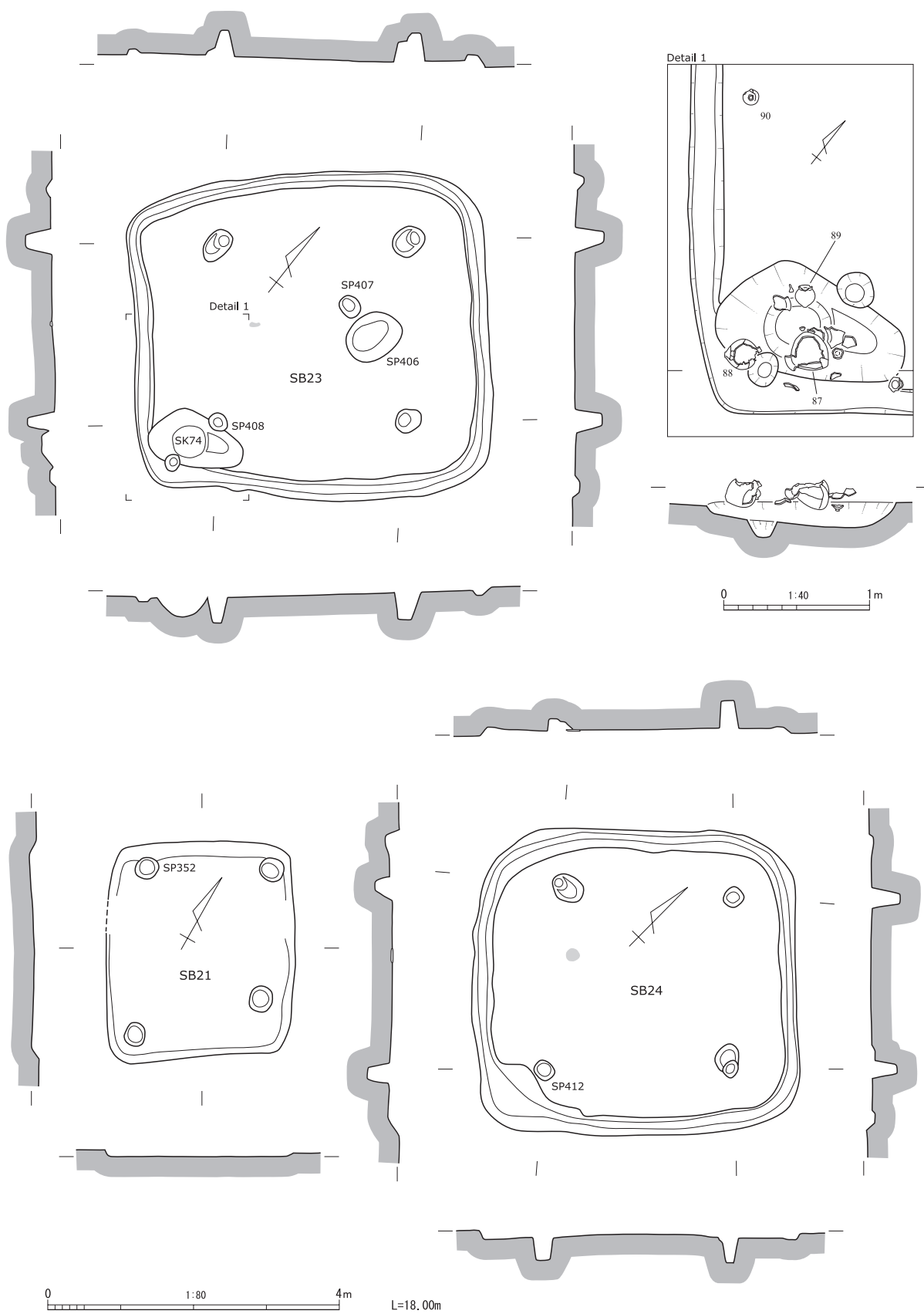


Fig.72 SB21・23・24 実測図

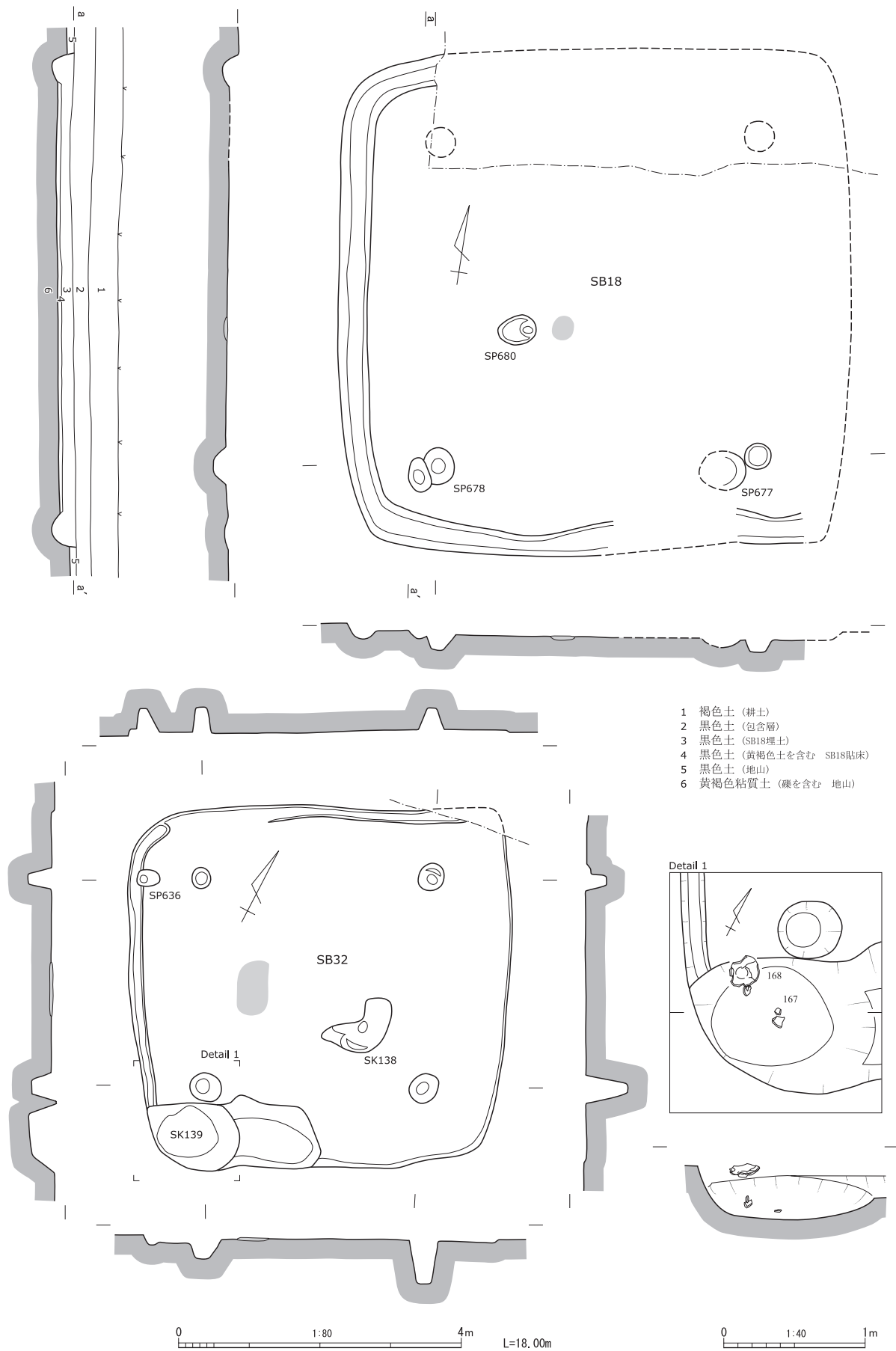


Fig.73 SB18・32実測図

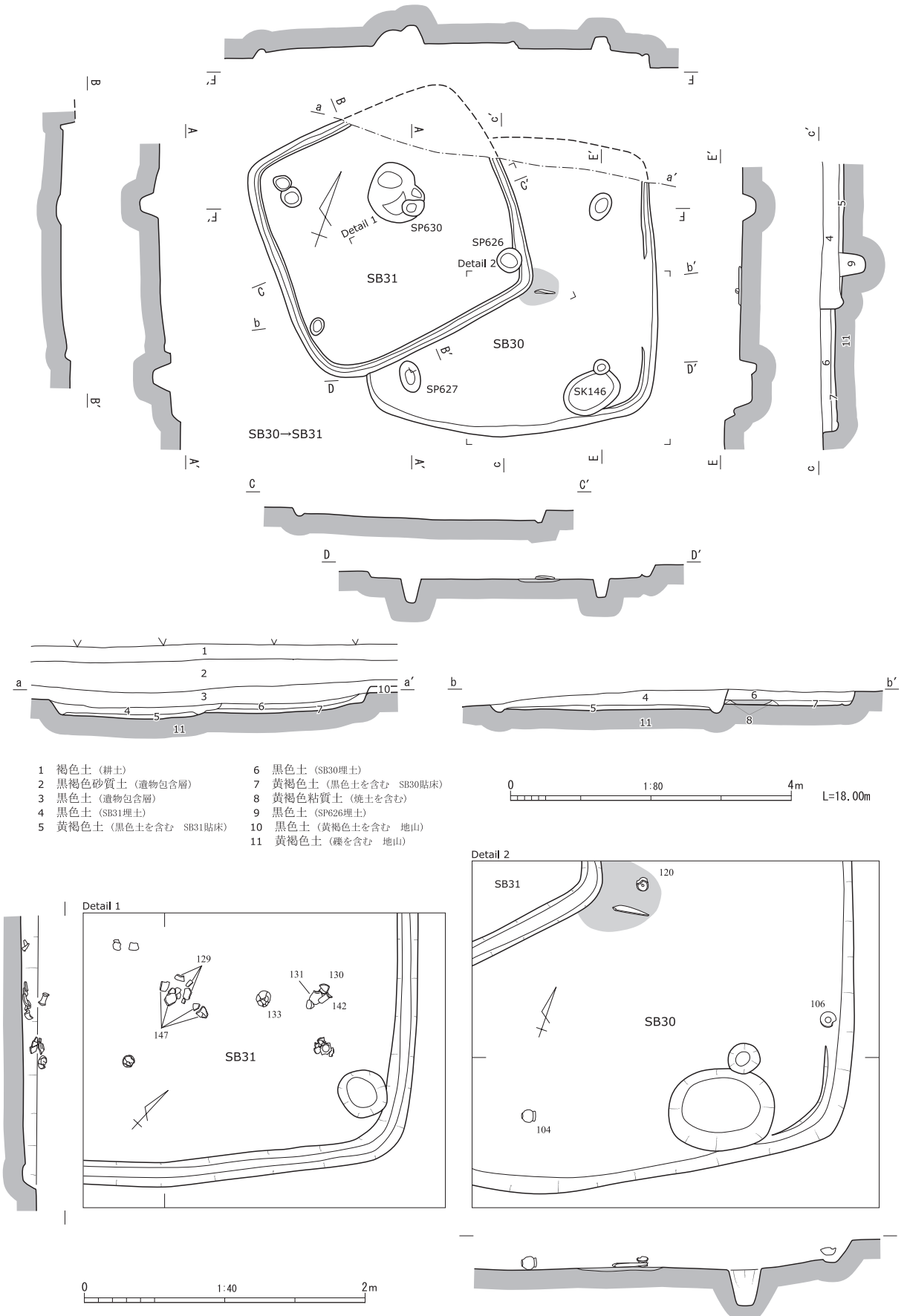


Fig.74 SB30・31 実測図

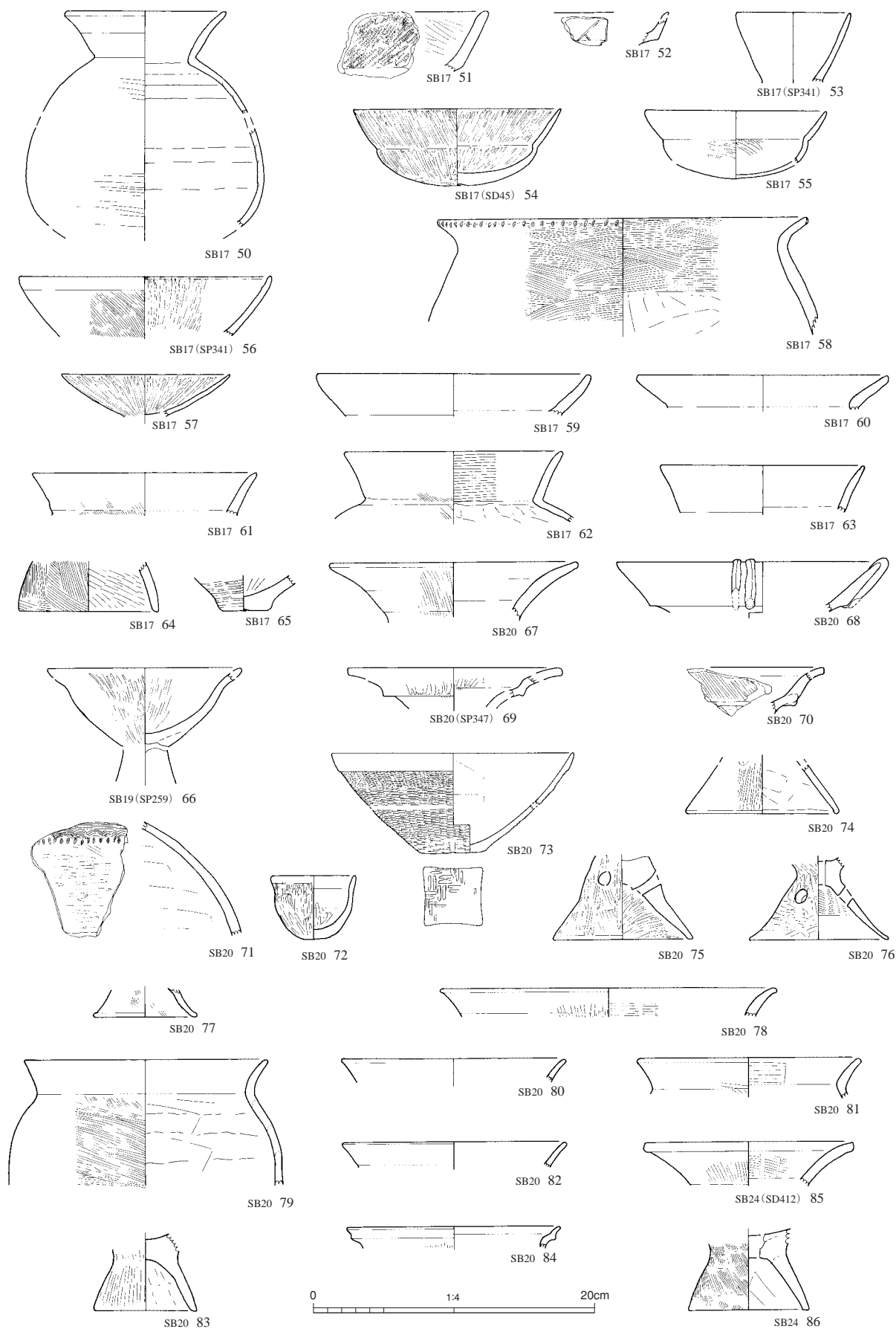


Fig.75 古墳時代 竪穴建物B群 出土遺物 (1)

SB23出土遺物 87～90はSB23の貯蔵穴SK74から一括で出土した遺物である。受口状口縁をもつ平底甕（89）や小型のS字甕（90）がみられる点で注目できる。S字甕（90）はB類であることから、これらの資料は、元屋敷Ⅰ式の新段階に位置づけられる。

SB30出土遺物 93～120はSB30から出土した遺物である。小型丸底鉢（109）や屈曲外反器台（112）が含まれることから、元屋敷Ⅱ式新段階に位置づけられる。肩部に幅広の直線文をもつ壺（98）や口縁端部に刺突文をもつ甕（114）などは元屋敷Ⅰ式期にさかのぼる遺物とみられるので、混入品の可能性がある。107は脚台部をもつ鉢で、精緻な胎土を用い、外面には細かなヨコミガキが施されている。

SB31出土遺物 121～163はSB31から出土した遺物である。小型丸底鉢（135・136）や、S字甕C類（161）が含まれることに加え、柱状の脚部をもつ屈折脚高坏（142・143）がみられる点で元屋敷Ⅲ式に位置づけられる。

その他竪穴建物B群出土遺物 上述の資料以外で注目できる資料について触れておく。

SB19から出土したく字口縁をもつ椀形高坏（66）は、弥生時代的な形態とみられる。類例に、SB47から出土した188、SZ13から出土した260がある。元屋敷Ⅰ式古段階までは、こうした形態の高坏がわずかに残存している可能性が高い。

SB32から出土した鉢（168）は壺の底部を製品にした形態であり、口縁部に7箇所穿孔がみられる。SX01から出土したFig.50-165も類似品であるが、詳しい用途は不明である。

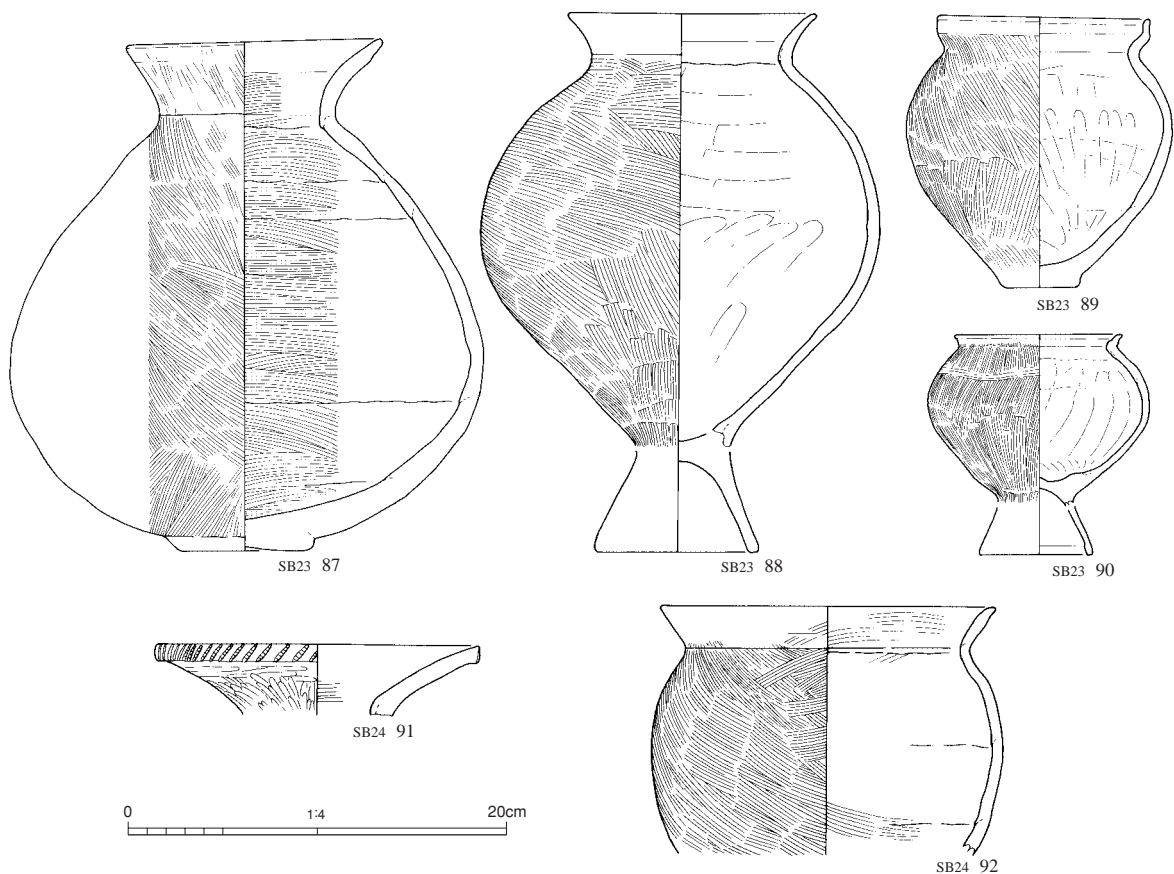


Fig.76 古墳時代 竪穴建物B群 出土遺物 (2)

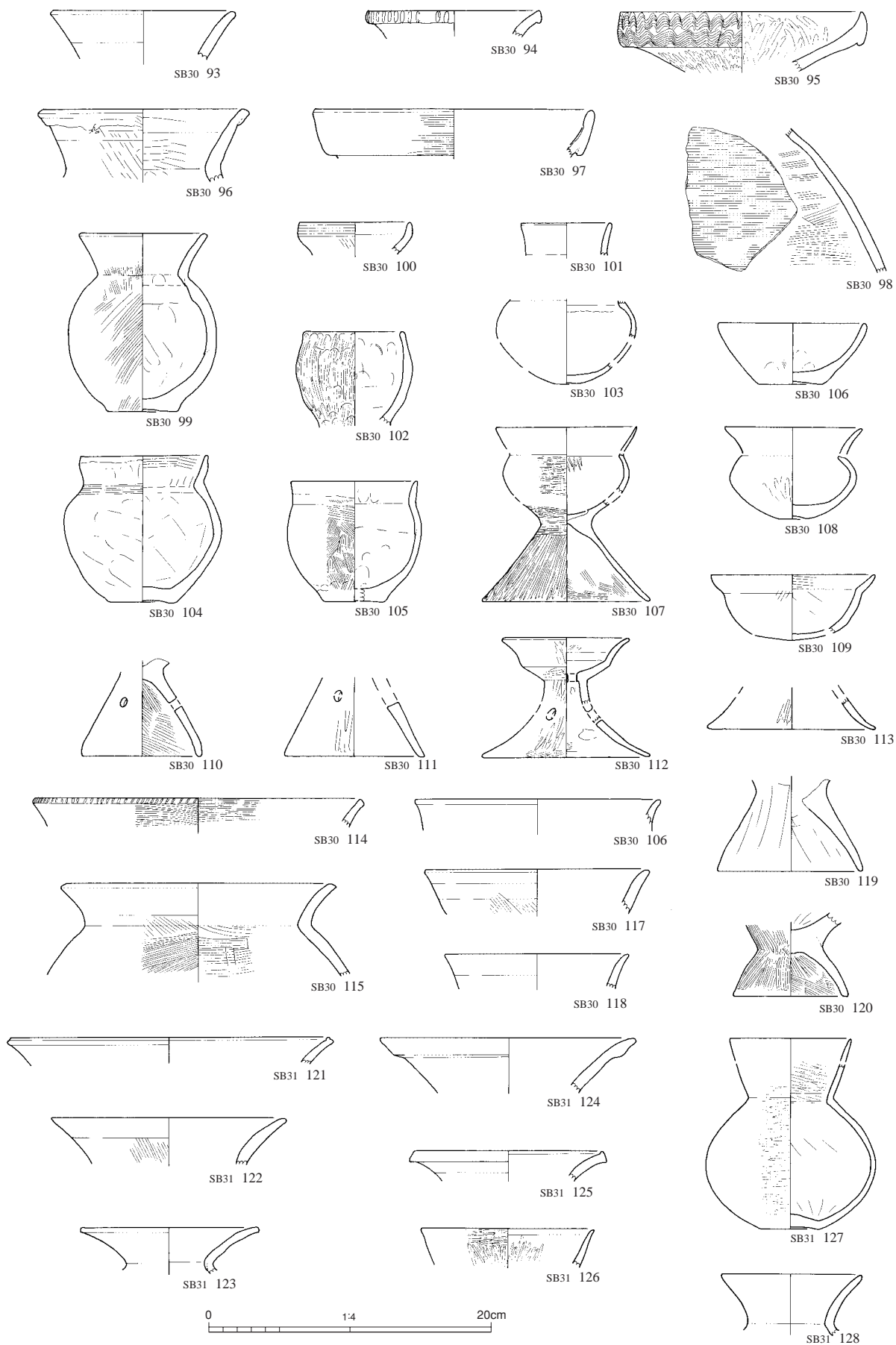


Fig.77 古墳時代 竪穴建物B群 出土遺物 (3)

3 古墳時代

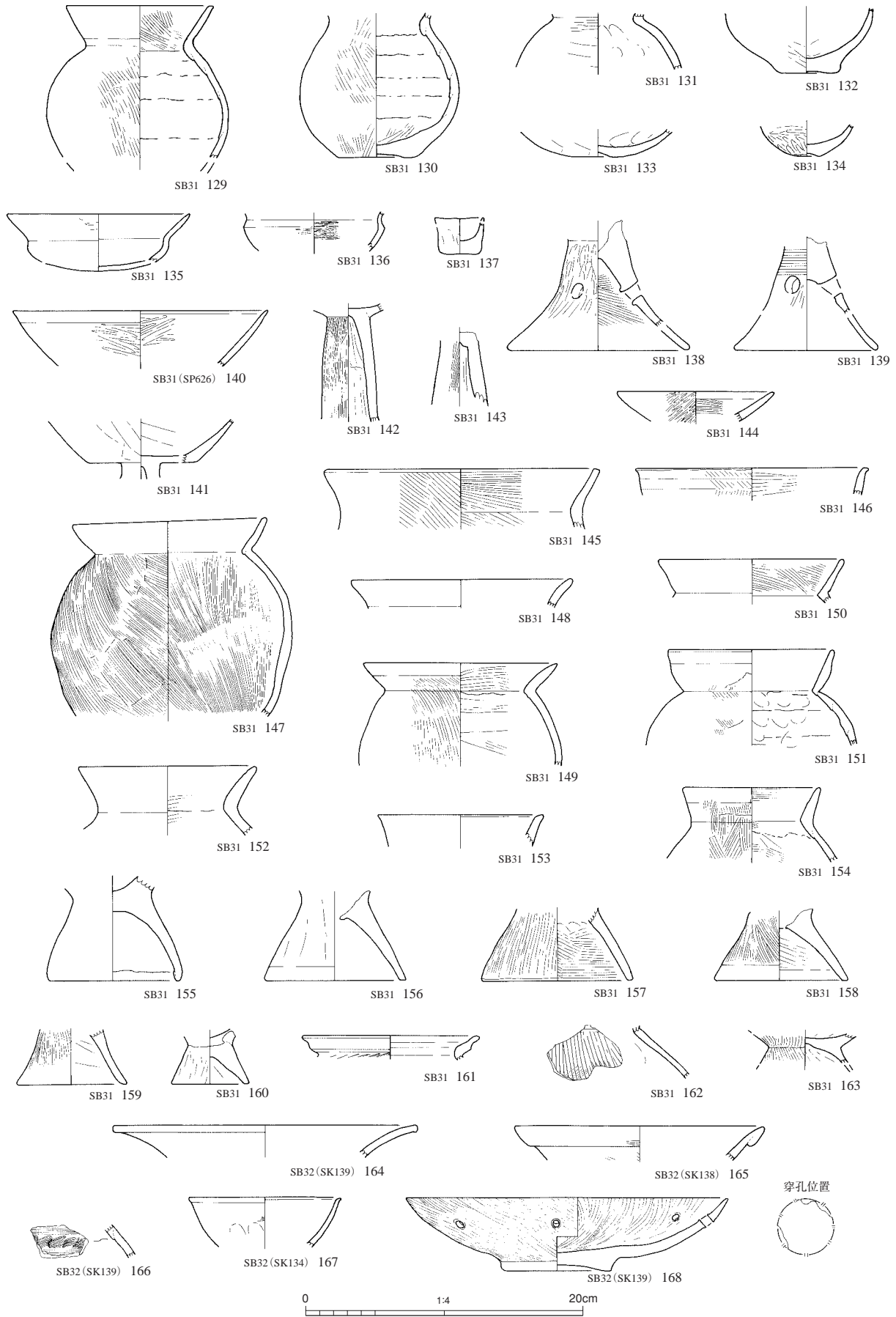


Fig.78 古墳時代 豎穴建物B群 出土遺物 (4)

③ 竪穴建物C群

群構成 竪穴建物C群は高位面の東側に位置し、SB27・33、38～40、53が該当する。地形の傾向から、南北にはさらに多くの建物群が展開するとみられる。竪穴建物C群は同時代の方形周溝墓とも重なり、遺構の遺存状況は良好ではない。

SB27 (Fig.80) SB27はG-4区で検出した竪穴建物で、南北4.6mの規模をもつ。柱穴と炉跡が確認できる。SB27からは、169・170の遺物が出土した。出土遺物から、SB27は元屋敷I式期の遺構の可能性はある。

SB33 (Fig.80) SB33はH-4区で検出した竪穴建物で、一辺7mを超える大型の建物とみられる。柱穴、炉跡、壁溝が確認できる。SB33からは、171・172の遺物が出土した。SB33は古墳時代の方形周溝墓SZ13と重なっている。一般的に同時代の竪穴建物と方形集墓が重なっている場合、墳丘を削平し周溝を埋めて竪穴建物を構築することは想定しにくく、竪穴建物が方形周溝墓に先行するとみられる。SB33より新しいとみられるSZ13は、後述するように元屋敷I式古段階の築造であることから、SB33の構築時期も元屋敷I式古段階の中に収まると考えられよう。

SB38 (Fig.81) SB38はG-4区で検出した竪穴建物で、東西3.3mの規模をもつ。柱穴は並びが悪く、存在しない可能性がある。床面中央南よりにおいて置石炉を検出した。SB38からは173の遺物が出土したが、時期を明確にできず帰属時期は不明である。

SB39 (Fig.81) SB39はG-5区で検出した竪穴建物で、南北5.2mの規模をもつ。注穴は不明確であるが壁溝、炉跡が確認できた。SB39からは、174の遺物が出土した。刺突をもつ甕の口縁部であることを重視すれば、SB39は元屋敷I式古段階の遺構の可能性はある。

SB40 (Fig.81) SB40はF-4区で検出した竪穴建物であるが、平面形態は把握できなかった。この建物に伴う明確な出土遺物はない。

竪穴建物C群出土遺物 (Fig.79) 169～178は、竪穴建物C群から出土した遺物である。良好な資料がなく、遺物群の時期を明確にすることが難しい。175は肩部に模様帯をもつ広口壺である。肩部には縦方向の櫛描文の下に直線文が施されている。

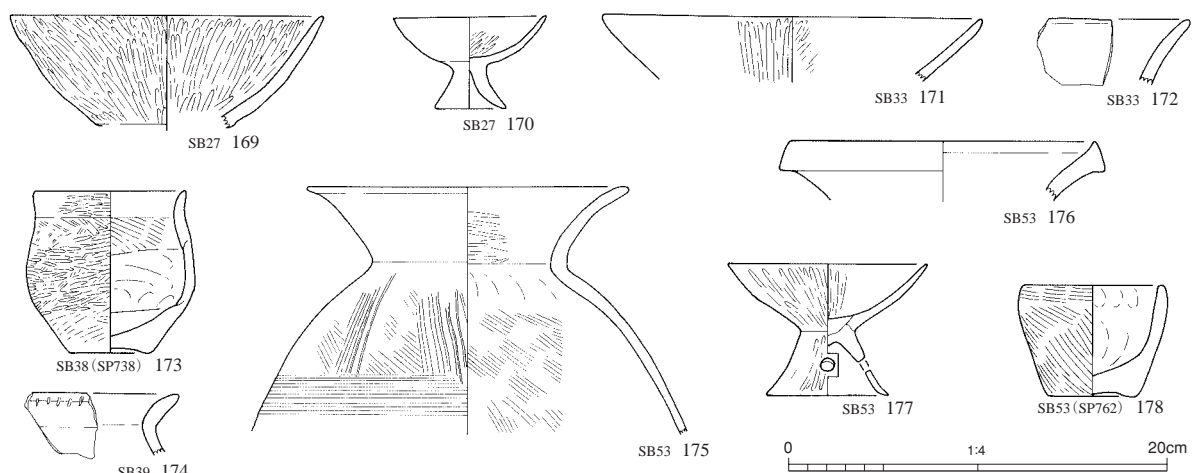


Fig.79 古墳時代 竪穴建物C群 出土遺物

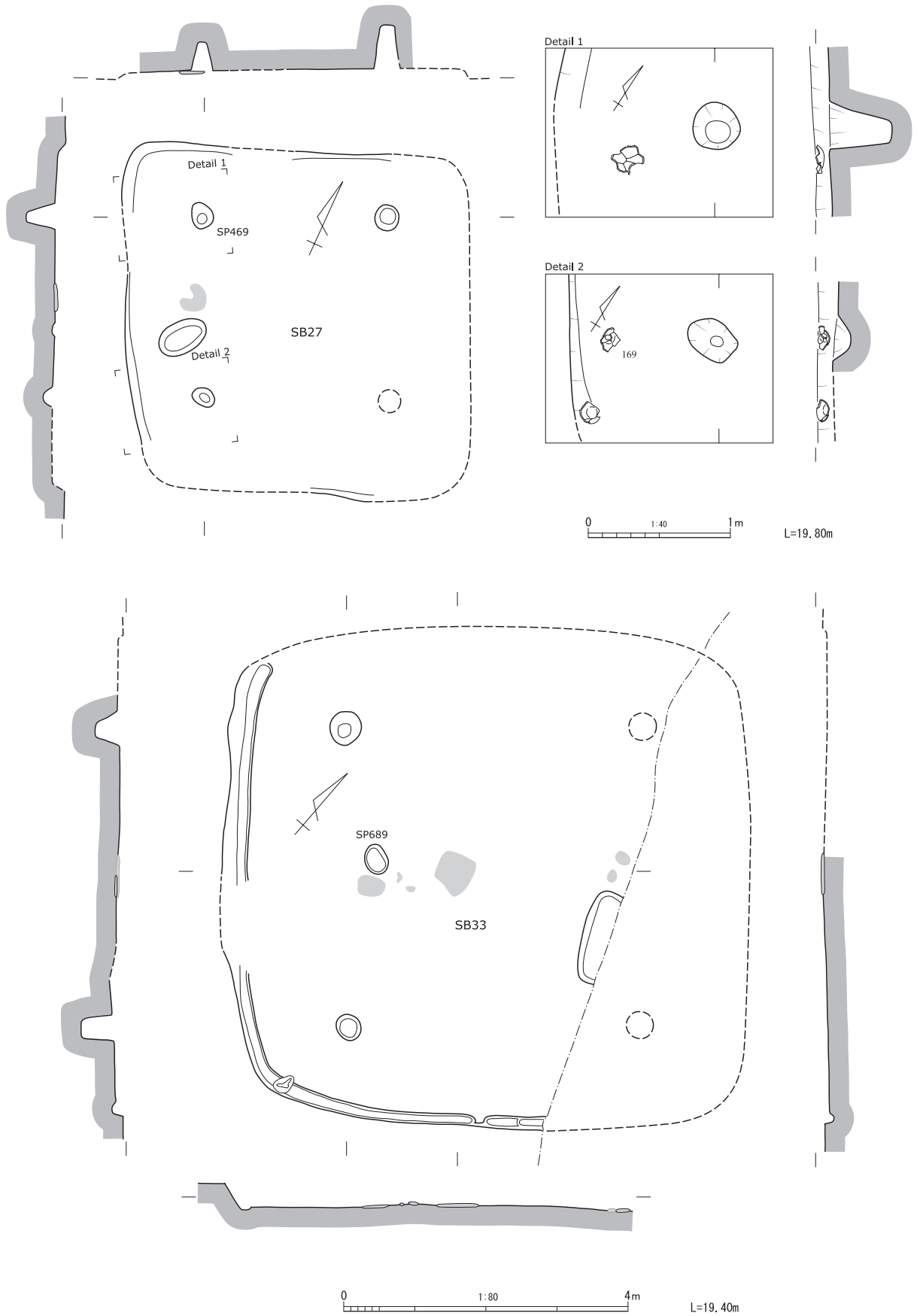


Fig.80 SB27・33 実測図

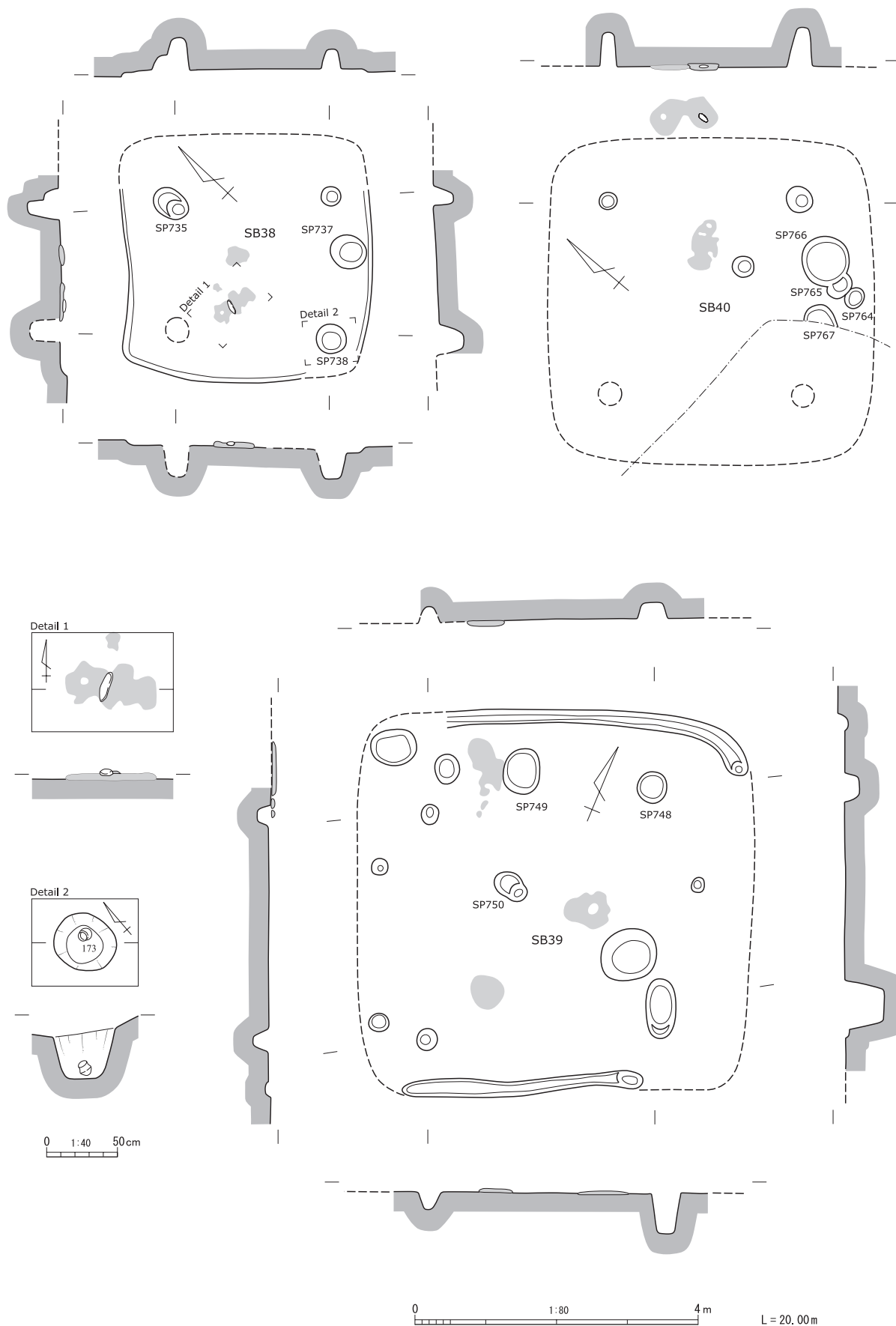


Fig.81 SB38・39・40実測図

③ 竪穴建物D群

群構成 竪穴建物D群はC群の西側、高位面の中ほどに展開している。SB41～52、54～59、52が該当する。建物の密集度が最も高く、建物どうし切り合う遺構も多い。竪穴建物D群は、神宮寺川を眼下に望む位置にあり、水場に最も近い位置に構築された建物群といえる。

SB41 (Fig.82) SB41はF-4区で検出した大型の竪穴建物で、一辺7mほどの規模をもつ。大部分が発掘区外にあり、北西部分の柱穴と、壁溝が確認できたのみである。床面が深く、遺構はしっかりと掘削されている。北東部分には貯蔵穴のような掘り込みがあるが、大部分が破壊されており、詳細は不明である。SB41の北東部床面からは、179～185の遺物が出土した。出土遺物から、SB41は元屋敷I式古段階の遺構と捉えられる。

SB43 (Fig.83) E-4区で検出した竪穴建物で、東西5.2mの規模をもつ。柱穴、炉跡、壁溝が確認できる。SB43からは、186の遺物が出土した。SB43は時期を明確にできる遺物に恵まれず、正確な帰属時期は不明である。

SB44 (Fig.83) F-4区で検出した竪穴建物で、南北5.3mの規模をもつ。柱穴、炉跡、壁溝、貯蔵穴が確認できる。貯蔵穴は長軸70cmほどの規模で、南東の隅に設定されている。SB44は図示できる遺物に恵まれず、正確な帰属時期は不明である。

SB46 (Fig.84) E-4区で検出した竪穴建物で、東西4.7m、南北4.8mの規模をもつ。平面形は不明確であるが、柱穴、炉跡、貯蔵穴は確認できる。貯蔵穴は長軸50cmほどの規模で、南西の隅に設定されている。SB46は図示できる遺物に恵まれず、正確な帰属時期は不明である。

SB47 (Fig.84) E-4区で検出した小型の竪穴建物で、東西3.2m、南北3.2mの規模をもつ。炉跡が僅かにみられるほかは、柱穴、壁溝などはみられない。SB47からは、187～190の遺物が出土した。出土遺物から、SB47は元屋敷I式古段階の遺構と捉えられる。

SB48 (Fig.84) E-4区で検出した小型の竪穴建物で、東西3.1m、南北3.4mの規模をもつ。炉跡が僅かにみられるほかは、柱穴、壁溝などはみられない。SB48からは、191の遺物が出土した。SB48は時期を明確にできる遺物に恵まれず、正確な帰属時期は不明である。

SB49 (Fig.85) E-4区で検出した竪穴建物で、東西4.8m、南北5.0mの規模をもつ。柱穴、炉跡、壁溝、貯蔵穴が確認できる。貯蔵穴(SP841)は長軸80cmほどの規模で、南の隅に設定されている。SB49からは、192～198の遺物が出土した。出土遺物に肩部に櫛描文をもつ壺(194)や口縁端部に刺突文をもつ甕(197)を含むことから、SB49は元屋敷I式古段階の遺構と捉えられる。

SB50 (Fig.82) SB50はF-4区で検出した小型の竪穴建物で、東西3.0m、南北3.0mの規模をもつ。壁溝が確認できるが、柱穴、炉跡などはみられない。図示できる遺物に恵まれず、正確な帰属時期は不明である。

SB51 (Fig.82) SB51はE-4区で検出した竪穴建物で、東西3.0m、南北3.2mの規模をもつ小型の建物である。炉跡は確認できるが、柱穴、壁溝などはみられない。SB51の埋土は遺構検出上面において炭化物や焼土、粘土が濃密に分布しており、他の竪穴建物の埋土とは様相が異なっていた。埋土の特徴から、建物が焼失した可能性が高い。炉跡には長径20cmほどの自然礫が置かれており、

置石炉と認定できる。

SB51の床面はコ字状に周囲を深く掘削しており、中央部が高くされている状況が認められた。床面は周囲の掘削部分を埋めて、中央の高さに合わせて整地されていたとみられる。こうした床面基盤の細工は、浜北区にある東原遺跡33次調査で検出された弥生時代後期の遺構、SB14・18などに類例がある（浜文振2008）。建物内の除湿機能を高める造作と捉えられよう。

なお、SB51は図示できる遺物に恵まれず、正確な帰属時期は不明である。

SB52 (Fig.86) F-4区で検出した竪穴建物で、東西3.5mの規模をもつ。柱穴、炉跡が確認できる。比較的小型の建物であるが柱穴をもつ確実な事例である。SB52は、図示できる出土遺物に恵まれず、正確な帰属時期は不明である。

SB54 (Fig.85) E-4区で検出した小型の竪穴建物で、東西3.6m、南北3.7mの規模をもつ。炉跡、壁溝、貯蔵穴が確認できるが、柱穴は明確でない。東西の中軸に小穴が2箇所、壁際にみられるが、切りあい関係が明確で、この建物に伴うものではない。貯蔵穴は長軸70cmほどの規模で、北東の隅に設定されている。SB54からは、199～203の遺物が出土した。出土遺物から、SB54は元屋敷Ⅱ式古段階の遺構と捉えられる。

SB56 (Fig.86) E-3区で検出した竪穴建物で、東西3.4mの規模をもつ。炉跡がみられるが、柱穴、壁溝などは確認できない。床面には土坑がいくつかみられが、貯蔵穴とは断定できない。SB56からは204の遺物が出土したが、時期を明確にできず、遺構の正確な帰属時期は不明である。

SB57 (Fig.87) E-3区で検出した竪穴建物で、東西4.8m、南北4.8mの規模をもつ。柱穴、炉跡、壁溝、貯蔵穴が確認できる。東側は方形周溝墓SZ21の周溝（SD159）が重なり、一部が破壊されている。切り合い関係から、SB57→SZ21の築造順序が想定できる。貯蔵穴（SP871）は長軸50cmほどの規模で、南東の隅に設定されている。SB57からは、205～208の遺物が出土した。接合部の粘土帯を残す甕脚台部（208）を含むことから、SB57は元屋敷Ⅰ式古段階の遺構と捉えられる。

SB58 (Fig.87) E-3区で検出した竪穴建物で、全体形は不明確であるが、一辺4.5mほどの規模をもつと捉えられる。柱穴、炉跡、壁溝、貯蔵穴が確認できる。貯蔵穴（SP927）は長軸60cmほどの規模で、東の隅に設定されている。SB58からは、209の遺物が出土したが、時期を明確にできず、遺構の正確な帰属時期は不明である。

SB62 (Fig.86) E-3区で検出した竪穴建物で、北東隅の一部が確認できたのみである。炉跡は僅かにみられるが、柱穴、壁溝などは不明瞭である。SB62からは211～213の遺物が出土したが、時期を明確にできる遺物に恵まれず、正確な帰属時期は不明である。

竪穴建物D群出土遺物 (Fig.88) 179～213は、竪穴建物D群から出土した遺物である。SB41・49・54・57からの出土遺物が比較的まとまっている。以下、これらの遺構出土遺物について、触れておく。

SB41出土遺物 179～185はSB41から出土した遺物である。肩部に櫛描文をもつ内彎複合口縁壺（179）を含むことから、元屋敷Ⅰ式古段階の遺物群と捉えられる。

SB47出土遺物 187～190はSB47から出土した遺物である。弥生時代的形態の椀形高坏（188）があり、元屋敷Ⅰ式古段階に位置づけられる。

3 古墳時代

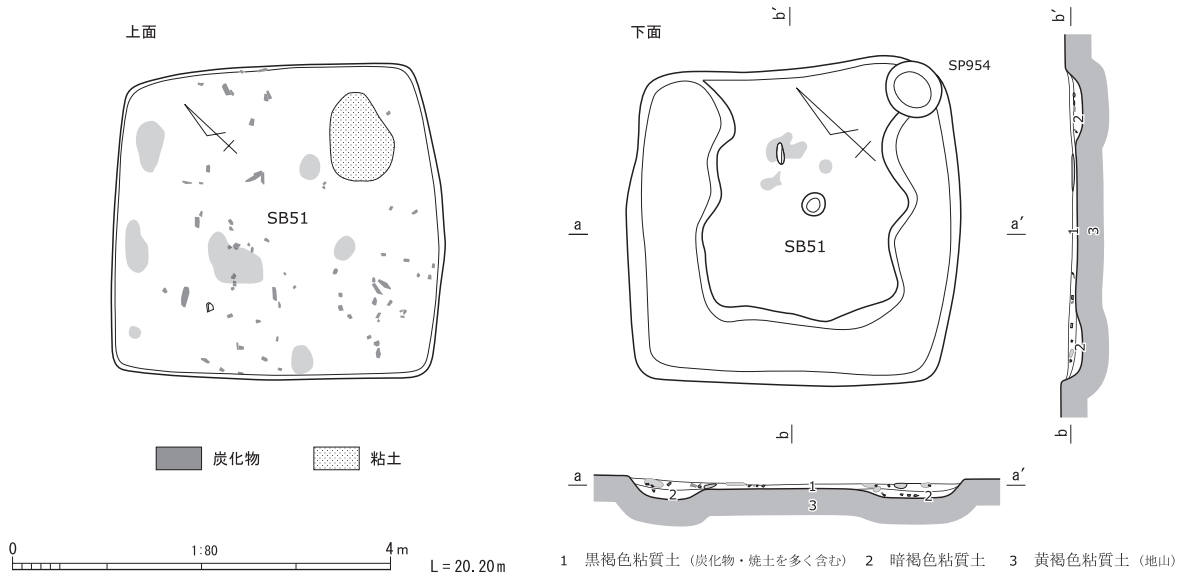
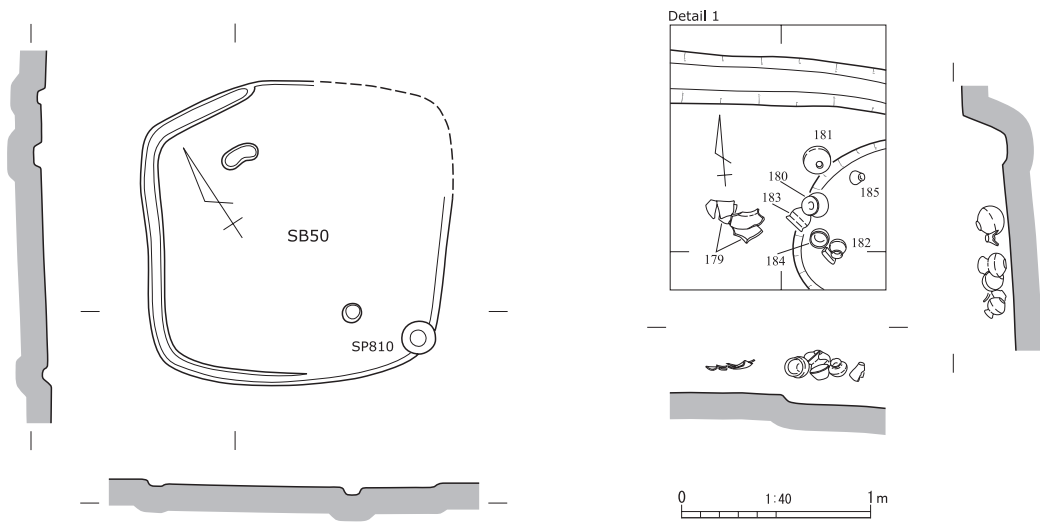
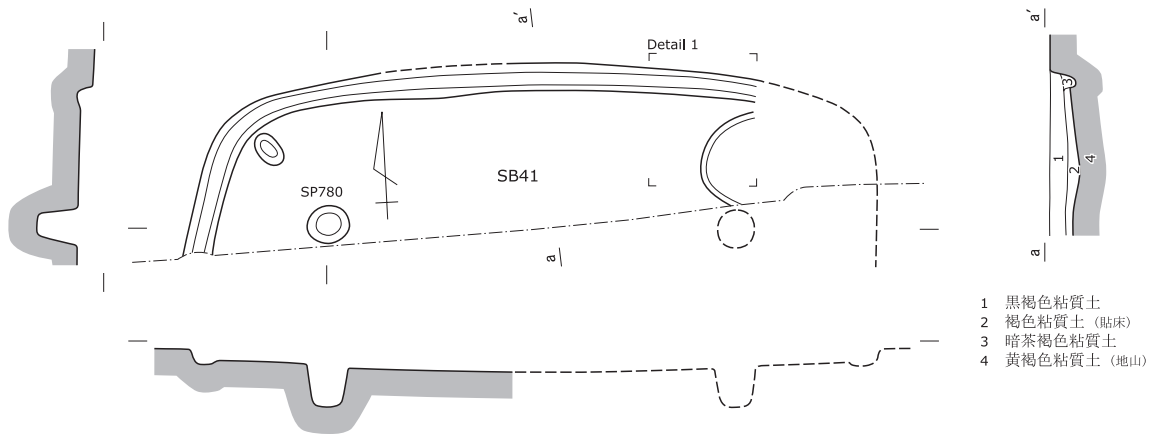


Fig.82 SB41・50・51実測図

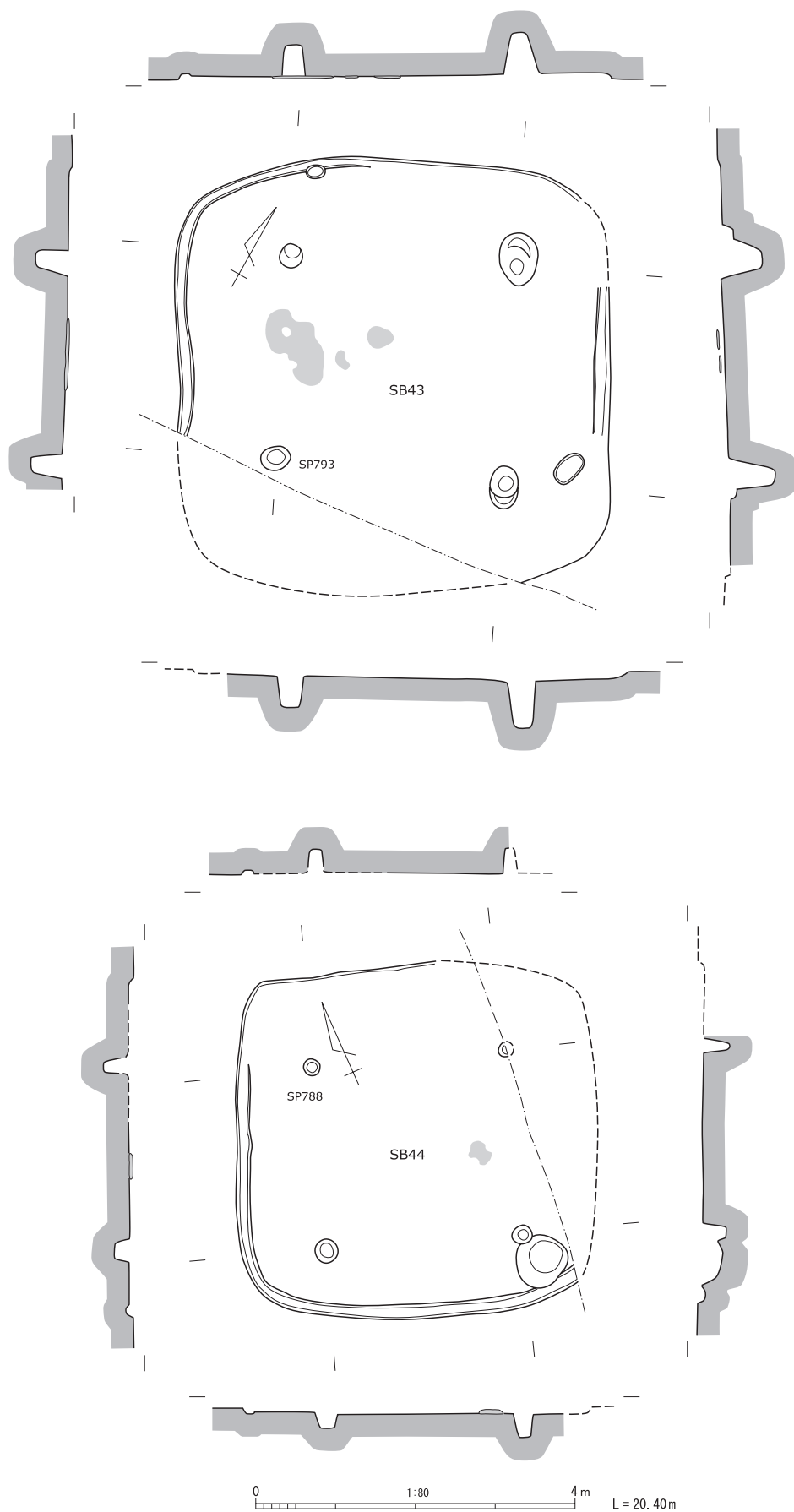


Fig.83 SB43・44 実測図

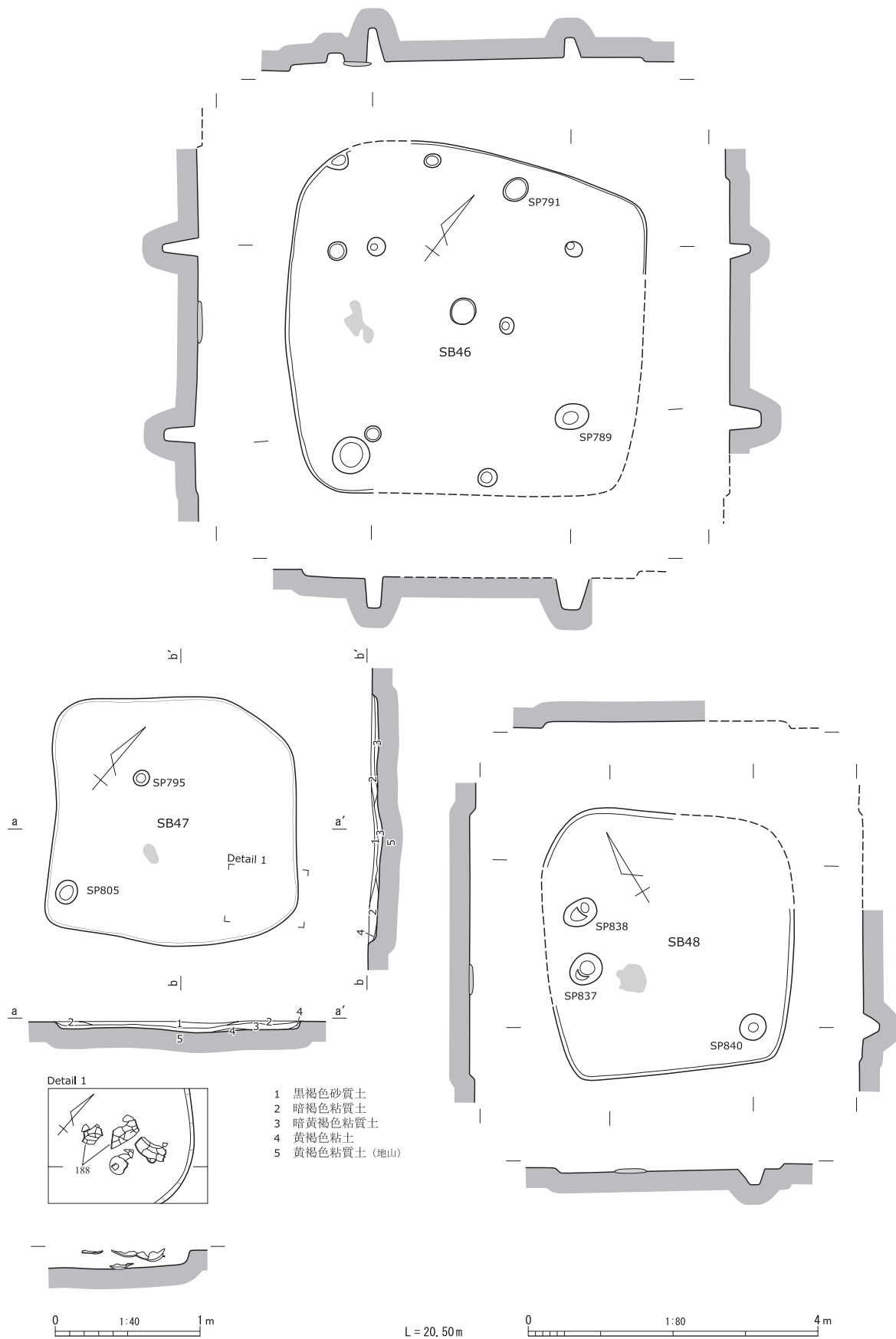


Fig.84 SB46・47・48実測図

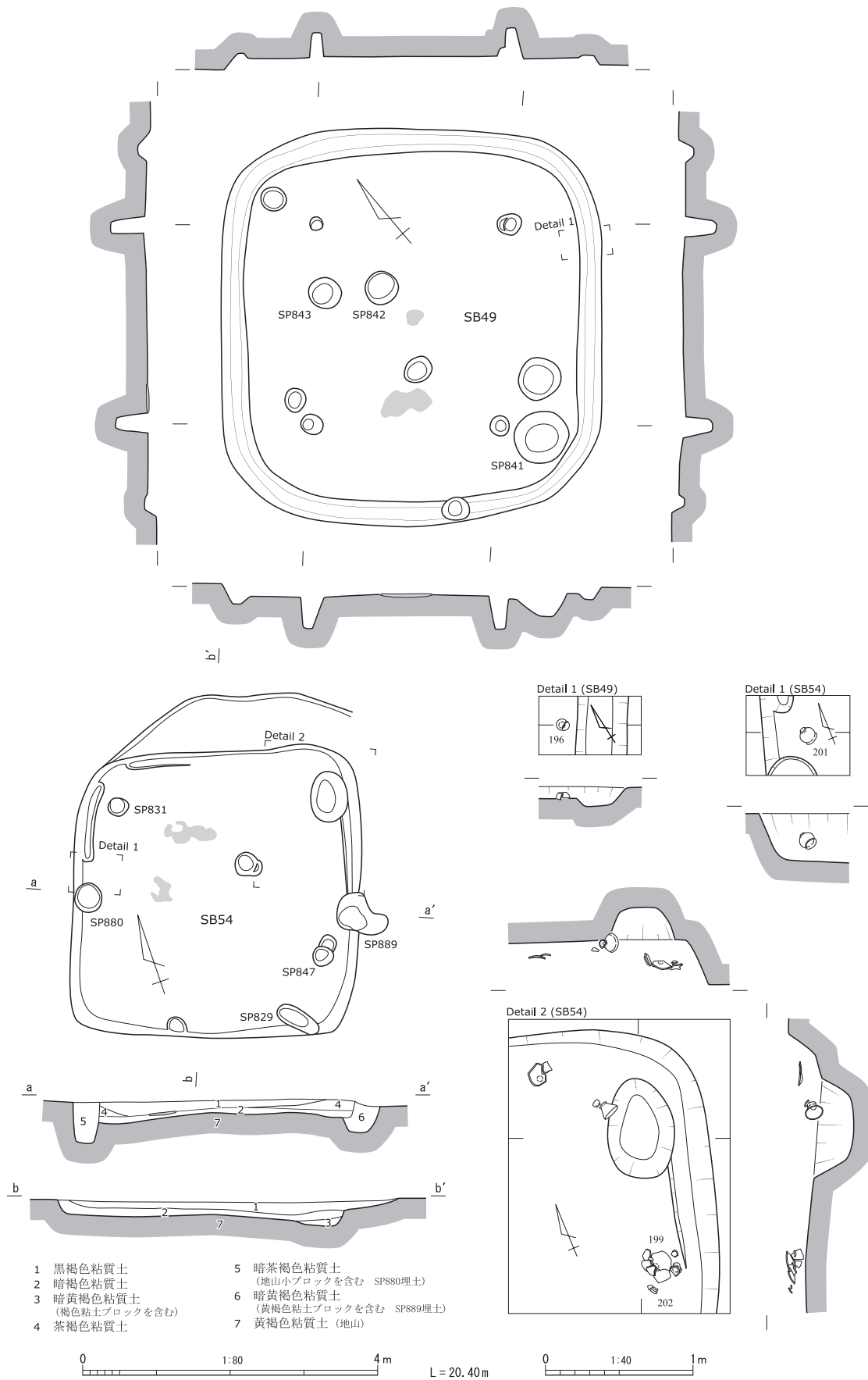


Fig.85 SB49・54実測図

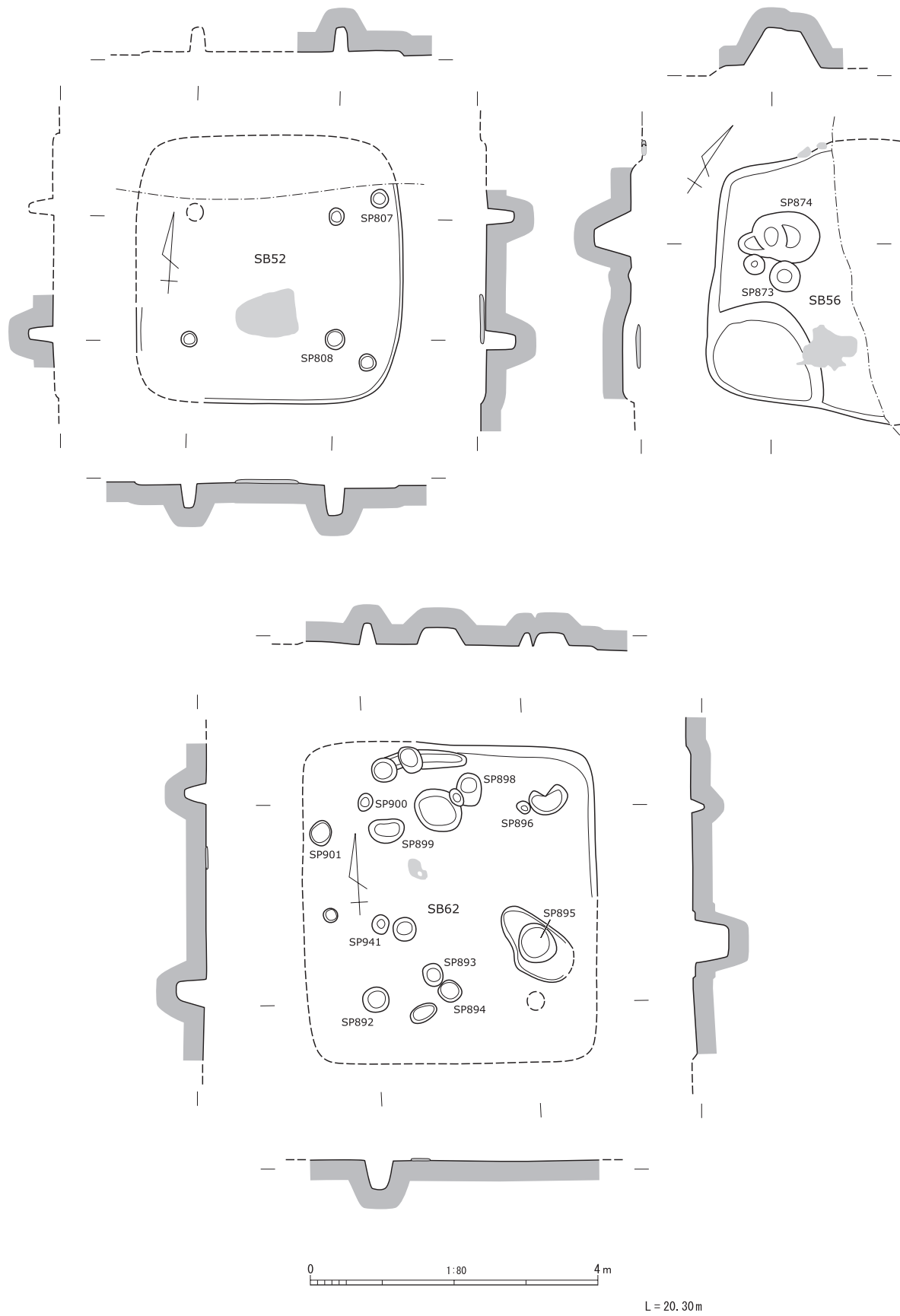


Fig.86 SB52・56・62 実測図

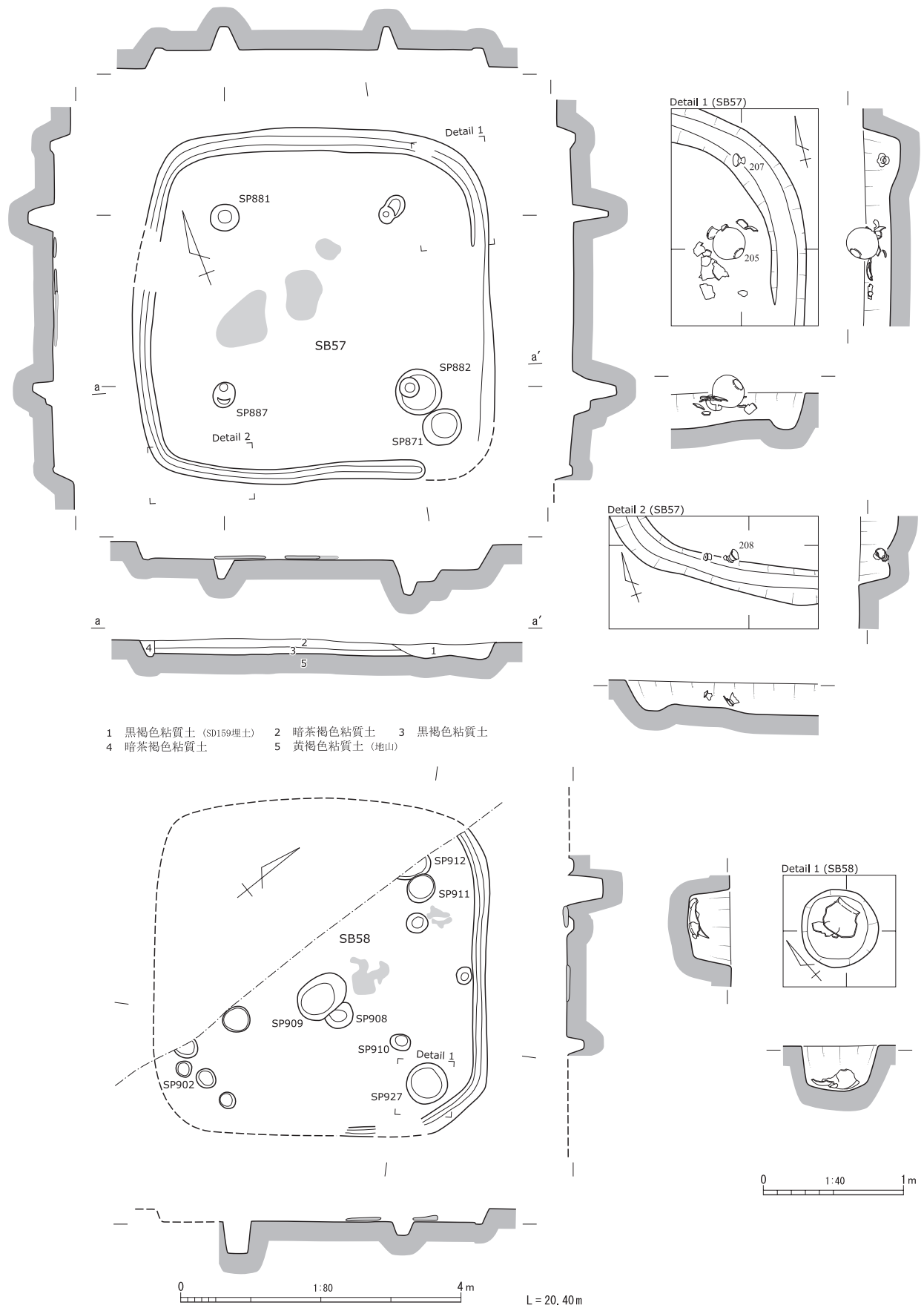


Fig.87 SB57・58実測図

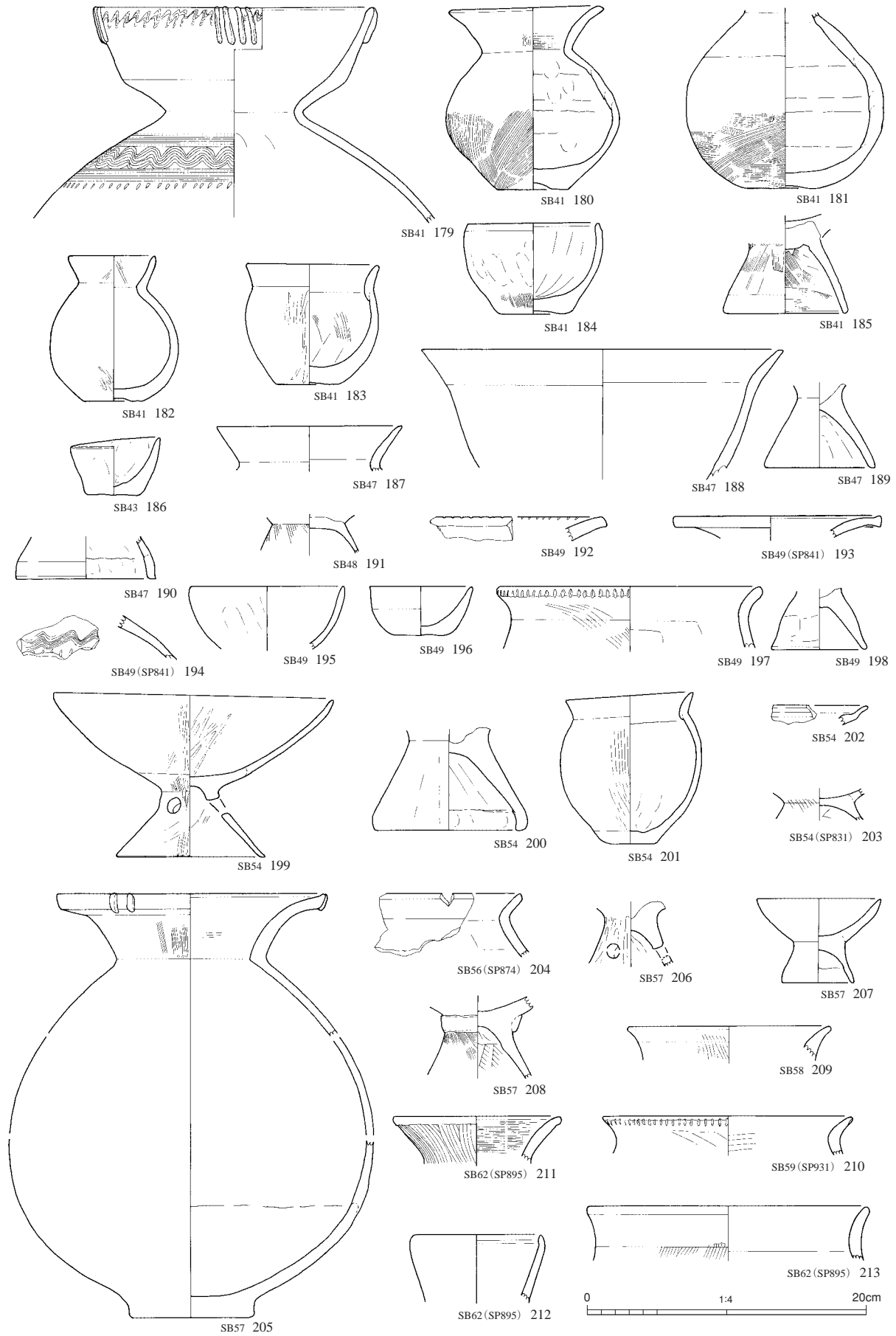


Fig.88 古墳時代 豎穴建物D群 出土遺物

SB49出土遺物 192～198はSB49から出土した遺物である。肩部に櫛描文をもつ壺（194）や口縁端部に刺突文をもつ甕（197）を含む。これらの特徴から、SB49出土遺物は元屋敷Ⅰ式古段階に位置づけられる。

SB54出土遺物 199～203はSB54から出土した遺物である。く字口縁の平底甕（201）は古相を示す遺物であるが、新相の土器であるS字甕C類（202）が共伴する。有稜高坏（199）も新相の形態を示すことから、平底甕も元屋敷Ⅱ式古段階まで残存するものと捉えたい。

SB57出土遺物 205～208はSB57から出土した遺物である。口縁に棒状浮文をもつ壺（205）や接合部に粘土帯を残す甕（208）を含むことから、元屋敷Ⅰ式古段階の中でも古い一群に位置づけられる。

その他竪穴建物D群出土遺物 210はSB59から出土した口縁に刺突文をもつ甕である。元屋敷Ⅰ式古段階に位置づけられ、遺構の帰属時期を示すものと捉えたい。

④ 竪穴建物E群

群構成 竪穴建物E群は高位面の北側に展開している。竪穴建物E群は、SB36・63・64が該当する。広範囲に建物群が展開するとみられるが、調査区の制約があり、遺構の広がりを明確に把握することが難しい。

SB36 (Fig.90) F-1区で検出した竪穴建物で、南側の一部を確認したにとどまる。東西6mほどの竪穴状の掘り方が確認できたが、正確な平面形態は不明である。炉跡、柱穴の存在は確認できていない。SB36からは、214～223の遺物が比較的まとまった状態で出土した。出土遺物から、SB36は元屋敷Ⅰ式新段階の遺構と捉えられる。

SB63 (Fig.90) G-1区で検出した竪穴建物で、北側の一部を確認したにとどまる。壁溝が確認できたが、その他の詳細は不明確である。SB63は、SB64と重なっており、切り合い関係からSB64→SB63の築造順序がうかがえる。SB63は図示できる出土遺物がないため、明確な築造時期は不明である。

SB64 (Fig.90) G-1区で検出した竪穴建物で、北側の一部を確認したのみである。炉跡、柱穴、壁溝を確認した。壁溝は直線を描かないことから、隅丸長方形である可能性がある。SB64は、図示できる出土遺物がないため、明確な築造時期は不明である。建物の平面形が隅丸長方形であるなら、弥生時代中期の建物である可能性もある。

SB36出土遺物 (Fig.89) 竪穴建物E群から出土した遺物は、SB36からの出土遺物（214～223）のみである。く字口縁の平底甕（218）、柱状脚化した開脚高坏（219）、S字甕脚台部（223）などが注目できよう。これらSB36出土遺物は、元屋敷Ⅰ式新段階に位置づけられる。

⑤ 竪穴建物F群

群構成 竪穴建物F群は高位面の北側に展開している。竪穴建物F群は、SB37・60・61が該当する。北側にもさらに建物が展開しているとみられる。

SB37 (Fig.91) E-1区で検出した竪穴建物で、南北4.8mの規模をもつ。柱穴、炉跡、壁溝が確

3 古墳時代

認できる。床面の東側は、古墳時代の方形周溝墓SZ27の周溝（SD132）によって破壊されている。切り合い関係は明確でないが、SB37→SZ27の築造順序と想定できる。SZ27は元屋敷Ⅱ式期の遺構と考えられることから、SB37の帰属時期は同段階か、元屋敷Ⅰ式期に遡るとみられる。SB37からは、224の遺物が出土したが、時期を明確にすることができず、正確な築造時期は不明である。

SB60 (Fig.91) E-2区で検出した竪穴建物で、東西4.4mの規模をもつ。柱穴、炉跡、壁溝、貯蔵穴が確認できる。SB60の北側は方形周溝墓SZ24の周溝（SD171）が重なり、一部が破壊されている。切り合い関係は明確でないが、SB60→SZ24の築造順序と想定できる。この関係は、出土遺物においても矛盾もない。

貯蔵穴（SK192）は長軸70cmほどの規模で、南の隅に設定されている。SB60からは、225～227の遺物が出土した。出土遺物から、SB60は元屋敷Ⅱ式期の遺構と捉えられる。

SB61 (Fig.91) D-2区で検出した竪穴建物で、東側の一部を確認した。柱穴、壁溝が確認できる。SB61からは、228の遺物が出土したが、時期を明確にできず、遺構の正確な帰属時期は不明である。

竪穴建物F群出土遺物 (Fig.89) 224～228は、竪穴建物F群から出土した遺物である。F群から出土した遺物は少ないが、SB60からの出土遺物が比較的まとまっている。

SB60出土遺物 225～227はSB60から出土した遺物である。225は小型の鉢の底部とみられる。同形態の資料は、SK130から出土した406がある。226は有稜高坏、227はS字甕C類である。以上の遺物は、元屋敷Ⅱ式期に位置づけられる。

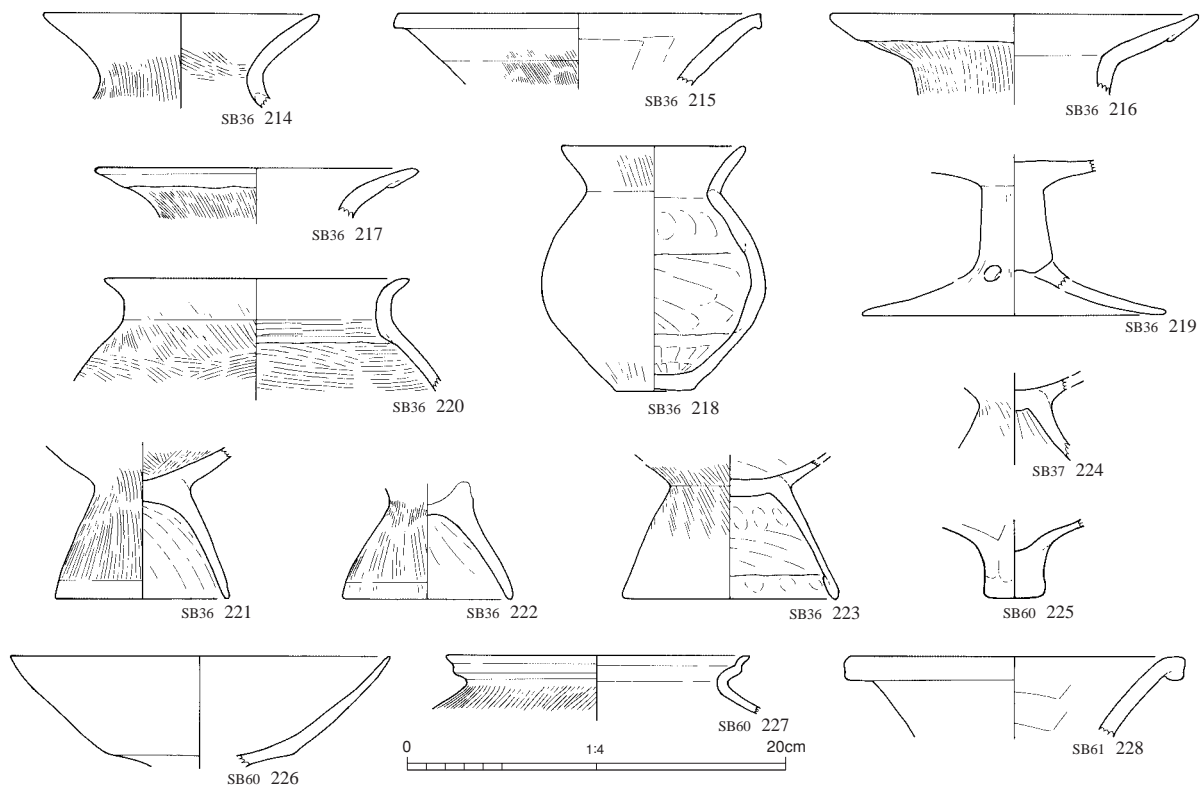


Fig.89 古墳時代 竪穴建物E・F群 出土遺物

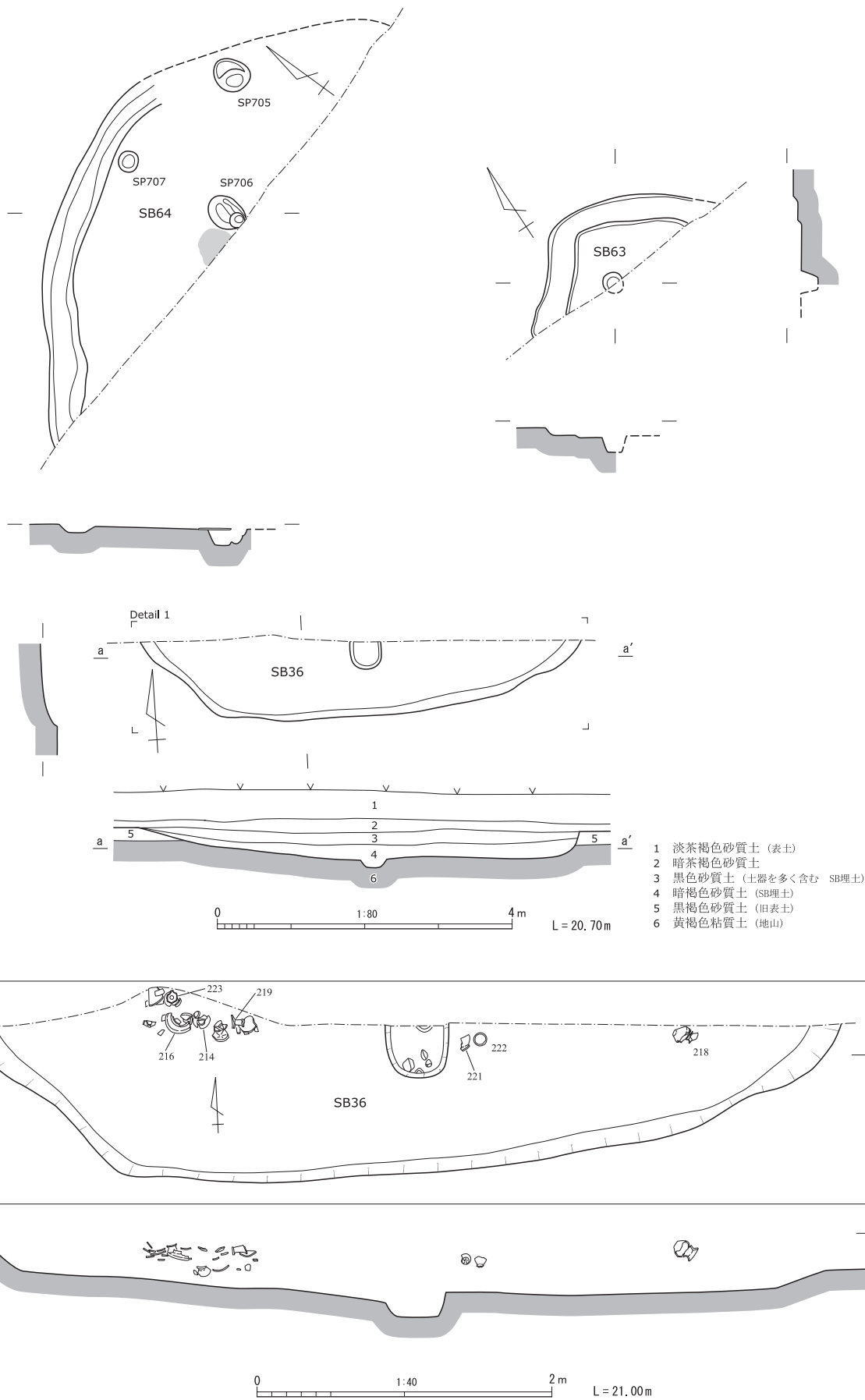


Fig.90 SB36・63・64実測図

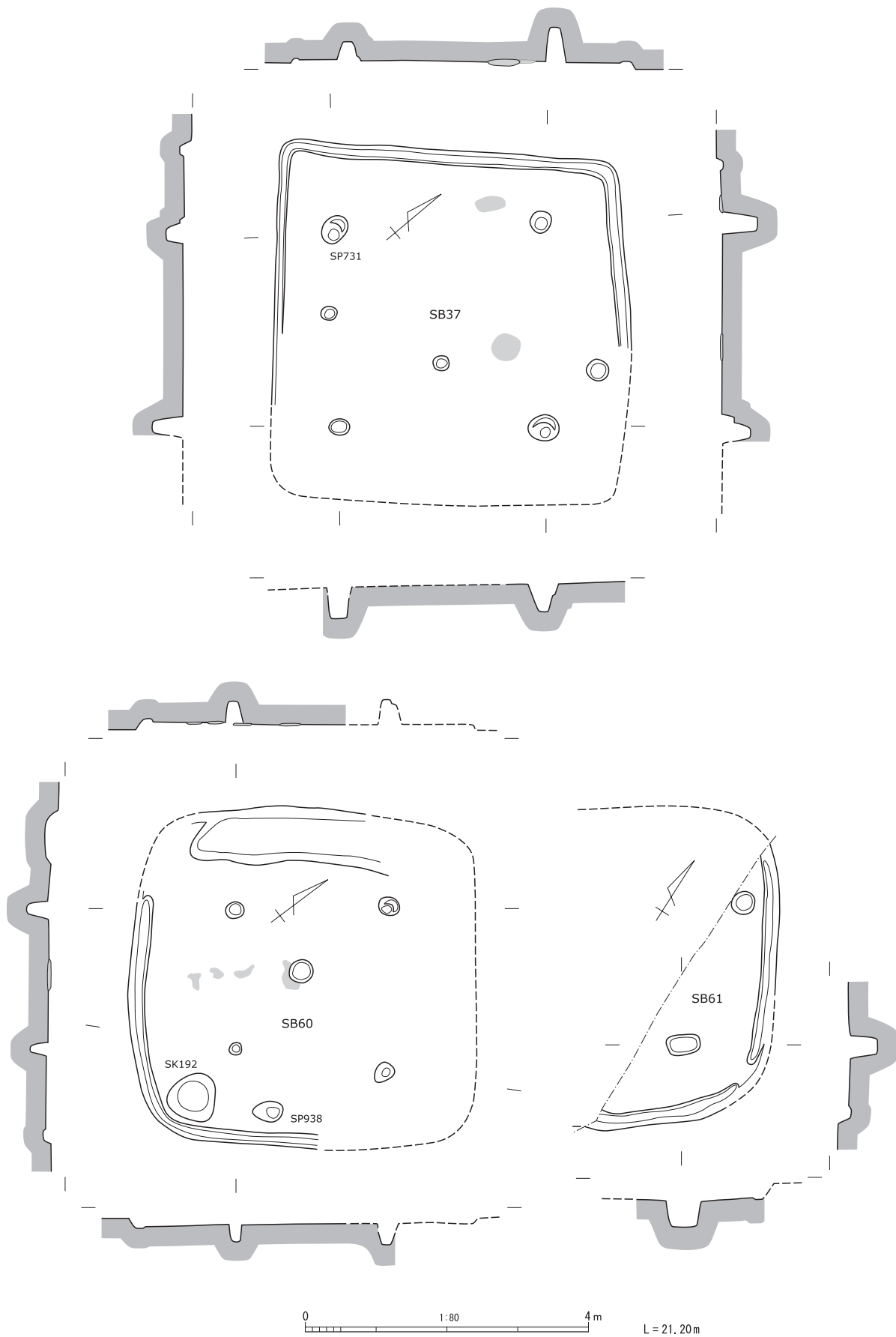


Fig.91 SB37・60・61 実測図

(4) 方形周溝墓

群別 古墳時代前期の方形周溝墓は、総数14基を確認した。分布は弥生時代の方角周溝墓と異なり、高位面にのみ確認できる。弥生時代の方角周溝墓は周溝の四隅が途切れる形態が標準形であることにたいし、古墳時代の方角周溝墓は周溝が全周するか、一つの隅だけが途切れる形態に変化している。

古墳時代の方角周溝墓を分布のまとまり、および主軸の方向からA～Cの3群に分離する(Fig.92)。以下この群別に即して各遺構の詳細を記載する。

① 方形周溝墓A群

群構成 方形周溝墓A群は高位面の東端に位置し、SZ13・16・18の3基が該当する。SZ16は全体が検出できたが、SZ13、SZ18はその一部が確認できるとどまる。SZ16とSZ18は主軸の方向が共通するが、SZ13は主軸の方向が異なる。

SZ13 (Fig.93) SZ13はH-4区で検出した方形周溝墓である。周溝は北東側の隅が途切れる形態である。北側と西側の周溝を確認した。周溝墓の全体形は本体が調査区外に至っており、不明である。

Tab.8 古墳時代 方形周溝墓

遺構	グリット	群	東西 (m)	南北 (m)	面積 (m ²)
SZ13	H-4	A群			
SZ16	G-4	A群	10.0	9.5	95.0
SZ18	G-5	A群			
SZ19	E-5	B群			
SZ20	E-3	B群			
SZ21	E-3	B群	6.0		
SZ22	D-3	B群			
SZ23	E-2	B群		6.0	
SZ24	E-2	C群			
SZ25	D-1	C群			
SZ26	D-1	C群			
SZ27	E-1	C群	9.1	10.5	95.6
SZ28	E-1	C群	7.5		
SZ29	F-1	C群	5.5		

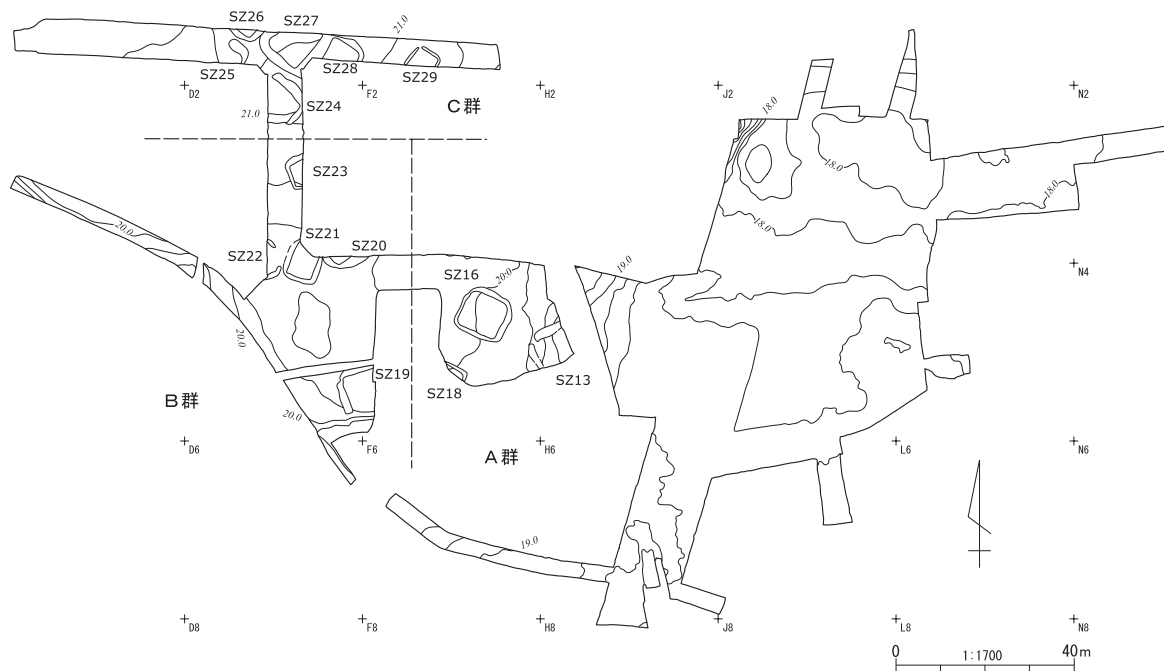


Fig.92 古墳時代 方形周溝墓分布図

3 古墳時代

西側の周溝（SD109）では、全長2mにわたって底面が深く掘削されている部分があった。この部分は、木棺などを用いた周溝内埋葬があった可能性がある。最も深く掘削されている部分は、幅1.8m、深さ0.8mほどである。北側の周溝（SD107）から口縁が欠損した壺の胴部2点（247・248）が出土した。

上述の遺物を含め、SZ13からは、229～283の遺物が出土した。出土した遺物の量が多く、編年上の基準資料になりうる。これらの出土遺物は元屋敷Ⅰ式古段階の古相（元屋敷Ⅰ式1段階）と捉えられSZ13の築造時期を示している。SZ13は、集落の形成初期に構築された方形周溝墓とみられよう。

SZ16（Fig.94） SZ16はG-4区で検出した方形周溝墓である。周溝が全周する形態であり、周溝内側の屈曲点を結んだ長さは東西10.0m、南北9.5mである。周溝は四隅が比較的浅い。東側の周溝（SD68）が広く掘削されていることにたいし、西側の周溝（SD143）は狭く浅い。東側の周溝（SD68）は、検出面の幅1.3m、深さ0.3mほどである。

SZ16は弥生時代中期末葉の方形周溝墓SZ17と重なっている。切り合い関係から、SZ17→SZ16の築造順序がうかがえる。方形周溝墓の切り合いは珍しく、SZ16の構築時期には、先行する方形周溝墓SZ17の墳丘が既に消失していた可能性をうかがわせる。

SZ16の南西隅の周溝からは壺が2点（286・287）まとも出土している。遺存部分が大きいことから、方形周溝墓に供献されていた土器の可能性もある。この遺物を含め、SZ16からは284～290の遺物が出土した。SZ16は時期を明確にできる遺物に恵まれず、正確な帰属時期は不明であるが、築造時期は元屋敷Ⅱ式期に降る可能性が高い。

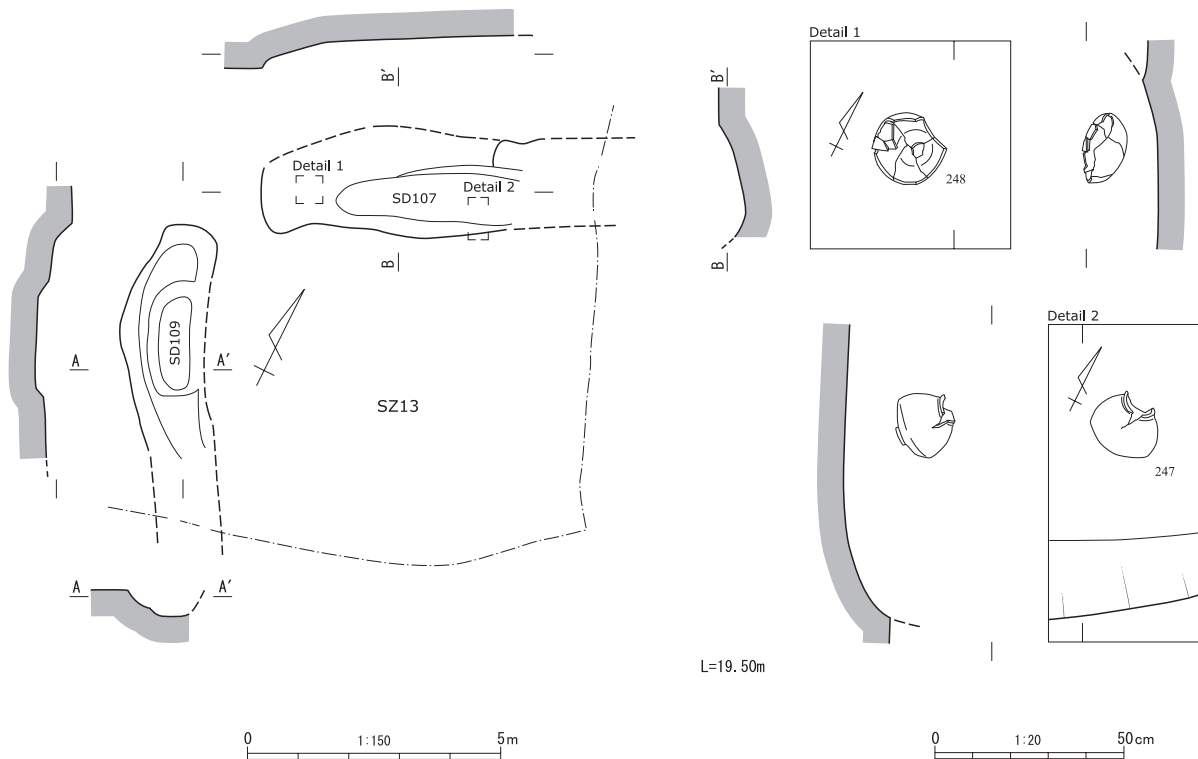


Fig.93 SZ13 実測図

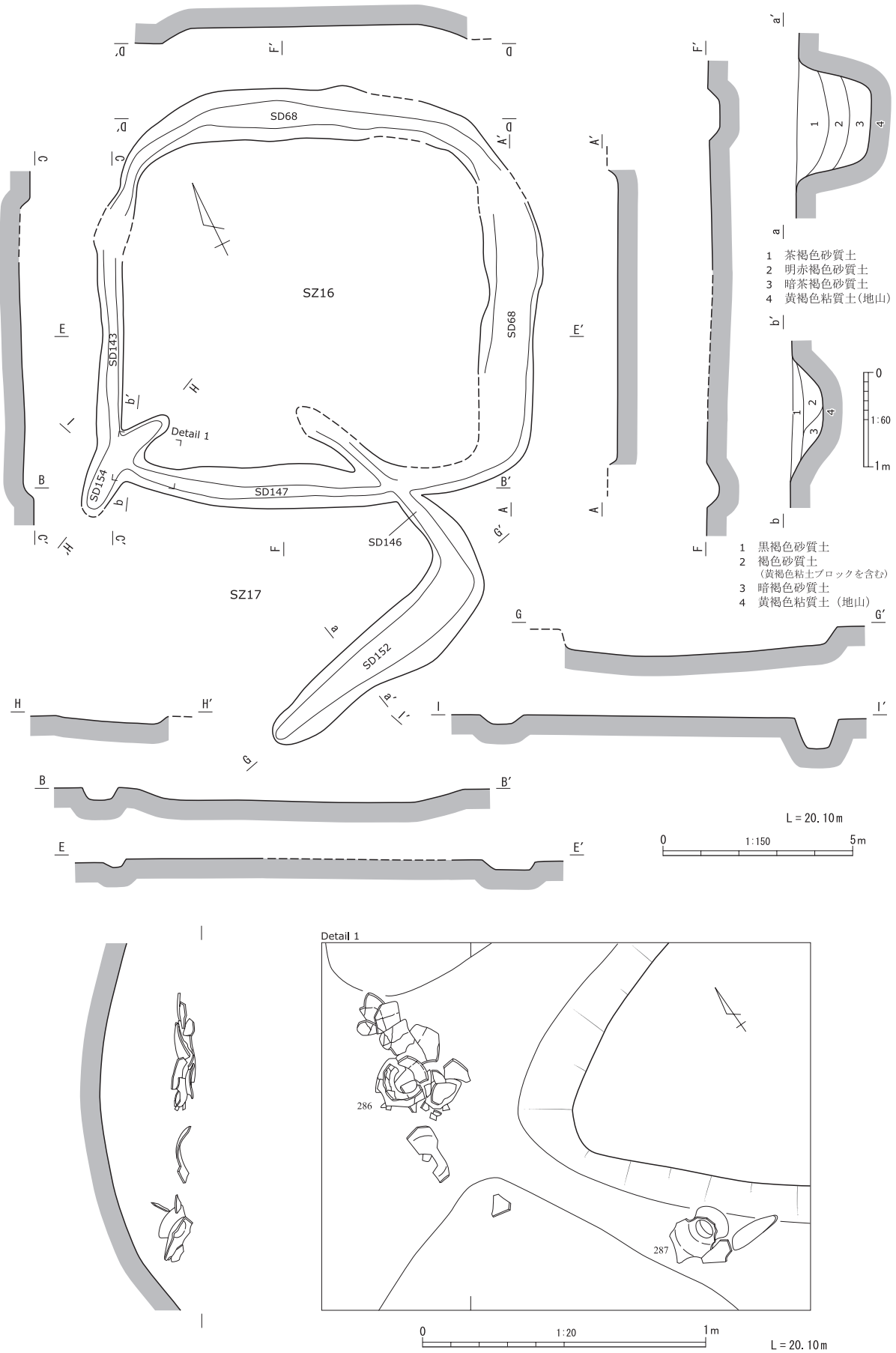


Fig.94 SZ16・17実測図

3 古墳時代

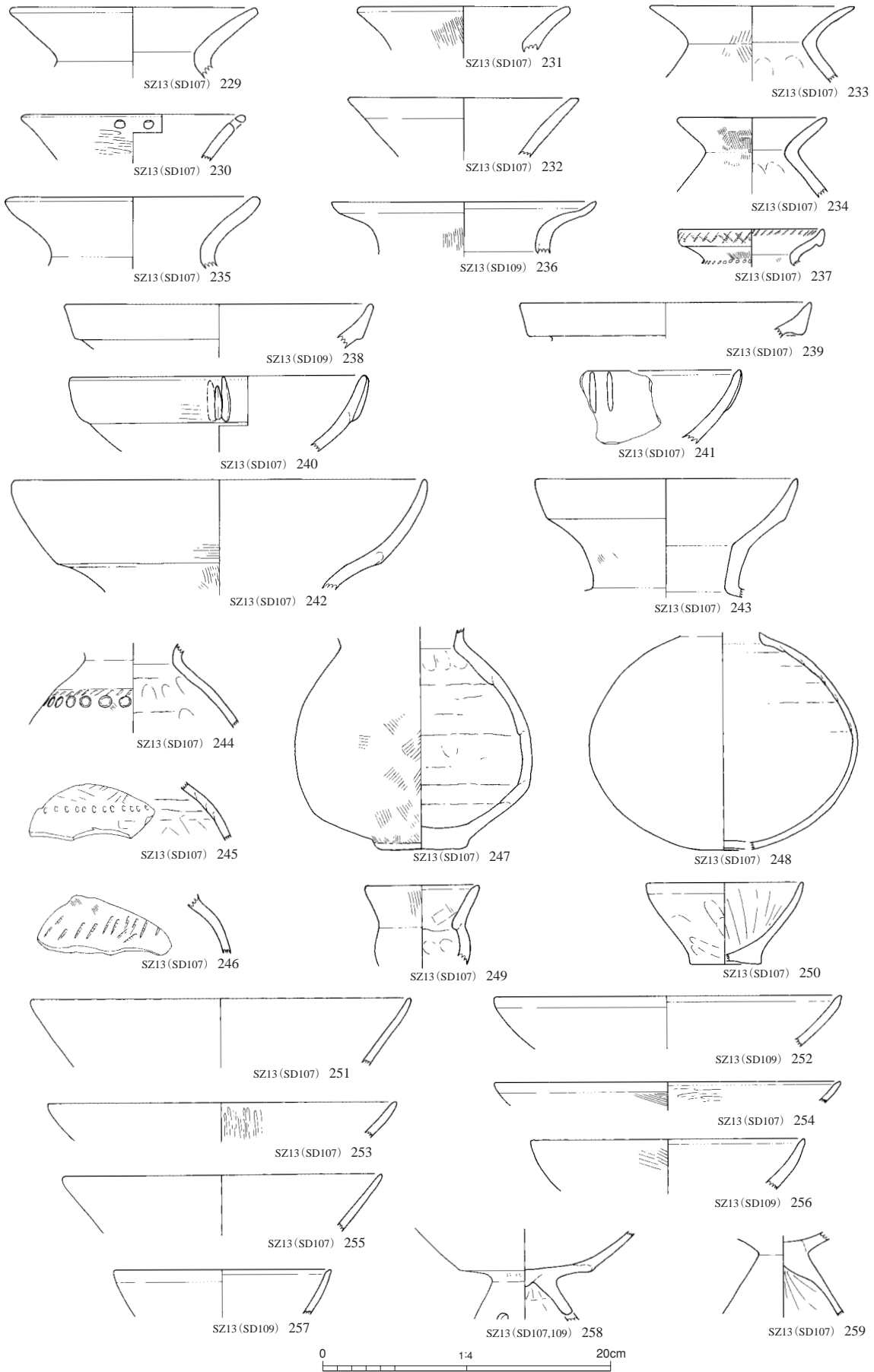


Fig.95 古墳時代 方形周溝墓A群 出土遺物 (1)

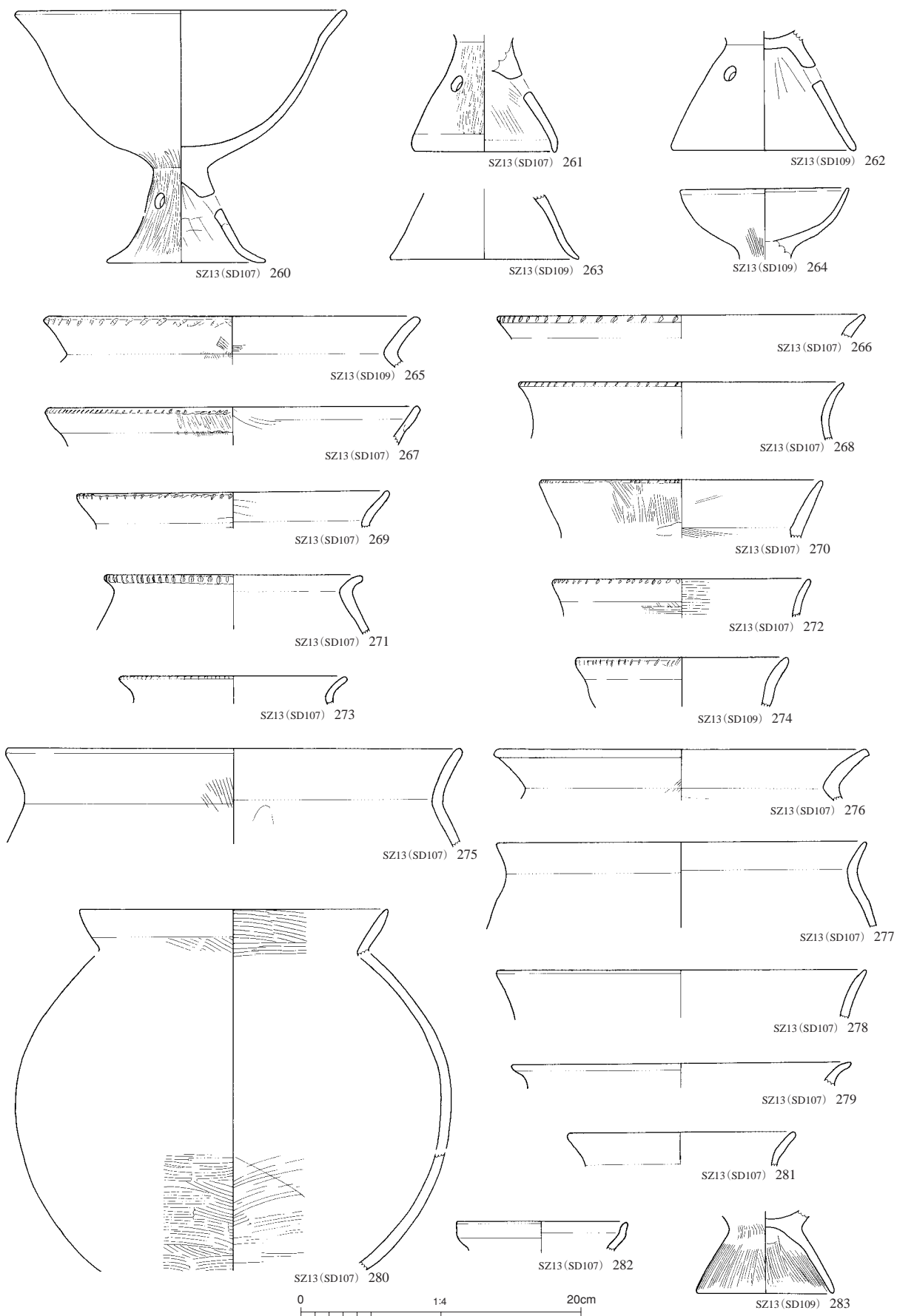


Fig.96 古墳時代 方形周溝墓A群 出土遺物 (2)

SZ18 (Fig.181) SZ18はG-5区で検出した方形周溝墓である。周溝が全周する形態とみられるが、北側と東側の周溝の一部を確認したにとどまり、全体形は不明である。

SZ18からは291の遺物が出土した。SZ18は、時期を明確にできる出土遺物に恵まれず、正確な帰属時期は不明である。

方形周溝墓A群出土遺物 (Fig.95～97) 229～291は方形周溝墓A群から出土した遺物である。なかでも、SZ13の出土遺物は、量、種類ともに豊富で、北神宮寺遺跡の古墳時代集落の遺物群の中でも基準的な位置づけが可能である。このほか、編年上の明確な位置づけが困難であるが、SZ16出土遺物も壺を主体的に組成に含む点で方形周溝墓に供献された遺物群とみられる。

SZ13出土遺物 229～283はSZ13から出土した遺物である。出土遺物量が豊富で、元屋敷式の基準になりうる資料群といえる。

壺は、外反口縁(229～235)、内彎口縁(236)、折返口縁(237～239)、内彎複合口縁(240～243)がみられる。欠山式的な内彎複合口縁壺が一定量みられる点が注目できよう。有稜高坏(251～259)の坏部端部には内傾面をもつ個体(252・254・256・257)が多く、欠山式的な特徴をみせる。260のような、く字口縁をもつ椀形高坏も弥生時代後期的である。264は椀形の坏部をもつ小型高坏である。甕(265～281)の縁端部における刺突文の有無の比率は、10:7で、刺突文をもつものの方が若干多い。また受口状口縁の甕(282)も含まれる。

以上の遺物群は、元屋敷式において出現する器種が明確に抽出できず、弥生時代後期後半の欠山式との分離が難しい。ただし、有稜高坏には坏部が浅い傾向の個体が含まれることや、甕の口縁端部における刺突の有無の比率(10:7)が、欠山式の最終段階における比率(3:1程度)と比べると新しい様相を示していることから、SZ13出土遺物は元屋敷I式古段階の中でもより古い段階(元屋敷I式1段階)に位置づけてよいだろう。SB12から出土した遺物群(30～44)とともに、北神宮寺遺跡の古墳時代集落出土遺物の中でも最も古相を示しており、SZ13は集落形成初期に構築された遺構といえる。

SZ16・18出土遺物 284～290はSZ16から、291はSZ18から出土した遺物である。外反口縁(284・285)、直立口縁(286・287)、二重口縁(289・291)などの諸形式を含む。時期的な位置づけは難しいが元屋敷I式新段階から元屋敷II式古段階の遺物とみられよう。

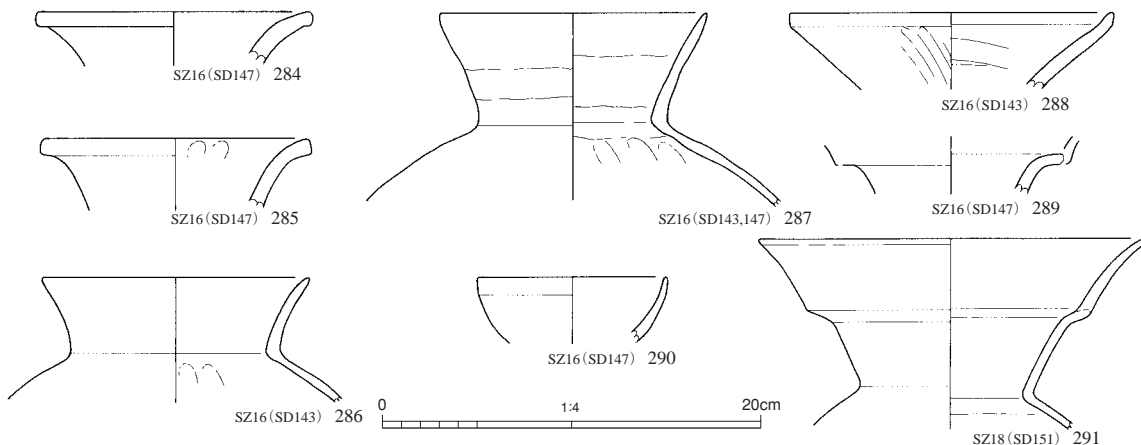


Fig.97 古墳時代 方形周溝墓A群 出土遺物 (3)

② 方形周溝墓B群

群構成 方形周溝墓B群は高位面の中ほどに位置し、SZ19～23の5基が該当する。これらの方形周溝墓はそれぞれ主軸の位置が異なり、構築された時期も異なることから、たがいに独立性が高い遺構と捉えられる。

SZ19 (Fig.98) SZ19はE-5区で検出した方形周溝墓である。西側および北側の周溝の一部を確認した。周溝が全周するとみられるが、全体の形態は不明瞭である。

SZ19からは292～298の遺物が出土した。肩部に模様帯をもつ壺(292)がみられ、甕の口縁部(297・298)には刺突文がみられないことから、SZ19は元屋敷I式新段階の遺構と捉えられる。

SZ20 (Fig.99) SZ20はE-3区で検出した方形周溝墓である。南側の隅の一部を確認したにとどまる。周溝が全周するとみられるが、全体の形態は不明瞭である。西に接するSZ21と若干重なるとみられるが、調査区内では切り合い関係は把握できなかった。

南側の周溝隅から遺物(299～325)が比較的大量に出土している。出土遺物から、SZ20は元屋敷II式新段階の遺構と捉えられる。

SZ21 (Fig.100) SZ21はE-3区で検出した方形周溝墓である。北側の周溝を除き、3辺の周溝が確認できた。周溝が全周する形態とみられ、周溝内側の屈曲点を結んだ長さは東西6.0mである。

SZ21からは、326・327の遺物が出土した。口縁端部に刺突文をもつ甕(327)を含むことから、SZ21は元屋敷I式古段階の遺構と捉えられる。

SZ22 (Fig.101) SZ22はD-3区で検出した方形周溝墓である。東側の周溝の一部を確認したが、全体形は不明である。SZ22からは、328の遺物が出土した。SZ22は時期を明確にできる遺物に恵まれず、正確な帰属時期は不明である。

SZ23 (Fig.100) SZ23はE-2区で検出した方形周溝墓である。東側の周溝を除き、3辺の周溝が確認できた。周溝が全周する形態とみられ、周溝内側の屈曲点を結んだ長さは南北6.0mである。SZ23からは329～331の遺物が出土した。出土遺物の時期を絞りこむことが難しいが、SZ23は元屋敷I式新段階の遺構とみられる。

方形周溝墓B群出土遺物 (Fig.102) 292～331は方形周溝墓B群から出土した遺物である。SZ19・20・21の出土遺物がまとまった資料である。

SZ19出土遺物 292～298はSZ19から出土した遺物である。壺の肩部に櫛描文の模様帯をもつもの(292)がみられる。295は開脚高坏、294は大型の鉢、297・298は刺突文をもたない甕口縁である。以上の遺物群は、元屋敷I式新段階に位置づけられる。

SZ20出土遺物 299～325はSZ20から出土した遺物である。小型の高坏(309～312)が目立つが、いずれも脚部の外反が顕著である。308は底部に穿孔がみられる有孔鉢である。近畿系の遺物といえ、隣接地の矢畑遺跡にも類例がある。316は有段高坏である。甕の口縁部(317～324)にはすべて刺突文がみられない。以上の遺物群は元屋敷II式新段階に位置づけられる。

SZ21出土遺物 326・327はSZ21から出土した遺物である。甕の口縁部(327)には刺突文がみられることから、元屋敷I式古段階に位置づけることができる。

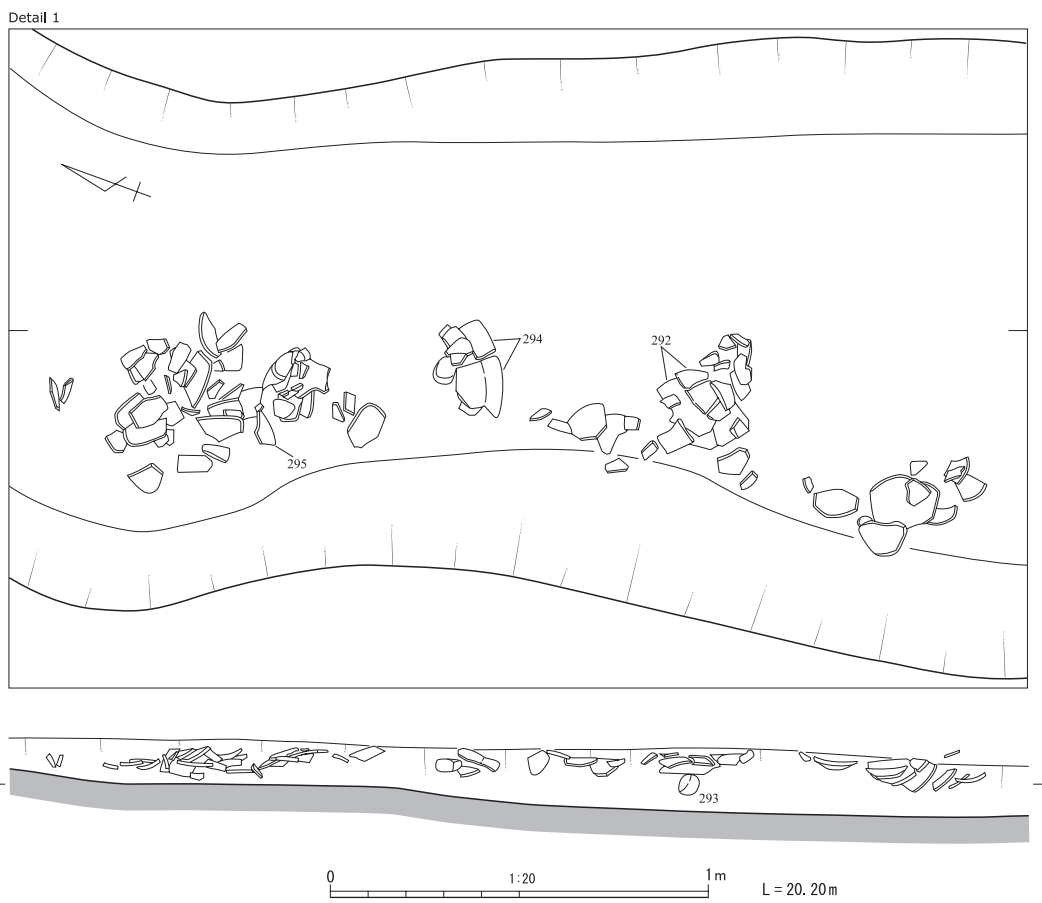
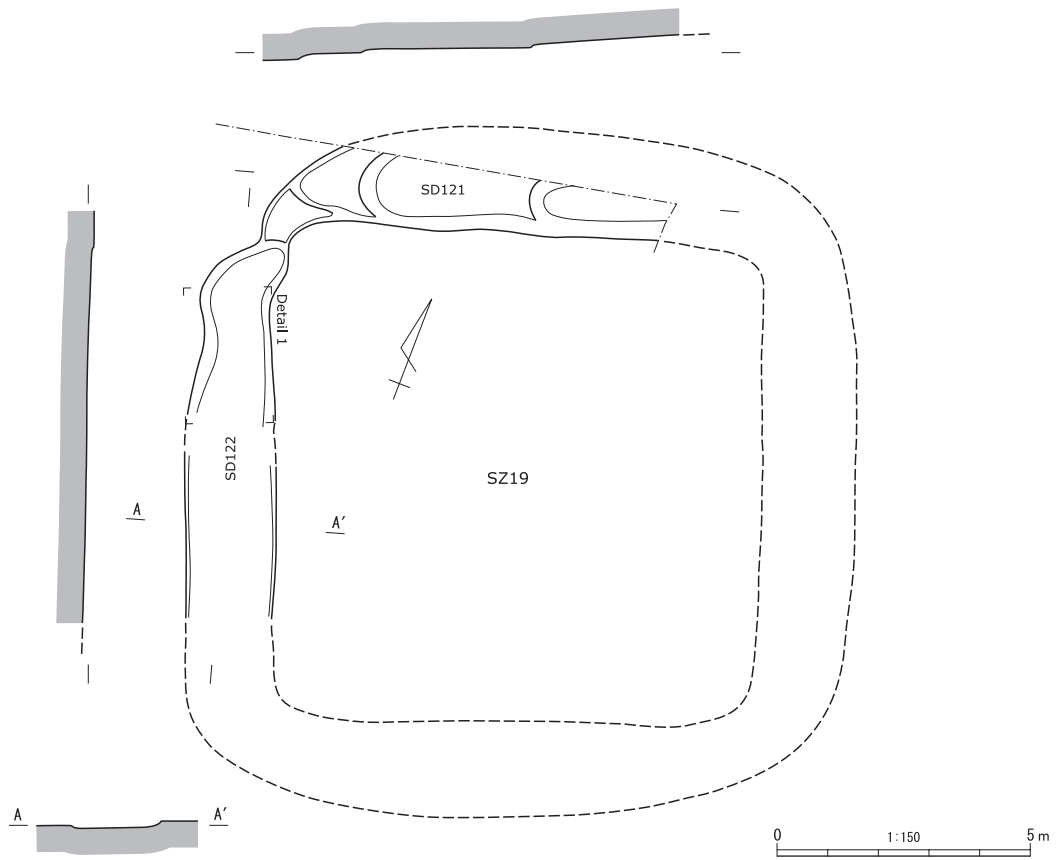


Fig.98 SZ19実測図

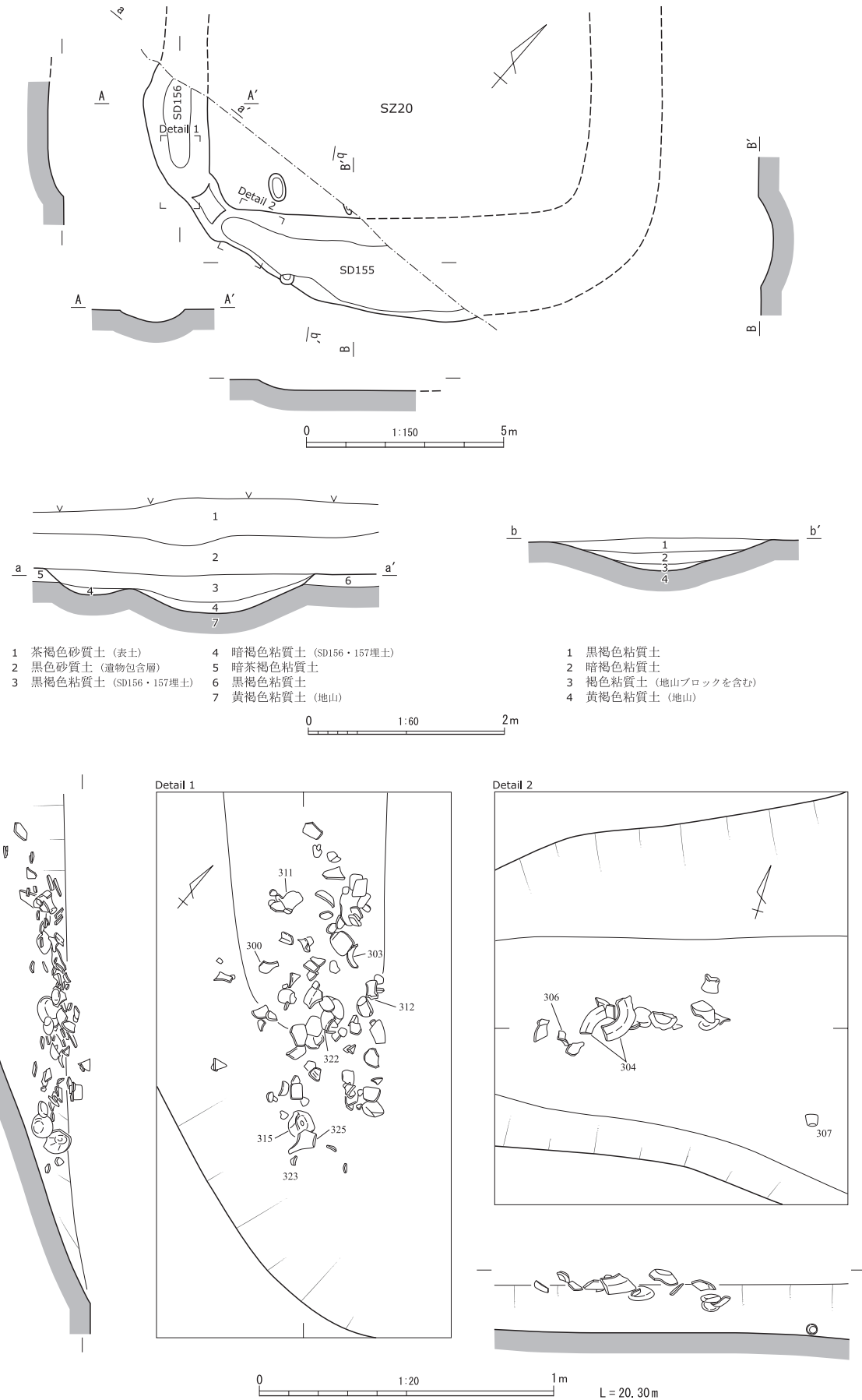


Fig.99 SZ20 実測図

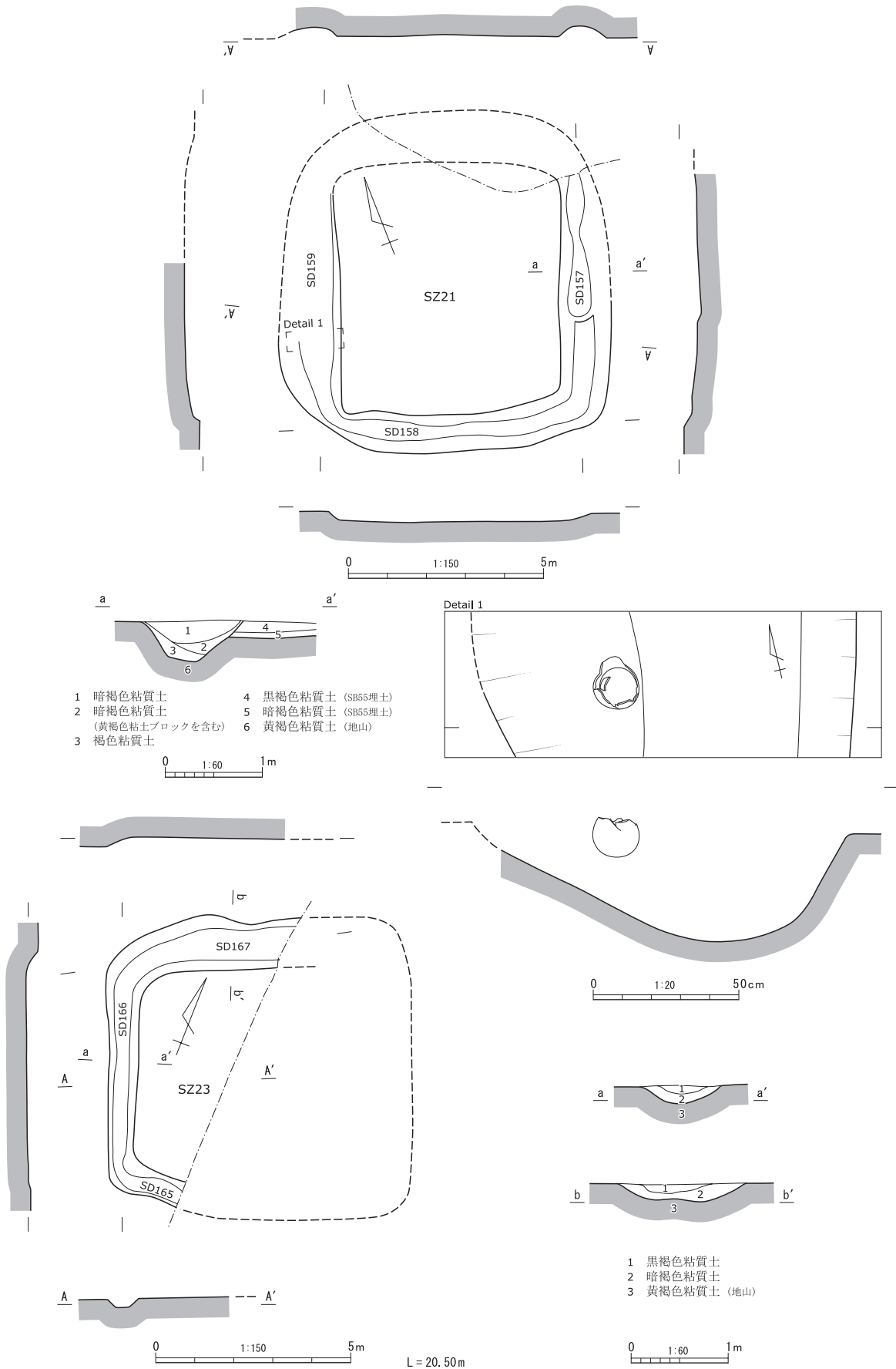


Fig.100 SZ21・23実測図

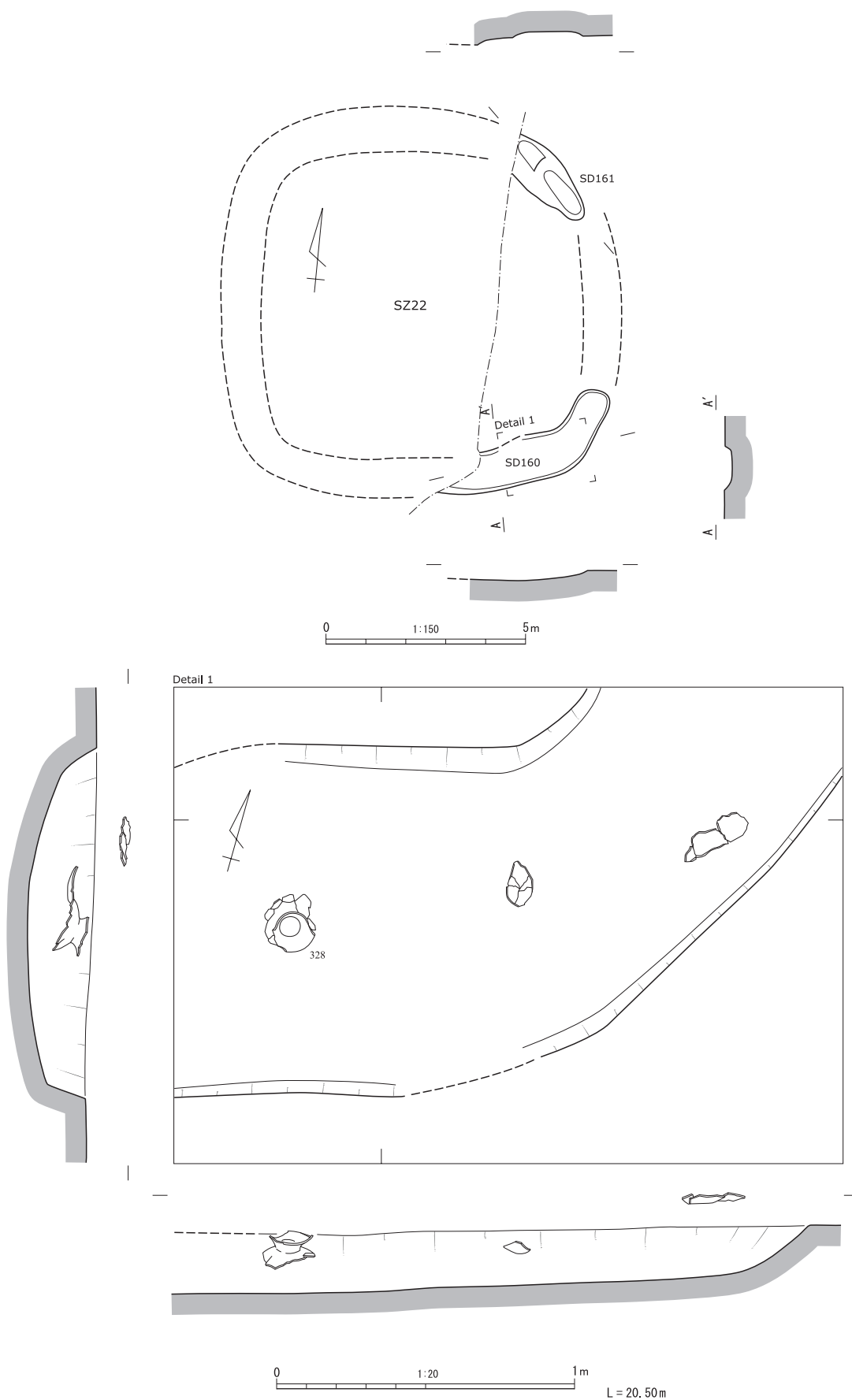


Fig.101 SZ22 実測図

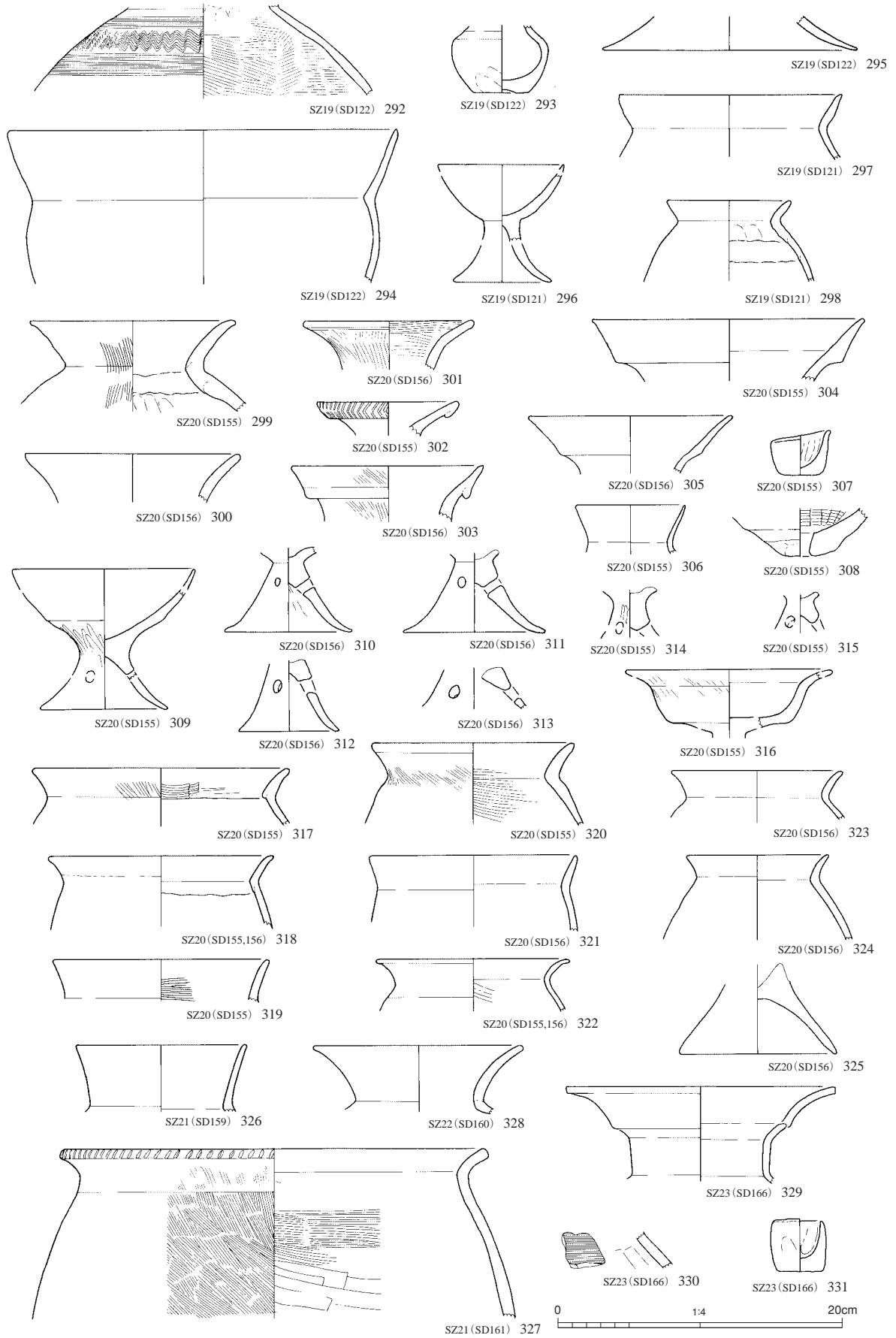


Fig.102 古墳時代 方形周溝墓B群 出土遺物

③ 方形周溝墓C群

群構成 方形周溝墓C群は高位面の北側に位置し、SZ24～29の6基が該当する。これらの方形周溝墓はすべて主軸の方向が揃うことから互いに近接した時期に構築された遺構群と捉えられる。出土遺物には古相を示す遺物が含まれる場合があるが、いずれも小破片であることから、混入品である可能性が高い。遺物群が示す主体的な時期は元屋敷Ⅱ式期であり、方形周溝墓C群はこの時期を中心に築造されたものと捉えられる。

SZ24 (Fig.103) SZ24はE-2区で検出した方形周溝墓である。北側および東側の周溝の一部を確認した。北側隅が途切れる形態とみられるが、全体の形態は不明瞭である。北側の周溝(SD171)では、ほぼ完形の小型高坏(334)が転落した状態で出土した。この個体を含め、SZ24からは332～337の遺物が出土した。小型高坏(334)は坏部が浅く、新しい様相をもつ。新相の特長をもつ出土遺物を含むことから、SZ24は元屋敷Ⅱ式期の遺構と捉えられる。

なお、SZ24は元屋敷Ⅱ式期の竪穴建物SB60と重なる。切り合い関係は明確でないが、SB60→SZ24の築造順序が想定でき、この関係は遺構相互の年代観においても矛盾はない。

SZ25 (Fig.104) SZ25はD-1区で検出した方形周溝墓である。北側と東側の周溝の一部を確認したにとどまる。周溝が全周するとみられるが、西側は大きく攪乱がおよび、全体の形態は不明瞭である。北側の周溝は幅広いが、東側の周溝は幅が狭い。

北側の周溝(SD137)からは甕(346)の中に高坏の脚台部(342)が入り込んだ状態で出土した。これらの個体を含め、SZ25からは、338～348の遺物が出土した。出土遺物から、SZ25は元屋敷Ⅰ式新段階の遺構と捉えられる。

SZ26 (Fig.103) SZ26はD-1区で検出した方形周溝墓である。南側の周溝の一部を確認したにとどまる。周溝が全周するとみられるが、全体の形態は不明瞭である。図示できる遺物に恵まれず、正確な帰属時期は不明である。ただし、方向が一致する方形周溝墓C群が元屋敷Ⅱ式期の構築とみられることから、SZ26の築造時期も元屋敷Ⅱ式期の遺構とみてよいだろう。

SZ27 (Fig.105) SZ27はE-1区で検出した方形周溝墓である。北側と西側が調査区外におよんでいるが、ほぼ全体形をうかがうことができる。周溝が全周する形態とみられ、周溝内側の屈曲点を結んだ長さは東西9.0m、南北10.5mである。東側の周溝(SD132)はSZ28と共有している。周溝埋土の切り合い関係は明確でないが、出土遺物から、SZ28→SZ27の築造順序が想定できる。東側の周溝(SD132)から遺物(350・352・356)が集中して出土した。これらの個体を含め、SZ27からは349～356の遺物が出土している。出土遺物から、SZ27は元屋敷Ⅱ式期の遺構と捉えられる。

SZ28 (Fig.105) SZ28はE-1区で検出した方形周溝墓である。南側が調査区外におよんでいるが、ほぼ全体形をうかがうことができる。周溝が全周する形態とみられ、周溝内側の屈曲点を結んだ長さは東西7.5mである。西側の周溝(SD132)は西に接するSZ27と共有している。北側の周溝(SD131)から遺物が集中して出土した。SZ28からは357～368の遺物が出土している。出土遺物から、SZ28は元屋敷Ⅰ式新段階に遡る遺構と捉えられる。

SZ29 (Fig.103) SZ29はF-1区で検出した方形周溝墓である。南側が調査区外におよんでいる

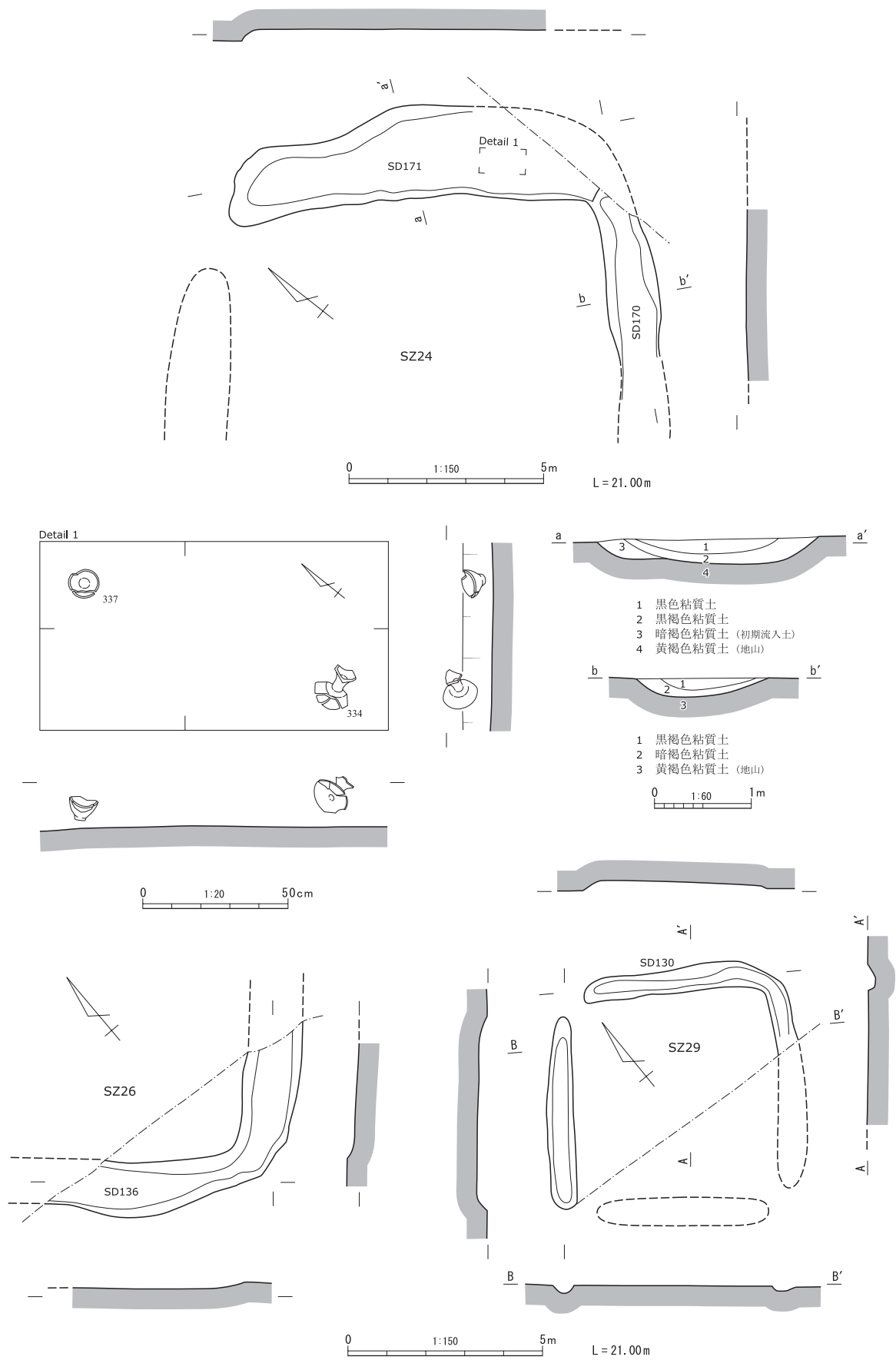


Fig.103 SZ24・26・29実測図

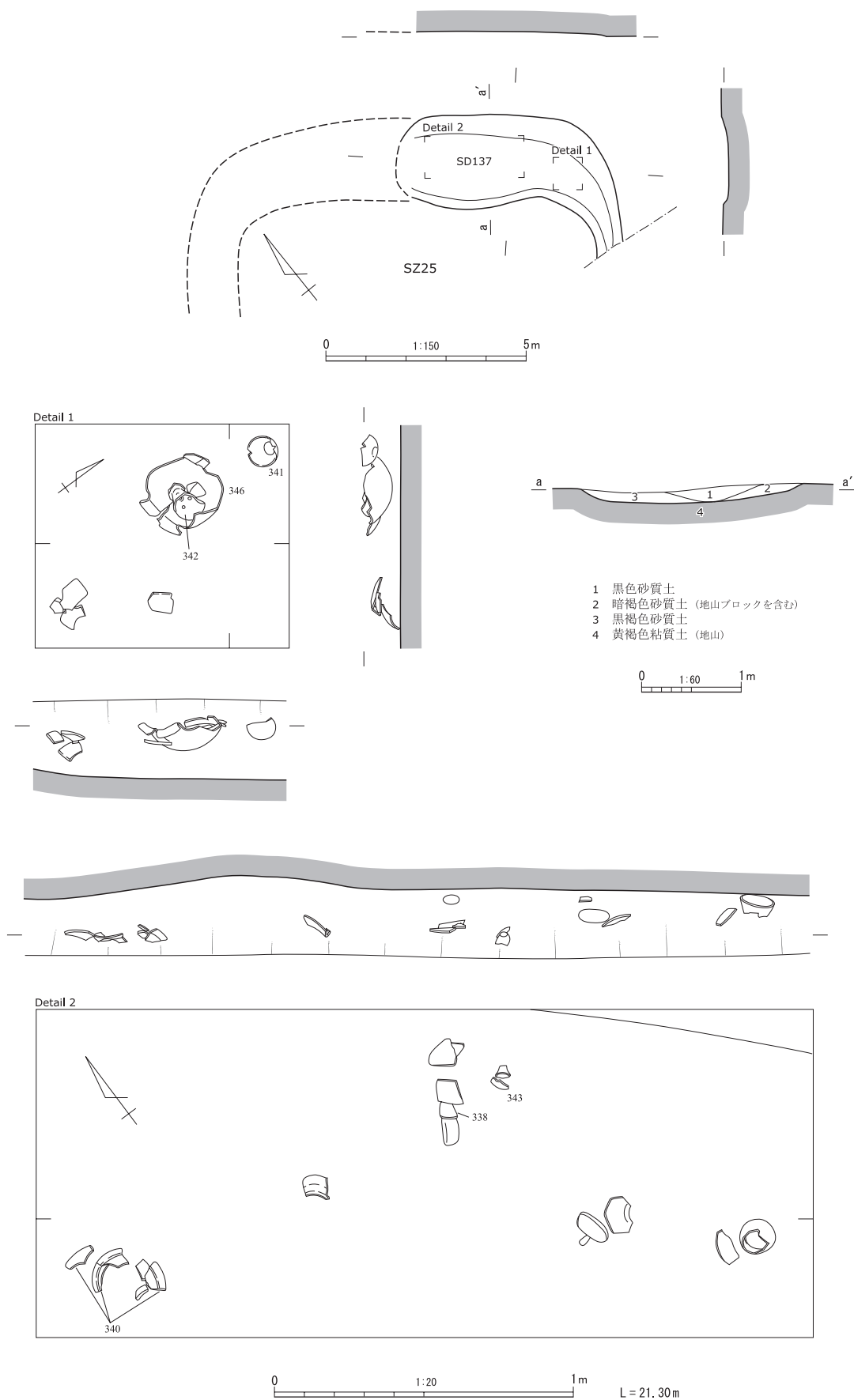


Fig.104 SZ25 実測図

3 古墳時代

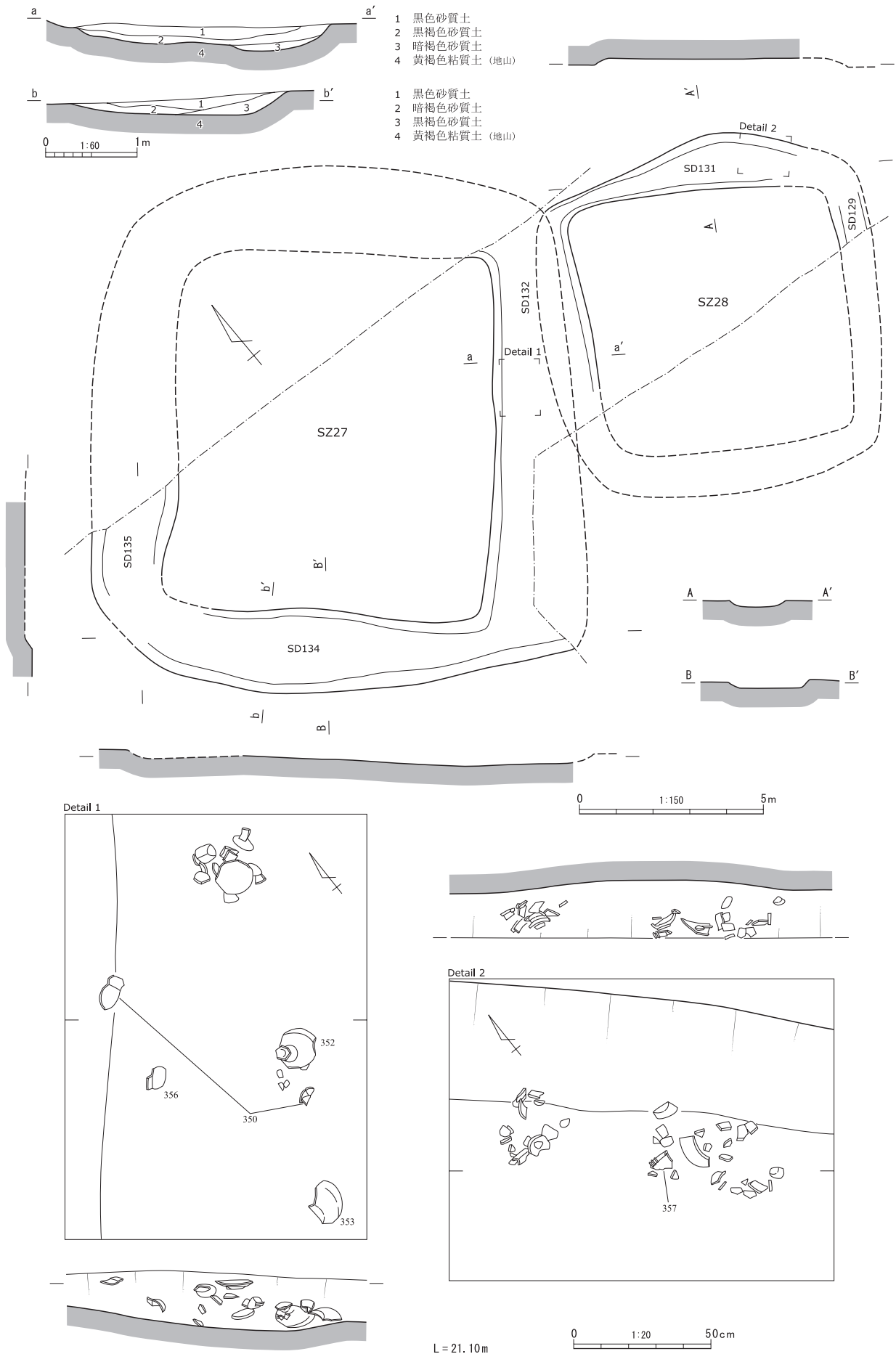


Fig.105 SZ27・28 実測図

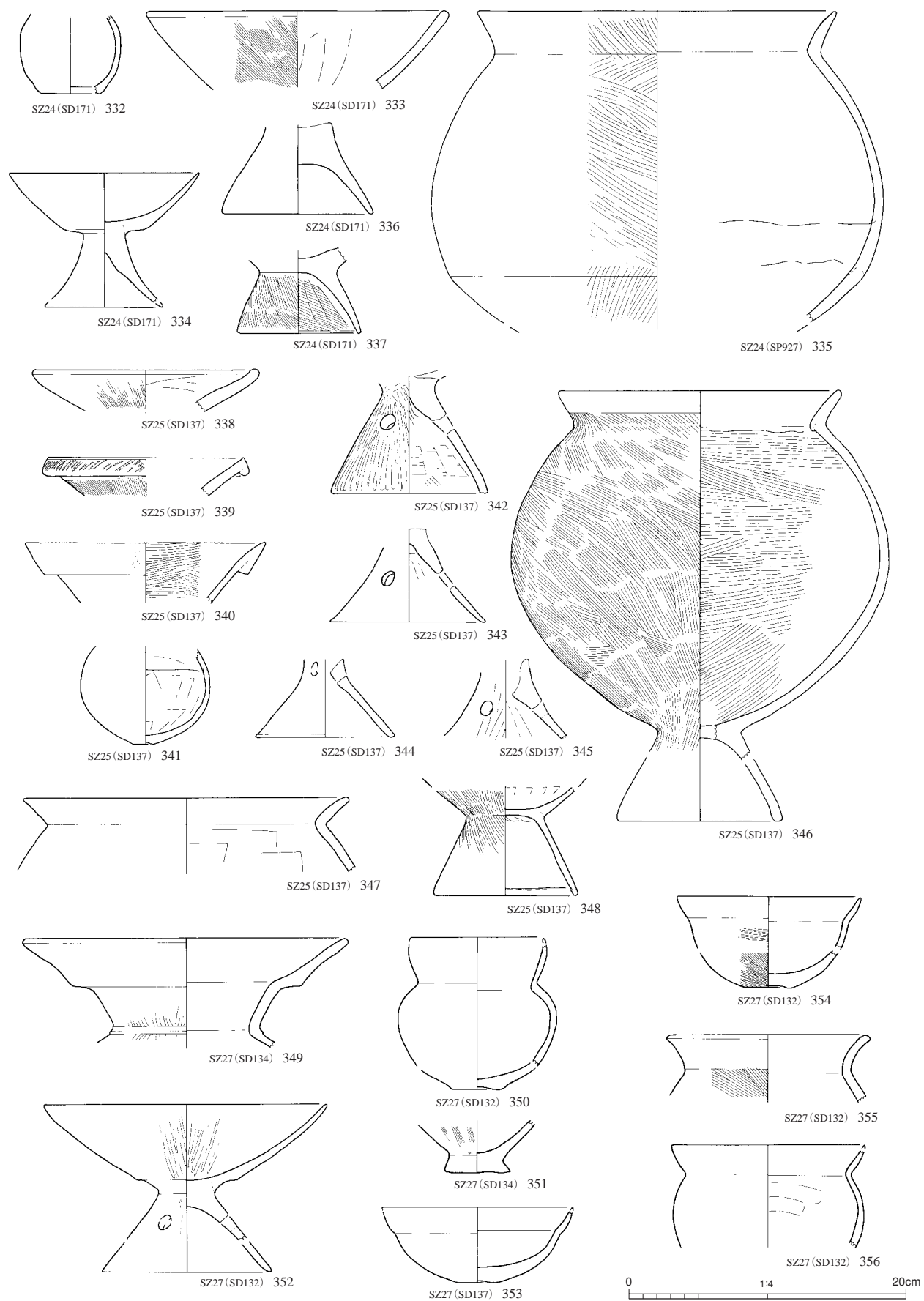


Fig.106 古墳時代 方形周溝墓C群 出土遺物 (1)

が、ほぼ全体形をうかがうことができる。周溝は北側の隅が一箇所途切れる形態とみられ、周溝内側の屈曲点を結んだ長さは東西5.5mである。

SZ29からは369～371の遺物が出土した。口縁に刺突文をもつ甕（369）がみられるが、小破片であることから混入品の可能性がある。SZ29は他の方形周溝墓C群と主軸方向が一致することから、元屋敷Ⅱ式期の遺構として捉えるほうがよいだろう。

方形周溝墓C群出土遺物 (Fig.106・107) 332～371は方形周溝墓C群から出土した遺物である。SZ24・25・27・28出土遺物がまとまった資料である。

SZ24出土遺物 332～337はSZ24から出土した遺物である。浅い坏部をもつ小型高坏（334）は、元屋敷Ⅱ式に位置づけられる。

SZ25出土遺物 338～348はSZ25から出土した遺物である。内彎傾向がある高坏脚部（342）が古相の遺物である。その他の高坏は外反するものであり、甕（346・347）の口縁部に刺突文がみられないことと合わせ、新しい様相が看取できる。これらの遺物群はおおむね元屋敷Ⅰ式新段階に位置づけられよう。

SZ27出土遺物 349～356はSZ27から出土した遺物である。二重口縁壺（349）、低脚の有稜高坏（352）、小型丸底鉢（353・354）など時期を示す遺物が揃う。これらの遺物群は元屋敷Ⅱ式期に位置づけられる。

SZ28出土遺物 357～368はSZ28から出土した遺物である。棒状浮文をもつ折返口縁の壺（357）や肩部に櫛描文をもつ壺の破片（359・360）は古相を示すが、S字甕B類（366・367）が伴うので、遺物群の時期は、元屋敷Ⅰ式古段階から新段階の移行期に相当するとみられる。361は手焙形土器とみられる。368は軽量薄甕の部類とみられるが、在来のものとは異質である。搬入品である可能性も考えられるが、系譜は不明である。

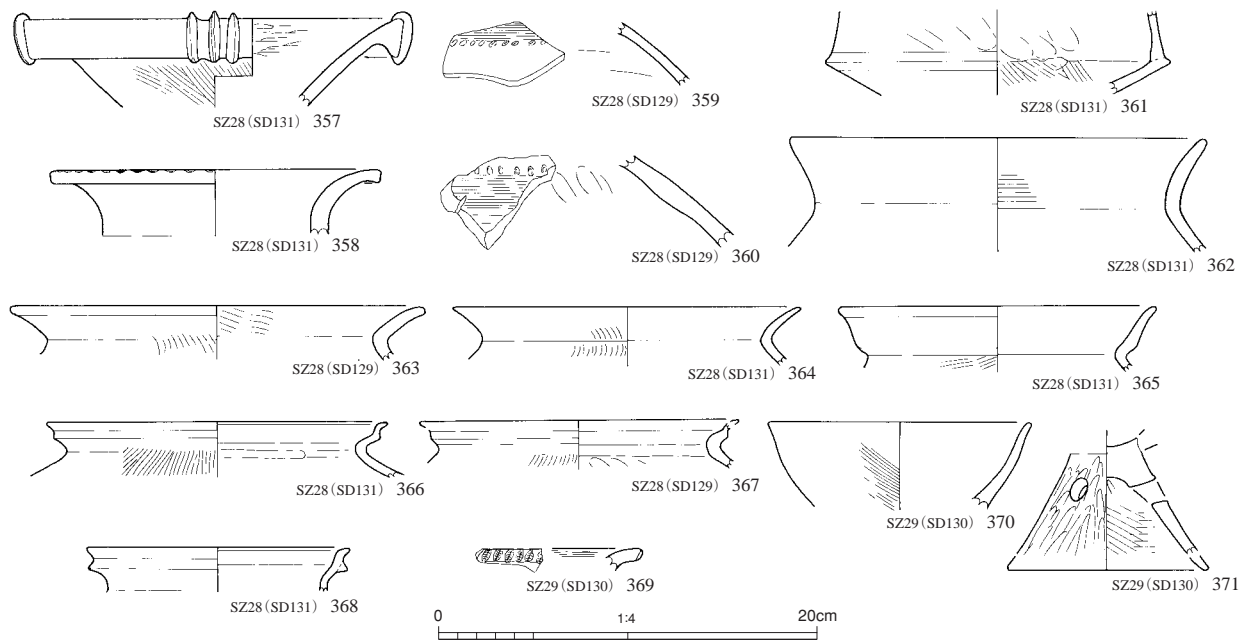


Fig.107 古墳時代 方形周溝墓C群 出土遺物 (2)

(5) 土坑・小穴

概要 古墳時代前期の土坑や小穴は非常に多く、すべてを紹介することができない。ここでは遺物を豊富に出土した土坑・小穴を紹介する。土坑や小穴は竪穴建物と密接な関係があるとみられることから、竪穴建物の群別に合わせて紹介する。

竪穴建物A群付随土坑・小穴 (Fig.108・109) 遺物が豊富に出土する土坑や小穴は、竪穴建物A群に付随するものが最も多い。Fig.108・109に紹介する遺構だけでも、SK01・17・105・112・130、SP15・184・185・262・305・595があげられ、大多数を占める。土坑や小穴の性格は不明瞭なものが多いが、竪穴建物の平面形が明確に捉えられなかった貯蔵穴などが含まれる可能性がある。遺物の出土状態は、竪穴建物に伴う柱穴や貯蔵穴と似ており、特別な埋納状況が認められるものはない。土坑や小穴の中に土器を廃棄したものと捉えられよう。

竪穴建物B群付随土坑・小穴 (Fig.109) 竪穴建物B群に付随し、遺物が豊富に出土した土坑・小穴は、SP317・326・641があげられる。SP317やSP326からは、完形の小型高坏（480～482）がまわっており、注目できる。とくにSP326から出土した2個体（481・482）は、同形、同大であり、2個体で一組にされた使用形態がうかがえる資料といえる。

竪穴建物E群付随土坑・小穴 (Fig.108・109) 竪穴建物E群に付随し、遺物が豊富に出土した土坑・小穴は、SK154、SP698があげられる。SK154では完形の台付甕（411・412）が合わせ口になって出土した。何かを埋納した遺構とみられる。SP698からは小型高坏（497）が出土した。

土坑・小穴等出土遺物 (Fig.110～113) 372～500は、土坑・小穴等から出土した遺物である。遺構の規模が小さいため、それぞれの出土量は多くないが、注目できる遺物が散見できる。

壺には、外反口縁（378・379・424・491・488・498）、直立口縁（445・446）、折返口縁（428・440・456・467・473）、内彎複合口縁（478）、二重口縁（417・421・492）の各形態がみられる。壺の肩部には模様帯をもつもの（381～383、390・401・448・452・453・474）も散見できる。模様帯を残すものは、元屋敷I式期を中心とする時期に位置づけられよう。類例が少ないものとして、小型の鉢（406）があげられる。同様の形態をもつものとして、SB60から出土した225がある。

鉢類には、弥生時代的な片口鉢（419）のほか、く字口縁の鉢（431・442・468）、小型丸底鉢（393・423・496）がみられる。小型丸底鉢はいずれも細かなヨコミガキが施されており、元屋敷II式期の標識的資料として捉えることができる。

高坏には有稜高坏（457・470）、有稜高坏の脚部（386・443・489）などがみられる。小型高坏は、小穴からの出土品に多い。SP326から出土した481・482を筆頭に、462・472・480・486・497・499・500などがあげられる。器台は少なく、398の盃形器台がみられる程度である。

甕はく字甕が主体であるが、受口状口縁のものや（436・450）、S字甕（422）がみられる。く字甕の口縁は刺突文をもたないものが多いが、413・444・464など、刺突文をもつ個体が散見できる。刺突文をもつ資料は元屋敷I式古段階に位置づけられよう。また、タタキ甕も466・493など若干例を見出すことができる。

土器以外の出土遺物は僅かで、軽石製の砥石（438）がみられる程度である。

3 古墳時代

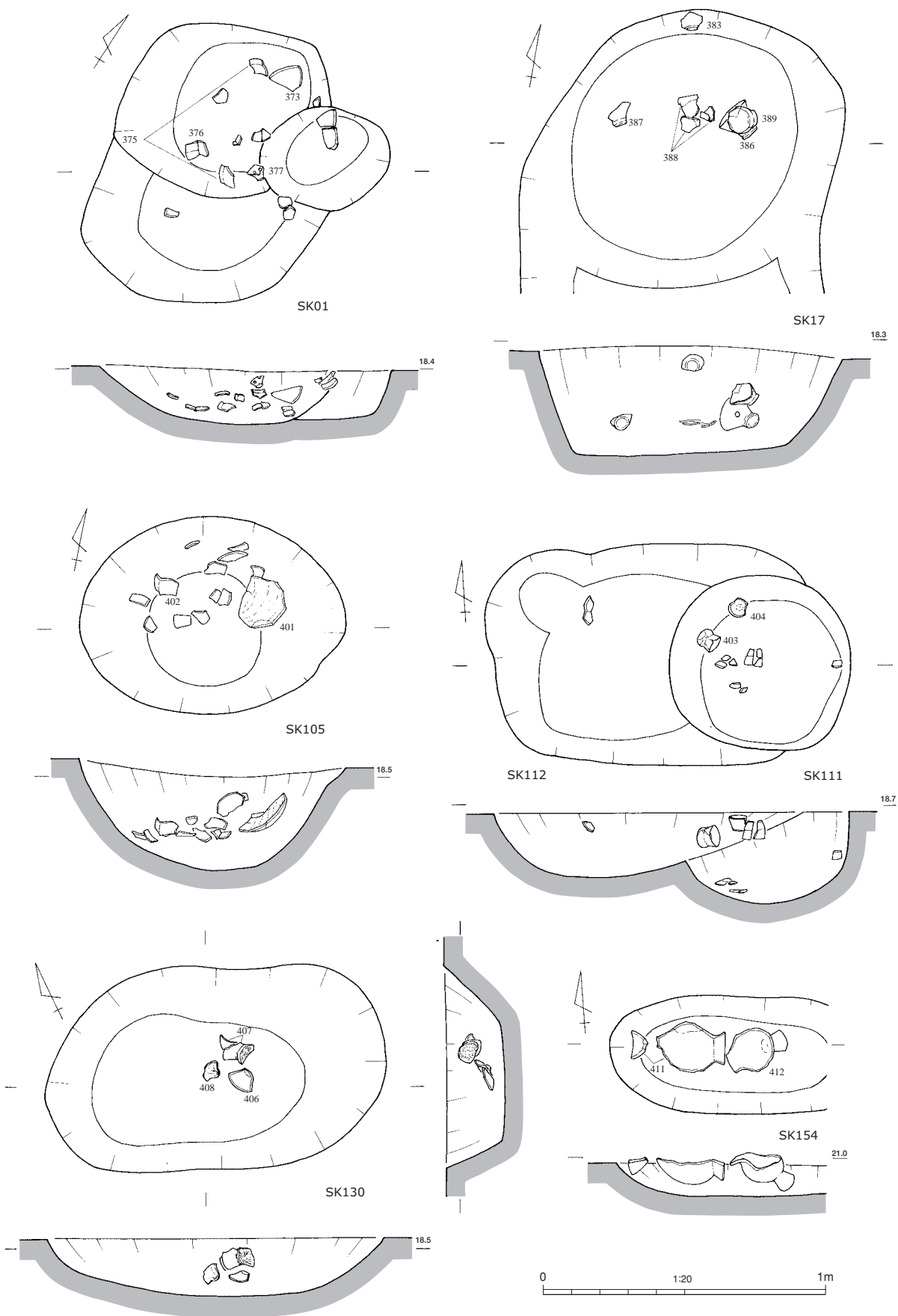


Fig.108 古墳時代 土坑 実測図

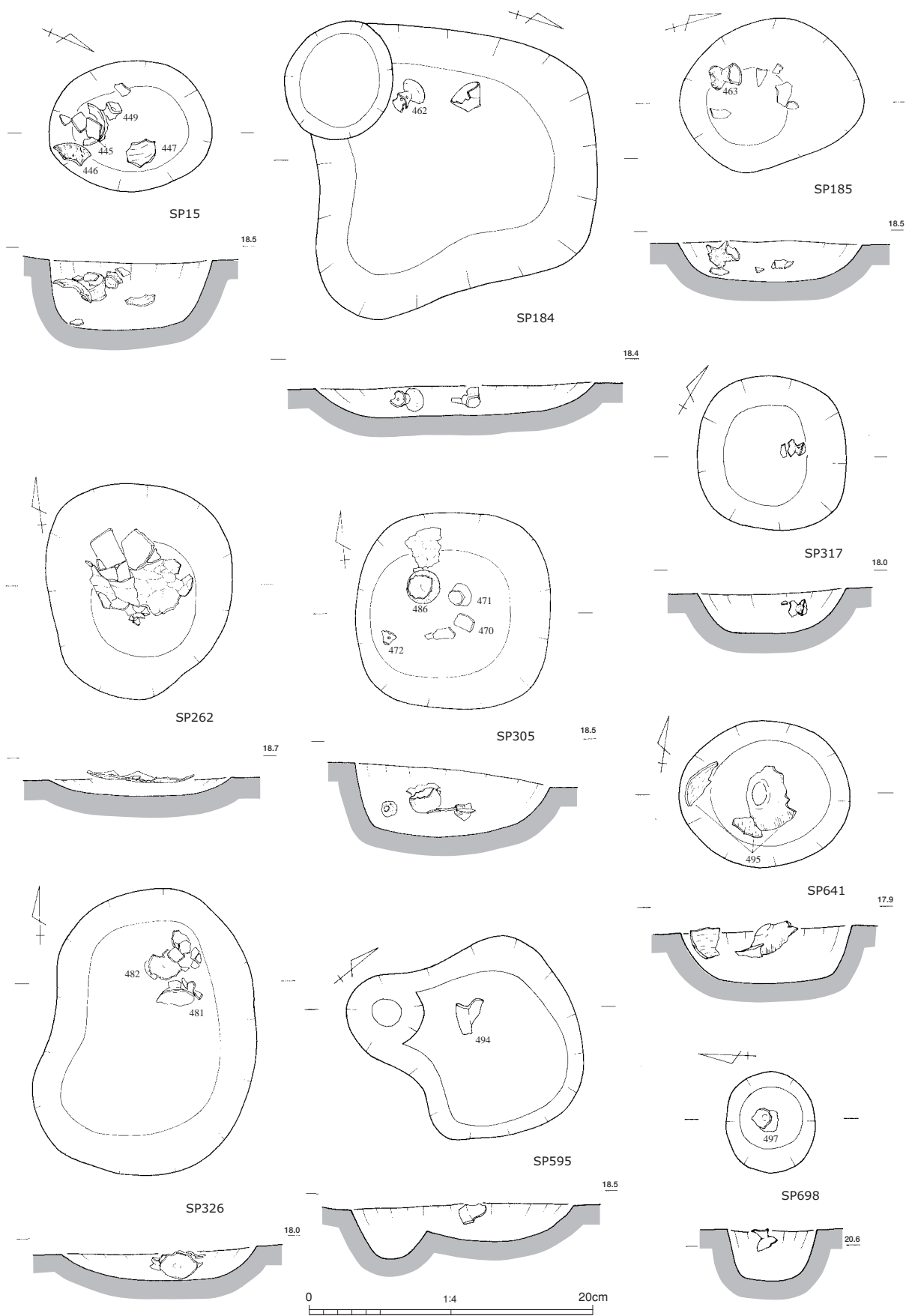


Fig.109 古墳時代 小穴等 実測図

3 古墳時代

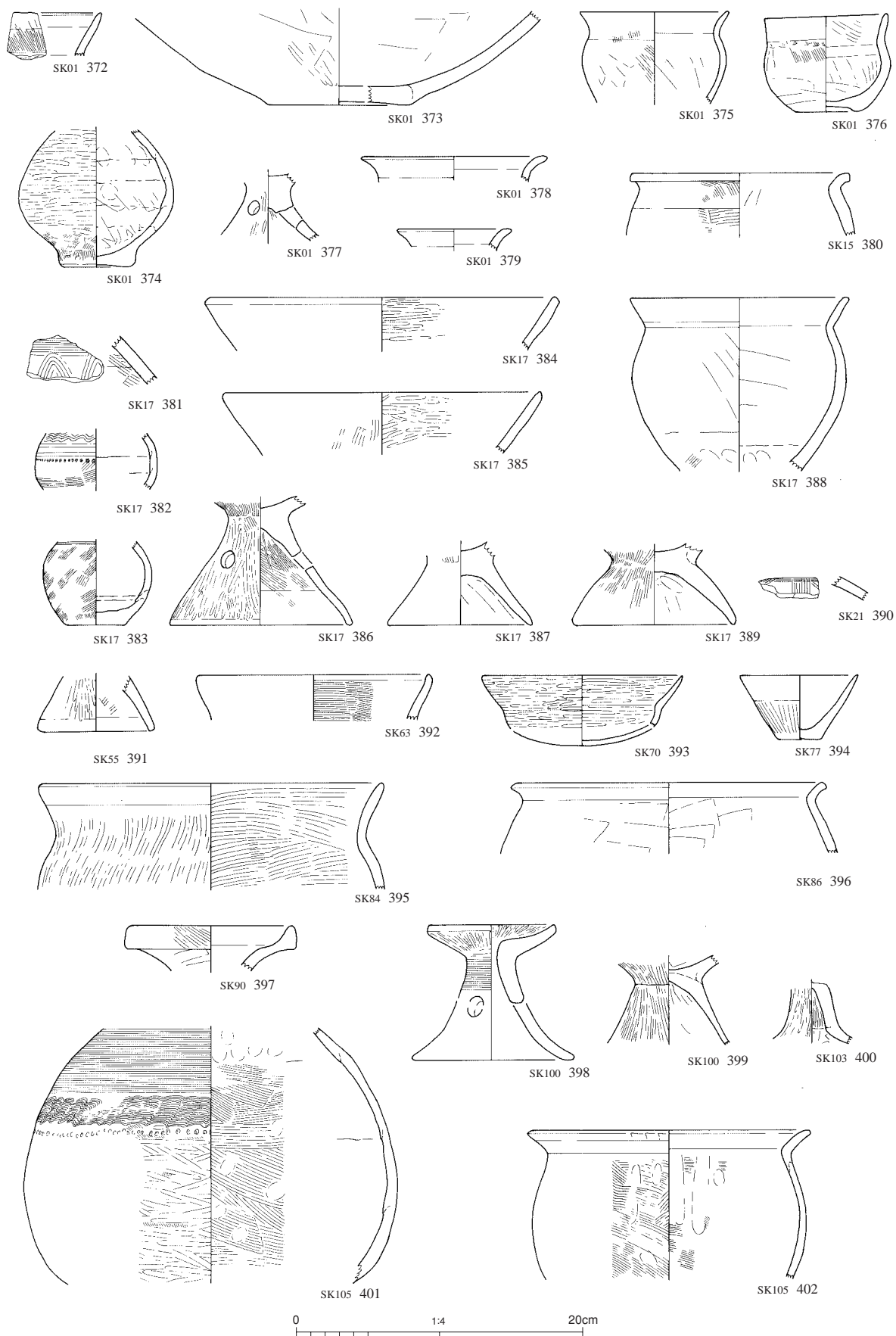


Fig.110 古墳時代 土坑・小穴 出土遺物 (1)

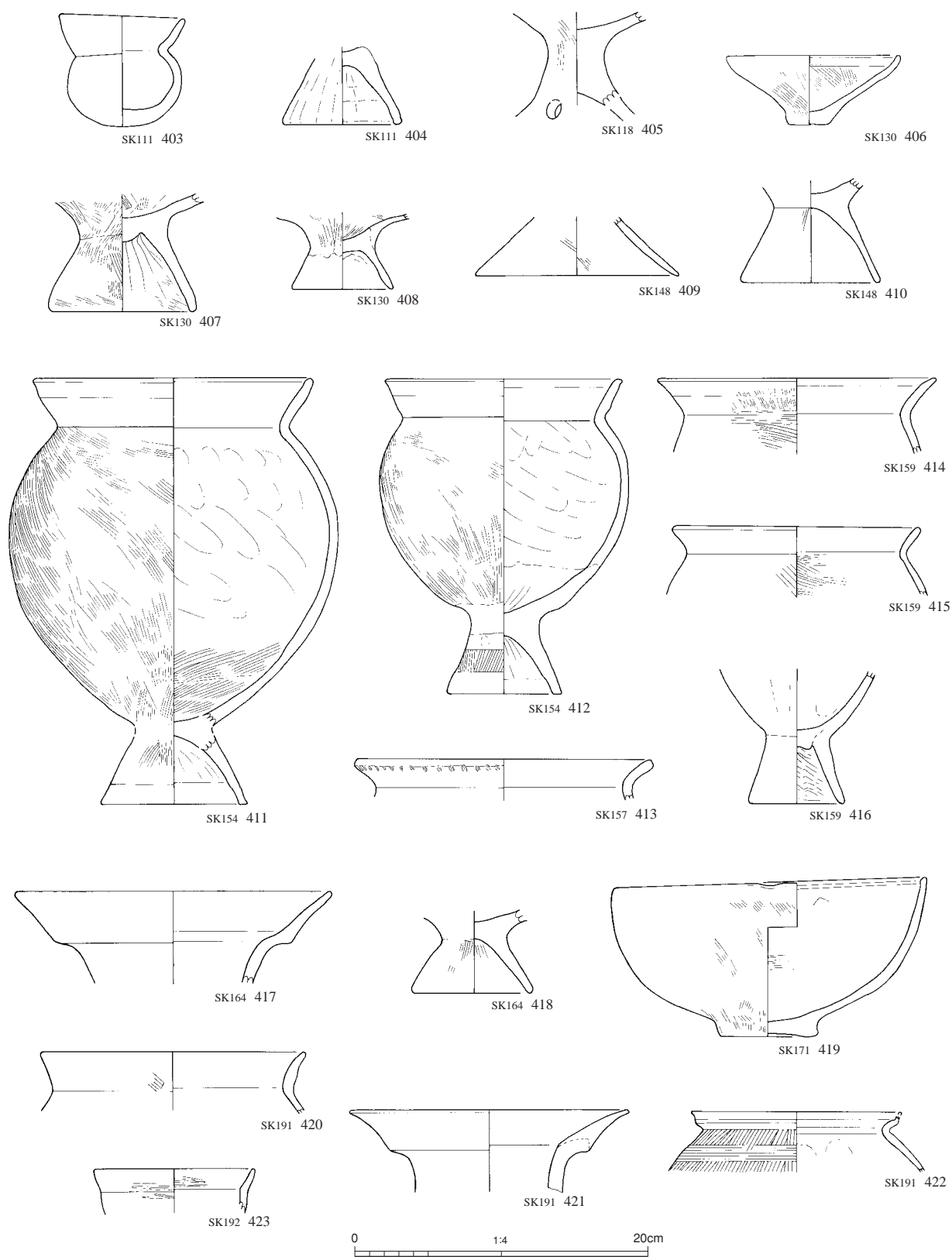


Fig.111 古墳時代 土坑・小穴 出土遺物 (2)

3 古墳時代

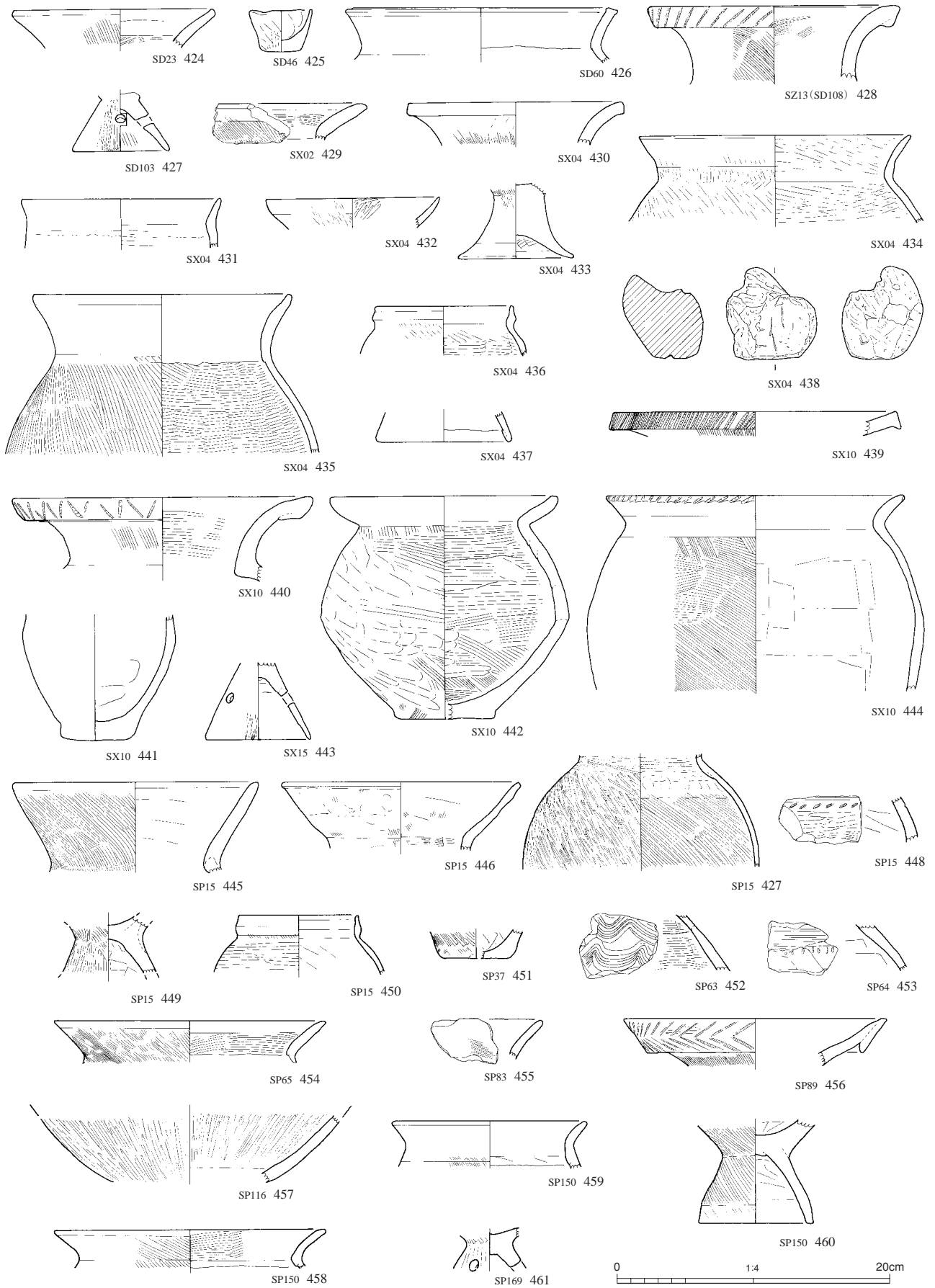


Fig.112 古墳時代 小穴等 出土遺物 (1)

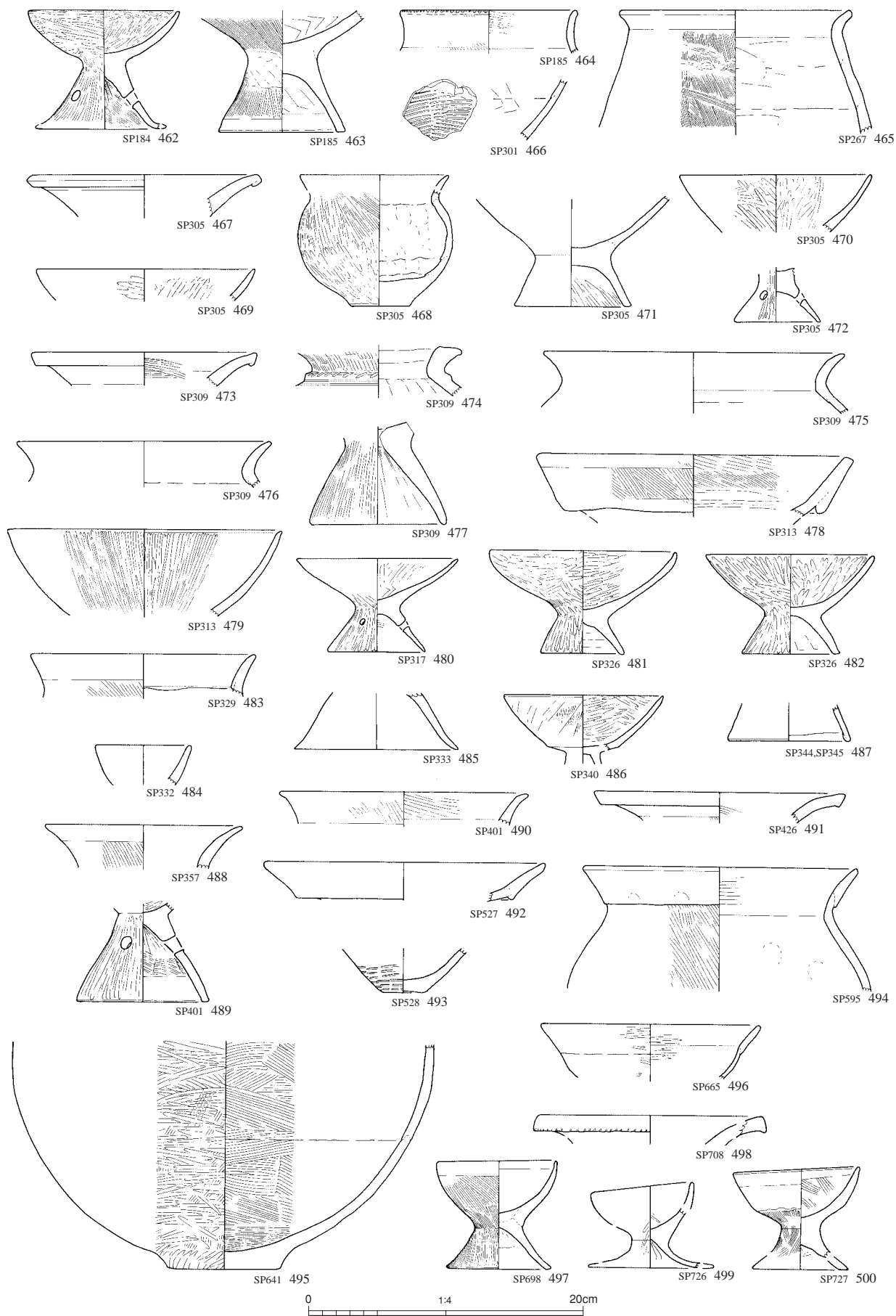


Fig.113 古墳時代 小穴等 出土遺物 (2)

(6) 包含層出土遺物

概要 調査地区全域が古墳時代の集落であったため、遺構検出面より上位の遺物包含層から出土した土器が相当量ある。また、戦国・江戸時代以降の区画溝からも古墳時代の土器が混入して出土することが多い。これら、出土遺構が不明確な遺物を一括して包含層出土遺物としてまとめ、Fig.114～117に示す。

また、少量ながら、古墳時代中期から後期の須恵器、土師器が出土した。遺構に伴うものがないため、性格は不明瞭であるが、小規模な集落があった可能性が高い。

古墳時代前期包含層出土遺物 (Fig.114～117) 501～553は壺である。壺は、口縁形態から、外反口縁(501～509)、内彎口縁(510～512)、折返口縁(513～519)、内彎複合口縁(520・521、523～534)、二重口縁(522、535～540)の各形態に分離できる。内彎複合口縁壺には櫛描刺突文や竹管文、棒状浮文などで加飾されたものが多い。また、口縁部の形状が明らかでないが、肩部に模様帯をもつ個体を541～546に示す。

547～553は中型もしくは小型の壺である。直立傾向が強い口縁をもつものが多い。なお、550は瓢壺であり、口縁端部には内傾面が明瞭である。

554～564は鉢もしくはその類型品である。く字口縁をもつ大型鉢(554・555)のほかに、壺の底部を転用したような形態(556)がみられる。556は片口鉢である可能性が高い。小型鉢もく字口縁をもつもの(557～559)と、屈曲する口縁をもたないもの(562～564)がある。558はタタキ風の強いハケメが施されている。561は小型丸底鉢である。

565～597は高坏である。有稜高坏(565～571)、有稜高坏等の脚部(572～588)、開脚高坏(591～593)、椀形小型高坏(589・590)、有段高坏(594)、屈折脚高坏(596・597)が認められる。なお、屈折脚高坏は古墳時代中期以降の可能性がある。

598～600は器台である。椀形器台(598・599)、もしくは盃形器台(600)が認められる程度で、その数は少ない。

601～634は甕である。く字甕が主体で、口縁端部に刺突文をもつもの(601～607)と刺突文をもたないもの(608～615)がある。図示した個体における両者の比率は7:8でほぼ同率である。このほか、受口状口縁の甕(616～620)が一定量みられる。621～630は台付甕の脚台部で、短脚傾向が顕著である。631～634はS字甕である。口縁形態が判明する個体(631～633)はすべてS字甕C類に分類できる。

以上の遺物群は、元屋敷Ⅰ式古段階から元屋敷Ⅱ式新段階までの時期幅がある。壺や甕などをみると古い段階の遺物量が多い。北神宮寺遺跡における古墳時代集落の盛衰を出土量の傾向からうかがうことができるだろう。

古墳時代中・後期包含層出土遺物 (Fig.118) 古墳時代中・後期の遺物が僅かながらも認められる。635・636は古墳時代中期後半から後期初頭頃の土師器甕である。637～640は古墳時代後期の土師器の坏である。641～650は古墳時代中期末葉から後期後葉の須恵器坏身・坏蓋である。651は須恵器の横瓶である。

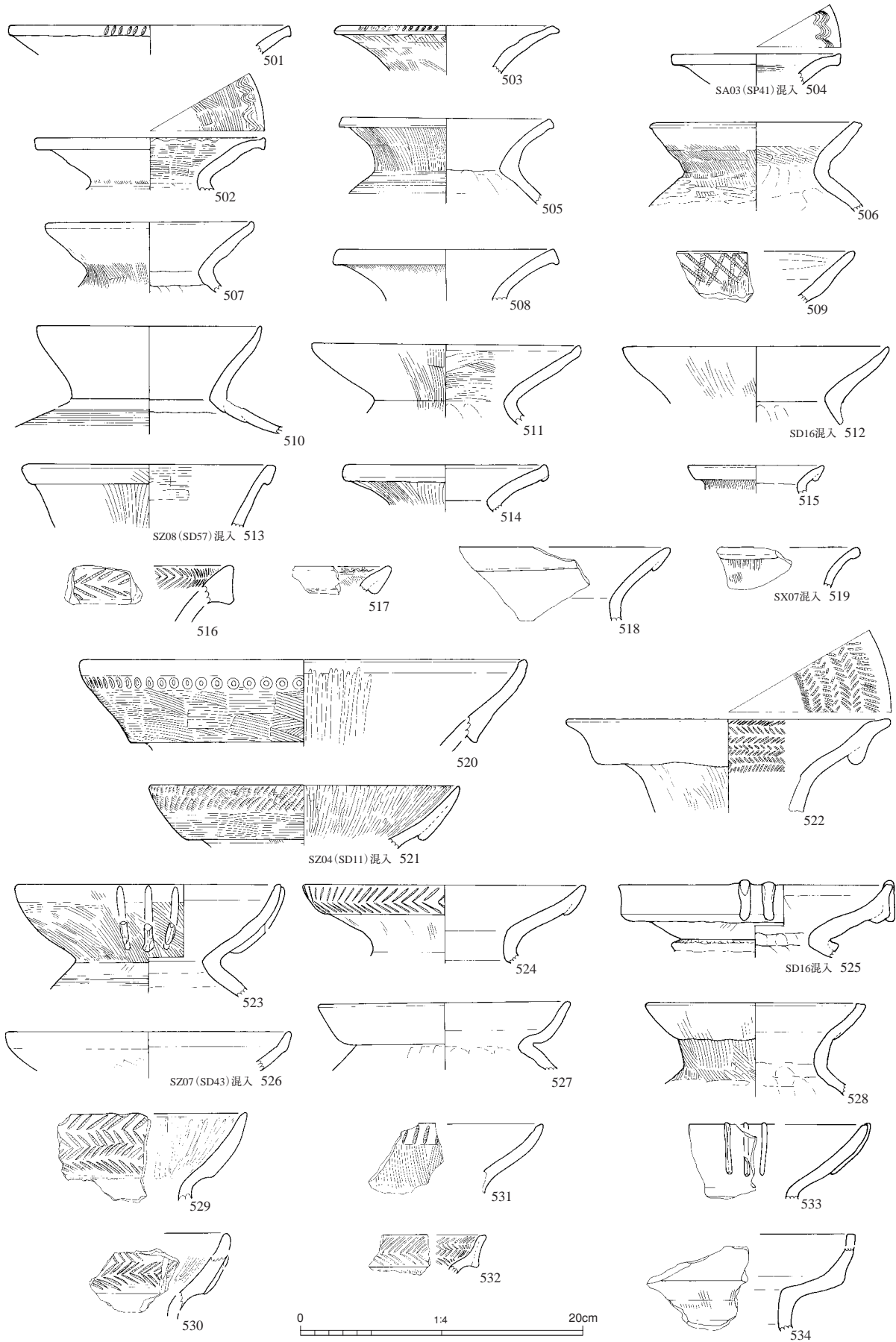


Fig.114 古墳時代 包含層 出土遺物 (1)

3 古墳時代

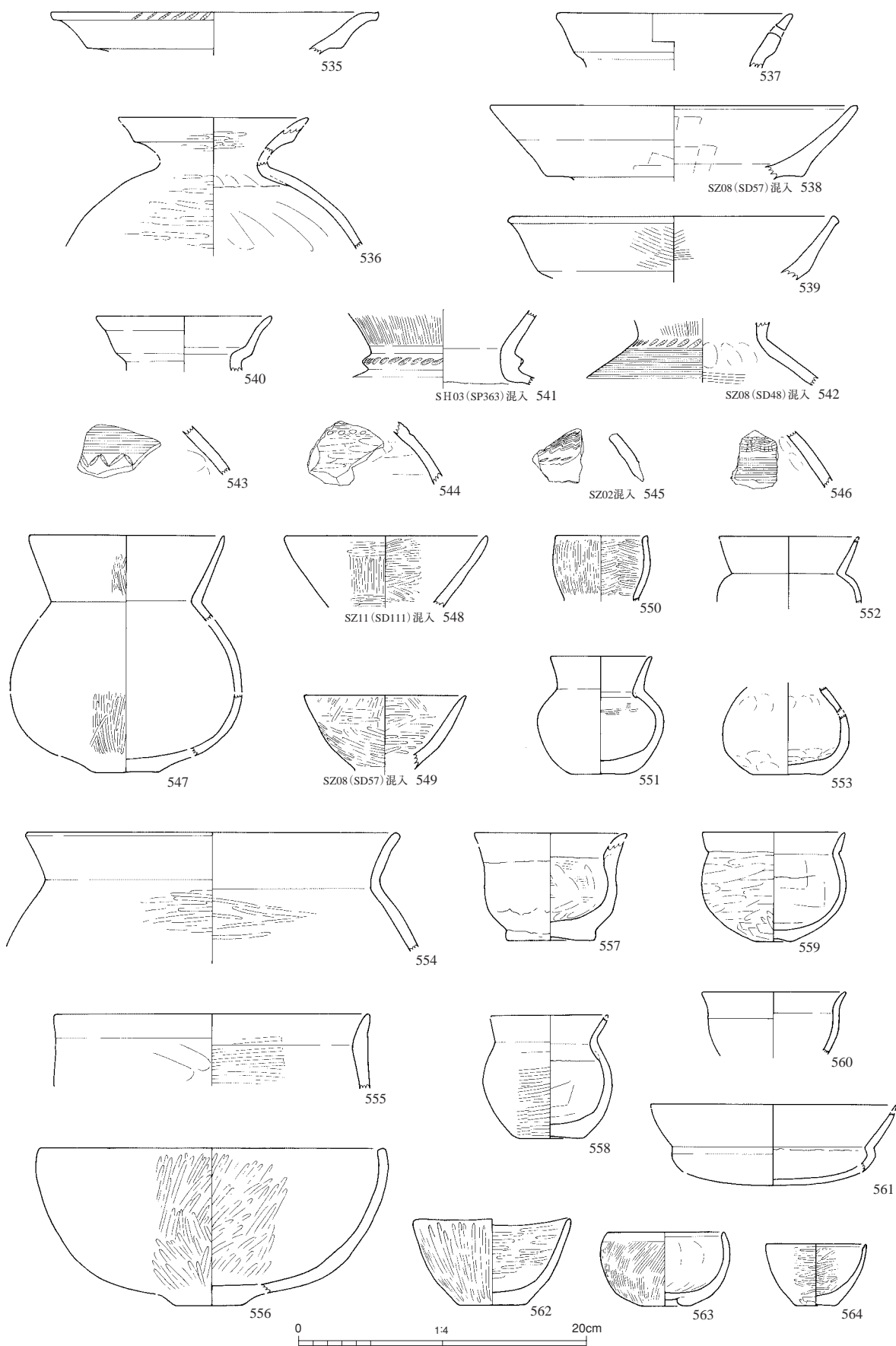


Fig.115 古墳時代 包含層 出土遺物 (2)

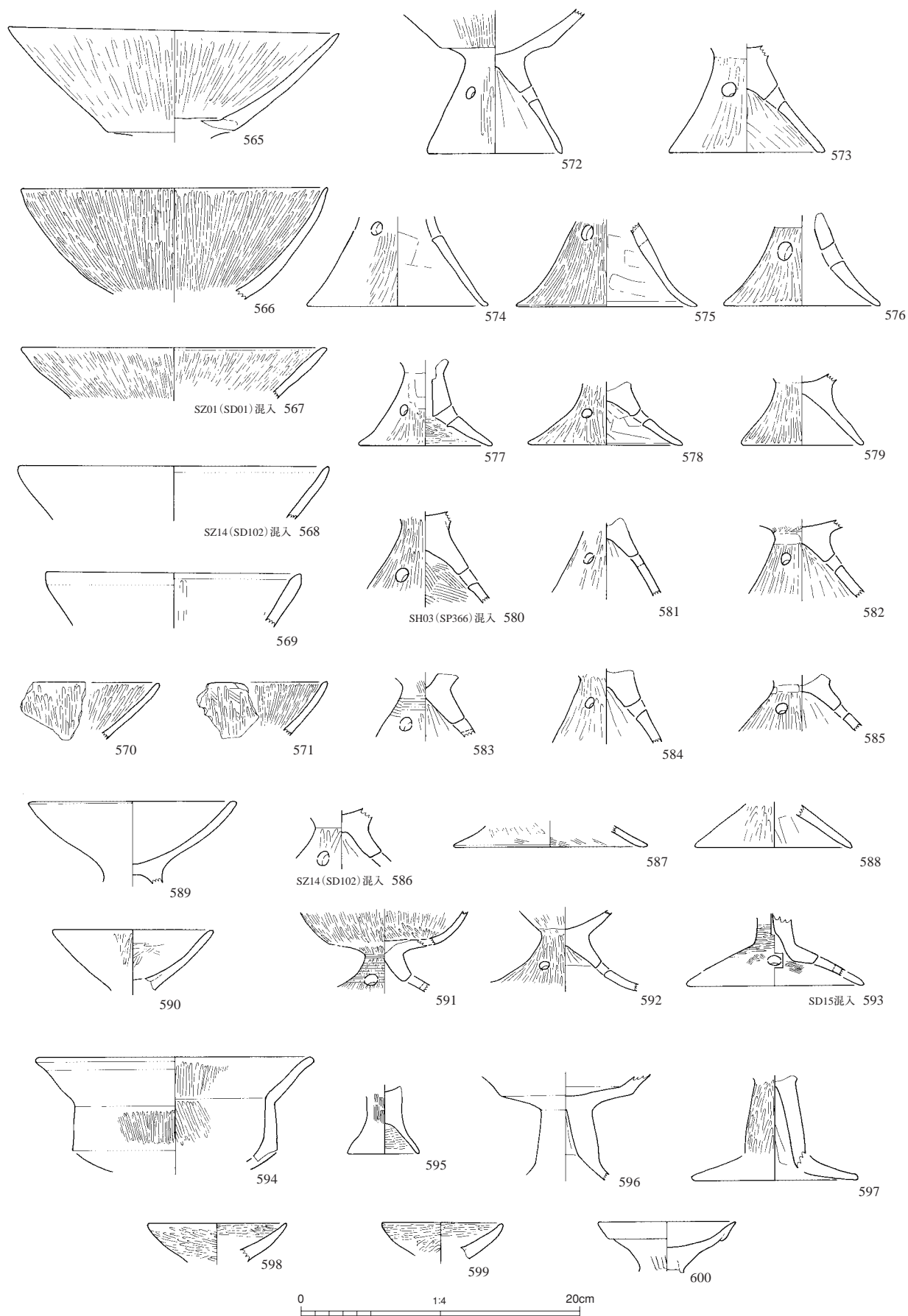


Fig.116 古墳時代 包含層 出土遺物 (3)

3 古墳時代

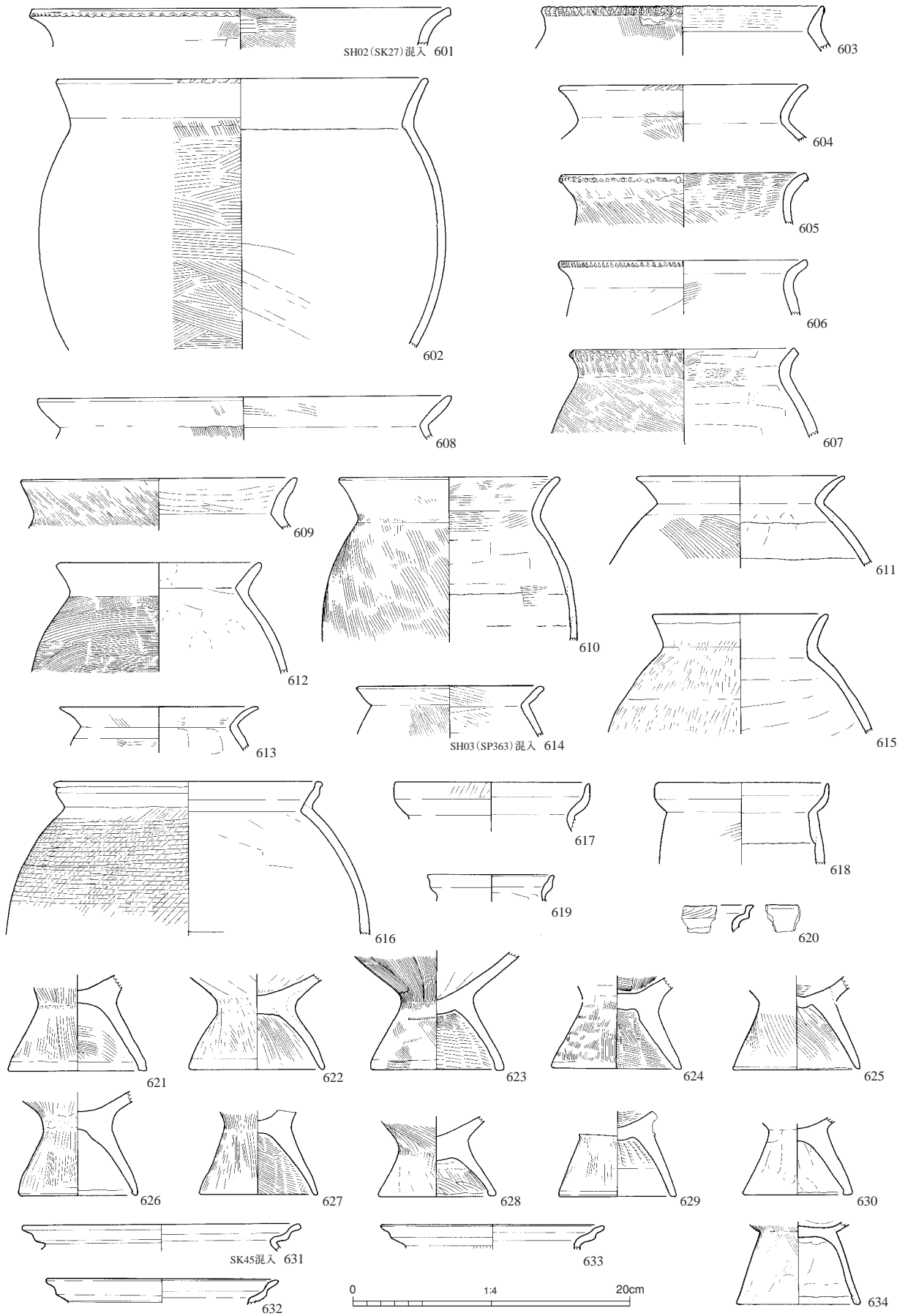


Fig.117 古墳時代 包含層 出土遺物 (4)

(7) 小 結

北神宮寺遺跡における古墳時代集落の造営は、元屋敷Ⅰ式古段階（庄内式中葉、廻間Ⅱ式Ⅰ段階並行）に突如として始まり、元屋敷Ⅲ式期（松河戸Ⅰ式前半、布留Ⅱ式並行期）まで継続している。実年代では、おおむね、3世紀初頭から4世紀中頃に相当する。

集落内の住居としては竪穴建物を用い、居住域に隣接して方形周溝墓群が築かれている。集落の中心部には長軸11mをこえる大型の土坑（SX01）を設け、土器などを廃棄している。

竪穴建物は隅丸方形を基本に、4箇所に柱穴を設け、外周には壁溝をめぐるしている。炉跡は床面にはほぼ普遍的にみられるが、置石炉の事例もある。貯蔵穴も多くの建物で認められる。方形周溝墓は周溝が全周するか、一つの隅が途切れる形態である。

また、古墳時代中期末葉から後期中葉（5世紀末葉から6世紀中頃）にかけての遺物が僅かに出土した。これらの遺物に伴う遺構はないが、この時期に小規模な集落が展開していた可能性が高い。

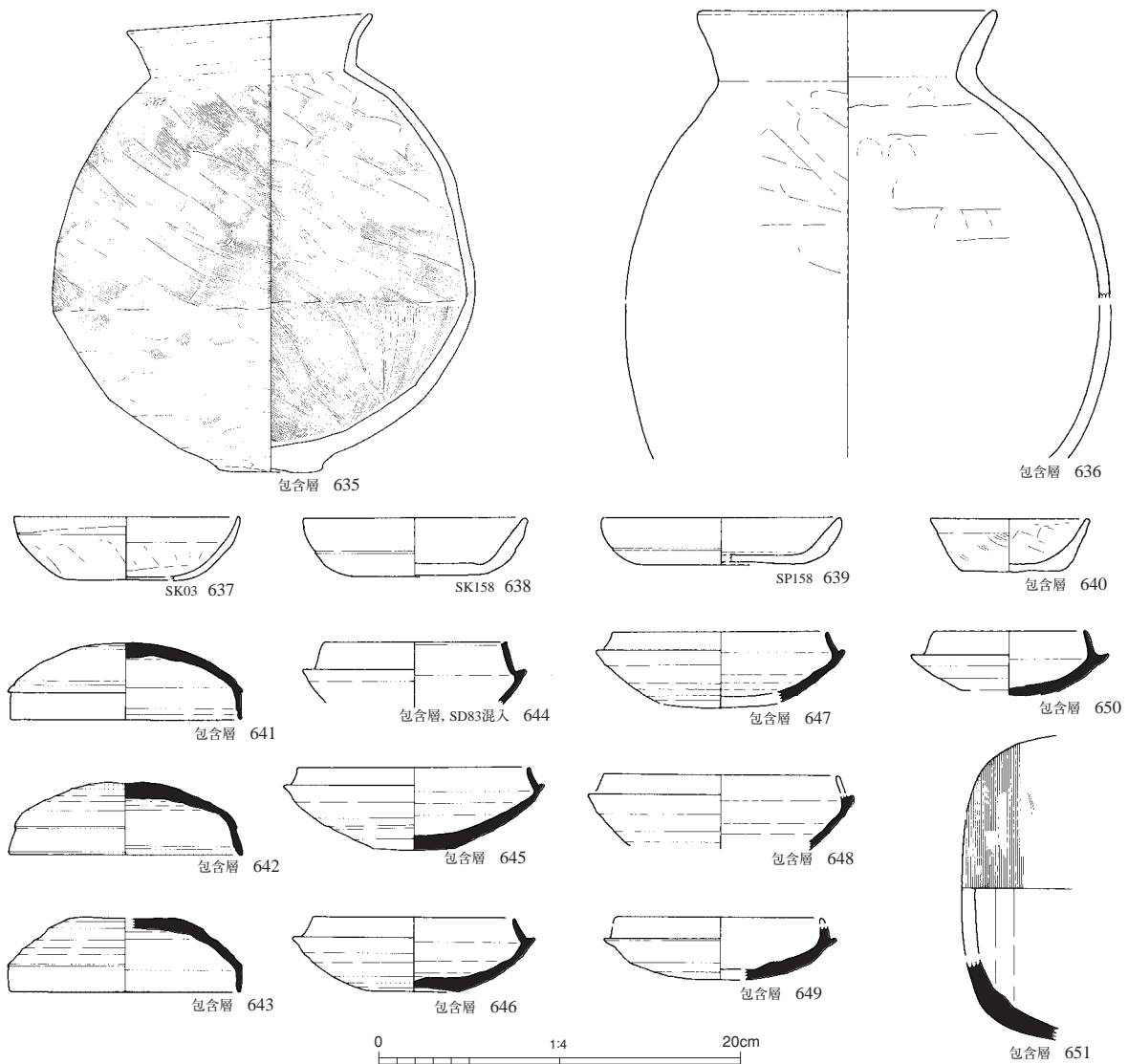


Fig.118 古墳時代中・後期 包含層 出土遺物

4 平安時代

(1) 検出遺構の概観

平安時代の遺構・遺物は少量である。注目できる遺構として、灰釉陶器を埋納した祭祀遺構SX07があげられる。出土遺物から10世紀前半頃に形成されたと考えられ、地鎮などの祭祀行為によって形成された遺構と捉えられる。

このほか、SX07附近の包含層中から灰釉陶器や土師器甕の破片がわずかながらも出土している。これらの遺物は平安時代の明確な遺構に伴うものではないが、祭祀遺構の周辺において、人びとが活動していたことがうかがえる。

(2) 祭祀遺構 SX07

SX07 (Fig.120) は灰釉陶器を埋納した祭祀遺構である。J-5区の表土層である黒色砂質土中において検出した。黒色砂質土中における遺構検出は困難で、発掘調査において灰釉陶器を埋納した掘り込みは確認できなかった。

灰釉陶器は2点の深碗(1・2)と平底瓶(6)がまとまってあり、このまとまりから1mほど南において灰釉陶器の碗(5)が出土した。このほか、出土位置が不明確ながら、灰釉陶器深碗2点(3・4)が近辺から出土しており、一連の遺構を形成するものといえる。

遺構の掘り込みが見られないこと、周辺の同時代の遺構の様相が不明瞭であることから、SX07の性格は不明である。ただし、完形に近い灰釉陶器をまとめて埋納していることから考えると、なん

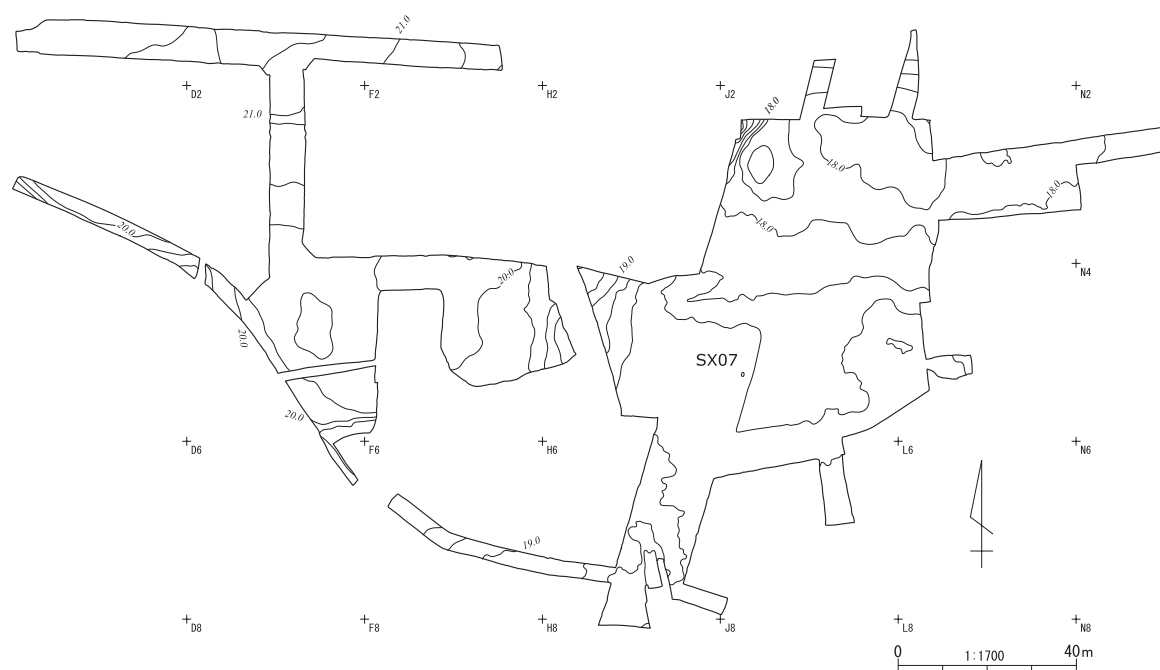


Fig.119 平安時代 遺構分布図

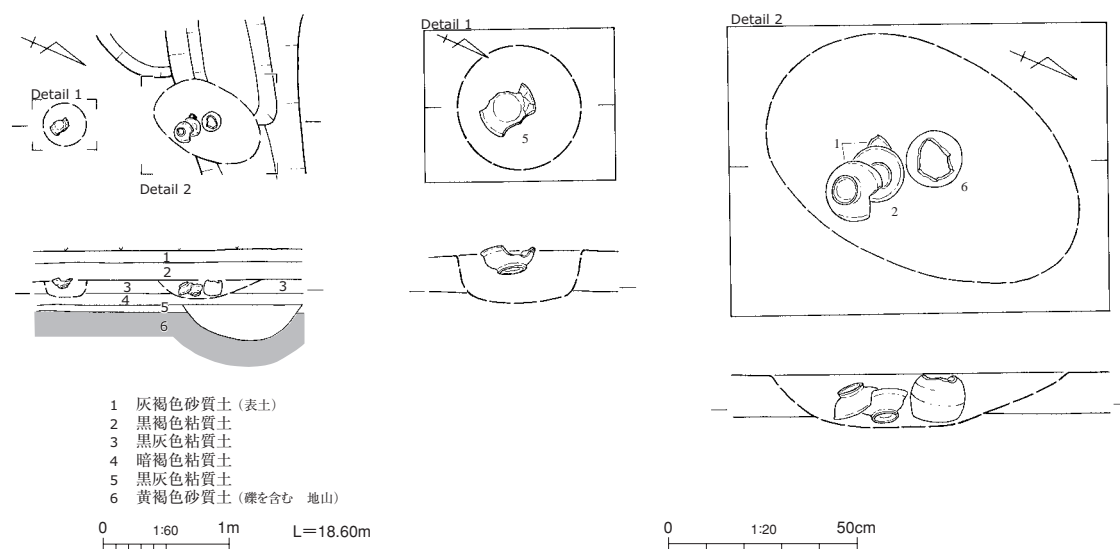


Fig.120 SX07 実測図

らかの祭祀行為が執り行われた可能性が高い。SX07は地鎮などを目的にした祭祀遺構であったとみられよう。遺構の形成年代は、出土遺物から10世紀前半代と捉えられる。

(3) 出土遺物

SX07出土遺物 (Fig.121) 1～4は灰釉陶器の深碗、5は碗である。いずれも口縁端部が外反し、緩やかに屈曲する体部をもつ。いずれも灰釉は漬け掛けによって施され、わずかに白灰色に発色する。これらの深碗は、O53窯式に位置づけられる。

6の平底瓶は、口縁端部を欠損するほかは完形である。底部は丁寧なケズリ調整がなされ、外面の調整も比較的丁寧である。表面の灰釉は厚く、緑灰色に発色する。K90窯式に位置づけられる。

以上の出土遺物群は、平底瓶の製作時期が9世紀後半代と古いものの、新出の器種である深碗が主体である。SX07の遺構形成期は、O53窯式期とみられよう。実年代では、10世紀前半頃のこととみられる。

遺構・包含層出土遺物 (Fig.121) 7～11は土坑もしくは小穴から、12～27は包含層から出土した遺物である。これら平安時代の遺物はSX07があるJ-5区周辺に集中する傾向がある。灰釉陶器はO53窯式期からH72窯式期に位置づけられ、おおよそ、10世紀前半から11世紀初頭の所産と考えられる。同時期の煮沸具である土師器の甕（清郷型甕）もわずかに認められる（10・26）。

(4) 小 結

平安時代の遺構、遺物は僅かであるが、10世紀前半頃から暫くの間、この地で人びとが活動していたことが分かる。SX07のような祭祀遺構だけでなく、土師器の煮沸具も出土することから、小規模ながら一般的な集落が展開していた可能性が高い。平安時代の集落は掘立柱建物を主体としていたとみられるが、明確な同時期の遺構は検出できなかった。平安時代の遺構の多くが、遺構検出が困難な黒色砂質土中において掘り込みが完結していたとみられよう。

4 平安時代

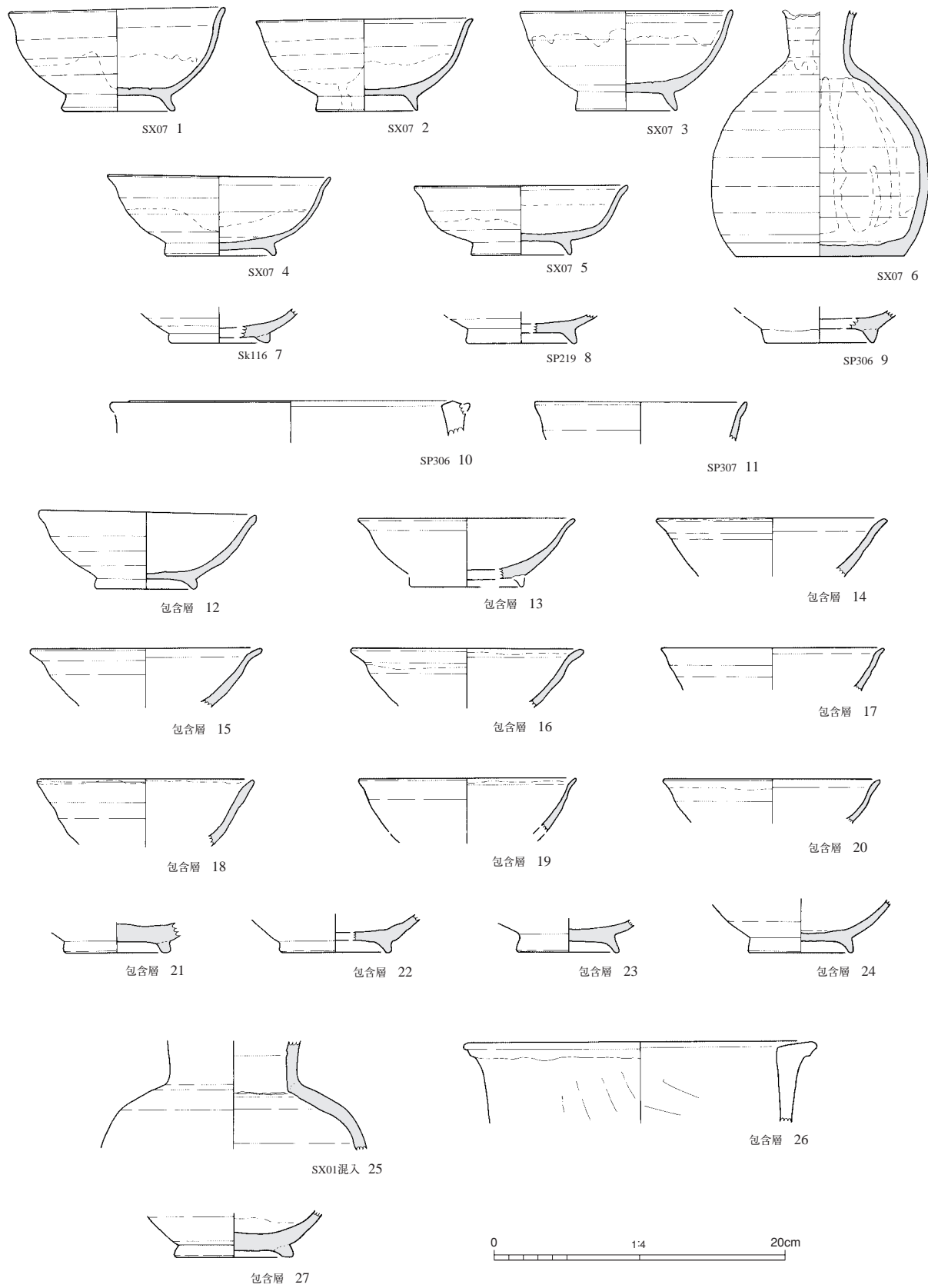


Fig.121 平安時代 出土遺物

5 鎌倉時代

(1) 検出遺構の概観

明確に鎌倉時代と捉えられる遺構は、短刀と山皿を副葬した土坑墓1基、竪穴状遺構1基、小穴数基である。鎌倉時代の遺物は、数こそ少ないものの、調査区の中で広域に分布している。

包含層から出土した遺物量も平安時代と比べると若干ながらも増加傾向が認められる。遺物が示す中心的な時期は13世紀後半から14世紀初頭である。

(2) 検出遺構

竪穴遺構 (Fig.123) SK75は、K-6区で検出した方形の竪穴状遺構である。東端が発掘区外にあるが、平面の大部分が確認できているとみられる。遺構の規模は、2.5m×2.0m程度である。深さは25cm程度であり、遺構中から山茶碗(9)、山皿(10)、伊勢型鍋(11)、かわらけ(12~14)などが出土した。SK75は、その規模、構造から、竪穴建物の可能性が考えられる。SK75は住居というより倉庫的な建物であったとみられよう。出土遺物から13世紀後半頃の遺構とみられる。

土坑墓 (Fig.123) SK160は、F-1区で検出した土坑墓である。南端が攪乱によって破壊されていたが、大きくは損なわれていないと捉えられる。土坑はほぼ南北に主軸をとり、幅0.6m、検出した長さは1.6mである。土坑の横断面は緩やかな曲線を描いているが、木棺などの痕跡は確認できなかった。土坑の中央北よりで、山皿4点(1~4)と短刀1点(5)が出土した。山皿はすべて上面を上に向けて出土した。山皿の中に何かが盛られていた可能性が高い。短刀は切先を南に向けて土坑

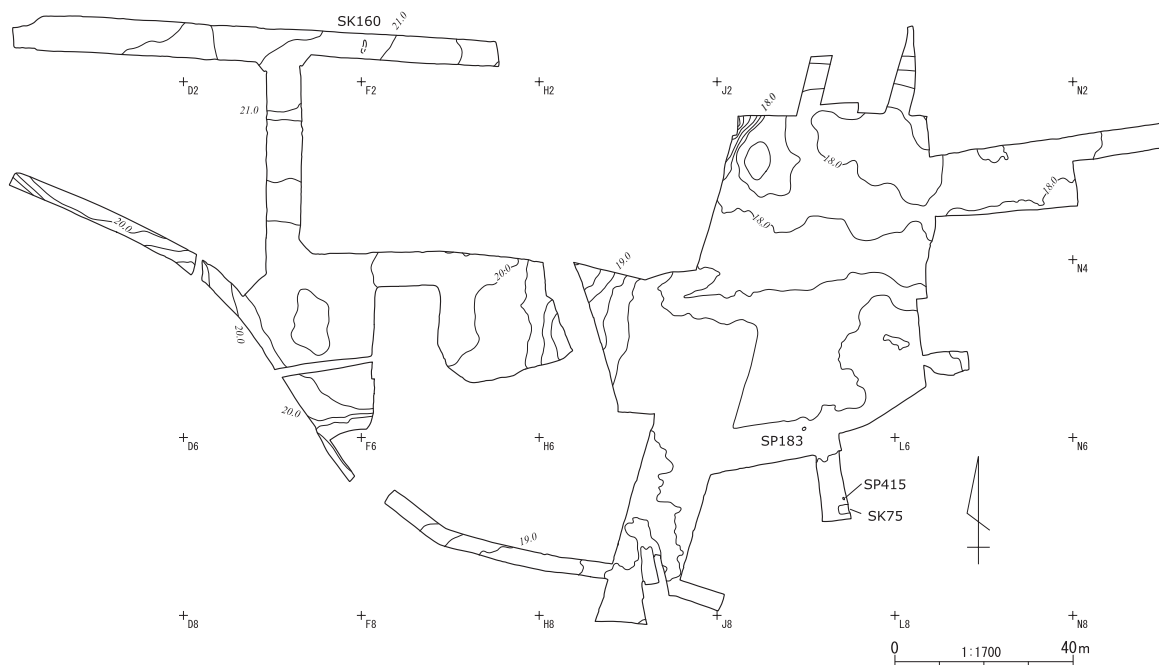


Fig.122 鎌倉時代 遺構分布図

5 鎌倉時代

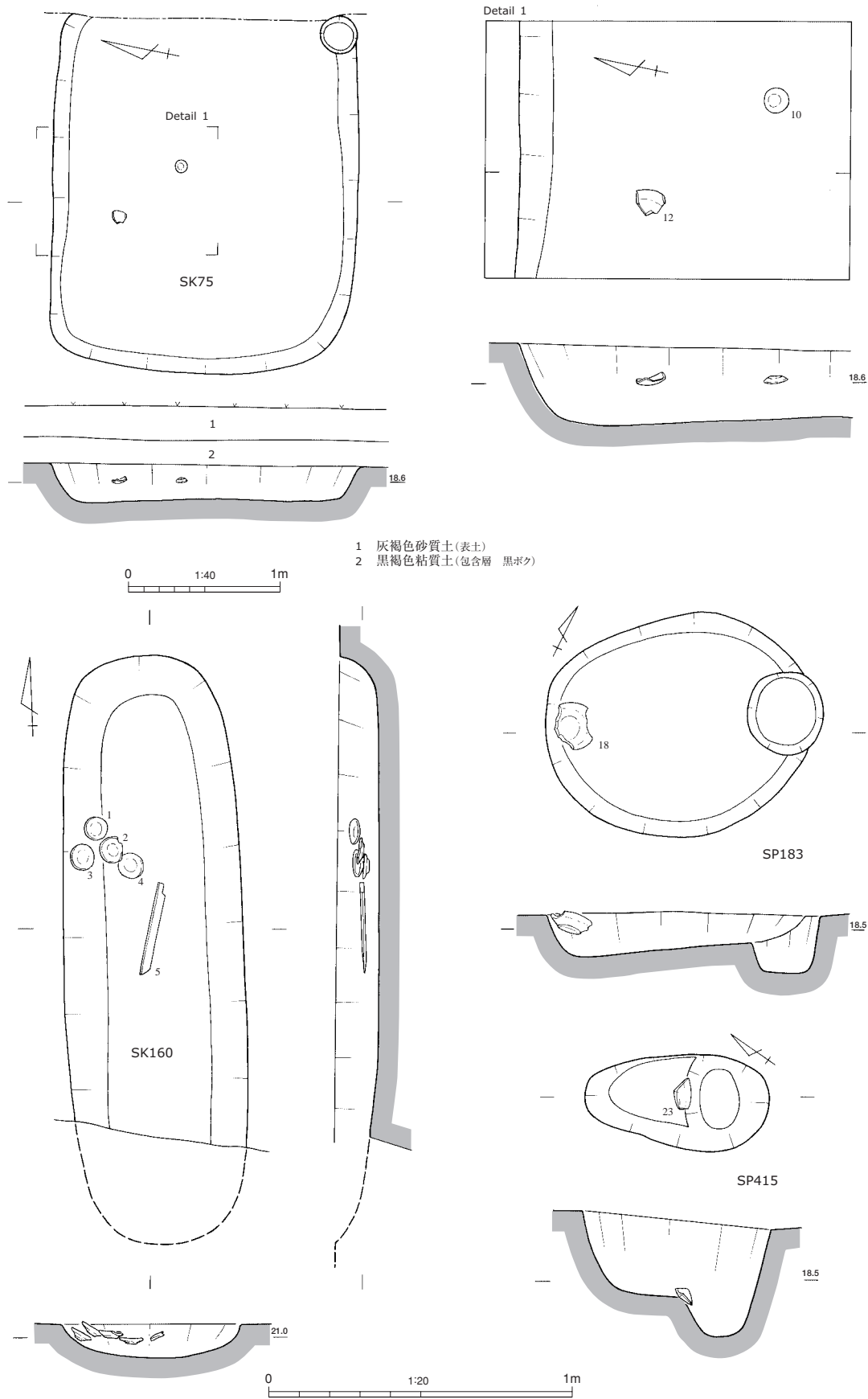


Fig.123 鎌倉時代 遺構 実測図

のほぼ中央において検出できた。

短刀の方向から、北頭位で埋葬されたものと捉えられる。出土遺物から埋葬の時期は、13世紀後半頃と捉えられる。

SP183 (Fig.123) SP183は、J-5区で検出した長楕円形の遺構で、長軸85cm、短軸75cmほどの規模である。遺構からは完形に近い山茶碗(19)が出土した。出土遺物から、13世紀後葉から14世紀初頭頃の遺構と捉えられる。

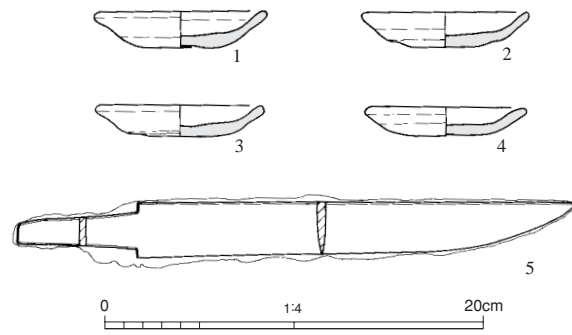


Fig.124 SK160 出土遺物

SP415 (Fig.123) SP415は、K-6区で検出した長楕円形の遺構である。片側に深く掘削されている部分があり、掘立柱建物の柱穴の可能性はある。ただし、調査区の制約から、明確な建物跡を抽出することができない。深く掘削されている部分は、直径30cm、検出面からの深さ40cm程度である。SP415からは、山茶碗(24)が出土した。出土遺物から、13世紀後葉から14世紀初頭頃の遺構と捉えられる。

(3) 出土遺物

鎌倉時代遺構出土遺物 (Fig.124・125) 1～24は鎌倉時代の遺構から出土した遺物である。鎌倉時代の遺構に伴う遺物は決して多くないが、SK160やSK75などからの出土遺物が注目できる。

SK160出土遺物 1～5は、土坑墓SK160から出土した遺物である。1～4は山皿である。ほぼ同形、同大のもので、底部には糸切りの痕跡を明瞭に残す。5は鉄製の短刀である。切先から茎尻

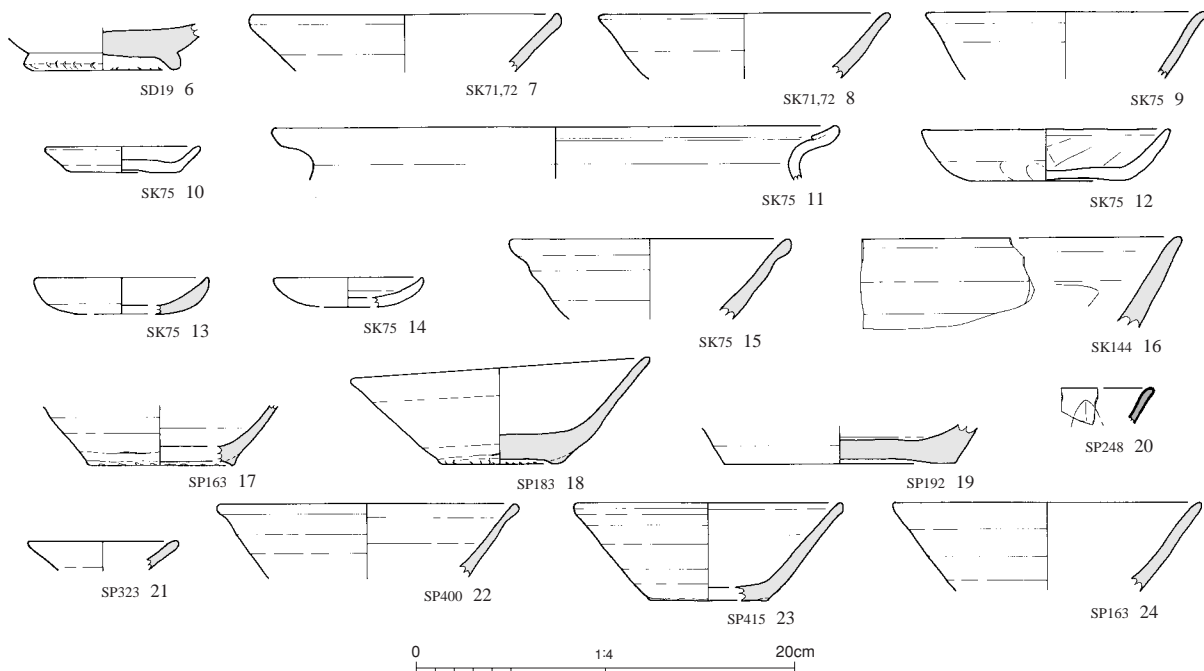


Fig.125 鎌倉時代遺構出土遺物

5 鎌倉時代

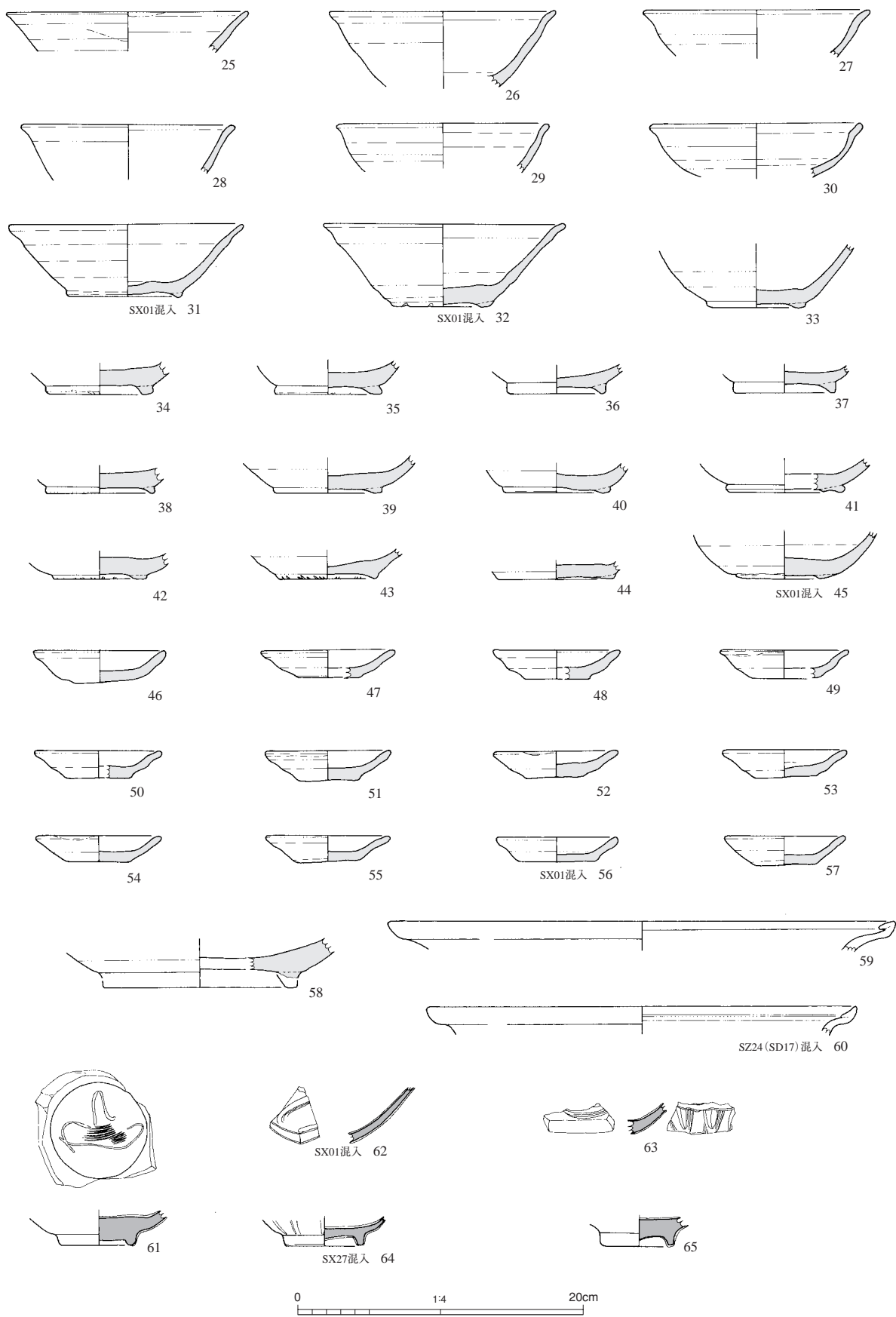


Fig.126 鎌倉時代 包含層 出土遺物

まで完存する。全長29.6cm、刃部長23.1cm、刃部幅2.7cmである。切先は緩やかな曲線を描き、明確な屈曲は認められない。茎関は背側と刃側の双方に認められ、茎尻は直線的である。全面が錆で覆われており、鞘や柄などの痕跡はうかがうことができない。目釘孔も現状では確認できないが、厚い錆のために観察できないとみられる。山皿の年代観から、これらの遺物は13世紀後半のものと捉えられる。

SK75出土遺物 9～14は竪穴状遺構SK75から出土した遺物である。山茶碗(9)、山皿(10)、伊勢型鍋(11)、かわらけ(12～14)といった遺物が揃う。13世紀後半頃のものともみられるが、かわらけがまとまっている点で注目できる。

その他遺構出土遺物 上記のほかに、鎌倉時代の遺構から遺物について若干触れておきたい。鎌倉時代の遺構から出土した遺物は、山茶碗、山皿のほかに、片口鉢(16)や、壺(19)が知られる。また、中国龍泉窯系の青磁碗(20)もみられる。山茶碗の中には15のような尾張系のものが若干みられる。山茶碗は17・18・23など、高台が退化し痕跡程度にとどめるものばかりで、13世紀後半から14世紀初頭頃の所産ともみられる。遺構から出土した遺物の時期は互いによく似ており、鎌倉時代の遺構形成時期が比較的短期間であったことがうかがえる。

包含層出土遺物 (Fig.126) 他時期の遺構に混在して出土した遺物を含め、包含層出土遺物として紹介する。25～65は、包含層から出土した鎌倉時代の遺物である。

25～45は山茶碗、46～57は山皿、58は片口鉢、59・60は伊勢型鍋である。包含層出土遺物には13世紀前半の遺物が含まれる。遺構が確認できる時期より古く、集落の形成時期は13世紀前半に遡る可能性がある。

61～65は、中国産の青磁碗である。中国産青磁は当地方の12・13世紀の集落から普遍的に出土する。北神宮寺遺跡からはSP248から出土した20と合わせ、合計6点の中国産青磁碗が確認できた。北神宮寺遺跡における中国産貿易陶磁器の様相は、その質、量からも当地域の一般的傾向を示しているものと評価できよう。

(4) 小 結

鎌倉時代の遺構・遺物は僅かであるが、土坑墓や建物跡など、生活にかかわる痕跡が確認できた。小規模な集落があったものとみられる。その時期は出土遺物から13世紀後半から14世紀初頭に中心がある。また、包含層出土遺物には若干古い年代のものが含まれることから、鎌倉時代の集落の形成は、13世紀前半まで遡るとみられる。

短刀を副葬する土坑墓(SK160)が確認できたことも意義深い。土坑墓には山皿4点も副葬されていた。鎌倉時代の墓に短刀を副葬することは比較的珍しい。SK160の存在は、13世紀後半、ある程度の有力者がこの地に居住していたことを示している。その被葬者は、在地の土豪、井伊氏ともなんらかの関係を有していた可能性が高い。北神宮寺遺跡は井伊氏の拠点、井伊谷城の膝下にあることを考慮すると、南北朝争乱の前史としても、鎌倉時代後期の様相が明らかになったことの意義は大きい。

6 戦国時代

(1) 検出遺構の概観

調査区の広域で戦国時代の遺構を確認した。戦国時代の集落は15世紀後葉頃に造営が始まり、その後、大きな断絶なく近世集落へと移行するとみられる。

戦国時代の遺構としては、掘立柱建物8棟、柵列3列、竪穴状遺構2基があり、かわらけや土錘を集中的に埋納した遺構が多数検出できた。低位面には長方形を呈する掘立柱建物が柵列を伴い構築されている。高位面には大型の総柱建物SH09があり、その周囲に竪穴状遺構や区画溝が展開している。

遺物が豊富に出土した遺構として、区画溝SD141があり、15世紀後葉の一括資料として注目できる。また、かわらけや土錘が集中的に出土した小穴は祭祀に使用されたものとみられる。

(2) 区画溝 SD141

遺構の特徴 (Fig.127) SD141はD-4区で検出した区画溝で、神宮寺川を眼下に望む縁辺部に設定されている。総延長20mほどを調査したが、北側および南側は調査区外に至っている。区画溝は、ほぼ地形に合わせて設定されているが、確認した中ほどで屈曲している。

溝はほぼ一定の規模で掘削されている。横断面は外側に開く「コ」字形を呈している。検出面における幅は70～80cm、検出面からの深さは30～40cm程度である。底面の高さは一定しない。特定方向への排水はあまり意識されていなかったとみられる。

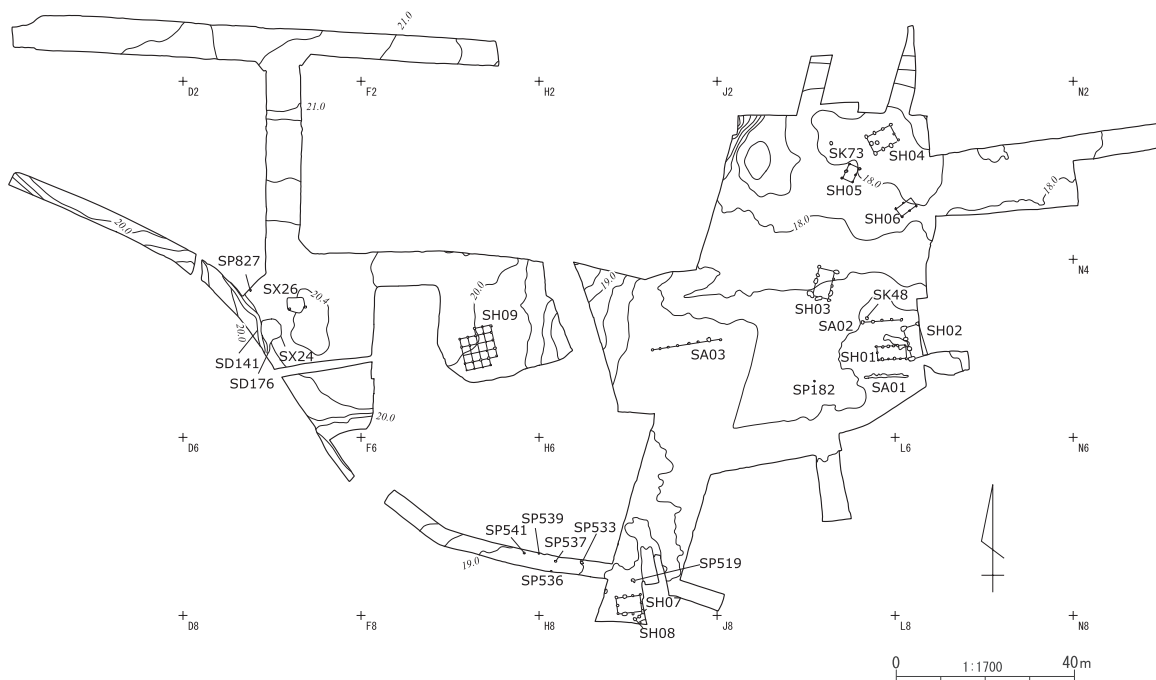


Fig.127 戦国時代 遺構分布図

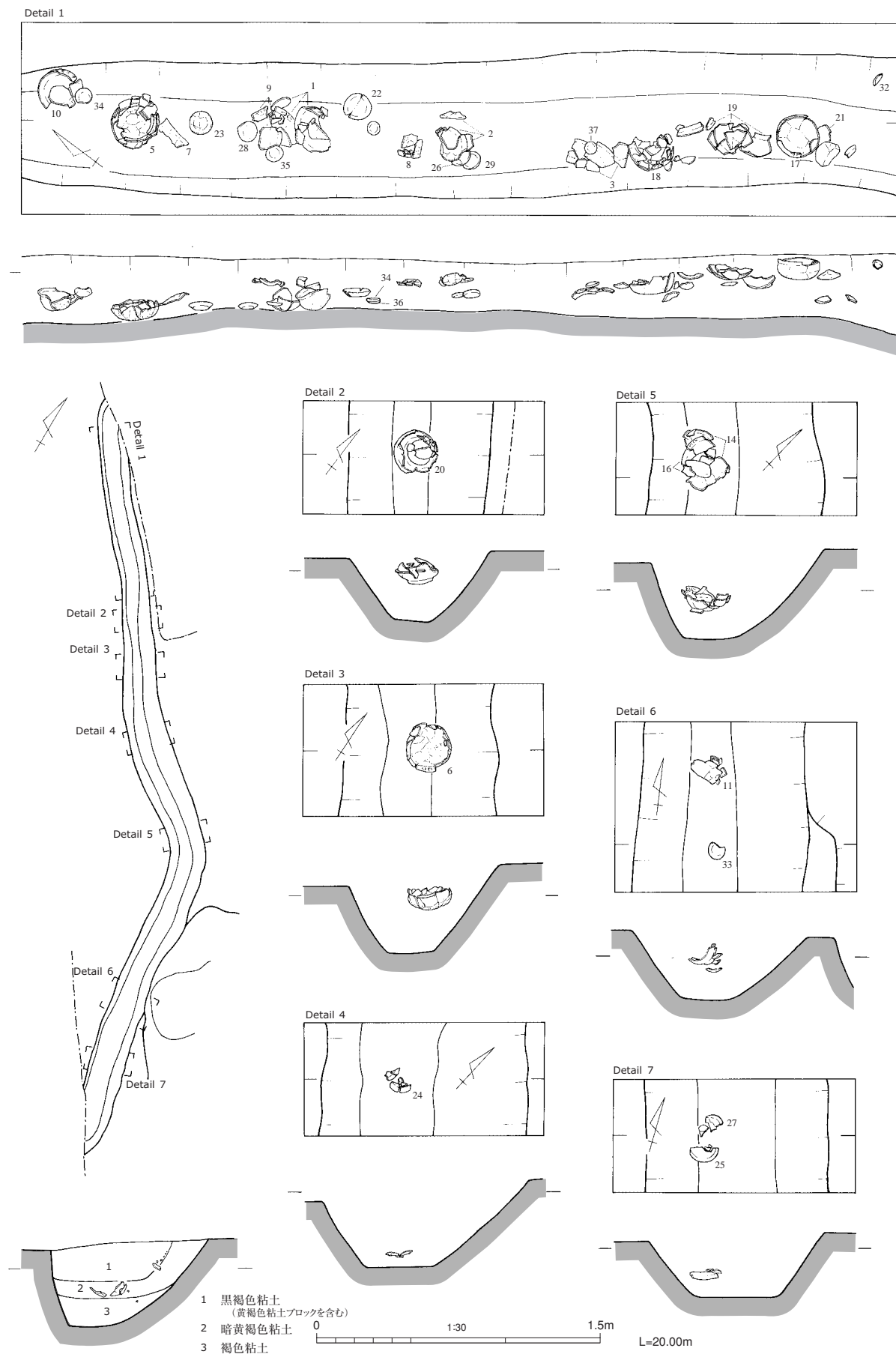


Fig.128 SD141 実測図

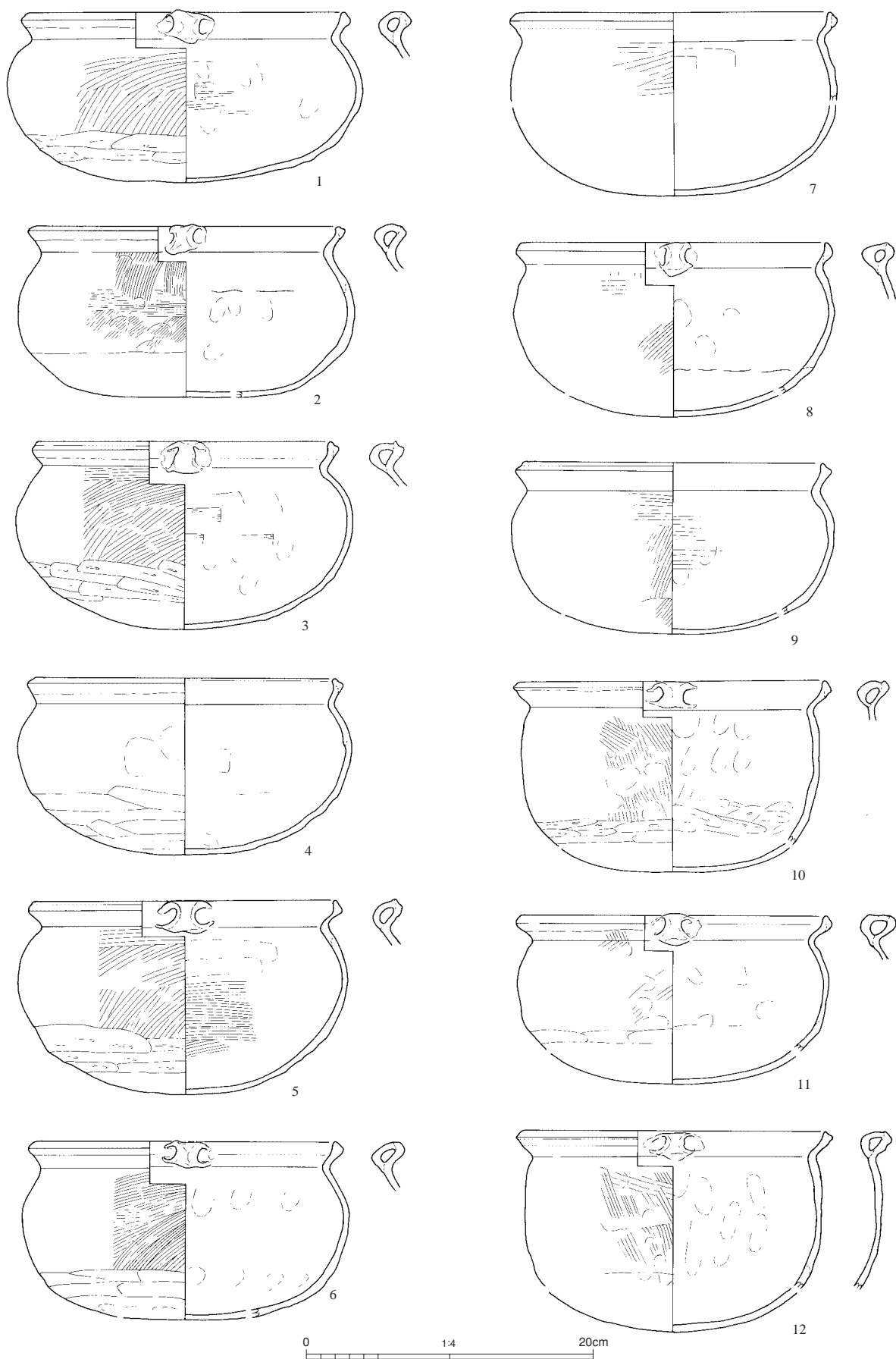


Fig.129 SD141 出土遺物 (1)

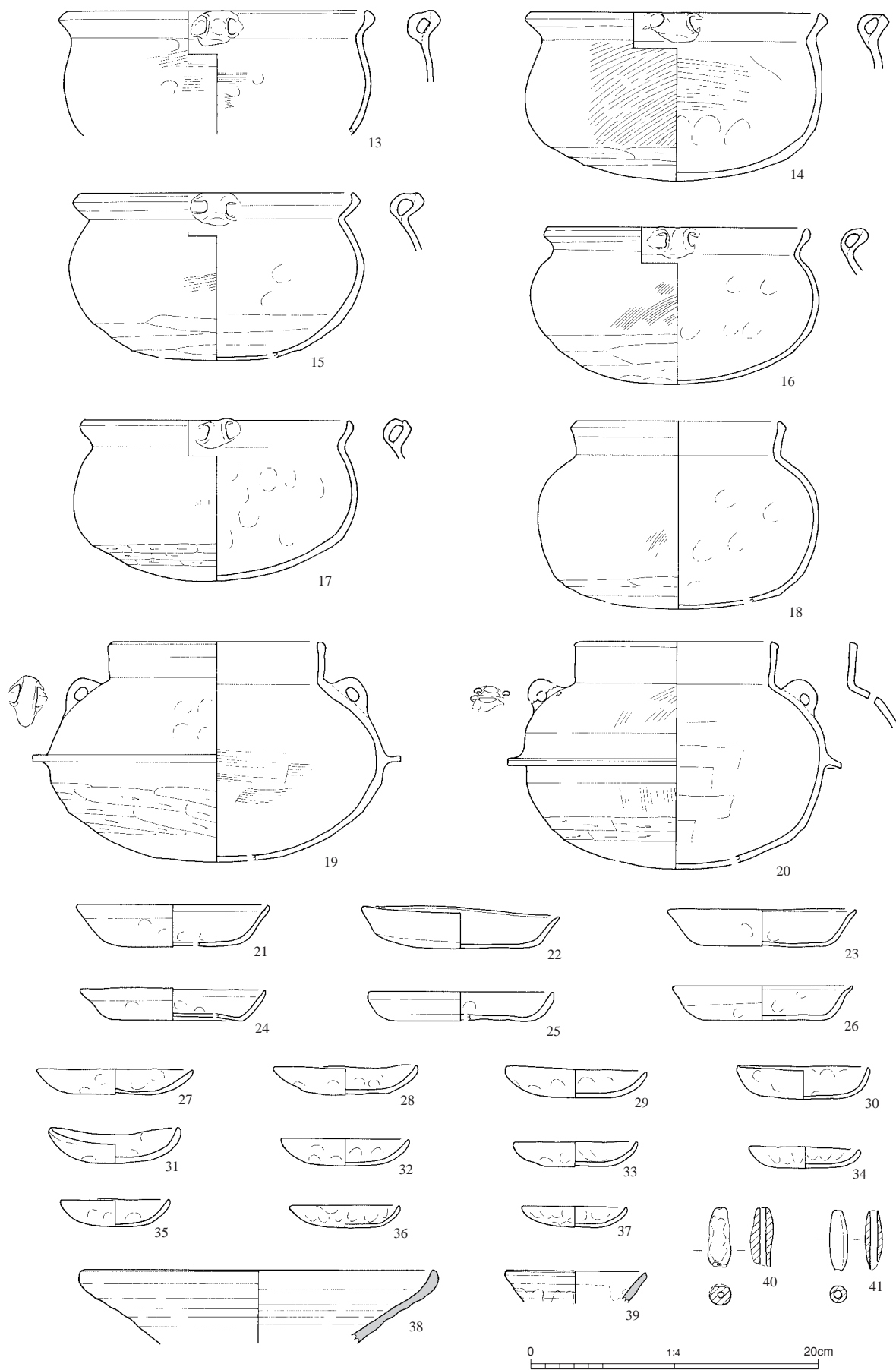


Fig.130 SD141 出土遺物 (2)

段丘縁辺の自然地形に合わせて溝が設定されていること、溝の内側には建物が想定できることから、SD141は居住域を区画する溝であったと判断できる。

SD141からは1～41の遺物が出土した。とくに北側では完形に近い内耳鍋やかかわらが集中的に出土した。溝の南側からも、集中度は低いものの、完形に近い内耳鍋やかかわらがみられた。調理施設が近在していた可能性を示す状況といえる。出土遺物から、SD141は15世紀後葉の遺構と捉えられる。

SD141に接して、竪穴状遺構SX24を検出した。近在には同様の形状をもつ遺構SX26も確認できている。SX24は一辺4mほどの規模をもち、中央部がやや深いすり鉢状を呈する遺構である。南側には排水溝を備える。柱穴は明確でないものの、竪穴建物と捉えられる。SX26についても、同様の遺構とみられよう。SX24からは59～61に示す遺物が出土しており、SD141と同時期の遺構であることが判明する。

SD141出土遺物 (Fig.129・130) 1～41はSD141から出土した遺物である。1～17はく字状口縁をもつ内耳鍋である。口縁の形状は互いに似るが、体部が深いもの(10・12)が認められる。外面には煤が付着しており、使用した痕跡が明瞭である。18は羽無釜である。外面には外耳が添付されることが多いが、この個体にはみられない。19・20は羽付釜である。肩部外面に2箇所、外耳が付けられるが、20の片方は外耳の欠損後、釣り手として使用できるように3箇所、穿孔されている。

21～37はかわらけである。いずれも底部に糸切痕跡をもたない、非ロクロ成形のかわらけである。断面が箱形を呈し、口縁端部にヨコナデを施して端部形状が整えられるもの(21～26)と、断面が碗形を呈し、口縁端部形状が整わないもの(27～37)の2者が認められる。体部には成形時の指当ての痕跡がみられるが、後者がより顕著である。また、前者は直径12.6～13.6cm程度で大きさにまとまりがあることにに対し、後者は口径7.4～11.0cmと多様である。

38・39は施釉陶器である。38は播鉢、39は縁釉小皿であり、ともに古瀬戸後期様式のⅣ期に位置づけられる。実年代では15世紀中頃から後葉に相当する。40・41は土錘である。

以上の遺物群は施釉陶器が示す年代と一致するとみられる。総体として15世紀後葉の資料として捉えておきたい。

(3) 掘立柱建物

分布 掘立柱建物が調査区の広範囲で9棟分確認できた。柱穴からの出土遺物で築造時期が明確にできるものはSH01とSH09であり、いずれもSD141と同様の15世紀後葉の遺構とみられる。その他の掘立柱建物は出土遺物から明確な時期が決定できないが、柱穴の形態、柱穴埋土の特徴から、同時期の遺構とみられる。また、掘立柱建物と一連の遺構とみられる柵列が数列確認できる。以下では、柱穴が明確な事例について紹介する。

SH01 (Fig.131) SH01はK-5区で確認した桁行5間、梁行2間の構造をもつ掘立柱建物である。建物は南北方向に合わせて設定されている。桁行6.5m、梁行3.0m、平面積19.5m²である。柱穴は整わないが、比較的深く掘削されている。柱穴からは43～46の遺物が出土した。出土遺物から15世紀後葉から16世紀前葉頃の遺構とみられる。

SH01の南側と北側において柵列（SA01、SA02）を検出した。両者はSH01の桁行の位置と一致することから、一連の遺構とみられる。SA01は溝状の掘り方をもち、底面の所どころが深く掘削されている。SA02は4間分の柱穴列が確認できた。

SH02 (Fig.132) SH02はL-4区で確認した桁行3間、梁行2間の構造をもつ掘立柱建物である。桁行7.2m、梁行3.6m、平面積25.9m²である。柱穴は円形をなさず、不正形の土坑状を呈する。遺構の時期を示す遺物に恵まれず、正確な帰属時期は不明である。

SH03 (Fig.132) SH03はK-4区で確認した桁行4間、梁行2間の構造をもつ掘立柱建物である。桁行6.4m、梁行3.6m、平面積23.0m²である。柱穴の形状は不整形であるが、並びは良い。遺構の時期を示す遺物に恵まれず、正確な帰属時期は不明である。ただし、SH03は近世の区画溝SD14によって破壊されているので、建物の構築は近世以前とみられる。

SH04 (Fig.133) SH04はK-2区で確認した桁行3間、梁行2間の構造をもつ掘立柱建物である。桁行6.0m、梁行4.0m、平面積24.0m²である。柱穴は比較的明瞭で、並びも良好である。遺構の時期を示す遺物に恵まれず、正確な帰属時期は不明である。

SH05 (Fig.178) SH05はK-3区で確認した桁行2間、梁行1間の構造をもつ掘立柱建物である。桁行3.6m、梁行2.4m、平面積8.6m²である。SH05は遺構の時期を示す遺物に恵まれず、正確な帰属時期は不明である。

SH06 (Fig.178) SH06はL-3区で確認した桁行2間、梁行1間の構造をもつ掘立柱建物である。桁行4.2m、梁行2.1m、平面積8.8m²である。SH06は遺構の時期を示す遺物に恵まれず、正確な帰属時期は不明である。

SH07 (Fig.133) SH07はH-7区で確認した桁行3間、梁行2間の構造をもつ掘立柱建物である。建物は南北方向に合わせて設定されている。桁行5.4m、梁行3.6m、平面積19.4m²である。柱穴は円形を呈し、並びも良好である。遺構の時期を示す遺物に恵まれず、正確な帰属時期は不明である。ただし、建物の方が南北方向を意識していること、周囲に戦国時代の遺構が数多く検出できることから、15世紀後葉から16世紀前葉頃に築造された可能性が高い。

SH08 (Fig.133) SH08はI-8区で確認した掘立柱建物である。建物の主要部分が発掘区外にあり、正確な構造は不明である。柱穴の底部からは扁平な角礫が出土しており、根石にされていた可能性が高い。

SH09 (Fig.134) SH09はG-4区で確認した桁行4間、梁行3間の総柱の構造をもつ掘立柱建物である。建物は南北方向に合わせて設定されている。南側に庇の柱穴が3間分、北側に張り出し部分が2間分みられる。双方の張り出し部分は、東西部分が揃わない。当該部分の精査を繰り返したが、図示するとおりの柱穴の並びであることが明確である。

南側に張り出した柱穴は規模が小さく、庇を支えた柱穴とみてよい。いっぽう、北側に張り出した柱穴は中心部分と同様の規模であることから、身舎を構成した柱穴である可能性が高い。

柱穴間隔は桁行、梁行ともに1.8mであり、4×3間分の身舎の規模は、桁行7.2m、梁行5.6mである。SH09の柱穴からは50～54の遺物が出土した。いずれも、かわらけである。出土遺物から15世紀後葉から16世紀前葉の遺構と捉えられる。

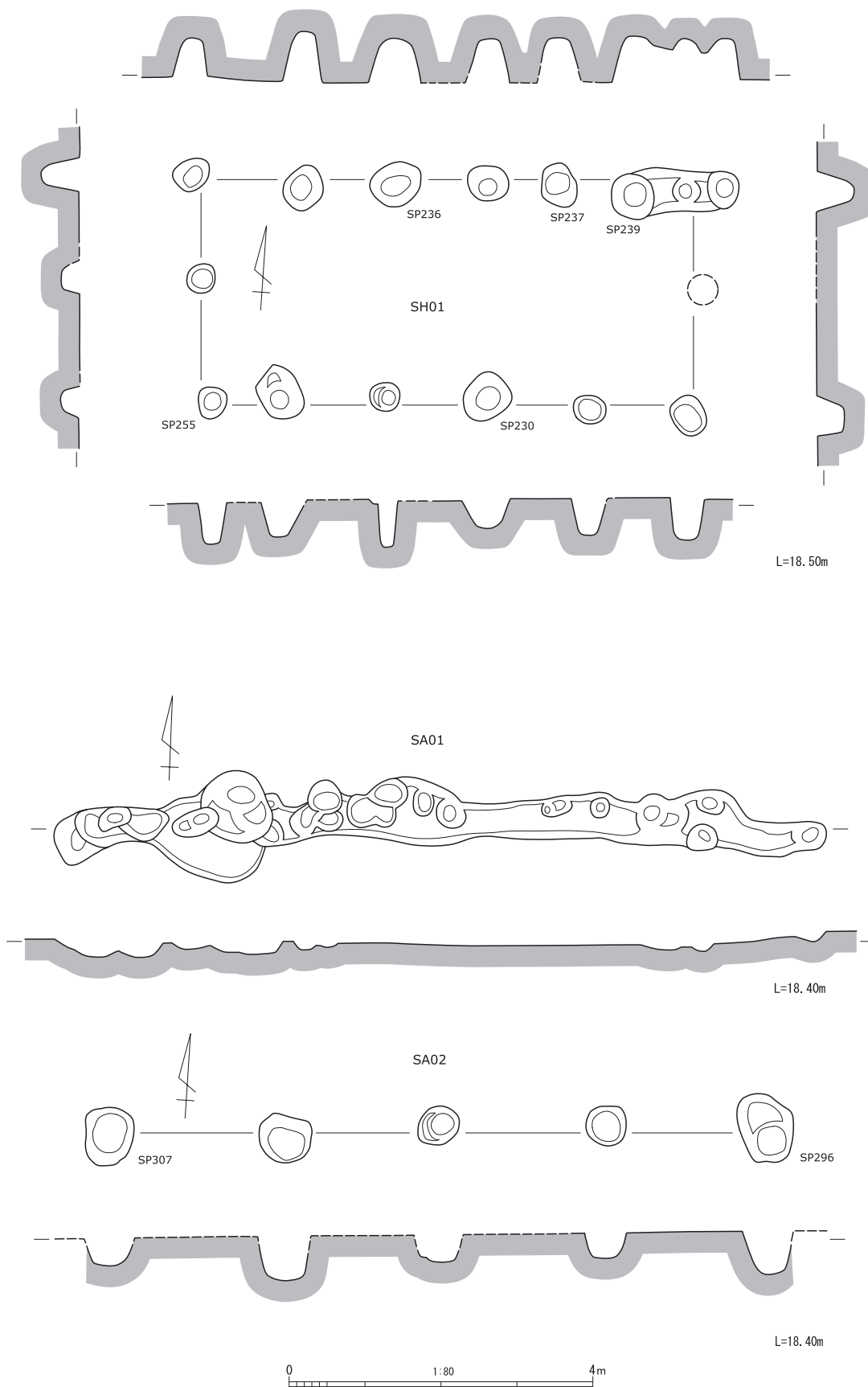


Fig.131 SH01、SA01・02 実測図

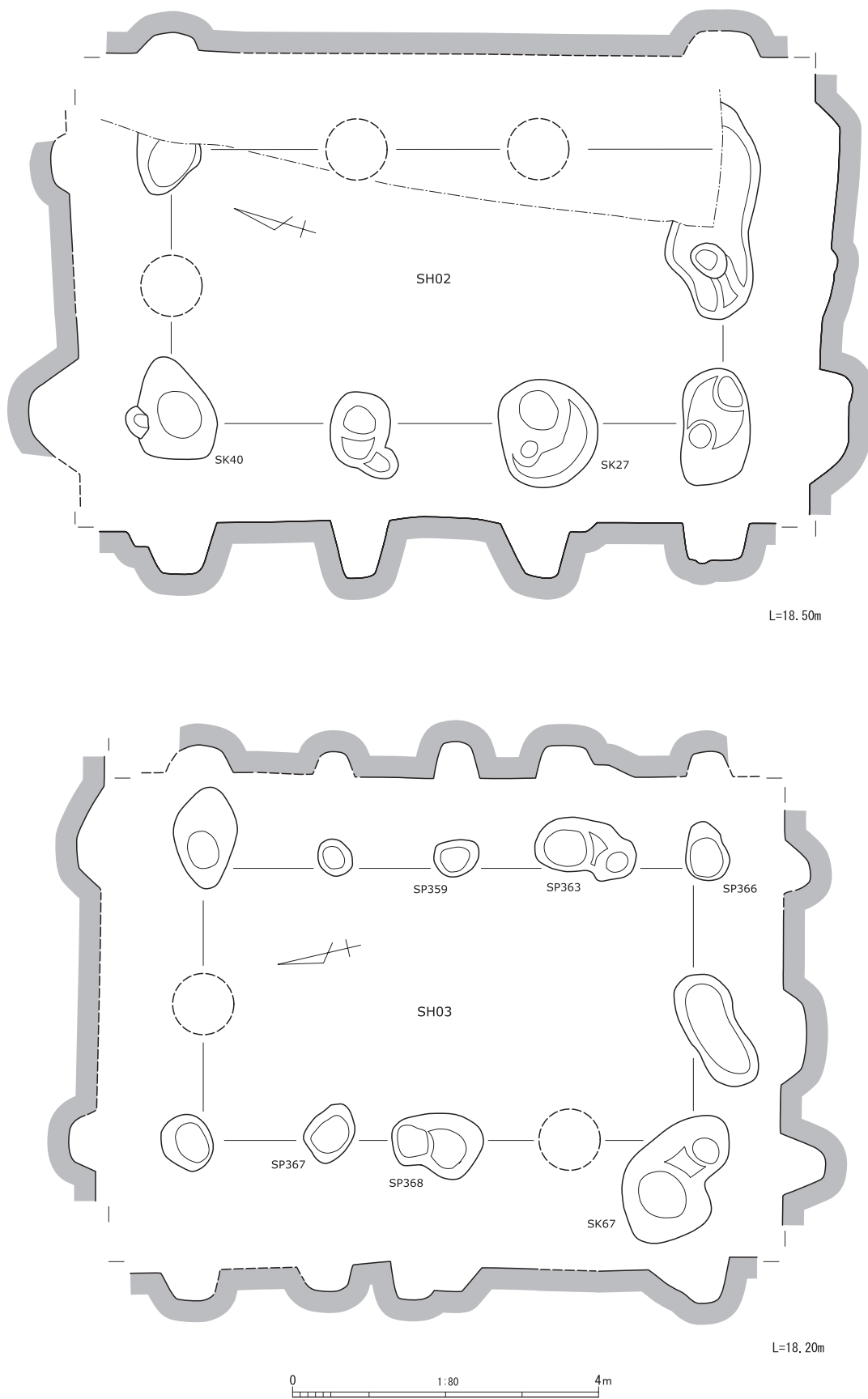


Fig.132 SH02・03 実測図

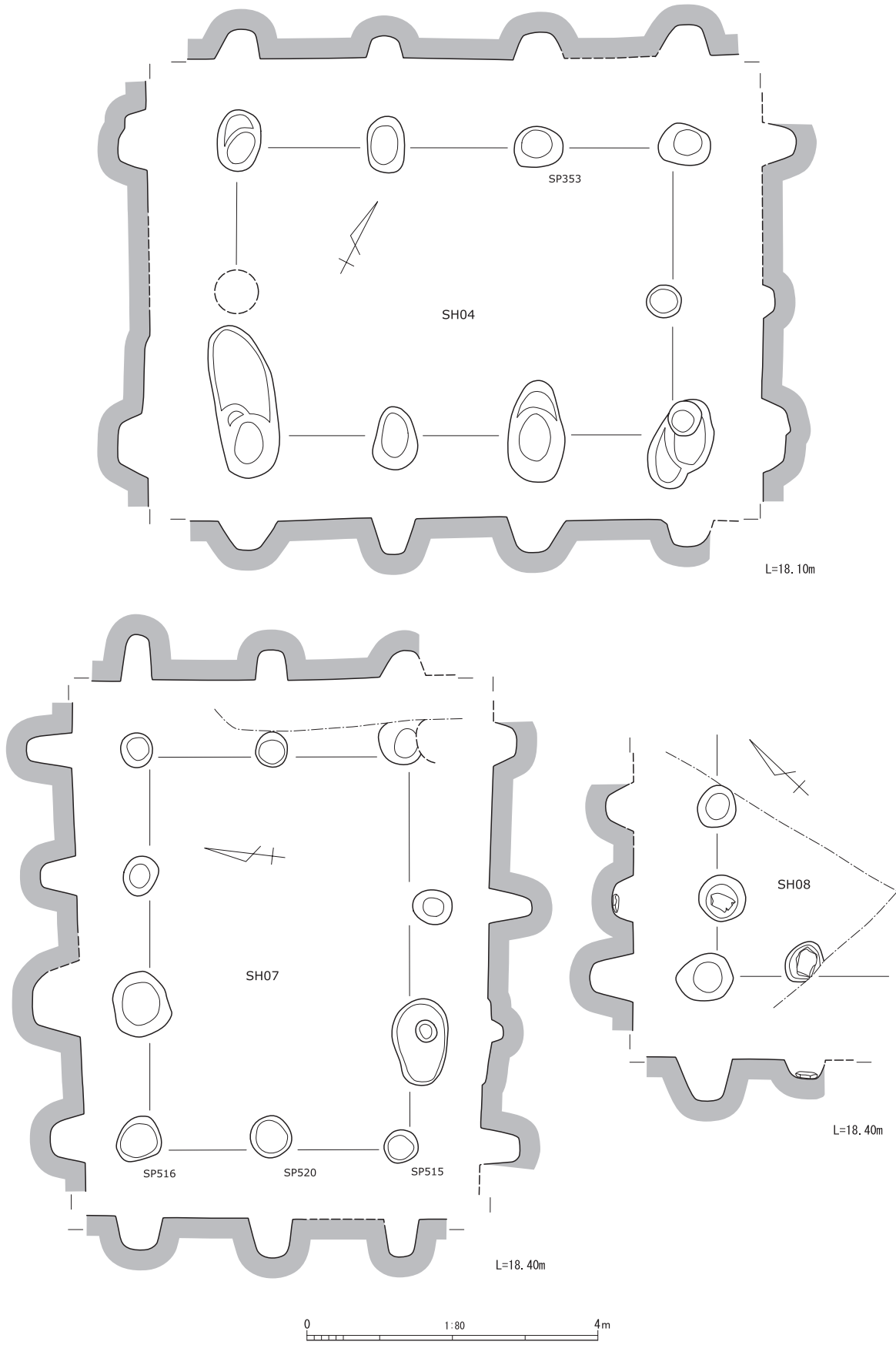


Fig.133 SH04・07・08 実測図

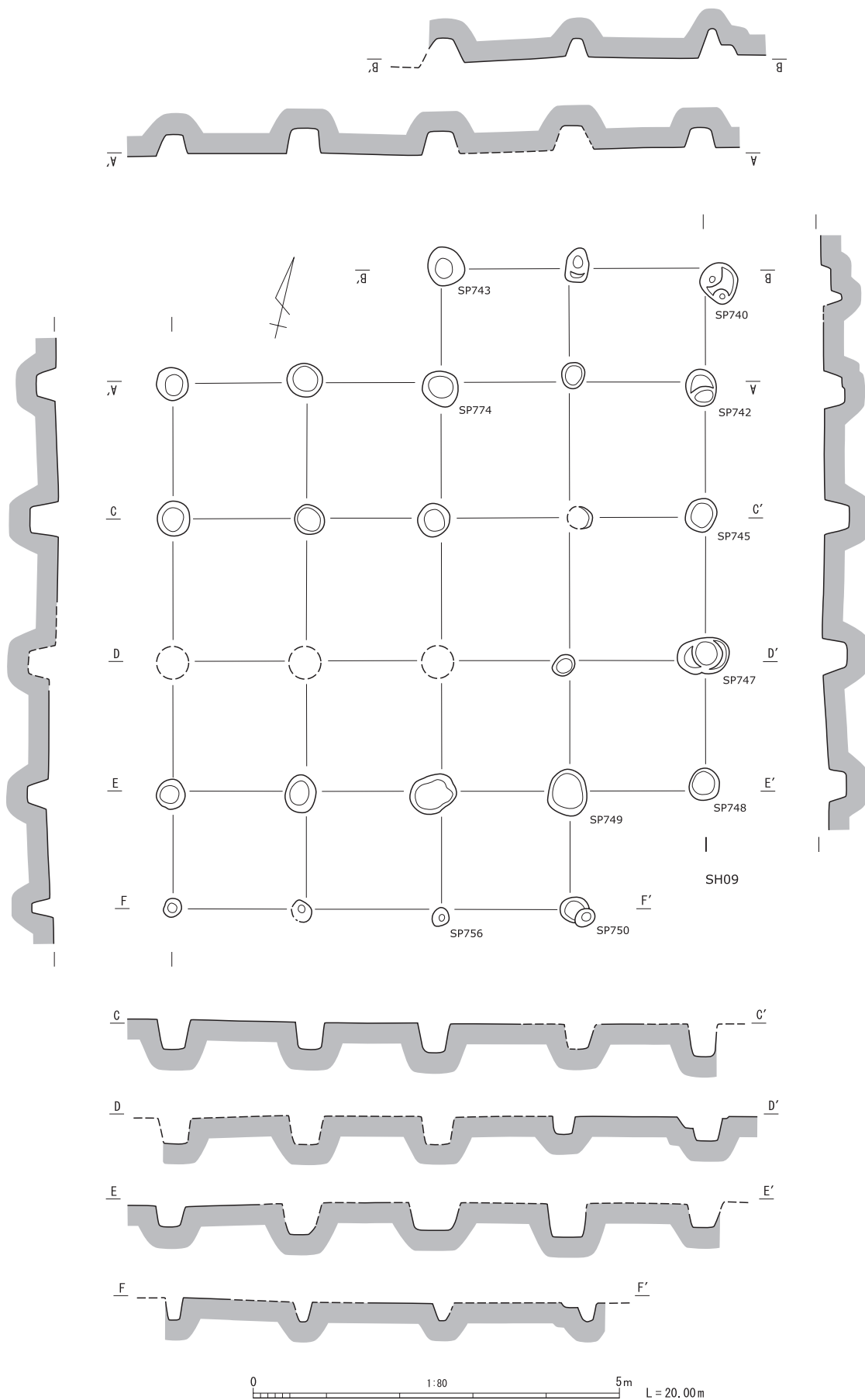


Fig.134 SH09 実測図

(4) 土坑・小穴

分 布 戦国時代の土坑・小穴は古墳時代について多い。土器の小破片が僅かに出土するものがほとんどであるが、常滑の甕が出土する土坑や、かわらけ、土錘が集中的に出土するものが知られる。戦国時代の土坑・小穴は掘立柱建物が構築される範囲に広く分布する。個別の性格は不明であるが、集落に伴う遺構とみてよいだろう。

SK48 (Fig.135) SK48は、K-4区の柵列SA02に接して検出した土坑である。土坑内から常滑産の甕(42)が出土した。甕は遺存部分が多く、完形に復元できた。口縁を下に向けて出土しており、本来は甕を伏せて埋納していた可能性がある。42は13世紀後半から14世紀頃のものともみられるが、戦国時代の遺構が濃密に分布する区域から出土しているため、遺構の形成時期は15世紀以降に降るものとみられる。

SK73 (Fig.135) SK73はK-2区で検出した不正円形の土坑である。土坑の規模は長軸80cm、短軸65cm、検出面からの深さ20cmほどである。土坑からは完形のかわらけ2点(67・68)が出土した。かわらけは、土坑墓に伴う副葬品とみられる。かわらけの時期的な位置づけが難しいが、近世に降る可能性もある。

かわらけ埋納遺構 (Fig.135) 戦国時代の小穴からは、かわらけが出土することが多い。なかでも複数個体の完形のかわらけが出土する遺構を、かわらけ埋納遺構とする。この条件を満たす遺構として、SP533・536・537、がある。いずれも直径50cmほどの円形を呈しており、SP533からは3点(184~186)、SP536からは8点(71~78)、SP537からは11点(79~89)のかわらけが出土した。いずれも口径が15cmをこえる大型品を含み、区画溝SD141から出土したかわらけの様相に近い。これらの遺構は、15世紀後葉から16世紀前葉の遺構と捉えられよう。

かわらけ埋納遺構は、神宮寺川を眼下に望むH-7区に集中する。遺構の大きさから、土坑墓とは捉えられず、祭祀儀礼等に伴い、かわらけを複数埋納したものと捉えられる。なお、1点のかわらけしか出土しなかったが、SP519も同類の遺構とみられる。

土錘埋納遺構 (Fig.135) SP539・827といった、土錘がまとまって出土する遺構が確認できる。SP539はH-7区で検出した。直径50cmほどの規模で、かわらけ(90)とともに土錘27点(92~118)が出土した。SP827はD-4区において確認した。直径40cmほどの規模で、土錘6点(137~142)が出土した。SP539は、共伴するかわらけから、15世紀後葉から16世紀前葉の遺構とみられる。SP827も同時期と捉えてよいだろう。上述のかわらけ埋納遺構と同様、土錘埋納遺構も神宮寺川に程近い段丘の縁辺部に位置する。川辺の祭祀という点から、これらの遺構は、盂蘭盆会もしくは施餓鬼にかかわる可能性がある。

羽付釜埋納遺構 (Fig.135) SP541はG-7区で検出した遺構であり、直径50cmほどの規模をもつ。遺構中から、羽付釜(187)が出土した。羽付釜は破片の状態であったが、同一個体とみられる底部と口縁部がみられる。羽付釜を埋納した遺構と考えられよう。SP541は構築位置や遺構の形状が上述の埋納遺構と共通しており、相互に関連が高い遺構群とみられる。出土遺物から、SP541も15世紀後葉から16世紀前葉の遺構と捉えられる。

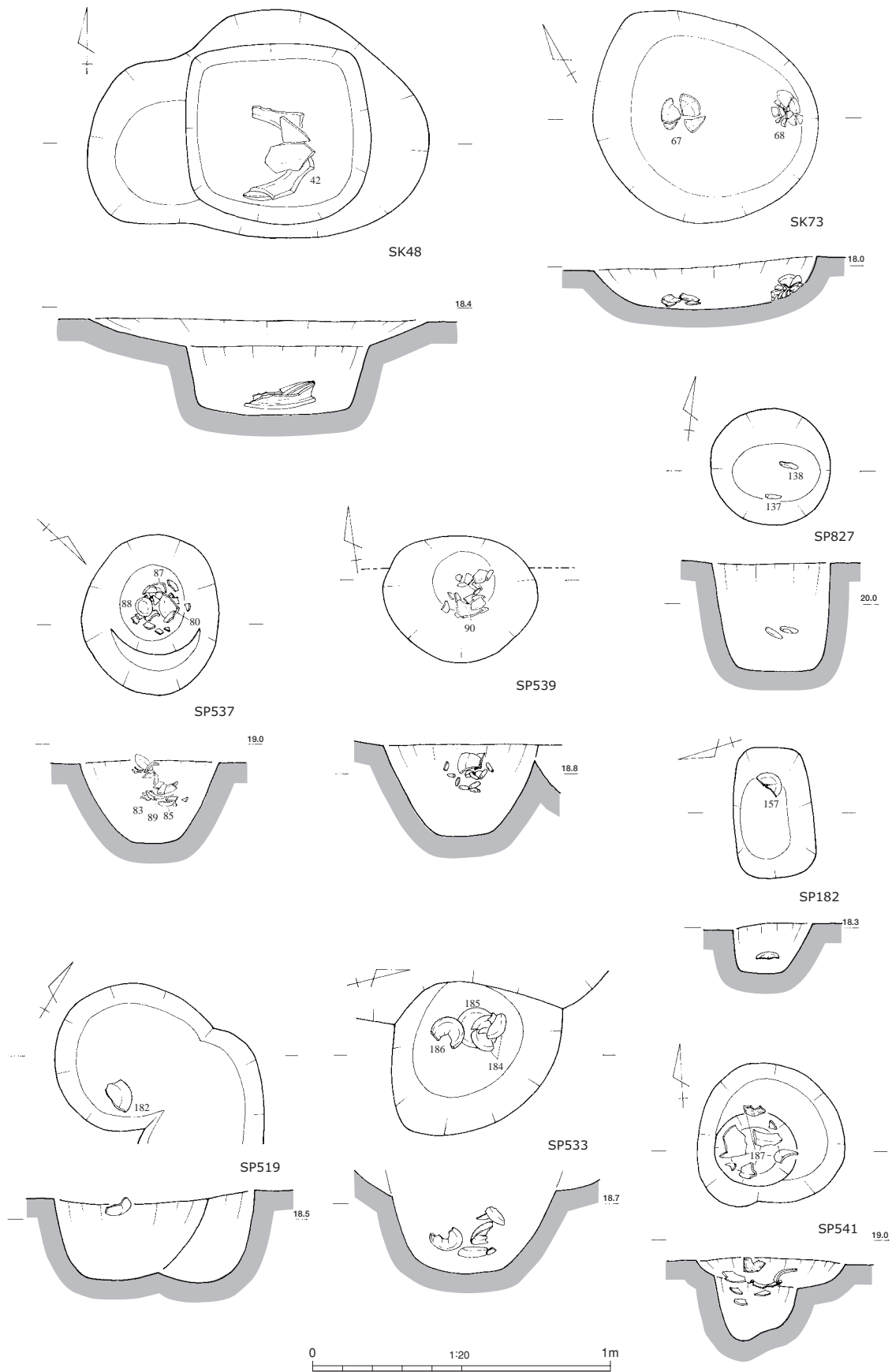


Fig.135 戦国時代土坑・小穴実測図

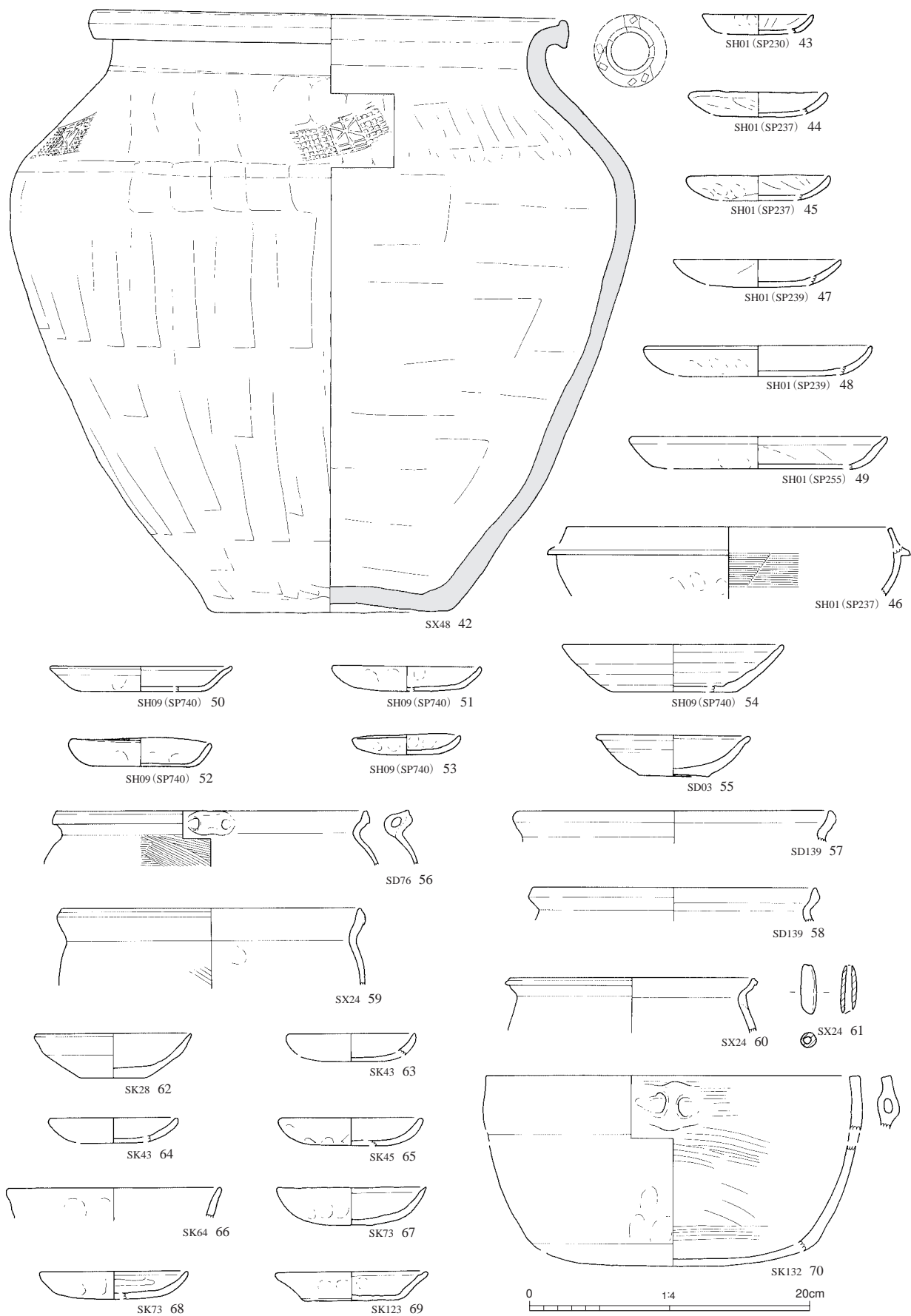


Fig.136 戦国時代 土坑・掘立柱建物等 出土遺物

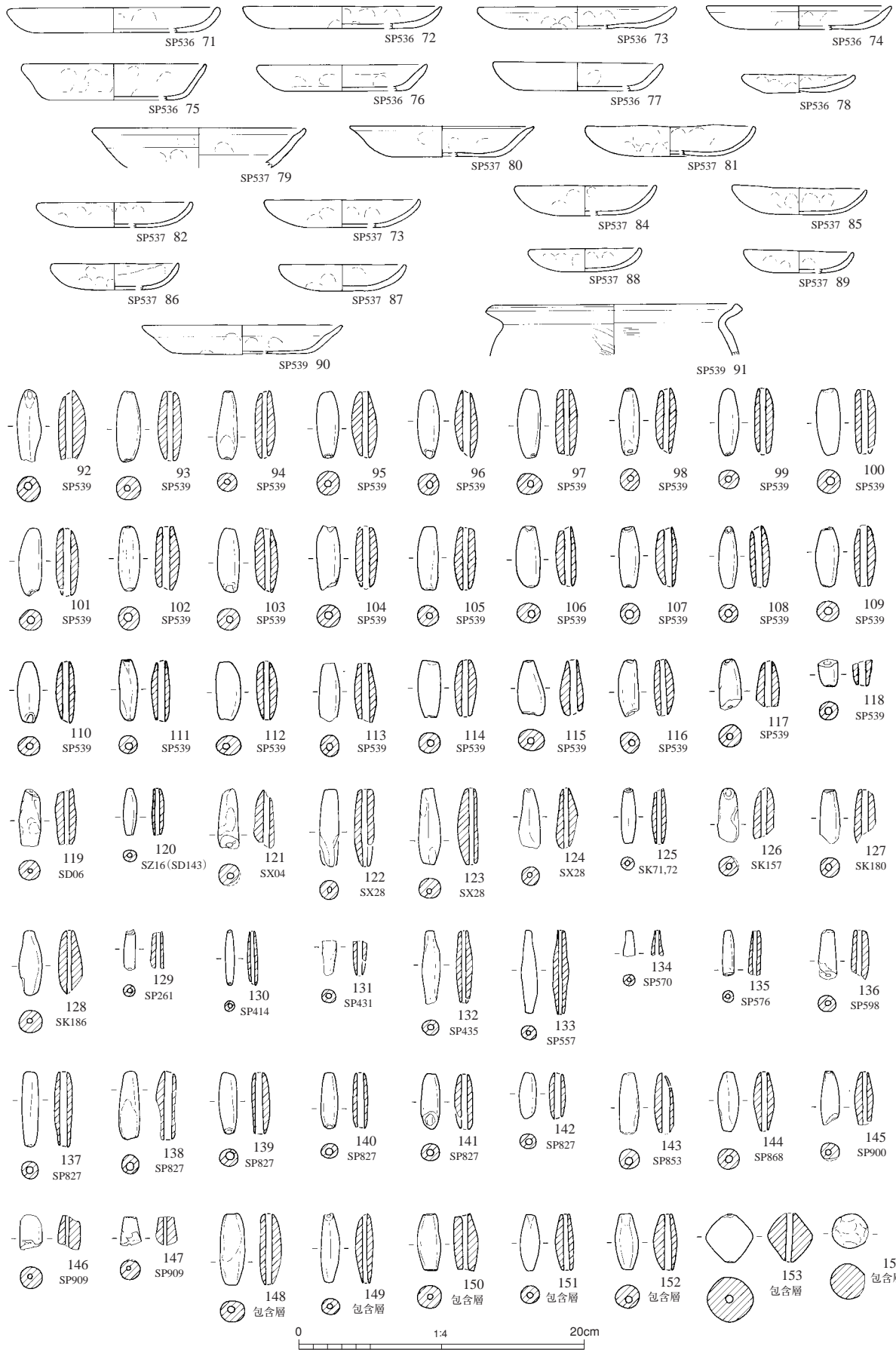


Fig.137 戦国時代埋納遺構等出土遺物

6 戦国時代

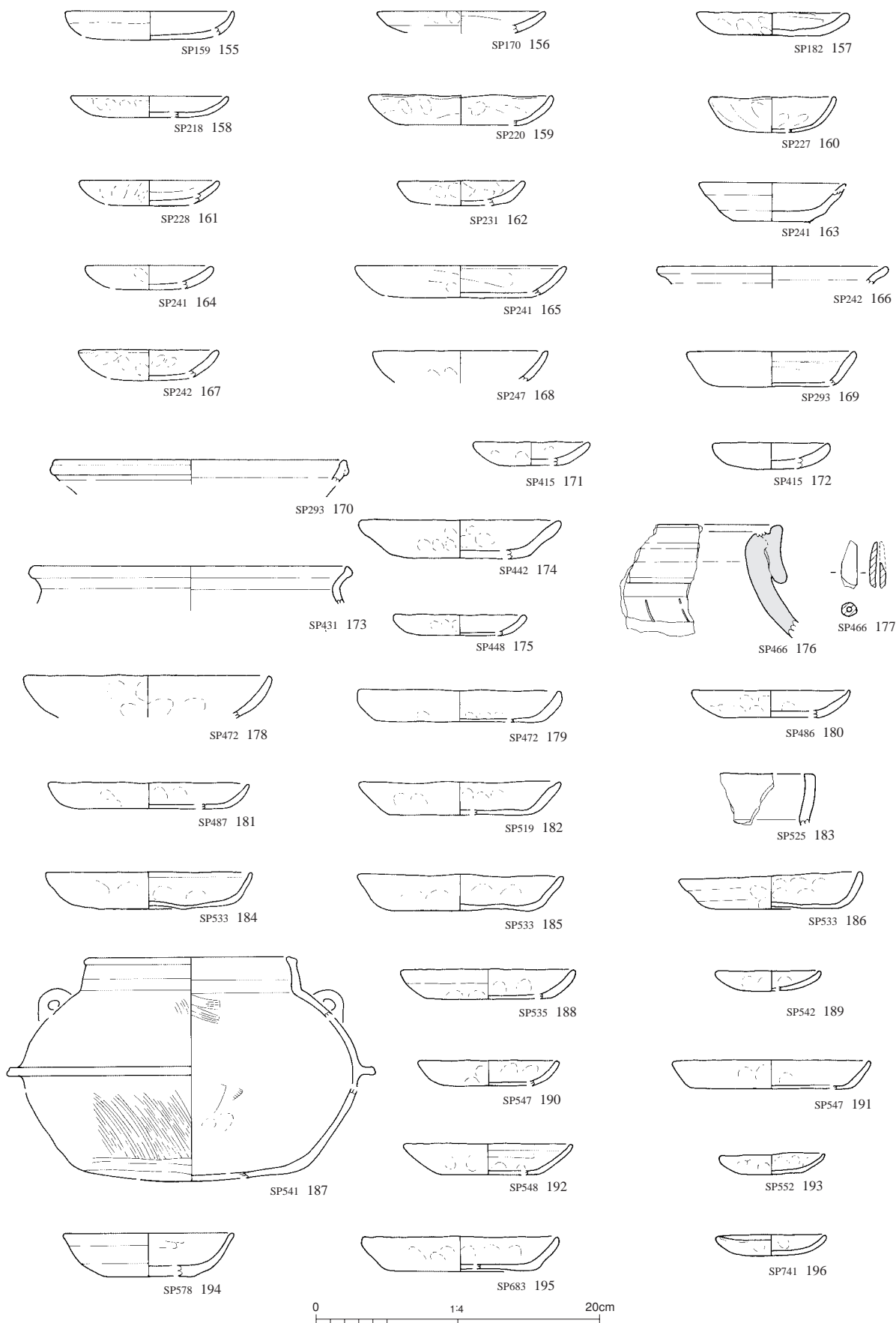


Fig.138 戦国時代 小穴 出土遺物

土坑・小穴出土遺物 (Fig.136~138) 42~196は土坑・小穴から出土した遺物である。かわらけにかんしては、一部、近世に降るものを含むとみられるが、直径12cmをこえる大きさの個体は戦国時代のものとみてよいだろう。

42は常滑産の甕である。口縁には肩部には押印文がめぐる。口縁縁帯の拡張が顕著でないことから、13世紀後半から14世紀頃のものともみられる。176も常滑産の甕の口縁である。口縁縁帯の拡張が顕著で、その幅は4cmをこえる。15世紀前半頃のものともみられる。これら常滑産の甕は、15世紀後葉から16世紀前葉の集落内で使用されたものとみられる。

かわらけ埋納遺構から出土した71~89、184~186は、15世紀後葉から16世紀前葉の資料として貴重である。Fig.136~138に示した資料における、かわらけの非ロクロ成形品とロクロ成形品の割合は、70:5であり、ロクロ成形品が少数派であることが分かる。この傾向は、近世においても変わらない。非ロクロ成形のかわらけには、口縁端部にヨコナデを施して端部形状が整えられるもの(71~77、79・80・90)と、断面が碗形を呈し、口縁端部形状が整わないもの(78、81~89)の二者が認められる。前者は大型、後者は小型の傾向がある。

内耳鍋には、く字口縁のもの(56~59、60・91・170・173)に加え、70や183のような内彎口縁のものがみられる。同じく、内彎口縁の内耳鍋は、包含層から出土したFig.148-202~204も知られ、戦国時代の集落が16世紀後半から17世紀初頭に継続していることがうかがえる。このほか、土鍋としては、羽釜(46)、外耳付の羽付釜(187)が認められる。

92~154は、遺構等から出土した土錘である。近世の遺物を含んでいる可能性があるが、SP539から出土した92~118、SP827から出土した137~142などは15世紀後葉から16世紀前葉の資料とみてよいだろう。いずれも紡錘形を呈し、両端には擦れた痕跡が認められる。132や133のような細身の土錘は近世に降る可能性がある。154は算盤玉形をした土錘である。153は孔がみられない土玉であり、錘以外の用途も検討すべきである。

(5) 小 結

戦国時代の集落は、掘立柱建物を住居にしていたとみられる。この時代の掘立柱建物には、SH09といった総柱の建物が構築され、この建物が築かれる一角には、竪穴状遺構(SX24、SX26)や区画溝(SD141)がみられる。SH09のような庇や張り出し部をもつ総柱の建物、豊富な出土遺物の存在から、この集落にはある程度の有力者が居住していたと想定できる。

戦国時代の集落は15世紀後葉に造営が開始される。遺構の時期を明確にしうる施釉陶器に恵まれず、明確な存続時期がうかがえないが、16世紀前葉にかけて最も栄えていたとみられよう。

北神宮寺遺跡では、16世紀後半や17世紀の遺物も一定量みられることから、15世紀後葉に始まる集落はその後の近世集落へと引き継がれていくことが確実である。

また、15世紀後葉から16世紀前葉にかけて、神宮寺川の川辺で、かわらけや土錘(網)を埋納する祭祀が執り行われていた。盂蘭盆会や施餓鬼にかかわり、供物を川辺に供えていた可能性がある。祭祀空間としての川辺は、後述するように、江戸時代には土坑墓が築かれる地としても活用されている。

7 江戸時代

(1) 検出遺構の概観

江戸時代の遺構は、調査区全域で確認した区画溝と、それに伴う井戸や土坑などがあげられる。区画溝の形成時期は明確にしにくいですが、一部は戦国時代に遡る可能性があるものもみられる。調査対象地の中央を東西方向に区画するSD14・15は、17世紀頃には確実に存在し、19世紀前半頃まで機能していたとみられる。その前身となる遺構は戦国時代に掘削されていた可能性もある。これらの区画溝は屋敷地を区画し、道路の側溝を兼ねていたとみられる。江戸時代以降の区画溝は石垣で護岸されることが多く、区画の一部や石垣は現代まで引き継がれている。

江戸時代になると掘立柱建物から礎石建物へと変化する。礎石は後世の耕作などで移動されることが多いため、発掘調査で一般集落の礎石を確認することは難しい。今回の調査においても、明確な近世の建物跡は確認できなかった。

調査地区の広範囲にわたり土坑墓を16基確認した。土坑墓にはかわらけや銭貨を副葬している。土坑墓の分布は分散傾向があるが、C-3区とその周辺では神宮寺川を望む川辺に6基の土坑墓が集中しており、埋葬墓地を形成している。土坑墓の造営時期は、共伴する銭貨から、17世紀前半から18世紀後半におよぶとみられる。

出土遺物は、時期による多少の量の差があるが、17世紀から19世紀にわたっている。また、近代以降の遺物も表土層を中心に広域に分布していたが、回収はしていない。近世の遺物も、すべて回収していないため、定量的な分析はできないが、江戸時代を通じて集落が維持され続け、現代に至るものと考えられる。

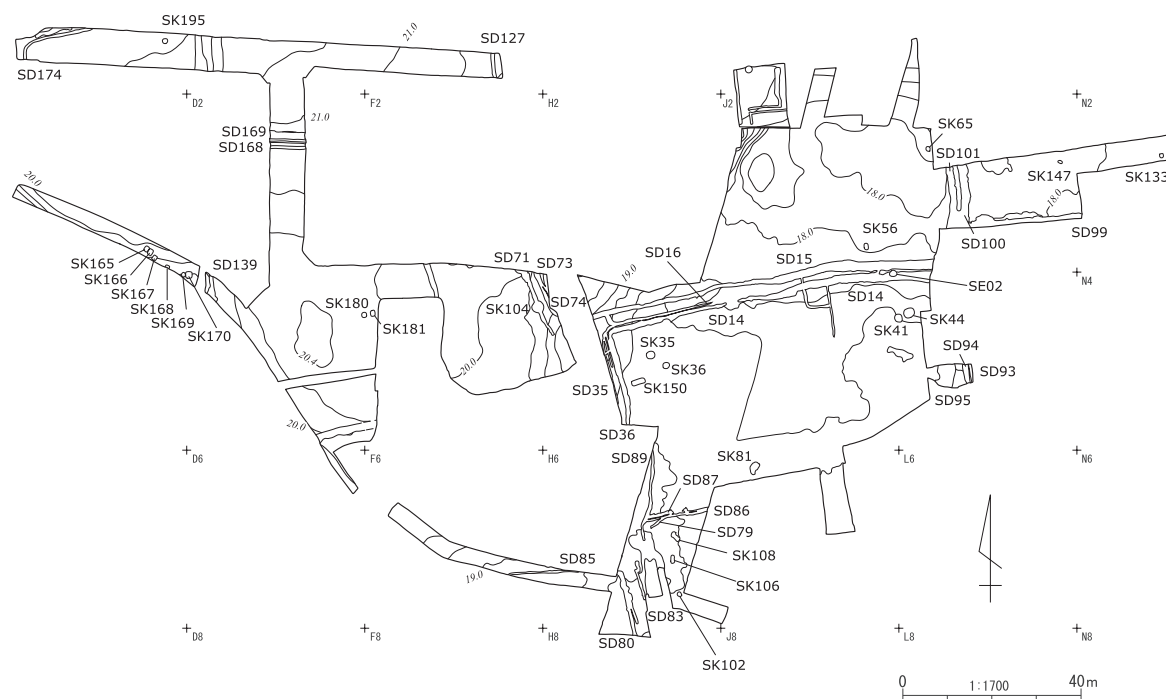


Fig.139 江戸時代 遺構分布図

(2) 区画溝

分 布 調査地区の全域にわたり、土地を区画する溝（区画溝）が検出できた。区画溝の掘削方向は、現在の土地区画とほぼ一致し、区画の一部は現在も屋敷地の境界として踏襲されているものがある。東西、南北方向を区画する主要な遺構について紹介する。

SD14・15 (Fig.177・178) SD14・15は低位面の中央を東西方向に区画する溝である。また、SD16も一連の遺構と捉えられる。東側が最も規模が大きく、幅2m、深さ80cmをこえる。西側では規模が縮小し、底面が消失している部分もみられる。西側から東側に向かって排水する機能を有しているとみられよう。SD14・15は同時期に存在していたと考えられ、その間に道路があったとみられる。両溝の幅は1.5～2.0mである。SD14・15の埋土には石垣に用いた礫が大量に含まれていた。礫に混じって近世以前の遺物がまとまって出土する箇所があり、溝の廃絶に伴って、地上に現れていた土器の破片などを溝内に埋めたものとみられる。

SD14・15が機能していた時期を示す遺物として1～8、およびSD14と重なって検出したSE02出土遺物（67～117）があげられる。67～117は19世紀前半の資料であり、溝の廃絶年代を示しているといえよう。掘削時期は判断材料に乏しいが、2～4などの資料から17世紀頃であったと捉えられる。また、戦国時代の掘立柱建物SH01と方向一致することから、区画そのものは戦国時代に遡る可能性がある。

SD93・95・100・101 (Fig.179・183) SD93・95・100・101は、L-2区からL-5区にかけて、南北方向に区画する溝である。SD93とSD100、SD95とSD101は同一の遺構とみられる。溝の幅は1.5m、深さは60cmである。SD93からは47～52が、SD100からは64の遺物が出土した。溝の調査部分が少なく、少量の出土遺物をもって遺構の時期を決めることには注意が必要である。埋土の状況、遺構の形状はSD14・15と共通しており、江戸時代の遺構と捉えたい。戦国時代に掘削され、江戸時代にも機能していた遺構とみられる。

SD71・74 (Fig.176・181) SD71・74は、G-4区において検出した南北方向に区画する溝である。幅1.0m、深さ30cmである。溝の方向は現在の道路と並行し、屋敷地の区画と道路の側溝を兼ねていたものとみられる。SD73からは15～21が、SD74からは22～33の遺物が出土した。出土遺物から、SD71・74は18世紀前半頃には機能していたとみられる。

SE02 (Fig.178) SE02は、K-4区で確認した井戸である。区画溝SD14と一連の遺構とみられる。遺構は直径1.5mほどの円形をしている。検出面からの深さ1.5m分を精査したが、安全上の理由から、底面は確認していない。遺構の埋土からは、67～117の遺物が出土した。出土遺物からSE02は19世紀前半頃に廃棄されたものとみられる。区画溝の埋没時期も同じ頃と捉えてよいだろう。

区画溝出土遺物 (Fig.140・141) 1～66は区画溝から出土した遺物である。区画溝からの出土遺物には、鎌倉時代の山茶碗や戦国時代の鍋などを含むが、多くは近世の陶器が共存する。22～33は瀬戸窯第5小期に中心があり、17世紀末葉から18世紀前半の遺物群とみられる。

SE02出土遺物 (Fig.142・143) 67～117はSE02から出土した遺物である。瀬戸窯第8～9小期を中心としており、18世紀後葉から19世紀前葉の遺物群とみられる。

7 江戸時代

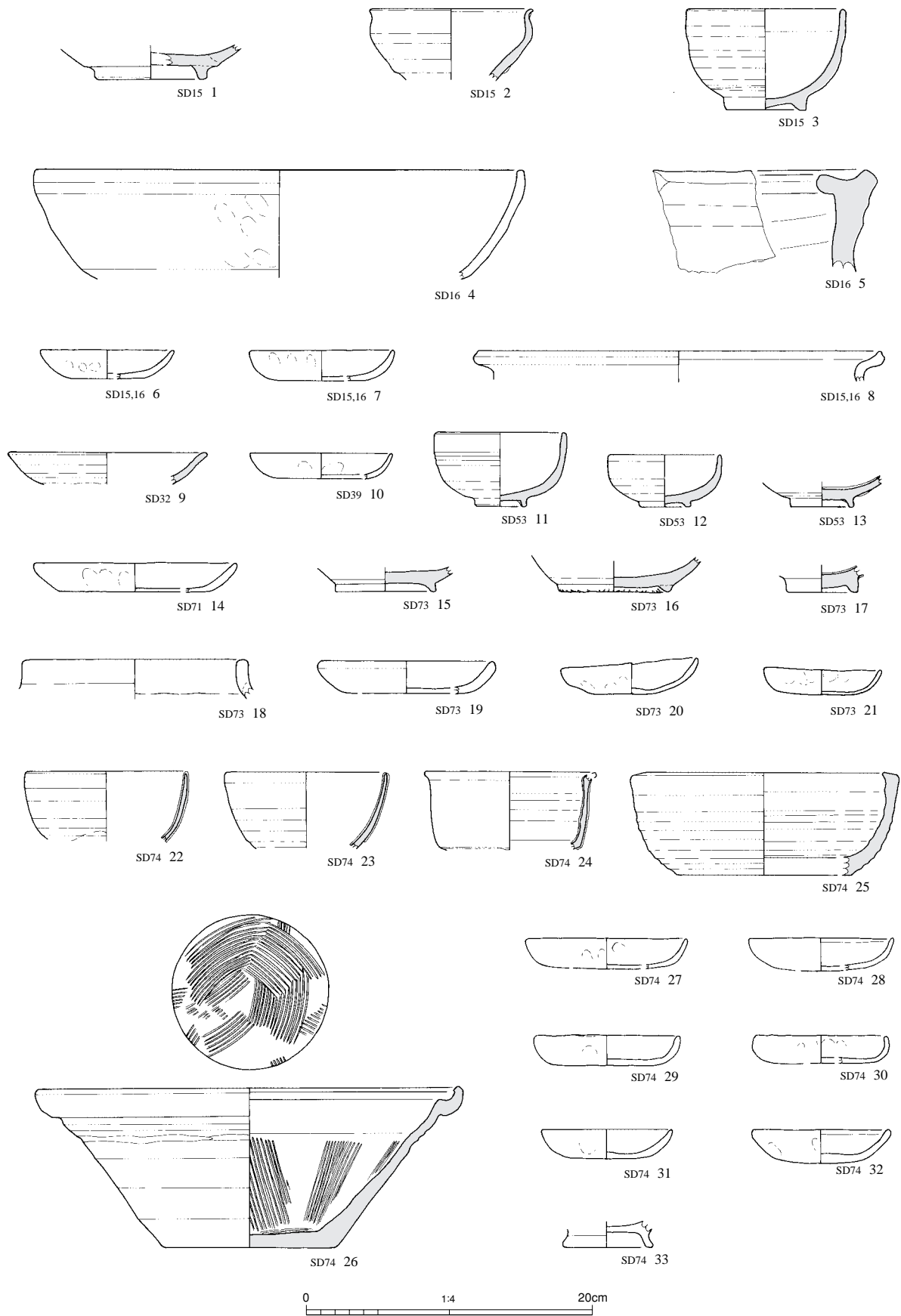


Fig.140 区画溝 出土遺物 (1)

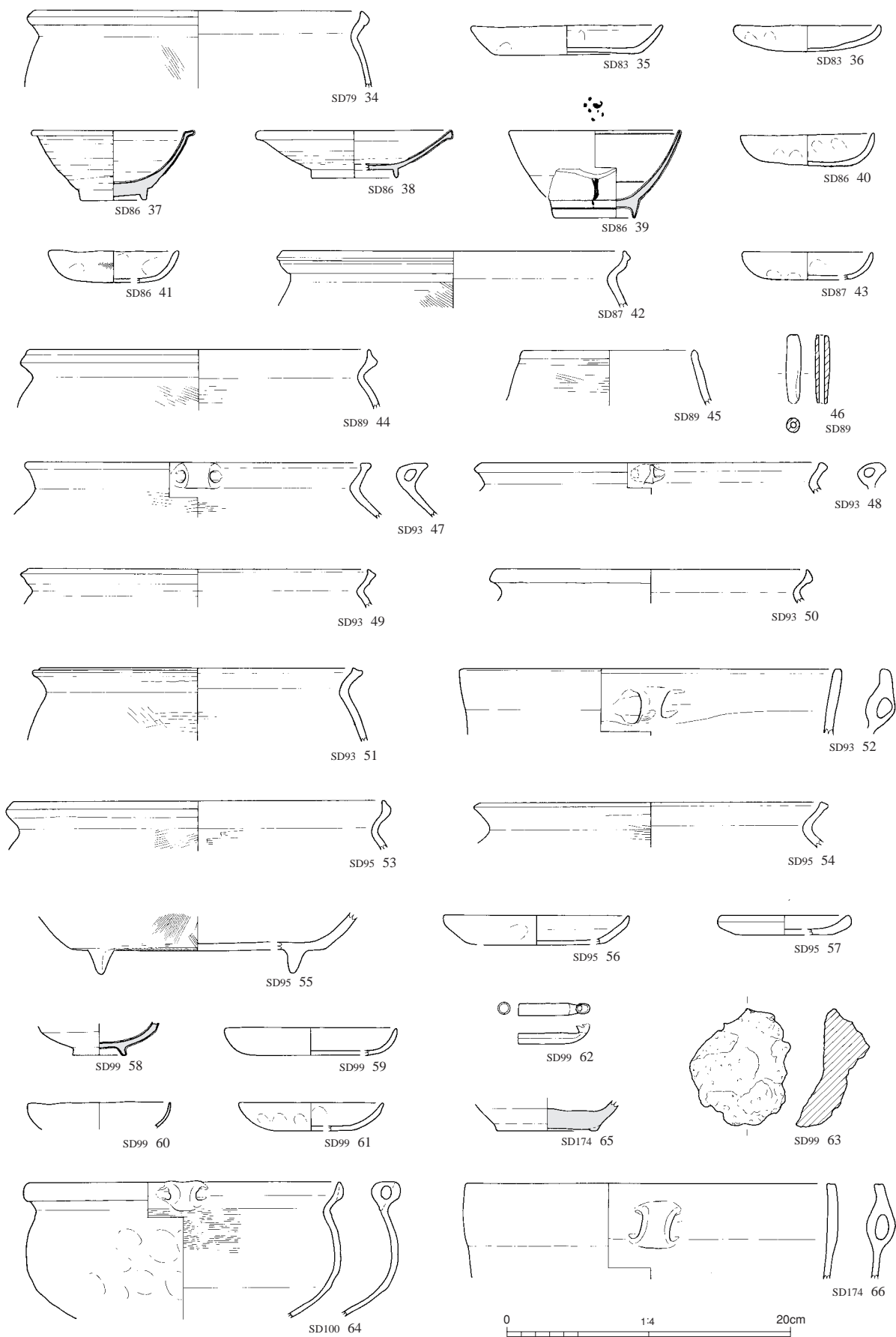


Fig.141 区画溝 出土遺物 (2)

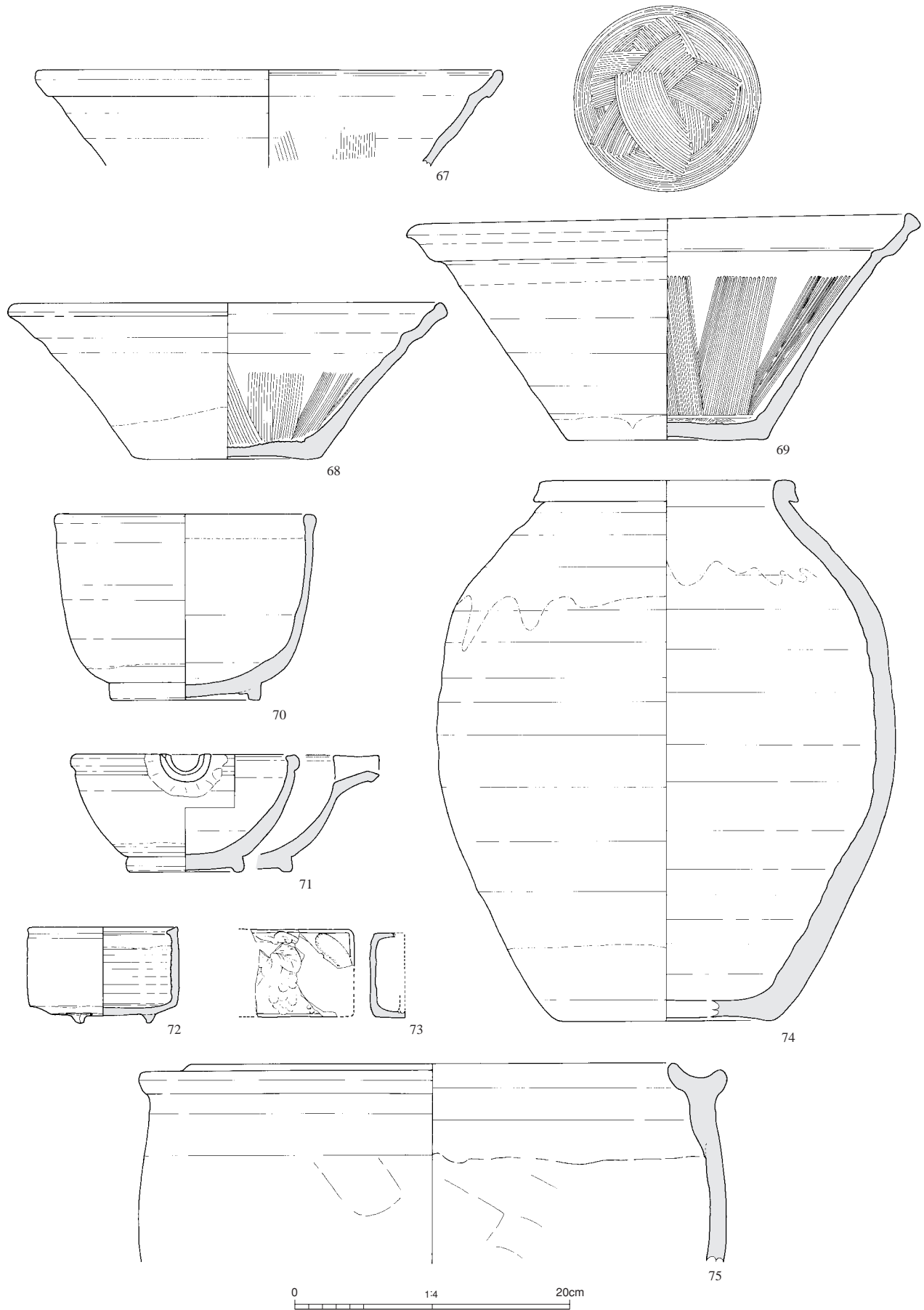


Fig.142 SE02 出土遺物 (1)

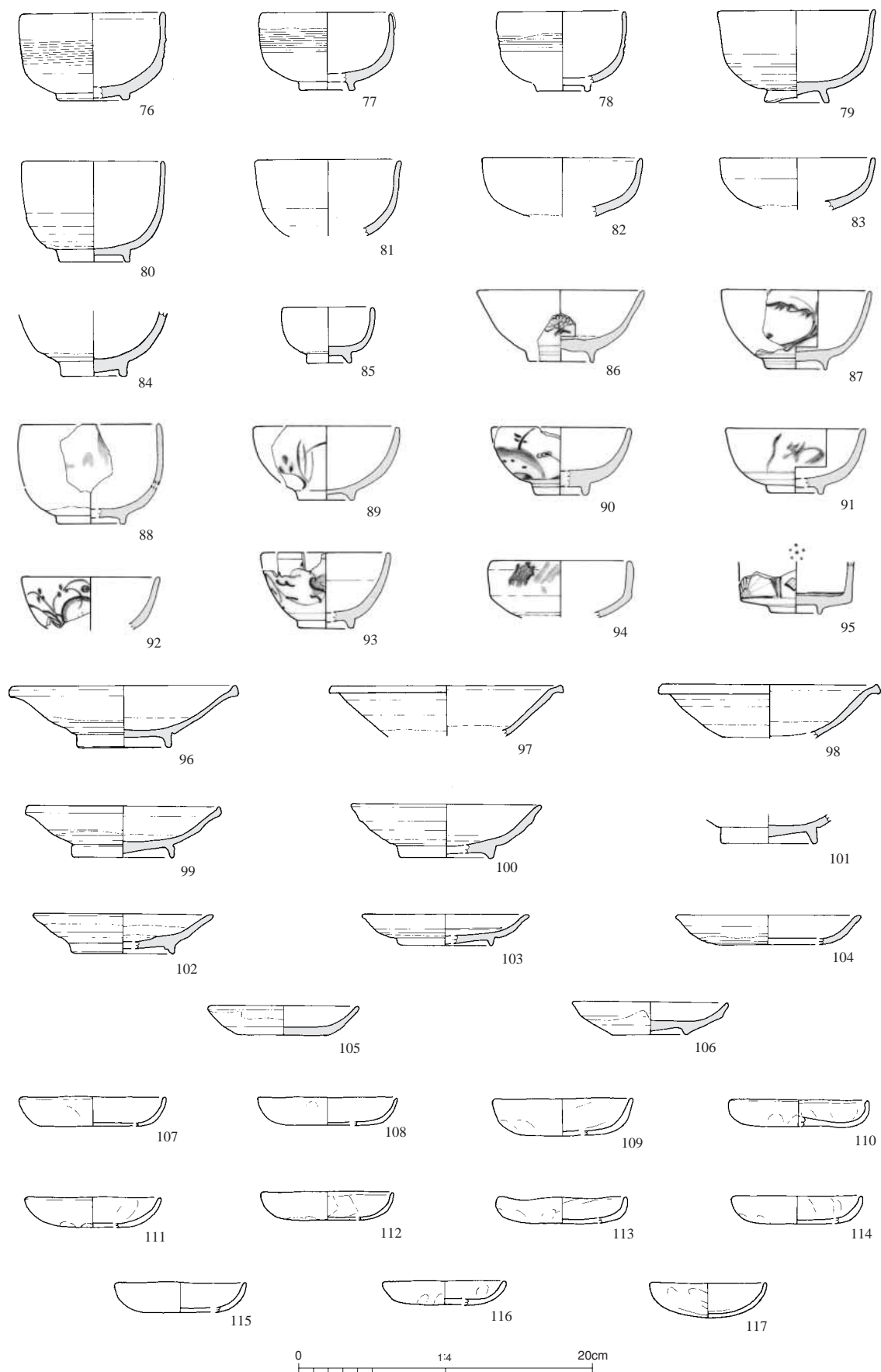


Fig.143 SE02 出土遺物 (2)

(3) 土坑墓

分布 (Fig.144) 調査区の広域で江戸時代の土坑墓を確認した。検出した土坑墓の総数は16基である。土坑墓は、調査区全域におよぶが、特定の墓域を形成するものではない。屋敷地の中もしくは近辺に埋葬したものとみられよう。いっぽう、C-3区とその周辺の段丘端部においては6基の土坑墓(SK165~170)が集中していた。神宮寺川を眼下に望む立地環境にあり、川辺を墓域とみられていたと捉えられよう。築造時期は17世紀中葉から18世紀後葉とみられる

形状と構造 (Fig.145) 形態が判明する14基中12基が長方形を呈している。長方形の土坑は、長軸1.0~1.5m、短軸0.7~1.0m程度のもが多い。中にはSK165のように、検出面から1.0m以上掘削されているものもみられる。円形を呈する土坑は2基(SK180、SK195)ある。いずれも正円形を呈さず、方形が崩れたものと解釈してもよい。

土坑墓には、棺桶の痕跡はみられなかった。ただし、SK180からは釘の可能性のある小鉄片が出土しており、木棺が用いられていた可能性がある。人骨はほとんどの土坑で確認できなかった。唯一、SK180において、下顎骨と歯の痕跡がみられた程度である。人骨の遺存状態から判断すると、棺桶を使用していたにしても、腐食して痕跡をとどめていない可能性が高い。土坑には焼土も形成されておらず、一般的な土葬であったとみられる。

副葬品 (Fig.146) 土坑墓にはかわらけと銭貨が出土するものがある。かわらけを副葬する土坑墓は16基中14基である。かわらけが出土しなかった2例は、攪乱が顕著であったり(SK147)、未調査部分があったりする(SK168)ので、北神宮寺遺跡における近世墓は、ほぼ普遍的にかわらけを副葬するとみてよいだろう。副葬されるかわらけの枚数は、1枚から7枚までみられ、副葬枚数の

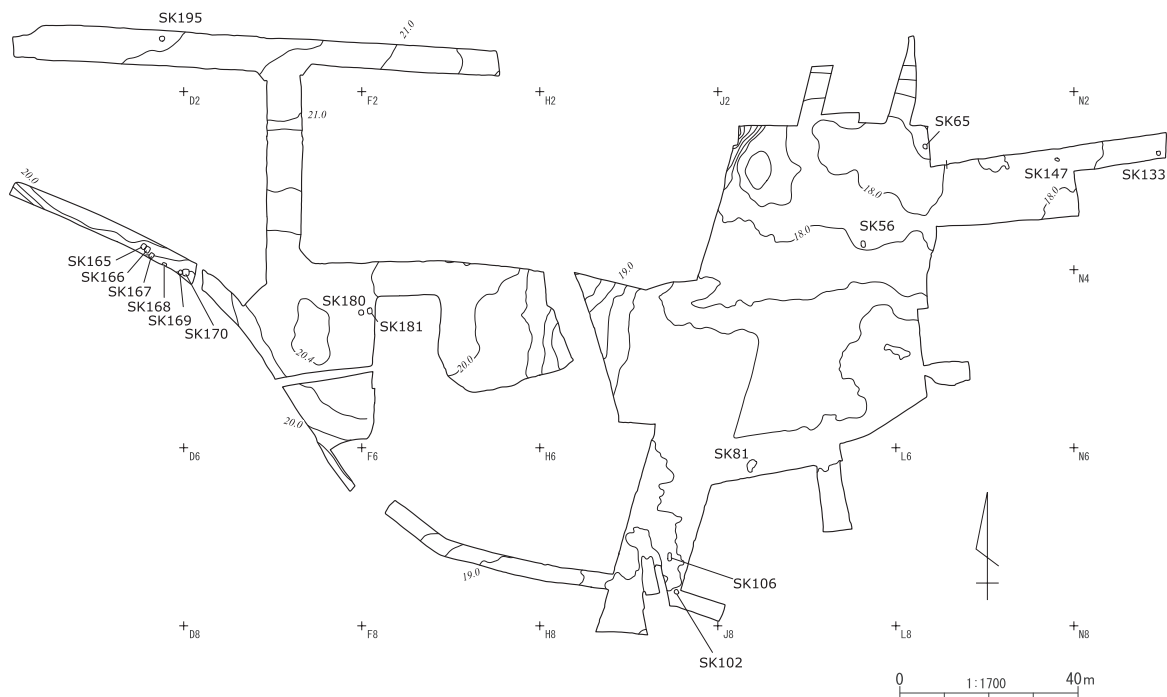


Fig.144 江戸時代 土坑墓分布図

Tab.9 江戸時代 土坑墓

遺構名	グリッド	形態	規模 (m)		かわらけ		銭貨		
			長軸	短軸	非ロクロ	ロクロ	枚数	種別	時期
SK56	K-3	方形	1.4	0.9	5				
SK65	L-2	方形	1.0	1.0	2				
SK81	J-6	不定形	—	—	4			6	不明
SK102	J-7	方形	1.0	0.7	4				
SK106	J-8	方形	1.8	0.8		7		1	新寛永 (四文銭) 18世紀後葉
SK133	J-9	方形	0.9	0.8	3			1	新寛永 (文銭) 17世紀後葉
SK147	J-10	不定形	—	—				6	古寛永 17世紀中葉
SK165	J-11	方形	1.2	1.0	2				
SK166	J-12	方形	1.3	1.1	1				
SK167	J-13	方形	1.1	1.0	1				
SK168	J-14	方形	—	1.0					
SK169	J-15	方形	1.0	0.7	4				
SK170	J-16	方形	1.5	1.4	6				
SK180	J-17	円形	1.2	1.1	3			6	北宋銭+古寛永 17世紀中葉
SK181	J-18	方形	1.3	1.0	2			6	古寛永のみ 17世紀中葉
SK195	J-19	円形	1.2	1.0	1	4		6	北宋銭+不明 17世紀中葉

違いに有意な傾向を見出すことは難しい。かわらけは、完形のものが多いが、破片の状態のものもある。表裏も意識的に分けていないため、無造作に土坑内に入れたものといえる。

副葬されたかわらけは、非ロクロ成形品が主体であるが、ロクロ成形品を用いる土坑が2基 (SK106、SK195) ある。

銭貨を副葬する土坑墓は、16基中7基である。副葬枚数は6枚である場合と1枚である場合がある。出土銭貨は中国銭 (北宋銭) と寛永通宝がある。寛永通宝には铸造時期が違うものが知られ、土坑墓の年代をうかがう材料となっている。銭貨が6枚副葬される場合、ほぼすべて、重なった状態で出土した。錆化によって、分離できず、銭貨の内容がすべて判明できない。

(4) その他の遺構・遺物

土坑 (Fig.147) 江戸時代の土坑や小穴は低位面の南側で多く確認できた。174~199は、江戸時代の遺構から出土した遺物である。177~191はI-5区で検出した土坑SK150から出土した遺物で、19世紀前半頃のものが多い。

包含層出土遺物 (Fig.148・149) 200~253は包含層から出土した戦国・江戸時代以降の遺物である。200~210は土師質の土鍋類である。15世紀後葉から16世紀前半のく字口縁内耳鍋 (200・201)、16世紀後半から17世紀初頭頃の内彎口縁内耳鍋 (202~204)、17世紀から18世紀の焙烙 (205~210) などがみられる。

211~230はかわらけである。江戸時代のかわらけは直径10cm程度の大きさのものが多い。229・230など口縁が大きく波打つ形態のものがある。

231~243は施釉陶器である。17世紀から19世紀までの時期幅がみられる。北神宮寺遺跡から出土する施釉陶器は瀬戸窯のものが主体であるが、232や234といった初山窯のものも若干みられる。

248~253は鉄滓である。鉄滓は、出土位置、共伴遺物などから、すべて江戸時代もしくはそれ以降のものと思われる。

7 江戸時代

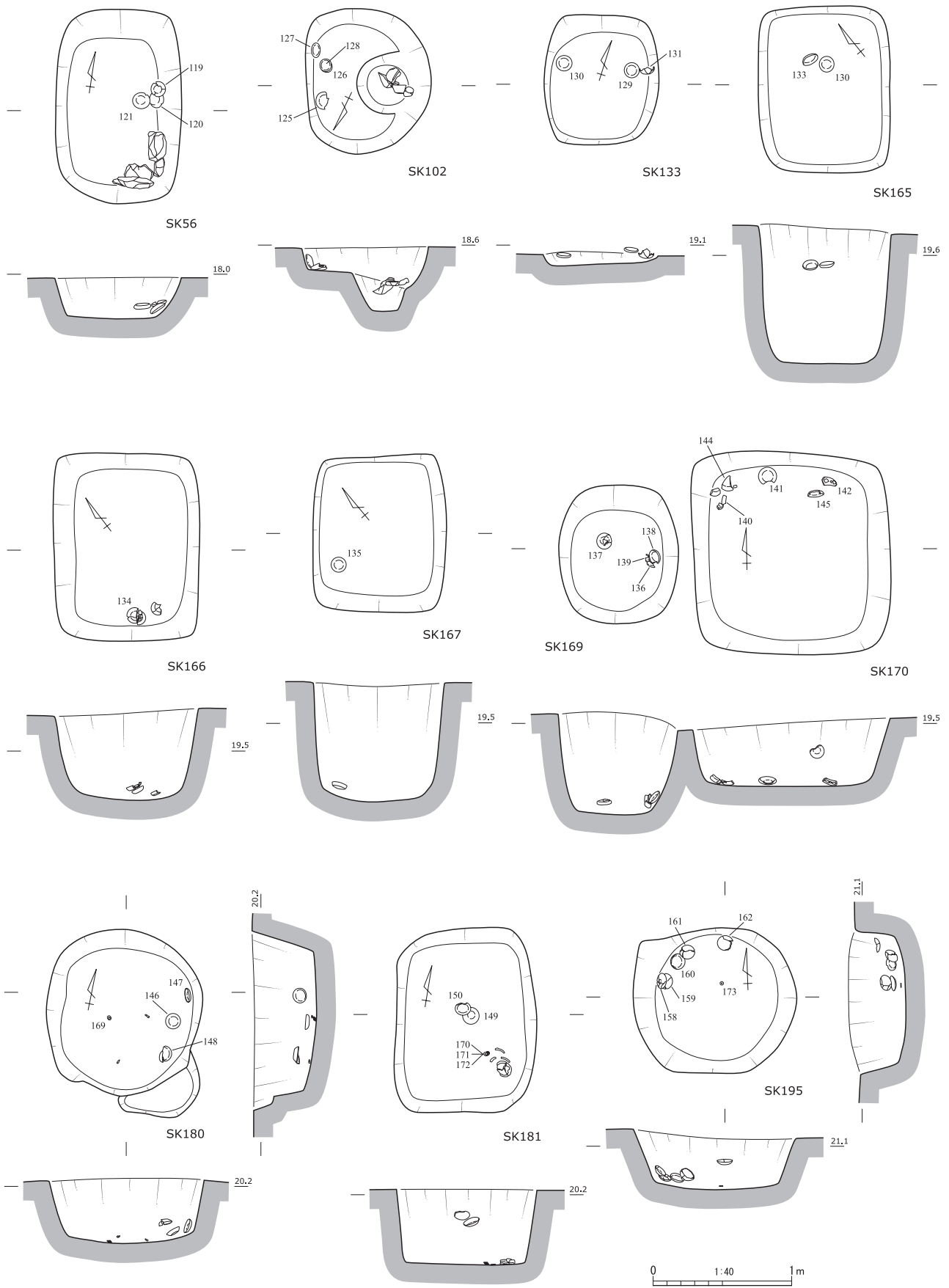


Fig.145 江戸時代土坑墓実測図

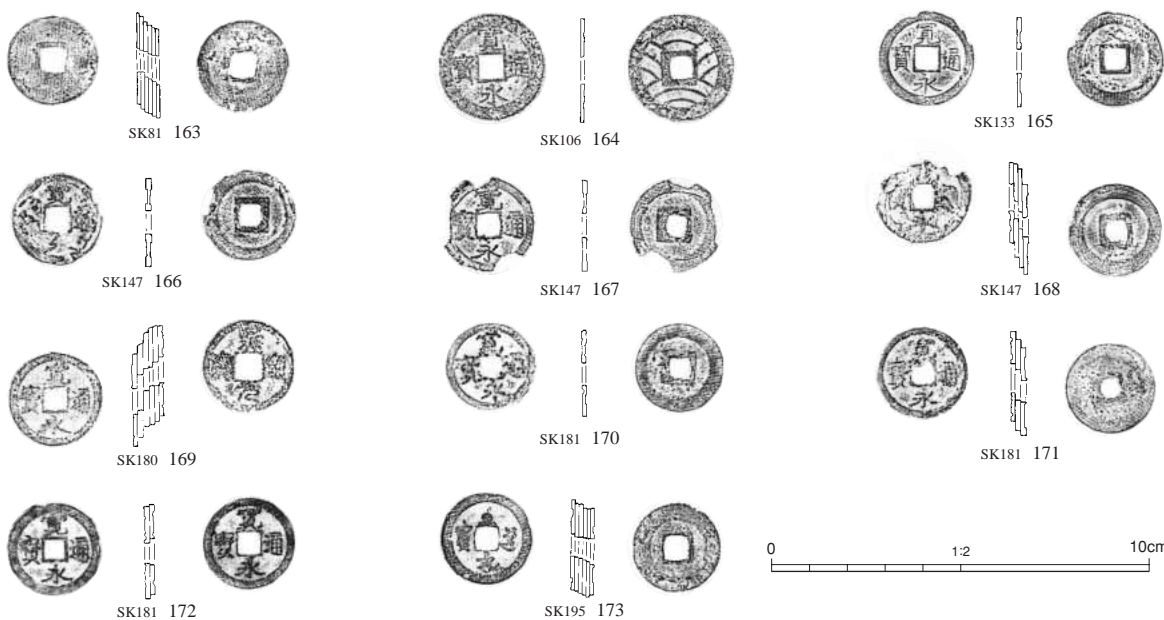
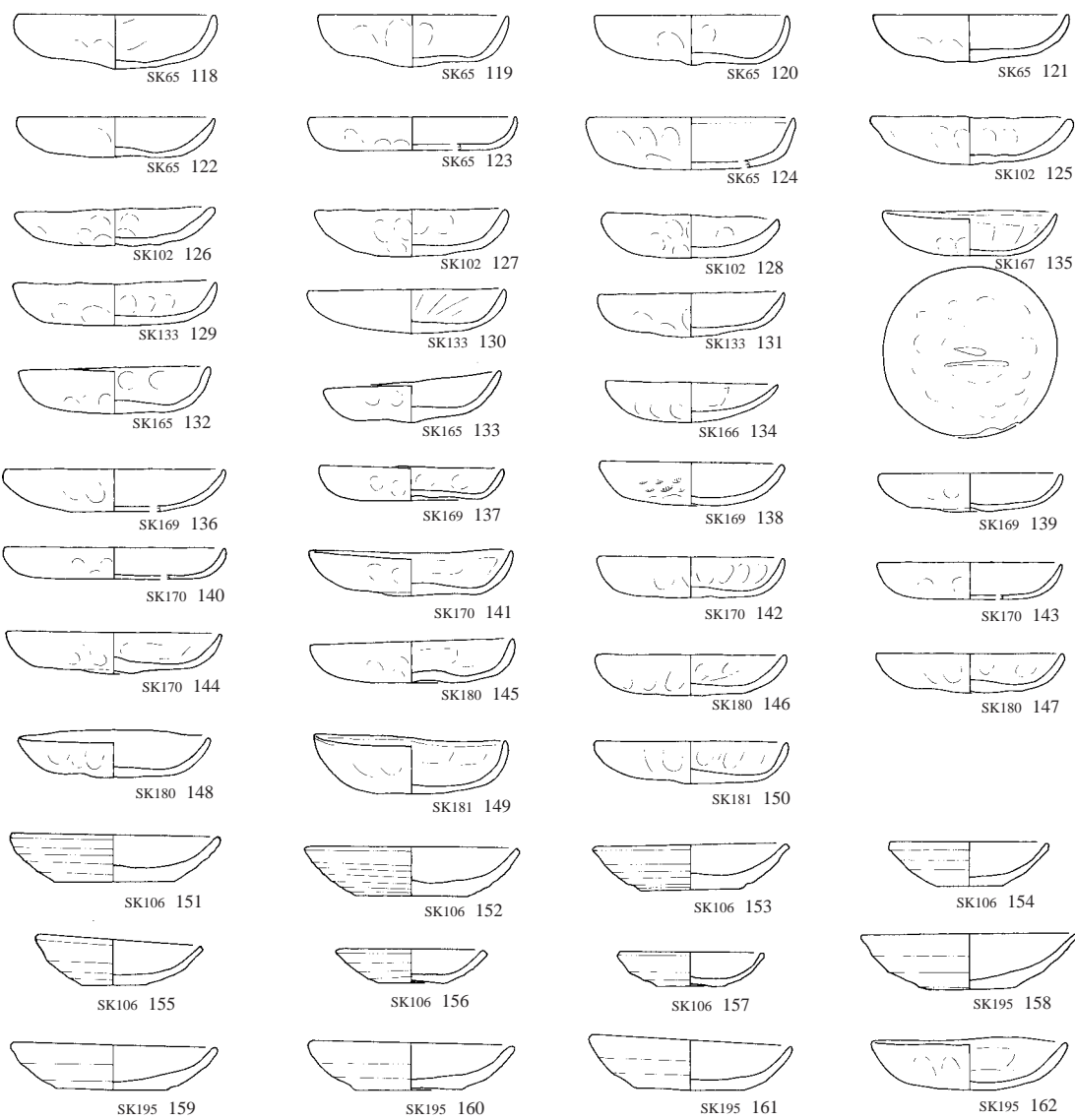


Fig.146 江戸時代 土坑墓 出土遺物

(5) 小 結

江戸時代の主な遺構は区画溝、井戸、土坑など居住にかかわるものと、土坑墓である。区画溝は、屋敷地を取り囲んでおり、2本並行するもの間には道路として使われていたとみられる。区画溝の中からは礫が大量に出土する部分があることから、溝の斜面の一部には護岸の石垣が設けられていたと推定できる。大規模な区画溝には、底面の傾斜がみられることから、排水機能を有していたことが分かる。これらの区画は、一部は戦国時代（15世紀後葉頃）にあった可能性があり、17世紀から18世紀頃に最も規模が大きくなる。区画溝の多くは19世紀前半頃には廃絶するが、その区画は、小規模な溝や道路として現代まで引き継がれている。

土坑墓は、屋敷地内もしくはその近辺に散在し、一部は川辺の段丘に集中していた。かわらけや銭貨を副葬する。銭貨の特徴から、構築時期は17世紀中葉から18世紀後葉とみられる。神宮寺川沿いの川辺の地は、現代においても盂蘭盆会や施餓鬼の儀礼が行われている。江戸時代における埋葬地と、現代における儀礼地の共通性には、境界としての川辺という、通底する空間認識が根底にあるとみられよう。

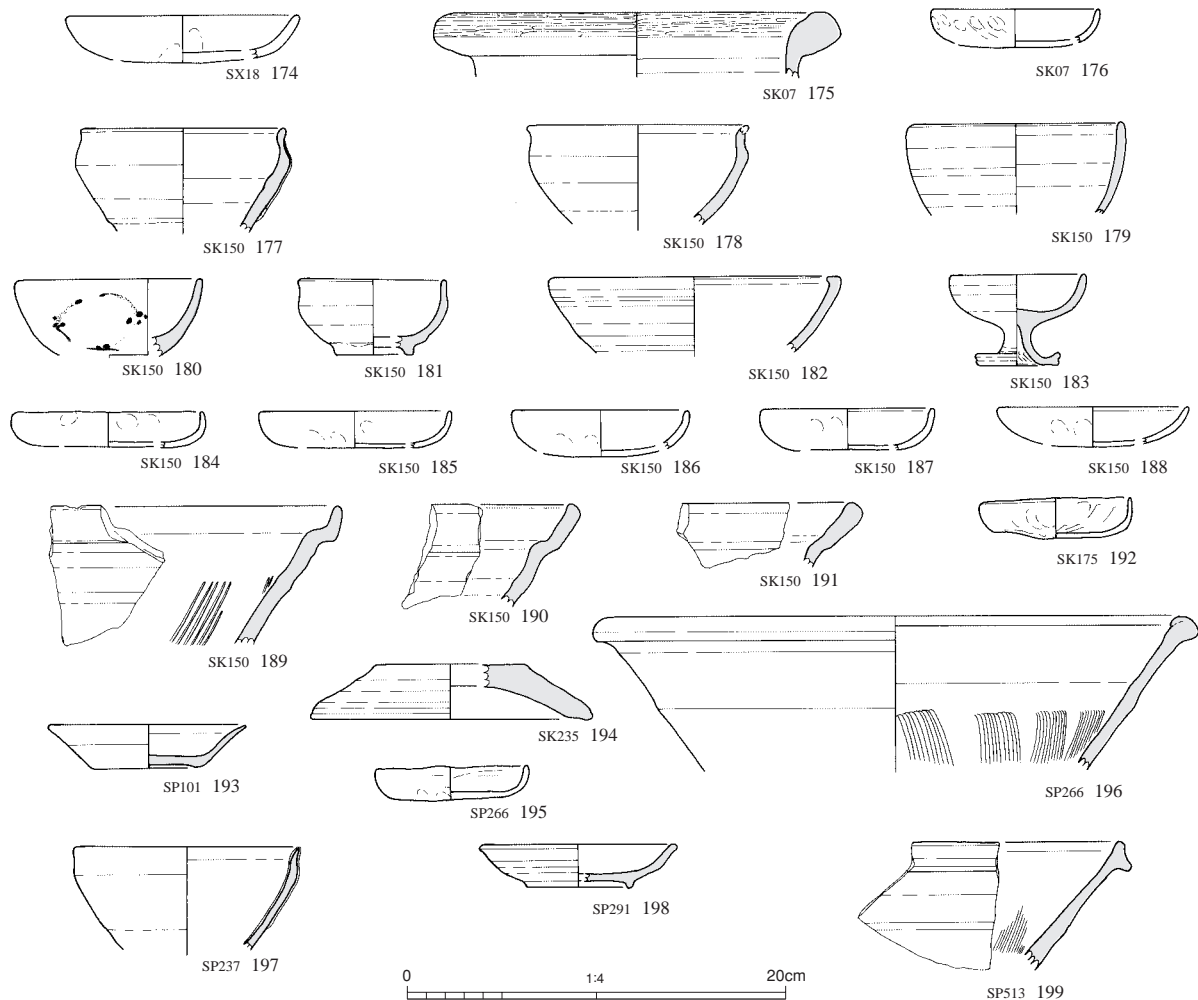


Fig.147 江戸時代 遺構 出土遺物

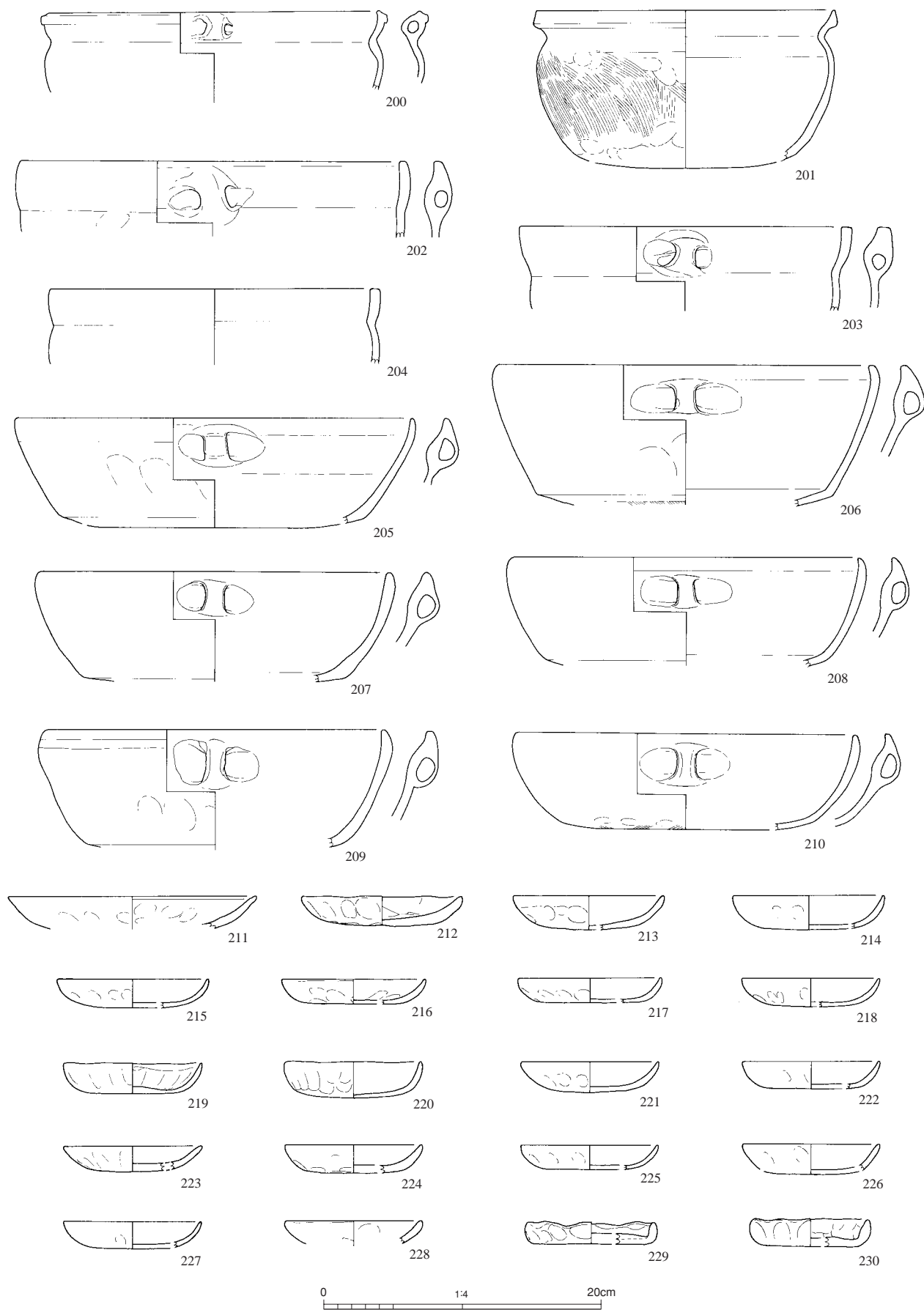


Fig.148 戦国・江戸時代 包含層 出土遺物 (1)

7 江戸時代

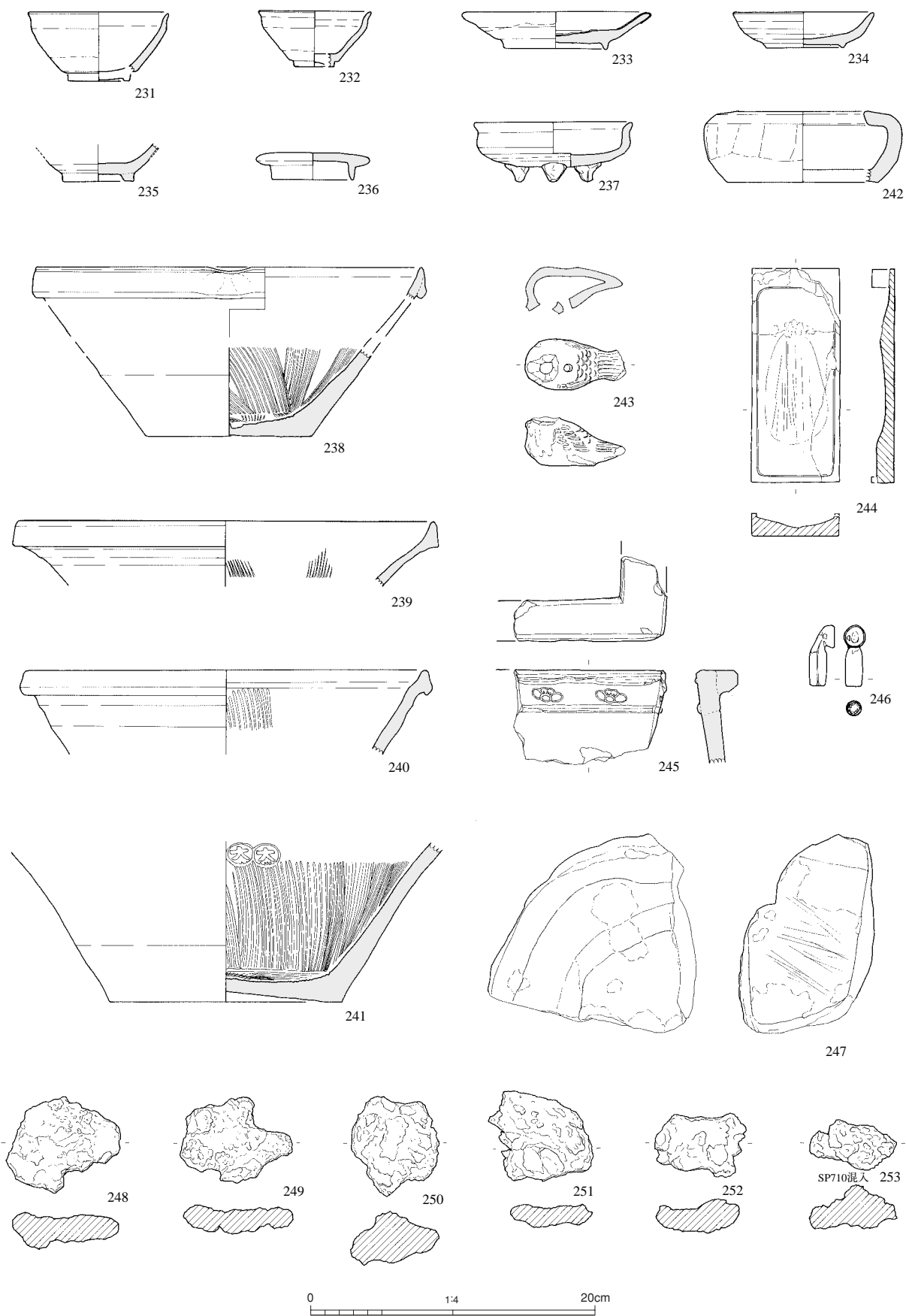


Fig.149 戦国・江戸時代 包含層 出土遺物 (2)

第3章 考察

1 北神宮寺遺跡における古墳時代前期の集落構造

(1) はじめに

北神宮寺遺跡では、弥生時代終末期から古墳時代前期（報告中では「古墳時代前期」と一括して表記、以下同様の表現をする）にかけての竪穴建物と方形周溝墓を中心とする遺構群を検出した。当該期の集落は広域で、今回の調査対象地の外側にも大きく展開していることが明瞭である。出土遺物も比較的豊富で、中には土器編年上の基準資料になりうる遺物群も含まれる。本稿では、今回検出した遺構と出土遺物の特徴を明らかにするとともに、都田川流域において北神宮寺遺跡が出現する意義について触れておきたい。

(2) 北神宮寺遺跡出土遺物をもとにした元屋敷式編年

元屋敷式の一括資料 北神宮寺遺跡の特質を明らかにする上での基礎作業として、出土遺物の編年的位置について検討しておきたい。西遠江における弥生時代終末期（庄内式期）から古墳時代前期（布留式古相期）の土器様式は、元屋敷式と呼ばれ、資料の増加に伴いその編年作業も精緻化が進んでいる。西遠江における元屋敷式の編年作業は、向坂鋼二による基準資料の提示（向坂1959）に始まり、尾張低地における廻間編年（赤塚1990）の深化を受けた細分案が提示されている（中嶋1997、鈴木敏2002）。これらで提示された一括資料の組み合わせは、主要器種の消長をもとに、S字甕や高坏の形態変化を対応させたもので、妥当性が高いものと評価できる。筆者も浜松市東区恒武西宮遺跡の良好な一括資料の位置づけに際して、これら先行研究を基礎に据えながら元屋敷式の細分案を提示した（鈴木2002a）。さらに、浜松市西区坊ヶ跡遺跡（浜文協2004）の出土資料を検討する際に、元屋敷式のより古い一群について考察を加え、細分化した修正編年案を示した（鈴木2004）。これらの作業を前提にして導き出した、編年上の基準資料をTab.10に示し、北神宮寺遺跡出土資料との対応関係を検討しておきたい。

器種分類 北神宮寺遺跡から出土した当該期の土器の器種分類をFig.150に示す。北神宮寺遺跡の存続時期は元屋敷Ⅰ～Ⅲ式期に重なり、出土土器も元屋敷式の基本的構成がほぼ表れている。なかでも、元屋敷Ⅰ式古段階とした元屋敷Ⅰ式1段階および2段階の資料が充実しており、その細分

Tab.10 西遠江における元屋敷式基準資料

編年	標識資料
元屋敷Ⅰ式	古段階 1段階 大平SB16・18・27 坊ヶ跡SB25・49・52・48、SK13・33、SX80・65、SD07、SZ04
	2段階 大平SB14・39・46、SK20・33A 坊ヶ跡SB29・62・65・118、SD136・157、SZ03 矢畑SK01・SK02・SZ01
	3段階 椿野SD24・121 須部ⅡSX06 中平SX12
	4段階 椿野1982溝上層 越前B群
元屋敷Ⅱ式	古段階 1段階 恒武西宮SX01・SZ01 川久保SX16
	新段階 2段階 堤町村東 梶子北SD50 川久保SD19（中層）
元屋敷Ⅲ式	山の神1次SK236 山の神3次SD201上層 西畑屋2次SD201

について再検証する必要がある。元屋敷Ⅰ式1段階と2段階の分離については、坊ヶ跡遺跡出土資料の分析で用いたように、有稜高坏の形態変化と、く字甕や内彎甕といった在来系台付甕の属性変移、およびS字甕の各型式の消長を指標にすることが有効である（鈴木2004）。以下、器種ごとに指標を示し、検討を加えたい。

有稜高坏の変遷 元屋敷式における有稜高坏の変遷観については、従来の見解から大きな変更はない。ここでは、坊ヶ跡遺跡出土遺物における分析項目を踏襲し、有稜高坏の坏部と脚部の形態差に注目しておこう。有稜高坏の坏部は、深く、端部に内彎傾向がみられるものから、浅く、端部が直線的もしくは外反傾向をもつものへと変化する。前者を「深坏」、後者を「浅坏」と呼称する。深坏と浅坏の差を定量的に分離すると、坏部を囲む逆三角形を描いたとき、高さ（h）と幅（w）の比率が1:2の形態を基準にすることができる。基準形態より深いものを深坏、基準形態と同等か、もしくは浅いものを浅坏とする。深坏は、筆者の分類（鈴木2002a）における有稜高坏A1類に、浅坏は有稜高坏A2～A5類にほぼ該当する。

いっぽう、有稜高坏の脚部は、相対的に高く、内彎傾向があるものから、相対的に低く、直線的もしくは外反傾向をもつものへと変化する。前者を「高脚」、後者を「低脚」と呼称する。高脚と低

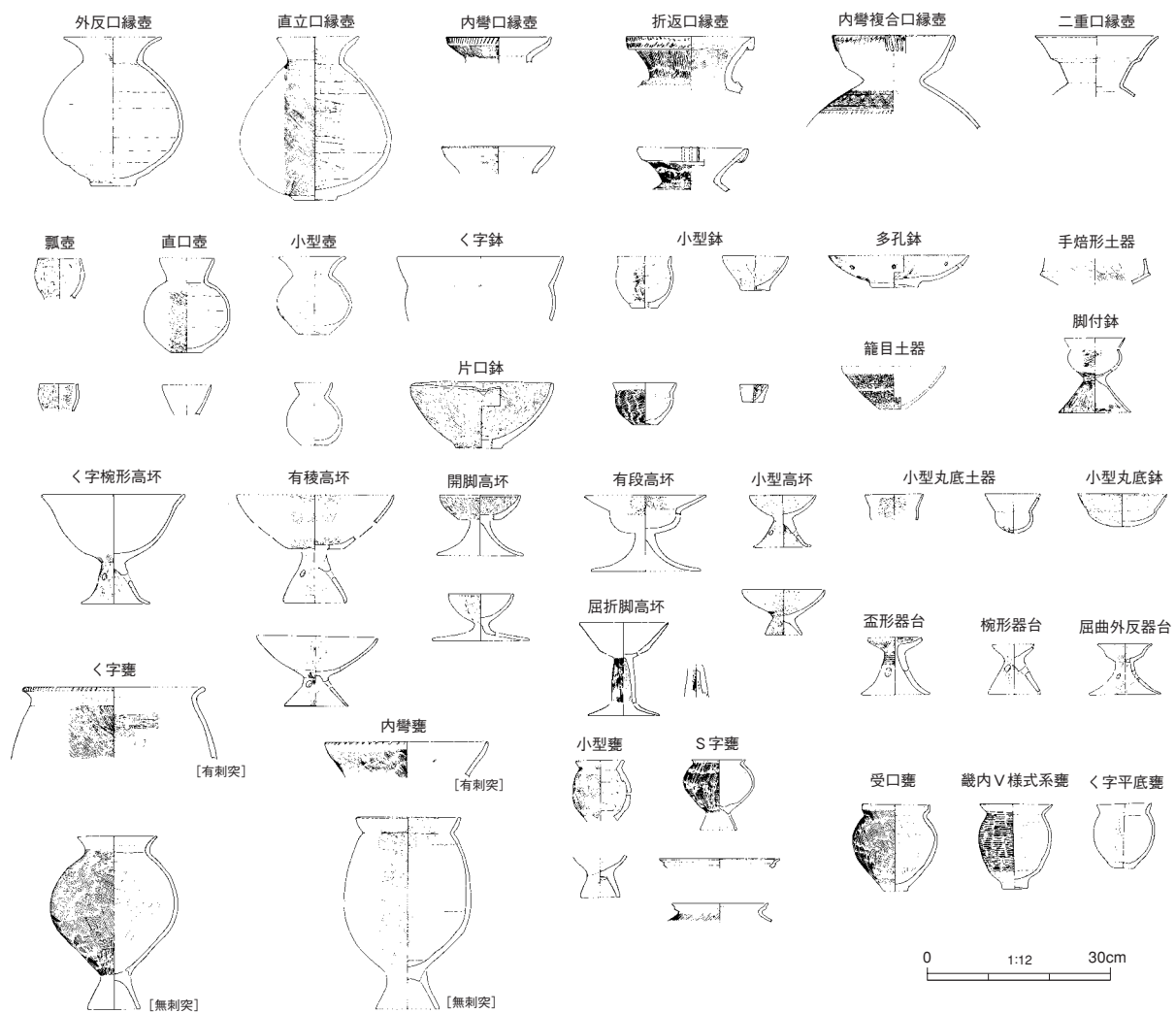


Fig.150 北神宮寺遺跡における元屋敷式土器の器種構成

脚の差も定量的に分離すると、脚部を囲む三角形を描いたとき、高さ (h) と幅 (w) が同等の形態を基準にすることができる。基準形態より高いものを高脚、基準形態と同等か、もしくは低いものを低脚とする。高脚は、筆者の分類における有稜高坏A1類とA2類の一部に、低脚は有稜高坏A2類の一部とA3類にほぼ該当する。

元屋敷式に先行する欠山式最新相（欠山Ⅲ式）の基準資料である浜松市中区鳥居松遺跡SX06（浜文協1997）では、すべて深坏と高脚が組み合う有稜高坏A1類で占められる。いっぽう、元屋敷Ⅰ式1段階とした資料中には、旧来の深坏・高脚の有稜高坏に加え、新形態である浅坏もしくは、低脚の有稜高坏（A2類）が出現している。浅坏や低脚の比率は、新しい段階になるほど増加する傾向があり、元屋敷Ⅰ式3段階には、新旧の形態がほぼ入れ替わるとみられる。元屋敷Ⅰ式1段階は弥生時代的な深坏、浅坏が占める割合が高い段階、元屋敷Ⅰ式2段階はその割合が相対的に低い段階といえる。

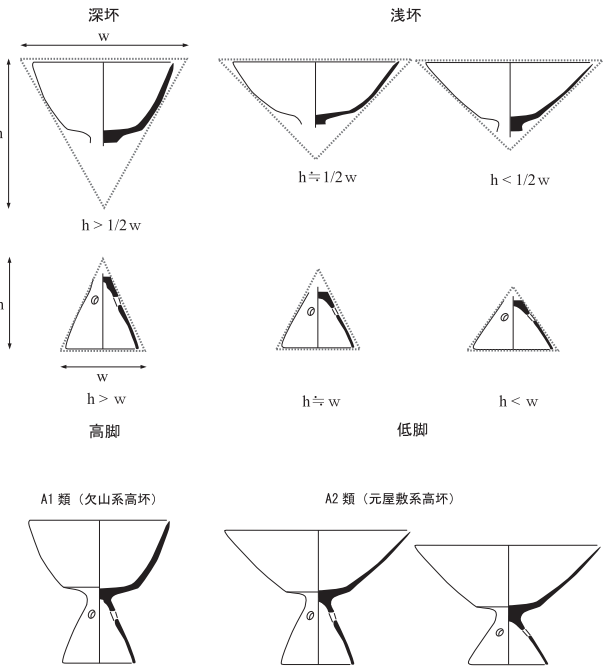


Fig.151 有稜高坏の分類

在来系台付甕の変遷 く字甕や内彎甕といった在来系台付甕の変遷も元屋敷Ⅰ式古段階の細分においては有効である。在来系台付甕の編年的位置づけをうかがうには、口縁端部における刺突、および脚台接合部における粘土帯の有無の比較が有効である。

口縁端部における刺突については、欠山式段階では刺突を有することが優勢であることに対し、元屋敷Ⅰ式1段階で、ほぼ同数程度に変化する。さらに、元屋敷Ⅰ式2段階では刺突が無いものが多数派となり、以後、刺突をもつものの比率が低下する。口縁に刺突をもつ在来系台付甕は、元屋敷Ⅱ式期においても僅かに残存するが、比率の点では非常に少ないことから、この段階にはほぼ消滅するとみてよいだろう。

脚台接合部における粘土帯については、有するものが古相、もたないものが新相の特徴である。脚台接合部における粘土帯の消失傾向は欠山式期の間に進行しており、欠山Ⅲ式期では粘土帯をもたないものが圧倒的に多数である（鳥居松遺跡SX06）。元屋敷Ⅰ式期の在来系台付甕は、基本的に脚台接合部における粘土帯はもたないといえるが、ごく僅かにその痕跡をとどめる個体が知られる。脚台接合部に粘土帯を残す個体を含むことは、元屋敷Ⅰ式1段階にみられる特徴といえ、それ以後の段階には消失するとみられる。

S字甕の相伴状況 西遠江におけるS字甕の変化については、赤塚次郎が示す変遷観（赤塚1990、1997）に即した理解が可能である。S字甕A類は欠山Ⅲ式期に広範にみられるようになり、元屋敷Ⅰ式古段階まで継続する。その後、元屋敷Ⅰ式期の中でS字甕はA類からB類へとゆるやかに移行するとみられるが、良好な資料に恵まれず、移行過程にかんしては不明瞭な部分が多い。

1 北神宮寺遺跡における古墳時代前期の集落構造

Tab.11 元屋敷式の基準資料組成比較 (1)

遺跡名	遺構	Fig.	遺物番号	有稜高坏				く字甕・内彎甕				S字甕	相伴資料・備考	
				坏部		脚部		口縁刺突		脚台部 接合帯				
				深	浅	高	低	有	無		有			無

欠山Ⅲ式

鳥居松1次	SX06	79～92	328～472	●		●		●	○	23	8	●	A類	
-------	------	-------	---------	---	--	---	--	---	---	----	---	---	----	--

元屋敷Ⅰ式1段階

大平	SB16	128	178～190	●		●	○							A類	
大平	SB18	132	230～258			●		●	○	2	1				
大平	SB27	135～137	305～391		○	●	○	●	○	3	2	●	A類	手焙土器共伴	
坊ヶ跡	SB25	56	118～159			●	○	●	○	5	3	●	○		
坊ヶ跡	SB49	58・59	186～218			●		●	○	3	5	●			
坊ヶ跡	SB52	60	223～229			●		●	○	1	2				
坊ヶ跡	SB48	83	410～420			●		●	○	1	2	●			
坊ヶ跡	SK13	98	508～521					●	○	2	2		A類		
坊ヶ跡	SK33	99	533～564		○		○	●	○	4	5	●		新相高坏	
坊ヶ跡	SX80	74	379～386					●	○	2	2				
坊ヶ跡	SX65	100	590～597					●	○	2	1				
坊ヶ跡	SD07	102	606～619			●			○	0	1	●		タタキ甕、手焙土器共伴	
坊ヶ跡	SZ04	109	688～705	●			○								
北神宮寺	SB09	68	13～29		○			●		1	0			片口鉢	
北神宮寺	SB12	69	30～44					●	○	3	5			タタキ甕	
北神宮寺	SB57	88	205～208			●						●			
北神宮寺	SZ13	95・96	229～283	●	○	●	○	●	○	10	7			受口甕	
北神宮寺	SX10	112	439～444					●		1	0			折返口縁壺	

元屋敷Ⅰ式2段階

大平	SB14	129～131	192～298				○		○	0	3				
大平	SB39	140・141	503～549		○	●	○	●	○	1	1			A/B類	
大平	SB46	143	584～604		○		○		○	0	4			A/B類	
大平	SK20	148・149	705～736		○	●	○	●	○	1	4			A類	内彎複合壺・二重口縁壺
大平	SK33A	150	769～785		○		○		○	0	3				
坊ヶ跡	SB29	57	166～176		○		○		○	0	2				
坊ヶ跡	SB62	61・62	256～279		○	●	○	●	○	1	8		○	開脚高坏	
坊ヶ跡	SB65	64	319～342			●	○		○	0	5				
坊ヶ跡	SB118	84・85	440～475			●	○		○	0	6			A/B類	
坊ヶ跡	SD136	86	479～487				○		○	0	4				
坊ヶ跡	SD157	86	488～498				○		○	0	4				
坊ヶ跡	SZ03	108	674～678		○		○								
矢畑	SK01	21～23	1～42	●	○	●	○	●	○	1	6			弥生系器台	
矢畑	SK02	24	43～63	●	○	●	○							手焙形土器	
矢畑	SZ01	25～26	72～77											内彎複合口縁壺・二重口縁壺	

元屋敷Ⅰ式古段階 (Ⅰ式1段階～2段階)

北神宮寺	SB05	68	3～5			●									
北神宮寺	SB19	75	66	●											く字椀形高坏
北神宮寺	SB24	76	91・92						○	0	1				
北神宮寺	SB27	79	169・170	●											小型高坏
北神宮寺	SB32	78	164～168												有孔鉢
北神宮寺	SB39	79	174					●		1	0				
北神宮寺	SB53	79	175～178												小型高坏
北神宮寺	SB41	88	179～185												内彎複合口縁壺
北神宮寺	SB47	88	187～190	●					○	0	1				く字椀形高坏
北神宮寺	SB49	88	192～198					●		1	0				
北神宮寺	SB59	88	210					●		1	0				
北神宮寺	SZ21	102	326・327					●		1	0				

Tab.12 元屋敷式の基準資料組成比較 (2)

遺跡名	遺構	Fig.	遺物番号	有稜高坏				く字甕・内彎甕				S字甕	共伴資料・備考	
				坏部		脚部		口縁刺突						
				深	浅	高	低	組成		点数				脚台部 接合帯
								有	無	有	無			

元屋敷Ⅰ式3段階

鳥居松1次	SX06	79～92	328～472	●		●		●	○	23	8	●	A類	
椿野	SD24	18～20	22～44		○		○	●	○	2	10		B/C類	
椿野	SD121	19～22			○		○	●	○	3	1		B類	弥生混入あり
須部Ⅱ	SX06	42	2～6						○	0	2		B類	
中平	SX12	65	283～301				○	●	○	1	1		B類	二重口縁壺
北神宮寺	SB20	75	67～84				○		○	0	5		B類	籠目土器・二重口縁壺
北神宮寺	SB23	76	87～90						○	0	1		B類	受口甕
北神宮寺	SZ19	102	292～298						○	0	2			
北神宮寺	SZ25	106	338～348			●	○		○	0	2		○	
北神宮寺	SZ28	107	357～368						○	0	4		B類	手焙土器

元屋敷Ⅰ式4段階

椿野	1982溝上層	25	166～178						○	0	3		B/C類	
越前	B群	6	8～12				○						B類	開脚高坏

元屋敷Ⅰ式新段階 (Ⅰ式3段階～4段階)

北神宮寺	SB36	89	214～223						○	0	1		○	開脚高坏
北神宮寺	SZ23	102	329～331											二重口縁壺

元屋敷Ⅱ式1段階

恒武西宮	SX01	33～51	1～228				○		○	0	11		C類	小型丸底土器・柳ヶ坪型壺
恒武西宮	SZ01	29・30	1～25				○	●	○	1	2		C類	小型丸底土器・柳ヶ坪型壺
川久保	SX16	66～69								0	27		C類	
北神宮寺	SB17	75	50～65		○			●	○	1	5			小型丸底鉢・タタキ甕
北神宮寺	SB54	88	199～203		○		○		○	0	1		C類	く字平底甕

元屋敷Ⅱ式2段階

堤町村東		103	1～23							0	1		C類	丸底有段口縁鉢
梶子北	SD50	66～68	1～68		○		○		○	0	3		C類	有段高坏
川久保	SD19中層	62～64			○		○						C類	X字器台・小型丸底土器
北神宮寺	SB30	77	93～120			●		●	○	1	4			古相遺物混入か
北神宮寺	SB60	89	226・227		○								C類	新相C類
北神宮寺	SZ16	97	284～290						○	0	1			新相二重口縁壺
北神宮寺	SZ18	97	291											新相二重口縁壺
北神宮寺	SZ20	102	299～325	●			○			0	8			有段高坏
北神宮寺	SZ27	106	349～356		○		○		○	0	1			小型丸底鉢・新相二重口縁壺

元屋敷Ⅱ式 (元屋敷Ⅱ式1段階～2段階)

北神宮寺	SB06	68	6～12						○	0	1			椀形器台
北神宮寺	SB15	69	46・47						○	0	1		C類?	
北神宮寺	SZ24	106	332～335		○		○		○	0	1			

元屋敷Ⅲ式

山の神1次	SK236	50	272～277										D類	屈折脚高坏
山の神3次	SD201上層	72	上段		○		○		○	0	5		C類/D類	屈折脚高坏・小型丸底鉢
西畑屋2次	SD201上層	22	86～104		○		○		○	0	1		C類新相	小型丸底鉢・く字平底甕
北神宮寺	SB28	69	49											新相小型丸底土器
北神宮寺	SB31	77・78	121～163		○		○		○	0	10		C類	屈折脚高坏

●：古相を示す特徴 ○：新相を示す特徴

1 北神宮寺遺跡における古墳時代前期の集落構造

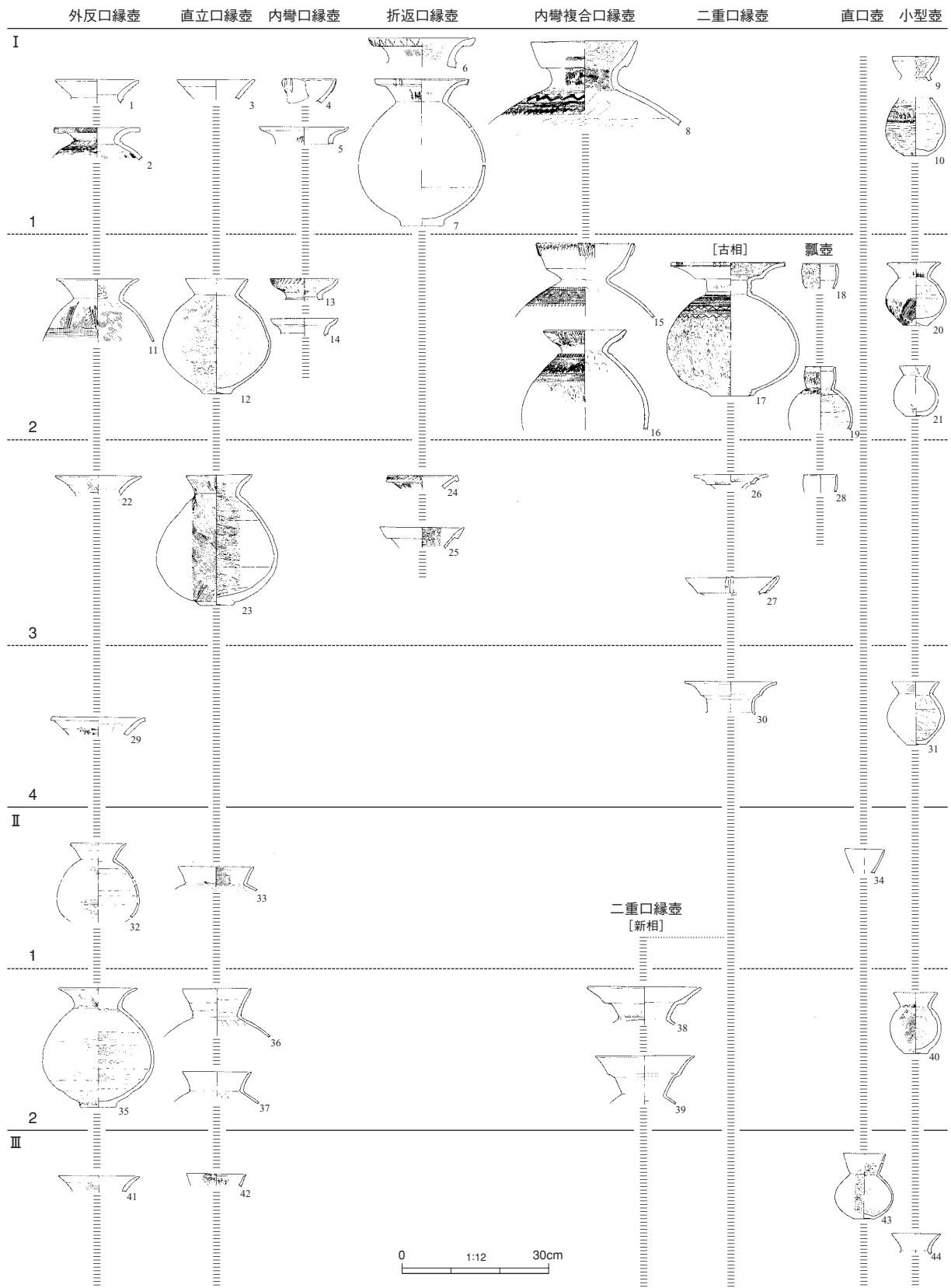


Fig.152 北神宮寺遺跡における元屋敷式土器の変遷 (1)

1・3～5：SZ13 2・9・10・18・28・35：SX01 6：SX10 7：SB57 8：SB12 11：SB53 12：矢畑SK03 16・19：矢畑SK01 17：矢畑SZ01
 20・21：SB41 22・26・27：SB20 23：SB23 24・25：SZ25 26・27：SB20 29：SB36 30：SZ23 31：SB36 32～34：SB17 36・37：SZ16
 38：SZ27 39：SZ18 40：SB30 41～44：SB31

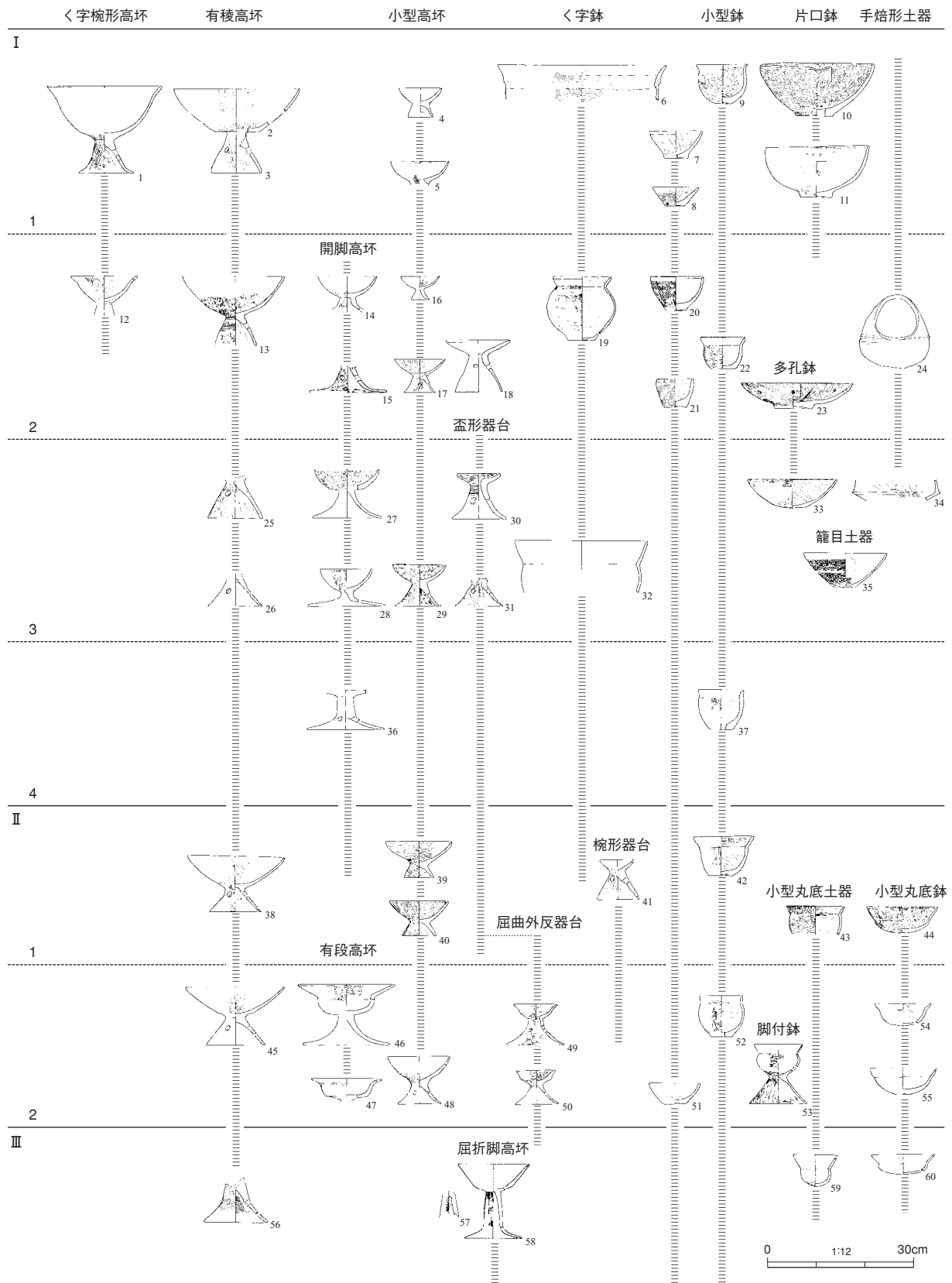


Fig.153 北神宮寺遺跡における元屋敷式土器の変遷 (2)

1・3・5・7：SZ13 2・6・27・28・33・36・41～43・46・50：SX01 4：SB57 8～10：SB09 11：SK171 12：SB19 13・14・18・19：矢畑SK01
 15・20・22・24：矢畑SK02 25・26：SZ25 29：SP184 30：SK100 31・35：SB20 32：SZ19 34：SZ28 36：SB36 38：SB54 39・40：SP326
 44：SB17 45：SZ27 47・48：SZ20 49・51～54：SB30 55：SZ27 56～58・60：SB31 59：SB28

1 北神宮寺遺跡における古墳時代前期の集落構造

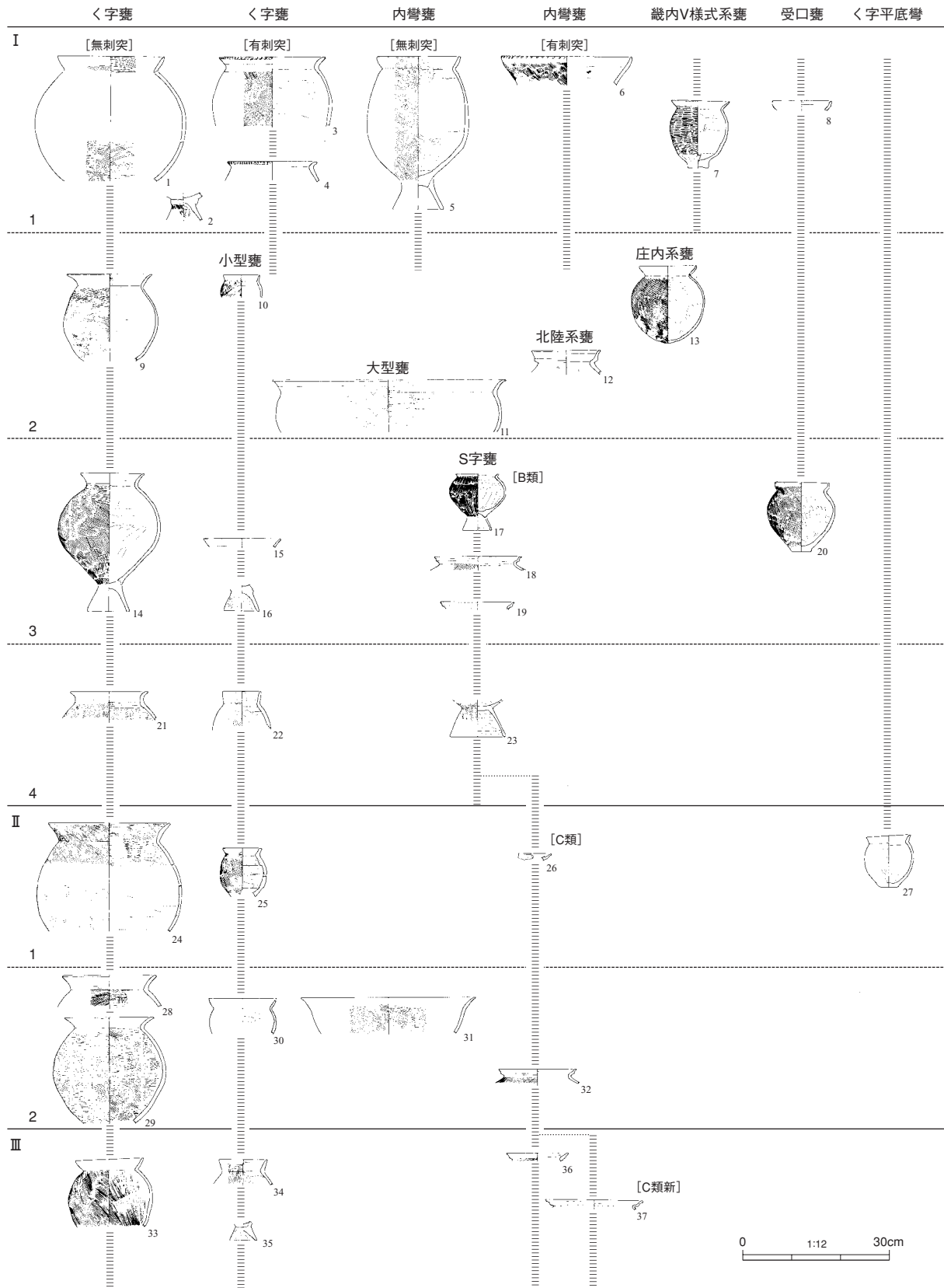


Fig.154 北神宮寺遺跡における元屋敷式土器の変遷 (3)

1・4・8：SZ13 2：SB57 3：SX10 5・7：SB12 6・10・24・25・29・31：SX01 9・11：矢畑SK01 12・13：矢畑包含層 14・17・20：SB23
 15・16・19：SB20 18：SZ28 21・23：SB36 26・27：SB54 28：SB30 30：SZ27 32：SB60 33～36：SB31 37：包含層

S字甕B類は元屋敷I式2段階に出現しているとみられるが、北神宮寺遺跡の出土資料においては、該当する段階の明確な共伴資料を抽出することができなかった。北神宮寺遺跡では、SB23出土資料がS字甕B類の出現期（元屋敷I式2段階）に遡る余地が残るが、その他のS字甕B類を伴う資料

Tab.13 他地域との併行関係

時期区分	西遠江	尾張	大和	纏向
	[本稿]	[赤塚 1990]	[寺沢 1986]	[豊岡 1999]

弥生時代 終末期	元屋敷I	1	廻間II	1	庄内2	纏向3類
		2		2	庄内3	
		3	廻間III	3・4	布留0	纏向4類
		4		1	布留1	
古墳時代 前期	元屋敷II	1	廻間III	2	布留1	纏向5類
		2		3・4		
	元屋敷III		松河戸I (前半)		布留2	

群は元屋敷I式3段階に位置づける方が妥当である。北神宮寺遺跡では、S字甕A類を見出すことができず、S字甕が安定的に出現するのは、元屋敷I式3段階以降、S字甕B類に移行してからのことと捉えられる。

S字甕B類からC類への移行期の様相についても、北神宮寺遺跡の出土資料では明確にできなかった。S字甕C類は元屋敷I式4段階に出現しているとみられるが、北神宮寺遺跡では、S字甕のB類とC類が共伴する事例が認められない。西遠江全域においても、両者が共伴する事例は限定的であり、この段階については、未だ不明瞭な部分が残されている。北神宮寺遺跡においてS字甕C類が伴うのは、元屋敷II式期になってからのこととみられる。その後、S字甕C類は、新相形態のものを中心に元屋敷III式期まで残存し、この段階においてS字甕D類へと移行するとみられる。北神宮寺遺跡ではS字甕D類は認められず、包含層から出土した631など、ごく僅かにS字甕C類新相の形態が確認できる程度である。こうした北神宮寺遺跡出土品におけるS字甕の消長は、集落の存続期間をほぼ反映したものといえるだろう。

北神宮寺遺跡出土資料の位置づけ 以上で検討した属性をもとに、北神宮寺遺跡から出土した遺物群を、他の基準資料と比較しておきたい (Tab.11・12)。北神宮寺遺跡出土資料には、元屋敷I式1段階に位置づけられるものが比較的豊富にみられることに対し、それ以後の各段階については、指標となる器種、属性をもつ個体がみられない場合、明確な編年の位置づけが難しい場合がある。とくに、北神宮寺遺跡の出土資料では、元屋敷I式2段階やI式4段階など、確実に対応させることが難しい段階があり、編年的検討について課題を残している。

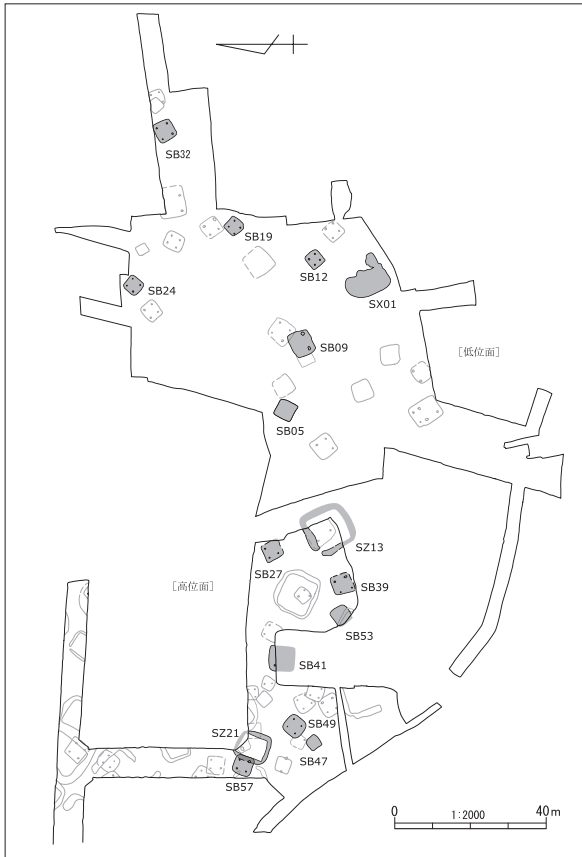
(3) 集落の変遷

時期設定 以上の検討をもとに、北神宮寺遺跡に築かれた集落の変遷を素描しておきたい。集落構造の変遷をめぐっては、元屋敷式の小段階ごとに把握するのが理想的であるが、資料の制約からすべての資料を小段階ごとに位置づけることは難しい。ここでは、元屋敷I式1段階と2段階を元屋敷I式古段階、元屋敷I式3段階と4段階を元屋敷I式新段階、元屋敷II式1段階と2段階を元屋敷II式期とし、元屋敷III式期を加えて、大きく4時期に区分して捉えておきたい。

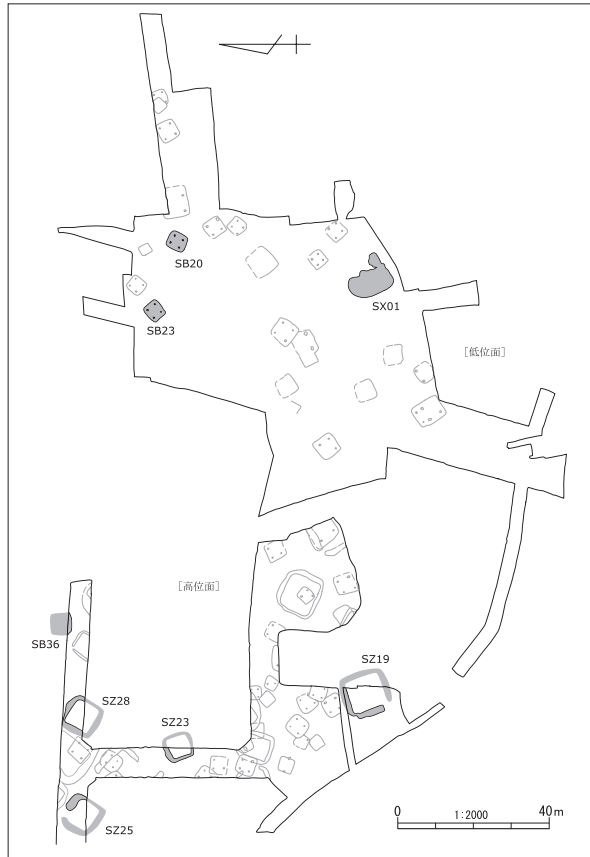
元屋敷I式古段階 北神宮寺遺跡における集落の造営は元屋敷I式古段階に開始される。低位面、高位面の双方で竪穴建物が建てられ、土器廃棄土坑SX01も掘削される。高位面には方形周溝墓も造営されはじめるが、この段階においては群をなさず、独立的に構築される傾向がみられる。集落

1 北神宮寺遺跡における古墳時代前期の集落構造

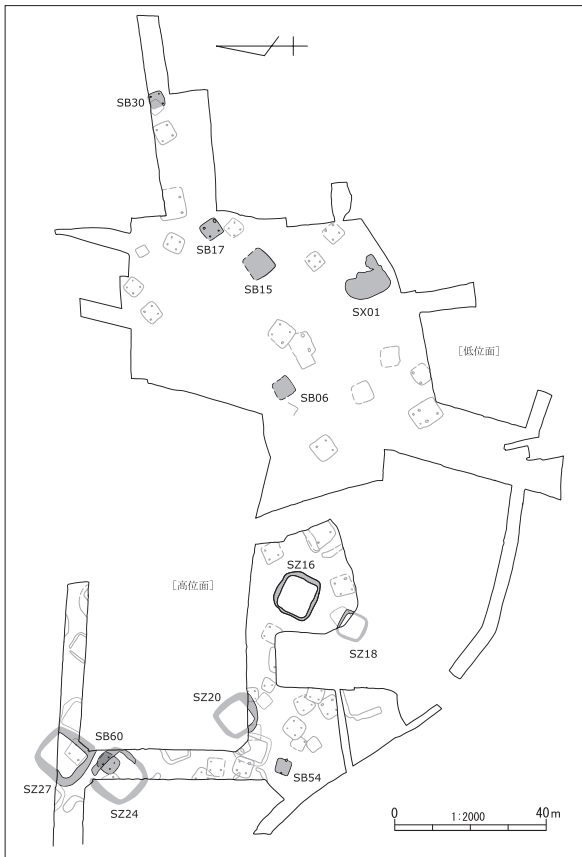
元屋敷 I 式古段階



元屋敷 I 式新段階



元屋敷 II 式期



元屋敷 III 式期

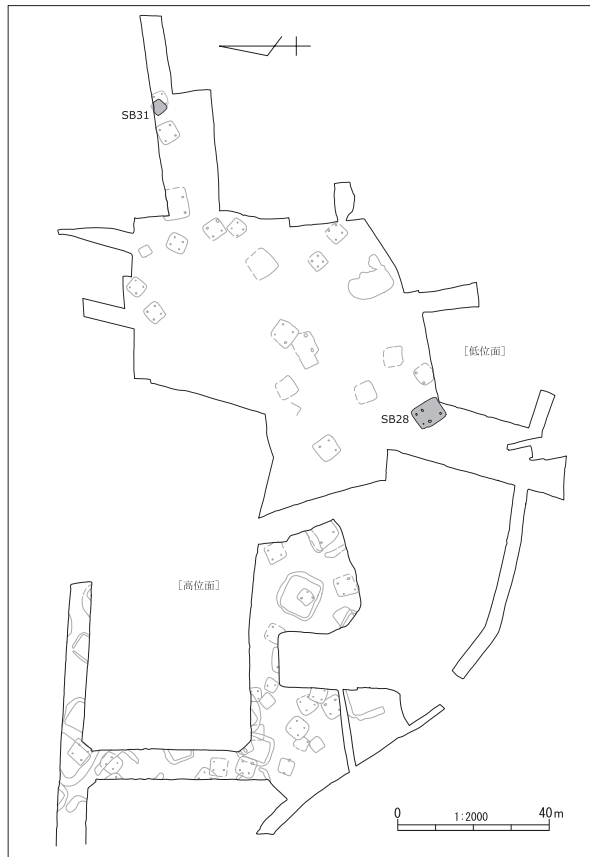


Fig.155 北神宮寺遺跡における古墳時代集落の変遷

造営初期の遺構としては、SB12、SZ13があげられる。双方ともに元屋敷Ⅰ式Ⅰ段階に位置づけられ、この時期に突如として集落の造営が開始されたことが分かる。帰属時期が明確な遺構は、元屋敷Ⅰ式Ⅰ段階に位置づけられるものが最も多い。

また、神宮寺川を挟んで対岸に展開している矢畑遺跡では、元屋敷Ⅰ式Ⅱ段階の竪穴建物や方形周溝墓、土坑などが検出されている。北神宮寺遺跡における集落の隆盛に合わせて、一時期、川を挟んだ対岸まで居住域が拡大したものと考えられる。出土遺物が豊富なことに加え、集落の拡大傾向もみられることから、集落の最盛期は元屋敷Ⅰ式古段階にあるとみてよいだろう。

元屋敷Ⅰ式新段階 元屋敷Ⅰ式新段階においても、集落の造営が継続している。竪穴建物は低位面、高位面の双方で、建て替えが繰り返されるとみられる。また、高位面における方形周溝墓の築造数は増加傾向にあり、続く元屋敷Ⅱ式期にかけてその築造が最も盛んになる。なお、この段階までは、方形周溝墓の築造は独立性が高い。低位面においては、土器廃棄土坑SX01が継続的に使用されている。

元屋敷Ⅱ式期 元屋敷Ⅱ式期においても、集落の造営は続けられる。低位面、高位面ともに竪穴建物が建てられ、高位面では方形周溝墓の築造が盛んである。方形周溝墓は方向をそろえて構築され、以前の段階までに構築された周溝墓を含めて、まとまりのある群を形成するようになる。土器廃棄土坑SX01は使用が続けられるが、当該期の遺物量が少ないことから、元屋敷Ⅱ式期のなかで次第にその機能を停止させていくとみられる。

元屋敷Ⅲ式期 元屋敷Ⅲ式期になると集落は急激に衰退する。僅かな竪穴建物の構築を最後に、集落は完全に廃絶していく。方形周溝墓は、確実に元屋敷Ⅲ式期に位置づけられるものが知られず、この段階には構築が停止していたとみられる。土器廃棄土坑SX01は前段階においてほぼ機能を停止しており、僅かな窪みを残す程度に埋まっている。

集落変遷の特質 以上に描いた集落の変遷からは、時間の経過とともに、集落構造は大きく変化していないことが分かる。後述するように、竪穴建物には突出した規模のものが抽出できず、方形周溝墓の規模も一辺が10m程度で、傑出した被葬者の存在を見い出すことができない。最盛期にあたる元屋敷Ⅰ式古段階においても、遺構の構築数は多いが、対岸の矢畑遺跡を含めて特殊な様相は認められない。北神宮寺遺跡に営まれた集落は、数世代にわたって造営された、階層差をもたない一般的な集落と評価できるだろう。

(4) 遺構・遺物の特徴

竪穴建物の差異 北神宮寺遺跡で検出した竪穴建物の規模と構造を分析したい。Fig.156に分析に耐える38棟の大きさを比較した。最小の建物はSB21で2.5×2.7mの規模である。最大の建物はSB18で一辺6.6mの規模である。これらはやや突出した規模であり、その他9割以上の建物は一辺3.0mから6.0mの規模の中におさまる。規模の差異はほぼ正規分布をみせており、集落の居住集団が等質的であるという評価を裏づけている。北神宮寺遺跡にみられる竪穴建物の大きさは、同時代の坊ヶ跡遺跡や浜松市西区中平遺跡（浜松市教委1982）といった一般的な集落と比べても、大きな差異がない（鈴木2004）。首長居館とみられる浜松市西区大平遺跡（浜文協1992）においても、突出した大型

建物がみられるほかは、竪穴建物の規模の傾向は変わらない。竪穴建物の大きさという点においては、北神宮寺遺跡は標準的なあり方を示しているといえる。

竪穴建物のうち、小型のものについては、柱穴がみられないという特徴がある。確実に床面の4箇所に柱穴をもつ最小の竪穴建物はSB52であり、その規模は一辺が3.5mである。これより小型の竪穴建物8例はすべて柱穴がみられないか、不明瞭である。柱穴の有無は上屋を支える骨組みの構造の違いに起因していると捉えられる。柱穴が明瞭でない小型の建物は、床面に4本の柱を据えつける構造ではないとみられよう。床面積が狭いことから、柱は床面に設置されず、壁や建物の外側から渡した支柱で上屋を支える構造であったとみられる。

柱穴をもたない小型の竪穴建物は、ほぼ同時期の集落である坊ヶ跡遺跡においても広範に認められる。坊ヶ跡遺跡においても、一辺3.5m程度の規模を境界に、それより小さい竪穴建物については、柱穴が確認できないものだけで占められる。浜松市の南と北という集落の造営地の違いはあるが、建物構造の傾向はほぼ一致しているといえるだろう。

置石炉について 北神宮寺遺跡では、SB20・22・30・38・51といった置石炉をもつ事例が5例ほど認められた (Fig.157)。いずれも弥生時代終末期もしくは古墳時代前期に位置づけられる。出土遺物から帰属時期が判明する事例としては、SB20 (元屋敷Ⅰ式3段階) とSB30 (元屋敷Ⅱ式2段階) があげられ、他の3例は帰属時期が明確でない。

置石炉は弥生時代中期後葉の浜松市北区井通遺跡や愛知県豊橋市橋良遺跡において認められ、その後も弥生時代後期にかけて、浜松市浜北区東原遺跡といった天竜川平野北部や、袋井市愛野向山遺跡、団子塚遺跡といった小笠山北西側周辺の竪穴建物に多く認められる (丸杉2008)。また、大平遺跡SB14にみるように、浜松市南部地域では元屋敷Ⅰ式2段階に降るものもある。北神宮寺遺跡の事例は、これらの諸例よりさらに降り、古墳時代前期に至るまで置石炉が残存していることを示すことになった。

炉に石を置く構造は、礫によって薪を地面から浮かせ酸素供給を促す機能を果たしたとの推定がある (岩瀬1996・2001)。しかし、北神宮寺遺跡のように、古墳時代前期に降るような事例では、出土する煮沸具の形態に他地域のそれとの違いを見い出すことができないことから、置石炉を熱効率

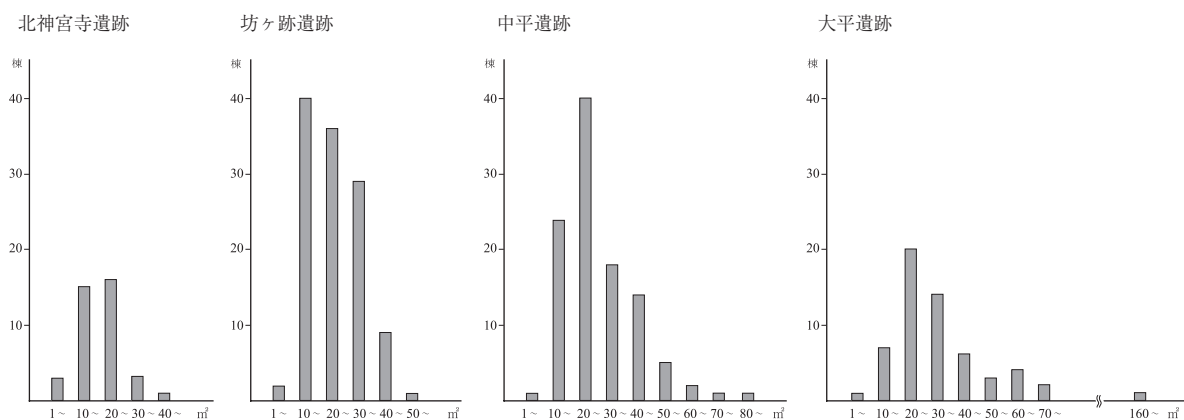


Fig.156 元屋敷式期における竪穴建物の規模

と関連づけて理解することは難しい。北神宮寺遺跡が所在する都田川流域や天竜川平野北部地域において、炉縁を石によって区画する地域性が連綿と維持されてきたと解釈するほうが妥当であろう。

炉に石を置く意味は明確でないが、炉の縁辺を区画して炎の拡散を防いだり、台付甕の安定性を高めたりする機能を果たしていた可能性が考えられる。しかし、置石炉は決して普遍的な存在でないことが示しているように、想定できる効果は絶対的ではなかったとみられる。弥生時代中期後葉以降、炉に石を置くことが都田川流域から天竜川平野北部地域において慣習化し、地域的伝統の延長上において北神宮寺遺跡にも採用されるに至ったものと捉えられる。

なお、置石炉とともに、SB51にみられる掘り方の構造にも、都田川流域と天竜川平野北部地域との関連が見い出せる。SB51の掘り方は、コ字状に周囲を深く掘削し、中央が高く残されていた。床面は周囲の深掘り部分を埋めて、中央の高さに揃えて整地されていたとみられる。建物内の除湿機能をもつ造作と捉えられるが、同様の床面基盤の造作は、天竜川平野北部にある東原遺跡でも検出されている（東原遺跡33次SB14・18、浜文振2008）。両者は時期的にも若干の開きがあるため、直接的に結びつけることは難しいが、都田川流域と天竜川平野北部地域には堅穴建物の掘り方について共通した造作をもつ事例があるということも留意しておきたい。

方形周溝墓の特徴 方形周溝墓についても検討を加えておこう。北神宮寺遺跡で検出した元屋敷式期の方形周溝墓は14基である。方形周溝墓は高位面の全域にわたり構築されているが、2008年に

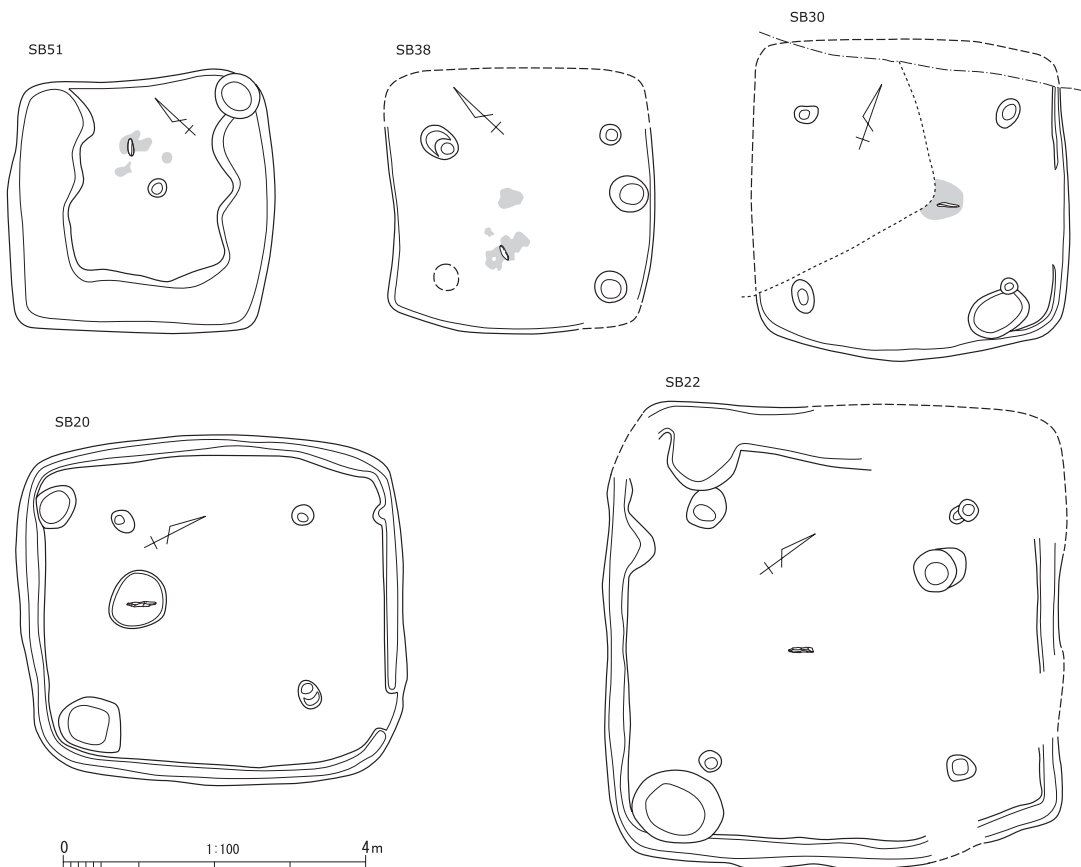


Fig.157 置石炉をもつ堅穴建物

Tab.14 元屋敷式期の方形周溝墓

遺跡名	遺構	東西 (m)	南北 (m)	面積 (m ²)	時 期
北神宮寺	SZ16	10.0	9.5	95.0	元屋敷Ⅱ-2
北神宮寺	SZ21	6.0	—	(36.0)	元屋敷Ⅰ-1~2
北神宮寺	SZ23	—	6.0	(36.0)	元屋敷Ⅰ-3~4
北神宮寺	SZ27	9.1	10.5	95.6	元屋敷Ⅱ-2
北神宮寺	SZ28	7.5	—	(56.3)	元屋敷Ⅰ-3
北神宮寺	SZ29	5.5	—	(30.3)	元屋敷Ⅰ~Ⅱ
矢畑	SZ01	11.3	10.5	118.7	元屋敷Ⅰ-2
坊ヶ跡	SZ01	3.5	3.7	13.0	元屋敷Ⅰ-1~2
坊ヶ跡	SZ02	5.7	5.5	31.4	元屋敷Ⅰ-1~2
坊ヶ跡	SZ03	9.1	11.4	103.7	元屋敷Ⅰ-2
坊ヶ跡	SZ04	11.0	9.5	104.5	元屋敷Ⅰ-1
中平	SZ03	4.8	—	(23.0)	元屋敷Ⅰ-1~2
中平	SZ04	5.2	6.0	31.2	元屋敷Ⅰ-1~2
中平	SZ05	6.1	6.0	36.6	元屋敷Ⅰ-1~2
中平	SZ06	5.3	5.1	34.8	元屋敷Ⅰ-1~2
中平	SZ07	6.0	5.8	34.8	元屋敷Ⅰ-1~2
中平	SZ08	7.2	7.4	53.3	元屋敷Ⅰ-1~2
中平	SZ10	11.2	9.8	109.8	元屋敷Ⅰ-1~2
中平	SZ11	11.9	10.5	125.0	元屋敷Ⅰ-1~2
中平	SZ12	4.9	5.6	27.4	元屋敷Ⅰ-1~2
大平	SZ01	8.4	—	(70.6)	元屋敷Ⅰ-1~2
恒武西宮	SZ01	12.0	—	(144)	元屋敷Ⅱ-1

四辺の規模が明らかでない事例の面積は一辺の数値を復元的に用いて算出し、パーレンに示した

跡は方形周溝墓の構築数が非常に多いことがうかがえる。

北神宮寺遺跡ではSZ16が10.0×9.5mの規模で最大である。また、SZ27も9.1×10.5mとほぼ同程度の規模をもつ。遺存状態や調査区の制約から、正確な大きさがうかがえないが、同規模の方形周溝墓はSZ13・19などにも想定でき、一辺10mほどの大きさが北神宮寺遺跡における方形周溝墓の最大規模であったと想定できる。いっぽう、最も小型の方形周溝墓としては、一辺5.5mのSZ29があげられる。北神宮寺遺跡における元屋敷式期の方形周溝墓の規模は、一辺5.5m程度の規模を最小に、一辺10m程度が上限であることがうかがえる。

市内各地の元屋敷式期の方形周溝墓では、中平遺跡SZ11や恒武西宮遺跡SZ01が一辺12m程度で最大規模である。この他の事例においては、一辺が5mから10m程度の大きさにほぼおさまる。これらの事例と比較すると、神宮寺遺跡における方形周溝墓の規模は、標準的であることが分かる。竪穴建物群の評価で得られた結論と同様に、北神宮寺遺跡の方形周溝墓の様相においても、等質的な被葬者集団が想定できるだろう。

掘立柱建物の欠落 北神宮寺遺跡は、標準的な大きさの竪穴建物を主体にしているが、掘立柱建物がみられないという特徴がある。掘立柱建物は、調査時においてその存在に留意し、検出に努めたが、竪穴建物群と同時期のものは全く確認できなかった。坊ヶ跡遺跡では、120棟の竪穴建物にたいして、掘立柱建物は50棟あり、掘立柱建物は集落において欠かせない建物であったことが確実である。坊ヶ跡遺跡の集落構造の分析においては、竪穴建物2~3棟に掘立柱建物2棟程度が伴う一つの居住単位を抽出し（鈴木2004）、学史的に「単位集団」（近藤1959）や「世帯共同体」（都出1989）と呼ばれるものと同質の内容を読み取った。

いっぽう、北神宮寺遺跡においては掘立柱建物が存在しない。居住単位の建物構成を捉えるなら、

実施した天白遺跡の試掘調査によって、調査対象地の北側100mほどまで、方形周溝墓群が展開していることが明らかにされている。北神宮寺遺跡から天白遺跡までの間、遺構が途切れているか否かは不明確であるが、相当数の方形周溝墓が構築されていたことは間違いない。元屋敷式期の集落に伴う方形周溝墓は、従来、構築数が減少傾向にあるとみられていた。120棟の竪穴建物が確認できた坊ヶ跡遺跡では4基の方形周溝墓が、165棟の竪穴建物が確認できた中平遺跡でも10基の方形周溝墓がみられる程度である。大平遺跡や恒武西宮遺跡では単独立地傾向が強い方形周溝墓がそれぞれ1基ずつ確認できるにすぎない。こうした同時代の各遺跡と比べると、北神宮寺遺

掘立柱建物を倉庫とみるのが通例であろうが、北神宮寺遺跡では、掘立柱建物を専用の貯蔵用建物として使用していなかったことが分かる。竪穴建物内に貯蔵施設が備わっていたか、遺構として検出しにくい施設を貯蔵用に使用していたとみられる。

集落を広域に調査しているにもかかわらず、掘立柱建物が検出されない遺跡として、天竜川平野北部の東原遺跡があげられる。東原遺跡は、置石炉の様相においても北神宮寺遺跡との共通性が認められた。掘立柱建物を構築しない集落景観がどの程度普遍的であるのか、なお検討を深める必要がある。都田川流域の集落構造にかんしては未だ不明瞭な点が多く、現時点では踏み込んだ議論が難しい。ここでは、都田川流域から天竜川平野北部にかけて、掘立柱建物を構築しない大規模集落が存在することを確認し、当地域の特性の一つにあげうる可能性を指摘しておきたい。

なお、北神宮寺遺跡の元屋敷式期集落における掘立柱建物の欠落を捉える上で考慮しなくてはならないのは、北岡大塚古墳や馬場平古墳といった前方後円（方）墳を構築する首長層の存在である。北神宮寺遺跡の遺構群には、首長層の居住空間は含まれない。井伊谷盆地の別の地に首長層の居館が築かれたとみてよいだろう。未検出の首長居館に大規模な倉庫群があり、北神宮寺遺跡の集落がかかわる貯蔵物も共同体の管理を離れ、首長居館の倉庫群に納められていたとの想定もしうる。

特徴的な遺物 北神宮寺遺跡から出土する遺物は、土器がほとんどである。これら出土遺物は元屋敷式の構成要素として一般的であるが、元屋敷Ⅰ式期を中心に近畿地方中枢部との関連が見い出せる遺物が出土している。

タタキ技法をもつ甕や鉢は畿内V様式系の甕（Fig.159-3、SB12出土）をはじめ、Fig.159-2（SX01出土）やFig.113-466（SP301出土）などにみられ、北神宮寺遺跡では比較的目的立つ。北神宮寺遺跡とは神宮寺川を挟んだ隣接地にある矢畑遺跡では庄内式系統の甕（Fig.159-4）が出土している。Fig.102-308（SZ20出土）のような有孔鉢も近畿中枢部との関連を示す遺物といえるだろう。有孔鉢の完形品は、矢畑遺跡にも出土例がある。

近畿地方中枢部との関連が強い遺物としてSB20から出土した籠目土器（Fig.159-1、SB20出土）も注目できる。籠目土器は、庄内式期の近畿地方中枢部で出現したとみられ、布留式期の古相期まで存続している。分布は奈良県・京都府・大阪府に集中するが、日本列島中央部の広域に拡散しており、

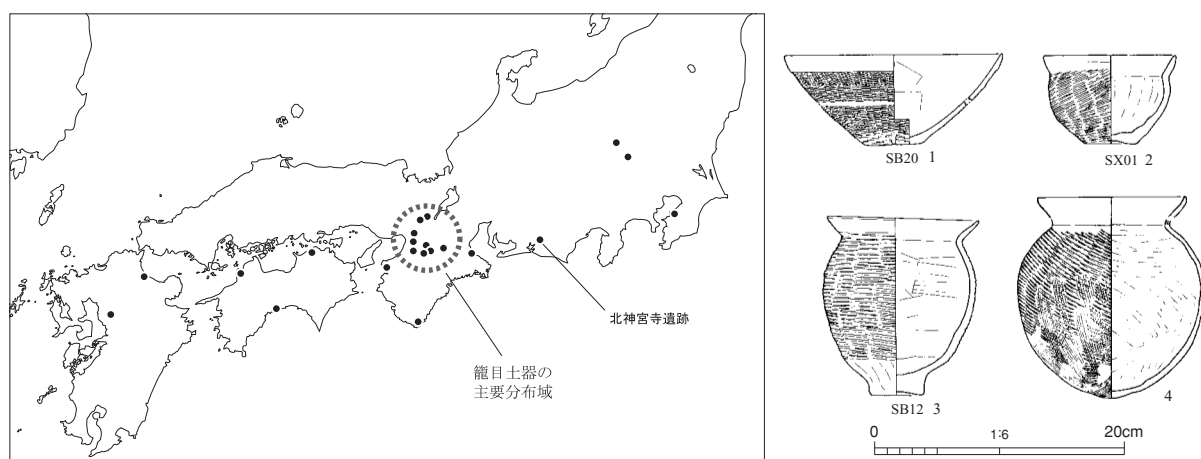


Fig.158 籠目土器の分布
(角南 1999 をもとに改変)

Fig.159 畿内系土器
(1～3:北神宮寺 4:矢畑)

1 北神宮寺遺跡における古墳時代前期の集落構造

東は群馬県や千葉県、西は福岡県や熊本県まで出土例が認められる。器形は壺と鉢がみられるが、北神宮寺遺跡例のような鉢形を呈するものが多い。籠目土器には、井戸や祭祀遺構から出土するものがあり、祭祀に使われた特殊な遺物であることがうかがえる（鐘方・角南1998、角南1999）。北神宮寺遺跡SB20の出土状態からは籠目土器の特殊な使用状況は認められなかったが、近畿地方中枢部との関係を示す遺物として評価してよいだろう。

北神宮寺遺跡における土器様式は、伊勢湾沿岸地域と連動した在来的な変動がうかがえるいっぽうで、外部からの直接的な影響という点では、近畿地方中枢部との関連も強いという特徴がある。こうした出土遺物からみられる情報交流網こそが、井伊谷盆地に突如として出現した集落の特質を象徴するものといえるだろう。

(5) 地域史における北神宮寺遺跡の位置づけ

北神宮寺遺跡における集落の特徴について、検出遺構、出土遺物の双方から分析を加えた。最後に西遠江地域の集落の消長を素描し、前方後円（方）墳などの首長墓の動向と合わせて整理しておきたい。

元屋敷式期における西遠江の集落の消長と前期の首長墓系譜をFig.161に示す。この図からも明らか



Fig.160 西遠江における前・中期古墳と主要集落の位置

かなように、元屋敷式期の集落は欠山式期から継続することは少なく、断絶が明確である。都田川下流域においても、欠山式期までは細江町域の都田川流域に地域の拠点があったとみられるが、元屋敷Ⅰ式古段階に移行すると突如として井伊谷に拠点的な集落である北神宮寺遺跡の造営が開始される。同様の特徴は、浜松市南部地域における伊場遺跡群の衰退と、坊ヶ跡・中平・大平遺跡の造営開始の現象と重なる。元屋敷Ⅰ式古段階における集落造営開始の背景としては、近畿地方中枢域との繋がりが強化されるという経済的、政治的な変動が想起できるが、浜松市南部地域の事例をもとにすると、自然環境の変化も連動していた可能性がある。浜松市南部地域の伊場遺跡群においては、元屋敷式期になると低地上の集落が一斉に規模を縮小し、広範囲に営まれていた水田も一時的に廃絶している。坊ヶ跡・中平・大平の各遺跡が台地上に営まれていることも、低地の利用に何らかの制約が加わった可能性を示唆している。都田川流域においても、浜名湖に近い最下流域の地を離れ、奥まった盆地の小高い段丘上に北神宮寺遺跡が造営されている点は、都田川下流域においても何らかの環境変化があったことをうかがわせる。

台地上に営まれた元屋敷式期における集落の存続期間は比較的短い。坊ヶ跡・中平・大平の各遺跡は、元屋敷Ⅰ式1～2段階が造営時期といえ、元屋敷Ⅰ式3段階には急速に衰退している。浜松市南部地域におけるその後の集落の様相は不明確であるが、部分的ながらも当該期の遺構群がみら

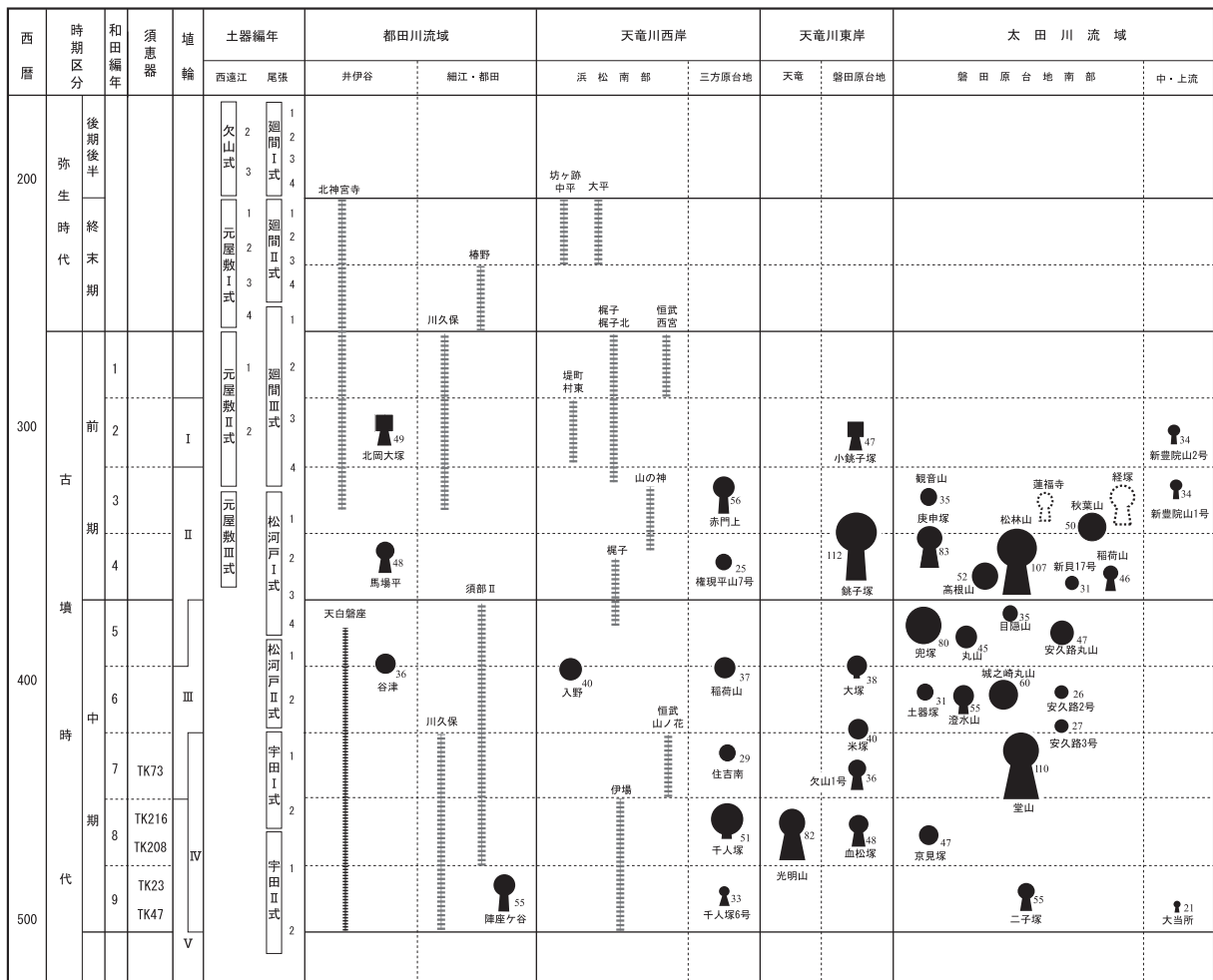


Fig.161 西遠江における前・中期古墳と主要集落の変遷

1 北神宮寺遺跡における古墳時代前期の集落構造

れることから、梶子遺跡や梶子北遺跡に中心の一つを求めてよいだろう。北神宮寺遺跡は元屋敷Ⅰ式古段階に造営を開始する集落の中では、造営期間が比較的長い。元屋敷Ⅱ式期においても広範囲に居住域として使用されていることは、当集落の安定度が高かったことを物語る。こうした安定的な一般集落の造営を基盤に、井伊谷盆地に前方後円（方）墳を築きうる首長層の成長が促されたとみられる。

井伊谷盆地に最初に築かれる首長墓、北岡大塚古墳は、全長49.5mの前方後方墳である。古墳は北神宮寺遺跡から北東に1.5kmほど離れた丘陵上に位置し、出土した二重口縁壺の特徴から、元屋敷Ⅱ式1～2段階（廻間Ⅲ式2～3段階）に築造されたとみられる。北神宮寺遺跡の集落は北岡大塚古墳の造営期より若干遡る時期に最盛期を迎えているが、この時期においても遺構形成は盛んである。北神宮寺遺跡は、北岡大塚古墳を造営した首長層の経済基盤になった集落の一つといえる。

北岡大塚古墳の造営後、前期末葉（元屋敷Ⅲ式期末もしくはその直後）には、井伊谷盆地に馬場平古墳が構築されている。馬場平古墳の造営期には、北神宮寺遺跡の集落は既に衰退している。井伊谷盆地の別の地に北神宮寺集落の後裔の集落が営まれているとみられるが、その位置については全く手がかりがない。一般的に西遠江においては、元屋敷Ⅲ式期以降の集落の様相は不明瞭である。集落規模が小さくなり、散村傾向が進むことも関連しているとみられよう。

（6）結 語

北神宮寺遺跡から出土した遺物の編年的位置づけにはじまり、集落構造の変遷、遺構の特徴を整理し、井伊谷盆地における集落形成の特質について触れてきた。北神宮寺遺跡における集落の造営は、元屋敷Ⅰ式古段階（庄内式中葉、廻間Ⅱ式1段階並行）に突如として始まり、元屋敷Ⅲ式期（松河戸Ⅰ式前半、布留Ⅱ式並行期）まで継続している。実年代では、おおむね、3世紀初頭から4世紀中葉頃に相当する。

北神宮寺遺跡にみられる竪穴建物は置石炉をもつことにあらわれているように、地域的伝統を強く引き継いでいるとみられる。また、竪穴建物や方形周溝墓の規模も標準的であることから、北神宮寺遺跡の集落は、階層的にも等質的な一般集落と評価できる。

いっぽうで、集落の造営期間は比較的長期間におよんでいることは特筆できる。古墳時代の方形周溝墓はおそらく近隣地域でも随一の構築数を誇るとみられよう。また、元屋敷Ⅰ式期を中心に、出土遺物には近畿地方中枢部との関連がうかがえ、広域情報交流網の中に北神宮寺遺跡の集落も組み込まれていたことが分かる。広域交流網をもった安定的な集落経営を経済的な基盤として、井伊谷盆地における首長層の成長が促され、元屋敷Ⅱ式期には全長49.5mの前方後方墳、北岡大塚古墳が構築されるに至る。北岡大塚古墳の被葬者が営んだ首長居館の所在地は不明であるが、井伊谷盆地に遺存している可能性が高い。井伊谷盆地に眠る遺跡の情報量は多く、今後の調査にかかる期待も大きいといえるだろう。

2 北神宮寺遺跡における中近世の遺構について

(1) はじめに

北神宮寺遺跡では、戦国時代（15世紀後葉）から江戸時代にわたる遺構群が広域に検出できた。戦国時代から、北神宮寺遺跡は居住域として使用されているが、かわらけや土錘を埋納した小穴や、土坑墓も築かれている。ここでは、これら中近世の遺物と遺構について触れておきたい。

(2) かわらけの特徴

かわらけの変遷 かわらけの変遷について、かつて整理したもの（鈴木2002b）を基礎に、井伊谷盆地の様相について検討しておく。時期が明確なかわらけが出土した遺構として、SK75（13世紀後葉）、SD141、SH01・09（15世紀後葉）、SK180・181・195（17世紀前半～中葉）、SE02、SK106（18世紀後葉～19世紀前葉）があげられる。これらの資料と北神宮寺遺跡に隣接する矢畑遺跡（静文研2008）の出土品の比較によって、井伊谷盆地におけるかわらけの変遷が素描できる（Fig.162）。

かわらけは、製作技法から、非ロクロ成形品とロクロ成形品に分けることができる。非ロクロ成形品は13世紀後葉以降、普遍的にみられるが、ロクロ成形品は、15世紀後葉までの資料は数が限られる。非ロクロ成形品は、底部と口縁部の屈曲が明瞭で、口縁のヨコナデ調整が丁寧なもの（非ロクロ成形A類）と、底部と口縁部の屈曲が不明瞭で、口縁形状が整わず、指頭圧痕を顕著に残すもの（非ロクロ成形B類）の二者に分けられる。非ロクロ成形A類は口径12cm以上の大型のものが多く、非ロクロ成形B類は口径12cm未満の小型のものが多い傾向がある。

13世紀後葉の資料は限定的だが、非ロクロ成形のA類とB類の双方が認められる。非ロクロ成形

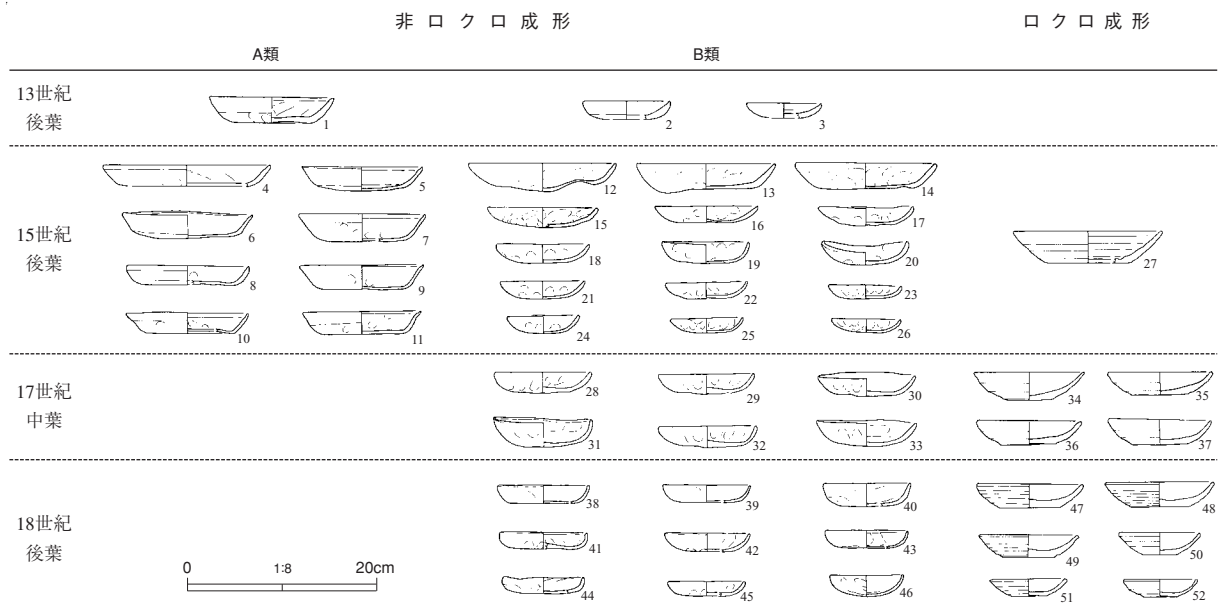


Fig.162 北神宮寺遺跡におけるかわらけの変遷

1～3：SK75 4：SH01 5・12～14：矢畑SD01 6～11・15～26：SD141 27：SH09
28～30：SK180 31・32：SK181 33～37：SK195 38～46：SE01 47～52：SK106

2 北神宮寺遺跡における中近世の遺構について

A類は、口径13cm程度のもので、15世紀のものとは比べると器壁が厚い。非ロクロ成形B類は口径約10cmと約8cmのものがあり、大きさの差が意識されている可能性がある。

15世紀後葉の資料は充実している。非ロクロ成形A類は直径18cmをこえるものがあり、大きさに幅がある。非ロクロ成形A類の中で最も数が多いのは、口径12.5～13.5cm程度のもので、形態的にもまとまりがみられる。非ロクロ成形B類にかんしても、矢畑遺跡SD01出土遺物には14.0～15.7cm程度の大型品があり、SD141出土品においても口径7.4～11.0cm程度の幅がある。この時期の非ロクロ成形品は、形態差が顕著といえるだろう。北神宮寺遺跡においては、この時期のロクロ成形品は数が少ないが、浜松市南区域山遺跡（浜文協1995）の出土例を参考にすると、ロクロ成形品も形態差が著しいことが分かる。こうした形態差の傾向は市内の類例を参考にすると、16世紀前半まで続くと考えられる。

16世紀後半から17世紀初頭頃になると、著しく口径が大きいものや、小さいものが減少する。北神宮寺遺跡では、この段階の良好な資料が知られないが、浜松市東区恒武西宮遺跡（浜文協2002）や浜松市南区海東遺跡（浜松市教委2001）の内容を参考にすると、非ロクロ成形品は口径10～12cmほどの大きさに、ロクロ成形品も12～13cmほどの大きさに収斂する傾向が認められる（鈴木2002）。

17世紀中葉には、非ロクロ成形品、ロクロ成形品の双方ともに、口径の縮小化が進行する。非ロ

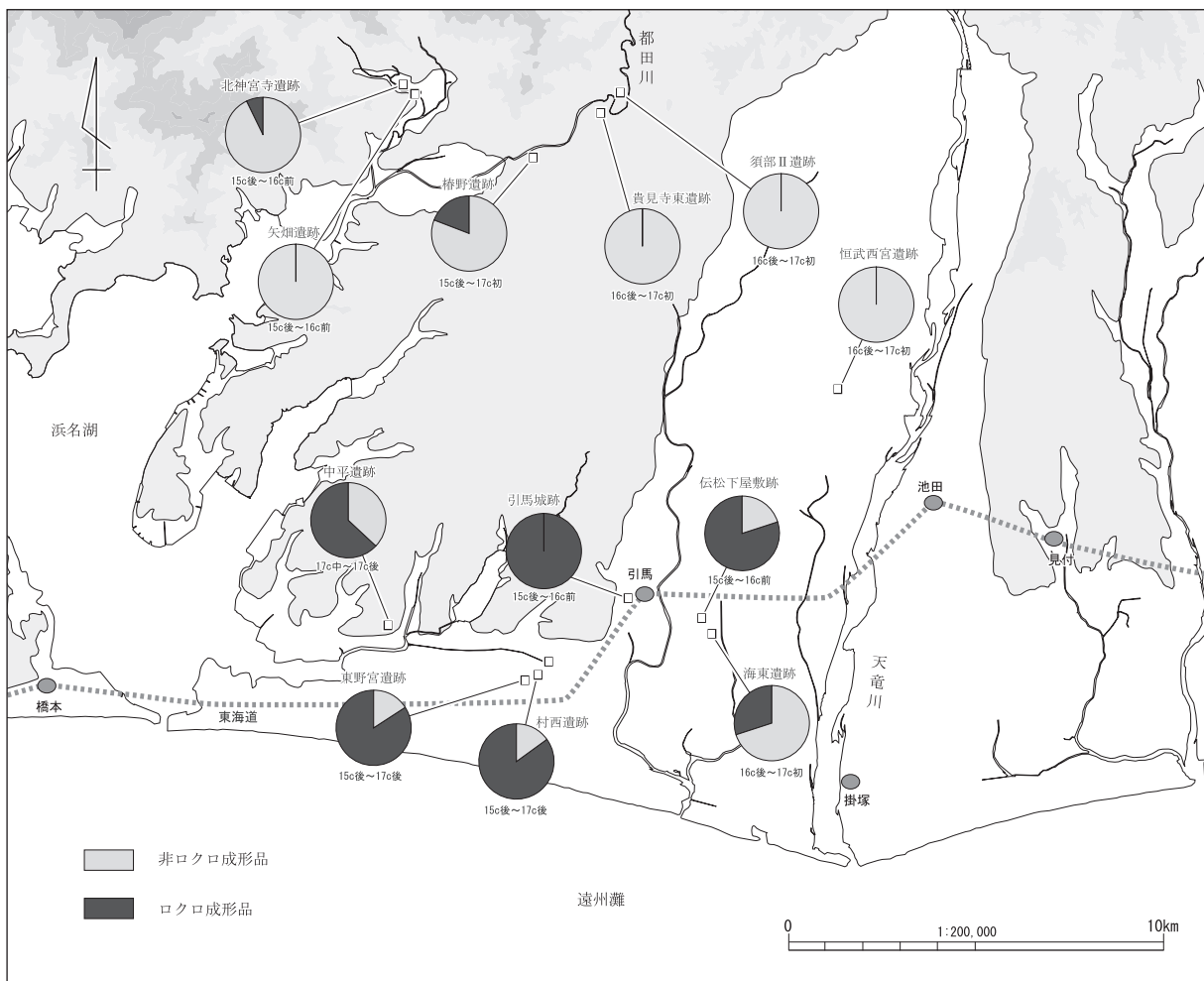


Fig.163 浜松市内におけるかわらけの分布

クロ成形品は、A類が姿を消し、B類のみがみられる。非ロクロ成形品は、口径10cm程度のもので統一され、ロクロ成形品も12cm程度のもので占められるようになる。こうした傾向は、浜松市西区中平遺跡（浜松市教委1982）の出土品とも一致する。

18世紀後葉には、かわらけの口径差が再びみられるようになる。非ロクロ成形品は、口径8～10cm程度の幅が認められる。ロクロ成形品にかんしても、口径8～12cm程度の大きさの違いがある。18世紀以降の出土例は数が限定されるため、大きさの違いが再びみられる傾向が普遍的であるのか、他の事例を含めて検証を進める必要がある。

かわらけの分布圏 北神宮寺遺跡で出土したかわらけは、非ロクロ成形品が圧倒的に多く、ロクロ成形品は限定的である。こうした成形技法の差には、地域性と遺跡の性格の違いが読み取れることをかつて指摘した（鈴木2002b）。すなわち、ロクロ成形のかわらけは、引馬城や城山遺跡、伝松屋敷跡など、軍事・政治勢力の拠点において出土量が卓越する傾向がある。また、これらの拠点到程近い浜松市南部の集落遺跡においても、ロクロ成形品が数多く出土する。

いっぽうで、恒武西宮遺跡といった天竜川平野の集落や、都田川流域の集落遺跡では非ロクロ成形品が多い点が留意されてきた。この差異は、比較する時期差に起因する可能性があったが、北神宮寺遺跡の事例によって、15世紀後葉の時期まで遡ることが明確になった。

15世紀後葉から18世紀にかけて、北神宮寺遺跡の集落で主体的に用いられていたのは非ロクロ成形のかわらけであるが、ロクロ成形のかわらけが土坑墓を中心に、集中的に出土する事例がある。土坑墓SK106・195が該当し、SK106には7点、SK195には4点のロクロ成形のかわらけがまとまって出土した。これ以外の土坑墓から出土するかわらけはすべて非ロクロ成形品であることから、これらの土坑墓の被葬者もしくは、墓を築いた親族がロクロ成形品を用いる地域と関係をもっていたことが想定できる。その有力な候補地としては、浜松市南部地域を想定しておきたい。

（3）土坑墓と川辺の特性

土坑墓の特徴 調査区の全域で、江戸時代の土坑墓16基を確認した。土坑墓は、屋敷地の中もしくは近辺に築かれているが、川辺を墓域とみだてていたものも認められる。築造時期は17世紀中葉から18世紀後葉とみられる。以下、その内容について、検討を加えておきたい。

副葬品の特徴 土坑墓にはかわらけと銭貨が出土するものがある。ほぼすべての土坑墓において、かわらけを副葬するとみられよう。副葬されるかわらけの枚数は、1枚から7枚までの差異があり、副葬枚数の違いに有意な傾向を見出すことは難しい。副葬されるかわらけは、非ロクロ成形品が主体であるが、ロクロ成形品が集中的に出土した土坑が2基（SK106・195）ある。先述のとおり、被葬者ないしは親族にロクロ成形品を用いる地域（例えば浜松市南部地域）とのつながりがあった可能性がある。

銭貨を副葬する土坑墓は、16基中7基である。副葬枚数は6枚である場合と1枚である場合がある。出土銭貨は中国銭（北宋銭）と寛永通宝がある。寛永通宝には铸造時期が違うものが知られ、土坑墓の年代をうかがう材料となる。

築造時期 かわらけは形態変化が顕著でなく、編年的位置づけを明確にする資料としては扱いが

2 北神宮寺遺跡における中近世の遺構について

難しい。これにたいして、銭貨は铸造年代が明確で、土坑墓の造営時期を決める資料として有効である。副葬品として用いられた銭貨は、中国銭（北宋銭）と寛永通宝である。中国銭は、SK195から出土した至道元寶（北宋、初鑄995年）、およびSK180から出土した熙寧元寶（北宋、初鑄1068年）の2種が認められる。

寛永通宝には铸造年代が異なるものが知られるが、北神宮寺遺跡で確認できるのは、①古寛永、②新寛永（文銭）、③寛永通宝（四文銭）の3種である。それぞれ铸造年代は、①1636年～1659年、②1668年～1688年、③1768年以降、である。

出土銭貨の組み合わせから土坑墓の副葬品は、次の3時期に分離できる。

1期	中国銭+古寛永、古寛永のみ	17世紀中葉
2期	新寛永（文銭）	17世紀後葉
3期	寛永通宝（四文銭）	18世紀後葉

1期（17世紀中葉）に相当するのがSK147・180・181・195である。2期（17世紀後葉）に相当するのがSK133、3期（18世紀後葉）に相当するのがSK106である。

1期の土坑墓には銭貨を6枚入れるのが通例であることにたいし、2期、3期では1枚しか用いていないという特徴がある。こうした副葬銭貨数の変遷は、中平遺跡（浜松市教委1982）においても認められる。中平遺跡では、出土銭貨の傾向から、1) 中国銭のみが出土するもの、2) 中国銭と寛永通宝が共伴するもの、3) 寛永通宝のみが出土するもの、の三者が認められた。1) は、北神宮寺遺跡1期より遡る可能性があり、2) と3) の一部が北神宮寺遺跡1期に併行するとみられる。中平遺跡の土坑墓においても銭貨の副葬がみられるが、6枚を用いる規範は、1) にしかみられない。土坑墓に6枚の銭貨を副葬する行為は、17世紀前葉～中葉の段階に主にみられ、それ以降は、副葬枚数にかかわる規範が弛緩していったとみられよう。

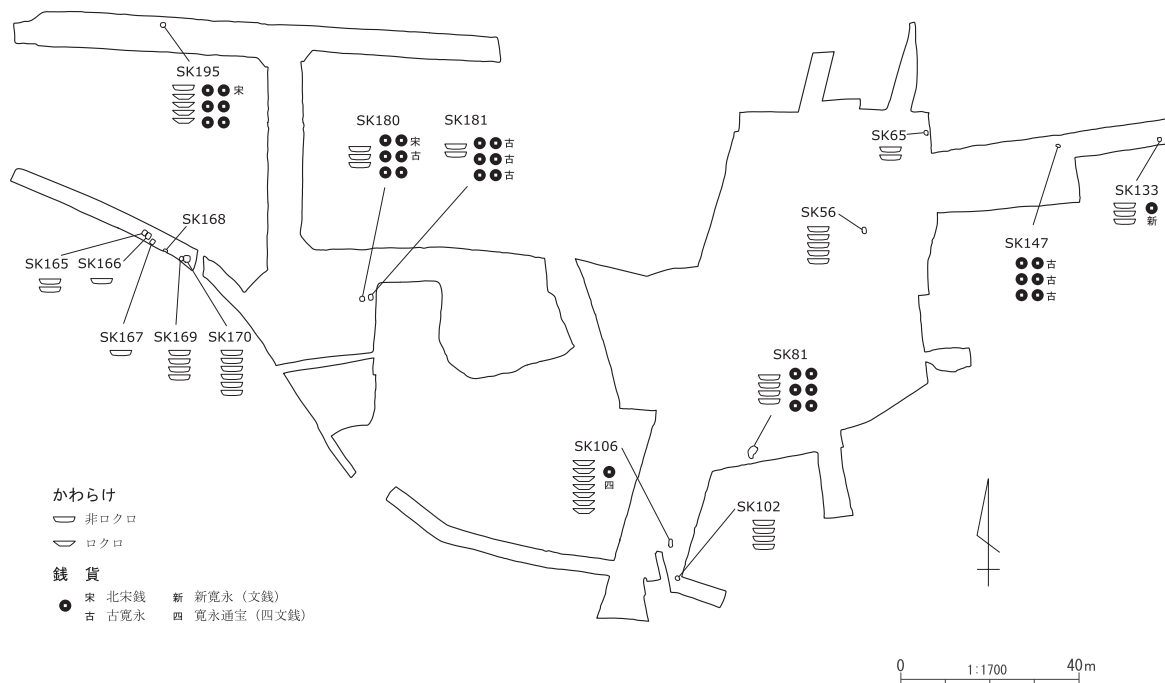


Fig.164 江戸時代土坑墓の副葬品

川辺の特性 土坑墓は散在傾向がみられるが、川辺を墓域とみだてていたものも認められる。SK165～170の6基の土坑墓が神宮寺川を眼下に望む段丘の縁に並んでおり、この地は墓地と考えられる。同じく神宮寺川を望む川辺に構築された特異な遺構として、かわらけを埋納したSP533・536・537や、土錘をまとめて埋納したSP539・827、羽付釜を埋納したSP541がある。いずれも戦国時代（15世紀後葉～16世紀前葉）の遺構とみられるが、川辺を祭祀儀礼の場として使い、土器や土錘を埋納したものと捉えられる。

神宮寺川沿いの川辺の地は、現代においても盂蘭盆会や施餓鬼の儀礼が行われている。川辺の段丘縁部は、戦国時代の儀礼に伴う埋納行為にはじまり、江戸時代には墓地として使用され、現代においても儀礼の地として用いられている。15世紀後葉にはじまり現代に至る諸行為には、異界との交信を可能にする境界域という、川辺に共通する空間認識が根底にあるとみられよう。

(4) 屋敷地の形成と近世集落

屋敷地の形成 北神宮寺遺跡に構築された戦国時代の集落は、SH01・09といった掘立柱建物を中心に区画溝SD141などを備え、15世紀後葉に造営が開始された。同時期の集落は、神宮寺川を挟んだ対岸の矢畑遺跡でも検出されており、15世紀後葉が集落の最盛期であったとみられる。この時期の集落には、江戸時代にも使用が続けられる区画溝も設けられ、屋敷地の区画が出現していた可能性が高い。とくに、SD93～95、SD101・101といった区画溝は戦国時代の遺物が集中的に出土しており、出土遺物から同時代性がうかがえる。また、SD14・15にかんしても、溝の設定方向が掘立柱建物SH01と一致しており、その前身は戦国時代にまで遡るとみてよいだろう。

地域開発の特性 筆者は浜松市内の中世遺跡で検出された区画溝のあり方を集落形成の構造的問

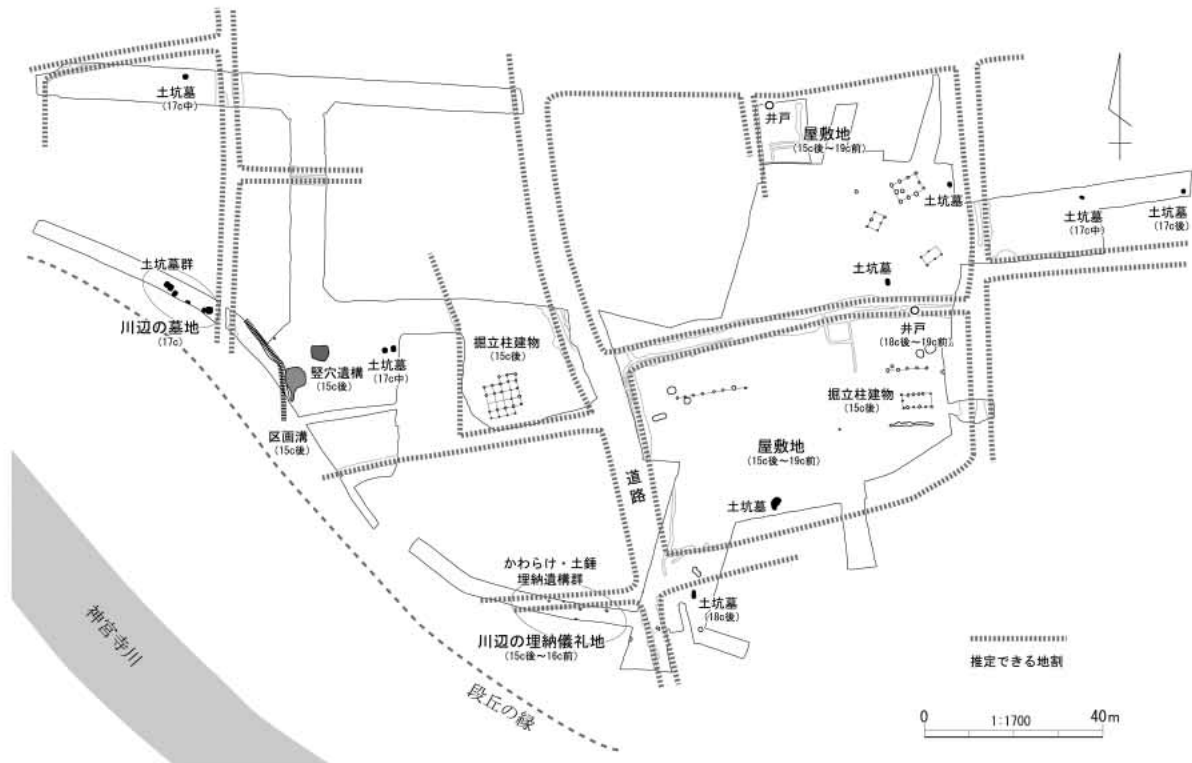


Fig.165 集落景観の復元

題にかかわるものと捉え、集落形態を前山タイプ、山の神タイプ、恒武西宮タイプとして類型化を行った（鈴木2001）。

北神宮寺遺跡の区画溝には、設定方向に方形区画などの計画性を認めにくく、先の恒武西宮タイプに相当する。屋敷や耕作地の大きさに合わせて自由発展的に設定された地割が反映されているとみられ、公的強制力が地域開発の根底から払拭されつつあった時代背景を反映している。出土遺物に含まれるかわらけについても、非ロクロ成形品が主体であり、そこに強い政治的強制力をうかがうことは難しい。

自由発展的な地割にみられる集落形成は、耕作者層の自立傾向が強かったことを意味し、集落内の地割については在地領主層の影響力は相対的に低いものと捉えられる。北神宮寺遺跡にみられる区画溝は、姿を若干変えながらも、多くの地割が現在に至るまで踏襲されていた。基本的な地割は、その設定時に政治的強制力が少なかったからこそ、地域の中で共通に認識され、数百年の命脈を保てたものとみられる。

北神宮寺遺跡における区画溝の設定は15世紀後葉に遡り、近世から現代に至るまでその地割が引き継がれていることが明らかになった。北神宮寺遺跡の中近世の遺構は、井伊谷盆地における集落景観を伝える典型として、貴重な事例といえるだろう。

（5）結 語

北神宮寺遺跡における中近世の遺構と遺物について、その特徴について触れてきた。都田川流域における、かわらけの様相や変遷が一遺跡の出土品から明確になった意義は大きい。また、土坑墓から出土する副葬品の傾向がうかがえたことも重要な成果といえる。川辺の埋納遺構や墓地については、北神宮寺遺跡の立地環境の特性といえ、今後の類例検討が期待できる。

15世紀後葉の集落は掘立柱建物を用い、区画溝も短期間に廃絶されたものがあるため、比較的その構造がうかがえた。いっぽうで、17世紀以降の集落は、区画溝のあり方から、その内容を推定することしかできず、土地利用の具体像については不明な点が多い。施釉陶器など、江戸時代の出土遺物にかんしては分析が十分でないことも課題である。とはいえ、現代までつながる集落の起源が15世紀後葉に遡り、その地割から中近世集落の特性を読み取ることができことは、注目すべき成果といえる。

第4章 総括

北神宮寺遺跡の調査は、5年間におよぶ発掘調査と4年間にわたり断続的に実施した整理作業を経て、ここに完了した。その成果は多岐にわたるが、さいごに報告の内容を要約するとともに、考察で明らかにされた内容を総合し、今後の展望を示したい。

1 発掘調査の成果

旧石器時代 包含層中から、後期旧石器時代（約2万5千年前から1万5千年前）の彫器が出土した。旧石器時代の遺構は未検出であるが、井伊谷盆地における人びとの生活の始まりを示す資料として貴重である。

縄文時代 縄文時代中期初頭から後期初頭（約5千年前から4千年前）の集落を確認した。検出遺構は少ないが、縄文土器や石鏃、打製石斧、石錘などが豊富に出土した。各時期の型式の土器が平均的にみられることから、北神宮寺における縄文時代の集落は、安定的に推移していたとみられる。また、出土する石器の傾向も縄文時代中期に特徴的なもので、石棒などの祭祀系遺物が含まれる点が注目できる。北神宮寺遺跡は、井伊谷盆地における拠点的な縄文集落と評価できる。

なお、北神宮寺遺跡は従来、縄文時代の遺跡として広く知られていたが、発掘調査では、住居などの遺構は検出できなかった。縄文時代の遺構は比較的浅いことに加え、後の時代における土地利用が活発で縄文時代の遺構が破壊されてしまった可能性がその原因として考えられる。

弥生時代 弥生時代中期前葉（前3～2世紀頃）の土器が僅かに出土した。小規模な集落があった可能性がある。さらに調査地区の全域で、弥生時代中期末葉（紀元前後頃）の集落を確認した。検出した主な遺構は、竪穴建物2棟、方形周溝墓15基である。

竪穴建物は隅丸長方形を呈するもので、同時代の住居として一般的な形態である。方形周溝墓は四隅が途切れる形態が基本であるが、変異形態も多い。周溝を共有するものや、周溝の一辺を浅く掘削したものなどがあり、築造順序がうかがえるものがある。やや大型の方形周溝墓を中心に、規模を小型化させながら数基の周溝墓が隣接して構築されている。また、方形周溝墓の裾には、土器棺墓が営まれる事例も認められた。

方形周溝墓の周溝からは、供献用土器が転落した状態で出土した。供献土器は壺を主体とするが、甕の小型模造品など、特殊な遺物も若干ながら含まれる。

古墳時代 元屋敷式期（弥生時代終末期～古墳時代前期、3世紀初頭から4世紀中葉頃）の集落を調査対象地の全域で確認した。この時期の集落は連続性が高く、弥生時代と古墳時代を鮮明に分けることが難しい。このため、本書では元屋敷式期の初頭（元屋敷Ⅰ式期）以降から便宜的に古墳時代に含めた。古墳時代の集落で確認した主な遺構は、大型の土器廃棄土坑（SX01）1基、竪穴建

1 発掘調査の成果

物61棟、方形周溝墓14基である。また、同時期の土坑や小穴も多数にのぼり、北神宮寺遺跡の主体的な遺構群を構成している。

この時期の集落は、元屋敷Ⅰ式期（庄内式新相併行期）から元屋敷Ⅱ式期（布留1式併行期）に中心があり、元屋敷Ⅲ式期（布留2式併行期）に至ると急速に衰退する。住居として竪穴建物を用い、居住域に隣接して方形周溝墓群が築かれている。集落の中心部には長軸11mをこえる大型の土坑（SX01）を設け、土器などを廃棄している。竪穴建物は隅丸方形を基本に、4箇所柱穴を設け、外周には壁溝をめぐるしている。炉跡は床面にほぼ普遍的にみられるが、置石炉とされている事例もある。貯蔵穴も多くの建物で認められる。方形周溝墓は周溝が全周するか、一つの隅が途切れる形態である。

土器廃棄土坑や竪穴建物、方形周溝墓から土器が大量に出土した。これらの土器群は、元屋敷式の各段階の基準資料になりうるものが含まれる。また、出土遺物には、タタキ調整をもつ土器や、籠目土器など、近畿地方中枢部との関係がうかがえる資料が含まれる。籠目土器は、完形に復元できる当該期の資料としては、東海地方で初めての出土例である。

なお、古墳時代中期末葉から後期中葉（5世紀末葉から6世紀中葉）にかけての遺物が僅かに出土した。出土遺物に伴う遺構はないが、この時期に小規模な集落が展開していた可能性が高い。

平安時代 平安時代の中頃（10世紀前半）に形成された灰釉陶器埋納遺構（SX07）を検出した。遺構の性格は不明瞭ながら、地鎮などの祭祀行為によって形成された可能性がある。このほか、僅かながら10世紀から11世紀の遺物が出土した。この中には、土師器の煮沸具が含まれることから、小規模ながら集落が展開していた可能性が高い。

鎌倉時代 鎌倉時代の後葉（13世紀後半）の土坑墓1基、竪穴状遺構1基、小穴数基を確認した。小規模な集落があったものと考えられる。土坑墓は、山皿4点に短刀を副葬したものである。短刀を副葬した土坑墓は少なく、被葬者にある程度の有力者が想定できる。

戦国時代 調査区の全域で、戦国時代前半（15世紀後葉）に造営が開始された集落を確認した。確認できた遺構としては、掘立柱建物8棟、柵列3列、竪穴状遺構2基があり、かわらけや土錘を集中的に埋納した遺構も多数みられる。高位面に築かれた掘立柱建物SH09は、桁行4間、梁行3間の身舎に庇や張り出し部分が伴う大型の総柱建物である。

遺物が豊富に出土した遺構として、区画溝SD141がある。溝内からは、内耳鍋や羽付釜、かわらけ、古瀬戸の施釉陶器などが出土した。15世紀後葉の一括資料として注目できる。また、神宮寺川に近い段丘の縁からは、かわらけや土錘を集中的に埋納した小穴が確認できた。何らかの祭祀に伴い、供物を川辺に埋めていた可能性がある。

なお、戦国時代に造営が開始された集落は、その後も江戸時代に引き継がれ、現代に繋がるものと捉えられる。

江戸時代 江戸時代（17世紀から19世紀）の屋敷地を調査区の全域で確認した。検出した遺構は、区画溝と、それに伴う井戸や土坑、および土坑墓などがあげられる。区画溝の形成時期は明確にしにくいだが、一部は戦国時代に遡る可能性があるものもみられる。これらの区画溝は屋敷地を区画し、道路の側溝を兼ねていたとみられる。江戸時代以降の区画溝は石垣で護岸されることが多く、区画

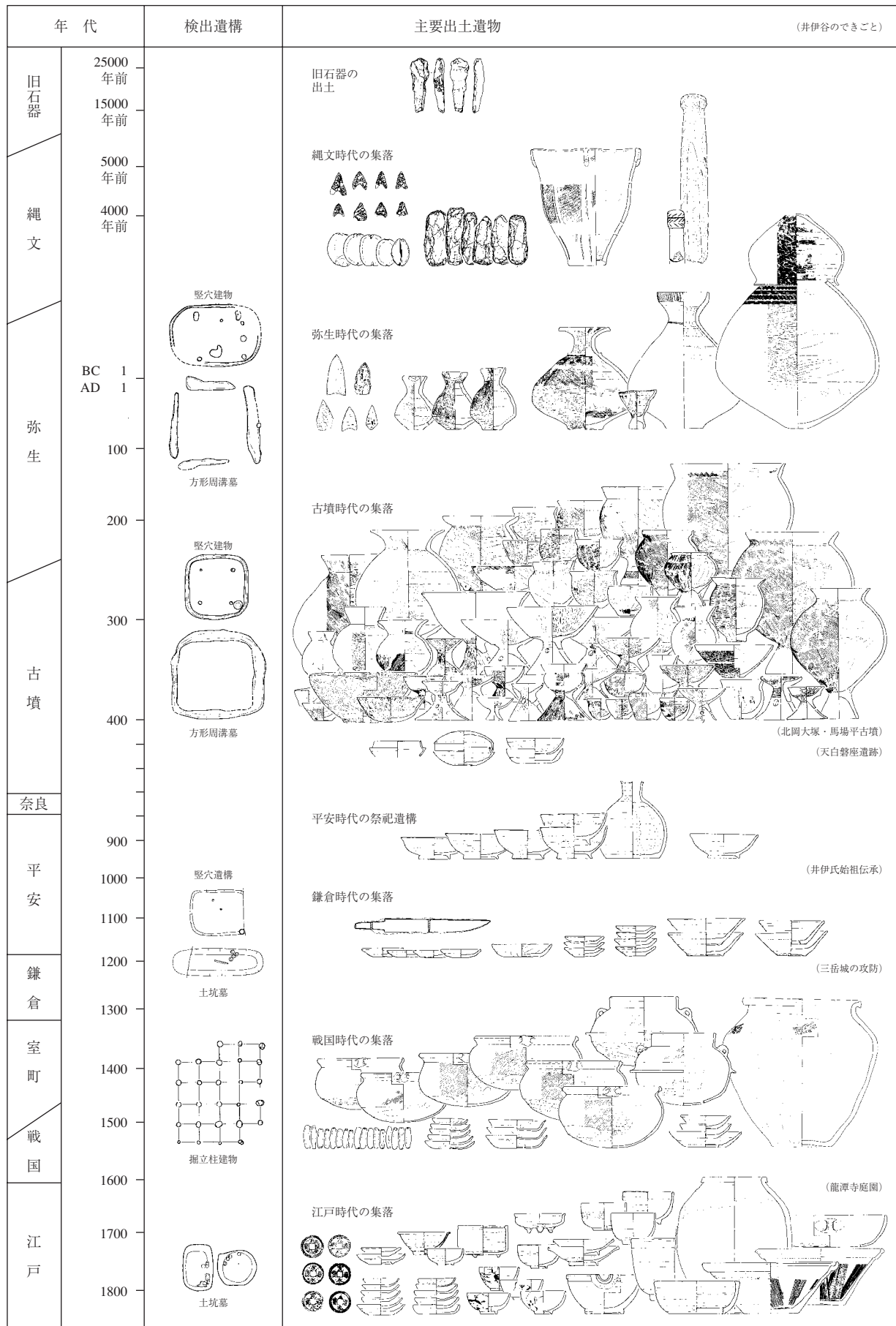


Fig.166 北神宮寺遺跡の変遷

の一部は地割として現代まで引き継がれている。

16基確認した土坑墓には、かわらけや銭貨が副葬されていた。土坑墓の分布は分散傾向があるが、神宮寺川を望む川辺に6基の土坑墓が集中しており、埋葬墓地を形成している区域もある。土坑墓の造営時期は、共伴する銭貨から、17世紀中葉から18世紀後葉におよぶとみられる。

2 特筆すべきことから

元屋敷式の編年 古墳時代の集落から、元屋敷式期の資料が大量に出土した。北神宮寺遺跡は、元屋敷Ⅰ式古段階の資料が充実しており、基準資料に加えることができる。元屋敷Ⅰ式古段階は、欠山式との親縁性の多少から、元屋敷Ⅰ式Ⅰ段階とⅡ段階に分離できる。北神宮寺遺跡の一括資料の分析においても、元屋敷Ⅰ式古段階を細分する妥当性が検証できた〔第3章1〕。

古墳時代集落の時期と構造 古墳時代の竪穴建物や方形周溝墓の規模は、他遺跡の事例と比べても突出した様相がみられない。北神宮寺遺跡の集落は、階層的にも等質的な一般集落と評価できる。また、竪穴建物には置石炉をもつこと、掘立柱建物が伴わないことなど、都田川流域から天竜川平野北部にかけての地域的伝統にあげうる要素がみられる。

集落の造営は元屋敷Ⅰ式の最古段階から元屋敷Ⅲ式期にわたり継続され、存続期間は比較的長い。当該期における集落の安定度は、近隣地域の諸遺跡と比べて突出しており、古墳時代の方形周溝墓の構築数も突出している。また、元屋敷Ⅰ式期を中心に、出土遺物には近畿地方中枢部との関連がうかがえ、広域情報交流網の中に北神宮寺遺跡の集落も組み込まれていたことが分かる。元屋敷Ⅱ式期には全長49.5mの前方後方墳、北岡大塚古墳が井伊谷に構築されており、北神宮寺遺跡の集落は、首長層の成長を促す経済的基盤になっていたと評価できる〔第3章1〕。

かわらけの地域性 戦国時代前半（15世紀後葉）の遺物が豊富に出土し、井伊谷盆地における、かわらけの様相が明確になった。北神宮寺遺跡から出土する当該期のかわらけは、ほとんどが非ロクロ成形品で占められ、製作技法の差や口径の大きさなど、多様性がみられる。

今回の調査によって、都田川流域の一般集落では、戦国時代を通じて、非ロクロ成形のかわらけを用いていることが明確になった。今後、他遺跡におけるかわらけの様相との比較検討によって、戦国時代の政治や軍事の動向と流通網が明らかにできると期待できる〔第3章2〕。

神宮寺川縁辺部の特性 神宮寺川沿いの段丘縁辺部では、戦国時代前半（15世紀後葉）の儀礼に伴う埋納行為が確認できた。埋納された遺物は、かわらけや土錘、羽付釜などである。また、この地は、江戸時代には墓地としても使用されており、現代においても盂蘭盆会や施餓鬼の儀礼が行われている。15世紀後葉にはじまり現代に至る宗教的な諸行為には、川辺の境界性に通底する空間認識が読み取れる〔第3章2〕。

近世集落の特徴 北神宮寺遺跡における区画溝の設定は15世紀後葉に遡り、近世から現代に至るまでその地割が引き継がれている。地割の設定には、自由発展的な生成経緯が読み取れ、公的な在地領主層の影響力は相対的に低かったと評価した。浜松市北部における近世集落の典型例として、北神宮寺遺跡の調査結果は貴重な事例といえる〔第3章2〕。

3 今後の展望

今回の発掘調査は、区画整理事業地内の部分的な地点に限って実施している。区画整理事業地内においては、遺跡が地中に保存される部分が多くあり、今後の発掘調査によって、北神宮寺遺跡の新たな事実が明らかになる可能性が残されている。また、区画整理事業地の外側にも、遺跡が広がるのは確実である。とくに、北側の天白遺跡は北神宮寺遺跡と一連の遺跡とみられ、遺構群の広がりを検討する上で、その情報は欠かせない。

井伊谷盆地は地形的に完結性が高く、今後の調査によって地域史の情報がさらに蓄積されると期待できる。北神宮寺遺跡の調査では奈良時代から南北朝時代にかけての様相が不明瞭であった。これら空白の時代を埋める遺跡が井伊谷盆地の別の場所に眠っている可能性がある。また、最も調査成果があがっている古墳時代にかんしても、元屋敷式期の首長居館の内容や、天白磐座遺跡と併行する古墳時代中期の集落の様相など、さらに追及すべき課題が多い。今後の井伊谷における発掘調査に大いに期待するとともに、北神宮寺遺跡の調査成果が地域史を語る資料として、多方面で活用されることを願う。

[謝 辞]

本書の作成にあたり、以下の方々の協力、教示を得た。その名を記して謝意を表したい。

井鍋誉之、大谷宏治、小泉祐紀、角南聡一郎、田村隆太郎、富樫孝志、丸杉俊一郎、向坂鋼二

[参考文献]

- 赤塚次郎 1990 「廻間式土器」『廻間遺跡』（財）愛知県埋蔵文化財センター
- 赤塚次郎 1997 「廻間Ⅰ・Ⅱ式再論」『西上免遺跡』（財）愛知県埋蔵文化財センター
- 引佐町 1991 『引佐町史』上巻
- 岩瀬彰利 1996 「縄文・弥生時代の煮炊き方法」『鍋と甕そのデザイン』東海考古学フォーラム
- 岩瀬彰利 2001 「東海地方中部における条痕文期住居の様相」『三河考古』第14号
- 鐘方正樹・角南聡一郎 1998 「籠目土器と笱形土製品」『奈良市埋蔵文化財調査センター紀要1997』
- 近藤義郎 1959 「共同体と単位集団」『考古学研究』第6巻 第1号
- 静岡県 1930 『静岡県史』第1巻
- 鈴木一有 2001 「浜松市域における中世集落の消長と地域開発」『浜松市博物館報』第14号
- 鈴木一有 2002a 「古墳時代前期にかんする諸問題」『恒武西宮遺跡』（財）浜松市文化協会
- 鈴木一有 2002b 「戦国時代にかんする諸問題」『恒武西宮遺跡』（財）浜松市文化協会
- 鈴木一有 2004 「坊ヶ跡遺跡にみる弥生・古墳移行期の集落像」『坊ヶ跡遺跡』（財）浜松市文化協会
- 鈴木敏則 2002 「西遠江の古式土師器—堤町様式—」『東海の路』平野吾郎先生還暦記念論文集
- 角南聡一郎 1999 「弥生～古墳時代前期の籠目・籠形土器」『香川考古』第7号
- 辰巳和弘 2006 『聖なる水の祀りと古代王権・天白磐座遺跡』新泉社

3 今後の展望

- 都出比呂志 1989『日本農耕社会の成立過程』岩波書店
- 土屋彦六 「遠江ニ於ケル石器時代ノ遺物」『東京人類学会雑誌』第8巻 第80号
- 寺沢 薫 1986「畿内古式土師器の編年と二・三の問題」『矢部遺跡』奈良県立橿原考古学研究所
- 豊岡卓之 1999『『纏向』土器資料の基礎的研究』『纏向（補遺編）』奈良県立橿原考古学研究所
- 中嶋郁夫 1997「東海東部の古式土師器」『静岡県史研究』第13号
- 丸杉俊一郎 2008「都田川流域における弥生時代中期の諸問題」『井通遺跡』（財）静岡県埋蔵文化財調査研究所
- 向坂鋼二 1959「遠江における古式土師器」『考古学手帳』8
- 鷺山恭平 1993「石器時代及古墳の調査」『静岡県史跡名勝天然記念物調査報告』第8集 静岡県

[発掘調査報告書]

- 引佐町教育委員会 1980『引佐町の古墳文化Ⅰ』
- 引佐町教育委員会 1981『引佐町の古墳文化Ⅱ』
- 引佐町教育委員会 1983『引佐町の古墳文化Ⅲ』
- 引佐町教育委員会 1988『引佐町の古墳文化Ⅳ』
- 引佐町教育委員会 1999『天白磐座遺跡 引佐町の古墳文化Ⅴ』
- 引佐町教育委員会 1994『引佐町の遺跡Ⅵ』
- 引佐町教育委員会 1996『北岡大塚古墳 引佐町の遺跡Ⅶ』
- 引佐町教育委員会 2004『本屋敷遺跡確認調査報告書』
- 細江町教育委員会 1993『川久保船渡遺跡』
- 浜松市教育委員会 1982『西鴨江 中平遺跡』
- 浜松市教育委員会 1982『椿野遺跡』（椿野 1982 溝上層）
- 浜松市教育委員会 1982『越前遺跡発掘調査報告書』
- 浜松市教育委員会 2009『浜松市試掘調査概要』
- 浜松市遺跡調査会 1985『椿野遺跡』
- （財）浜松市文化協会 1989『山の神遺跡』（1次調査 SK236）
- （財）浜松市文化協会 1992『佐鳴湖西岸遺跡群 本文編Ⅰ』（大平遺跡）
- （財）浜松市文化協会 1995『城山遺跡Ⅴ』
- （財）浜松市文化協会 1997『鳥居松遺跡』
- （財）浜松市文化協会 2000『須部Ⅱ遺跡』
- （財）浜松市文化協会 2002『恒武西宮遺跡』
- （財）浜松市文化協会 2004『坊ヶ跡遺跡』
- （財）浜松市文化振興財団 2009『正楽寺遺跡』
- （財）静岡県埋蔵文化財調査研究所 1984『椿野遺跡Ⅰ』（SD24）
- （財）静岡県埋蔵文化財調査研究所 1985『椿野遺跡Ⅱ』（SD121）
- （財）静岡県埋蔵文化財調査研究所 1997『山の神遺跡』（3次調査 SD201 上層）
- （財）静岡県埋蔵文化財調査研究所 2005『前岡遺跡・今城』
- （財）静岡県埋蔵文化財調査研究所 2008『矢畑遺跡』
- （財）静岡県埋蔵文化財調査研究所 2008『井通遺跡Ⅱ』

付 図

- Fig.167 北神宮寺遺跡 検出遺構全体図
- Fig.168 縄文時代 検出遺構
- Fig.169 弥生時代 検出遺構
- Fig.170 古墳時代 検出遺構
- Fig.171 平安・鎌倉時代 検出遺構
- Fig.172 戦国時代 検出遺構
- Fig.173 江戸時代 検出遺構
- Fig.174 北神宮寺遺跡 検出遺構図①
- Fig.175 北神宮寺遺跡 検出遺構図②
- Fig.176 北神宮寺遺跡 検出遺構図③
- Fig.177 北神宮寺遺跡 検出遺構図④
- Fig.178 北神宮寺遺跡 検出遺構図⑤
- Fig.179 北神宮寺遺跡 検出遺構図⑥
- Fig.180 北神宮寺遺跡 検出遺構図⑦
- Fig.181 北神宮寺遺跡 検出遺構図⑧
- Fig.182 北神宮寺遺跡 検出遺構図⑨
- Fig.183 北神宮寺遺跡 検出遺構図⑩

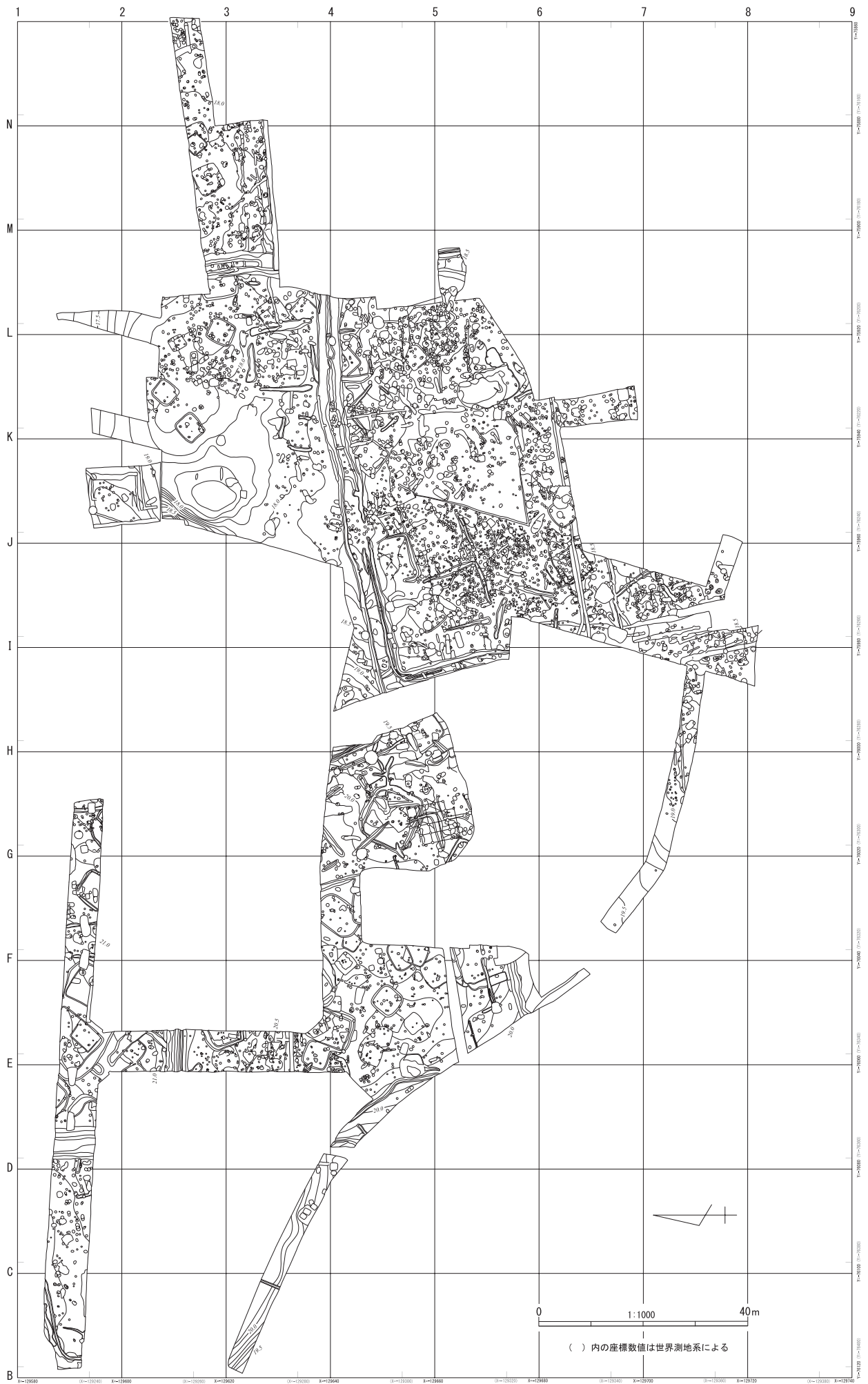


Fig.167 北神宮寺遺跡 検出遺構全体図

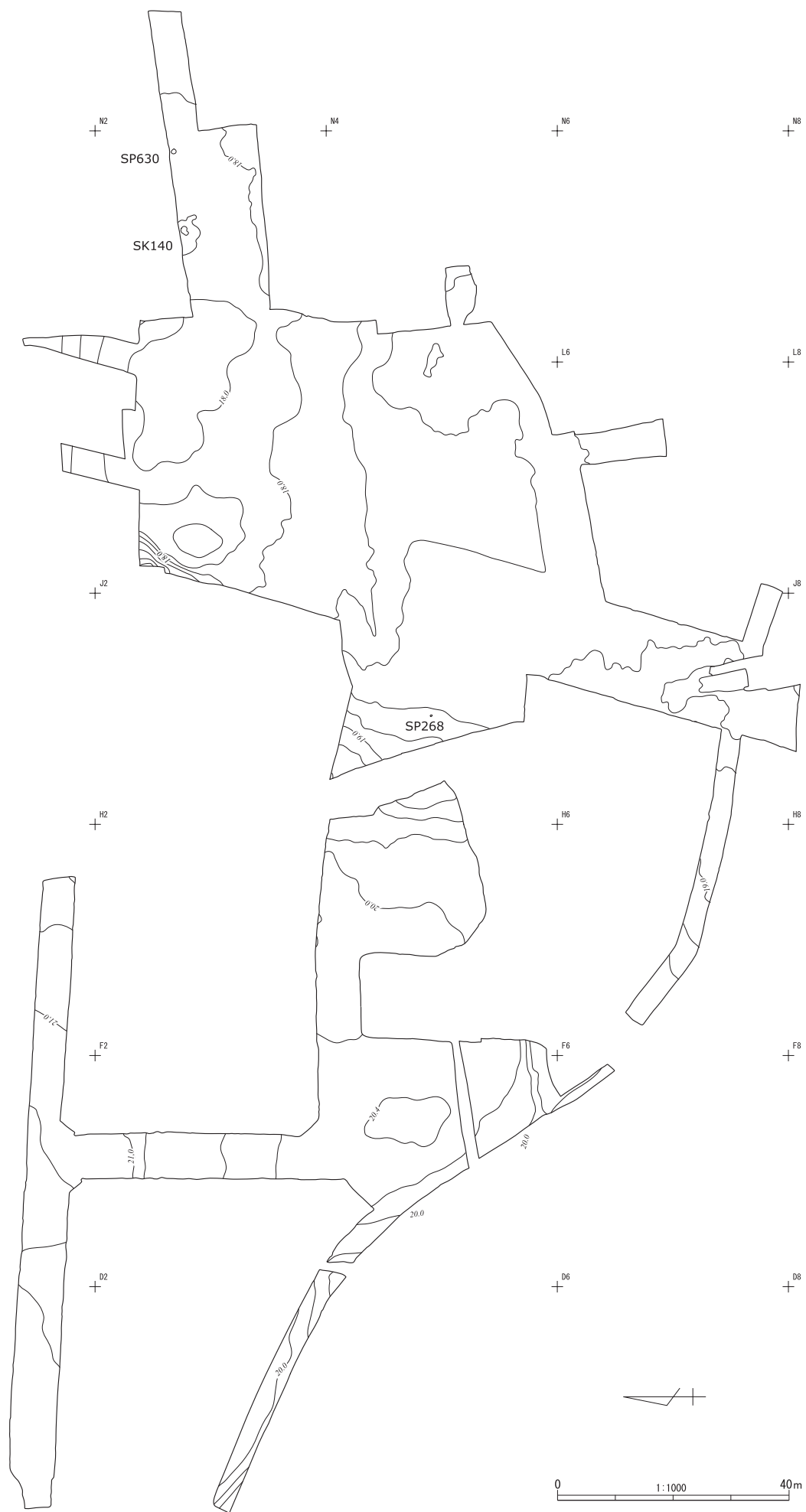


Fig.168 縄文時代 検出遺構

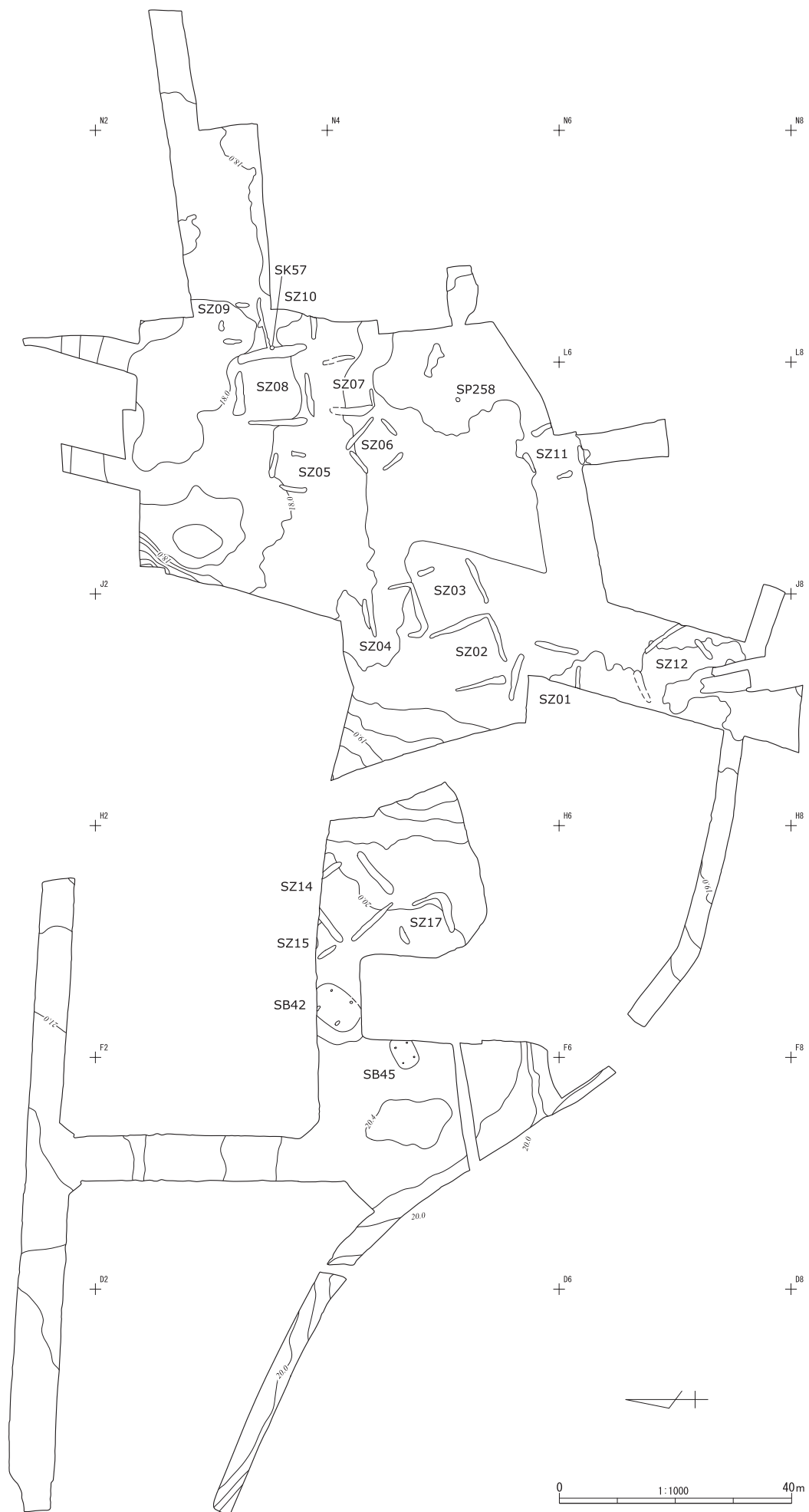


Fig.169 弥生時代 検出遺構

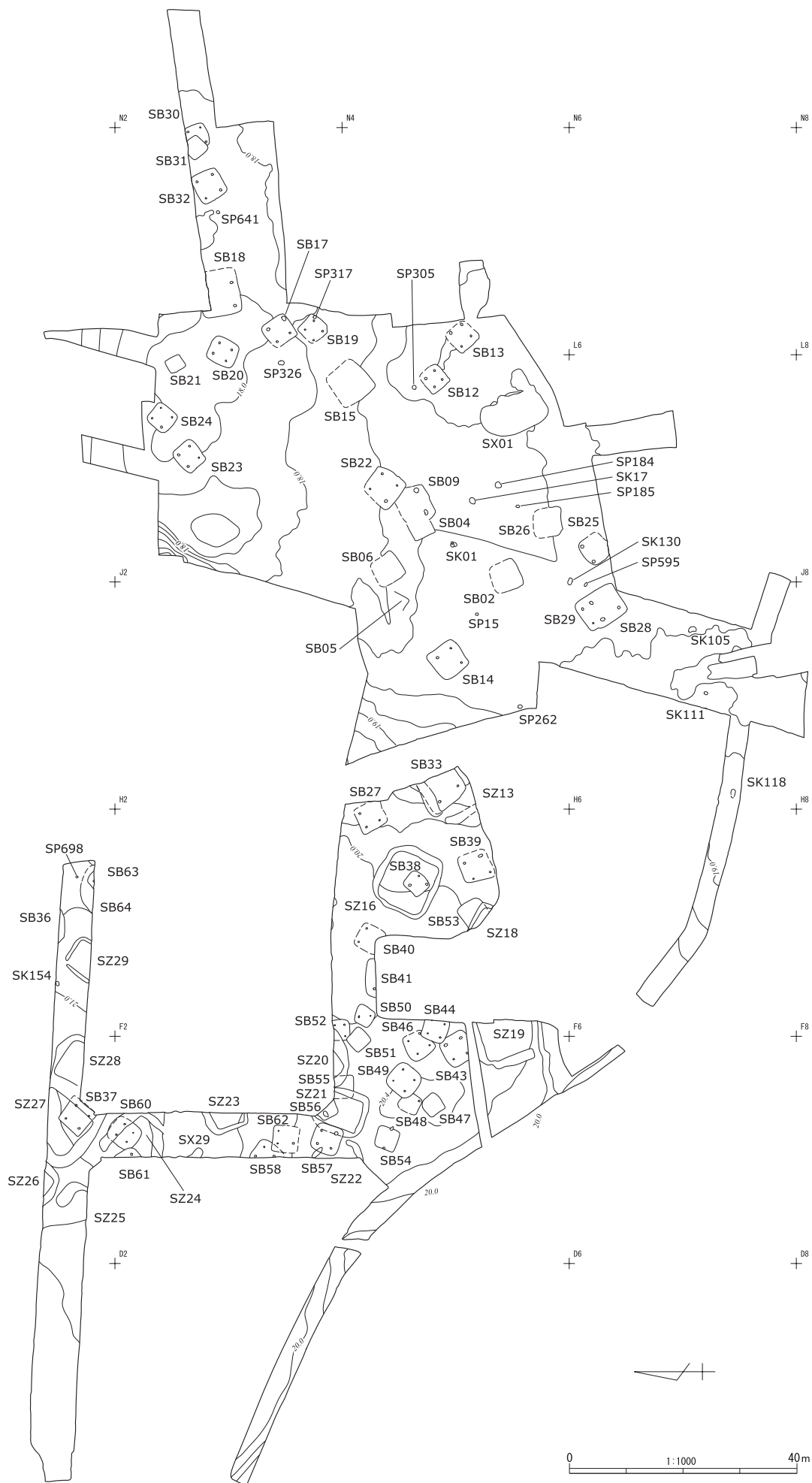


Fig.170 古墳時代 検出遺構

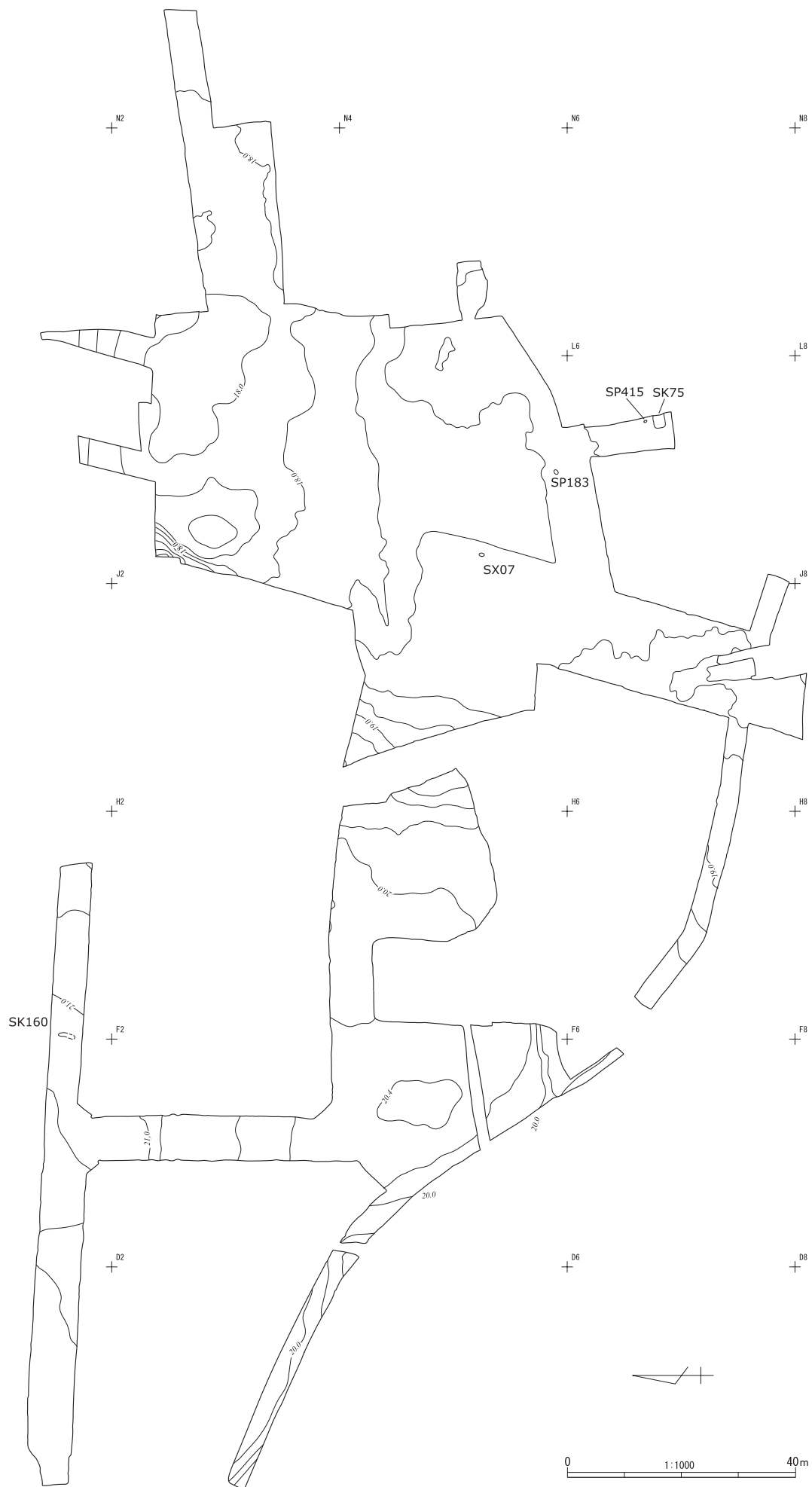


Fig.171 平安・鎌倉時代 検出遺構

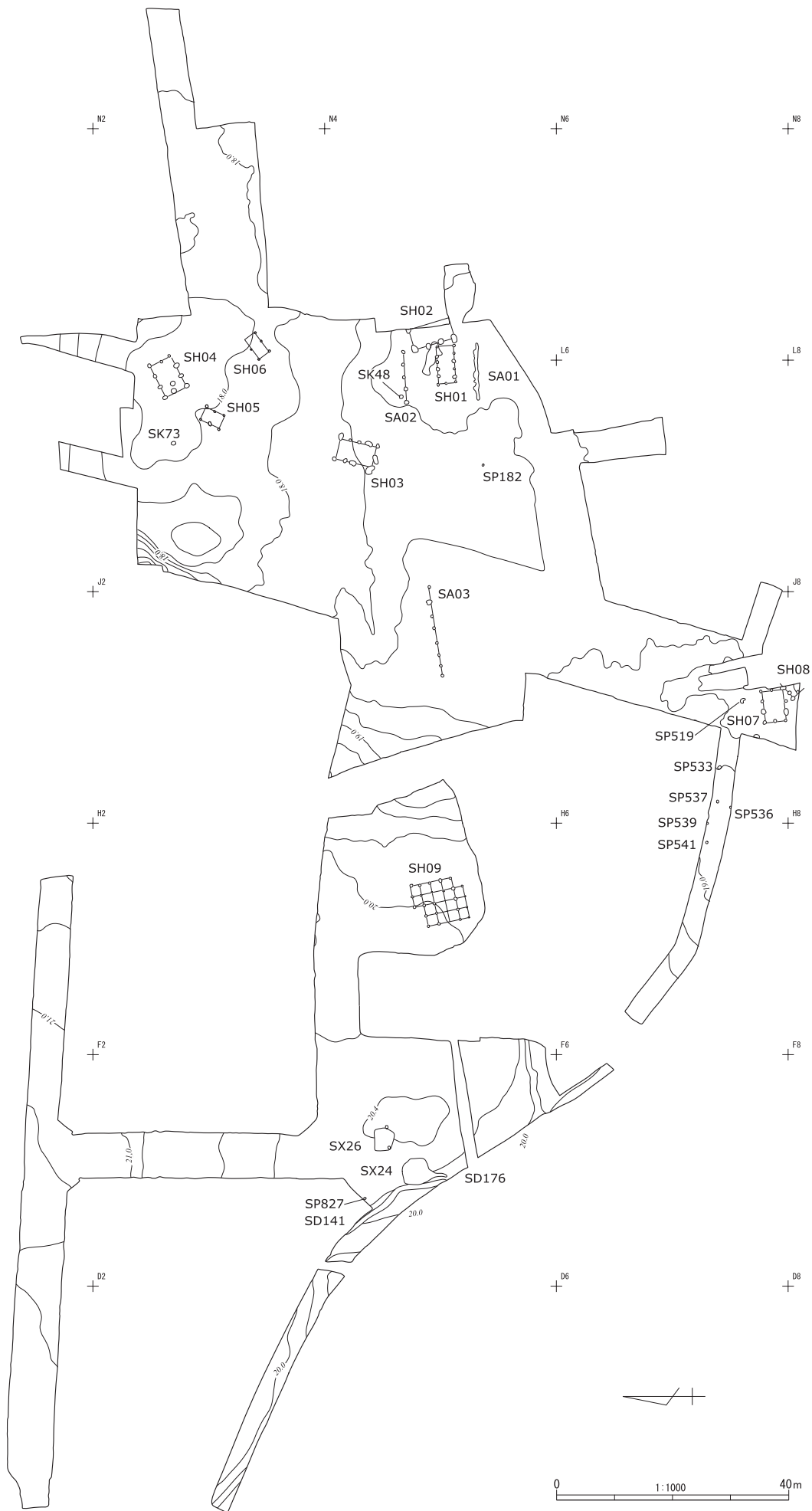


Fig.172 戦国時代 検出遺構

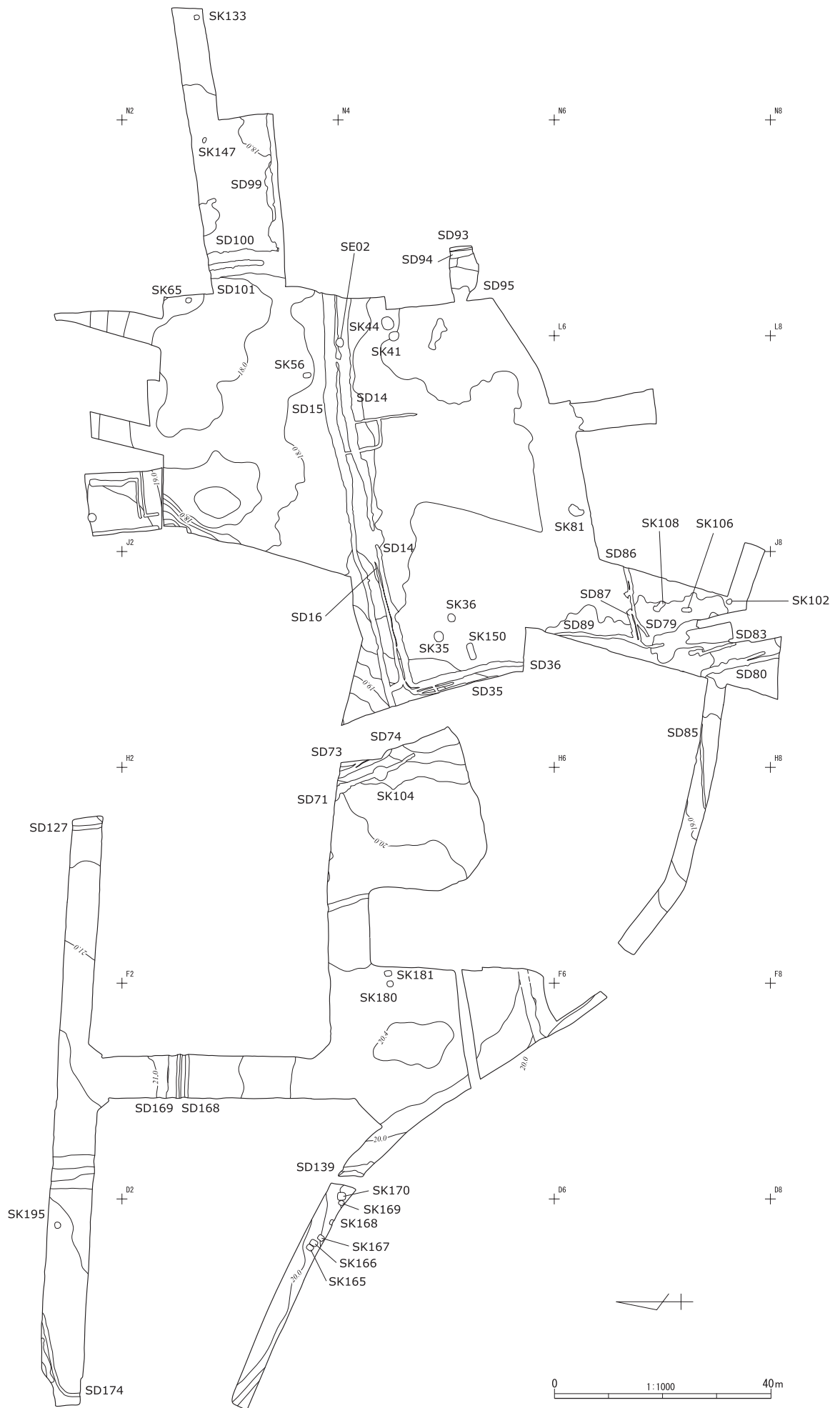


Fig.173 江戸時代 検出遺構

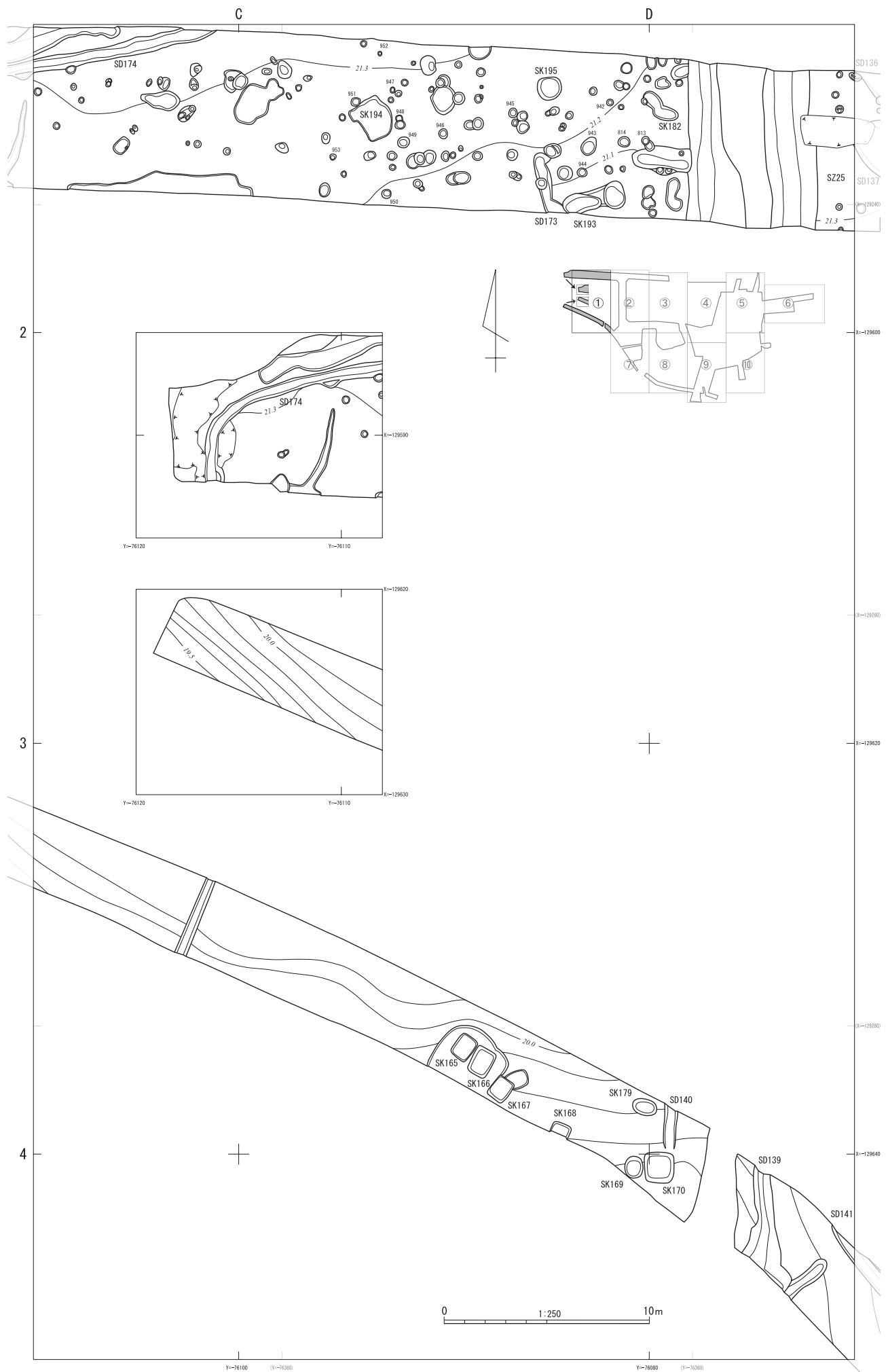


Fig.174 北神宮寺遺跡 検出遺構図①

() 内の座標数値は世界測地系による



()内の座標数値は世界測地系による

Fig.175 北神宮寺遺跡 検出遺構図②

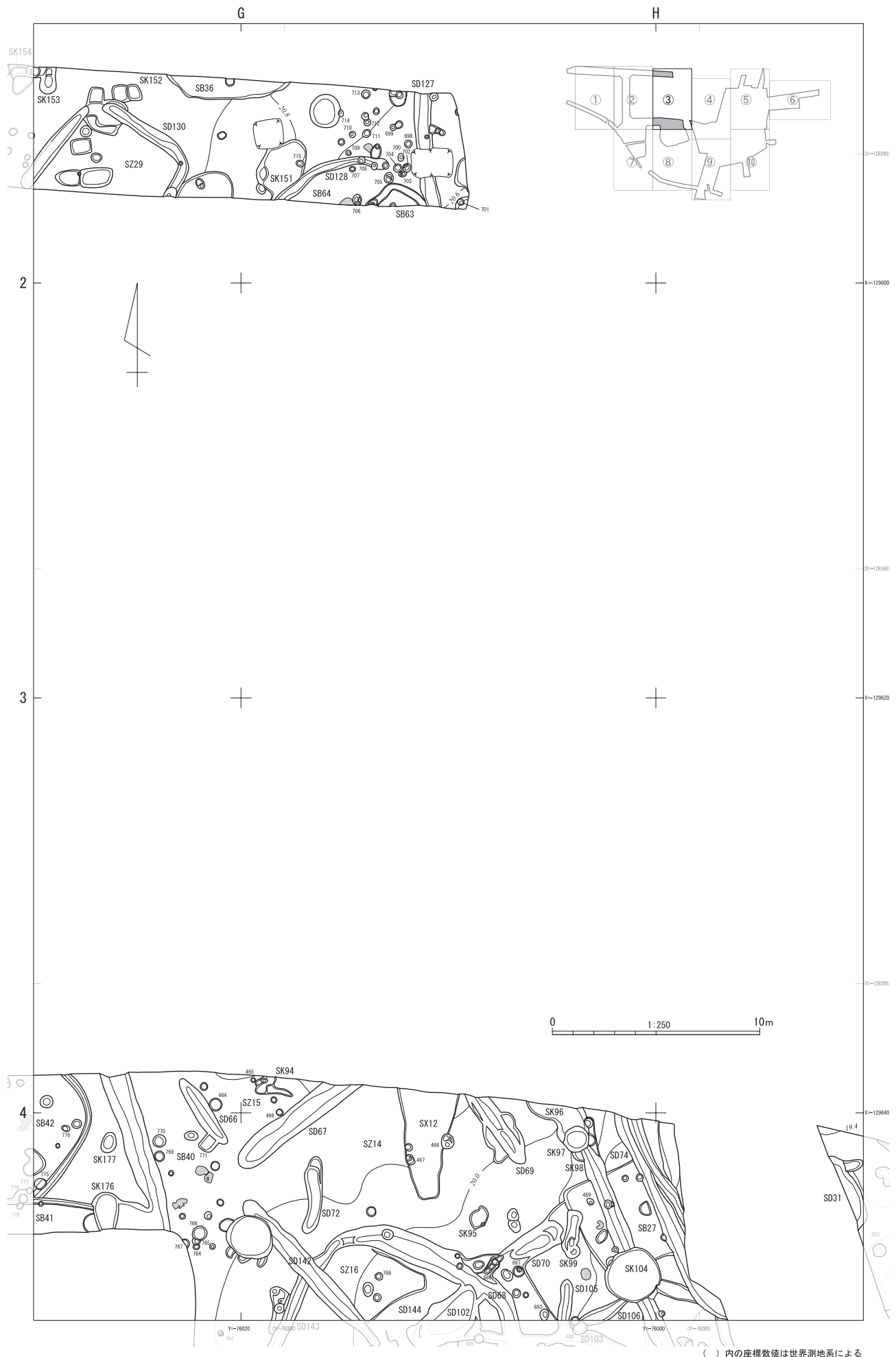


Fig.176 北神宮寺遺跡 検出遺構図③

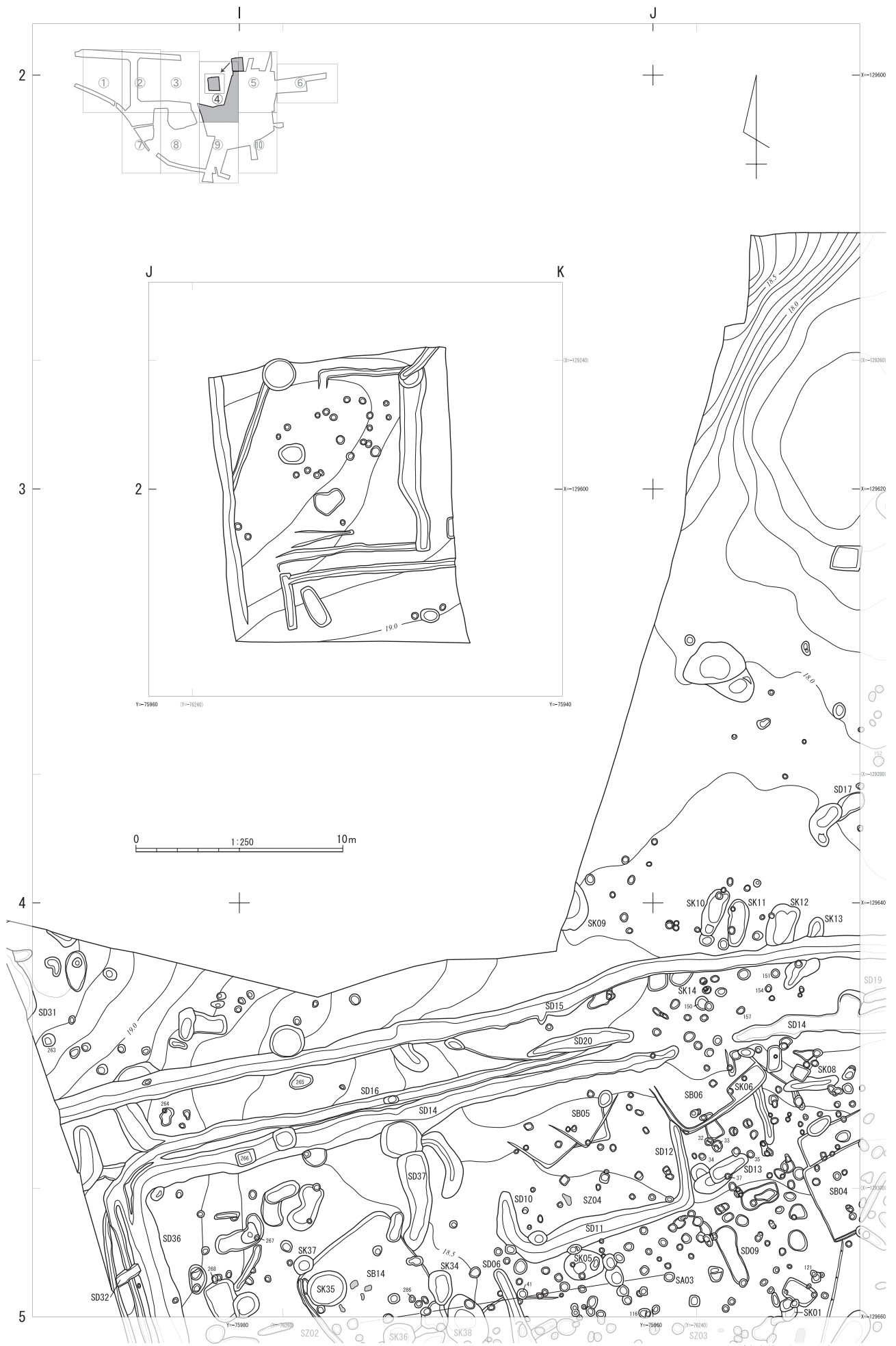


Fig.177 北神宮寺遺跡 検出遺構図④



Fig.178 北神宮寺遺跡 検出遺構図⑤



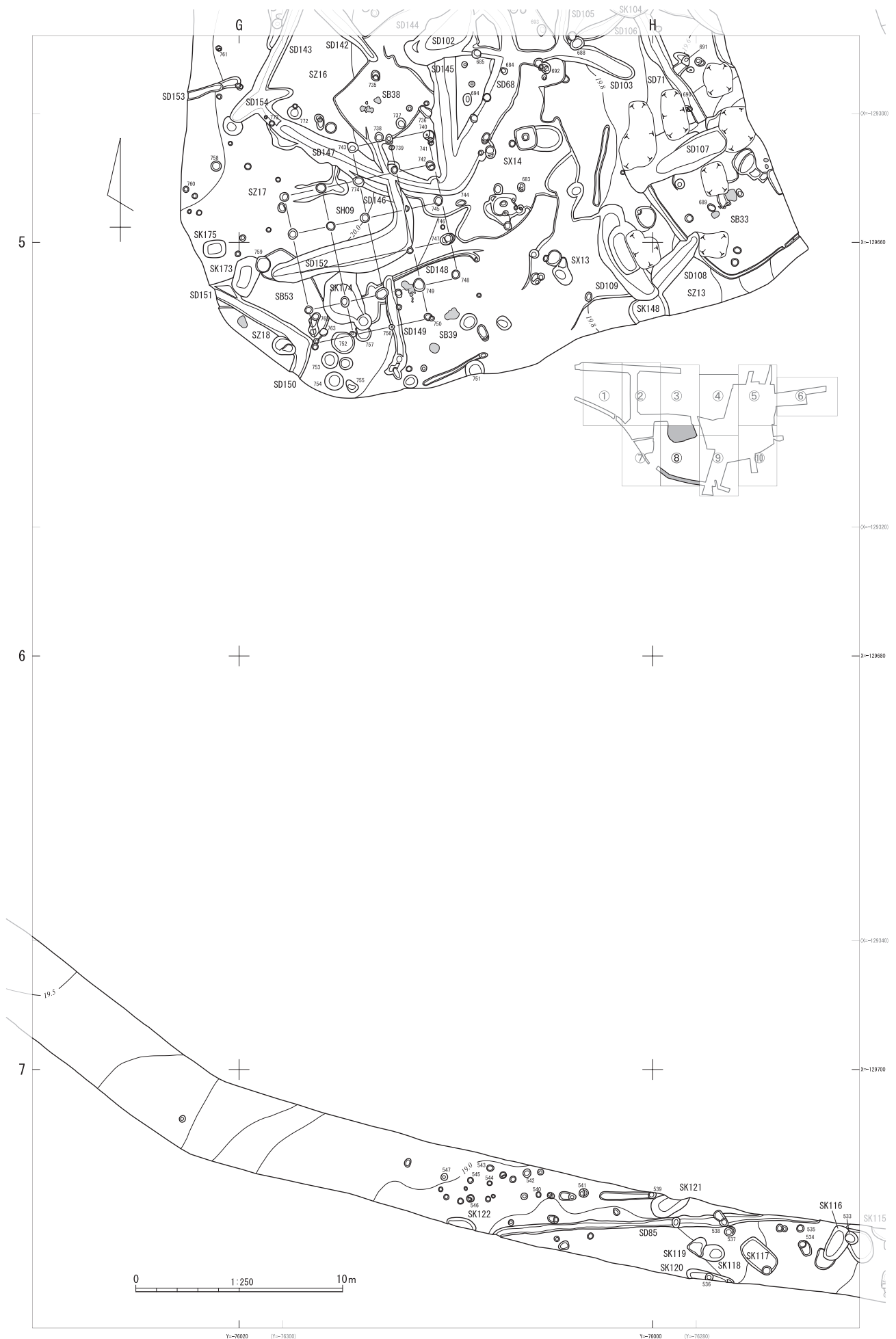
() 内の座標数値は世界測地系による

Fig.179 北神宮寺遺跡 検出遺構図⑥



() 内の座標数値は世界測地系による

Fig.180 北神宮寺遺跡 検出遺構図⑦



() 内の座標数値は世界測地系による

Fig.181 北神宮寺遺跡 検出遺構図⑧



Fig.182 北神宮寺遺跡 検出遺構図⑨

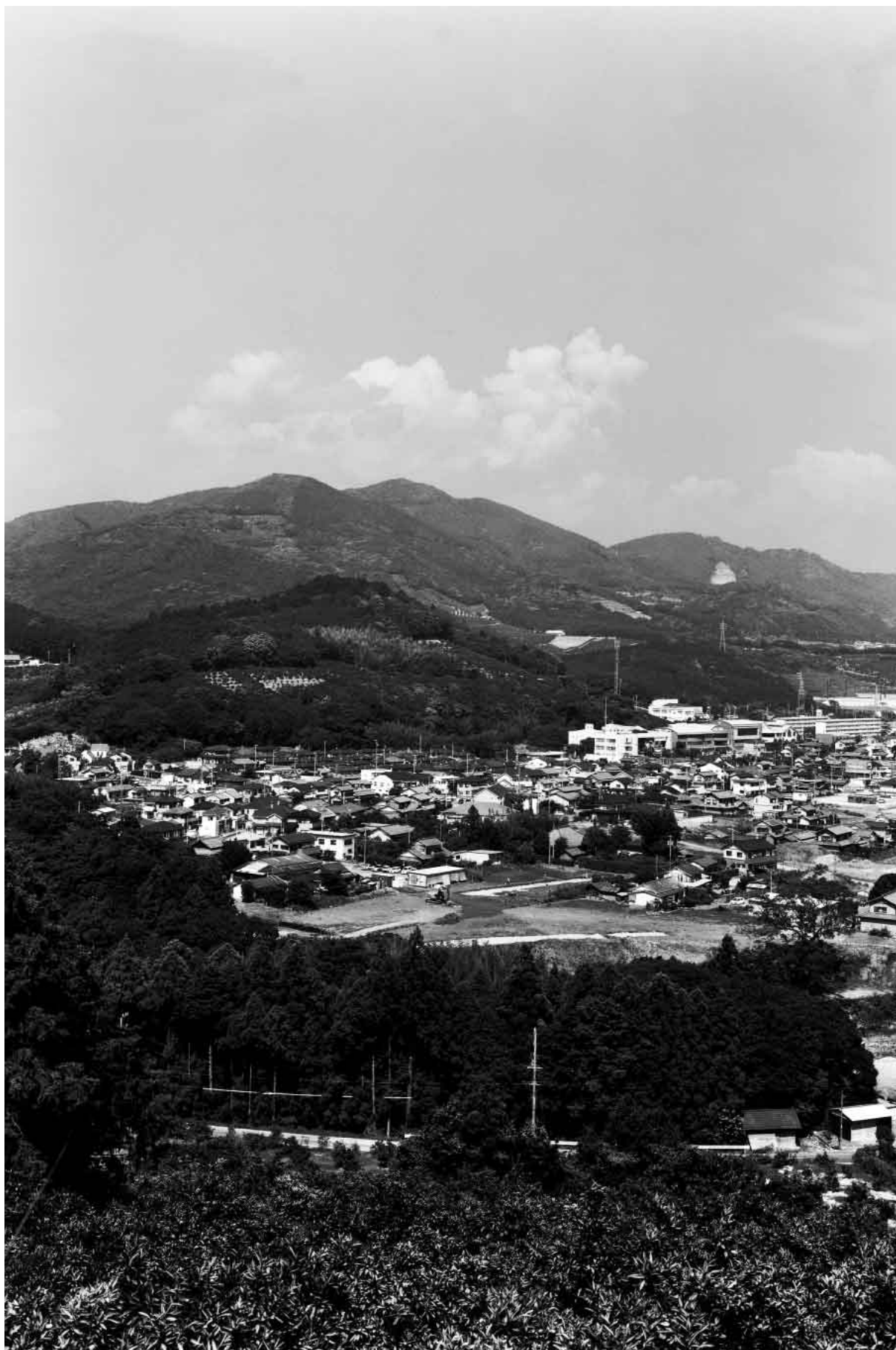
() 内の座標数値は世界測地系による



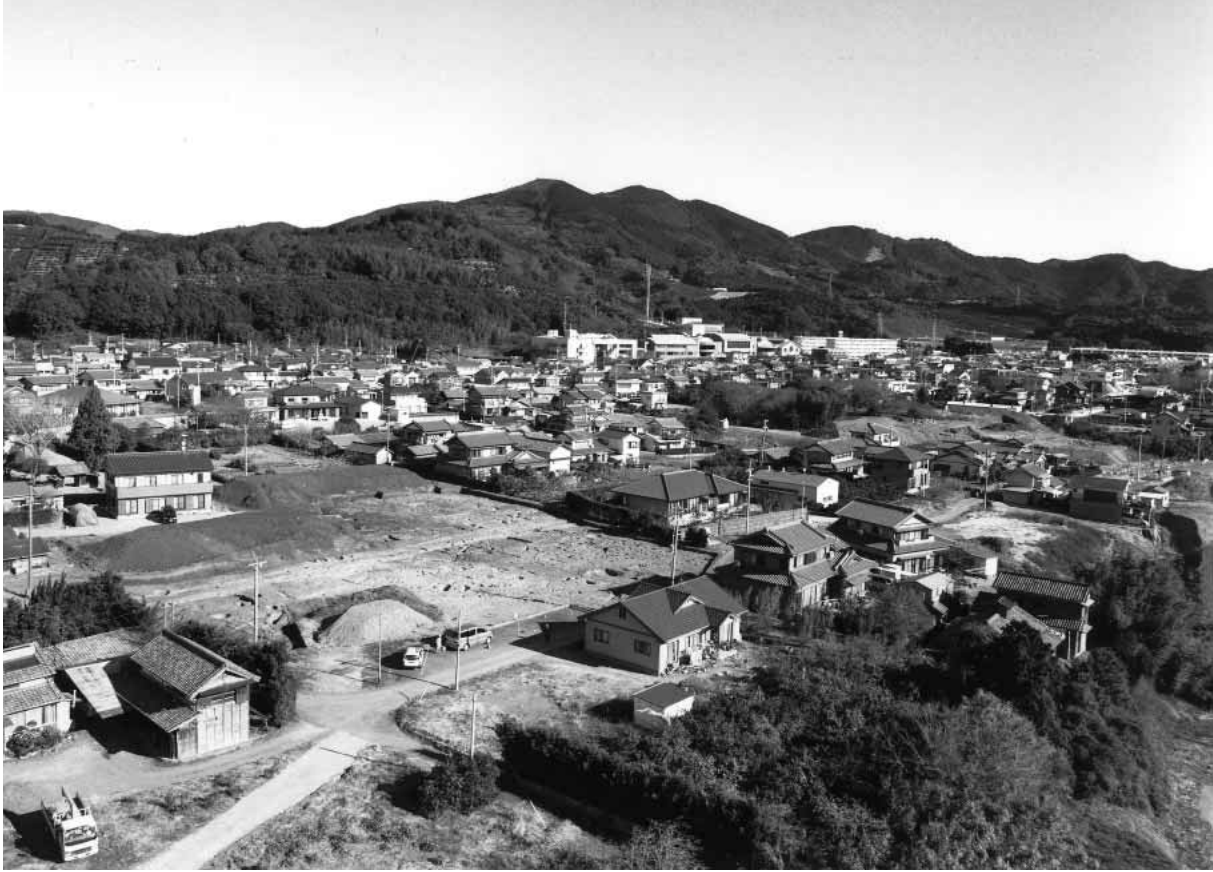
Fig.183 北神宮寺遺跡 検出遺構図⑩

图 版

PLATE



調査地区遠景（南西から）



1 2005年調査地区遠景（南西から）



2 2005年調査地区遠景（北東から）



2005年調査地区全景（北西から）



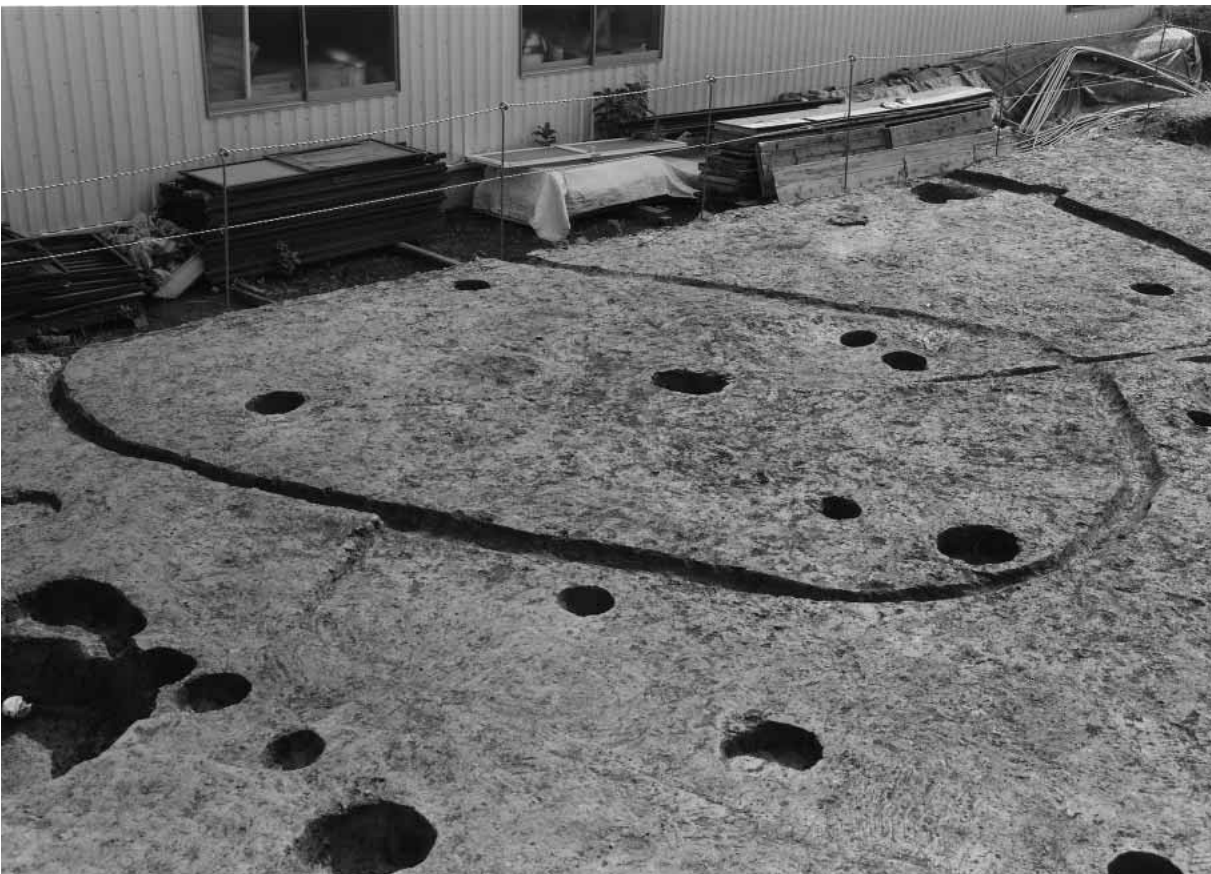
2006年調査地区全景（北から）



弥生時代遺構群 2005年調査地区（北東から）



1 弥生時代 竪穴建物 SB42 (西から)



2 弥生時代 竪穴建物 SB45 (北西から)



1 弥生時代 方形周溝墓 A群 SZ01 (南東から)



2 弥生時代 方形周溝墓 A群 SZ04 (北東から)



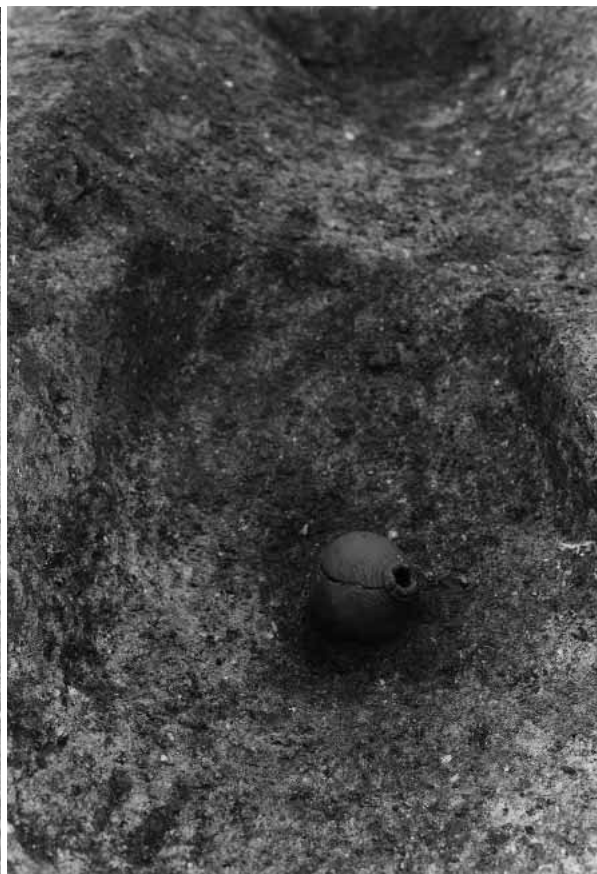
1 弥生時代 方形周溝墓 B群 SZ06 (西から)



2 弥生時代 方形周溝墓 B群 SZ08 (北西から)



1 SZ01遺物出土状況 (SD02、南から)



2 SZ02遺物出土状況 (SK31、南から)



3 SZ04遺物出土状況 (SD20、東から)



4 SZ12遺物出土状況 (SD75、南東から)



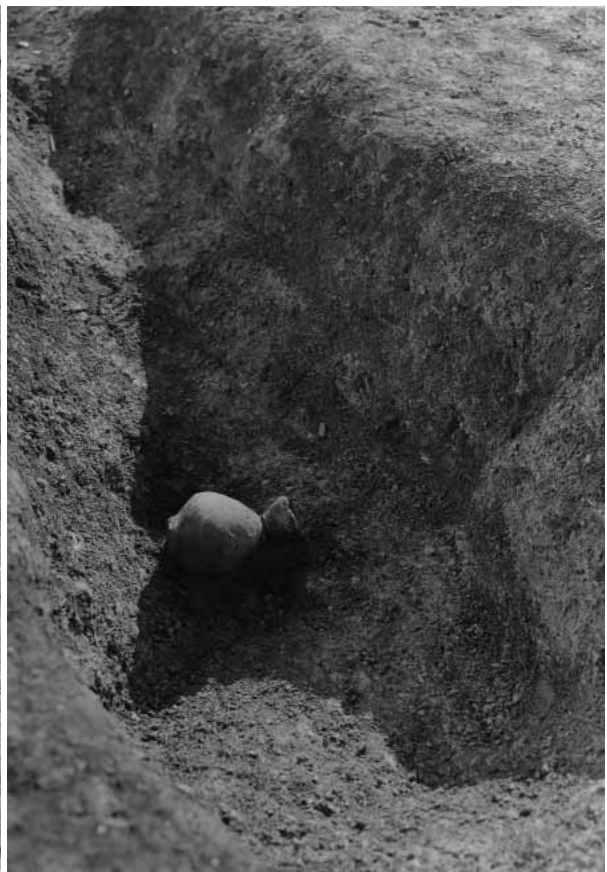
1 SZ07遺物出土状況 (SD40、南東から)



2 SZ07遺物出土状況 (SD41、南東から)



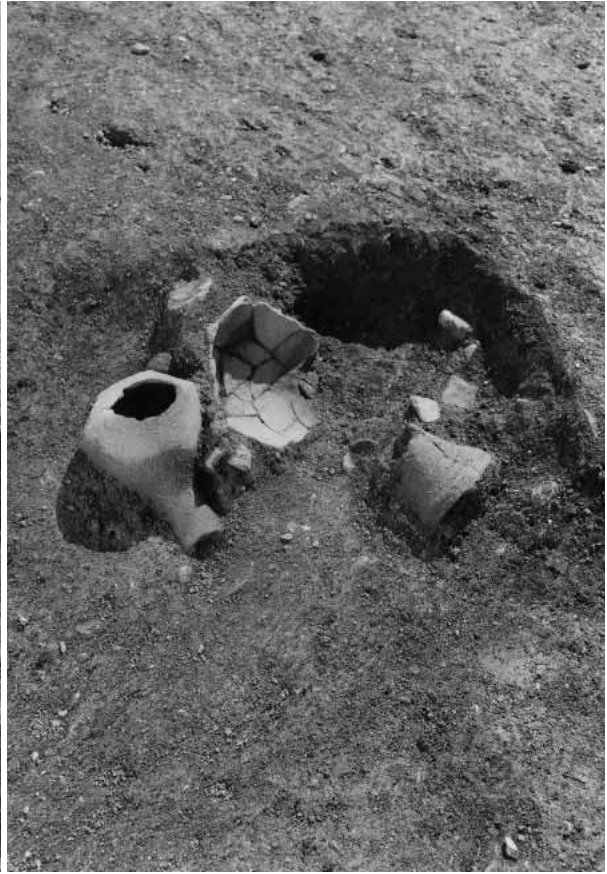
3 SZ08遺物出土状況 (SK57、南西から)



4 SZ09遺物出土状況 (SD47、西から)



1 SZ10遺物出土状況 (SK60、北西から)



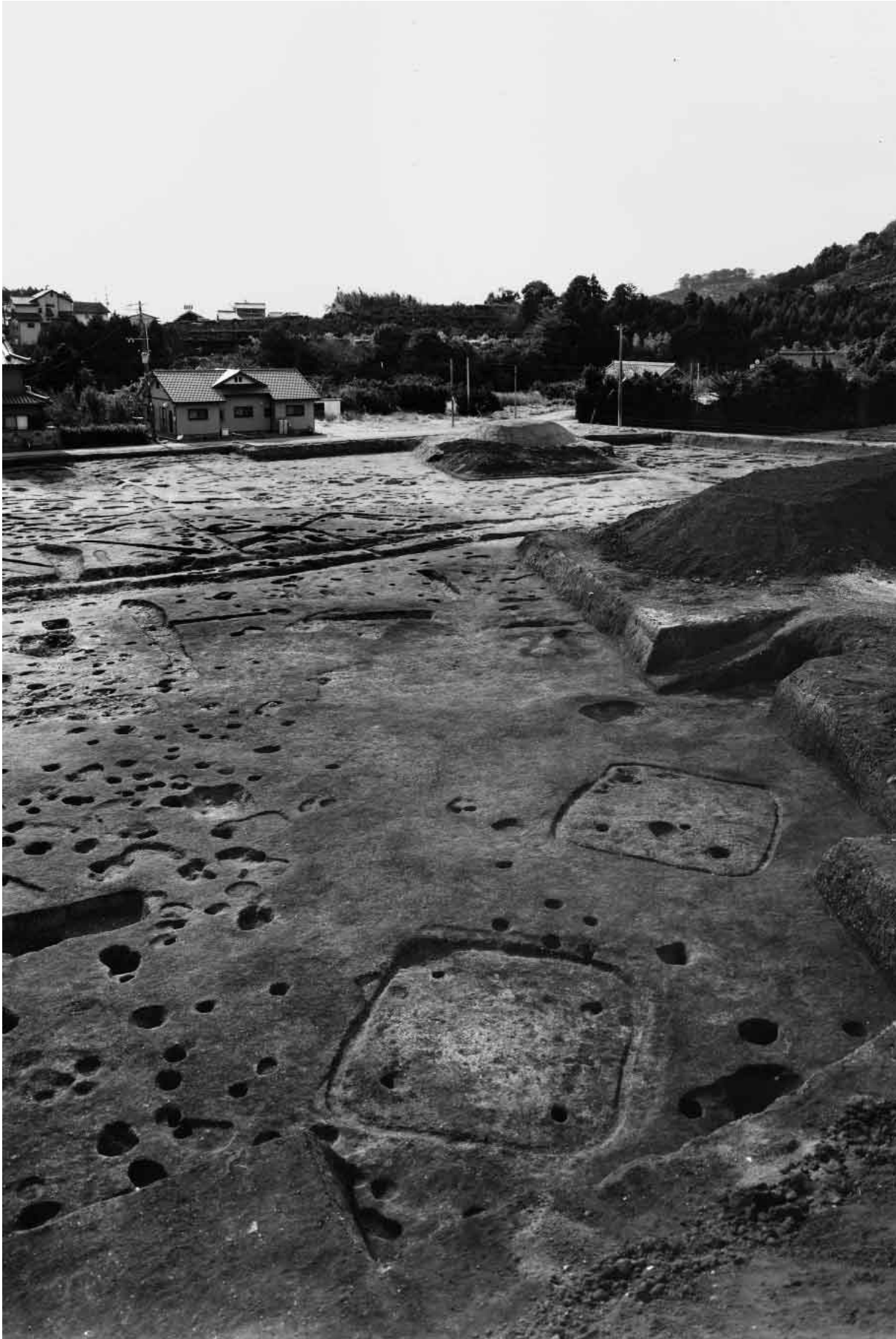
2 SP258遺物出土状況 (北西から)



3 SZ14遺物出土状況 (SD67、南西から)



4 SZ14遺物出土状況 (SD70、北東から)



古墳時代遺構群 2005年調査地区（北東から）



古墳時代 土器廃棄土坑 SX01 (南東から)



1 SX01土層断面（南東から）



2 SX01完掘状況（南東から）



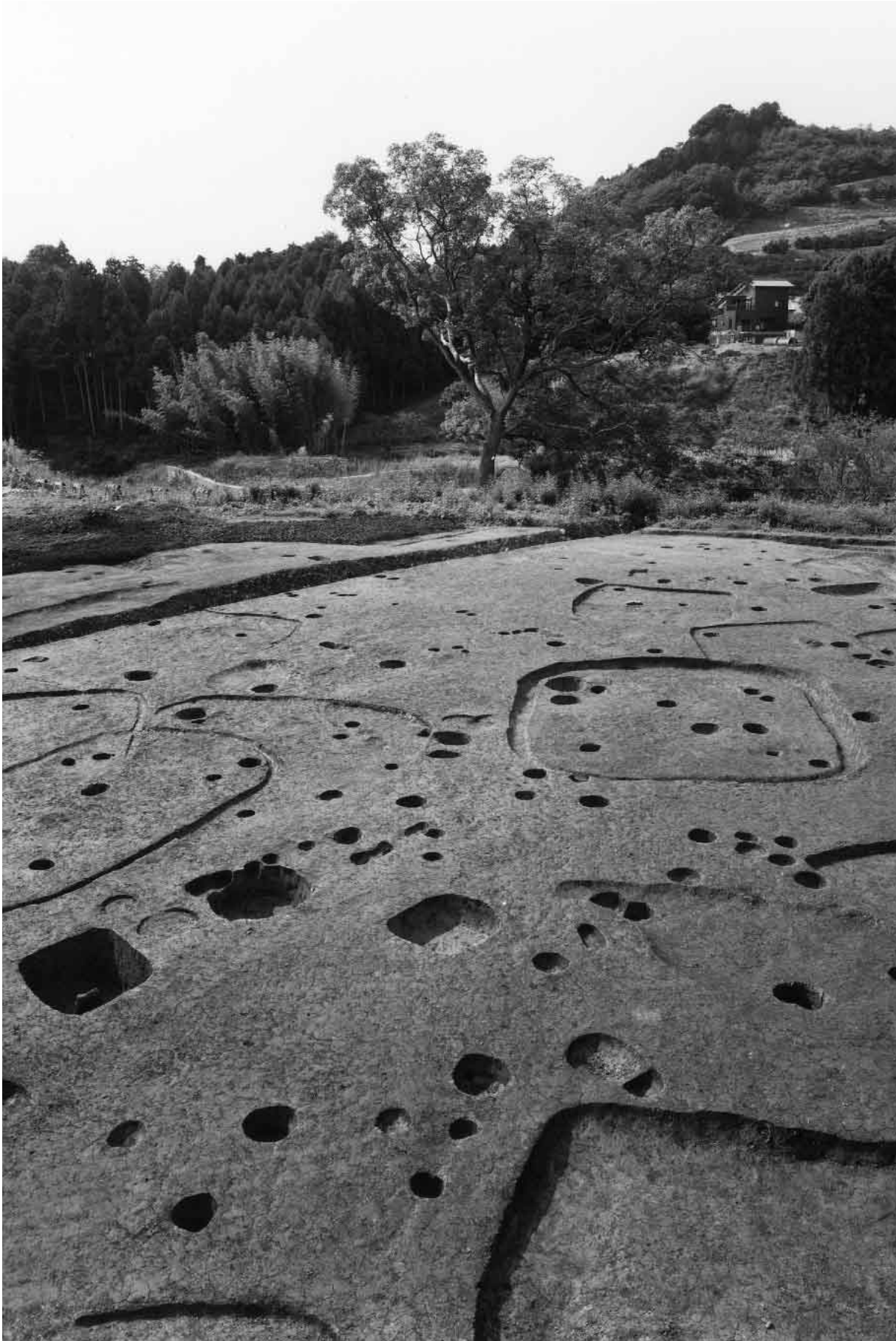
1 SX01遺物出土状況（北西から）



2 SX01遺物出土状況（北西から）



3 SX01遺物出土状況（東から）



古墳時代 竪穴建物群 2007年調査地区（北東から）



1 古墳時代 竪穴建物 A群 SB12 (西から)



2 古墳時代 竪穴建物 A群 SB25 (北西から)



1 古墳時代 竪穴建物 A群 SB28・29 (北西から)



2 古墳時代 竪穴建物 B群 SB17 (北から)



1 古墳時代 竪穴建物 B群 SB20 (北から)



2 古墳時代 竪穴建物 B群 SB22 (南西から)



1 古墳時代 竪穴建物 B群 SB23 (北から)



2 古墳時代 竪穴建物 B群 SB24 (西から)



1 古墳時代 竪穴建物 B群 SB30・31 (南東から)



2 古墳時代 竪穴建物 B群 SB32 (西から)



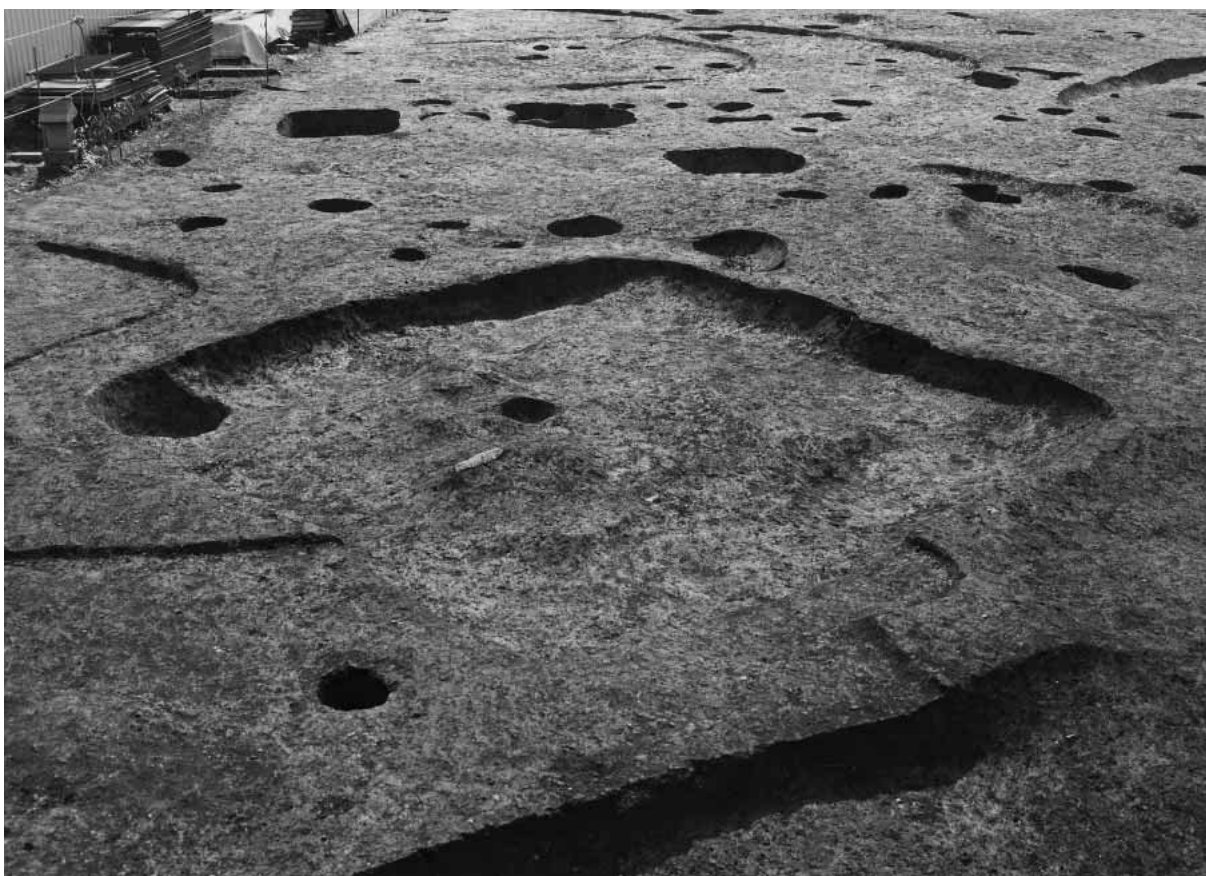
1 古墳時代 竪穴建物 C群 SB27 (南から)



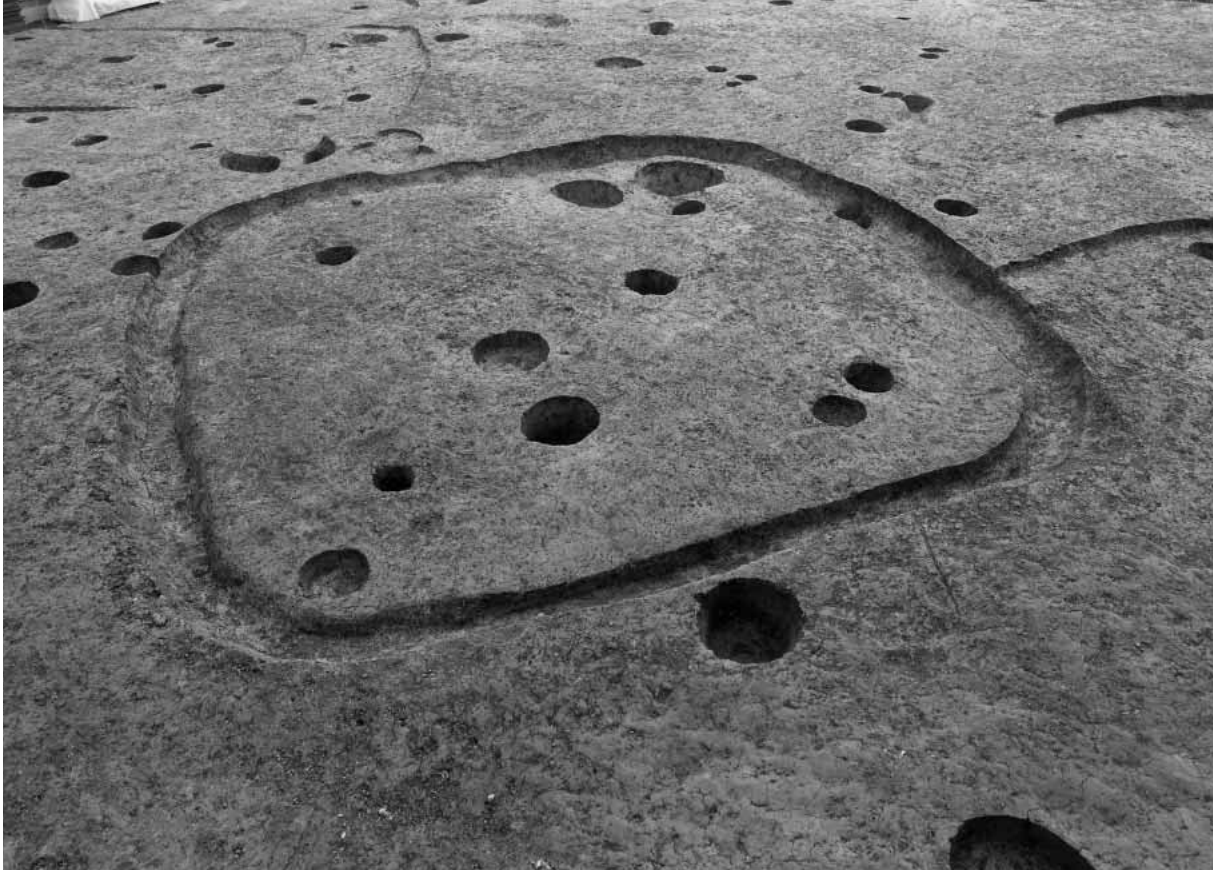
2 古墳時代 竪穴建物 C群 SB33 (南東から)



1 古墳時代 竪穴建物 C群 SB38 (西から)



2 古墳時代 竪穴建物 D群 SB51 (北から)



1 古墳時代 竪穴建物 D群 SB49 (北西から)



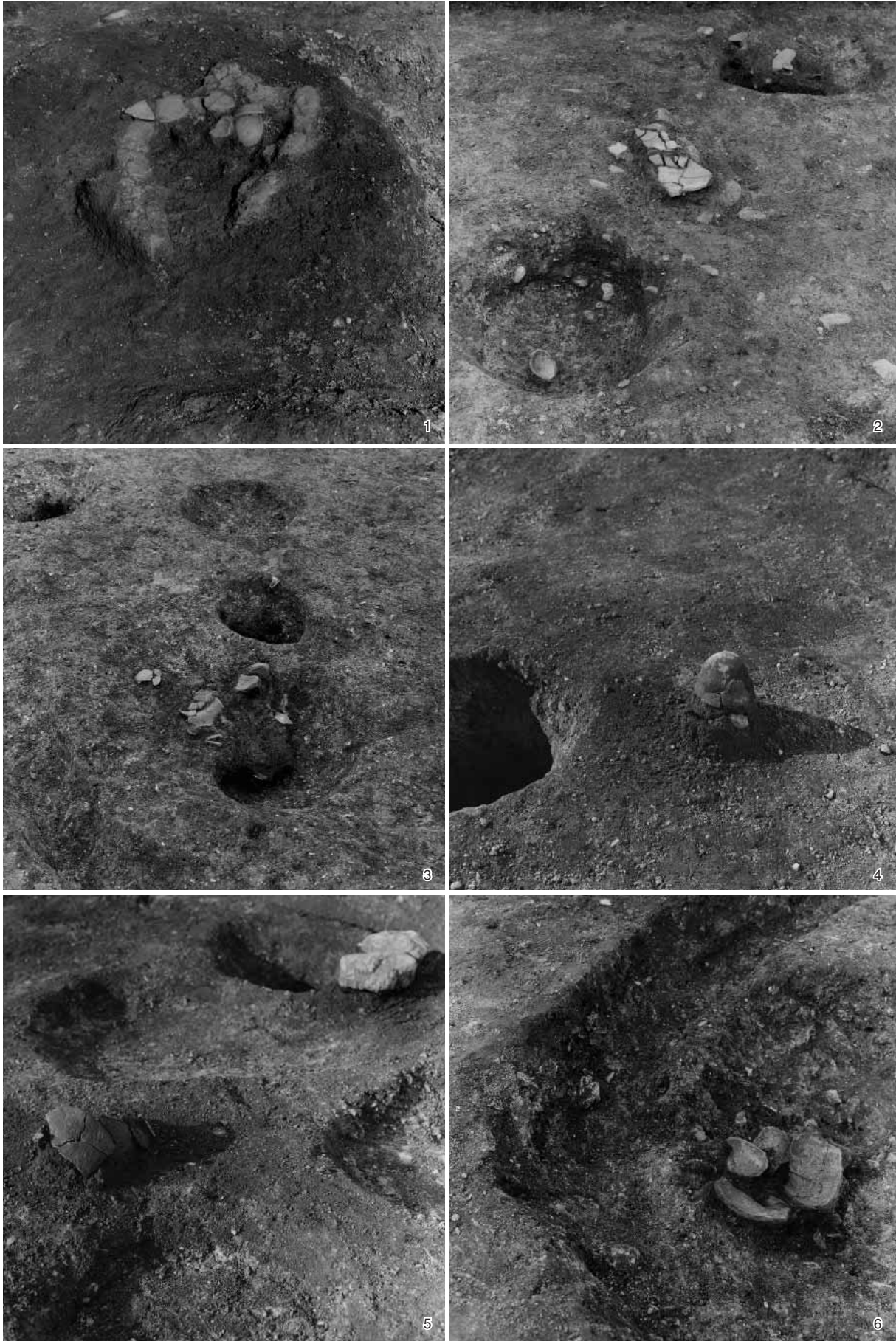
2 古墳時代 竪穴建物 D群 SB54 (北西から)



1 古墳時代 竪穴建物 D群 SB57 (北東から)



2 古墳時代 竪穴建物 F群 SB37 (北から)



古墳時代 竪穴建物内遺物出土状況 (1) 1 SB09 2 SB09 3 SB14 4 SB20 5 SB20 6 SB22 (SP335)



古墳時代 竪穴建物内遺物出土状況 (2) 1 SB22 (SP356) 2 SB23 (SK74) 3 SB25 (SP449) 4 SB27 5 SB28 (SK127) 6 SB30 (SP627)



古墳時代 竪穴建物内遺物出土状況 (3) 1 SB31 2 SB32 (SK139) 3 SB41 4 SB47 5 SB53 6 SB54



古墳時代 方形周溝墓群 2007年調査地区（北西から）



1 古墳時代 方形周溝墓 A群 SZ16 (南西から)



2 SZ16遺物出土状況 (SD147、北から)



3 SZ16遺物出土状況 (SD147、西から)



1 古墳時代 方形周溝墓 B群 SZ21 (南西から)



2 古墳時代 方形周溝墓 B群 SZ23 (北西から)



1 古墳時代 方形周溝墓 B群 SZ20 (南西から)



2 SZ20遺物出土状況 (SD155 東から)



3 SZ20遺物出土状況 (SD156 西から)



1 古墳時代 方形周溝墓 C群 SZ27 (南西から)



2 SZ27遺物出土状況 (SD132、南東から)



3 C群SZ25遺物出土状況 (SD137、南東から)



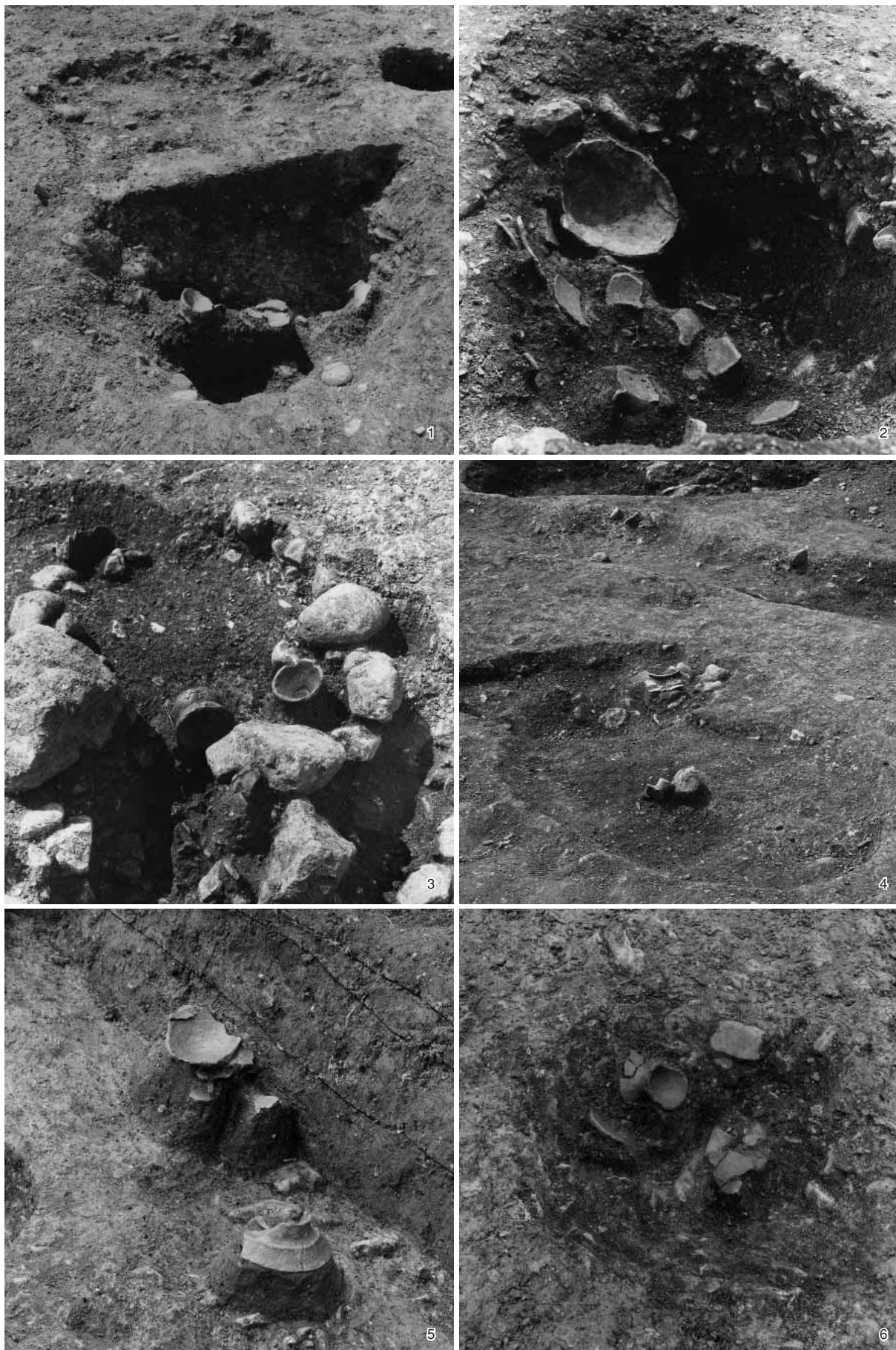
1 古墳時代 方形周溝墓 C群 SZ29 (北から)



2 B群SZ19遺物出土状況 (SD122、北から)



3 C群SZ28遺物出土状況 (SD131、東から)



古墳時代 遺物出土状況 (1) 1 SK17 2 SK105 3 SK111 4 SK118 5 SK191 6 SP185



古墳時代 遺物出土状況 (2) 1 SP262 2 SP305 3 SP317 4 SP326 5 SP641 6 SP698



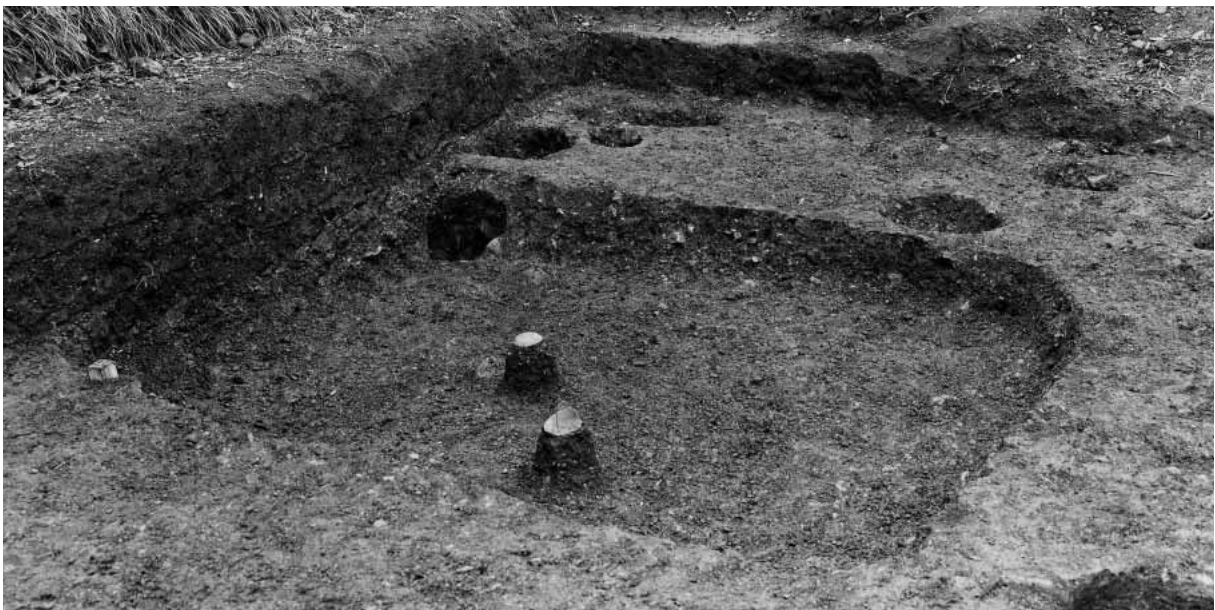
鎌倉時代 土坑墓 SK160 (南から)



1 平安時代 祭祀遺構 1 SX07 (東から) 2 SX07 (南から)



2 鎌倉・室町時代 土坑 1 SP183 (北西から) 2 SK48 (西から)



3 鎌倉時代 竪穴遺構 SK75 (北西から)



1 戦国時代 区画溝 SD141 (北から)



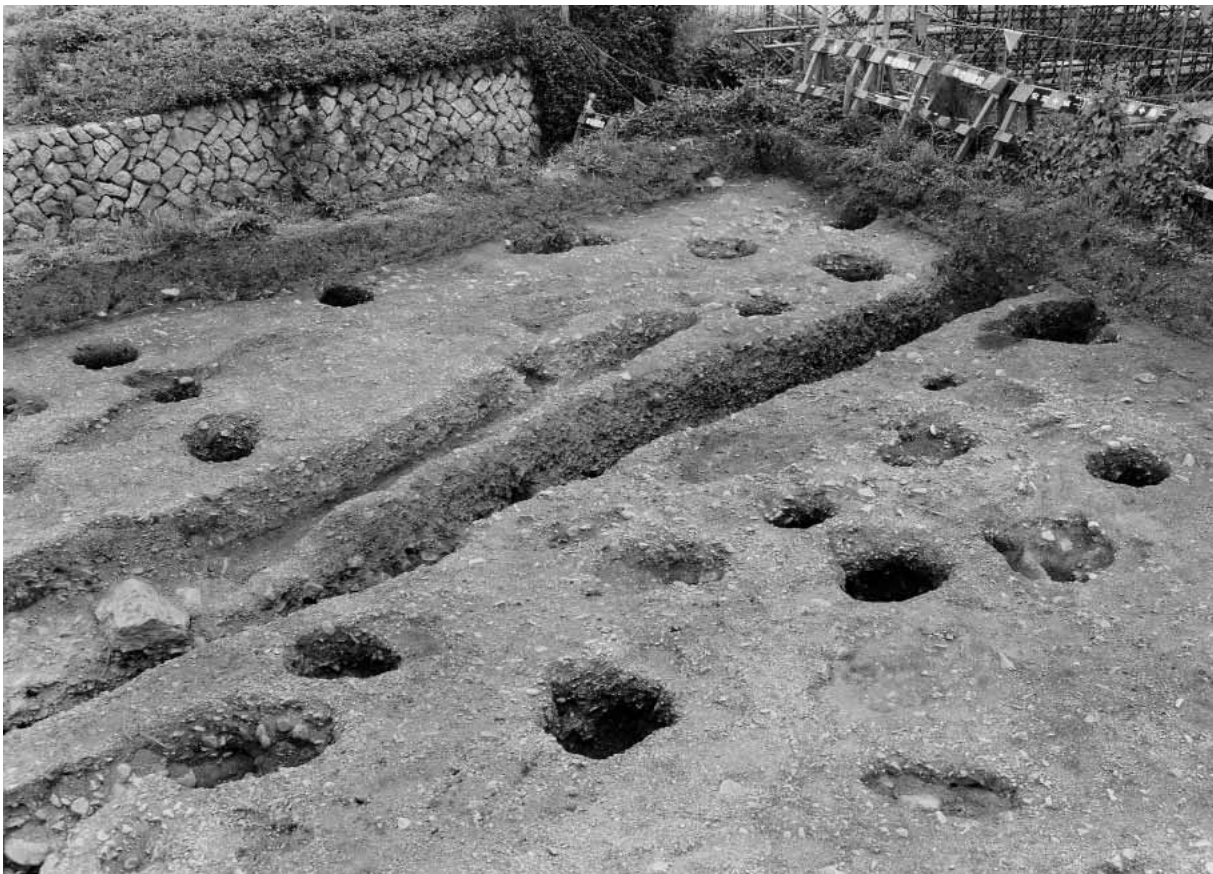
2 SD141遺物出土状況 (北から)



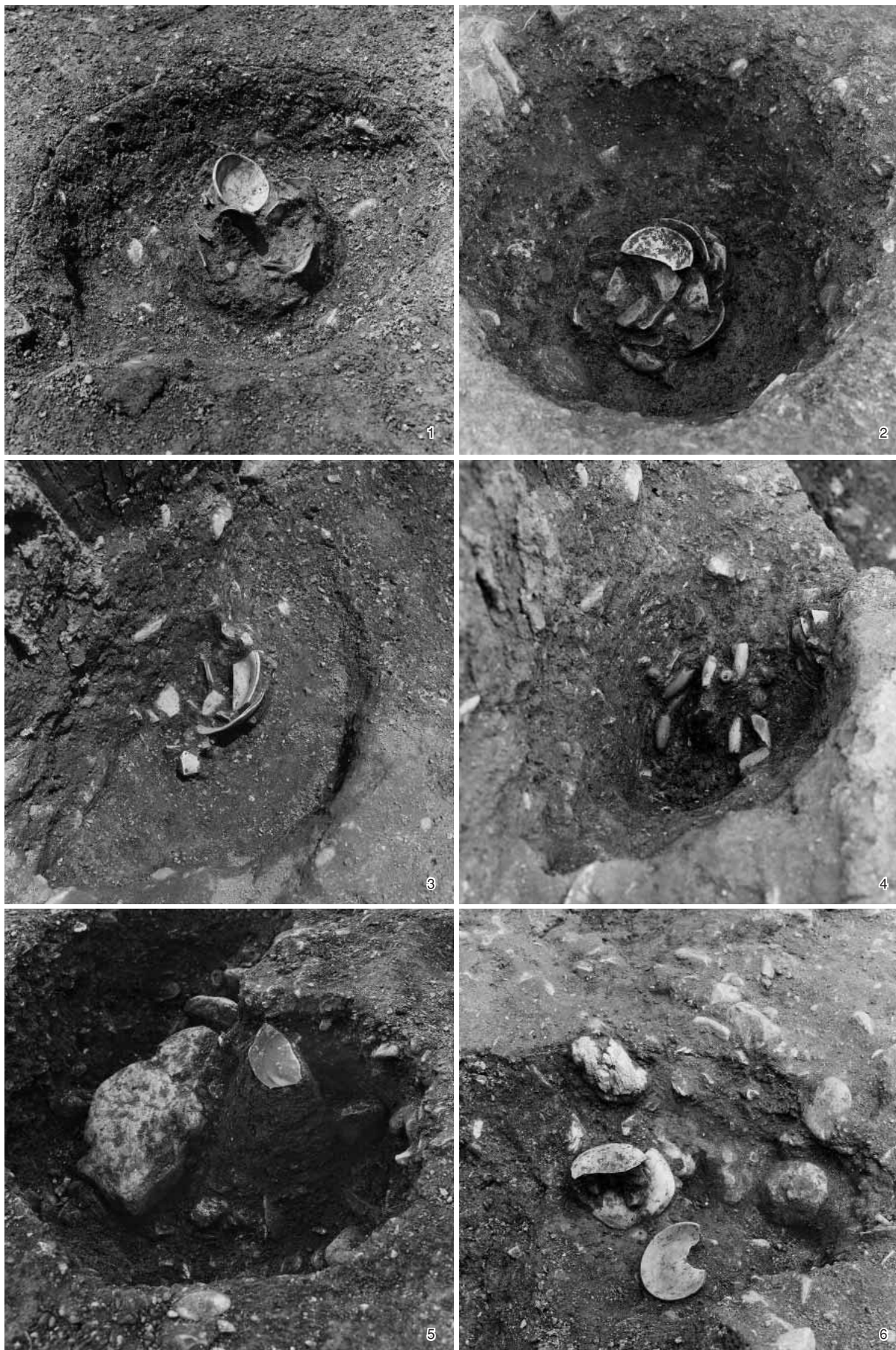
3 SD141遺物出土状況 (南東から)



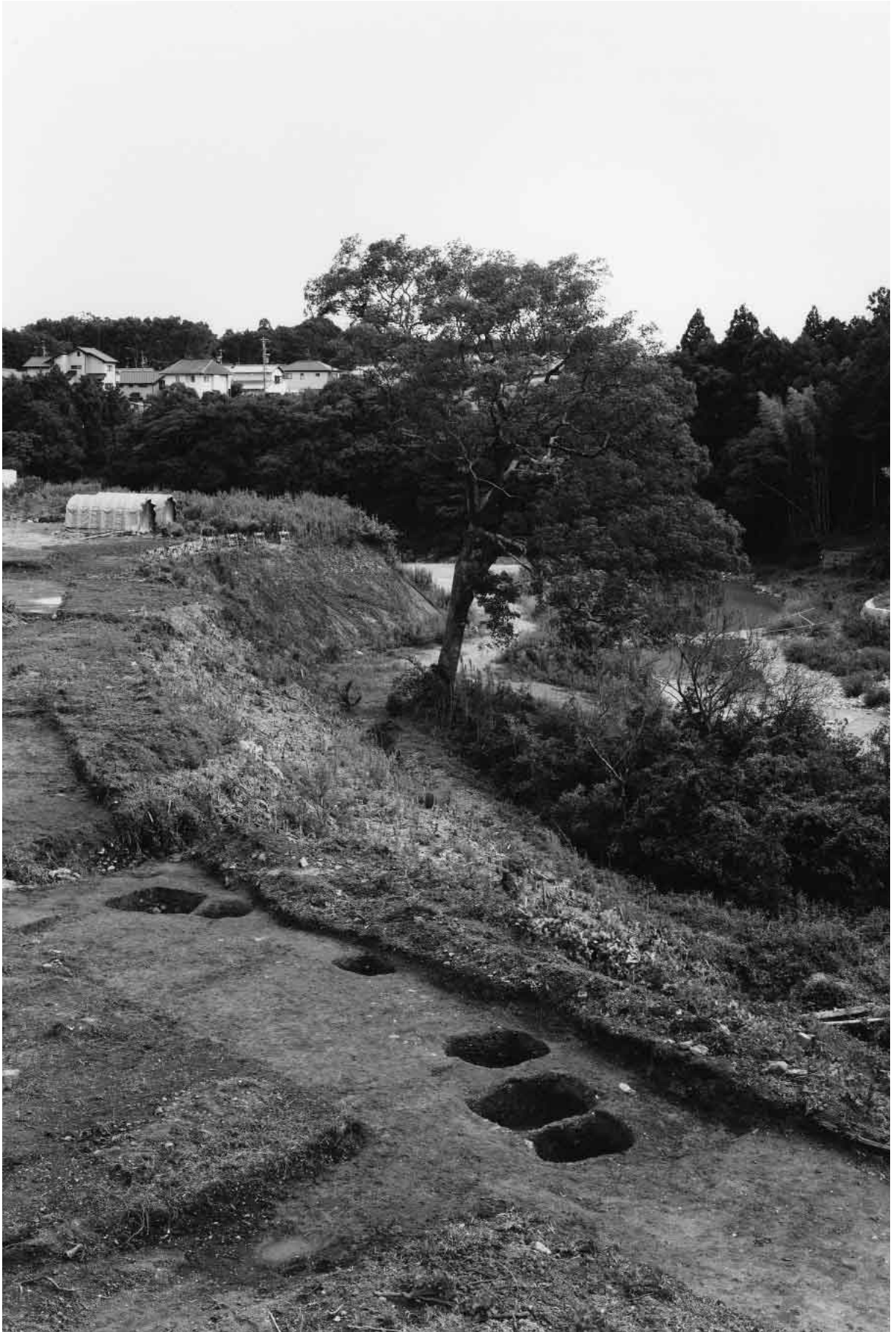
1 戦国時代 掘立柱建物 SH09 (南西から)



2 戦国時代 掘立柱建物 SH07・08 (北西から)



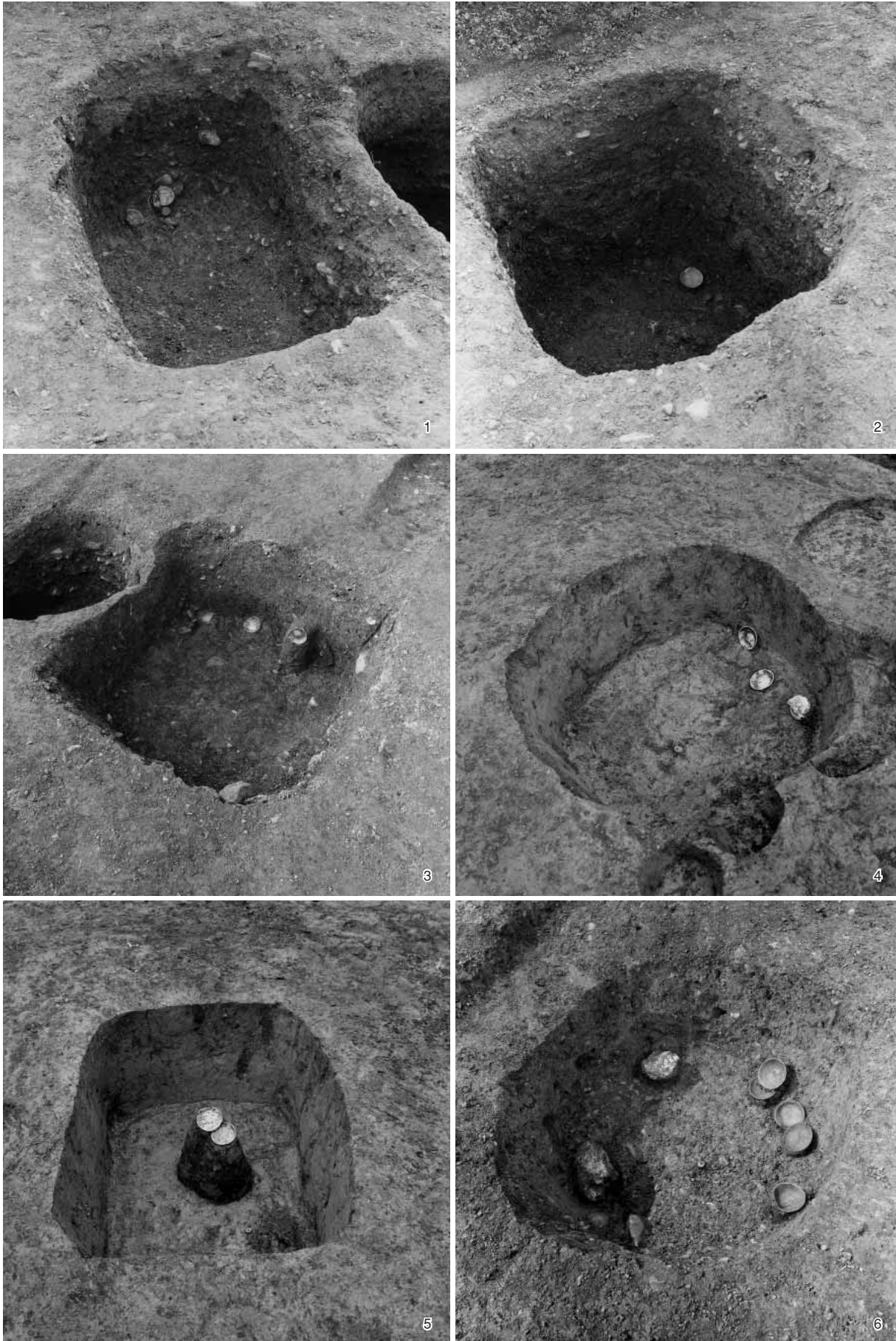
戦国時代 遺物出土状況 1 SP537上層 2 SP537下層 3 SP539上層 4 SP539下層 5 SP519 6 SP533



江戸時代 土坑墓群（北西から）



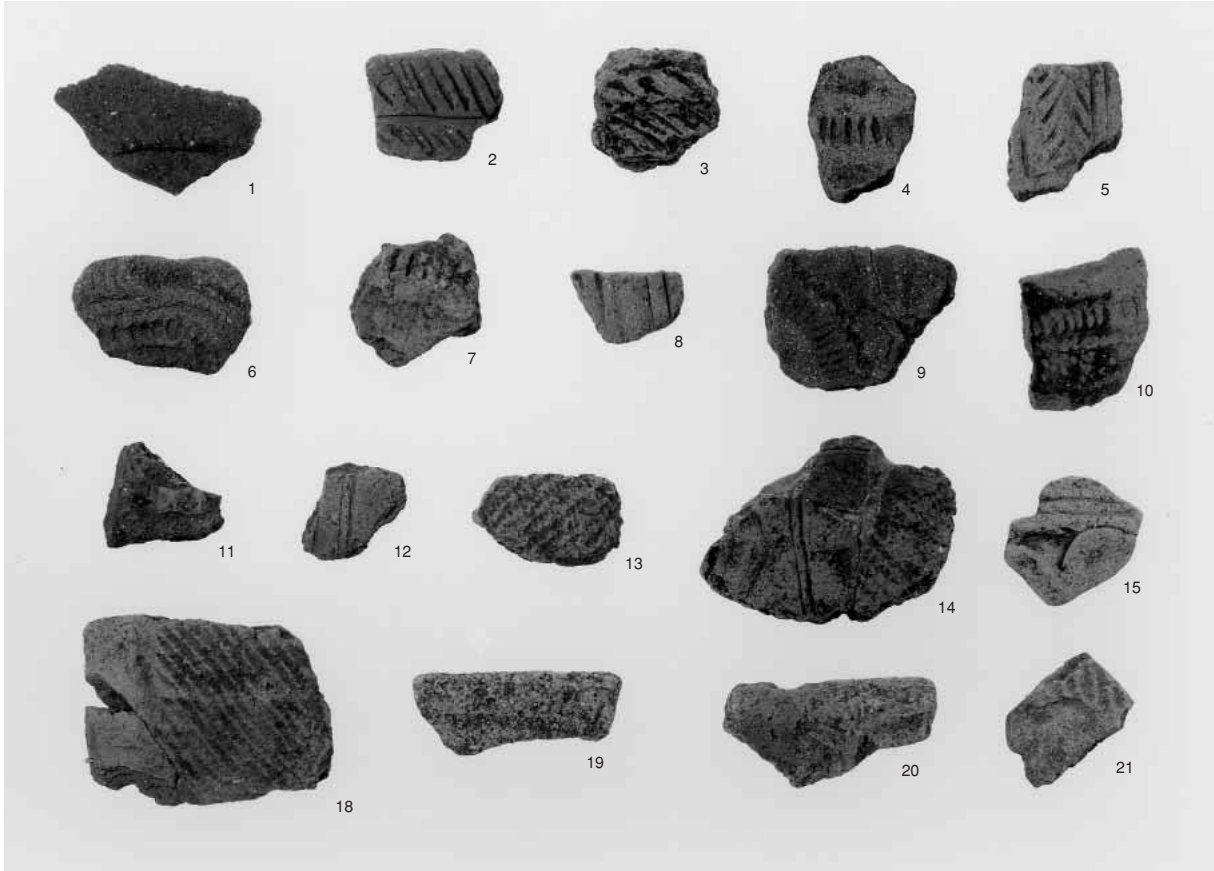
江戸時代 土坑墓遺物出土状況 (1) 1 SK56 2 SK102 3 SK133 4 SK165



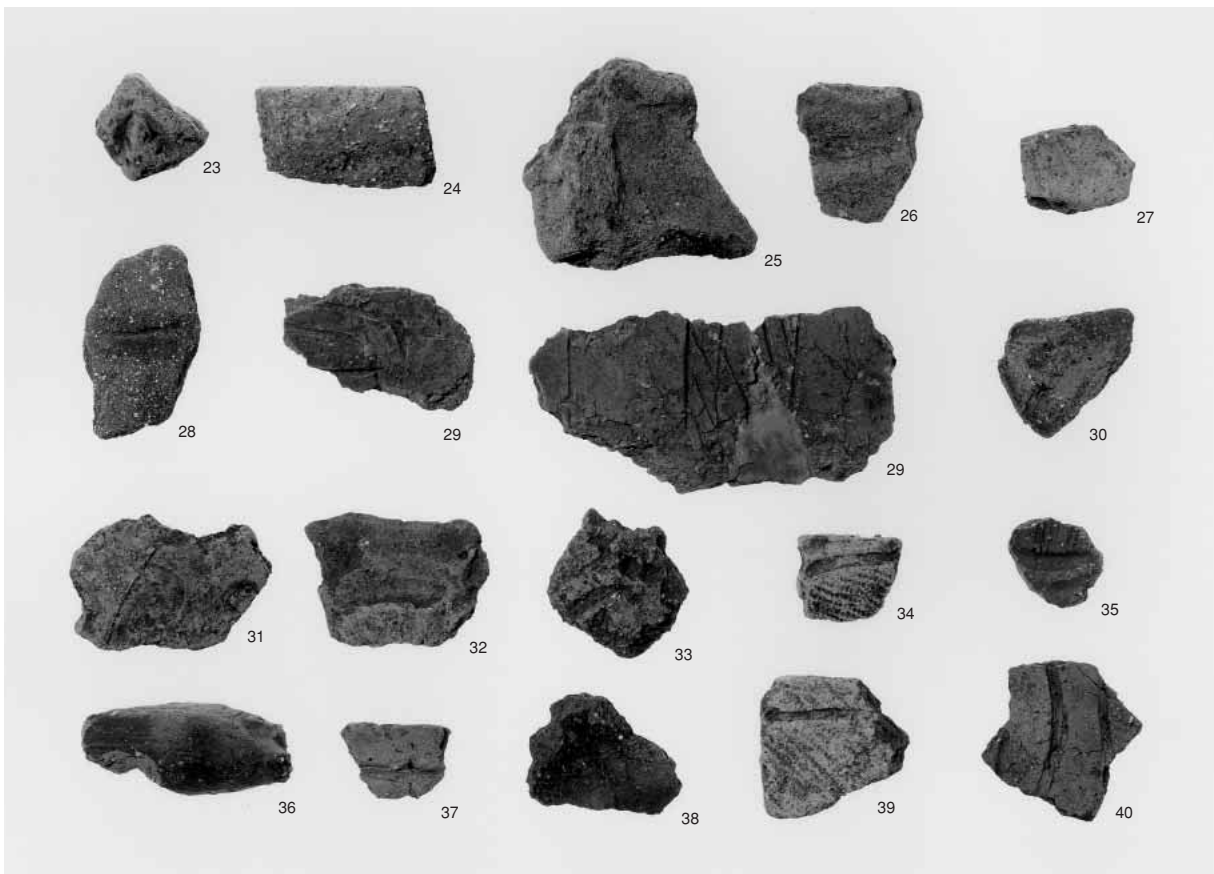
江戸時代 土坑墓遺物出土状況 (2) 1 SK166 2 SK167 3 SK169・170 4 SK180 5 SK181 6 SK195



縄文時代 主要出土遺物



1 縄文時代 土器 (1)



2 縄文時代 土器 (2)



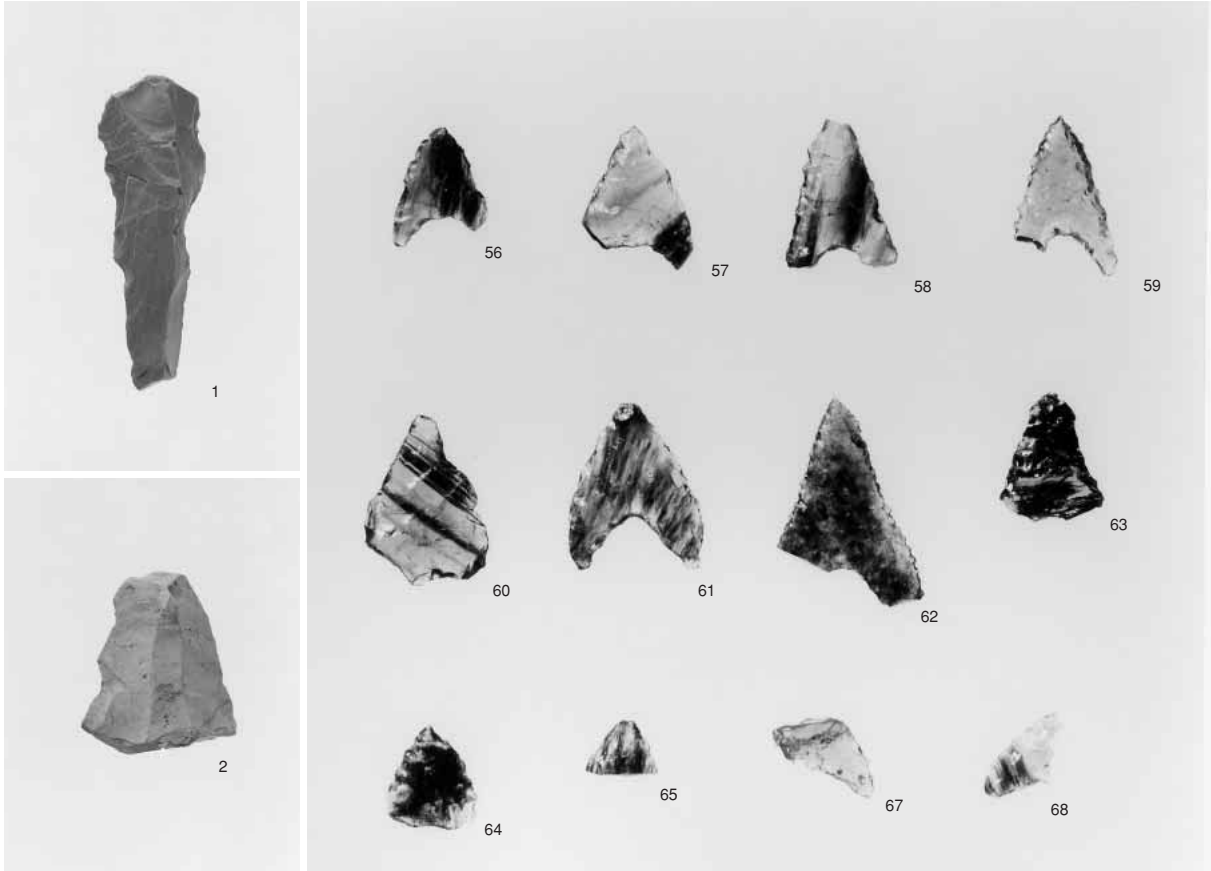
1 縄文時代 石剣



2 縄文時代 石棒

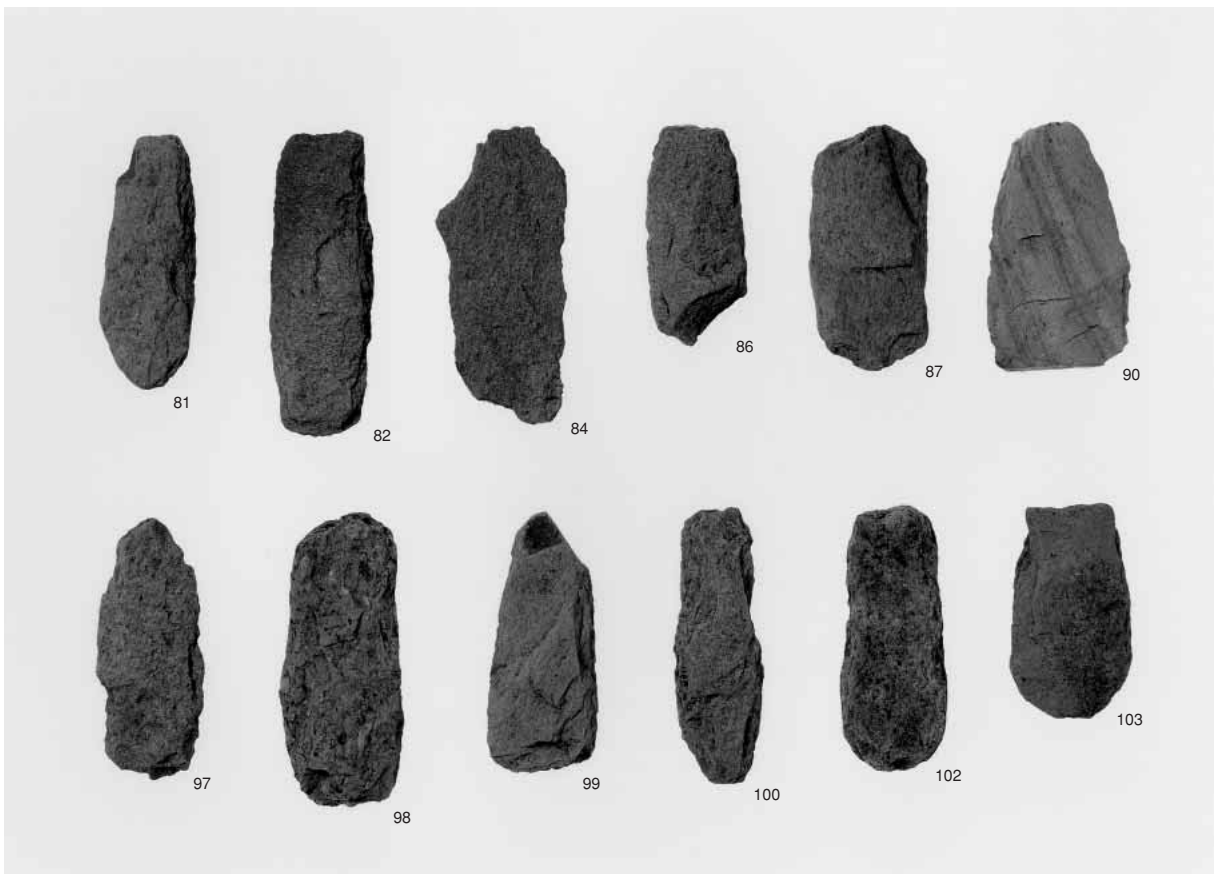


3 縄文時代 石錘



1 旧石器

2 縄文時代 石鏃



3 縄文時代 打製石斧



弥生時代 主要出土遺物



SZ01 9



SZ02 10



SZ04 20



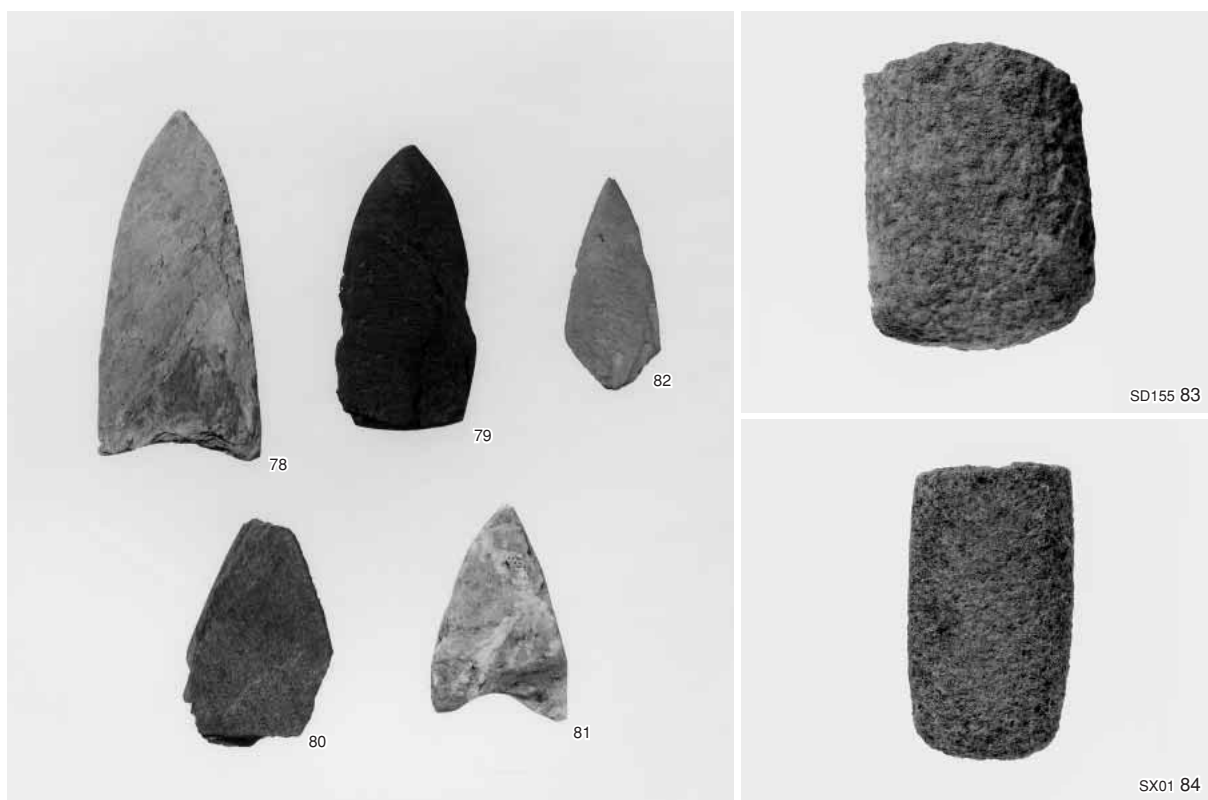
SZ12 26



SZ07 27



1 弥生時代 土器 (2)



2 弥生時代 石器



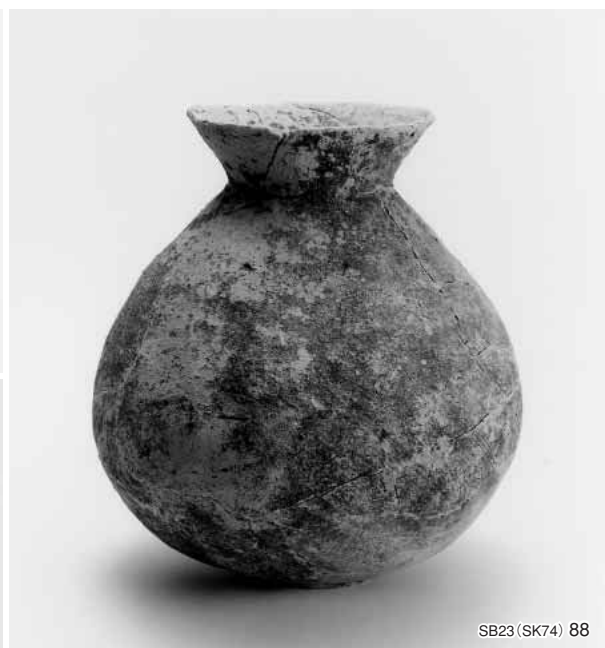
古墳時代 主要出土遺物



古墳時代土器廢棄土坑 SX01出土遺物



古墳時代 竪穴建物A群 出土遺物



古墳時代 竪穴建物B群 出土遺物



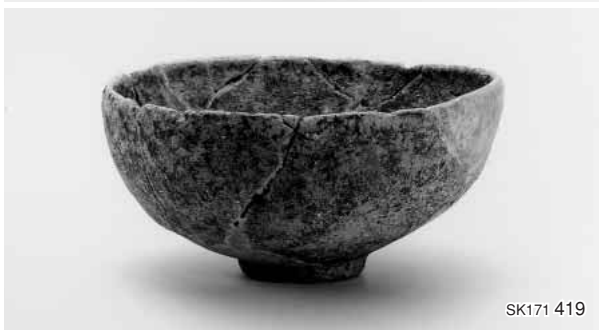
古墳時代 竪穴建物B・C群 出土遺物



古墳時代 竪穴建物D・E群 出土遺物



1 古墳時代 方形周溝墓 出土遺物



2 古墳時代 土坑 出土遺物



SP184 462



SP698 497



SP317 480



SP727 500



SP326 481



包含層 551



SP326 482



包含層 558

古墳時代 小穴等 出土遺物



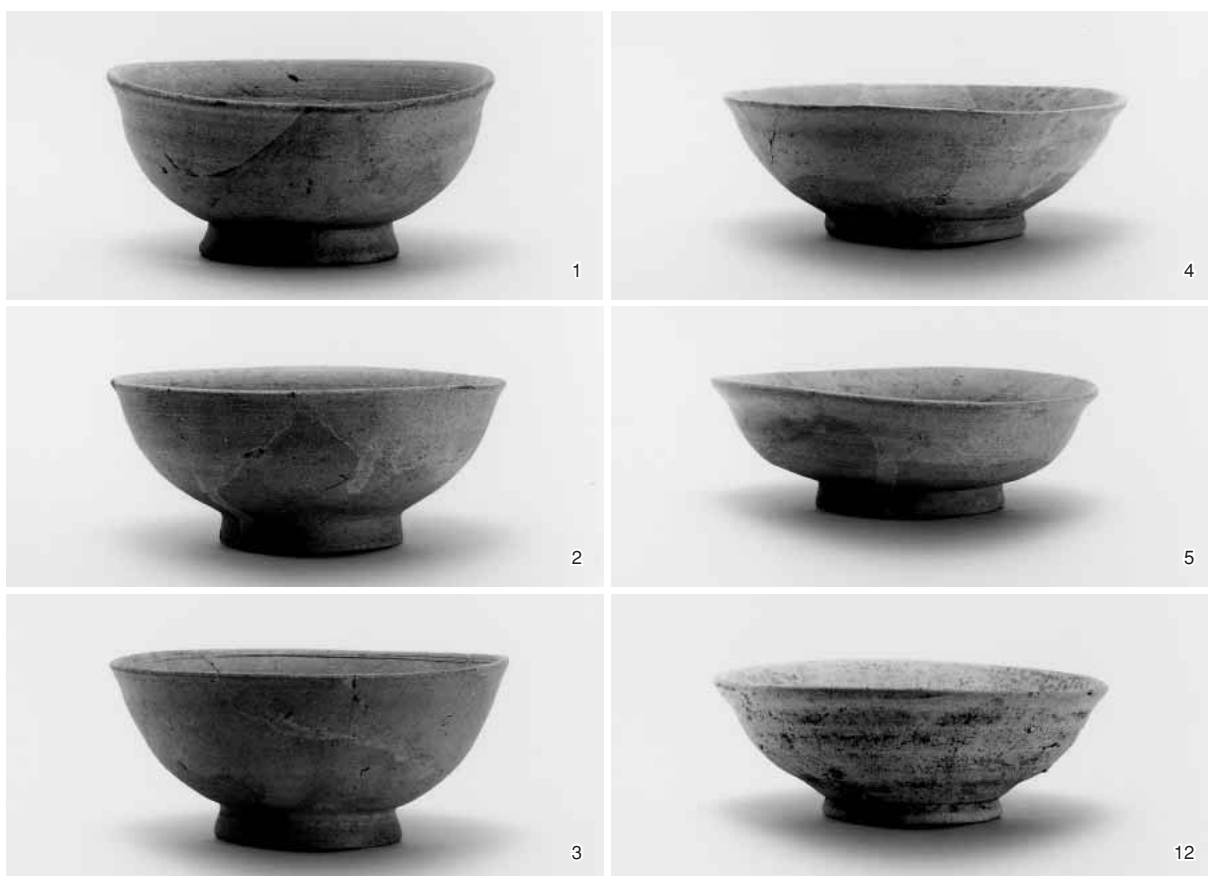
1 古墳時代 包含層 出土遺物



2 古墳時代中・後期 包含層 出土遺物



1 平安時代 祭祀遺構 SX07 主要出土遺物



2 平安時代 祭祀遺構 SX07 出土遺物



鎌倉時代 主要出土遺物



1 鎌倉時代 土坑墓 SK160 出土遺物



2 鎌倉時代 土坑等 出土遺物



戦国時代 主要出土遺物



戦国時代 区画溝 SD141 出土遺物 (1)





SK48 42



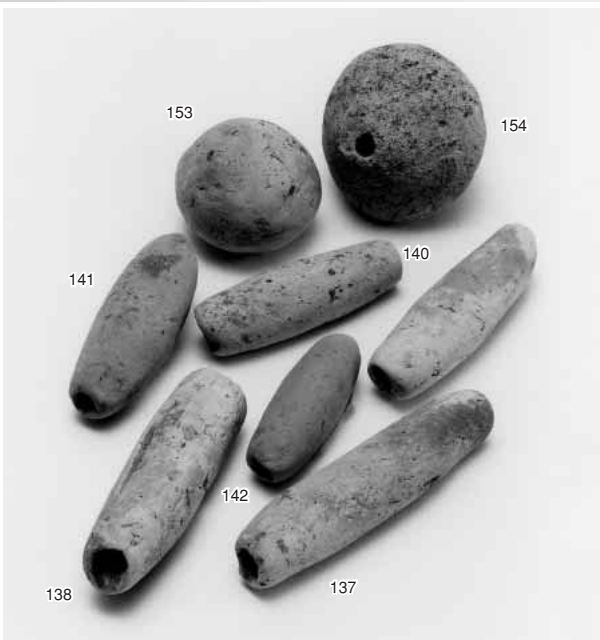
SH09 (SP740) 52



SH09 (SP740) 53



SK73 67



SK73 68



1 戦国時代 小穴 出土遺物



2 戦国時代 小穴 SP539 出土遺物



江戸時代 主要出土遺物



報告書抄録

書名(ふりがな)	北神宮寺遺跡 (きたじんぐうじいせき)							
編 著 者 名	鈴木 一有							
編 集 機 関	浜松市教育委員会 〒 430-0929 浜松市中区中央 1-2-1 イーステージ浜松オフィス棟 浜松市生活文化部生涯学習課文化財担当 (浜松市教育委員会の補助執行機関) 〒 430-0946 浜松市中区元城町 103-2 TEL (053) 457-2466 FAX (053) 457-2563							
発 行 機 関	(財) 浜松市文化振興財団 〒 430-7790 浜松市中区板屋町 111-1 TEL (053) 451-1151							
発 行 年 月 日	2009年3月10日							
ふりがな 遺 跡 名	所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
きたじんぐうじ 北 神 宮 寺	静岡県 浜松市北区 引佐町井伊谷	22202	05 04 20	137 度 39 分 58 秒	34 度 49 分 55 秒	2003年7月2日 ～ 2007年12月5日	9720m ²	区画整理事業に 先立つ事前調査
所収遺跡名	種 別	主な時代		主な遺物		特記事項		
北神宮寺遺跡	集 落 墓 地	旧石器時代 縄文時代 弥生時代 古墳時代 平安時代 鎌倉時代 戦国時代 江戸時代		石器 土器・石器 土器・石器 土師器・須恵器 灰釉陶器 山茶碗 施釉陶器・土師質土器 施釉陶器・土師質土器		弥生時代終末期から古墳時代前期の 大規模集落		

北緯、東経は世界測地系の数値である

北 神 宮 寺 遺 跡

2009年3月10日 発行

編集機関	浜松市教育委員会 浜松市生活文化部生涯学習課文化財担当 (教育委員会の補助執行機関) 〒430-0946 浜松市中区元城町103-2
発行機関	財団法人 浜松市文化振興財団
印 刷	株式会社 シバプリント

Kita-jinguji Site

A report of archaeological investigations
by the north-eastside of Lake Hamana, Japan



March, 2009

Hamamatsu Cultural Foundation